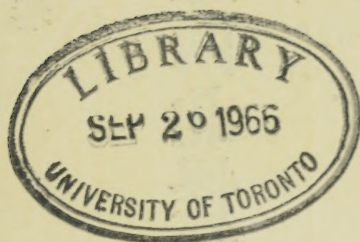
日本戲曲全集
第十一卷

鶴屋南北怪談狂言集

東京
春陽堂版

大南北の像

日本戯曲全集　第拾壹卷　目次

鶴屋南北怪談狂言集

初日の趣向は山城の木幡の里に馬はあれど歩行や裸足で後生まゐりは木幡小平次が古沼の怪異

天竺德兵衞が高砂染を

古手返しの新形に仇な

おつまを鰻裂きの八郞兵衞は

御ひいきの江戶前

後日の世界は播磨潟恨みてのみぞ過ぎしかと今宵逢瀨を菊池の井は淺山鐵山が播州皿屋敷死靈

彩入御伽草

第一番目二日替に奉入御覽候

表のカタリは、この狂言初演のものである。この狂言には天竺徳兵衛も交つてゐるし、二番目におつま八郎兵衛が附いてゐたので、カターにもそれが含まれてゐる。左の凸版は、初演の櫓下番附の一部で、本文に挿入した凸版は初演の繪本番附である。

本文に挿入した錦繪は、いづれも初演の折のものである。流石に初代豊國の筆は、まだこの時代には冴えてゐる。

彩入御伽草

序　幕　　山城國螢ケ沼の場

役名——小幡小平次。小平次女房、おとわ。彌陀次郎時綱。馬士、多九郎。醫者、小佐保天南。菊地若君、月若丸。同乳人、敷浪。下郎、栗平。廻國修行者、廻便實ハ牟禮一角照光。

役觸れ濟むと、禪のツトメになり、東の方へ麺の口と浪板を出す。向うより月若、やつし笈摺、巡禮姿に敷浪、笈摺、同じ巡禮姿にて札を掛け、菅笠を持ち、跡より栗平、旅奴、飛脚のこしらへ、刀の鞘へ狀箱を附け、菅笠を持つて出て來り、花道にて

栗平　オ、イノ＼、巡禮々々、連れにならうノ＼。

敷浪　ハイノ＼、それは有り難うござりまするが、御覽の通り私しどもは、幼いのを連れましての長旅、足弱連れでござりますれば、所詮お飛脚體のお道連れには、及びもない事。思し召しは有り難うはござりまするが、サ、お先へお出でなされませいな。

栗平　ア、そもじは小さいのを連れて札打ちか。そいつは奇特な事だ。親の爲か、但し亭主の爲の巡禮か。しつかい平假名の三段目といふ思ひ附きだな。コレノ＼、この飛脚も、そもじのやうな姐えに思はれたら、それこそ奴がじだらくや、岸打つ浪は三熊野の、那智のお山が嶽子節、こいつはどうも堪えられぬノ＼。

ト敷浪に抱きつく。

敷浪　ア、コレ、滅相な事さしやんすな。わたしやアノ若君……ア、イヤ、あの子を連れての西國巡禮。女子ぢやと思うて此てんがう。こなさんは道中にゐやる、護摩の灰とやらぢやの。

栗平　エ、埒もない。身共はそんな者ではないぞ。コレコレ、刀を差してゐるぞ。武士の御家來、侍ひぢやぞ。御主人は播州にて、淺山鐵山といふお方。仔細あつてこの山城の、小幡の里へ急用あつて、極く內々の御狀を持つて參つた者。決して胡亂な者ではない。コレ、この狀箱が慥かな證據。そんな者ぢやアないぞノ＼。

ト鞘のまゝで狀箱を出して見せる。敷浪、思ひ入れあつて

敷浪　エヽ、そんなら、心底知れぬ鐵山どのゝこの狀箱に何か怪しき急ぎの密書、ちよつとわたしが

ト狀箱を取る。栗平慌てゝ

栗平　ドツコイ／＼、それを見られて堪るものか。とんだ女だ。

ト狀箱を取らうとする。

敷浪　イエ／＼、どうあつても中の密書を

栗平　見せてはならぬワ。

ト捨ぜりふにて爭ひ、立廻りのうち、誤つて狀箱を樋の口の流れへ打ち込む。

敷浪　ヤヽ、あの狀箱を

栗平　流れへぶち込んだか。サア／＼、大事だ／＼。

トうろ／＼する。

敷浪　この間に早う、月若さま。

栗平　エヽ、われをやつては

ト追はうとして、樋の口を見て

エヽ、行かれぬ／＼。

ト慌てゝゐるうちに、敷浪は月若を連れて上手へ逃げて入る。栗平、ウロ／＼して

エヽ、女め、待ちやアがれ……と云つたところが、大事の狀はあの流れ。こいつはマア、大事だ／＼。アレ、流れるワ／＼。こいつは利上げをせずばなるまい。アレ、流れるワ　ソレ、流れるワ。

ト捨ぜりふにて、キヨロ／＼して川へ目を附け、これも幕の内へ入る。直ぐに双盤になる。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。正面に辻堂、誂らへの二重舞臺。所々に稻叢、松、榎の大樹、上の方に苫船を繋ぎ、舞臺前は水船、川べりに蘆の茂りたる道具、すべて山城の國、小幡の里、螢ヶ沼の景色。爰に馬士四人、敷浪、月若を取卷きゐる見得にて幕明く。

馬一　姐さん、馬を貸しませう。

皆々　馬を貸しませう／＼。

敷浪　こりや、こなさん達は、今も云ふ通り、馬は借らいでも大事ない程に、さう思うてたもいなう。

馬二　コレサ／＼、姐さん、見たところが巡禮の事だ。賃は廉くやりませう。その子を連れて、乘らつしやりませ。

乗らつしやりませ。
馬三　さうだ〳〵。コレ、姐さん、この小幡の里は、馬を貸すのが所の習ひ。否でも應でも貸さにやアならねえよ。
馬四　それとも借りるが否なれば、その連れの小さいのをおいらへ酒代にくれて行きやれ。
馬一　その子はおいらが貰つたほどに、酒手と思つてくれて行かんせ〳〵。
皆々　くれて行かんせ〳〵。
敷浪　ハテ、こなさん達は、變つた事を云はんすが、なんで又この小さいのを
馬二　ハテ、お觸れのある菊池の一類、月若丸、そんな者ではあるまいかと、駄賃馬から仕掛ける仕事。馬が否ならその餓鬼を
　ト月若へかゝる。敷浪さゝへて、見事に立廻りあつて
敷浪　この子に指でもさして見さんせ。女ながらも免さぬぞえ。
馬一　エヽ、面倒な。引ツぱらへ。
皆々　合點だ。
　トてんつゝになり、皆々月若丸へかゝる。敷浪、立廻るところへ、向うより天南、醫者の拵らへにて馬の手綱を曳き、駄賃馬の上に多九郎、馬士の拵らへにて、頬かむりして横に乗り、藥箱を馬に附け、この模様にて出てくる。天南、馬を曳いて舞臺へ來る。皆々、敷浪を引ツ立てんとして、馬に蹴られて飛び退く。皆々、天南が顔を見て
馬一　エヽ、どうしやアがる〳〵。
馬二　馬を引き込んで刎ね廻らせるとは
皆々　誰れだ〳〵。何といふ駄賃取りだ
天南　なんだ、駄賃取りだ。コリヤヤイ、わいらは愚老を馬士と思ふか。イヤ、さう思はるゝも尤もかえ。併し、醫者と馬士とは、ちつと商賣の筋が違ふワ。愚老は小佐保天南といつて、生き藥師同然の藪醫者だが、聞いてくりやれ、この馬士の馬を借りて、藥箱を下荷にして、病家見舞ひに出かけたところ、この馬士が俄の霍亂、そこで駄賃を拂つた事なれば、爰から馬を歸すも殘念と、直ぐにこの馬に馬士を乗せて、醫者が手綱を曳いてくるやつサ。なんと、馬士が馬に乗つて、醫者が馬を曳くとは、これでは築地へ歸られまい。
皆々　ア、馬で來たのは、多九郎だな〳〵。
多九　コレ〳〵、仲間の手合ひか。いま醫者どのが話しの通り、駄賃取りのこの多九郎、この頃の暑さに霍亂をし

たさうよ。現在醫者に口取らせ、乘つたわしは先刻から、おいどが痛くてならぬ。もう下りやせう〳〵。

天南　ア、危ない〳〵。抱き下ろしてやらう。

ト馬より多九郎を抱き下ろす。

多九　ヤレ〳〵、馬に乘るのも大儀なものだ。時にお醫者樣、酒手を下さりませ。

天南　ア、駄賃を拂つたその上に、愚老は下りておぬしを乘せ、手綱を曳いたその代り、酒手を取るのか。

多九　ハテ、その代りには、脈を見てもらひますワ。コリヤ、脈を見ろ〳〵。

天南　ナニ、白酒賣りではあるまいし。コレ、足を見ろといふ地口だな。

多九　イヤハヤ、肝つぶし蠅の頭だ。脈を見るのは醫者のみやくだワ。

天南　ア、この男は、こぢつける地口だな。ドリヤ〳〵。

ト捨ぜりふにて多九郎の脈を伺ひ

これは脈體をかんがみるところ、死脈拂ひましよ、みやく落しぢや。

皆々　何を云はつしやる。

多九　時にてめえ達は、あの巡禮どのを捕まへて、何をワツパサツパ云ふのだ。

馬一　ハテ、あの餓鬼めはお觸れのある

馬二　菊池の子悴、月若丸、さまよひ歩くと聞いたによつて

多九　そこでわいらが詮議せうといふのか。

皆々　そんなものよ。

多九　イヤ、わいらが詮議しようといふと又、わいらが俗性も詮議せにやならないぞ。

皆々　そりや、なぜ〳〵。

多九　ハテ、この間噂にも、播州に住む小坂部太郎といふもの、女子を連れて歩くとの事。もしやその手先の者であらうも知れぬ。てめえ達も、あの巡禮を連れて行くといへば、否でも其方の身許も詮議せねばならぬ。さう思つて居やれ。

皆々　ア、そんならおいらを詮議して

多九　それが否なら、あの女中にいさくさは無いか

皆々　サア、それは。

多九　いつそ、わいらを引ッ捕へて

天南　ドレ、醫者も手傳はうか。

ト兩人立ちかゝる。皆々驚ろき

馬一　アヽ、コレ、あの巡禮の詮議は、ありやア粗忽だ〳〵。
多九　そんなら、ほんこにする詮議ではないか。
馬二　オヽサ、ぶちッこでござるよ。
多九　ソレ、見やアがれ。
馬三　エヽ、いま〳〵しい。いつそ、うぬをぶちッこに
ト割り木を持つて多九郎へ打つてかゝる。多九郎、その手を捕へ、割り木を引ッたくつて
多九　ソレ、ぶちッこだ〳〵。
ト馬士の三をしたゝかくらはせる。
馬四　ヤア、多九郎め、仲間の者を
皆々　ぶつたな〳〵。
多九　ぶつてもいゝワ。ぶちッこだ〳〵。
天南　おいらも仲間へ入らう。ソレ、ぶちッこだ〳〵。
ト馬士の一をくらはせる。皆々驚ろき
皆々　ぶちやアがつたな〳〵。
馬二　ハテ、不承しやれ。ぶちッこだ〳〵。
ト双盤になり、皆々捨ぜりふにて立ちかゝるを、天南馬をくらはす。馬は刎ねて藥箱を落し、大勢を刎ね倒し、馬士四人は馬に追はれて下座へ逃げて入る。
多九　大べら坊め。ハヽヽヽヽ。姐さん、見なさつたか。この多九郎が來ては、この位なものサ。
敷浪　ハイ〳〵、お前がござんせずば、どのやうな無體を云はうも知れぬ。よい所へござんして、此やうな嬉しい事はござりませぬわいなア。
多九　さうでござらう。して、巡禮どのは、この小幡へは、知る人でもあつてござつたかな。
敷浪　左樣でござりまする。この小幡の在所にゐる、小平次といふ百姓を尋ねて、九州より、はる〴〵と參つた者でござりまする。
多九　アヽ、そんならアノ小平次を尋ねてござつたか。以前は九州菊地に仕へ、馬添へ役のあの小平次。それを尋ねて足弱づれ、あの九州から山城三界へ、ござるといふは、いよ〳〵菊地の
敷浪　アヽ、モシ。
ト思ひ入れ。
多九　さぞ長旅は草臥れたでござらうが、尋ねさつしやる小平次は、廻國に出て留守でござるよ。
敷浪　エヽ、そんなら折角尋ねた小平次は
多九　廻國に出ましたが、慥か今日この頃は、歸るといふ噂でござる。

天南　尋ねてござるなら、この道筋を、小幡の里と聞いてございませい。

敷浪　それは忝なうござりまする。サア、ソロ〳〵と行きませうぞや。

月若　イヤ〳〵、おりや草臥れた　コレ、敷浪。

多九　ヤア。

ト聞き咎める

敷浪　ア、コレ……いま云はしやんした小幡の里へ。

多九　巡禮の女中

敷浪　ハイ、忝なうござりまする。

ト双盤になり、敷浪、月若の手を引き、上手へ入る。

兩人殘つて

多九　コレサ、天南、こなたに頼んで置いたあの毒の事は、いゝかえ〳〵

天南　ハテ、人を助けるは少と不得手なれど、殺す事なら丈夫に請け合ふ。砒霜石、斑猫に、青蜥蜴の陰干しまで、打込んで調合した毒だもの、それを服むが最期の助、コロリバツタリ、ヒリ〳〵ヒリ。それにつけても、あの小平次は、今日あたり歸るといふ事だが

多九　そりやアこなさんも知る通り、小平次が女房のおとわは、以前は播州淺山の屋敷、鐵山さまの實の妹。この多九郎が、若黨奉公してゐた時、連れて逃げたあの女。それから二人とも、屋敷を構はれ馬士商賣。不仕合せが度重なり、相對づくの夫婦別れ。いま小平次が女房はおれの女房。今では鐵山どのゝ首尾も直り、通路もしてゐるが、廻國に出た小平次が、急に中歸りに歸るとの知らせ。内に置いては少つと面倒。そこで彼奴に毒をくらはせ、おツ殺す工面を、こなたに頼んだではないか。

天南　サア、おれもさう思ふから、毒も爰へ、コレ〳〵、調合して持つて來た。

ト紙入れより毒の包みを出し

して、小平次を、ジメ〳〵とやりさへすれば、跡へはこなたが乘り込むか

多九　乘り込むとも〳〵。跡はおとわの亭主は多九郎。一體おれの方が、初手からの色男だ。

天南　愚老が匙の毒がきゝ、小平次めをおツ殺せば、後腹やめず貴様の女房。その仲人は小佐保天南。爰は所もこのしろや、こはだの鮨に馬はあれど、君を思へば徒歩や裸足の代參り、と來りやどうでござい。

多九　何を云はつしやる。

ト　あと双盤になり、栗平、キヨロ／＼と流れへ目を附けながら出て來り

栗平　ヤア、こなたは多九郎どの

多九　さう云ふは、鐵山さまの下部の栗平、蚤取り眼で何を探すのだ。

栗平　サア／＼、聞かつしやい。大事が出來たり……お旦那鐵山さまは先達て、義政公のお心に違ひ、所領莊園召し上げられ、淺山家斷絶と思ひの外、山名さまの推擧にて、武將宣下の儀式に用ゆる御土器、手造りに仕上げ差上げるは、お家柄の皿屋敷。それについて、妹御山の井さまへ火急の御状、持參いたしたこの下部。後の堤で女巡禮に出合ひ、一杯機嫌のじやらくらから、持參の状箱この流れへ取り落し、水に迫かれて蘆間の蔭、その行く先を見失ひました。こりやマア、とんだ事を仕出かしたわい。

多九　栗平、待ちやれ。女巡禮といふからは、ア、、そんなら今の奴に違ひはあるまい。して又、状の趣き、少しは聞いた事でもあるか。

栗平　成る程、聞かないでもござらぬて。菊池の家の重寶雌雄二つの龍の印とやら。

多九　雄龍の印は菊池の娘、小坂部姫に附け置き、捨て子になしたるを、大伴宗鑑、拾ひ取つて養育なし、即ち天竺德公衞の手へ渡り、軍勢催促なす爲に、この多九郎が預かつて、コレ、人知れずこの沼へ。

ト　あたりを見廻し、沼の中より、石を附けたる魚籠を引き上げ、その中より赤地錦の袱紗に包みたる印を取り出し

まツこの如くに隱し置き、軍勢を狩り催ふす今この時。

天南　して又、片しの雌龍の印は。

多九　菊池が身寄り、彌陀次郎といふ者預かりしを、鐵山どのが人知れず、奪ひ取つて隱せしを

栗平　何奴が盜みしやら、雌龍の印は館の内に、かいくれ見えませぬて。

多九　この多九郎も馬方風情で、この印を持參するは危ないもの。殊にこの程失ひし、彌陀次郎めが詮議とあれば、矢ツ張り元のこの沼へ。

ト　元の通い魚籠に入れて沈める。

天南　それでは氣の附く事はあるまい。

ト　この時、向うにて百姓大勢「サア、ござれ／＼」と聲する。

粟平　ヤア、あの人體は
　ト三人向うを見て
多九　ヤア、向うへ來るは小平次め。
天南　堤の茶屋で毒の調合。
多九　必ずぬかるな。
天南　合點だ。
粟平　サア、ござりませ。
　ト双盤になり、天南、藥箱を抱へ、三人連れ立つて下座へ入る　直ぐにてんつゝになり、向うより小平次、白手甲、股引、白き單衣、鼠の帶、敷き莫蓙、草鞋、錏と撞木、藁にて束ねし倒髮にて、世話六部の拵らへ、百姓大勢、脚絆草鞋にて、鎌などを持ち、一人は大きなる草刈り籠を擔ぎ、一人は小平次が笈を脊負ひ、ソヤ〳〵云ひながら出て來り、直に舞臺へ來て
百一　ヤレ〳〵、達者でめでたうござる。さぞ草臥れてゞあらう。サア〳〵、爰へ掛けて、休まつしやい〳〵
　ト緣立てを敷き
皆々　サア〳〵、爰へ掛けさつしやりませ
百二　コレ、小平次、大事の笈摺は、爰へ持つて來ましたぞや。

百三　留守の內も、跡に變りはござらぬ程に、案じぬがよい。して、どこまで廻つて戾らしやつたぞ。
小平　これはハヤ、どなたもよう優しくして下さります。わしも內を出たからは、六十六ヶ國を廻らずば、歸るまいと思ひましたが、聞かつしやりませ、親仁どのを三日續けて夢に見ました。そこで夢見は惡し、一旦中歸りに歸つて、西國四國は別に立たうと、まづ東國を殘らず廻り、奧州から北國筋、コレ、聞かつしやりませ。夢見の惡かつたは加賀の白山、場所が惡いだけ一倍氣になりました。ア、こんなケチな根性では、六十六部は合點のゆかぬものサ。それにこの頃は流行り風で、二三日この方、この暑いのに心持ち惡く、寒氣がします。ア、また寒くなつた〳〵。
百四　ア、それはどうでも旅疲れでござらう。
百五　イヤモウ、親を案じるは、そりや誠に人間の情のあるところでござるて。
百六　わしらも去年廻國に出ようかと、この山城を立つて、大和河內を廻りましたが、後へ殘した女房の事が心にかかりまして、二ヶ國は半分廻つて歸りましたて。そこで六十六部ではなうて、二分五厘ぢやわいの。

皆々　何を云はつしやる。ハヽヽヽヽヽヽ。
百六　時に、小平次どのゝ歸られた事を、お內儀に知らせませうではござらぬか。
百七　それがようござる。コレ〳〵、笈は爰へ置きましたぞや。晩にはいづれ、珍らしい話を聞きませう。
小平　アヽ、そんならこなた衆は知らせて下され。必らずともに、わしの病氣の事は、沙汰なしにして下されや。
皆々　合點ぢや〳〵。さぞ內儀も喜ばるゝであらう。サア、ござれ〳〵。
ト禪のツトメになり、百姓大勢、捨ぜりふにて、草刈り籠を殘し、下座へ入る。引き違へて敷浪、月若の手を引いて出て來り、小平次を見て
敷浪　オヽ、こりや行き暮らしたる六部どのさうな。ドレ、巡禮が志しを進ぜませう。
ト手の內をやる。小平次取つて
小平　これはマアお前方も、長の旅の巡禮衆さうなが、お志し有り難うござります。……只今の志し、御先祖代々の諸精靈、佛果菩提の爲、南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト鉦を打ち鳴らし、回向する。敷浪、よく〳〵見て
敷浪　ヤヽ、こなさんは、小平次どのではござらぬか。

小平　さう仰しやるお前樣は、敷浪さま、ヤレ〳〵、思ひがけない所でお目にかゝりました。あのお小さい樣は
敷浪　この和子樣は主人の御胤、月若さまぢやわいなう。
小平　エヽ、あなた樣が月若さまとな。モシ、若君樣、下樣の御奉公仕りましたる、當所小幡の生れ、小平次と申しまする者。故鄕の空のなつかしく、今日只今戻りまして、まだ親女房にも逢ひませぬところ、あなたにお目にかゝりまするも、主從三世の奇緣盡きざるところと、此やうな喜ばしい儀はござりませぬ。
敷浪　其方に逢うてわしも安堵、忠臣の彌陀次郎どのは、大切なる雌雄の印を盜み取られ、諸所方々と詮議最中、然るに所持する彌陀の尊像の尊き靈夢、汝が尋ぬる雌雄の印こそ、水中に沈みありと御佛のお告げに任せ、心にもなき漁りの、この宇治川に網曳く世渡り、賴み少なき月若さまの御身の成行き、この上ともに賴むぞや。
小平　お氣遣ひなされまするな。この小平次がお目にかゝつたからは、埴生に伴ひ、お隱まひ申しまするが、さりながら、女房のとわと申す者、心の程の知れぬ生れ、必らず御油斷なされまするな。
敷浪　何から何まで、深切な其方の詞。モシ、月若さま、

あの小平次に、お詞を遣はさりませ。

月若　コレ、小平次とやら、世に頼みなき月若、この上ともに頼むぞや。

小平　エヽ、勿體ない、有り難いそのお詞、少しも早く私しが隱れ家へ。

ト立たうとして、ソナ／＼裾へ出し、思ひ入れあつて

ア、、困つたものだ。熱のせゐかして、また寒氣がして來た。困つたものだ。

トわな／＼慄ふ。

數浪　ア、、そりや困つた事ぢやわいの。どうぞマア、その寒氣をとめる仕樣はないかいなう。

小平　ア、コレ、寒くつてどうもなりませぬ。なんぞ爰らに肩へでも引ツかけてゐられさうな物があつたら、御覽じて下さりませ。

數浪　成る程、なんぞ着やるやうな物が

ト二人してあたりを尋ね、小平次が敷いてゐる緣立を見附け

小平　ア、コレ、爰によい緣立がござりまする。これなりと着て居りませう。

數浪　それで濟む事なら、ドレ、手傳うてやりませう。

ト數浪、緣立を取つて小平次に着せてやる。この時、多九郎、茶碗を持ち、天南、土瓶を提げて出てくる。

このあたりより川の緣にて、いろ／＼の蟲の音する。

多九　ヤレ／＼、小平次、達者で歸らしやつたか。めでたうござる。アヽ、女中は先刻の巡禮だの。

天南　いま村の衆に道で聞きましたが、こなたは病氣ではござらぬか。

多九　定めし旅の疲れもあらうし、その樣子を聞いたゆゑ、早速內にと思つたが、イヤ／＼、知らせたら親仁も內儀も案じようと、この天南さまを同道し、引き風を早速發散させる、煎藥を持つて來た。サア、立て續けに二三杯まゐれ。ヤレ／＼、こなたは、よう息才で戾つたなう。

ト茶碗へ藥をついで出す。小平次取つて

小平　これは／＼、馬士の多九郎か。わしが留守の內は、何かと家內を世話でござらう。天南さまもお變りなうておめでたうござりまする。わしもまだ、歸る時分ではないが、親仁どのゝ事を案じて、中歸りに戾りましたが、病氣といふも當座の引き風、こりやハヤ、藥を忝なうござります。

天南　なんのお禮に及びませう。サア、立てつけて、服ま

つしやい〳〵。

ト二人して勸める。小平次、服まうとして、フト茶碗の中を見て、思ひ入れあつて

小平　時候あたりの引き風に、用ゆる藥は俵屋の、その振り出しに事變り、色合とても常ならず、殊に泡立つ樣子といひ、どうやらこれは

ト思ひ入れあつて

ア、コレ、お前が折角の志しだが、この藥は、こりや服みますまい。

多九　そりやアなぜ、服まれない〳〵。

小平　ハテ、よく〳〵物を辨まへ見れば、山野を家と踏み出した廻國が、在所へ歸つたればこそ、近所の衆の志しで、藥も煎じて下さるが、これが深山幽谷で、どんな大病やめばとて、誰れが藥をくれませう。出家に同じ廻國修行、國を出た日を忌日と定め、行きあたりバツタリに、死ぬは覺悟の六十六部、ナニ、藥には及びませぬ。誠に壽命は天道樣任せ。南無阿彌陀佛々々々々々々……〳〵サアこの藥は返します。忝なうござります。

ト茶碗を返す。

多九　これはしたり、小平次どの。こなたは正直な男ではあるぞ。それは藥の無い國へ行つた時の事だ。有る藥なら服まつしやいゝわな。

天南　藥の仕込みはしつかりた。問屋の醫者が附いてゐる。いくらでも、服まつしやい〳〵。

小平　イヽヤ、服みませぬ〳〵。

多九　ハテ、さう云はずとも

ト捨ぜりふにて三人、茶碗をあちこちして、前の流れへ茶碗を取落す。水草の蟲、音をとめる。

小平　ア、コレ、勿體ない、藥をこぼしたわいの。

敷浪　併し藥のこぼるゝを、病が早速平癒するとやら云ふからは、こりやめでたいわいの。

多九　ナニめでたいものか。折角持つて來た藥を、みんなにしたわいえ。

天南　油一升こぼしたら、次郎どんの犬と、太郎どんの犬とが、みんな嘗めてしまはうに、何をいつてもあの毒を

多九　ア、コレ……ハテ、この醫者は、云はずともの事を

ト思ひ入れ。小平次もこなしあつて

小平　今まで澤の水草に、音をなきつるゝ蟲の聲、一度にその音をとゞめしも　取落したる、藥は、正しく毒藥。

多九　ヤア。

小平　多九郎どの、晩に逢ひませう。

ト暮れ六ツの鐘、唄になり、小平次、絲立を着たるまゝ、ソナ/＼するを、敷浪、介抱しながら、月若の手を引き、下座へ入る。あと捨て鐘、空へ朧の月を引き出す。多九郎、天南、顔見合せ

多九　天南老、あの小平次めは今の藥を

天南　彼奴は毒と悟つたわえ。

多九　これが誠に、毒くらはゞ皿の譬へ、彼奴を生けては置かれぬ。この多九郎と女房が、不義といふ事、見出すは定。

天南　殊に先刻の女巡禮が、餓鬼を連れたは、正しく菊池が身寄り。

多九　彼奴等二人も手に入れろ、仕樣を賦うして。

ト天南に囁く。

天南　合點だ。

ト思ひ入れ、バタ/＼になり、馬士二人、月若を追つて出てくる。跡より敷浪追つて出る。これにて兩人小隱れする。

敷浪　こりや最前の馬追ひども、又ぞろや若君を、こりや何れへお連れ申すのぢや。

馬一　さてこそ若君といふからは

馬二　聞かずと知れた菊池の子倅。女め、われも連れて行く。うしやアがれ。

敷浪　小積な一言、若君渡しや。

ト立廻る。後より多九郎出て、馬士二人をぶちのめす。これにて馬士は向うへ逃げて入る。

多九　彼奴等は、さて/＼しつこい奴等だ。

敷浪　こなさんは先刻の馬士どの、よう來て下さんしたの。

多九　氣遣ひさつしやりますな、この多九郎が來ては、二人や三人はわし一人でも、ビクともするのぢやアござらぬ。落着いてござりませ。

敷浪　忝なうござんす。これにつけてもあの小平次は、折惡いあの樣子、早う同道して小幡の里へ

多九　その小平次は、わしが尋ねてやりませう。お前はあの子を同道して、ちつとも早く。

敷浪　合點ぢやわいの。

ト行かうとするを引ッ捕へ、月若を踏み附ける。天南出て月若を縛り、手拭をはませ、笈の中へ入れる。敷浪、聲立つるを、多九郎、縛り上げ、手拭にて猿轡をかけ、あたりにある草刈り籠の内に入れ、上に草をな

らして、あたりを見廻し、苫船を見附け、苫の內へ草刈り籠を入れる。此うち始終時の鐘、日の暮れたる景色。

天南　コレ／＼、多九郎、この笈は擔いで行かうか。

多九　待たつしやい／＼。あの草刈り籠も船へぶち込んで置けば、この笈も船でやらうぢやあるまいか。

天南　成る程、こいつはよからう。

ト兩人探り寄るところへ、人音するゆゑ、また隱れる。時の鐘になり、下座より小平次、絲立を搭たるまゝ、よろぼひながら出て來り、あたりを見て

小平　エヽ、殘念な。僅かな病といひながら、身體自由ならざるうち。あのお二人を惡者に奪ひ取られ、追ひ駈けんにも息切れして。エヽ、殘念な、お二人樣／＼。

トよろぼひながら水船の際へ寄り

アヽ、息切れがして來た。この沼の水なりと、せめて一口。

ト本水をすくひあげて、飮まんとして心附き

イヤ／＼、先刻多九郎めが勸めた藥、正しく毒と思ふから、怪我の振りにてこの沼へ流せば、忽ち鳴きやむ蟲の音。……彼奴に毒害される覺えはないが、どうも合點が

ト思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、所々に螢澤山飛んでくる。この途端に水船の中へ、最前の狀箱流れくる。小平次、これを見附け

水の面へ、何やら流れて

ト蘆の一本を拔き、岸へ引き寄せ、狀箱を取り上げる。この時、栗平出て窺ふ。小平次、思ひ入れあつて

こりやコレ、狀箱ぢやが

トこの聲に栗平恟りする。多九郎、天南も稻叢の蔭より窺ひゐる。

合點のゆかぬこの沼へ、流れ寄つたるこの狀箱。

ト蓋を開き、中より濡れたる狀を取出し、思ひ入れあつて、朧なる月にかざし

「山州小幡、山の井方へ用書、淺山鐵山。」

ト讀む。後の三人これを聞き、さてはト思ひ入れあつて、此うち小平次、濡れたる狀を開き、飛びかふ螢や、月明りに讀む事あつて

こりやコレ、雌雄二つの中、その一つなる雌龍の印は、彌陀次郎さまの預かりなるを、淺山が奪ひ取り、雄龍の印はあの多九郎が所持の文言。知らぬ事とて、この小平次が女房は、あの鐵山の妹とは、ハテ、今日が日まで

ト恟りする。この時、後に窺ふ多九郎、天南、割り木

な持つて、小平次を打ち倒す、小平次、狀を持つたまま「ウン」と倒れる。栗平、悔りする。

多九　コレ／＼、栗平、あたりに氣を附けろ／＼。

栗平　合點だ／＼。

ト東西を駈け歩いて窺ふ。二人は小平次をしたゝかにぶち、多九郎は持つたる狀を取らんとするを、小平次これを離さずにゐるゆゑ、二人して髻を摑み、有りあふ石を取つて頭を打つ。仕掛けにて血流れ、これにて狀を離す。天南手早く引ツたくる。小平次、むしやぶりつくを、多九郎捕へて水船へ打ち込む、と一旦沈み、また這ひ上がるを、多九郎、沼の緣へ引きつけ、髻をへ捕て、押へつけて

コレ／＼、大事のその狀を破らぬやうに、月明りで合點か。

天南　合點だとは云ふものゝ、朧月では一向わからねえワ。

ト狀を空へ透かし見て

ナニ／＼「飛札を以て申し越し候ふ。先達て弟藤内に申し附け、船越三太夫を殺害なし、奪ひ取つたる雌龍の印、この程紛失したるところ、いつぞや其方國遠の砌り、不義の相手たる多九郎こと、天竺德兵衛より軍勢催促なすべき、雄龍の印を所持なす事承はり、某思ふ仔細あるにつき、暫らく借り受け、近々武將宣下の折を幸ひ、儀式の土器十枚を、巳の年月日揃ひし女の生血に、土を混じて作る時は、義政を調伏するに疑ひなし。まつた腰元りく事、菊池の血筋に相違なき條、小坂部太郎と夫婦の契約、仲に儲けし幼な子を世話いたし候ふは腰元幸崎、彼れは正しく三太夫が娘と推察いたし候ふ。何卒雄龍の印、早々われら方へ差越さるべく候ふ。月日、妹山の非へ、淺山鐵山」

トこの文言、捨ぜりふを交ぜて、おぼろに讀みしまふ。よき時分てんつゝになる。多九郎は小平次を水へ押し込み、押へてゐる。向うよりおとわ、世話女房の拵へにて、草履下駄をはき、手拭をかむり、息せきと出て來り、花道より舞臺を窺ひ見て、

とわ　そこにござるは多九郎さんか。

多九　おとわどのか。コレ、かの奴を。コレ、早うござれござれ。

トおとわ、本舞臺へ來て

とわ　コレ、かの奴とはアノ

多九　コレサ、鐵山さまから來た狀を、とつくり讀んだこ

の小平次、助けて置いてはこなたといひ、わしらが爲にならぬゆゑ、沼へ突ッ込み、この通りだ。

天南　大事の狀はコレ爰に。

ト渡す。おとわ懷中して

とわ　まだ息の根がとまらずば、女房のわたしが引導で、浮めてやらう。ちよつとお貸しよ。

ト天南の合口を取つて水船の緣へ行き、小平次に向ひ

サア、女房がとゞめだ。この世を清く成佛しなさい。南無阿彌陀佛々々々々々々、

ト合口にて滅多突きにして、合口を返す。多九郞は小平次の死骸を放す。

粟平　主人の御狀をお渡し申せば、下郞は直さま播州へ

とわ　返事は跡より、お使ひ御苦勞。

天南　愚老はこれなるお飛脚と、同道して鐵山さまへ

多九　右の樣子を必らず詳しく

天南　心得てござる。

ト捨て鐘に成り、天南、粟平、一散に向うへ入る。この時稻叢の蔭より、廻國行者廻便實は一角、網代笠、黑衣、白の股引手甲、草鞋、伏せ鉦を帶に挾み、撞木を持ち、旅僧の形にて、出かゝつて窺ふ。

多九　斯う物事が巧くゆけば、おれが爲には福德の三年目。

とわ　のろけた亭主の小平次は、沼へはまつて往生かんまみ。

多九　誰れ憚らず今夜から、こなたはおれの女房だ。仕掛けた仕事は、コレ。

トおとわに囁く。心得て苫船の方へ行く。捨て鐘。一角探り寄つて、笈へかゝるを、多九郞も探り寄つて一角の衣に手をかけ、心得ぬ思ひ入れにて一角へかゝる。立廻りにて衣脫げ、鼠木綿の袷、淺黃の平帶の形になる。多九郞、笠へ手をかけ引ッ張る。笠脫げると、鼠木綿の鐵頭巾になり、多九郞を當てる。多九郞、立ち身にて氣を失ふ。おとわ、苫の中の草刈り籠を取らんと苫を取りのける。この船に彌陀次郞、やつし形、肩へ綱を掛け、以前の籠にもたれ、咬へ煙管にて、摺り火打ちにて火を打ちゐる。これにておとわ、思ひ入れあつて、件の籠へ手をかける。彌陀次郞その手を捕へ、船より出て來り、立廻りのうち、おとわの懷中より右の狀出かゝる。彌陀次郞手早く取上げる。おとわ、取返さんとする時、狀は兩方の手へ半分づつちぎれ取る。おとわ、下の方へ來る。多九郞、心附き、笈を探し、

擔がんとする。一角、笈を背負つて行くゆゑ

多九　コレ、おとわ、笈を脊負つたはこなさんか。

とわ　ナニ、おらア爰にゐるよ。

多九　ヤ、、そんなら盗人。

トかゝるを見事に投げる。此うちおとわ、花道へ行く。ドロ〳〵になり、沼の中より陰火燃え上がる。彌陀次郎、一角、キツと見て

彌陀　あの水中より

一角　陰火の不思議。

とわ　ヤ。

ト三人、この火にて顔を見合つて、思ひ入れあつて、おとわ、簪を手裏劍に打つ。彌陀次郎、船の中にてチヤンと打ち落す。一角、多九郎立廻り、一角、伏せ鉦をカンと打つ。

彌陀　ハテ、危ない事の。

ト思ひ入れ。これにてドロ〳〵をかむせ、一角、早めて鉦を打ち、回向の見得。拍子、

おとわ、花道に殘つて、向うへ入る。この上を誂らへの人魂、薄ドロ〳〵にて、おとわの後を慕つて向うへ行く。知らせにつきシヤギリ。

幕

二幕目　小幡の里小平次内の場

役名――小平次の亡靈。小平次女房、おとわ。彌陀次郎時綱。小平次妹、おまき。小幡の百姓、正作。馬士、多九郎。月若丸。同乳人、數眞。卒禮一角照光。

本舞臺、三間の間、張り出したる平足の二重。正面暖簾口、佛壇、戸棚、鼠壁、下の方に竈、臺所道具を見せ、よき所に流し、水瓶、手桶など飾り、藁葺きの門口、出入りの馬部屋、その屋根より摺りよき柳の大樹枝垂れゐる。上の方、反古貼りの障子屋體、すべて山城の國、小幡の里、小平次住家の體。在郷唄にて幕明く。

ト正作、親仁の拵らへにて、佛壇に向ひ、鉦打ち鳴らし看經してゐる。平舞臺におとわ、前垂れ襷にて燒き物火鉢に鐵灸を渡し、串差しの鮎を燒きゐる。おまき、

木綿模樣の振り袖、前垂れ、田舍娘の拵らへにて、手拭な冠り、釜の下を焚いてゐる。百姓三人、鍬をかたげ、ワヤ／＼云うてゐる。

百一　コレ／＼、かみさん、小平次どのは、さぞ草臥れさつしやつたであらうの。今に納戸に

三人　寢てゐられまするか／＼。

とわ　これはしたり、この衆は、此方の小平次どのは、いつマア戻つたぞいの。

三人　それでもわしらは、昨日逢ひましたわいの。

とわ　ハテ、お前方は、眞顏でわしを瞞すのか。いゝ加減に焦らさつしやいよ。

百二　ナニこなさんを焦らすものか。昨日逢うたに

三人　違ひござらぬ。

まき　モシ／＼、待ちなさんせや。そんなら何と云ひなさんす。わしが兄の小平次さんが、昨日在所へ戻つて來たと云はしやんすのかえ。

三人　オヽ、サ、昨日わしらがしつかりと、逢ひました／＼。

正作　コレ／＼、おまきや。そんならあの衆は、此方の小平次に逢うたと云はつしやるのか。

百三　コレ／＼、親仁どのも妹御も聞かつしやれ。昨日小平次どのに逢うたら、小平次どのが云はるゝには、打續いて夢見が悪いゆゑ、親仁どのゝ事が案じられ、中歸りに戻つたと云はれたわいの。

正作　ハテナウ。在所まで來て、なんでマア我が内へ戻らぬのぢや。こりやてつきり、新田の狐に化されたか。コレ、おまき、われ、ちよつと行て、近所を尋ねて來いやい。

まき　アイ／＼、合點でござんす。わたしが在所ぢう駈けて歩いて。

ト行かうとする。

とわ　アヽ、コレ／＼、おまきや、お前うろたへて行く事はねえ。小平次どのも歸りさへさつしやれたら、我が内だもの、來るなといつても來ないでは……わしはさう聞いたによつてな、待ち受け心で鱠の魚を焼いて置くも、廻國の事ゆゑ、定めて精進であらうし……コレ／＼、お前方、畑仕事へござる道に逢はしやつたら、内では待つてゐると、この通りを云つて下され。

百一　合點ぢや。そんなら親仁どのも、おまきも、今にも戻られたら、馳走さつしやれ。コレ、お嬶、こなたも馳走してやらつしやれ……サア、行きませうか。

正作　こりや皆の衆、よう知らせて下された。大方おッつけ戻りませう。久し振りぢやに、小麥など挽いて、饂飩打つて食はせましよ。おまきよ、ソレ、釜の下より焚きつけよ。

まき　アイ〳〵。

正作　ドリヤ、饂飩打つて待ちませうか。

三人　晩に話しに來ませうかい。

ト合ひ方になり、皆々ワヤ〳〵云うて向うへ入る。正作も暖簾口へ入る。

まき　ドリヤ、湯を沸かして置きませうか。

ト釜の下を焚きつける。てんつゝになり、向うより多九郎、駄賃馬を曳き、一升樽を提げて來り、門口にて捨ぜりふ云ひながら、馬を部屋へ追ひ込み、内を覗き

多九　おとわさん。

とわ　多九郞さんか、入りねえな。

ト内へ入り

多九　ヤレ〳〵、お互ひに昨日は

ト云はうとする。おとわ、煙管にて突き、おまきが聞いてゐるといふ思ひ入れ。

イヤモウ、昨日は馬を忝ならござりやす。今日も駄賃取りに出ようと思つたが、この暑さで心持ちが悪し、こんな日には酒でもかッ喰つてづるけべえと、見さッし、一升買つて來たよ。どうだ、氣はねえかの。

とわ　そいつはよからうよ。わつちも氣があつたから、鮎の魚を燒いて置いた。こいつを蓼酢にして、一杯やらかさう。

多九　何も身祝ひだ。昨日首尾よく小平次を

まき　エ。

とわ　コレナ、この人は、よく問はず語りをする。コレ、おまきや、アノてまへ大儀ながら、行水の湯も沸かしてもらはう。水も二三杯汲んで來や。

まき　アイ、どうで今、湯は沸きやんすわいな。

とわ　エヽ、そればかりの湯で足りるものか。手桶で四五杯、汲んで來いといふに。骨惜しみをするあまぢやアあれえか。

まき　ナニ、あまだえ。あまはお前が云はずと知れた事たわな。何ぞといふと、あまだ〳〵と、あまならば河が聞いて呆れるワ、とんだ惡婆だ。

とわ　なんだ、惡婆とはおれが事か。ウヌ、いけ口を引ッ裂いてやらう。

まき　サア、引ッ裂いてお見〳〵。イケ口の明いた。繼姉だといつても、兄さんの縁がない時は他人だよ。あんまり大風な事を云ひなさんなよ。

とわ　エヽ、そのイケ口を

　ト立ちかゝる。多九郎とめて

多九　コレサ〳〵、もういゝわな。靜かにしなさいな。コレ、おまき坊、てめえ兄嫁に御託をするが悪い。ちつと口を嗜なまつしやいな。

まき　なにサ、お構ひでない。姉だといつて、退けば他人だわな。

とわ　コレ、あの口を閉きなさいな。

多九　ハテ、ようござるわな。サア〳〵、おまき坊、からかはずとも、水を汲んで來な。

まき　アイ、汲んで來るわいな。もう打ッちやつてお置きお置き。これから思ひ入れ汲んで來るからの。掘抜を汲み干してやらう。

多九　サア〳〵、汲んで來な〳〵。

まき　ドレ、思ひ入れ汲んで來ようか。

　ト唄になり、手桶を提げ、安下駄を穿き、下手へ入る。多九郎見送る。

多九　あのあまッ子も餘ッ程情が強い。

とわ　ナニそウ、いけるのぢやねえよ。……そりやアさうと、昨夜ちよろまかした二人の奴はどうした。

多九　ニヽ。こなたはあの箱の中の草刈り籠をどうした。

とわ　ニヽ、この人は。昨夜見ろ通りだわな。箱の中に催[illegible]うしやアがるから、こいつは見附かるまいと、うろたへ紛れに、大事の状をコレ、半分引ッ切られたわな。

　ト狀のちぎれを出して見せる。

多九　そいつはとんだ事をしたの。しかも宛て名の方を取られた。イヤ、おれも、餓鬼をぶち込んだ籠を引ッ攫はれた。ほんに無駄骨を折つたぞ。

とわ　いゝわな、その樣な事は捨てゝ置きねえ。あのマア小平次さへ片附けてしまへば、今日からはこなさんと、天井抜けた夫婦仲。わつちはこなさんに逢ひ通す心で、鮎の魚を焼いて置いた。これで一杯飲みねえな。

多九　成る程、それもさうかえ。併し、小平次が親や、あの妹めはどうせうな。

とわ　ハテ、彼奴らこそまちんでも服ませて、だりむくらせてしまふわな。

多九　そいつは面白い。サア〳〵、この酒を燗をして、差

向ひにやらかさうか。
とわ　ちよつと燗をつけねえな。
多九　もう使ふのか。あやまるの。ハヽヽヽ。ドリヤ、燗をつけようか。
ト樽の酒をちろりへ明け、飯釜の中へつける。おとわ、鮓を鉢へ入れる。この時、時の鐘、六部の出の合ひ方。向うより牟禮一角、以前の六部の形、笈を脊負ひ出て来り、花道にとまり錫杖を突き、
一角　誠に、爰は都に程近き、小幡の里を歌人の「我が駒をしばしとむるか山城の、小幡の里にありと答へよ。」牛馬の脊は借らねども、山野に伏して岩角も、夜の枕となすが習ひ。茲が廻国修行の身の上、あれなる民家に立寄りて、手の内乞はん。オヽ、それよ。
ト合ひ方になり、門口へ来る。此うち舞台の二人は酒盛りをしてゐる。一角、思ひ入れあつて
廻国の修行者、手の内御報謝。
多九　アヽ、手がふさがつてゐる。通らつしやい〳〵。
一角　それは近頃忝ない。通れとあれば遠慮なく、ドリヤ、それへ通りませうか。
ト門口へ入り、笈を下ろし、捨ぜりふにて草鞋を脱ぐ。両人見て
とわ　この人はなんだ。案内なしに、なぜ人の内へのめくりこむのだな。
一角　さればでござります。今あのお人が、通れ〳〵と云はつしやるゆゑ、幸ひ旅の疲れ、お辞儀なしに通りますのサ。
多九　イヤ、わしが通れと云つたのは、手の内報謝はならないから、外の内へ通れといふのだ。見れば生若い形をして、年にも似合はぬ六十六部。コレ、爰の内へ通れではない。其方の足の向いた方へ通れといふ事だワ。
一角　ハテ、そりやお情ない御挨拶。年端もゆかぬ廻国修行、人様のお情を、受けにやならぬわしでござります。正真の猿が人真似、見やう見真似の六十六部。どうぞ爰の内へ、泊めては下さるまいか。
とわ　イヽヤ、泊めろ事はならねえ。多九郎さん、追ひ出してやんねえな。
多九　サア〳〵、六部どの。女主のあの内儀が、あの通りだ。片時も置く事はならねえ。サア〳〵、出て行きやれ〳〵。
一角　ハテ、そこが世は情とやらだわな。是非とも泊めて

もらはねばなりませぬよ。
多九　エヽ、イケあつかましい小二才だ。なんのよしみが
あつて泊めるのだ
一角　わしはこれで泊めてもらひますのサ。
ト笈を返して見せる。後の札に「山城の國宇治の郡小
幡村小平次」と記しある。おとわ見て
とわ　ヤア、その笈は、アノ、小平次の
多九　捨てゝ置いたる笈なれば、内へ隠せし月若丸。
ト立ちかゝるを、一角突き廻して
一角　なんと泊めずばなるまいか。
多九　サア、そりやア
一角　得心ならずばこの笈を、引ツ脊負つて通りませう
か。
ト行かうとする。多九郎、門の戸をシヤンとさして
多九　イヽヤ、ゆるりと泊まらつしやい。
一角　それは近頃忝ない。
とわ　して、その笈は、どうしてこなたの。
一角　さればサ、昨日宇治川の、螢ケ沼の晴まぎれ、わし
が脊負つたる笈佛と、とり替つたるこの笈の、國は山城
小幡村、名は小平次とあるゆゑに

多九　こなたは戻しにござつたか。
一角　イヽヤ、取替へに來ました。この笈がお望みなら、
わしが笈と替へませう。して、小平次どのは
とわ　今に於て戻らぬのサ。
一角　そんなら亭主の小平次は、廻國修行の留守のうち…
…ようごんす。小平次の戻るまで、お宿を借りて待ちま
せう。
多九　待つてゐるなら、その笈は、この多九郎が預かつた。
トかゝるを突き廻し
一角　イヤ、小平次どのに逢ふまでは、片時も離さぬこの
笈の、佛へ六部が朝夕の
とわ　看經佛は笈の内。
多九　めぐりめぐつて月若を
とわ　ア、コレ……軒洩る月のこの埴生。
一角　小部屋を借りてゆつくりと
多九　旅の疲れを
一角　お内儀さん
とわ　六部どの
多九　正しくこの内
ト笈へ寄るを突き廻し、笈を抱へて

ドリヤ、看經にかゝりませうか。
トちやんと鉦を打つ。唄になり、思ひ入れあつて障子屋體へ入る。おとわ、多九郎囁き合ひ、暖簾口へ入る。合ひ方になり、勝手口よりおまき、桶に水を汲んで提げて出て來り
まき　さて、しんどや／＼。この暑いのに、此やうに水ばかり汲んで、こりやマア、美しい黒髪も赤がしら、手足は山のこけ猿か、ほんに氏より育ちぢやなう。……オヤ、氣が違うたさうな。あの意地悪の悪婆に叱られぬうち、ドリヤ、湯を沸かさうか。
トまた唄になり、手桶の水を釜へあけ、薪をくべて沸かしにかゝると、暮れ六ツの鐘になり、向うより彌陀次郎、草刈り籠を担ぎ出て來り、花道にて、懐より狀のちぎれを出し
彌陀　昨夜不思議に手に入りし、狀のちぎれの宛て名は鐵山、その妹の山の井こそ、小幡の里の小平次が、女房おとわ。この書き物の詮議はあの家。さうぢや。
ト門口へ來り、籠を下ろし
ハイ、ちとお頼み申しませう。
まき　アイ／＼、どれからござんしたえ。

彌陀　アイヤ、私しは旅の者でござりまするが、なんと宿を貸しては下さるまいか。
まき　アイ、そりや易い事ぢやがな、爰は宿屋ではござりませぬ。この向うの村を半道あまり行かしやんすと、百姓町がござんす。そこには泊りがござんす程に、早うござんせいな。
彌陀　ア、、そりや困つたものでござるわえ。モウ／＼、なか／＼一町も行けませぬ。姉さん、どうぞ情だと思つて、泊めては下さるまいか。
ト此うちおまき、彌陀次郎が顔を見て思ひ入れあり。この時、おとわ出かゝりゐる。
まき　ハテマア、爰らあたりには見馴れぬお方。見れば見る程、在所育ちに引替へて、いとしらしい男振り。して、お前、お一人かえ。
彌陀　一人旅ゆゑ、どこでも泊めませぬて。
まき　お一人さんかえ。アノ、お前はたつた一人……ようござんす。泊めませう／＼。
彌陀　エ、お泊めなされて下さりますか。
まき　泊めいでかいなア。お一人とあれば、さぞ御難儀でござんせう。主は外にござんすが、斯う見たところが、

いとしらしい、可愛らしいお旅人さん、お泊め申しませうわいなア。

彌陀　それは近頃忝ない。然らば一人旅でも苦しうないかな。

まき　サア、一人ゆゑにお泊め申しますわいな。お泊め申してコッソリと、旅疲れのお前のお寝間へ

ト思ひ入れあつて

ハイ〳〵〳〵、禮儀もない事ぢやわいなア。

彌陀　ハイ〳〵〳〵とは、そりや馬を追ふのか。

まき　ハイ〳〵〳〵とは馬の事。爰は所も山城の、小幡の里に馬はあれど、君を思へば

ト思ひ入れあつて

徒歩跣足ぢやないかいなア。

ト彌陀次郎に寄り添ふ。おとわ、ズツと寄つておまきを引退け

とわ　エヽ、見つともねえ、何をするのだ。其方へ退いてゐや。モシ、若いお人、こなさん一人旅なら泊める事はなりませぬといふところだが、どこやら見たところ小綺麗な、立派に見えてキツとした、粋な二才さん。アイ、わつちが泊めやす。あの女は居候ふでござりやす。あんな者に構ひなさんな。わたしが泊めるよ。

トよき時分、多九郎、行燈を提げ出かゝりゐる。

彌陀　エヽ、左様なればお前が爰の内の

とわ　アイ、主はわたしでござりやすよ。二才さん、わつちが泊めてあげるよ。

ト嫌らしき思ひ入れ。おまき、こなしあつて

まき　エヽ、なんぢやいな。アタ阿房らしい。なんのこなさんが主であらう。主といふはわたしが兄さん、他國へ行つて歸らんせぬ小平次さん。お前は内の娘ぢやないわいな。

とわ　エヽ、このあまめは、又ツベコベと、すツこんでゐや。わたしが泊めやす。サア、此方へお出で〳〵。

まき　イヽエ、わたしが部屋へござんせいな。

とわ　エヽ、此方へ來なよ。

まき　ハテ、此方へ寄りなさんせ。

ト捨ぜりふにて兩方より引ッ張り合ふ。この時おとわの懐より、前幕の狀のちぎれを落す。彌陀次郎手早く拾ひ

彌陀　こりやコレちぎれし

とわ　エ。

ト多九郎、後にて樣子を見てゐたりしが、堪へ兼ねて
ズツと入り

多九　イヤ／＼、さうはならぬぞ／＼。コレ、おとわどん、アタ見つともない。妹は妹とも思はうが、年増の癖に、イヤハヤ呆れたものだ。

とわ　コレ、多九郎どん、主のわしが泊めようと云ふに、なんでこなさんがいらぬ口出し、打ッちやつておかつしやいな。

多九　それ／＼、さういふ浮氣者だワ。現在、おれといふ色男があるゆゑに、あの小平次を

とわ　ア、コレ

多九　サア、云つて惡くば云ふまいが、如何に男がいゝといつて、貴樣の前からは弟とも、又は息子にしてもいゝ年嵩。これをマア引摺り込んで

とわ　泊めたらどうする。たつてこなさんが妹に搦んだ事を云ふなら、破れかぶれ、何も彼も云つてしまふよ。云ふ段になれば、貴樣も灰汁が拔けねえよ。

多九　サア、そりやア

とわ　しやつとでも云つて見さつしやい。

ト思ひ入れあつて

多九　イヤ／＼、泊める事はなるまい。ハテ、一人旅は泊めるなといふ、所のきつい法度だよ。

彌陀　そんなら一人旅は、アノ、所の

多九　主が泊める心でも、所の法で泊められまい。

彌陀　イヤ、わしには連れがある。

とき　エヽ、お前には道連れが……連れがあるなら遮つて

とわ　泊められまいとも云へまいぞえ。

多九　して、その連れはどこにゐる。

彌陀　こなたの心の落着く道連れ、いま門口に待たせて置いた。

ト合ひ方になり、門口へ出て、持つて來りし籠の中より、前幕の敷浪を出し、同じく籠より一腰を出して脇ばさむ。

敷浪　すりや、お噂のこの內が

彌陀　コレ、マア何事もわしに任せて。

ト手を取つて內へ伴ふ。

まき　ヤ、女中さんを道連れは、こりやこなさんの

彌陀　この道連れは、わしが女房。

敷浪　ア、コレ、なんのわたしが

彌陀　ハテマア、こなさんが女房、夫婦連れ立つ仲の旅、

一人旅ぢやござらぬ程に、心置きなうこの内に、今宵の宿りを、主の女中、若い人、なんと泊めては下さるまいか。

多九　そんなら女房連れての旅か。さう聞いては萬更に、……ヤ、こなたは昨日の女巡禮。

敷浪　ほんに、其方は昨日黄昏に、若君樣を奪ひし馬追ひ。

彌陀　ア、コレナ、若い女を道連れの、宿に困つた二人連れ、是非に一夜のお情に

まき　あづかりたいはわたしが願ひ、それに女中を道連れとは、ほんに氣が揉めるわいな。

とわ　てまへばかりか、わしまでも、宿した上に氣が揉める。シタガ、お連れの女中は、多九郎どのが噂した

多九　落人くさいあの女、奥に來てゐる餓鬼もろとも

とわ　ア、コレ、泊めて置いたら、手を濡らさず

彌陀　無理に附け込お泊り人、今夜の木賃に

　ト前幕の簪を投げてやる。おとわ取つて

とわ　こりやコレ、昨夜の暗まぎれ

彌陀　帶縱といてしつぽりと、末の末まで約束の、女が渡したその簪、手離し憎い品なれど、今宵の宿のその禮に

とわ　この簪を

彌陀　受けて下さい。

とわ　キツとお貰ひ申しました。

まき　その簪は、慥かにお前の

とわ　ア、コレ、口數云はずと、ぬし達二人を

彌陀　案内頼む、女中さん。

敷浪　面倒ながらよいやうに。

まき　エ、、腹の立つ。知らぬわいなア。

　トぴんとする。

彌陀　ドリヤ、御造作にあづからうか。

　ト唄になり、皆々こなしあつて、おまき、悋氣の思ひ入れにて先に立ち、彌陀次郎、敷浪、奥へ入る。おとわ、殘つて思ひ入れ。多九郎、急いたるこなしにて、おとわが胸ぐくしを取つて

多九　コレサ、おとわどん、イヤサ、甚なすつぱりめ。今あの二才が云ふを聞けば、あの簪を證據にして、われは昨夜、彼奴とふさつたな／＼。エ、、腹の立つ。われが云ふ事を誠と思ひ、頼むに引かず小平次めを、沼へおツぱめ殺したも、てめえと二人添ひたいから。其ほとぼりも覺めぬうち、よく又外に間男を拵らへたな。エ、、腹の立つ／＼。

尾上松助のおとわと小平次の亡霊

ト思ひ入れあつて

いゝワ、われがさういふ心なら、おれも男だ。たつた今思ひ切つてしまふぞ。待て〳〵。

ト、そこいらの紙、硯箱に紙を添へ持ち来り

サア、この多九郎に切れ文を書いてくりやれ。サ、これで書きやれ。書いても書かいでも書かす。今日向おれに構はぬといふ、書き物を寄越しやれ。

トきしつける。

とわ　なんだ、この男は。切れ文を寄越せ……イヤハヤ呆れたものだ。コレナ、そんな色氣のある事を云ふはノ、潰業既な通り者の云ふ事だ。こなたは鏡を見た事はないか。やんま蜻蛉も恐れるやうな目を剝き出して、切れ文も氣が強い。書かねえでどうするものだ。待つてるや。

ト硯を引寄せ、サラ〳〵と書き

サア、切れ文だ、持つて行かッし。

ト多九郎に渡す。取つて見て

多九　こりやアなんだ〳〵。小平次を殺した事を書き込んだこの切れ文。これをどこへ持つて出られるものだ。

とわ　ソレ見たか。どうでこなたも科は同罪。むづかしい事を云ふと、貴様の首から先へ飛ぶよ。

多九　ア、コレ、今となつちやア、どうも斯うも抜けられない話になつたの。いつそ毒を喰はゞ皿だ。六部が笈の月若丸、雌雄の印を詮議してゐる彌陀次郎、彼奴が懐には彌陀の尊像、此方へ引ッ淩つたその上に、彼奴も生けては置かれぬわえ。

ト此うち、一角、障子を明けて覗く。

とわ　そんならその切れ文の文言は

多九　こんな書き物を、人に見られて堪るものか。

ト引裂いて袂に入れる。

とわ　今宵のうちに奥の六部を

多九　おッ片附けて、月若を

ト思はず三人顔見合せ、一角、バッタリと障子をさす。おとわ、多九郎、思ひ入れあつて、暖簾口へ入る。あと合ひ方、捨て鐘。障子屋體より一角、月若丸を連れて出る。暖簾口より正作、彌陀次郎、敷浪出る。

正作　マア〳〵、あれへお出でなされませ。承りますれば、悴小平次が御主人菊池さまに、身寄りのお方と承り申しますわいの。

彌陀　如何にも、某こそは菊池の一類、彌陀次郎時綱といへし者。

一角　さては御身が聞き及びたる、彌陀次郎にてありけるか。拙者は謀叛の聞えある、天竺德兵衞詮議の爲のこの姿、牟禮の一角照光と申す者。貴殿の主人、月若どののお渡し申す、受取られよ。

ト月若丸を渡す。

彌陀　忝なき御仁心。主人菊池の忘れ形見、時綱警護いたすでござらう。

敷浪　月若さまには御安泰。エヽ、有り難う存じまする。

彌陀　主人より預かりの、雌雄の印を失ひ、在所詮議の其うちは、漁る業の船越三平。まつたこの尊像こそ、劍難除けの尊き御佛。

ト錦の袋に入れたる彌陀の尊像を出す。

一角　その佛力の應護にや、昨日暮れ方不思議にも、通りかゝりし螢ケ沼、捨てゝあつたるこの笈の、中に尊き月若君。正しくこの家の小平次は、沼に陷り横死の樣子。

敷浪　すりや、昨日やう／＼めぐり逢ひ、力と思ふあの小平次。

正作　今朝曉方の烏啼き、惡いがもしやと案じる親。そんなら悴の小平次は、沼へはまつて死にましたか。そりやマアどうして。モシ、何奴が殺しました。敵を取つて下さりませ／＼。

ト思ひ入れ。

彌陀　老の悔みは尤も至極。證據は夜前手に入りし、鐵山より密書の片割れ。

ト狀のちぎれた出し

この文言の樣子では、この家の女房は鐵山が妹の山の井、我が姉者人の雌龍の印を奪ひしは、鐵山に極まらば、親の敵は淺山兄弟、樣子探らんその爲に腰元奉公。まつた小坂部太郎と、主人の姫との仲に儲けし幼な子は、野宿の里に預け置く。コレ

ト二つの密書を出し

最前女房が落せしは、昨夜ちぎりし密書の片端。この文言にて、父三太夫を討つたるも、正しく淺山鐵山が仕業。傳手を求めて入込まん。

ト狀を懷中する。

一角　月若丸を相違なく、菊池の身寄りへ渡せし上は、この家にあつて益なき照光。右のあらまし義政公へ言上なし、底意知れざる鐵山が、館へ立越え窺はん。

彌陀　然らば一角照光どの。

一角　次郎時綱、重ねて參會

兩人　おさらば。
ト三重になり、一角、一腰を差し、向うへ入る。この時、おまき出かゝりゐる。
正作　イザ、若君樣、一まづ奥へ。
ト立ちかゝるを、おまき支へて
まき　父さん、待つて下さんせ。あのお方には此まきが、存分云はにやなりませぬ。退きなさんせ。
ト正作を引退け行かうとするを、正作、おまきを押へて
正作　たはけ面め。何をあなたに……サア、お構ひなら奥の別間へ、ちつとも早う。
彌陀　然らば正作……サ、敷浪どの
敷浪　若君樣、入らせられませう。
ト合ひ方になり、月若丸を連れ、敷浪、彌陀次郎、奥へ入る。
まき　アヽコレ、時綱さまとやら、わたしやお前に
ト行かうとするを、正作隔てゝ
正作　コリヤヤイ娘、おのれは兄小平次が死んだを聞いたであらう。
まき　サア、兄さんの事も聞きやんした。いとしい事と思へども、いま奥へござんした、彌陀次郎さまに心を奪はれ、兄さんの事も思ひませぬ。わたしやあなたのお側へ
ト行かうとするを、正作引附け
正作　コリヤヤイ、おのれは兄の事も思ひ居らず、血相變へてこの樣子は……アヽこりやアノ、彌陀次郎さまに
まき　アイ、わたしやあなたに江戸橋ぢやわいなア。
正作　ナニ江戸橋ぢや……江戸橋ならば、アヽ川後か、
まき　その近所ぢやわいな。
正作　その近所なら土橋か。
まき　エヽ、父さん、不粋な。江戸橋とは、あなたにほれた……ぢやわいなア。
正作　アヽほれた、か。こりや判じ物ぢやな。
まき　サア、惚れたによつて、わたしや戀を叶へにやなりやんせぬ。父さん、そこ退かんせ。
ト掻きのけて行かうとする。正作引附け
正作　たはけ面め、如何に阿房なおのれぢやとて、兄は非業の死をしをる。惚れたお方はお主樣。おのれ、お主に惚れてもよいか。
まき　お主樣でもよい殿振り、家來の娘が惚れまいものか。是非とも奥のあのお方に

ト行かうとする。正作引附け、捨ぜりふにておまきを引敷き、表の方より來てゐる繩を取つておまきを縛り

正作　おのれ、動いて見をれ／＼。如何に阿房に生れたればとて、兄めが死んで間もないに、お主に惚れたとは大膽な。奥へは決してやる事はならぬぞ。

まき　コレ、父さん、そんならどうでも、わたしが戀は

正作　オヽ、かなはん／＼、佛の椀ぢや。兄が回向をこの親が、せめて一夜さ。

まき　すりや、どうあつてもわたしが戀は

正作　ハテ、佛の椀ぢや。

ト唄になり、正作、念佛を唱へながら奥へ入る。おまき殘り、行かうとして、縛り繩に自由ならざるこなしあつて

まき　エヽ、胴慾な父さん、いかにお主の高下ぢやとて、惚れまいものか。それをマア、むごたらしい縛り繩。この戀が叶はぬものならば、わしや死ぬる。アイ、死んでしまふわいなア。自然死ぬなら、恨みの丈を、せめて一筆書き殘し

ト硯箱を見附け

ア、イヤ／＼、書き殘さんにも手は叶はず、こりやマアどうせう、何とせう。

ト唄になり、思ひ入れあつて

ア、思ひ當りし事こそあれ、信仰記の雪姫は、足で鼠を畫きし例し。幸ひ有りあふこの筆にて、一間の障子へ一首の歌。「戀しくば尋ね來て見よ山城の、小幡の里に馬はあれども」……オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて、硯箱の筆を口に咬へ、墨を含ませ、上の屋體の障子へ口筆にて、一點打つ。この時、下手の木部屋より以前の馬出て、一散に向うへ走り入る。この手綱に引かれ、縛られて筆を咬へしまゝ、跡ずさりに馬に引かれて、おまきも向うへ入る。あと合ひ方、時の鐘になり、暖簾口より多九郎出て

多九　なんだか今夜は、油斷のならない晩だわえ。彌陀次郎が大事にする、月若を引ッ淩ふには、なんでも腹を丈夫にしてゐにやアならぬ。待て／＼。茶を沸かして飯と出ずばなるまい。待て／＼。

ト捨ぜりふにて土瓶を探し、取つて來る。この時、障子の内にて、回向の鉦かすかに聞える。

あの鉦はなんだ。どこぞに佛でも出來たのか……ア、奥の親仁めが回向の鉦だな。彼奴らを逃がしてはならね

え。門口をしつかりと締めて置かう。

ト門口の戸を閉め、栓をさし、土瓶を振り廻して、思ひ入れあつて

南無三、茶が無い。ドレ、水を入れて仕掛けよう。

ト土瓶を持つて流しの方へ來り、甕の上の柄杓を取り蓋を取らうとする。誂らへの物凄き鳴り物にて、雨戸を下ろし行燈の灯、仕掛けにて、暗くなつたり又明るくなつたりすると、竈の上へ燒酎火燃える。水瓶の脇へ小平次の幽靈、物あはれなる樣子にて、忽然と現はれ、多九郎が顏を怨めしげに見詰める。此うち終始寐鳥、薄ドロ〳〵。多九郎、水を汲み、幽靈をフッと見附け、うろたへて二重舞臺へ驅け上がり、佛壇へ向ひ、鉦と撞木を取つて、念佛を申しながら、無性に鉦を打つ。小平次の幽靈後向きになり、多九郎を見詰めゐる。多九郎これを知らず、ソッと振り返る。小平次矢張り見詰めゐるゆゑ、鉦撞木を持ち、うろたへて平舞臺を驅け下り、東の方へ行く。東の方を向き。目を閉ぢて鉦を鳴らし、念佛を申す。幽靈はこれにてフイと消える。多九郎、又ソッと振り返り、怖さうに見る。死靈消えたるゆゑ、ホッと息をして、また東の方を向く。幽靈、多九郎が目の前へポッと出るゆゑ、多九郎うろたへ、大音に念佛を申す。鉦撞木を投げ捨て、門口の方へ逃げてゆく。これにて亡靈パッと消える。多九郎、念佛を申しながら、我が手に締めし栓を忘れて、門の戸を無性に明けようとすれど明かぬゆゑ、猶々念佛を申して、門の戸をしやくる。この時、薄ドロ〳〵にて、門口の栓へ細長き燒酎火、ポカ〳〵と燃える。多九郎これにてうろたへ、ワッと云うて舞臺へ驅け戻りて、念佛を申しながら氣を失ひ、ウンといつて倒れる。この時、上の障子を明け、彌陀次郎窺ひ出で、この陰火にキッと目を附け

彌陀　ハテ、いぶかしきこの家の樣子。もしや橫死の小平次が、障礙をなすか。ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ、この時、奥にて

とわ　コレエ、蚊帳をどこへ置きやアがつた。おまきやおまきや。

ト呼び立てる聲に、彌陀次郎、シヤンと障子を閉す。唄になり、暖簾口よりおとわ、麻莫蓙と枕を持つて、酒機嫌にて出て來り、二重舞臺にて

あのマアおまきめは、どこへ行きやアがつたやら。エ、

いま飮んだ酒に、ついにねえ醉つたさうだ。ドリヤ、爰へ床を取らうか。
ト思ひ入れあつて
昨日思はず破られた、ちぎれた狀も、慥かに先刻の
ト上の屋體へ思ひ入れあり、多九郎の倒れゐるを見て
そこにゐるのは誰れだ。多九郎どんぢやアねえか。蚊が食ふに、コレサ、起きさつしやいな。コレ〳〵
トゆすり起しても起きぬゆゑ
オヤ〳〵、この人は目を廻してゐる。コレ、多九郎どん多九郎どん。
ト手桶の水を額へ吹きかけ、呼びかける。多九郎、やうやう心附き
多九　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト目を閉ぢてゐる。
とわ　コレサ、氣が附いたかよ。どうしたのだ。
多九　南無阿彌陀佛々々々々々。
トうろたへて暖簾口へ驅け込む。おとわ、後を見送り
とわ　なんだ、あの男は、無性に念佛ばかり申すが、エヽ、氣障な男だ。アヽ、惡酒のせゐか、頭がフラ〳〵する。あの先刻の若い人は、どこに寢てござるの。人にばかり思はせて、エヽ、情を知らねえ……ドレ、蚊帳を吊らうか。
ト戸棚を明け、蚊帳と搔卷を出し、四方へ蚊帳を引ッ張り、搔卷を持つて蚊帳の中へ入り
アヽ、コレ、あつたら年增を獨り寢させるの。先刻の若いのは、もう寢なさつたか。エヽ、氣の揉める。思はせ振りも大槪がいゝよ。
トころりと寢て、搔卷をかぶる。矢張り一つ鉦聞え、凄き合ひ方、薄ドロ、寐鳥、行燈ほの暗くなり煙硝火パッと立つて、蚊帳の外へ小平次の亡靈現はれ、蚊帳の中をヂッと見詰め、怨めしげにさし俯つて、蚊帳の中へ入り、女房の枕許へ近寄り、ヂッと見詰める。おとわのうなされ、恐ろゝ聲聞える。上の障子を明け、彌陀次郎窺ひ、蚊帳の中へ思ひ入れあつて
彌陀　さも苦しげなる女の聲は、宿の女房が蚊帳の內、枕の許に忽然と、姿おぼろのあの形。守護なす彌陀の尊像にて
ト廚子を出して開き、蚊帳の方へかざす。ドロ〳〵にて小平次パッと消え、煙硝火立ち、おとわ目の覺めし體。彌陀次郎、障子を閉す。おとわ、蚊帳の外を見て

とわ　エ、、怖い夢を見た。コレ、ビツショリと汗になつた。エ、、寢直つて見ようか

トまた掻巻をかけて寢る。彌陀次郎、障子屋體より出て、行燈を提げてあたりを見廻し、懐中の状のちぎれを取出し

彌陀　手に入ろ状の此ちぎれ。この文言にて、雌龍の印の在所の謎讀。

ト思ひ入れあり。行燈を掻き立て、文言を讀まうとする。あかり暗くなる。彌陀次郎、思ひ入れあつて、また掻き立てゝ状を見ようとする。また暗くなる。この時、彌陀次郎の前へ小平次の亡靈、雄龍の印に水草の藻からみしを右の手に捧げし形にて、煙硝火と共に現はれ、物も云はずに件の印を差出す。彌陀次郎キツと見て

又も怪しきその姿。手に何やらん携さへし。そも又おことは何者ぢや。

小平　これぞ御身の尋ね給ふ、雄龍の印。

彌陀　ヤ、、これが

ト手に取上げ、よく／＼見て

疑ひもなき雄龍の印、いづれに隱しあつたるぞ。

ト小平次の亡靈、顔を上げ、いろ／＼と思ひ入れ。

ヤ、、、、すりや、多九郎めが仕業にて、螢ケ沼に沈めありしを、我れに渡さんその爲に、持ち來りしと申す其方は、して、何者ぞ。

ト小平次の亡靈、こなしある。

すりや、其方は、身が家來の小平次とや。この品渡さんその爲に、呵責のいとま乞ひ受けて、我れに見ゆる健氣な心底。水に溺れてこの世から、非業の最期遂ぐるとも、未來は成佛得脱の、彌陀の淨土へ。

ト廚子の扉を開く。ドロ／＼になり、小平次の亡靈忽ち消える。煙硝火パツと立つ。

ヤ、、さては朧にその形、掻き消す如く失せたるか、アア、不便の者の成行きぢやなア。

トこの時、バタ／＼になり、奥より多九郎、月若丸を引ツ抱へ、後より敷浪、正作、追ひ駈けて出て來り

正作　おのれ多九郎、その稚子樣を何とする。

多九　何とするとは、菊池の子倅月若丸、訴人するのだ。そこ退け。

敷浪　イヤ／＼、さういふお方ぢやない。必らず共に早まつて

多九　面倒な、退きやアがれ。

ト行かうとする。彌陀次郎、多九郎を引附ける。その間に月若丸、蚊帳の中へ駈け込む。

彌陀　こりやア二才め、多九郎さまを何とするのだ。

多九　コレサ多九郎、あの子は決して其やうな

ト蚊帳へかゝる。中よりおとわ、月若丸を引附け、ヌッと出る。

敷浪　イヤ、彼奴は月若丸、正しく爰へ

正作　ヤヽ、こなさんは

多九　おとわだな。

とわ　コレサ、其奴は菊池の子悴。

月若　月若丸と名乘らせる。餓鬼め、キリ〳〵名を明かせ。

とわ　知らぬわいなう。

彌陀　しぶとい餓鬼め。吐かさぬとこの鐵弓、横ッ面へヂリヂリだぞ。うぬらも餓鬼の素性を云はぬか。

　ヤア、極惡人の淺山が、妹の山の井。昨夜手に入る汝が密書で、何も彼も詳しく知れた。敵の片割れ、覺悟なせ。

とわ　うぬら寄つたら、月若が、しやッ面へ燒き印だぞ。

彌陀　ア、コレ、滅多な事を

とわ　この燒き金が否ならば、月若丸と吐かしてしまへ。

彌陀　全く以て。

とわ　但し餓鬼めを許なまうか。

彌陀　サア、それは

皆々　サア〳〵〳〵。

多九　どうだ。

とわ　いつその事に

ト さゝへる正作を踏まへ、月若丸の額へ燒けた鐵弓を當てる。月若丸、苦しみ倒れる。

敷浪　ヤヽ、月若さまを情なや。

正作　大惡人め、悴が敵、和子の仇。

彌陀　現在連れ添ふ小平次を、あの多九郎と云ひ合せ、殺せし報いは今目前。

とわ　小積な奴だ。多九郎どの。

ト多九郎は鐵弓、おとわは出刃を持つて彌陀次郎にかかる。立廻りあつて、多九郎を當て、おとわを一刀切る。

彌陀　二才野郎と侮つて、深手を負つたか、口惜しい。

　若君まつた小平次が、眼前敵のこの山の井、狂言綺語といひながら、現在親に刃向ふも、無人ゆゑの役廻

初世尾上松助の小平次亡靈

尾上榮三郎の彌陀次郎

り、舞臺の事とていづれも樣、御免なされて下さりませ。
とわ　エ、、口惜しい。
ト倒れる。彌陀次郎立ちかゝるを、多九郎心附き、これを支へ、おとわを見て
多九　ヤ、、山の芥どのには手を負うたか。もう斯うしてはゐられぬわい。
彌陀　正作、其奴を取り逃がすな。
正作　心得ました。……おのれも悴が
トかゝるを突き退け、一散に向うへかゝる。ツツカケになり、向うよりおまき、力附きたる思ひ入れにて、一散に出て來り、多九郎をとめてキツとなり、立廻つて本舞臺へ來り、見得になる。
娘おまき、戻つたか。
多九　べら坊あまもついぞねえ、女に似合はぬ馬鹿力、こりやどうだ。
まき　ヤイ、多九郎の惡人め。あなたも聞いて下さりまし。常から愚かな此おまき、馬に引かれて氣を失ひ、正氣附かざる其うちに、不思議や兄の小平次が、亡き俤のあり〳〵と、今より其方が皮肉に喰ひ入り、力量増すゆゑ御主人の、一大事ある時は、共々救ひ奉れと、云ふかと思へば忽ちに、心附いたる向うから、駈け來る馬追ひ、この多九郎、女のよれる黒髪で、一番とめた。ビクとも動かれるなら、動いて見さんせ。
彌陀　すりや、小平次が一念にて、妹おまきがその力量。
敷浪　さはさりながら痛はしき、若君樣のこの亡骸。
ト月若が死骸にかゝる。ドロ〳〵にて、月若ムツクと起上がり、彌陀次郎が所持の厨子を開き、捧げゐる。
正作　ヤ、、こりや若君は御安泰。
彌陀　殊に燒き金の痕もなく、時綱が守護なす尊像、うやうやしく捧げ給ひしは。
ト尊像を取上げ見て
さてこそ彌陀の尊像の、燒け爛れしは若君の、御身替りに立ち給ふか。アラ〳〵〳〵
皆々　有り難やなア。
多九　時綱、うぬを
トかゝるを立廻り。この間におとわ心附き
とわ　餓鬼めはおれが
ト月若を抱へ、引附けんとする。ドロ〳〵になり、燒酎火燃え、おとわ連理引きにて、蚊帳の方へ引摺られ、二枚折りの屏風の蔭へ倒れる。途端に蚊帳の上よ

り、白き怪しき形の物、スル〳〵と蚊帳の裾へ逆さに落ちる。正作、屛風を取除けると、おとわの死骸のめりゐる。彌陀次郎は多九郎を切り倒し、乘りかゝつてキツとなる。

皆々　これは。

ト皆々思ひ入れ。この時ドロ〳〵、煙硝火立ち、蚊帳の裾より小平次の亡靈、女房の首を抱へ、ホツと小高く現はれ、女の首を透かし見て、ニツコと笑ふ。

彌陀　今ぞ成佛。

多九　野郎め、うぬを、

ト別れ返さうとする。彌陀次郎、止めを刺す。

皆々　南無阿彌陀佛。

小平　嬉しやなア。

トげら〳〵笑ふ。大ドロ〳〵にて、見得よろしく、ひやうし　幕

三幕目　堺川辻堂の場

役名――淺山將監鐵山。三平姉、幸崎。舟越三平實ハ彌陀次郎時綱。淺山藤内景信。隱者、小佐保天南。下郎、栗平。安達郡八。奴、多々平　奴、彌太平。腰元。おりく。賤の女、お種。巡禮一角照光。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面に辻堂、二枚扉に錠おろしあり、藪垣、所々に稻村、上の方に柳の吊り枝、舞臺前は水船、蘆澤山に茂りたる體。よき所に攝州堺川と書きたる榜示杭を立て、爰に多々平、頰かむり、奴姿にて抱き子を抱へ、これをお種、在所女の拵らへにて、立廻つてゐる見得。葛西念佛の鳴り物にて幕明く。

ト兩人よろしく立廻り、此うち抱き子頻りに泣く。お種、多々平をキツととめて

たね　イヤ〳〵、なんぼうでもやらぬ〳〵。コレ、こなさんは〳〵、人さんから預かつた、大事の〳〵その子を、なんでマア滅相な、盜んで行くのぢや。マア〳〵、盜む物も多い中に、預かつた里子を盜むといふものがあるものか。なんぼうでもその子は、やらぬ〳〵。こゝな盜人

めが。

多々　エヽ、默りやアがれ。女め、身共を盜人と思ふか。下郎コレエヽ、盜む位なら、なんで餓鬼を盜むものか。この餓鬼は旦那の云ひ附けで、ちつと入用があるから、津の國の、野宿の里の調を捲きあげに、夜を日についで、女房が預かつてゐる里子は、菊池の姫と小坂部太布の、女房が預かつてゐる里子は、菊池の姬と小坂部太郎が、仲に出來たる餓鬼であらう。奴が浚つてお旦那へ持參する。在鄕嚊アめ、そこ退け。

たれ　さう聞いてはなんぼうでも、やる事はならぬぞえ。在所あるいてウソ／＼と、添へ乳してから寢せて置いた、その子を取られてよいものか。瓜茄子盜む夜嵐より、こはい目附きの奴どの、ほんにこなたは鷲熊鷹、蹴爪にかけさせよいものか。早う此方へ戾さんせいなア。

多々　イヽヤ、ならない。戾せとつ云てもこの奴が、形より大きな猿眼、睨んで置いた菊池が血筋、その餓鬼だから浚つて行くワ。

たれ　なんぼこなたがさう云うても、そんなお人の子ではない。早う此方へ戾さんせ。

多々　エヽ、面倒な、退きやアがれ。

たれ　返さんせ。

ト立廻りあつて、キッとなる。これより念佛踊りの合ひ方にて、兩人、抱き子を枷に立廻りのタテ、此うちに抱き子泣く。多々平いぶり附ける。お種、邪魔する。立廻りあつて、禪のツトメになり、トヾお種、子を引ッたくり、一散に向うへ入る。多々平、跡より追ひ駈け入る。この時向うより藤内、深編笠、着流しにて出て來り、お種と摺れ違ひ、舞臺へ來り、向うを見て、

藤内　今の二人が爭ひは、正しく兄鐵山が云ひ附けたる、野宿の里に預けしといふ、小坂部太郎が一子ならん。あの辻堂へ連れ來り、尋ね中の腰元幸崎、弟といふは彌陀次郎、彼奴めが親の三太夫、預かりの雌龍の印、兄鐵山が指圖を受け、三太夫めをぶッ放し、雌龍の印は又ぞろ紛失。これも大方縛め置く、あの幸崎が仕業ならん。兄に代つて藤内が

ト あたり見廻し、辻堂の錠を明けんとする。この時、向うにて

彌陀　モシ／＼、旦那方、御免なさりまし／＼。

天南　うしやアがれ／＼。

トこの聲を聞き、知らぬ顏にて堂に腰をかけ、窺ひゐる

ろ。てんつゝになり、向うより天南、醫者の拵らへ。栗平、同じく前の飛脚形。三平實は彌陀次郎を引ッ立てゝ出て來り、捨ぜりふにて直ぐに本舞臺へ來る。

彌陀　モシ、旦那樣、私しが悪いゆゑお詫び申しまする。どうぞ御料簡下さりまし。

天南　なんだ、料簡しろ……コレェ、、われは愚老の面の泥が目にかゝらぬか。イヤサ、醫者の面へ泥を塗つても、料簡と申せば相濟むかよ。

栗平　左樣でござります。お前ばかりか、奴が面にも泥の跳ね。ぬかるみの刎ねを此やうにかけても大事ないか。濟まないぞ〳〵。

彌陀　モシ〳〵、お前方。濟まぬ〳〵と仰しやるが、こりや誠に怪我でござりまする。あの畔道の溜り水、辷るところを仕合せと、私しは轉げませぬが、側杖あがつたあなた方、お顏へ跳ねたその泥水、二人が跳ねを浴びるとは、ア、、どうでもあなた方は、跳ねてお出でなさると見えますわえ。

天南　コリヤ、ヤイ〳〵、なんだ、愚老が跳ねてゐる。ヤレ、おのれ、醫者を刎ねてゐると申すのか。人の病を癒す醫者が、跳ねて居つてはナ、コリヤ、匙の手前へ立たぬわい。

栗平　左樣でござりまする。身共も御扶持を頂戴いたす、この奴が跳ねてゐて、御奉公が勤まらうか。たはけ者め。

天南　コレサ、栗平、こんな野太い奴は屋敷へ引ッ立て、厩へでもぶち込んで、吠え面をかゝすがよい。

栗平　それがようござりまする。野郎め、うしやアがれ。

　ト兩人、彌陀次郎へかゝる。藤内、この中へ入り、兩人を支へる。兩人見て

天南　ヤア、あなたは淺山

栗平　藤内さま。下郎は旦那の御用につき、小幡の里へお使ひの道にて、大切な狀箱を、フトした怪我にて流れへ落し

天南　あの小平次といふ奴に、拾ひ取られたも、やう〳〵と取返したるあの御狀。シタガ、大事を知つたる小平次。その場で直ぐに

彌陀　ヤア。

　ト思ひ入れ。

藤内　コレ。

　トこなしあつて

役にも立たぬ間はず語り、あたりに他人も、ナ

ト彌陀次郎へ目を附け
委細は屋敷で……抑へておゐやれ。
ト思ひ入れあつて天南に向ひ
只今あれにて聞くところ、おてまへ始め下郎まで、面へ泥を塗られたとな。
天南　左樣々々。お聞きの通り、愚老ばかりか御家來まで、御覽なされい、この通りサ。
藤内　委細詳しく承つた。コリヤ、若い者、其方はいづれの家來だ。
彌陀　へイ、下郎めは未だ主なし、ならう事なら武家方の、御奉公が致したく、仕官の願ひに諸所方々遍歷いたす、へイ、下郎めでござりまする。
藤内　すりや、奉公の望みとな。して、われが家名は
彌陀　へイ、舟越三平と申しまする。
藤内　アノ其方が、舟越三平といふ、侍ひの端くれか。身は淺山鐵山の弟、同苗藤内景信といふ者だワ。
彌陀　すりや、其許が藤内どのとな。さすれば將監さまの御舍弟、手に入る密書の文言にて、敵の手蔓も
藤内　ヤ、なんと。
彌陀　サア、づるい奴とも思さうが、何を申すも武骨な私し、無禮の段は幾重にも、お二人樣、御免なされて下さりまし。
天南　イ、ヤ、ならない、どなたが何と御意あつても、この天南は料簡ならない。
栗平　左樣でござります。下郎も淺山家の御家來だ。藤内さま、これではあなたも濟みますまい。
藤内　われが云はずと身共が承知だ。三平とやら、家來の面へ泥をかけられ、其まゝにして置かうと思ふか。
彌陀　サ、それは。
藤内　性根を据ゑて返答ぶて。一合取つても武士の家來、面の泥は雪ぐとも、赤恥かいた家來が恥辱、洗つても落ちぬぞよ。
彌陀　成る程、面の泥は洗つたら落ちもしようが、心の穢れは
藤内　ヤ、なんと。
彌陀　心穢れし無道人、父を討ちしも
ト藤内と顏見合せ、思ひ入れあつて
ハテナア。
ト思ひ入れ、合ひ方になり、空に烏の聲して、數多の烏飛ぶ。柳の梢へ烏一羽、髑髏を啣へ來り、羽を休め

ゐる。両人これを見て思ひ入れ。
折も折とてかしましく、渡り烏か知らねども
藤内　耳に殘つていまはしい。阿房烏の友呼び連れ、頭の上でガア〳〵啼く、奇怪なる山烏、イデ、遠ざけて
ト小石を摑んで欅の梢へ打ち附ける。烏飛び去り、髑髏バツタリと落ちる。
天南　それ〳〵、何やら烏めが落してうせたワ。
ト取上げ見て
こりや髑髏でござります。
ト取つて
藤内　これをついばむ山烏。
彌陀　いづくの誰れが身の果か。
藤内　さてもみじめな
彌陀　哀れな有り樣。
藤内　ハテ、いまはしい態だなア。
天南　コレサ、藤内さま、烏の啼くはそりや外事、愚老を始め御家來の、面へ泥を塗られても
栗平　あなたはお腹は立ちませぬか。
トきつと云ふ。藤内、思ひ入れあつて、髑髏にて彌陀次郎の眉間を打つ。彌陀次郎の額へ疵つく。彌陀次郎

こなしあつて
彌陀　こりや藤内さまとやら。物も云はずに私しが、眉間をそれなる髑髏にて、打つのみならず面の疵。なんで下郎が面體へ。
藤内　血汐の跳ねに此方の、家來が面を穢されし、泥の返報、これで五分々々。
彌陀　ヤ、なんと。
藤内　召抱へるが、奉公するか。
彌陀　すりや、誰れ人へ御奉公。
藤内　淺山將監鐵山へ、奉公いたせ、舟越三平。
彌陀　すりや、私しを鐵山さまへ
藤内　奉公するなら、推擧しよう。
彌陀　こりや面白い其お詞。お抱へなされて下さらば、主取り好むこの三平、如何にも奉公いたしませう。
藤内　見所のある下郎三平、髑髏で面を割られても、辛抱したる大丈夫、武士の持つべき向う疵、その身のこれがよき幸ひ、面の疵が卽ち印形、その請け判は
ト髑髏を投げる、彌陀次郎、手早く取上げ、よく〳〵見て
彌陀　我がしやツ面の向う疵、滴る血汐が、アレ〳〵、

殘らず髑髏へ浸み込みしは、もしや同氣同性の、由縁の人の頭なるか。

藤内　すりや、その髑髏へ

ト立寄るを、立廻つて手早く髑髏を懐中し

彌陀　請け狀代りのこの髑髏。下郞め慥かに

栗平　うぬ。

トかゝるを、見事に立廻つて

彌陀　お貰ひ申すでござりませう。

ト思ひ入れ。暮れ六ツの鐘鳴る。

藤内　見所のある下郞三平、屋敷へ參れ。推擧しようワ。

彌陀　萬事よろしくお執成し

天南　すりや、この者を藤内さま、お抱へなさるゝ

栗平　御所存か。

藤内　ハテ、其許も御覽の通り、何かの役に立つべき若者。屋敷へ留置なした上、殊によつたら

彌陀　ヤア。

藤内　是非とも身共が推擧いたさう。

彌陀　よき主取りに下郞めも、安堵いたしてござりまする。

天南　然らば愚老はお別れ申さん。藤内さまには、直さまこれより

藤内　右のあらまし物語らん。栗平は天南老と同道なし、必らずともに、合點か。

ト思ひ入れ。

栗平　承知いたしてござりまする。

彌陀　この三平はお跡から、然らば淺山藤内さま。

藤内　三平、必らず待つてゐるぞよ。

ト合ひ方、時の鐘になり、藤内・天南と顏見合せ、思ひ入れあつて藤内は向うへ、天南は栗平を連れて下座へ入る。彌陀次郞殘つて

彌陀　首尾よく敵鐵山が、屋敷へ入込む好き手蔓。それにつけてもこの髑髏、いよ〳〵父の

ト懐中より取出し、思ひ入れあつて

變り果てたる

トこれにて雨車。こなしあつて

アヽ、折惡い俄雨、幸ひのこの辻堂、雨の霽れ間を

ト堂の戸を明けんとする。錠卸ろしあるゆゑ、思ひ入れあつて

こりや、辻堂に錠の卸りたは、ハテ、何とやら。

ト向うに人音するゆゑ、キッと見て

ドリヤ、木蔭でなりと、雨の霽れ間を

ト上の方、稲叢の蔭へ入る。矢張り時の鐘、雨の音烈しく、向うより赤合羽の中間、箱提灯を持ち、中間二人、男の乗り物を擔ぎ、紙合羽の侍ひ附添ひ、多々平赤合羽の形にて、挾み箱を引ッ抱へ、足早に出て來り、本舞臺よき所へ乗り物を下ろし、侍ひ、庭下駄を直す。駕籠の中より鐵山、大小にて出て來り、思ひ入れする。侍ひ心得、辻堂へ卸ろしたる錠を明け。片扉明きかゝる。鐵山、緣先に腰をかけ、内を覗き

鐵山　ヤイ、幸崎。云はねば今夜も指一本、もう明日で十本は皆落すが、これといふも正しく雌龍の印は、われが盗んで隱しつらん。サア、有やうに吐かしてしまへ。

ト堂の内にて苦しげなる聲する。鐵山、思ひ入れあつて

しぶとい女め。知らぬと吐かすか。うぬは正しく三太夫が娘、この鐵山を親の敵と、入込みつらんと、この辻堂へ引出して、憂き目を見するもおのれが素性、巳の年月揃ひし生れゆゑ、指一本を巳年の女一人につばめ、武將宣下の土器へ、數も十枚、十本の、指の血汐を土に混じて作らば、義政調伏疑ひなし。今宵で九本、明日はおのれが命の寂滅。

ト刀を拔き、堂の内へ入る。堂の内にて物騒がしく、バッタリと音して鐵山、血刀と、切つたる指を持つて出て來り、刀を拭ひ、鞘に納め、指を紙に包み、袂に入れ

多々平、用意の挾み箱。

多々　ハッ。

ト挾み箱の中より、以前の抱き子を簀巻きにし、これに石を附けたるを出し、多々平、提灯を差上げ、堂の内へ見えるやうに川岸へ持ち行く。

鐵山　館に見えぬ雌龍の印、在所を云はねば、アレ見たか。おりくが産んだあの餓鬼は、小坂部太郎が悴であらう。野宿の里の土民に預け、育てると聞いたゆゑ、引ッ淺つてこの通りだ。印の在所を吐かさねば、この水底へ沈めにかけうか。

ト堂の内にて

幸崎　サア、それは。

鐵山　在所を云ふか。

幸崎　サア

鐵山　サア〱〱、どうだ。

幸崎　エヽ、知らぬ〱。

ト苦痛の聲。

鐵山　吐かさにやいつそ。多々平、ソレ。

多々　ハツ。

ト提灯を差上げ、よく〳〵見て、浪板の中へポンと打ち込む。子の泣く聲する。堂の内にて女の叫ぶ聲する。侍ひ、錠をシャンと卸ろす。

鐵山　これで心がさつぱりした。明日の夜が命の寂滅。

ト駕籠へ乘る。

皆々　鐵山さま。

鐵山　コリヤ……乘り物、やれ。

ト捨て鐘、合ひ方になり、家來、乘り物を擔ぎ、鷹揚に向うへ入る。此うち、稻叢の蔭より彌陀次郎窺ひゐて、跡を見送り、ツカ〳〵と出て

彌陀　今のは正しく淺山鐵山、忍び來りしあの乘り物、殊に流れへ沈めにかけし、あの幼な子の樣子といひ、さるにてもこの辻堂にて、女の叫ぶ聲するは、ハテ、訝かしい。

ト思ひ入れあり、駈け寄つて、錠を捻ぢ切り、内へ駈け入り、介抱して引出す。幸崎、やつれたる腰元姿、色蒼ざめ、荒繩にて兩手を縛られ、九本の指を切られ、兩手より血流るゝを舞臺へ連れ來り、月あかりに透かし見て

ヤ、あなたは姉上、幸崎さま。縛め置きしこの深手は、さては淺山鐵山が

ト無念の思ひ入れにて、幸崎の縛めを解き

心を慥かに、コレ、姉者人。

幸崎　弟、三平、口惜いわいなう。

彌陀　御尤もでござりまする。して何ゆゑにこの有樣。

幸崎　この身を三太夫の娘と悟り、巳の年月の事までも、よつく知つたる淺山鐵山。指十本を十人に譬へ、武將宣下の十枚の、土器へ血汐を混じ、義政公を調伏と、惡に凝つたるあの鐵山。

彌陀　して、雌龍の印の在所は

幸崎　あの鐵山が隱せしゆゑ、心を附けてやう〳〵と取返し、人知れず隱し置く。それを云へとて夜毎の責め。殊に腰元おりくといふは、主人の姫君、小坂部太郎と云ひ交し、仲に儲けし幼な子の、在所を尋ねてたつた今、あの水底へふしづけに、いとしや和子をやみ〳〵と。

彌陀　すりや、鐵山が沈めにかけしは、主人の若君。エ、しなしたり、殘念な。それに附けてもこの髑髏、只今これにて手に入りしが、この三平が眉間の血汐、浸み込む

不思議はこれ正に、父の無念のこの白骨、疑ひ晴らすは姉上の、流るゝ血汐をこの中へ

ト髑髏を出し、幸崎が指より滴る血を受けて試みる。これも同じく髑髏へ浸み込む。

幸崎　さてこそ血汐の浸み込むからは、疑ひもなき父の白骨。

彌陀　ナニ、その白骨が親人とや。エ、親子今際の髑髏の對面。これにつけても怨みは鐵山、どうで存命叶はぬ姉、身はこの儘に入水なし、和子の皮肉に分け入つて、菊池のお家を立てゝいで置かうか。

幸崎　イ、ヤ、深手といひながら、養生加へてお前の一命。

彌陀　イヤ〳〵、存命思ひもよらず。この身を捨てゝ和子の一命。

幸崎　して又、寶の在所はいづく。

トこのあたりより天南、栗平、出かゝり、窺ふ。

彌陀　雌龍の印は人知れず、あれなる蘆間に埋め置く。

天南　さてはあれなる蘆間に隱し

栗平　三平、うぬを

トかゝる。二人を相手に立廻りのうち

幸崎　南無阿彌陀佛。

ト本水へ見事に飛び込む。彌陀次郎驚ろき

彌陀　ヤ、姉上には早まつて

天南　うぬを

栗平

トかゝるを見事に當てる。兩人倒れる。彌陀次郎、川端へ駈け寄り

彌陀　せめて、水死の亡骸を、

ト時の鐘になり、蘆間に立ちし卒塔婆を取つて、浪板を尋ね、幸崎の死骸を引き上げ、介抱して

コレ、姉者人々々々。絆は切れたか、口惜しい。これも誰れゆゑ、淺山鐵山。

ト向うを見て、キッとなる。栗平心附き、起上がつて

栗平　證據の白骨、おれが貰つた。

ト白骨を取つて駈け出す。彌陀次郎やらじと立廻り、栗平は一散に逃げ出し、彌陀次郎追つて、下座へ入る。これより薄ドロ〳〵、寐鳥、物凄き合ひ方になり、水の中より幸崎の亡魂、以前の抱き子を抱へ、忽然と現はれる。この時、本雨降り出す。これにて天南、雨水をのみ、心附きたる體にて起き上がり、捨ぜりふにて幸崎の姿を見て、悔りして腰を拔かす。幸崎の亡靈、抱き子をいろ〳〵と介抱し蘆間へ行き、埋めし印を取り出す。抱き子やわるゆゑ、いろ〳〵介抱し、印を口に

咬へ、川の中へ小用をやり、いろ〳〵して、蘆間の中にて抱き子の顔を見て、涙にむせぶ思ひ入れ。此うち天南、始終探へてゐる。バタ〳〵にて彌陀次郎、栗平と立廻りながら出て來り、天南も起き上がつてかゝるを、彌陀次郎、見事に二人を切り倒す。抱き子しきりに泣く。彌陀次郎、この聲を聞き、蘆間をキツと見返る。幸崎の亡靈、子を抱いてスツクと立つてゐる。

彌陀　ヤヽ、さては中有に、

ト大ドロ〳〵。彌陀次郎、持つたる刀を捨てゝ手を合す。煙硝火立つて、幸崎の亡靈、子を抱きたるまゝ、東の方を中乘りにて眞直に行く。暫らくドロ〳〵。よきキツカケにて、ひやうし、　幕

幕の外を幸崎の亡靈、向うへかゝり、中の間へ切れて揚げ幕へ入る。ドロ〳〵打ちあげる。すぐにシヤギリ。

大詰

播州皿屋敷の場

役名——淺山將監鐵山。幸崎の亡靈、舟越三平實ハ彌陀次郎。淺山藤内景信。安達郡八。奴、多々平。同、彌太平。牟禮一角照光。腰元、おりく。賤の女、お種。

本舞臺、三間の間、上の方に誂らへの障子屋體。振りよき柳の大樹、植込みの庭先、栗丸太の井筒、下草しげり、正面二重舞臺、緣側附き障子、向う張り物、鼠壁、裾通りみの張り、床の間、違ひ棚、瓦燈口、よき所に時計をかけ、下の方枝折り戸、手水鉢、石燈籠、萩垣、すべて、播州皿屋敷、誂らへの道具。爰に藤内、麻上下、大小にて立ちかゝりゐる。多々平、彌太平、奴にて、お種を引き立てゐる。おりく、振り袖の腰元にて、井筒の石臺に秋草を植ゑ、これに附きし蟲を竹箸にて拾うてゐる。琴唄にて幕明く。

彌太　女め、下からぬか〳〵。

藤内　ヤイ〳〵、女め、見苦しい態をして、淺山鐵山が庭先近く、アヽ、うぬは狂人だな。

たね　アイ、氣も違はいでかいな。預かり者の大事のお子、連れて逃げたは、コレ〳〵、この奴どの。サア、こなさん、あの子を返さんせ〳〵。

多々　イヤ〳〵、おらア知らない〳〵。とんだ事を云ふ女だわえ。
たれ　イ、ヤ、さうは云はさぬ。こなさんが連れて走つたゆゑ、附け込んで來たこのお屋敷。早くあの子を出して下さんせいなア。
　ト お種を見て
りく　ヤ、こなさんは、津の國野宿の在所、あの子を預けた
たれ　お種でござりまするわいな。
藤内　して、腰元おりく、わりや、この女を存じて居るか。
りく　アイ……イ、エ、知らぬ女中でござりますわいな。
藤内　さうであらう。よもや知つたとは云はれまい……コリヤヤイ、女、此方にても餓鬼とやら、決して存ぜぬ。知らないぞ。
りく　コレ、在所の女中さん、わしやお前とは、ついぞ逢うた事もないが……近附きでもござんせぬが、朋輩の幸崎どのが、懇ろに噂のあつたこなさんゆゑ、知らぬでもなし、知つたでもなし。して、お前は、マア、何しにこのお屋敷へ。
たれ　サア、大それた事でござんす。さるお人から預かつた大事のお子を
りく　あの子といふは、アノ兼若を
藤内　存じてゐるか。
りく　イ、エイナア、何しに存じませうぞいなア。
たれ　サア、その預かつた幼な子を盗みに來たは、コレコレ、この奴どの、附け込んで來たこのお屋敷、早うあの子を返して下さんせいなア。
りく　そんなら里子の兼若を、アノ云ひ附けて、このお屋敷へ……それに附けても幸崎どの、戻つて來ぬも十日あまり、その幼な子の樣子も見えぬは、どうぞ合點の
　ト 思ひ入れ。
藤内　われが云ふ通り、この家に餓鬼の沙汰もあるまい。殊に家出をひろいだ幸崎。そりや彼奴が仕業であらうワ。
りく　藤内さまの仰せなれど、どうしてマア幸崎どのが、あの幼な子を。これには、深い樣子がなけりや叶はぬ。
　ト 思ひ入れ。時計の五ッ打つ。てんつゝになり、郡八足輕にて棒を突き。「下がれ〳〵」と制して出る。彌陀次郎、一本差しの奴の形にて、先へ立ち出て來り、花道にて
郡八　下がれ〳〵、下がれといふに。

彌陀　これはしたり、私しは藤内さまの御推擧によつて、御奉公に上がりました、三平と申す下郎、胡亂な者ではござりませぬ。お通しなされて下さりませ。
郡八　イヤ〳〵、今日は都よりお使者の御入來。胡亂な奴だ。下がれ〳〵〳〵。
ト制しながら本舞臺へ來る。
藤内　ヤイ〳〵、郡八、騷がしい、何事だ。
郡八　ヘイ〳〵、只今御門をこの者めが
彌陀　ヘイ〳〵、私しでござります。藤内さま、お詞に任せまして、只今上がりましてござりまする。
藤内　其方は昨日奉公を望みし、三平ではないか。
彌陀　ヘイ、左樣でござります。今朝未明に上がりまする筈のところ、何かに紛れ、只今やう〳〵上がりましてござりまする。コレ、部屋頭、これから隨分心安く頼みますよ
郡八　ア、そんならおぬしは、いよ〳〵このお屋敷へ御奉公に上がつたのか。ハテ、蓼食ふ蟲も好き好きだ。噂にも聞いたであらうが、人使ひといつては、評判のこの皿屋敷、
彌太　コレ〳〵頭、どうしたものだ。
郡八　ヘイ〳〵、人使ひのよいお屋敷でござりまする。
たれ　サア、藤内さまとやら、お屋敷へ附け込んで來たからは、早うあの子を返して下さんせいなア。
藤内　ヤア、武士たる者へ云ひかけをする下素女めが。その息の根を
ト立ちかゝるを彌陀次郎とめて
彌陀　アイヤ、女中は慥か
たれ　野宿の里の種でござんす。さういふお前は幸崎さんの
彌陀　ア、コレ。
ト思ひ入れ。
藤内　そんたら三平、これなる女を存じて居るか。
彌陀　アイヤ、知らぬ在所のその女、何かあなたのお心に、違へた樣子と存じたから、出過ぎた事とは思へども、お止め申した藤内さま……コレ、女中、粗忽があらば幾重にも、早くお詫びをしたがよい。
りく　慥かにそれとは知らねども、もしや乳人の
彌陀　アモシ、下郎は卽ち今參り、まだ御勝手も知りもせぬ、このお屋敷の初奉公……朋輩衆、心安く頼みますぞえ。

ト思ひ入れある。時計の五ツ半を打つ。向うにて「お使者」と呼ぶ。皆々思ひ入れ。

藤内　使者の入來は、慥かに武將の御土器。

りく　受取る役目のお使者なるか。賤の女中は、マア、奥へ。

たね　イヽエ、わたしはあの子の詮議。

藤内　慮外な奴だ。

りく　コレ、お前は幸ひわたしが部屋へ。

郡八　その附け人はこの郡八。

たね　おりくさん

りく　わたしが部屋で

呼び　お使者。

ト呼ぶ。太鼓入り謠になる。お種、郡八、多々平、彌太平附いて下座へ入る。皆々舞臺へ並よくゐならぶ。向うより一角照光、麻上下、大小にて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

一角　義政公よりの使者、牟禮の一角照光。役目でござれば罷り通りまする。

藤内　イザ／＼、あれへお通りあられませう。

一角　許しめされい。

ト上座へ通る。藤内、思ひ入れあつて

藤内　今日、お使者の御入來は　定めて武將より仰せ下りし、御土器お受取りのお使者ならん。一角どのには遠路のところ　御苦勞千萬に存じまする。

一角　これは／＼、鐵山どのゝ御舍弟、藤内どの、使者の拙者をお出迎ひ、近頃御苦勞千萬に存じまする。

ト思ひ入れあつて

彌陀　ヤ、あなたはこの程、小幡の里にて

一角　その節面談いたしたる

彌陀　廻國修行の

一角　ア、コレサ、その節逢うた其方は下郎か……ハテサテ其方は、鐵山どのに御奉公を致すか。

藤内　お使者には、只今拙者が申した通り、御土器をお受取りの、そのお使ひでござるかな。

一角　如何にも、今日今宵夜中の使者は、右の一條、承れば當家の筋目、淺山の御先祖は　先年尊氏公の御代、南天竺より大唐へ渡つて、應量器となづけ、殘塘の東坡模樣を描き、燒き改め、その後日本へ渡りしゆゑ、唐繪の皿と名く。その頃先祖は、都深草にあつて、唐繪の皿の寫しを拵らへ、武將へ差上げ、その恩賞として、この播

州を領地に賜はり、親鐵山より當所に住居す。さるによつて、播州皿屋敷と世に云ひなす。然るに義政公の御心に逢ひ、山名どのゝ執成しにて、この度武將の宣下の砌り、數十枚の土器を、鐵山自らこれを作り、差上げよとのお指圖に、この由申し聞けんため、わざ／＼參つた年禮の一角、使者の口上、あらまし斯くの通りでござる。

藤内　お使者の口上、逐一承知仕つてござりまする。兄鐵山にも申し達し、早速お請け仕るでござりませう。腰元りくは右のあらまし、兄鐵山へ申してよからう。

りく　畏まりました。

ト立たうとする。障子の内にて

鐵山　將監鐵山、それへ參つて、お使者に面談仕るでござりませう。

ト唄になり、上の屋體、引拔きにて障子開く。内に鐵山、羽織衣裳にて、上の方に誂らへ土器燒きの塗り垂れの竈、土器を燒く道具、素燒の土器十枚、棚に飾り、居間へ注連を張り、土器十枚を手作りの體。鐵山、燒き上げし土器へ火を打ちかけ、平舞臺へ來り

こは恐れ入つたるお使者の御入來。管領よりの只今の仰せ、鐵山あれにて、逐一承知仕つてござりまする。いよいよ今宵子の上刻、武將宣下の御土器、成就清めの切り火仕つて、差上げまするでござりませう。

一角　早速のお受け、使者に參りし拙者も滿足。然らば今宵九ツまで、奧にて照光、相待ちまするでござりませう。

鐵山　見苦しけれど別間に於て、御休息下さりませう。

彌陀　すりや、お使者には御土器、子の刻までに御持參とな。アノ、仔細ある十枚の

ト彌陀次郎を見て

鐵山　見馴れぬ下郎、そちや何者ぢや。

彌陀　ヘイ、下郎は今日お屋敷へ有り附きましたる、三平と申す二合半でござりまする。

鐵山　アノ其方が、弟藤内が推擧せし、三平と申す下郎か。

彌陀　なか／＼左様。して、殿様が當家の主、淺山將監鐵山さま、只今からは下郎めが、お主と崇める旦那様、思へば無念口惜しき、あなたのお面見る度に

ト怨めしげなる思ひ入れ。鐵山見て

鐵山　ハテ、いぶかしき下郎が振舞ひ、眼に涙浮べし顏色。今日よりして身が扶持を、喰ふ身分でありながら、何の怨みに、身共に向つて

ト氣を替へ、思ひ入れあつて

彌陀　アイヤ、只今よりは御主人。傳手もあらばと今日が日まで、願ふに幸ひこのお目見得、冥加至極と存ずるゆゑ、ツイ思はずも嬉し涙が

鐵山　アノ、其方が

彌陀　ヘイ。

鐵山　今より身共に奉公するか。

彌陀　願うてもなき御主人樣。

鐵山　しかと左樣か。

彌陀　ナニ僞りを申しませう。主人の仰せ、何なりと

鐵山　致す所存か。

彌陀　なか／＼左樣でござりまする。

鐵山　戀を取持て。

彌陀　エ。

鐵山　主の詞を背かずば、奉公はじめに鐵山が、年にも似ざる色の道。役目首尾よく勤めた上、身共が戀の取持ち致せ……と申すもお使者お聞きの手前。面目次第もござりませぬ。

彌陀　すりや、下郎めに、戀の取持ち致せとな。して又あなたの戀人は。

鐵山　それに扣へし腰元りく。

りく　エ、私しへ勿體ない。

鐵山　これまで口外いたさねど、疾より其方に身は執心。現在お主のあなた樣。

彌陀　いよ／＼これなる腰元の

鐵山　素性知れざる女ゆゑ、惚れたばかりか、身許の詮議。

彌陀　アノ、私しが、身許の詮議を

藤内　兄貴の惚れたは表向き、身許を尋ぬる詮議の起り。

一角　して、鐵山の手廻りにて、召使はるゝその女、何の疑ひ、何ゆゑ詮議を

鐵山　菊池が餘類と思ふゆゑ。

彌陀　エ、アノ、この女中を

りく　菊池の身寄りと

鐵山　サ、明けてそれぞと云はぬが花。蕾みの花の菊池が娘。

りく　エ、。

鐵山　それゆゑ惚れた。その身の素性、明し聞かすか但し又、戀の返事を致すか、女。それ聞く役目は下部三平。

彌陀　奉公始めに下郎めが、キッと返事を致させませう。

一角　何か樣子のありさうな。今宵に限つて女の返事は、今宵の子の刻。

鐵山　九ツまでに御土器
藤内　差上げまするそれまでは
一角　奥の別間で相待ち申さう。
りく　すりや、どうあつても、わたしが素性を
彌陀　ハテマア、何事も旦那の仰せを請けたこの三平、下郎任せに、御合點か。
鐵山　然らばお使者は暫らく休息。
一角　案内おしやれ。
藤内　イザ、御同道
鐵山　下郎、役目を云ひ附けたぞ。
ト唄になり、鐵山、上手の障子屋體へ入る。一角、藤内、正面の口へ入る。おりく、三平殘る。あと合ひ方。
彌陀　サア、いま聞く通りだ。腰元のおりくどの、新參の三平が、今日からしては犬も朋輩、たかの知れたる奴らさ、二合半の身分でも、重いは主人の今の仰せ。こなさんの身にとつては、有り難い事とお請け申し、鐵山さまへ色よい返事を
りく　イエ〳〵、そりやこなさんの云はんす事なれど、女子と生れて一生に、定まる夫は只一人。いかにお主の仰せぢやとて、どうしてマア、あなたにこの身が任されませう。三平どのとやら、必らずともに、この後とてもやい。
彌陀　そんならこなたの氏素性、菊池の息女と名乘らつし
りく　コレ、滅相な。どうしてわたしが、菊池とやらいふ武士の、なんで娘でござんせう。わたしは筋なき土民の娘。
彌陀　筋なき土民の娘なら、この上もなき身の幸ひ、鐵山さまへ隨つたら、そこが女は氏なうて
りく　イヽエ、わたしには夫がござんす。いとけない時云ひ號け、杯せねど云ひ約束、一旦定まる男のある身。
彌陀　こなたの定まる夫といふは、小坂部太郎といはうがや。
りく　ナニ滅相な、三平どの、どうしてわたしが、其やうな男を
彌陀　未だ杯せざれども、二人が仲には兼若といふ、一子がござらうがや。
りく　どうしてわたしにそのやうな
彌陀　無いとは云はさぬ、奥にゐる、野宿の里の賤の女に、預け置いたる兼若丸、こなたの素性は、先頃亡び失せたる、コレ

ト縁先の夏菊の石臺を取つて、おりくが前に置き

この石臺の夏菊は、今を盛りと開けども、開かぬ運の菊池の一族、小坂部姫と御本名、お名乘りなされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて

りく　心ありげな三平どの、この一本の夏菊を、わたしに見せ、菊池の餘類とうらどひ事。殊にわたしに子まであるとは、覺えなき身のこのおりく。本名實名あるやうな、女子ぢやござらぬ、三平どの、疑ひ晴らして下さんせ。

彌陀　すりや、これ程に申しても、お明かしなされぬ上からは

ト思ひ入れあつて、おりくが帶を捕へ、グツと引寄せ、抱き附かうとする。上の屋體より、藤内窺ふ。

りく　ア、コレ、何をなさんすぞいなア。

彌陀　何をするとは、わしはこなさんに惚れたからよ。

りく　エ、アノこなさんが、わしに

彌陀　朋輩同士の轉び合ひ。惚れまいものか、おりくどの、主人に返事がならぬなら、この三平に色よい返事を、聞かせてはくれまいか。

りく　御主人にさへ返事せぬ、わたしを捕へてこなさんが、返事せいとは眞實か、但し浮氣か三平どの。そのこなさんの善惡の、心の底を見た上は

彌陀　返事をさつしやる心なら、心中見せう。

りく　エ、アノ、こなさんが

彌陀　心中見せう。その心中は夏菊を、植ゑし井筒のこの石臺、菊の花びら切らずして、この三平が左の小指。

ト菊の石臺の緣にて、見事に小指を切り落す。おりく驚ろき、驅けゆくを引とめる、立廻りに彌陀次郎、以前の髑髏を懷より落す。おりく見て

りく　ヤ、こりやコレ白骨。

ト思ひ入れ。彌陀次郎、手早く取つて、左の小指の血を絞り、白骨にかけ、キツと差しつける。切つたる小指は、藤内の前に落ちる。藤内拾ふ。

彌陀　菊池の家の忠臣たる、俗名舟越三太夫、變り果てたるこの髑髏。

りく　すりや、その髑髏は、菊池の一類。

彌陀　父にて候ふ三太夫。拙者は實の忰にて、その幼名は彌陀次郎、いま世を忍ぶ舟越三平。僞りならぬ小指の血汐、髑髏に浸み込むこの不思議、これにて疑ひお晴らし

あれ。主従三世の姫君様。お名乗りなされて、下さりませ。

トきつと思ひ入れ。

りく　さては敢へなく世を去りし、三太夫が髑髏とや。また其方は實の伜、乳人幸崎が一人の弟、彌陀次郎時綱であつたか。

彌陀　サ、只今仰せ下されし、姉幸崎は果敢なき最期。野宿の里に假り寝ある、その幼な子の隠れ家も、松は根方を洗はれて、悲しや和子も鐵山が、邪險の淵にふしづけの、敢へなくおなくなりなされました。

りく　ヤ、、すりや自らが云ひ交せし、太郎さまの御胤たる、あの稚若も、幸崎もろとも

彌陀　殺害せしはこの家の鐵山、父の敵も淺山兄弟。

りく　して又其方が實の親、三太夫が奪はれし、雌龍の印の在所はいづく。

彌陀　サ、それを聞かんず、隙もなき、鐵山一味の惡黨ばら、支ふるその間に姉幸崎、水に溺れて相果つれば、詳しき在所もいたづらに

りく　雌龍の印のその行くへ、知れざるうちはいつまでも、叛逆謀叛の汚名をとり、義政公への申し譯。

彌陀　立たねばお家はいつまでも

りく　日蔭に植ゑし菊池が一類。

彌陀　開く時節も情なや

りく　八重九重に咲きもせで

彌陀　盛りの夏も霜もろとも

りく　消えて跡なき、

彌陀　お家の成行き。お姫様

りく　三平、是非もなき世の

兩人　有様ぢやなア。

ト兩人互ひに思ひ入れ。よき時分に後より藤内出て、ツカ〱と寄つて、以前の小指を出し

藤内　不義の兩人、動きやアがるな。

彌陀　ヤア、こなたは御舍弟

りく　藤内さま、なんで不義とは仰しやりまする。

藤内　吐かすな、女郎め、菊池が娘小坂部姫、三平こそは彌陀次郎、鐵山どのを玉にして、この縁先にてどれあふ様子。證據といふは心中に、切つたる指は舟越三平、われが小指であらうがな。

彌陀　サ、それは。

藤内　この由、兄の鐵山に、詳しく語る、證據はこの指。

彌陀　ヤヽ、それを

藤内　待つてけつかれ。

　　　ト障子をシヤンと閉す。

彌陀　あの小指、藤内に拾はれては……イデ、踏ん込んで取返さん。

りく　アコレ、もし誤つて其方の身に

彌陀　氣遣ひあるな、姫君様

りく　次郎時綱

彌陀　イデ、藤内に

　　　ト合ひ方になり、跡を追つて奥へ入る。おりく、跡見送り

りく　アコレ、拾ひし小指を、どうぞ首尾よく

　　　ト奥の方を見て窺ふ。人音するゆゑ、思ひ入れあつて、行燈を吹き消し、小蔭に窺ふ。奥より多々平、彌太平、窺ひ／＼出て來り

彌太　コレサ多々平、おぬしはこの彌太平に、何を頼むといふのだ。

多々　イヽヤ、外の事でもねえ。おぬしも聞いてゐる、野宿の里のあの女め、餓鬼を返せとせちがふゆゑ、うるさくつてならねえワ。おらはこれから堺川まで一走り、餓鬼の様子を見屆けてくる。跡はおぬしに頼んだよ。

彌太　氣遣ひするな。跡はおれが呑み込んだ。して、今夜もこれなる拔け井戸から

多々　ハテ、この拔け井戸を拵らへたも、お旦那の思ひ附き。密事の御用とある時は、通路自由なこの井筒。

彌太　必らず人に見附かるな。

多々　合點だ。

　　　ト捨て鐘にて、多々平、井筒の中へ忍び込む。彌太平は奥へ入る。おりく、始終、後に窺ひゐる。此うち上の障子を明け、一角これを見てゐて

一角　すりや、鐵山が庭先の、井筒は通路の拔け道なるか。ハテ、飽くまで根強き

　　　トこの聲を聞き、おりく窺ふ。この時、時計の四ツを打つ。一角、思ひ入れあつて

　　　ありや後夜の時計、子の刻までにはもう一時。ハテ、夏の夜は

　　　ト思ひ入れあつて、シヤンと障子を閉す。

りく　今のお聲は、慥かにお使者の一角さま。

　　　トためらふ。この時いづくにてか、赤子の泣く聲する。おりく、聞き耳立て

ハテ、合點のゆかぬ。この屋敷にて、耳馴れぬ幼な子の泣く聲。ア、コレ、子を持つた身では、身につまされて、もし兼若でも來はせぬかと、思ふその子は情ない

ト思ひ入れあつて

ア、コレ、暗うて黒白がわからぬ。どうぞ灯を。オヽ、それ〳〵、この庭先に、御土器に打ちかけし、燧か火打ちが

ト火打ち箱を尋ねて火を打つ。こゝにて物凄き合ひ方、薄ドロ〳〵、寐鳥になり、心火燃えて、行燈の中より幸崎の亡靈、以前の子を抱き、ホツと現はれ、行燈を離れ、舞臺へ來ると、行燈にホツカリと灯ともる。おりく、不思議さうに思ひ入れあつて

灯を附けうと思うたに、いつの間にやら行燈の灯。さもほの暗き物蔭にて

トこの時、子は頻りに泣く。

アレ〳〵、又も頻りに幼な子の泣くはいづく。

トあたりを尋ね、幸崎を見附け

ヤ、そこにゐやるは誰れぢや、何者ぢや。コレ、いま泣いた幼な子の、あの聲は……ア、抱いてござんすその子かえ。して、お前は誰れぢやえ……エ、すりやわが身は、乳人幸崎。ほんにマア、十日あまり見えもせで、誰れが子を其やうに大事にかけて……ヤ、このお子はお前のお子、野宿の里へ預けてあつた、兼若さま……ヤ、そんならその子は息才でかいな。エ、マア、あの三平とした事が、其方も幼な子も、鐵山が爲に死にやつたと、たつた今、眞顔になつて云やつたが、もしや其方は

ト幸崎、哀れ氣に涙にむせぶ。おりく、これを見て、怖氣立つたる思ひ入れあつて

ア、そんならこなたは世を去りし、幸崎が靈魂、再び迷ひ來て……ヤ、この兼若は鐵山が沈めにかけしを助け上げ、渡さん爲に來りしとや。ヤ、、、、かねて鐵山、叛逆の根ざしあるによつて、山名に與なし、巳の年月日時揃ひし、其方の指を十日に切り、十人の數を一人につばめ、その生血を土に混じ、十枚の土器を作り、義政公へ捧げ、武將を調伏疑ひなし。今宵子の刻、使者に立つたる牟禮の一角、持ち歸るその時は、武將の御身氣遣はしく、一枚たりとも不足せば、當日の儀式を妨げ、義政公の御身に恙なければ、菊池のお家再興を、草葉の蔭より願ふといふ、實義を現はす幸崎が、修羅の苦患の暇乞ひ、見ゆるものとの告げなるか。

ト幸崎の亡靈、思ひ入れあつて、抱き子を渡す。おりく、取上げ見て

すりや、この和子は我が子の兼若、恙ないのも其方の庇。エヽ、忝ない。

ト幸崎の亡靈、懐より雌龍の印を取り出し、指なき手にて捧げ、思ひ入れにて渡す。

ナニ、これが雌龍の印とや。エヽ、忝ない……この上は、其方の詞に隨つて、あの鐵山が居間へ忍び、首尾よう土器盗み取り、使者の刻限妨げなば、武將の御身も恙なく。エヽ、忝ない。

ト思ひ入れ。この時頻りに子は泣く。お種、出かゝりゐて

たね　ヤヽヽヽ、子の泣き聲は慥かに若樣。どうして爰へ

ト幸崎の亡靈を見て

ヤア、お前はこの世を去りしと聞く幸崎さま、情ない身にならしやんしたなう。

ト幸崎の亡靈、抱き子へ思ひ入れ。

ヤ、ナニ、乳に餓ゑたる幼な子とや。心得ました。

ト子を抱き上げ、乳を呑ませる。抱き子泣きやむ。幸崎の亡靈見て、嬉しさうにニッコリ笑ふ思ひ入れあつて

幸崎　アヽ、嬉しや、和子を手渡しせば、思ひ置くこと早これまで。只なつかしいは弟三平、見えんとは思へども、閻王の使ひしげくして、修羅の太鼓のアレ〳〵。今ぞあの世へ、姫君さらば。

りく　南無阿彌陀佛。

トどろ〳〵になり、幸崎の亡靈、正面の壁へかゝるる。心火燃え、煙硝火パッと立つ。姿消える。おりく、泣き落す。お種、思ひ入れあつて

たね　大切なる兼若君、わたしは早う住み馴れし、野宿の里へお供せん。

りく　成る程、又も將監が、目にかゝつては一大事。其方は早う

たね　心得ました。

りく　わしは將監鐵山が、居間へ忍んであの土器、盗んでなりと妨げん。必らずともに、その若を

たね　氣遣ひあるな、おりくさま。

りく　其方は早う

トよき時分、郡八窺ひゐて

郡八　女め、うぬを
ト かゝるを、お稱、手早く郡八を當てる。タヂ／＼と
なる。
たれ　おさらば。
ト早三重になり、お種、子を抱き、一散に向うへ入る。郡八心附き
郡八　程は行くまい。
ト管絃になり、跡を追つて向うへ入る。おりくも思ひ入れあつて、雌龍の印を出し、あたりを見て
りく　邪智深き鐵山に、見附けられては又ぞろや
ト あたりを見廻し、時計を見附け
雌龍の印を暫らくも、隱し所は
ト 掛け時計の箱を開け、手早く隱し、髑髏を見附け、取上げ見て
忠義の武士のこの白骨、せめて菩提の
ト懐中し、思ひ入れあつて
さうぢや。
ト管絃になり、上の障子をソツと明け、忍び込む。奥より奴大勢、彌陀次郎を取卷き、藤內附いて出て來り、彌陀次郎と立廻りあつて、奴を見事に投げ退け、キツとなる。
皆々　動くな。
藤內　すりや三平、手向ひか。
彌陀　イヽヤ、手向ひは致さぬ。この三平を家來に云ひつけ、野郎呼はりその上に、腰元おりくと不義あるとは、何を證據に藤內さま、下郎を不義と仰しやるのだ。
藤內　吐かすな三平。新參者の身を以て、兄鐵山が心をかけ、閨の伽にと口說かせた、腰元おりくと不義密通、藤內しかと見屆けた。證據は卽ちこの小指。われが左のその小指、切つてあるのが爭はれぬ。キリ／＼白狀してしまへ。
ト 以前の指を出し、差しつける。
彌陀　イ、ヤ、小指は切つたりとも、不義密通の覺えはござらぬ。
藤內　覺えないとは、云はさぬ／＼。かゝる證據のある上は、不義の成敗。繩打つてその首刎ねる。腕まはせ。
ト彌陀次郎へかゝる。立廻り。この時一角、ツカ／＼と出て、藤內を引附け、彌陀次郎を圍ふ。家來、バラバラと下座へ入る。
一角　藤內どの、まづ扣へめされい。

藤内　こりや牟禮の一角どの、不義の下郎を成敗いたすを、なんで貴殿は留めさつしやる。
一角　留めましたは、貴殿のお爲。
藤内　留めるを身共が爲とはな。
一角　申さずとも、貴殿にも御存じならん。今宵の子の刻、九ツの時計打つまでに、數十枚の土器を、受取り歸るは身が役目。不淨を禁ずる今日今宵、下部を手討ちにおしやつては、血汐の穢れ恐れあり。それゆゑ一角照光が、お止め申した。藤内どの、これでも拙者が誤りかな。
藤内　サア、そりやア
一角　あまり惡くはあるまいかと存じまする。
藤内　イヽヤ、その血をあやした下部ゆゑ、繩打ちまするが誤りかな。
一角　すりや、この下部が血をあやして
藤内　場所辨まへぬこの心中、腰元おりくと不義働らき、指まで切つたが慥かな證據、これでも貴公はお止めなさるか。
一角　サ、その儀は
藤内　サア。
　トこの時、時計は四ツ半を打つ。

一角　ヤヽ、ありやもう後夜半。いま半時が義政公へ、御土器を持參の刻限。
彌陀　いま打ちしは早後夜半。その土器は情なや、巳の年月の揃ひの女の
藤内　ヤ、なんと。
　ト障子の內にて
鐵山　怪しい女め、そこ動くな。
　トばた／＼になり、障子を蹴はなし、內よりおりく、土器を一枚懷中して出て來る。後より鐵山、白木の箱に內曇りの土器九枚入れ、最前の髑髏を持ち、追ひかけて出て來る。逃げ行くおりくを、藤內押へる。
一角　こりや鐵山どの、あわたゞしいその振舞ひ。それなる女が、なんぞ無禮を致したかな。
鐵山　そのあまめこそ大それた、武將宣下の御土器、數十枚のその中を、一枚盗んだ橫道者、それゆゑ捕へて詮議いたす。
彌陀　イヤ、憚りながら旦那樣、よもやこれなる腰元おりく、益なき品を盗まんや。そりや殿樣の、お覺え違ひでござりませう。
鐵山　默れ三平。新參の身を以て、いらざるわれが庇ひ

立て。コレエヽ、眼前箱の土器が、一枚不足いたして居る。正しく女の懐に

ト立ちかゝるを、彌陀次郎、おりくを囲ひ

彌陀　イヤ、御土器の盗人は、こりや外にござりまする。

鐵山　外にあるとは何者だ。

彌陀　外でもござらぬ、斯く申す、新参者の三合半。この三平めでござりまする。

りく　ア、コレ滅相な。なんで其方が盗み取らうぞ。この世を去りし幸崎が、死靈の教へ、義政公を、調伏呪詛の御土器、一枚たりとも不足せば、その日の式を妨ぐる。

彌陀　さては世に亡き姉者人、かゝる大事をしめさんと

りく　殊に我が子まで恙なう、我れに渡して野宿の里へ。

彌陀　すりや、みどり子も存命にて

鐵山　さてこそ、様子ありげな兩人。

藤内　御土器まで隠したは、腰元りくに極まつた。詮議しぬいて

ト立ちかゝる。一角とめて

一角　イ、ヤ、藤内、まづ待たれよ。見れば將監鐵山の、腰へ持たれしあの髑髏。不淨を禁ずる貴殿の別間、何ゆゑ不淨のその品を、御持参あるぞ鐵山どの、この髑髏の様子は如何に。

鐵山　この髑髏こそ御土器、盗みし奴のよき手がゝり。拙者の居間へ落せしが、この白骨を所持せし奴こそ、御土器の盗人サ。

彌陀　左様ござらば鐵山さま、その白骨は下郎が所持。疑ひもなき盗人は、この三平めでござりまする。

鐵山　左様なうては叶はぬところ。この白骨はわれが親、三太夫が髑髏であらうが。

彌陀　サ、それは。

鐵山　蟠龍の印を奪はれて、人手にかゝつてくたばつた、腰抜け武士のこの髑髏。鳶や烏の食ひあまり、見るもなかなか、エヽ、いまはしい。

ト上手の井の中へ投げ込み

これにつけても下郎三平、最前われが請合うた、腰元りくが鐵山への、返事は如何仕つた。

彌陀　サ、その返事は

りく　なんで色よいお請けのマア

藤内　ならねえ譯は三平おりく、二人は不義に相違ござらぬ。證據は左のこの小指。

ト以前の指を出す。

初世尾上松助の幸崎亡靈

鐵山　さては指まで切つたるからは、三平、わりやア不義密通。

藤內　殊に武將へ差上げる、淸めに淸むる土器の、その手作りのこの屋敷を、血に穢したる云ひ譯あるか。

彌陀　如何にも云ひ譯ござりまする。あなたの目通り勤めたる、腰元の幸崎こそ、この三平が實の姉。生れ素性の年月日時、巳の年揃ひし女の生血、指十本を十日に切る、その心願にて九本まで、切れども殘り一本が、成就いたさず鐵山さま、さぞ殘念と存じたから、姉と同腹同性の、實の弟のこの三平、もしやお役に立たうかと、切つたる指は左の小指。それでは揃ふ指の數。なんと御用に立ちませうがな。

鐵山　すりや、幸崎が事までも

彌陀　堺川原の辻堂にて

藤內　それを知つたか。

鐵山　ハテナア。

一角　この一角は最前より、樣子詳しく聞きぬるに、何か仔細のある樣子。それは格別、明日に、極まる武將の御土器、受取り歸るは今宵の九ツ、その刻限も早半時。十枚揃ひし御土器、渡しめされい、鐵山どの。

鐵山　サ、それは。

一角　この場の不足は私し事。身共は受取り歸らねば、役目の表が濟みませぬ。この內譯、承はりたい。

鐵山　渡しまする。

一角　ヤア。

鐵山　十枚數が不足せば、疑ひかゝりし腰元おりく、彼奴が首討ち相添へまする。それ受取つて御前よしなに……

弟藤內、女の首討て。

藤內　心得ました。

トおりくへかゝる。彌陀次郎、立廻つて、キツととめる。

彌陀　下郞がお願ひ

鐵山　なんと。

彌陀　不足いたした土器の、せめては女が心ゆかし。今一應の箱の內、數改める猶豫の程、何卒お使者のお情にて。

一角　こりや尤もなる其方が願ひ。最早受取る刻限ならん。たとへ命にかゝるとも、今一應の念晴らし、急いで數を改めい。

彌陀　すりや、お聞き濟み遊ばされて

りく　お箱の中の御土器、數を數へて十枚の、揃ふ時には
　この身に恙も
　ト思ひ入れあつて
　義政公のお爲となる、幸崎が敎へにて、首尾よう隱して
　持ちながら
藤内　さてこそ女が懷中に
　トかゝるな一角突き廻し、件の箱を手早く取つて、二
　人が中へ差出し
一角　急いで數を改めい。
彌陀　委細畏つてござりまする。
鐵山　不足いたさば女の一命。猶豫いたすな、弟藤内。
藤内　心得ました。女め、キリ〳〵數を改めろ。
　ト刀を拔いて立ちかゝる。
りく　改め見ても矢張り不足の
藤内　なんと。
一角　ア、コレ、急いで女、改めい。
りく　ハア。
　ト泣き落す、柱の時計、キリ〳〵と音する。
皆々　ありやもう子の刻。
彌陀　コレ、早う數へて

　ト箱の中より一枚出し
ソレ
　ト差出す。おりく取つて
りく　一枚。
　ト下に置く。時計の頭を打つ。これより誂への合ひ方。
彌陀　ソレ。
　ト差出す。また時計の二ツ目を打つ
二枚。
　ト彌陀次郎、取つて出す。時計の三ツ目を打つ。
三枚。
　ト彌陀次郎出す。四ツ目の時計。
四枚。
　ト始終このうち彌陀次郎取つて差出す。おりく、數に
合せ、下に置く、この度々に時計の音する。
九枚。
　ト數を合せ、あと無きゆゑ悲しき思ひ入れ。藤内、刀
を振り上げ、キツとなる。この時、薄ドロ〳〵になり、
井の内にて心火燃える。捨てたる白骨、おのれと井の
内より差し金にてめぐり來り、土器の箱の中へ落ちる。
彌陀次郎、キツと見て

彌陀　すりや、親人の、

ト取上げる。ドロ〳〵にてこの白骨、内曇りの土器となる。皆々キッと見て

皆々　ヤヽ、十枚の

一角　揃ひし賛の御土器

りく　不足なければ

一角　女、其方には科はない。

りく　エヽ、有り難い。

藤内　怪しき土器。

鐵山　その一枚は慥かに女が

りく　すりや懷中の

藤内　女め、覺悟。

ト切つてかゝる。彌陀次郎立廻り、この時ドロ〳〵になり、虚空より魂ひ飛び來り、鐵山が上に落ちると、心火燃える。鐵山さし俯向き、茫然となる。

一角　ハテ、心得ぬ鐵山の

藤内　この體は

ト鐵山、顏を上げる。女形の思ひ入れ。おりく見て

りく　ヤア、慥か其方は

トきつと見詰める。鐵山、おりくを捕へ、上手の井筒へ投げ込む。皆々見て

彌陀　ヤア〳〵、姫君を井の中へ

藤内　ナニ、姫君とは

ト立ちかゝるを鐵山、藤内が刀をもぎ取り、見事に藤内が首を打ち落す。

皆々　これは。

鐵山　氣遣ひいたすな、弟三平。

彌陀　ヤア、我れを弟と鐵山さまの

鐵山　イヤ、自らは姉の幸崎。

彌陀　さてはこの世に亡き人の

一角　假りに淺山鐵山が

鐵山　五體をかりてこの場の難儀。

彌陀　されども姫を井の中へ

鐵山　イヽヤ、あれこそ通路の抜け道。姫の身の上、氣遣ひない。

彌陀　エヽ、有り難き御しめし。父の敵も姉上の、最期も淺山鐵山ゆゑ。

一角　やがてめでたう敵討。

鐵山　修羅の妄執晴らしてたも。

彌陀　云ふにや及ぶ。さりながら、尋ね求むる雌龍の印。

鐵山　その御寶の在所は爰に。
ト時計の方を振り返る。ドロ〳〵烈しく、心火、時計の上に燃え上がり、鈴の音を出し、箱の蓋ひらき、以前の印落ちる。彌陀次郎、手早く取上げ
彌陀　こりや失ひし雌龍の印。
一角　手に入つたるか。
彌陀　エヽ、忝ない。
鐵山　最早この世に幸崎が、思ひ置く事さら〳〵ない。ただ髑髏はくはコレ
ト土器を取つて差出し
髑髏に殘る父の恨みと、この姉が
彌陀　敵は鐵山、討ちおほせ、修羅の迷ひを晴らさせ申さん。幸ひ爰に彌陀の尊像、我が實名も彌陀次郎、この御佛の
ト懷中より尊像を出し、厨子の蓋を開く。大ドロ〳〵にて魂ひ飛び去る。鐵山が持ちたる土器、また元の髑髏となり、放心する。
一角　ヤヽヽヽ、又ぞろ淺山鐵山が
彌陀　氣絶なしたか。
ト思ひ入れ。この時、彌太平窺ひゐて

彌太　三平、捕つた。
トかゝるを、立廻りにて當てる、この物音に鐵山心附き、起き上がつて
鐵山　ヤヽヽヽ、今の女の行くへはいづく。
ト藤内の首を見て
ヤア、弟が死骸。こりや何奴が。
トきつとなり、無念の思ひ入れ。
一角　こりや鐵山どの、心が附いたか。
鐵山　貴殿は一角。さては身共は
一角　藤内どのを思はぬお手討ち。
鐵山　アノ、某が
彌陀　これも死靈の
鐵山　エヽ。
ト彌陀次郎へ切り附ける。ドロ〳〵になり、心火燃えて、鐵山苦しむ。彌太平、多々平、窺ひゐて
兩人　うぬを
ト皆々へかゝるを、一角、見事に切つて捨てる。鐵山、この太刀音に心附き、思ひ入れあつて
鐵山　すりや、土器と見えたるも
一角
彌陀　髑髏の不思議。

鐵山　ヤ、。

ト又ぞろ、ドロ〳〵にて、心火立ちのぼる。三人キッと見て

三人　ハテナア。

ト虚空を見上げる。魂ひ飛び去る。この見得よろしく、

ひやうし　幕

彩入御伽草（終り）

東山殿風流染帷子
模様阿國歌舞伎風　　江戸仕立御注文榮

しんしも強き御贔屓に天竺徳兵衛が洗濯糊親の讓りの妖術も雨の降る夜に柳ヶ浦相合傘の濡れた同士彼の元信と遠山が今も噂に夕化粧紅葉袋も湯歸りの累が色に與右衛門と寫す姿の水かゞみ嫉妬の蛇忽ちに切つても切れぬ錆鎌は血の蓮に水子の泣聲皆御存じの夏仕入れ水中の早替りを新工風に取仕組たるお誂らへ

涼しさの
術讓られし扇かな　　尾上松緑一代噺

阿國御前化粧鏡

合巻八冊

この狂言の初演者尾上榮三郎は、得意な藝として江戸でも數回繰り返し、京阪その他地方でも隨分度々上演した。表のカタりは彼れが三世菊五郎になつてから、天保九年六月の中村座で上演した時のもので、既に五六度目である。この時の一番目は本篇のお國御前を使はず、普通の天竺德兵衛へ四郎次郎と傾城遠山の件を增補したものであつた。二番目は本篇の湯あがり累を其まゝである。

左の凸版は天保三年にこの狂言をやつた時の櫓下番附の一部

本文には初演の繪本番附を挿入した外、錦繪は初演のものやら再演の折やら、取交ぜて挿入して置いた。說明は個々につけてある。

阿國御前化粧鏡

第一番目三建目

佐々木館の場
伊吹山の場

役名――佐々木家老、小栗宗丹實ハ石見太郎左衞門。駿河前司久國。狩野四郎次郎元信。犬上團八。石塚鬼藤太。赤村郡藏。腰元春野實ハ銀杏の前。腰元、夏野。田舍娘、お玉實ハ勝元妻遠山。那迦犀那尊者實ハ竹杖外道。天竺德兵衞實ハ赤松次郎政則。

本舞臺、三間の間、中足の御殿、向う銀襖、四ツ目結ひの紋ちらし。前面、上下綟子の障子。左右の見切り、松の立ち樹、よき所に吳竹の一むらあり。爰に夏野、振り袖、腰元の形にて、三方へ錫の瓶子を載せ、持つてゐる。春野、留め袖の腰元の形にて、三方に供餅を載せ、これを持ち、此方に鬼藤太、郡藏、麻上下、大小にて、めい／＼島臺を持つて立ちかゝりゐる。管絃にて幕明く。

夏野　今日しも若君藤若さま、當お館の氏神にて、多賀明神さまへのお宮詣で。
春野　それゆゑ祝ふ神酒供餅、氏神樣へ捧げ物。
鬼藤　疾にもかゝる御祝儀の、有るべき筈を御父君、賴賢公の逝去といひ
郡藏　御臺所も打續き、産後に過去り給ひしゆゑ、御忌明けの今日の日を、直ぐにめでたく宮參り。
鬼藤　即ち壽長久を、祝すしるしのこの島臺。
郡藏　執權、小栗宗丹どのへ
兩人　この由、取次ぎ下されい。

ト　この時、奧にて

宗丹　オヽ、委細これにて聞取り申した。

ト　管絃になり、宗丹、白髮、法眼袴にて出る。これにて皆々座につく。

有爲轉變とはいひながら、御主人佐々木賴賢公、まつた御臺所にも、思ひ設けぬ御逝去の後、一國に暫しのうちも、主なくては亂の基と、日を以て月にかへ、御忌明けを待つたる今日、若君にも氏神へ、宮詣で遊ばされ、御

機嫌ようスヤ〳〵と、身共が膝にて只今御歸館。各々方の獻上物、後方御覽に入れるでござらう。
兩人　萬事よろしう頼み入ります。
　ト この時、向うにて
呼び　駿河の前司久國さまの御入り。
　ト 呼ぶ。
宗丹　ナニ、久國さまの
皆々　お入りとや。
　ト 太鼓、謠になり、向うより久國、長上下、大小、燕手にて出て來り、花道にてとまり
久國　今日嫡子豐若どの、多賀明神へ初めての、宮詣でと聞きしゆゑ、一家のちなみ前司久國、祝儀を述べんと、わざ〳〵これへ。
宗丹　誠に、御一家の睦み捨て給はず、よくぞや御光駕。
皆々　まづ〳〵これへ。
久國　罷り通るであらう。
　ト 太鼓、謠の切れにて、舞臺へ來り、二重へ上がる。
して、豐若には、はや下向おしやつたか。
宗丹　御意の通り、最早御下向。
久國　吉凶禍福は是非ないもの。大名の腹に宿りながら、三日も親に添ふ事か、藁の上から死別れ、さりとは笑止な豐若が身の上。これも何ぞの罰でがなあらう。
　ト 宗丹、女形、思ひ入れ。
宗丹　その儀について、久國さまへ御願ひ。何卒當家の跡目相續、異議なく嫡子豐若へ、仰せつけられ下さるやう、室町御所の御執成し、これのみ臣が一つの願ひ。
夏野　數なりませぬ私しどもゝ、お館に勤めますれば、朝夕ともにそれが氣がかり。
春野　どうぞ首尾よう御家督を
鬼藤　豐若へ賜はるやう
郡藏　家中の者ども一統に
宗丹　偏へに願ひ
皆々　奉ります。
久國　イヽヤ、その取次はエヽ、なるまい。七歲未滿といふ内にも、まだ生けうやら死なうやら、何とも知れぬ水子の豐若。治に居て亂を忘れず、今にも叛逆謀叛とあらば、士卒を指揮する一國の主。赤子で事が濟まうと思ふか。そんな願ひは罷りならぬワ。
宗丹　サア、御意ではござりますれど、そこが公、寛仁の計らひ。

久國　ヤア、勸進でも勸化でも、そんな願ひが叶ふものかえ、

夏野　すりや、跡目のお願ひは

ト思ひ入れ。宗丹、此うち思ひ入れあつて

宗丹　誠に、此方の願ひに紛れ、お宮詣での御祝儀と、御入來の久國さま……ハ、、、、、何卒奥にて御酒一獻、きこし召し下さりませう。

久國　イカサマ、一家のちなみと罷り越し、祝儀の杯、取上げぬも何とやら。然らば奥にて、宗丹、一獻、

宗丹　有り難う存じます。ソレ、腰元はじめ各々にも、久國さまを御もてなし。

皆々　畏まりました。

宗丹　左樣ござらば、久國さま。

久國　案内しやれ。

ト又た管絃になり、久國、奥へ入る。皆々、下座へ入る。宗丹殘り、ウムヽと思ひ入れ。てんつゝになり、向うより團八、麻上下、大小にて、跡より遠山、田舍女の拵らへ、藁苞を脊負ひ出て來り

遠山　申し、お侍ひ樣、譯も云はずに來い〳〵と、こりや何の事でござりますえ。

團八　ハテ、何も其やうに怖がる事はない、御家老に逢へば直ぐに解る事。サア、身共と一緒に、來やれ〳〵。

ト矢張りてんつゝにて、舞臺へ來り

これは〳〵宗丹どの、これにござるか。今日やう〳〵、三井寺の門前で、一疋捕へて連れて參つた……サア、そこへ出やれ〳〵。

ト遠山が手を持つて引出す。遠山、宗丹を見てオッオッと

遠山　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

ト宗丹、遠山を見て

宗丹　すりや、其方が、お乳をあげる奉公人か。

遠山　イエ〳〵、わたしは奉公人ぢやござりませぬ。久しい願ひで播州から、祇園會を見物ながら、竹生島のお開帳は、六十一年目でなければ無いとの事ゆゑ、お參り申しに出ました者。ハイ〳〵、どうぞ直ぐに、お歸しなされて下さりませ。

團八　コレサ〳〵、さりとは惡い料簡だ。なんの、播州の田舍に住んで、汐風に吹かれてゐやうより、お屋敷に奉公すれば、べんべら物を引ッ張つて、旨い物は喰ひ次第。宗丹どのゝ目にとまれば、また來年給金の、二分や三分

は上がるといふもの。
ト遠山、思ひ入れ。
遠山　ムウ、そんなら爰は佐々木のお家。あなたは小栗宗丹さまかえ。
宗丹　如何にも身共は小栗宗丹。そちや播州の女子とな。
遠山　ハイ……成る程、思うて見れば、痩世帯しようより、いつそ今日から……御奉公いたしませう。
團八　コレ、口入れに二分出るぞよ。
宗丹　身が名を聞いて早速に、奉公いたす賤の女、爪はづれといひ器量といひ……女、請け狀いたして遣はさう。
ト合ひ方になり、有りあふ硯箱を引寄せ、持つたる扇子へ江口の繪を描いて
極めの一札。
ト遠山これを受取り見て
遠山　西行法師に江口の遊女。アノこれが、請け狀とわえ。
宗丹　身共が妾に抱へたい。
遠山　エ。
團八　コレサ、宗丹どの、よい年をして、あの女を
宗丹　サア、悟り切つたる道心にも、迷ふは煩惱、ましてや凡夫。

遠山　ほんに、嘘にも草深い、田舍育ちのわたしをば、思うて下さりました扇子の請け狀。とつくり思案いたした上。
宗丹　返事いたすか。
遠山　宗丹さま……後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、遠山、苞を抱へ、下座へ入る。
團八　宗丹どの、貴殿は、どういふ料簡でござる。
宗丹　仔細といふはあの女、宗丹と聞き忽ちに、奉公するは合點がゆかぬ。それゆゑ彼奴を、糺して身元を
團八　慥か播州者とやら。
宗丹　もしや赤松
ト團八と顏見合せて思ひ入れ。
團八　それについて宗丹どの。かねての企て通り、頼賢夫婦を、おツ片附けてしまつた上からは
宗丹　コレ……成就の上は、かねて埋めし一品を、掘り出して、湖水へざんぶり。
ト團八呑みこみ、柴垣の下を鐺にて掘り、調伏の箱を出し
團八　誠に、名手と呼ばれし宗丹どのゝ、丹誠こめて描かれし、頼賢夫婦がこの人形へ、岩倉の夜叉丸が、祕密の

奇特忽ち現はれ、二人の主人はコロリバツタリ、殘るは水子のあの豐若。

宗丹　捻り殺すは易けれども、只氣ぶさいなは狩野の元信。殊に將軍義政公、北山金閣に習ひ、東山に銀閣寺を造營、天井妻戸の繪は、卽ち元信、某承れば、何卒一人功を立てんと、四郎次郎を自滅させる、その工風もして置いたれば、しまうて取れば諸事萬事、宗丹が心のまま。

團八　して、元信を自滅の工風は

宗丹　コリヤ。

ト囁く。

團八　流石は老功、出來ましたわえ。

ト向うにて

呼び　四郎次郎元信出仕。

ト呼ぶ。

宗丹　犬上團八、その一品を、ちつとも早く

團八　心得ました。

宗丹　ぬかり召さるな。

ト小太鼓の樂になり、宗丹、奥へ入る。團八、頰冠りして、箱を持ち、花道へかゝると、向うより元信、上下衣裳にて、三方へ系圖を載せ持ち出で、團八に目を附け、ツカ〳〵と押し來り、ちよつと立廻りあつて、團八を當てる。團八「ウン」と箱を取落す。元信、取上げて

元信　ムウ、白き箱を、黃なる絲にて結ひしは木剋土。

ト思ひ入れあつて中より人形を出し

こりや御主人賴賢公御夫婦を、呪詛なせしこの願書。石見太郎左衞門と記せしは

ト思ひ入れ。この時、團八、心附き「それを」とかゝるを支へて

いま曲者が所持の一品、元信早速取り得てござるが、犬上氏には覺えがござつて、それゆゑお手を支へらるゝか。

團八　ヤ。

元信　中はいぶせき呪詛調伏……よも知つたとは申されまい。

團八　成る程、身共は存ぜぬ品……ではござれども、ちよつと拜見。

ト又かゝるを元信、腕首を捕へて

元信　イヤ、御存じなくば御披見御無用。但し、覺えがござつてか。

團八　サア。

元信　知らずばそれまで。無作法千萬。

ト團八を突きはなし

こりや元信が、納め置きます。

ト懐中する。團八、思ひ入れ。

團八　然らばどうも、勝手次第サ。

春野　團八さま、これにお出でなされますか。久國さまが

ト空うそぶく。合ひ方になり、奥より春野、出て來り

何やらあなたに

團八　ナニ、久國さまが、身共に用とな。左樣ござらば元信どの。

元信　團八どの。

ト團八、ちよつと元信の懐へ思ひ入れあつて

團八　これにゆるりとござらつしやい。

ト管絃になり、團八、心を殘して下座へ入る。あと合ひ方。

元信　元信この程、お家の系圖を守護しまゐらせ、石山寺の觀世音へ、若君安寧長久に、御成長を祈りの爲、三七日の通夜のうち、ついぞ館に見馴れぬ女、そちや今參りの腰元か。

春野　左樣にござります。この程若君樣へ、お宮仕へ致しました、春野と申す不束者、お見知りなされて下さりませ。イヤ申し、元信さま、いま奥にて承りますれば、御臺樣のお妹御、銀杏の前さま、東よりお上りあつて、まだあなたにはお目見得なされぬとの事ながら、いつ垣間見遊ばしてや、それは〳〵御執心。今にも元信さまお歸りあらば、是非とも女夫におなり遊ばすと、お噂でござりましたぞえ。

元信　ナニ、アノ、銀杏の前さまが

春野　アイナア。

元信　それは一興。元信、御別館に御座ありし、お湯殿お國御前さまのお心に、道ならずも從ひしは、かたましきお心より、隱し置かれしお家の系圖、淺ちなきやう取り得んと、忠義の計略。何しに陪臣の身を以て、主君の片割れ、銀杏の前さまと……そりやどこまでも、お斷わり申しあげねばならぬ事ぢや。

春野　イエ〳〵、あのやうに思ひこんでお出で遊ばすものぢやもの、どうして其やうな事では、御得心がござりますまいわいなア。

元信　ぢやと申して勿體ない。殊には朋輩の思惑、慾に耽

りし道知らずと、うしろ指さゝるゝも殘念。ハテ、どうぞお斷わり申す仕樣が

春野　モシ〳〵、なんと、斯うなされてはどうでござりませう。今のうちに離れなりと、女房にお持ちなされて、下地から云ひ號けぢやと仰しやつたら、なんぼ主でも、ぬしある身に、無理に女夫にならうとも

元信　したり、そりや何よりの思ひつき。それでは是非とも仰せあるまい……とは云ひながら早速に

ト春野を見て

なんと、物は相談、そもじ、身共が云ひ號けの、女房になつては下さるまいか。

春野　サア、差當るあなたの御難儀、そりやモウ、どうなりでござりまするが、せう事なしの當座遁がれ、末も結ばぬ緣定めは

元信　イヤ〳〵、そもじさへ得心なら、某に異心は無い。盡未來まで變らぬ夫婦。

春野　そりやアノ、御眞實でござりますかえ。

元信　なんの僞はり、書筆を取らぬ法もあれ。

春野　そんなら今から

ト思ひ入れ。

元信　女房ども。

春野　オヽ、嬉し。

ト抱きつく。此うち下座より鬼藤太、郡藏、出かけ、窺ひゐて、この時、ツカ〳〵と兩人を捕へて

兩人　元信、お立ちやれ。

ト兩方より手を取る。元信、其まゝ兩人を投げのけ

元信　こりや何ゆゑ某を

鬼藤　御殿に於て不義の科。

郡藏　委細は後で立聞いたワ。

兩人　但しは不義でござらぬか。

元信　サア。

トつかへる。

兩人　なんと云ひ譯はあるまいがな。

トこの時、奧にて

宗丹　兩人ともに、扣へ召されい。

元信　ヤア、あの聲は

兩人　宗丹どの。

ト襖の内にて

宗丹　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

ト管絃になり、宗丹、蕗の臺を持ち、夏野・長柄の銚

子を持つて出てくる。皆々、思ひ入れ。
皆々　これは。
宗丹　元信どの、貴殿お湯殿お國御前の、取り隱されしお家の系圖、心ならずも從ひ參らせ、無事に取り得て歸られし段、莫大の功とあつて、その節御臺の妹君、銀杏の前を宿の妻に、下し賜はるべきところ、御主君方の急變ゆゑ、これまで延引。今日若君、お宮詣でのおめでたに、取交ぜての御祝言。
鬼藤　誠にこれが、槍先の功名とやら。
郡藏　さりとは、お羨やましい儀でござる。
元信　こは冥加なき仰せではござりますれど、銀杏の前さまと御緣を結びます儀は、餘りと申せば身の恐れ、御辭退申しあげます。
宗丹　ア、イヤ〳〵、なんぼ左樣申されても、御臺樣の御遺言、殊には貴殿、銀杏の前さまと、はや語らひ召されたではござらぬか。
元信　ナニ、アノ拙者が、銀杏の前さまと
夏野　サア、銀杏の前さま、まづ〳〵あれへ。
ト合ひ方になり、春野を上へ直す。元信、悄りして
元信　すりや、腰元の春野といひしは
宗丹　御臺所の妹君
夏野　銀杏の前さまでござります。
ト元信「エヽ」と當惑の思ひ入れ。
鬼藤　さうとは存ぜず我れ〳〵ども
郡藏　只今の無禮の段
兩人　眞平御免下さりませう。
春野　なう元信、不束な自らへ、畫筆取らぬ法もあれ、懇未來まで變らぬ女夫と云やつたからは、否はあるまい、嬉しいぞや。
元信　誠に、思ひがけないと申さうか。何とも云はれぬこの場の仕儀。露存ぜぬとはいひながら
宗丹　辭退召さると、主命にも背くの道理。
元信　ではござらうが、お請けの儀は
兩人　もどかつしやれば不義の科人。
元信　サア、それは
春野　女夫になつてたもるかや。
元信　サア
夏野　畫筆の誓ひがござります。
元信　サア
皆々　サア〳〵〳〵

ト元信思ひ入れあつて

元信　斯くまで思し寄せられし儀……元信、お請け仕つてござります。

ト平伏する。

宗丹　すりや、得心召されしとな。それで身共も安堵いたした。

夏野　さぞあなたにも、お嬉しうござりませう。

宗丹　サヽ、お土器を取上げあつて、元信どのへ

トこれより下座にて、めでたき謠になり、此うち杯ごとあつて

めでたい〳〵。幼主で立てぬ佐々木のお家、銀杏の前さまと、御婚禮濟みたる上は、今日よりしては、家督は狩野元信どの。

東藤　我れ〳〵が爲にも御主君

皆々　恐悦至極に存じます。

ト奥にて

久國　佐々木の家督定まる上は、お預かりの日月の印、久國、内見いたすであらう。

ト管絃になり、久國出る。

元信　すりや、久國さまが

久國　管領山名宗全が内意を受け、佐々木の家督相續の砌り、先例に任せ、預かるところの日月の印、内見いたせと、申し越されし前司久國。サア、疾く〳〵寶をこれへと申しやれ。

宗丹　委細畏まつてござります……誰れかある、日月の印、急いでこれへ。

團八　心得てござる。

ト管絃になり、團八、三方へ印の箱を載せ、持つて出て來り、久國が前に置いて扣へる。

宗丹　足利の御先祖尊氏公より、代々當家に預かるところの、日月の印、イザ、お改め下さりませう。

久國　ドレ。

ト箱の蓋を取つて改める。二つの印無きゆゑ思ひ入れ。

鹿を指して馬と云ひし趙高、鷺を烏はまだしもの事。宗丹、こりや其方の權を示さんと、この久國を馬鹿にするのか。

宗丹　アヽ、イヤ〳〵、全く以て。して、日月の印が、どうぞ致しましたか。

久國　どうぞどころか、眼を明いて見さつしやれ。

ト投げ出す。元信、宗丹寄つて中を改め

元信　ヤ、、、、こりや大切な日月の御判
宗丹　紛失なしたか。
元宗　ホ、ホイ。
久國　紛失なせば家は斷絶、申し譯には家督の元信、切腹
せずば相成るまい。
春野　エ、。
元信　すりや某に
ト春野「モシ」と取附くを顏で押へ
承知いたしてござります。
ト宗丹へ思ひ入れ。此うち宗丹こなしあつて
宗丹　守り嚴しき日月の印、外より忍ぶ盜賊の、奪ひ取る
べきいはれなし。察するところ犬上團八
團八　コレサ〳〵、宗丹どの、何を身共が知るもので
宗丹　知らぬとは、云はさぬ〳〵。最前までも別條なき、
御判は汝が持參のうち、盜み取つたであらうがな。
團八　これは迷惑、神以て、親の頭に松三本、一向身共は
存ぜぬ事。
宗丹　一應では白狀せまい。ソレ、兩人、繩打ち召されい。
兩人　ハツ。
ト立ちかゝる。

團八　ア、コレ滅多な
ト此方へ逃げるを宗丹、裾をかい取つて押へ、下緒に
て縛り、兩人へ渡す。
元信　イヤ、とんだ目にあふものだ。
元信　ハツ、久國さまへお願ひ。全く元信、身命を惜しむ
にはあらねども、とくと寶を詮議なし、その上にては覺
悟の切腹、暫しの御宥免。
久國　イカサマ、夕立雲の出たやうに、降つて湧いた俄の
切腹、暫しの宥免願ふも尤も。暮れ六ツまでに有無の返
答、一家のよしみに待つてくれうワ。
元信　すりや、暮れ六ツまでに
宗丹　寶の行くへ。
春野　六ツというても今一時。
久國　泣くか笑ふか。
元信　生死二つを
宗丹　久國さまには奧の間で
久國　元信、返事を待つてゐるぞよ。
鬼郡　立たう。
ト唄になり、久國先に春野、宗丹、夏野、奧へ入る。
鬼藤太、郡藏、團八を引立て、下座へ入る。元信殘り、

元信　思ひ入れあつて

合點のゆかぬ宗丹が今日の計らひ。銀閣寺造營も、おのれ一人が功になさんと、我れをば拒む日頃に引かへ、銀杏の前と退引きさせず、婚姻を取結びしは、もし預かりの日月の印、失せしを知つて若君の、お命助けん其ために、我れを計りし忠義の手段か。何はともあれ暮れ六ツまでに、寶出でねばこの身は切腹、命は露塵、お主の爲、惜しからねども宗丹の、善か惡かの心の底、ハテ、尋ね知りたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。此うち遠山、下座より出かけ、これを聞いてゐる。この時、兩人顏見合せ、元信ハッと思ひ入れ。遠山、何氣なき體にて、莨盆を持つて、元信が前に置き、下手へ下がる。

そちや田舍の女子さうなが、何用あつてこれへ參つた。

遠山　サア、アノ、わたしは……オ、それ／＼、慥か若君樣の、お乳でござりますわいな。

元信　ナニ、慥か若君樣のお乳……ムウ、お乳であつたなア……コリヤ／＼、無心ながら、茶を一つ貰ひたい。

遠山　ハイ／＼、畏まりました。

ト此方へ來る。元信、後より拔討ちに切りかけるを、遠山、身をかはし、附入り、ヂッと留めて

こりや何ゆゑに。

元信　お家の大事、聞いたる女。

ト振りほどいて又切りかける。遠山、以前の苞にてシヤンと受けとめる、此はずみに苞の中よりパラリと一軸出る。元信、上よりこれを見て

この一軸は

遠山　サア、今日引越しの奉公人、おはもじながら、わたしがお土産。

ト元信、一軸を取上げ見て

元信　こりや義政公が御祕藏ある、土佐光信が鯉の一軸。さては入込む其許は

遠山　イエ、矢ッ張り賤の女、田舍の女。

元信　ハテナア。

ト思ひ入れ。合ひ方。下座より夏野出て

夏野　元信さまへ申しあげます。暮れというても間のない事ゆゑ、銀杏の前さまの殊ないお案じ。もし少しでもお心當りがござりまするか、問うて見いとのわたしがお使ひ。

元信　成る程／＼、女心に案じは尤も、さりながら、某

思ふ仔細もあれば、さのみ氣遣ふ事はない。イヤナニ、夏野、某、名古屋山三方へ、お國御前へ隨ひし、惰弱の入り譯、お家の事、認め置きしこの密書。

ト手紙を出し

心知つたる其方へ、頼みの使ひ、元春へ、なんと屆けてはくれまいか。

夏野　そりやモウ、わたしに叶うたお使ひ、隨分ともに、心得ました。

ト手紙を受取る。

元信　これにつけても、當途なき寶の行くへ。

遠山　そこが膝とも談合とやら、お役に立たずと打明けて、お話しあらば、又よい思案も

元信　そんなら奧で、とつくり仔細を

夏野　わたしは直ぐに元春さまへ。

元信　ちつとも早う

夏野　心得ました。

遠山　元信さま。

元信　賤の女、奧へ。

遠山　マア、お出でなされませ。

ト唄になり、元信先に遠山、一軸を抱へて奧へ入る。

夏野殘つて、手紙を啣へ、帶をゆいあげ、向うへ行かうとする。此うち團八、ツカ／＼と出て、この手紙を見附け、其まゝ手をかける。夏野、振り拂つて、團八を見て

夏野　ヤア、お前は犬上團八さま、こりや縛しめを

團八　べら坊め、繩をかけるもかけられたも、ありやア曰くのある事だ。マア、その譯よりは元信から、山三へ送るその手紙。

ト又かゝるを突き廻し

夏野　イエ、こりやわたしが里へ暑さの見舞ひ。そんな手紙ぢやござんせぬ。

團八　そんなら猶さら中の文言

夏野　ならぬわいなア。

ト行かうとする。團八、引留める。序の舞になり、ちよつと立廻りあつて、トゞ夏野、有あふ莨盆の火入を打ちつける。これにて團八、ダヂ／＼となる。此うち夏野、花道へかゝる。團八、見附けて、兩人「ソレ」と早三重になり、夏野が行く跡を團八、追ひかけて向うへ入る。管絃になり、奧より久國、下座より宗丹、窺ひ出て來り

宗丹　久國さま。
久國　小栗宗丹。
宗丹　奥にて申しあげたる通り、元信、自滅の上からは
久國　義政公より嚴命ある、銀閣寺の天井妻戸、描くは宗
丹一人の功し。
宗丹　是非もない。
久國　して、隱し置く日の印は。
宗丹　即ちこれに。
ト錦の袱紗に包みし日の印を出し
某奪ひ取らんずと、思ふに先立ち何者やら、月の御判
は疾に紛失。この御判は久國さまへお預け申し、その上
にて月の御判の在所も知れ、二品揃ひしその時は、佐々
木の家は宗丹へ
久國　その儀も久國、承知いたした。
宗丹　然らば日の印、イザ
ト久國へ渡す。
久國　しつかりと預かつた。
ト日の印を懷中する。この時、暮れ六ツの時計鳴る。
宗丹　ありやモウ暮れ六ツ。
久國　元信、返事は、トヾ、どうだ。

ト奥にて
元信　その御返答、それへ參つて、申しあげるでござりま
せう。
ト管絃になり、元信、白無垢、水上下の形にて出てく
る。宗丹見て、ニッコリと思ひ入れ。久國、元信の形
を見て
久國　寶の行くへ知れぬゆゑ、覺悟の切腹、よい態〳〵。
繋がるよしみ某が、介錯は致してくれう。
ト宗丹、愁ひの思ひ入れ。
宗丹　天に不時の風雨あり、人に不時の憂ひあり。銀杏の
前が其許を、戀ひ慕はるゝを便なく思ひ、まつた若君の
跡目叶はず、彼これ以て宗丹が、お家のお爲と存じた
が、元信どのゝ身の上に、かゝる珍事は寶の紛失、それ
とも知らず媒介した、老が命で事濟まば、貴殿に代つて
切腹なし、せめて麁忽の云ひ譯せんに、何を申すも表沙
汰、悔んで返らぬ某が、心の内の本意なさを、推量して
下されよ。
ト元信、思ひ入れあつて
元信　宗丹どの、こは何事。計らず某切腹も、こりやコレ
定まる過去の宿業とは云ひながら豐若君の疑ひに代る

は身の本望。何卒お家の再興を、これのみ頼み入ります。

宗丹　そりや何がさて某が、天地の間を駈けめぐり、千辛萬苦いたしても、若君再び世に立て申さん。その儀は氣遣ひ召さるゝな。

久國　ヤア、何べん〳〵と悔み事、キリ〳〵腹を切つてしまへ。

元信　ナニサマ、猶豫は無禮の至り……誰そあるか。用意の三方。

ト下座にて

遠銀　畏まりました。

ト合ひ方になり、銀杏の前、三方へ最前遠山が持ちし一軸を載せ、持ち出で、元信が前に直す、遠山、三方へ九寸五分を載せ、持ち出で、宗丹が前に直し、下手へ下がる。この短刀に何やら卷いてある。宗丹、見て、恟りして

宗丹　ア、、コリヤ〳〵、身共へ何ゆゑ九寸五分。

遠山　サア、科はその身に覺えがあらう。

宗丹　ヤ、、なんと申す。

ト久國、元信が三方の一軸を見て

久國　見れば元信へ据ゑた三方、九寸五分と思ひの外

遠山　それこそ武將義政公より、銀閣寺の襖に描く、手本に賜はる土佐光信が、昆明池の鯉魚の一軸。

久國　すりや、これが

宗丹　ヤイ〳〵、切腹なすはあの元信、鯉魚の手本は身共であらう。三方を取違へたか。うろたへた女め。

遠山　ヤア、うろたへ者とは、慮外であらう。

ト宗丹、思ひ入れ。

久國　して、慮外と申す、そちや何者。

遠山　管領細川修理之助勝元が、妻の遠山。

トしやんと見得。

久國　ヤ。

ト思ひ入れ。

遠山　皆、許して下さんせ。

ト鼓の入りし本調子の合ひ方になり、遠山、ズツと上へ廻り、床几へかゝる。

久國　その勝元の御内證が

宗丹　何ゆゑ殿の

久國　姿を變へしは。

遠山　成る程、合點のゆかぬは理り。夫勝元、心を附けて窺ふところ、佐々木の執權宗丹こそ、主人の家を亂すの

みか、天下を騒がす兆ある者。正しく彼れこそ赤松の家臣、石見太郎左衛門景純ならん。其方、賤の姿となり、實否を糺し來れよと、指圖に任せ入込む自ら。サア、それに違ひはあるまいがな。
宗丹　ハ、、、、、、思ひもよらぬ管領の疑念。何を以て某を、石見太郎左衛門景純とは。
元信　オヽ、卽ち證據は短刀に、巻き添へ置きしその願書。
宗丹　アノこれが
　ト九寸五分に巻きし願書を開き見し
この願書の人形に、願書石見太郎左衛門とあればとて、なんで宗丹を、景純と申すのだ。
遠山　イヤ、景純こそ宗丹と、書かねど割符はこの扇。
　ト以前の扇を出して
最前我れへ贈りし戯れ繪。とくと元信、人形に
元信　ハッ。
　ト銀杏の前、ツカ〳〵と行き、遠山が扇を受取り、元信、願書の人形を持つて、銀杏の前元信、この繪をよくよく引合せ見て
銀杏　墨繪彩色事變れど
元信　寸分違はぬ小栗が筆勢、餘人は知らず元信に、あらがひ立は無益であらう。
　ト宗丹つかへる。
遠山　サア、石見太郎左衛門景純と
三人　名乘つた〳〵。
宗丹　サア
皆々　サア〳〵〳〵
久國　かゝる證據のある上は、どうで遁がれぬ汝が命。本名名乘つて、繩にかゝれ。
宗丹　さては久國、其方まで
久國　汝と同心なしたるは、この日の印を騙かつて、某が手に入れん爲。
元信　ナニ、日の印は、あなたのお手に。
久國　如何にも。時日を移さず月の印、詮議仕出して持ち來らば、その時佐々木の再興は、一家のよしみに執成しくれう。それまで汝は風來者。この大切な一軸も、身共が一緒に預かり置く。
　ト鯉の一軸を取上げる。銀杏の前、元信、思ひ入れ。
元銀　そんなら鯉魚の一軸まで
遠山　大事を思うて久國どのが……ハテナア。
宗丹　ヤア、利慾の手段にやみ〳〵と、日の印奪ひ取られ

しか。もうこの上は包むに詮なし。如何にも我れこそ赤松の家臣、石見太郎左衛門景純なるワ。佐々木の家を横領なし、大望の足代と、頼賢調伏なせしも仇事。せめての腹癒せ。久國、觀念。

元信　ト切つてかゝる、久國、立廻りに呉竹を一本切つて落す。元信、手早くその竹を取つて
　主人の天罰、思ひ知つたか。
　ト宗丹が脇腹へ突き立てる。宗丹、尻居に撞となる。元信、竹槍を取り直す。

遠山　待つた元信。景純にまだ問ふ事あり。

宗丹　姓名明かしたその上で、問ふ事ありとは、ナ、何を。

遠山　その仔細は赤松滿祐、六代の武將義教公を弑せし砌り、奪ひ取つたる浪頭の御鏡、滿祐亡びしその後は、今に於て行くへ知れず。定めて景純、所持なしあらん。サア、速かに渡すまいか。

宗丹　如何にも、死ぬる今際まで、隱し持つたる浪頭の、この名鏡は某が、主人赤松政則どのへ、手渡しなして謀叛の旗揚げ、勸めん爲に肌身離さず、まツこの通り。
　ト鏡を出す。

皆々　さてこそ名鏡。

ト遠山、手早く引取る。宗丹「それを」と立ちあがるところを、元信、ポンと首を打ち落す。此うち久國、鏡へ手をかける、銀杏の前、隔てる。この途端に鏡を取落す。ドロ〳〵になり、返し板にて鏡、誂らへの蛙になる。銀杏の前、驚ろく。元信、血刀を拭ふ、遠山、元信は、この蛙を見て、キッと思ひ入れ。この途端よろしく、

ひやうし幕

本舞臺、三間の間、黒幕、左右に稻叢の庚申塚。ちよつとしたる飾りつけ、爰に元信、股立ち、懐に赤子を入れ、水上下の肩衣にて、しつかりと結へ、銀杏の前を圍ひ、拔刀にてキッと見得。鬼藤太、郡藏、以前の形、高股立ちにて、槍を構へ、兩人を取卷いてゐる。禪のツトメのツナギにて幕引返す。

銀杏　鬼藤太郡藏、こりや我れ〳〵を何とするのぢや。

鬼藤　何とするとは佐々木の家、沒落なした上からは、扶持離されの一家中、それゆゑ前司久國さまの

郡藏　仰せを受けて若君もろとも、系圖の一卷してやらんと、落ちゆく二人の跡追ひかけ、爰まで來るも主從の

鬼藤　縁の切れ目に豐若どの
郡藏　所持した系圖も我れ／＼へ
兩人　サア、尋常に渡して行け。
元信　ヤア、これまで祿を喰みながら、恩を仇なる人非人。如何にも系圖はこの通り
　ト一卷を出し
肌身に添へて大事の若君、守り奉る上からは、武勇は蜀の趙雲に、及ばずながら忠義の切尖。不忠の兩人、覺悟なせ。
兩人　こま言云はずと渡して行け。
元信　小癪な奴等の。
　ト系圖を銀杏の前へ渡し、これより兩人を相手に、いろ／＼タテ。誂らへの鳴り物。このタテのうち赤子泣く事。元信、これをいぶりながら、よろしくあつて、
　ト兩人を見事に切り倒す。此うち銀杏の前、稻叢に隱れゐて、この時出て
銀杏　元信どの、又もや追手の來ぬうちに
元信　片時も早う、この所を
銀杏　いづくの空へも
　ト元信、銀杏の前の手を引き

元信　ござれ。
　ト早三重になり、兩人、向うへ入る。大薩摩淨瑠璃になる。
〽それ釋尊のその昔、四千餘年と說かれたる、御法の聲は鷲の山、爰は伊吹の山深く、岩根枕に武者草鞋。
　ト山颪しにて、黑幕切つて落す。
本舞臺、向う一面の岩組み。日覆より蔦かつらのまとひし松の吊り枝、よき所に誂らへの岩組み。爰に外道、那迦犀那尊者の拵らへにて、鐵鉢を持ち、眼を閉ぢて呪文の見得。こなたに德兵衞、武者修行の拵らへにて、岩にもたれ、眠りゐる。前に口幕の蛙、這つてゐる。この模樣にて、岩組とも眞中へ押出し、程よくとまる。
コイアイになり、德兵衞、フツと目を覺まし、この蛙を見て、キツと思ひ入れ。
德兵　ハテ、心得ぬ。世渡る業の浪の上、辛くも異國に漂船なし、天竺震旦經めぐつて、歸朝の後に發明なし、命を同じ的とせば、武門に入るこそ身の譽れと、思ひ立つたる天竺德兵衞。良禽は木を選むの譬へ。良將求めん其

ために、斯く武者修行の旅のぼり。暫し疲れを憩はんと、岩を枕の夢覺めて、見れば蛙の足跡に、殘せし文字は住吉の、浦のみるめの親ならで、蟷螂車を遮り、精鋭海を塡るとは、及ばぬ武邊に入らんより、楫子船乘りで終れよと、我れへの示しか、いまはしい。イデ、切りすてゝ
ト刀を拔いて立ちかゝる。ドロ〳〵にて、タヂ〳〵となる。これにて蛙、また返し板にて前幕の鏡になり、直ぐに外道の手に入る。この時、初めて外道が姿、德兵衞の目にかゝる、思ひ入れあつて
外道　合點のゆかぬ今の蛙、消ゆると其まゝ髣髴たる、異人の樣は、何人なるか。
外道　如是我聞、獨來獨去。斯く山住せる我れこそは、釋尊教化の佛説を受け、三界流轉を行道なす、羅漢の一人、那迦犀那尊者なるわやい。
ト德兵衞、合點のゆかぬ思ひ入れ。
德兵　ウム　釋尊在世の昔より、凡そ二千餘年の今、齡無盡の尊者たりとも、命あるべきいはれやあらん。
ト外道ニツコリとして
外道　ホ、ウ、その疑ひ理りせり。さりながら、いかで凡夫の思ひ及ぶべき。佛智眼にて汝が素性、初めて逢へど照らし置いたり。語り聞かさんその上にて、疑念を散せよ、赤松政則。
ト德兵衞、思ひ入れ。
德兵　ナニ、我れを赤松政則とは。
外道　ホ、ウ、知るまい〳〵。汝が誠の父といふは、村上源氏の嫡流たる、赤松滿祐、嘉吉の亂れに滅亡の折柄、乳人に抱かれ、同國播州高砂の浦に養育せられ、人となつたる天竺德兵衞。心は强にありながら、民間に育ちしゆゑ、武門に仕へば事足れりと、僅かの望みは、小さい小さい。家臣石見が健氣にも、汝を勸め旗揚げと、企てありしが時到らず、無念の最期を便なく思ひ、即ち彼れが取隱せし、足利の重寶、浪頭のこの名鏡、我が術にて取り得置きしも、其方に與へて大望の、便りとせん爲ばかり。今より四海を掌握なす、大義を計れよ、大日丸政則。
ト鏡を德兵衞へ渡す。
德兵　さては今まで我が身の上、氏素性なき船頭の、悴と思ひ居たりしも、誠は播州白旗の城主、赤松滿祐が一子たる、大日丸政則であつたよなア。この名鏡は尊者の賜物、大望計る便りとなさん。

外道　よきかな政則。その上に、人をなづくる奇術の秘密、
教へ得させん。眼を定めて、これを見よ。
ト其まゝ拳を以て岩を打ち割る。ドロ〳〵にて岩角、
手の上にて蛙になり、飛び去る。徳兵衛、驚ろき、思
ひ入れあつて
徳兵　ハヽア、奇々妙々なるその妖術、政則思ふに、これ
全く
外道　師弟を固む其方に、何か包まん、尊者と見せしも我
が妖術、誠我れこそ大山に跨り、芥子に入つて姿を隱す、
竹杖外道といふ者なり。
徳兵　面白し〳〵、外道の法も我が身には、大望成就の綱
ならん。偏へに授與し下されよ。
外道　さあらば唱ふる、呪文を共々
徳兵　心得申した。
ト これよりノットになり、兩人思ひ入れ。
外道　南無たつたるま、ぶんだりぎやア。
徳兵　南無たつたるま、ぶんだりぎやア。
外道　ゑんす丸さんだ丸。
徳兵　ゑんす丸さんだ丸。
外道　しごしやうでん、あらいそ〳〵。

徳兵　しごしやうでん、あらいそ〳〵。
ト印を結んでキツと思ひ入れ。ドロ〳〵になり、日覆
より誂らへの白氣下りて、徳兵衛の懐へ入る。
外道　今ぞ奇術は思ひのまゝ。試みられよ、赤松政則。
徳兵　ドレ。
ト印を結ぶ。又ドロ〳〵にて、蛙の夥しく、雨車。
行ふ奇術の不思議は忽ち、雨につれたる蛙のもろ聲。
外道　その身に奇術の徳ある上、猶も力を添へんず者あり。
いま南朝の一族たる、恩地が悴、岩倉夜叉丸といふ惡僧
あり。彼れへも妖術授け置けば、共に計つて本意を達せ
よ。
徳兵　すりや、恩地が悴、岩倉の夜叉丸といふ惡僧とな。
飛龍の我れに猛虎の夜叉丸、心を合すものならば、やが
て天下を覆へさん。アラ〳〵、心よやなア。
外道　ホヽウ、天晴れ勇々しき一個の大將。
徳兵　これより直ぐに徒黨の結び。早おさらば。
ト此方へ來る。
外道　ヤレ待て政則。やがて天地に威を振はん、めでたき
門出を、祝ひ申さん。
ト鐵鉢を手に取上げる。大ドロ〳〵になり、鐵鉢の中

より水氣立ち登り、これと共に雲氣立つて、よろしき所にこの雲氣、鍍金の龍になり、逆のぼる。德兵衞、これをキッと見て、ニッコリと膝を叩く。外道、思ひ入れ。この途端、ひやうし。

幕

第一番目四建目　世繼瀨平内の場

役名＝腰元、夏野。醫者、生垣寒竹。犬上團八。世繼瀨平。お國御前。

本舞臺、三間の間、正面、淺黄幕、板松、爰に團八、前幕の形、夏野も同じ形にて、件の密書を奪ひ合ひゐる見得。禪のツトメにて幕明く。

ト兩人、立廻りあつて

夏野　こりや、こなさんは團八どの、爰まで追ひかけこの密書、渡せとあるとてウカ／＼と、滅多に渡してよいものか。道明けて通すまいか。

團八　默りやアがれ、どち女め、うぬが持つたる書翰こそ、四郎次郎元信より、名古屋山三へ送るところの密書であんべい。委細は正しく後室の、御所持あつたる佐々木家の、系圖をうま／＼取上げた、僞はり者の狩野元信。賴賢公の御後室、お國御前のお情を受けながら、本妻腹の豐若を、守り立てんとする道知らず。即ち元信が手蹟、お國御前へ御覽に入れ、餓鬼の在所も尋ね出す、證據の一通、渡すまいか。

夏野　さう知られし上からは、隱すに及ばぬ、この御狀、如何にも狩野の元信さま、お國御前の所持ありし、お家の系圖は御手に入り、お湯殿あがりの後室樣に、枕かはすも皆計略。若君の在所まで詳しく、記せしこの文言、お國御前のお目にかけては、元信さまのお身の上。ならう事なら、武士の情と此まゝに。

團八　イヤ、さうはならねえワ。後室樣は元信が、行くへ知れぬと聞き給ひ、日毎に重る御病體、都離れて久世の里、世繼瀨平が隱れ家に、病みほうけたる御有樣、さういふ所へその御狀を、御覽に入れて元信と、銀杏の前が事までも、御存じあつたら只事ぢやアあるまいワ。エヽ、女郎め、この團八にその狀渡せ。異議に及ぶと、命が無いぞ。

夏野　たとへ命に及べばとて、大切なるこの書翰、なんで

渡さう、そこ退いて通さんせ。

團八　さう吐かしやア命の瀬戸。女と云はさぬ犬上が、刀の引導。

ト拔いて切りつける、夏野、有あふ高札にてシヤンと受け

夏野　こりや、どうあつても女子一人を

團八　殺らしてしまふ。觀念ひろげ。

トまた切つて行く。立廻りよろしく、シヤンと見得。これより華やかなる鳴り物になり、團八、狀を取らんと夏野とタテあり、トヾ一刀切る。夏野「ウン」と苦しむ。此うちに懷中の密書を引ッたくり行かうとする。夏野、よろぼひながら寄るを、立廻りにて引附け、狀を咬へ、夏野を切り倒し、乘りかゝつて止めを刺す。時の鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、正面、障子の閉てきり、誂らへの門口、よき所に瀬平、親仁形、木綿やつしにて藥鑵を掛けし七輪をあふぎゐる見得。彈き流しの唄にて道具とまる。

ト矢張り右の唄にて、向うより寒竹、慈姑頭の醫者にて日傘をさし、供男、藥箱を持ち出て門口にて

寒竹　生垣寒竹お見舞ひ。

瀬平　これは寒竹老。お早いお見舞ひ。サヽ、これへ〱。

寒竹　お許しなさい。

ト上へ通り

コリヤ〱、角助、其方は、いま申しつけた藥種屋へ參り、書附け通りを持參しやれ……コレ、藥箱は置いて行かうぞ。

供男　ハイ〱、左樣なら、藥箱はこれへ置きます。

瀬平　オヽ、行つてござりませ。

ト藥箱を置いて、供男、向うへ入る。

寒竹　さて、嚴しい暑さでござりますが、定めてお客人には、この程の大暑ではどうござつても

瀬平　イヤモウ、後室樣の御病氣は、重るばかりで、御全快の樣子も見えませぬが、あれでも平癒いたさうかの。

寒竹　ハテ、そこは愚老が匙加減で、隨分御平癒はござらうが、どうでも餘程手間取りませうて。その上あなたの御病體は、合點のゆかぬブラ〱病ひ、何とも以て

瀬平　ハテ、それはその筈の事でござる。殿樣にお別れなされてより、後室樣には、コレ、高うは申されぬが、お

手廻りでお使ひなされた、若侍ひがござつたが、あなた樣のお情受け、その後その者は行くへなう、今以て便りの無いが、御病氣の根本。常から烈しきお心が、猶々以てこの程は、イヤモウ、お人使ひの悪いので、腰元婢女もそろ〳〵と、お暇願うて下がり居る。それゆゑ閑居のお住ひも出來ず、この瀬平が隠れ家、久世の里へお連れ申して、局中老お祐筆、傍お遣ひ、婢女奥家老、若黨中間門番まで、たつた一人のこの瀬平、イヤハヤ、困り果てまするて。

寒竹　イカサマ、それは貴公には、怪しからぬ御看病をなさるゝな。お一人でお手が廻らねば、なんなりと愚老もお手傳ひ申さう。

瀬平　それは忝なうござる。藥しかけて鏡臺の掃除、又は鐵漿壺の用意もして置かにやなりませぬ。男やもめが後室樣のお側仕へ。一向埒は明きませぬわいの。ハ、、ハ、、、

トこの時、障子の内にて

お國　コリヤ、瀬平は居やらぬか。寢間の障子を開いてたも。

ト唄になり、瀬平、差寄つて正面の障子を明ける。内に、結構なる蒲團を敷き、お國御前、病中の拵らへにて夜着にもたれゐる、寒竹、思ひ入れあつて

寒竹　これは後室樣には、今日の御顔色、いつに變りて、餘程うるはしう見受けましてござりまするが、御様子は如何お渡りなされますな。

お國　其方はこの程より、自らが病中を伺ふ、町醫の何某。早う見舞うてたもつたは、滿足に思ふ。苦しうない、ササ、近う寄りや。

寒竹　ハツ、然らば御容體を伺ひませう。御免下さりませう。

ト矢張り合ひ方にて、お國御前が寢間近く差寄り、脈を引く事あり

昨日よりは、餘程お脈體も直りましたる樣子に存じられます。この廻りに續きますれば、日を追つて御全快にござりませう。おめでたう存じますて。

お國　すりや、自らが病は、本腹いたすと云やるのか。

寒竹　左樣でござります。御本腹は今の間でござります。瀬平どの、お喜びなされい。おしつけ御全快でござりませう。

瀬平　それはおめでたう存じます。少々も御全快遊ばさる

れば、駕籠に召させまして、淀堤の風景、螢狩も又一しほ。
お園　アノ、川へ歩行いたしても大事なくば、サ、今から直ぐ行かうほどに、供廻り申しつけや。腰元どもゝ召しよせ、髪梳きあげて、サ、用意しや。鏡臺持ちや。手水取りや。
　ト立ちあがらうとする。
寒竹　ア、イヤ、それは餘り輕々しく存ぜられます。暑さの時分と申し、殊に夜風は至つて御身にあたります。瀬平どのには、餘り輕々しうお云やるから、ツイ只今のやうに、ハ、ヽ、ヽ、ヽ、こりや矢張り御寢所での、お慰みがよろしうござりませう。
瀬平　イカサマ、はや御本腹とお云やるゆゑ、喜び次手に、ウカ〳〵と、御遊山がよろしからうと存じ、螢狩の船遊山のと、未だ御病中の後室樣へ、私しとした事が、いかい痴言を、ハ、ヽ、ヽ、ヽ。こりや、なんぞこれにお出であつて、お慰みがありさうなものでござりまする。
寒竹　成る程、それがようござる。まだ〳〵御病中の後室樣、髪中とは申しながら、お風めしては、却つて御大切でござります。お枕許へ、其お衝立を差置くがよからう。
瀬平　左樣いたしませう。
　ト有あふ誂らへの衝立を取つて立てんとする。
お園　ア、コレ、瀬平、其やうな物置いてたもるな。一倍モヤ〳〵して心惡い。よしてたも。コレ、瀬平、歩行いたして身に障らば、サア、なんなりと、よい慰みは、どうぢやぞいの。
瀬平　成る程、これにて卽席のお慰みには、なんであらうな。淨瑠璃小唄は不得手なり、聲色物眞似は存ぜぬ上、落し話しも當世では、流行おくれのこの親仁。戰話しに致しませうか。
寒竹　これはしたり、女儀に戰話しとは、あまり心が附かぬ。こりや斯樣仕りませう。愚老が重い口から、お話しを申しあげませう。
瀬平　こりや一段とようござらう。定めし怖い話しかな。
寒竹　イヤ〳〵、ちと和らかな、色氣のあるお話しでござる。
瀬平　アノ、話しも色粉になりますかな。
寒竹　何を云はつしやります。
お園　こりや聞き事であらう。いま云やつた、色氣のある話しとはや。

寒竹　イヤ、別してもないお話しでござりまするが、愚老が在所は山城の、宇治郡でござりまするが、この間用事ござつて、參りましたる道にて、宿を取りましたるその合ひ宿に、若い男と若い女の二人連れ、幼ない男子を抱きまして、逗留いたして居りましたて。

ト お國御前は何心なく聞いてゐる。

瀨平　ハテ、道行めいたる趣向でござるの。して、それが面白い話しかな。

寒竹　ハテ、せわしない。マ、、お聞きなさい。その男は、ア、、何とやら申しました。オ、、それ〳〵、四郎次郎とやら云ふ者さうにござります、女の名は、なんでござつた。銀杏でなし、ア、、なんとか、……オ、、それ〳〵、銀杏々々、銀杏の前とやら申す女を連れまして、その宿に逗留いたして居りましたが、どうでもあれは色事と見えました。殊には若い身空で、小さいのを連れての道中、樂しみあつても、ア、、また苦しみもござりませうて。

ト この話しのうち、お國御前、四郎次郎といふ事より、銀杏の前と聞いて、だん〳〵と思ひ入れ。

お國　コリヤ〳〵、いま云やつた四郎次郎とは、その年頃は

寒竹　ヘイ、二十四五とも見受けました。

お國　して、銀杏の前といふ女、年頃は廿歳あまりか。

寒竹　左樣でござります。

お國　して、その者どもに子があつたか。

寒竹　ヘイ、お小さいのは、慥か男子。

お國　二人が仲の胤なるか。もしや尋ねる豐若なるか。何にしても、割符を合す其方の話し。もし四郎次郎、銀杏の前に極まらば、よう自らを僞はつて

ト きつと思ひ入れ、立ちあがつて、よろ〳〵して、胸苦しき思ひ入れにて咳入る。瀨平うろたへ

瀨平　ア、、また御病氣に障りましたか。エ、コレ、御大切な御身を

ト 駈けよつて脊中を撫り

エ、、この醫者どのは、役にも立たぬ事を云ひ出し、後室樣のお氣のむすぼれ。ア、、埒もない。其方へ退いてゐさつしやれ。エ、、馬鹿々々しい問はず語りを。サ、、歸らつしやれ〳〵。

ト 呟き、白湯を飲ませ、いろ〳〵と介抱する。

寒竹　ア、、これは不調法を申しました。併し、色氣のあるお話しが、よからうと存じまして、ツイ、四郎次郎と

やら、銀杏の前とやらの
瀬平　エヽ、まだ云はつしやる。サヽ、早く歸らつしやれ歸らつしやれ。
寒竹　歸ります〳〵。併し、家來が參るまで、暫らく御勝手を
トもぢ〳〵して藥箱を持ち、捨ぜりふ云ひながら行かうとする。
お國　コリヤ〳〵待て。その者どもが、住家はいづれぢや。
寒竹　ハイ、いづれでござりますやら、その儀はとくと
ト思ひ入れ。
瀬平　ハテ、何も云はつしやるな。
寒竹　ハイ〳〵、左樣なら、餘人にお聞きなされませ。
ト合ひ方になり、寒竹、思ひ入れあつて奧へ入る。お國御前、思ひ入れ。
お國　すりや、今の噂が、元信に極まらば、預け置いたる佐々木家の系圖の一卷、もし自らへ敵たふ輩の、手へ渡つては願ひの妨げ。ア、心がゝりな今の話し。
トよろ〳〵として立ちあがり、行かうとする。瀬平、縋つて
瀬平　これはしたり、この御有樣で、いづれへ御歩行叶ひませう。モシ、後室樣、お心をお鎭めなされませ。世間に似た名も似寄りも、まゝある習ひでござりますわいの。
トきつと云ふ。お國御前、胸苦しき思ひ入れにて、ホツとこなし。時の鐘、バタ〳〵にて、向うより團八、件の密書を持ち、走り出てくる。跡より黑具の捕り手二人、窺ひ附いて出て來り、團八は内へ入る。捕り手は門口に忍ぶ。
團八　世繼瀬平、在宿あるか。犬上團八、火急のお知らせ。お國御前の御身の大事、急ぎ取次ぎ頼み存ずる。
瀬平　ヤヽ、さうお云やるは犬上團八、幸ひ後室お國御前さまにも、これにお渡りなさるゝぞ。サヽ、御大事とは
お國　自らが大事とは、仔細ぞあらん。樣子を早う物語りや。サヽ、なんと。
團八　こは後室樣には、御病體と承はる。御身の大事と申すは四郎次郎元信へ、お預けありしお家の系圖、四郎次郎の計略にて、御身を僞はり奉ると、委細を記せしこの密書、持參の女を討つて捨て、直さまこれへ持參いたした。イザ
ト密書を差出す。瀬平よりお國御前へ持ち行く。手に

取上げ、よく〳〵見て

お國　ヤ、こりやコレ元信が手蹟、先の宛名は山三元春。
して、文言は。

ト開き見て

ナニ〳〵……飛札を以て申しあげ候ふ、然らば我れら、後室お國御前のお心に隨ひ候ふ事、道ならぬ者とお下げすみの程、お恥かしく存じ候ふ。この儀、佐々木の系圖、取隱され候ふ間、無事に取返し申さん爲の、僞はりに御座候ふ間、夢々惰弱なる者と思し召し下さるまじく候ふ、且又、若殿樣儀は御臺の妹銀杏の前と、我れら附添ひ、大切に守り立て候ふまゝ、跡目の儀、よろしく願ひあげ奉り候ふ。月日、山三どのへ、狩野元信。

ト讀み終り、思ひ入れあつて

すりや、身を騙かり、誠と思ひし眞實も、銀杏の前に見替へられ、系圖を奪はん僞はりであつたか。エヽ、口惜しい。

トきつと向うを見詰め、思ひ入れあつて

さては山三と云ひ合せ、豐若を守り立て、妾を此まゝ埋れ木に、朽ち果てさせん企みよな……さればこそ、今の町醫が申したる、詞に違はぬこの密書。割符の合ふは、天道我れに告げ給ふか。いづくにあるとも、尋ね求めて

トよろめきながら、密書を持ち、行きかゝるを、瀬平制して

瀬平　これはしたり、後室樣、其お姿で、いづれに御歩行がなりませうぞ。モシ、お國御前さま。

ト此うちお國御前、向うばかり見詰めゐる。この時、門口に窺ふ捕り手、走り入つて

捕一　ヤア、さてはこの家は、お國御前の忍びの隱れ家。見屆けた、この由直さま管領へ

捕二　殊に女を害せし曲者。

團八　それ聞かれては

トて拔いかゝる。二人の捕り手、立廻つて、團八、一人の捕り手を切り倒す。この間に一人の捕り手向うへ走り入る。團八、思ひ入れあつて

お國御前の隱れ家を、知つたる忍びのあの侍ひ、助け置いては後日の妨げ。

瀬平　早くお行きやれ。

團八　合點だ。

トどん〳〵にて團八、向うへ走り入る。矢張りお國御前は、構はず狀を持ち、向うを見詰め、胸苦しき思ひ

入れにて、向うの方へ行かうとする。
瀨平　モシ、後室樣、こりや、そのお姿で、あなたはどれへ、ござります。
お國　騙かられたる上からは、元信が在所を求めて
ト行かうとする。瀨平、縋つて
瀨平　コレ、お國御前さま、あなたは今のお姿が、見えませぬかいなう。モシ、やつれ果てたる御氣色が、お前の目にかゝりませぬか。
ト留める。お國御前、思ひ入れあつて
お國　鏡臺持ちや。
瀨平　エ。
ト驚ろきしが、あたりにある鏡臺を持ち行き、お國御前の前に出す。お國御前、鏡にうつる顔形を、よくよく見て、こなしあり
お國　門に立つたる厄神も、これには如何で……鐵漿附けの道具持ちや。
瀨平　エ。
トうろたへる。
お國　持てと申すに。
ト急いて云ふ。瀨平、恟りして、鐵漿道具を揃へ、怖怖お國御前の前へ持つて行く。お國御前、思ひ入れ。これより誂らへの凄き合ひ方になり、右の道具を引寄せ、鐵漿を附ける。よき時分、暮れ六ツの鐘。瀨平、行燈をともし、怖々お國御前の前へ置く。お國御前、鐵漿を附けしまふ。瀨平、側へさしより
瀨平　モシ、お國御前さま、後室さま、そのマアおやつれ遊ばしたお姿で、お齒をお染め遊ばして、あなたはどれへお出でなさるぞ。こりや大方、あなたの常々お尋ねなさる、四郎次郎さまの所へ、お出でなさるゝ御所存でござりまするかいの。後室さま、そのお姿で、どうして御步行がなりませうぞ。モシ〳〵、どうぞお出で遊ばす事は、お止まりなされて下さりませ。
トお國御前、鐵漿を附けしまひ
お國　コリヤ、瀨平……コリヤ、瀨平。
瀨平　ハアイ。
お國　髮とりあげい。
ト鏡臺に向ふ。瀨平、怖々後へ廻り、櫛を持つてかきたまりしお國御前の髮へ櫛の齒を入れ、くゞらかるゆゑ、櫛取りの出來ぬ思ひ入れ。お國御前焦れて、手を伸し、瀨平が持つたる櫛を引ッたくり、我が手に髮を梳

く。この毛、だん〳〵と櫛の歯にかゝり、拔けて、けんつうになる。この時、奥より寒竹、出かゝり、これを見て、悔りして慄ふ。

瀬平　ヤア、お髪がそれ程

ト お國御前、拔けたる髪と密書を持ち、キッと見詰め、

お國　無念の思ひ入れあつて
妾を僞はる四郎次郎、いづくにあるとも、女の念

ト 立ちあがらんとして、よろ〳〵とする。瀬平「モシ」と最前の衝立にて留めるを、掻きのけ、門口の方へ來り、柱へ取りつき、キッと向うを見詰める。立廻りにて衝立はお國御前が裾の方に殘る。お國御前、胸を押へ、苦しむ思ひ入れ。

瀬平　モシ、其お姿で、どこを當途に

ト 縋る。お國御前、キッとなつて

お國　此まゝ死すとも、ナニ安穩に。チエ、

ト 持つたる髪と密書を一緒に捻ぢ切る。ドロ〳〵にて捻ぢ切れし髪の毛より、血汐、タラ〳〵と落ちて、側の衝立へかゝる。瀬平見て

瀬平　ヤ、其お髪から、生血のしたゝり。

お國　ヤ。

ト 衝立へかゝりし血の樣子を見て、我れながら驚ろき、ウンと反る。ドロ〳〵にて柱際へ心火燃える。瀬平はじめ、後に窺ふ寒竹、ハッと云うて倒るゝ、これをキッカケに、ひやうし　幕

ト 幕引附けると、舞臺花道の附け際より燒酎火燃え出て、大ドロ〳〵にて、この心火、花道より三尺ばかり上を、向う揚げ幕の所へ入る。ドロ〳〵打上げ、シヤギリ。

第一番目五建目　元興寺の場

役名――腰元朝顏。同、小萩。同、あやめ。同、撫子。茨木逸當。銀杏の前。馬士、駄荷藏。狩野四郎次郎元信。六部、土佐の又平重與。後室、お國御前の亡靈。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、稻叢。上の方に一間の地藏堂、この軒にいろ〳〵の燈籠を吊し、夏草、

線香、澤山に手向けあり。爰に百姓大勢、めい〱燈籠を持ち、參詣の體。てんつゝ、念佛太鼓にて幕明く。

ト矢張りこの鳴り物にて、向うよりいろ〱の仕出し、地藏參りの體。參詣して下座へ入る。直ぐに向うより逸當、黑股引、大小にて、侍ひ二人附き出て、本舞臺へ來り

逸當　コリヤ〱、百姓ども。殊の外群集いたすが、何事ぢや。

百一　ハイ〱、コレ、爰に安置いたしたる地藏樣の、お祀りでござります。毎年六月二十四日には、參詣が夥しうござります。

百二　その上、村中が、御覽じませ、さま〱の燈籠を拵らへまして、地藏堂へあげますが卽ちお祀り。この地藏樣は、元興寺にお立ちなされたを、この所へお堂を建てましたのでござります。

逸當　すりや、荒れ寺の元興寺の地藏とな。よい折柄に身も參り合せた。コリヤ、百姓ども、申し渡す仔細、一通り承はれ。この度、佐々木家沒落につき、後室お國御前、民家にあつて病死との事。さるによつて管領よりの指圖を受け、罷り越した茨木逸當。四郞次郞が面體を存ぜず。もしこのあたりへ、年若き侍ひ、女一人同道なし、懷中に系圖の一卷所持の者こそ、元信に相違ない。詮議いたして身共へ渡せ。褒美は望みに任すべし。隨分ともにぬかるまいぞ。

百三　畏まりました。左樣なら懷中に、一卷とやら、系圖とやらを持つて居つたら、狩野元信、止め置いて、早速お知らせ申しませう。

逸當　もし來たらば油斷なく、身が役所へ訴へよ。心得たるか。

百姓　畏まりました。

逸當　家來、參れ。

家來　ハッ。

トまた念佛太鼓になり、逸當、家來を連れ、下座へ入る。百姓殘る。この鳴り物にて、向うより撫子、着流しの形にて、誂らへの牡丹の燈籠へ灯を入れ、これを提げ出で、本舞臺へ來る。

百姓　これはいつものお女中樣、また參詣さつしやりましたか。

ト撫子、會釋して

撫子　お前方も、ようマア參詣なされました。旦那樣も、御參詣の筈のところ、今宵はわたしを御代參。コレ、御覽じませ、この牡丹の燈籠を、御堂へあげて、また持つて歸つて、明日の夜も御灯あげに參りますわいなア。

百姓　それは御奇特でござります。

撫子　ほんに、旦那樣の仰しやるには、歸りに女郎花を手折り來れよとの仰せ。女郎花は、どこにござんすえ。

百姓　ハテ、ツイこの河原に、夥しうござるて。

撫子　左樣なら、この牡丹の燈籠は、この軒へ、斯う吊して

ト軒口よき所へ吊し

サア、これでようござります。サ、お前方、女郎花のある野邊を、教へて下さんせいなサ。

百姓　教へませう〳〵。サア〳〵、女中、斯うござりませ。

ト矢張り念佛太鼓になり、百姓大勢は、めい〳〵軒口へ燈籠を吊し、撫子附いて、捨ぜりふにて下座へ入る。この鳴り物に、てんつゝをかぶせ、銀杏の前、女菅笠を持ち、旅形にて出る。跡より元信、大小、おしよぼからげ、白絹の股引にて、以前の子を抱き出てくる。跡より駄荷藏、馬士の拵らへにて、煙管を咬へ、捨ぜりふにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

駄荷　これサ、お侍ひ樣、馬を貸しませう。女中を乘せてござりませサ。もう日が暮れましたに、お泊りまで召しませ。モシ、姐樣、よい馬を貸しませう。サア、乘つてござりませな。

ト元信を掻きのけ、銀杏の前が手を取らうとするを振りきり

銀杏　これは不作法な。なんでマア自らが、馬に乘つてよいものかいなう。茲な慮外者めが。

元信　ヤイ〳〵、最前からも云ふ通り、馬は所望でないと申すに、聞分けの惡い馬追ひぢや。殊に女子へ手出し致して、ア、、こりや其方は醉つて居るな。

駄荷　左樣でござります。わしやア醉つて居るよ。一杯くらつたまぎれに、ツイ女中に無駄事もするやつサ。モシ、酒手でやりやせう、乘つてござりませ〳〵。その代りには、わしが又、お前に乘つてあげるワ。どうだ畜生め。

ト銀杏の前にしなだれかゝる。元信、これを引退けて

元信　此奴、又しても〳〵、酒機嫌と此方にて、料簡すれば附けあがる馬追ひめ。武士たる身共が同道いたすに、女と侮り無法の振舞ひ。重ねて慮外いたすに於ては、眞

二つにぶッた切るぞ。
ト刀へ手をかける。銀杏の前、とめて
銀杏　ア、コレ、短氣を出して下さんすなえ。
元信　でも、あまりといへば、法に過ぎたる馬追ひめ。
駄荷　コレ、お侍ひ樣、馬追ひがどうしました。往來を當にして、駄賃を取るがおいらの商賣。馬を貸さうと云つたがどうした。おどけた口もきいて見にやア、商賣がならねえワ。その度毎に切られやうものなら、人種は盡きるワ。ほんに、天川屋ぢやアねえが、馬士の胤は盡きるわな。エヽ、馬鹿な侍ひだわえ。
ト元信を足蹴にして飛びのく。元信、思ひ入れ。
元信　こりやアおのれ、武士たる者を、土足を以ての今の緩怠。
ト堪えかね、拔かうとする。銀杏の前、留めるはずみに、元信、系圖の一卷を落す。駄荷藏、ちよつと取つて
駄荷　この卷き物は、こりやアなんだ。
元信　ヤ、それを。
ト手早く取つて懷中する。
銀杏　コレ、その一卷を易々と、お渡し申さぬうちといひ、殊に大事のその豐若。ナア、モシ、必らず短氣を出さんすなえ。
ト思ひ入れ。元信、こなしあつて
元信　成る程、この身ばかりか大切な、豐若さまを守り立てる、それまでは大事なこの身。彼奴等如きが小事にかかつて、大義を捨てんは、誠に武士の本意でないわえ。
ト思ひ入れ。駄荷藏、ウソ〱として
駄荷　ア、おつな事を云ふ侍ひだわえ。豐若とやら何とやら、その抱いてゐる小僧、殊に今落したは、慥かに系圖の一卷とやら、
元信　なんと致した。
駄荷　サ、今も妾らへお觸れが廻つた、佐々木家の系圖の一卷、持つてうせるは狩野四郎次郎とやら。お尋ね者といふ噂だ。こいつは的切り、それにゆかりか。マア、その女からせごした上で
ト立ち寄るを元信、駄荷藏を取つて投げ、背打ちに打ち据ゑる。
アイタヽヽ。侍ひめ、うぬ。
ト立廻りあつて、駄荷藏、起きあがり、上の方へ來て
どうでうぬには叶はない。その卷き物を持つ者こそは、

四郎次郎、此あたりと云ひあげる。侍ひめ、待つてうしやアがれ。

ト下座へ走り入る。

銀杏　アレ、お聞きありしか元信さま、系圖の一巻持つてゐる者こそ、狩野四郎次郎なりと、この道々噂があれば、もしやお前の身の上に

元信　あの馬追ひめが詞の端、おのれが無禮を顧ず、某を根葉に存じ、どのやうに觸れあるくも計り難し。さある時には、この若君のお身の御難儀。お國御前の隠し置かれしこの一巻、僞はり負ふせて此方へ、取返しは返せしが、この身に所持するものならば、四郎次郎の疑ひは遁がれまい。ハテ、これにつけても

ト思ひ入れあり、地藏堂の軒に吊せし牡丹の燈籠を見て

オヽ、幸ひのあの燈籠、もしや詮議の輩が來たなら、暫らくこの一巻を隠し置き、遁がれるだけは云ひ抜けん。それにつけても、この燈籠へ

ト一巻を出し、軒の牡丹燈籠の中へ隠す。

銀杏　誠に、こりや屈竟の隠し所、よもやこれでは御身の難儀を。さりながら、もしや詮議にあふ時は

元信　成る程、形代とても所持せずば、跡の云ひ譯。ハテ、何をがな。

ト思ひ入れあり、地藏の前にある大束の線香を取つてせめてこれなと

ト以前の袱紗に包み、懐中して

これを所持して今にでも、詮議にあふものなれば、叶はずとても陳じて見ん。それでゆかねば一生懸命、詮議の奴ばら切つて捨て、一先づ君の御供せん。必らずともに、うろたへまいぞ。

銀杏　心得ました。

元信　暫らくあたりに樣子を尋ねん。おぢや。

ト行かうとする。下座より逸當、捕り手を召連れ、ツカツカと出て

逸當　ヤア、狩野四郎次郎元信、管領よりの上意なるぞ。尋常に繩

捕手　かゝれ。

ト取巻く。

元信　待つた、お侍ひ。足弱を同道せし、旅人に向つて四郎次郎とやら、元信とやら、身に覺えなき今の一言。何ゆゑ狼藉おしやるぞ。

逸當　ヤア、僞はるな四郎次郎、身共は面體存ぜねども、慥かな證據あるにつき、陳じても叶はぬ所。サア、元信、速かに、腕

捕手　廻せ。

元信　ヤア、心得ぬ一言。慥かな證據とお云やるが、身共に何の證據がござる。狩野の四郎次郎といふ證據をお出しやれ。拜見いたさう。

駄荷　その證據はこの馬士。おれが訴人をしたのだワ。

　ト云ひ〳〵出る。元信見て

元信　そちや只今これにて、我れ〳〵に無禮を働らき、ひどい目見たる意趣返し、此お侍ひを僞はつて、手を下ろさずにいづれもに、無駄骨折らして、その身の遺恨を、晴らす所存か。茲な僞はり者めが。

駄荷　默りやアがれ。ナニ僞はりを云ふものか。四郎次郎といふ事は、この駄荷藏が訴へたワ。證據といふは、われが懷、系圖とやらいふ巻き物を、持つてゐるのが慥かな誠據だ。それでも覺えがないか。

元信　イ、ヤ存ぜぬ、覺えがない。一巻とやら、決して所持した覺えはないぞ。

駄荷　ナニない事があるものか。お役人樣、必らず御油斷なされまするな。

逸當　如何にも。さほど慥かな證據があつても、あらがふる四郎次郎、サア、尋常に繩かゝれ。

元信　イ、ヤ存ぜぬ、覺えない。一巻持たば四郎次郎、もし所持なさぬその時は、その疑ひは晴れますか。

逸當　そりや疑念には及ばぬ事。一巻持たぬその時は、疑ひもなき往來の旅人、此方に申し分はござらぬワ。

元信　然らば身共も、連れの女も、懷中改め、詮議おしやれ。

逸當　心得た。訴人の其方、相違なくば、二人が懷中、詮議いたせ。

駄荷　畏まりました。この懷に持つたは一巻、引摺り出して今の意趣返しだ。もう叶はぬワ。念佛でも申してゐろ。

逸當　家來、圍め。

捕手　動くな。

　ト十手にて取巻く。

駄荷　サア、侍ひ、マア、貴樣の懷から

　ト立ちかゝつて元信の懷へ手を差しこみ、件の吹替へを引出し

さてこそ爰に。

元信　ア、それを
　ト　かゝるを駄荷藏、思ひ入れ。
駄荷　何をピコつく。これ程爰に持つてうせたワ。モシ、お侍ひ樣、正しくこれが系圖の一卷。お改めなされませ。
　ト　逸當へ渡す。
逸當　さてこそ、訴人の者が申すに違はず、一卷を所持するからは、四郎次郎に相違あるまい。この一卷は
　ト　云ひながら、袱紗を明け、恟りして
ヤア、こりアなんだ。佛へ手向ける線香ぢやアないか。
駄荷　ドレ、お見せなされませ。
　ト　取つて
ほんに、こりやア大東の線香だ。先刻に見たのは慥かに卷き物、今では線香。誠にこれは、せんから未聞の話しの種だ。せんかうに濁りを打てば善公。ハテ、詰まらぬものだ。
元信　サア、お侍ひ樣、一卷とやらがござりましたか。
逸當　サ、そりやア
元信　地藏の前へ手向ける線香、持參いたして罷りあるを、一卷なりと云ひ立つて、おのれが遺恨を手も濡らさず、厄病の神で敵討。馬追ひづれが詞を用ひ、それで役目が立ちますか。
逸當　サア、そりやア
元信　お疑ひは晴れましたか。
逸當　成る程、こりやア此方が不念。四郎次郎元信ではござるまい。
元信　然らば疑ひ晴れまして、此まゝ濟ます御所存か。
逸當　イヽヤ、貴公へ云ひ譯には、家來ども、その馬追ひめ、動かすな。
捕手　動くな。
　ト　駄荷藏を取卷く。
駄荷　ア、コレ〳〵、お侍ひ樣、この馬士めを、どうなされます〳〵。
逸當　ヤア、おのれ、僞はりを申し立て、身共に恥辱を與へし奴。あのお方へ申し譯、訴人のおのれを引立て行く。役所へうせう。
捕手　キリ〳〵うせう。
駄荷　ハテ、詰まらぬ目にあつた。
元信　左樣なれば我れ〳〵に、仰しやり分はござりませぬかな。
逸當　申し分はござらぬ。コリヤ、家來ども、四郎次郎を

訴人の馬追ひ。拷問なして元信が詮議。僞はり者めを取逃がすな。

捕手　ハア、。

駄荷　なんの事だ。これぢやア築地へ歸られまい。

元信　お侍ひ樣、お役目御苦勞。

逸當　引立てい。

捕手　立たう。

駄荷　立つて居ります。

ト三重、時の太鼓になり、捕り手、駄荷藏を圍み、逸當、先へ立ち、四人、向うへ入る。元信、銀杏の前、あと見送り

銀杏　元信さま。

元信　コリヤ。

銀杏　危ふい難を遁がれましたわいな。

元信　イヤモウ、一巻を隠せしゆゑ、この身の難を人に負はせて、その身はなんの別條なく、これといふのも、爰に立てられし地藏尊のお庇。ドリヤ、お禮參りに

銀杏　わたしも參つて行かうわいなア。

ト合ひ方になり、兩人、地藏堂の前へ行き、手を合せ、思ひ入れ。この時、下座より撫子、女郎花の花を手折り出て

撫子　ほんに、夜に入つて、野中の草を尋ねたゆゑ、殊の外の隙取り。殊に、燈籠の御灯も消えてある。ドレ、また明日の夜に持ちませう。

ト牡丹の燈籠を取つて花道の方へ行かうとする。元信これを見附け

元信　ア、コレ〳〵。女中、その燈籠を、どこへ持つてござるのぢや。

銀杏　滅相な。マア、大切な燈籠を、持つてござんしてよいものか。ちやつと置いてござんせいなア。

撫子　モシ〳〵、何を云はしやんすぞいな。この燈籠は、わたしが御主人樣より、毎夜々々この地藏尊へ、御灯をあげますこの燈籠を、持つて歸りますが、なんで滅相でござります。

銀杏　サア、それはナ

元信　ア、、そんならその燈籠は、お前の御主人樣が、御心願あつて毎夜々々、御灯をおあげなさるゝ燈籠とな。

撫子　アイ、御主人樣の御心願ぢやわいなア。

元信　成る程、それを持つて歸らつしやるを留めたは、此方が無理でござつた。さりながら、燈籠ばかりは、どう

も外へは。なう、銀杏の前どの。

銀杏　サア、わたしも左様は思へども、何を云うても燈籠の主は、このお女中様。

元信　見れば、在所風の女中と見えず、武家に育ちし態度恰好。御主人の心願と仰しやるが、して、このあたりに、武家の御殿がござるかな。

撫子　アイ、爰より僅か半道あまり、野末の草の假御殿、主君と申すは、後室様のお獨り棲み。そのお方へ宮仕へ致します、女子でござりますわいなア。

元信　ハテ心得ぬ。かゝる邊鄙に女主の、假御殿とは訝かしい……すりや、その燈籠は、其お館へ

撫子　アイ、持歸らにやなりませぬ。

元信　そりや御尤も。爰に一つの無心がござる、というて外の事ではござらぬ。御覽の通り足弱と申し、乳吞を連れし旅人、宿りを求めず甚だ難儀仕る。私しどもを、お泊めなされては下さるまいか。

撫子　それは何よりお易いお頼み。さりながら、我れ〱は召使ひ。女主の御主人へ、願うた上にて

元信　お宿なされて下さるか。コレ、銀杏の前どの、あのお詞を聞きやつたか。

銀杏　成る程、今宵の宿りをお願ひ申し、折を窺ひ、あの燈籠の

元信　コレ……マ、何事も、あなたに附いて、お館まで

撫子　御同道いたしませう。

元信　忝なう存じます。

銀杏　サア、我が夫。

元信　ア、これにつけても

ト燈籠へ手をかける。撫子、ちよつと燈籠を引く。三人、思ひ入れあつて

撫子　斯うお出でなされませ。

元信　ドリヤ、御一緒に參らうか。

ト時の鐘、合ひ方、蟲の音にて、撫子、燈籠を持ち、先へ立ち、元信と銀杏の前は、赤子を懐へ入れ、思ひ入れあつて、花道へかゝり、向うへ入る。この道具引いて取る。

本舞臺、三間の間、中足にて結構なる御殿、枝折り戸。前に流れ、花道より揚げ幕まで本水かけてあり、爰に銀燭臺を照らし、朝顔、小萩、あやめ、奥女中の拵らへにて、花筒へ夏草を活けてゐる見得。よき時

分より琴唄にて道具とまる。

ト合ひ方、蟲の聲。皆々花を活ける事あつて

朝顔　モシ／＼、あやめどの、どう致しても小萩どのは、お宿が活け花の御指南なさるゝ程あつて、手際が見事でござんす。わたしや南瓜の花を活けて見ようと思ふわいなア。

小萩　これはしたり朝顔どの、南瓜の花が、なんで活けられやうぞいの。まだしも唐辛子か、銀眞瓜の花は、釣り物へも活けます。イヤ又、活けて見やうなら、仙人掌ぢやわいなア。

あや　何をマアお前方は、阿房な事云はしやんす。それにつけても後室樣の、お尋ねなされた女郎花の花は、もう咲いたであらうに、燈籠を持つてござんした、このマア撫子どのは、もう歸りさうなものぢやござんせぬか。

朝顔　ほんに、後室樣が、お待兼ねであらうに、いかう遲い事ぢやわいな。

小花　いつそわたしが、迎ひに行て見ようわいなア。

ト立ちあがる。

あや　これはしたり、後室樣の御用もあらうに、鎭まつてゐさんせいなア。コレ、小萩どの、最前仰しやつた琴の絲は、掛け直してござんしたかえ。

小萩　アイ、そりやモウ、とつくに絲を掛けかへて置いたわいなア。

あや　そりやついぞない、よう心が附かしやんしたわいの。

ト時の鐘、唄になり、撫子、燈籠を提げ、銀杏の前と元信を連れ出て、花道にて

元信　モシ、女中樣、あの向うに見えます庵が、お前の御主人。

撫子　後室樣の御殿でござります。申しあげますまで、お二人ながら、暫らく外面に、お待ちなされて下さりませ。

元信　心得ました。何分よろしう頼みます。

ト また唄にて、三人本舞臺へ來り、元信銀杏の前、門口に窺ふ。撫子、内へ入り

撫子　御傍輩衆、さぞ待兼ねてゞござんせうの。

小萩　撫子どの、戻らんしたかいな。

朝顔　ほんに今宵は一しほと、空も曇つて、さぞ難儀さしやんしたでござんせうの。

撫子　アイナア。殊に、後室樣のお尋ね遊ばす、女郎花の盛りゆゑ、手折つて參りましたわいなア。

ト見せる。

あや　そりや、よう氣が附きました。して、いつもの燈籠わえ。

撫子　アイ、持つて歸りましたわいなア。これにつけても、あやめどの、今宵手折りし花よりも、又よい花を、お土産に持つて參じたわいなア。

あや　そりや、どのやうな花でござんすえ。

撫子　その花といふは、爰から見やしやんせ。

ト三人の女に、切り戸の外を見せる。皆々見て

あや　こりや珍らしい。所に見馴れぬ女郎花、よい花を、こなさん、どこから手折つて

三人　ござんしたぞいなア。

ト此の時、御簾の內にて

お國　「秋草を、形見とか見ん女郎花、衣の色に咲ける道の邊」

銀杏　あのお聲は

ト枝折り戸に立ち寄り、窺ふ。

皆々　後室樣。

元信　すりや、この館の……ハテナア。

ト琴唄になり、御簾を卷きあげる。爰にお國御前、結構なる裲襠の形、後室の拵らへにて、褥の上に座し、文臺を置き、脇息によりかゝり、結構なる短册と筆を持ちそへたる體にて、御簾卷きあがる。皆々、手を突き

撫子　後室樣、これにお渡り

四人　遊ばされましたか。

お國　腰元どもが心願籠めし、佛へ捧ぐる御灯の、牡丹の燈籠、今宵も事なう持ち歸つたか。

撫子　ハイ、御心願の牡丹の燈籠、持ち歸りまして、卽ちこれに……又いつもの軒へ

ト よき所へ燈籠を掛ける。

お國　して、自らが眺めたう思うてゐる、野邊に咲くなる女郎花……撫子、其方、手折つて來やつたか。

撫子　ハイ、御覽の通り、咲き亂れたる女郎花、持參仕りましたわいなア。

ト花筒に活け、お國御前の側へ持ち行く。

お國　誠に、色よう咲いた女郎花、一しほによい眺め。ほんに可愛らしい、よう咲いたわいの。女郎花は此やうに色よう咲けど、自らが心を掛けし男郎花、いづれの野邊に咲く事やら。アヽ、たゞ戀しさの

ト思ひ入れ。

撫子　サヽ、その色よき男郎花、また一本の女郎花、今宵の宿りと申すゆゑ、お呵りをもかへり見ず

ト思ひ入れ。お國御前、こなしあり

お國　野邊に千種の男郎花・藻に棲む蟲は自らが、泣き焦れたる空蟬の、又の便りを松蟲と、胸に思ひの螢火も、消ゆる隙なき

トきつと思ひ入れ

撫子　女夫連れたる旅の空、殊に乳吞を抱きかゝへ、難儀と存じ召連れしも、お願ひ申して、今宵一夜を

お國　珍らしき客人どの、殊に女夫とあるからは、女子ばかりのこの庵へ、泊めたとて苦しうない。その者、これへ。

撫子　畏まりました。

ト門口に向ひ

サア、お二人樣、主のお許しあるからは、少しも早う

元信　然らば御免下さりませ。

ト銀杏の前附いて内へ入る。

銀杏　ほんにマア、思ひがけない、結構な此お住居。爰はマア、どこでござんすえ。

元信　これはしたり、上つ方の御殿かも知れぬに、コレ、滅多な事を云ふまいぞ……ハイ〳〵、これはマア、お情をもちまして、二人の者に幼な子まで、蚊にせゝらるゝ苦勞もなく、お宿なされて下さるとは、エヽ、有り難う存じます。して、あれにおいでなされますが

撫子　此お館の後室樣、お側へ行て、お禮申さんせいなア。

元信　左樣なれば、御免を蒙むりまして……サア〳〵、其方も一緒に、お禮申しや。

銀杏　アイ〳〵、お禮申しあげるでござりませう。

ト兩人、お國御前が目通りへ近く差寄り

元信　ヘイ〳〵、御免下さりませ。私しどもは、夫婦連れの旅人、連れました幼な子は主人の若君、夜に入つて難儀仕るを、御高恩をもちまして、一夜を明かさせ給はる段、有り難う存じまする。

ト爰にて赤子泣く。

ア、これにつけても、この子は、どうぞ知るべを求めて、乳を飮ませたいものぢやが。

ト思ひ入れ。お國御前、キツと見て

お國　その子に乳房を與へませう。

元信　エヽ、あなた樣が

お國　乳房を與へん。その和子これへ。

元信　ヘイ〳〵、これは有り難う存じます。左樣なれば、憚りながら

ト子を差出す。お國御前、取つて、こなし、

お國　佐々木賴賢が御胤、園生が胎内に出生の豐若、我が身に仇なるこの幼な子。

トきつとなる。元信、恟りして

元信　ヤア、そのお聲は、主人の後室

お國　お國御前を四郎次郎、よも見忘れは致すまい。

元銀　エ、。

ト恟りする。お國御前、赤子を抱へ、キツとなる。これより物凄き合ひ方になり

元信　すりや、この御殿は、お國御前がしつらひ給ふ、さては忍びの御閑居よな。

お國　よくも其方は、自らを僞はつて、隱し置いたる佐々木の系圖、戀に事寄せ奪ひ取り、銀杏の前と二世かけて、夫婦の契約しやつたの。

元信　アイヤ、全く以て、何ゆゑに、あなたを僞はり奉らん。

お國　イヽヤ云やんな、僞はりぢや。證據は卽ちこの密書、其方の手蹟であらうがの。

ト前幕の密書を出して見せる。

元信　ヤ、その一通が、どうしてあなたの

お國　手に入つたると知らざるや。主を裏切る四郎次郎、其方が奪ひし系圖の一卷、あれなる牡丹の燈籠へ、隱し置きしも自らが、疾より存じて又ぞろや、取返せしぞ、うつけ者めが。

元信　さては系圖を入れ置きしを

銀杏　御存じありし後室樣、その上、若まで虜となし

お國　佐々木の血筋は根を絶つて、葉を枯らさうか、四郎次郎。

元信　サア、それは。

お國　但し今より心を改め、獨り淋しき自らが、枕の伽を、致すか元信。

元信　サ、その儀は。

お國　違背に及ばゞこの豐若。命を絶たうか。

元信　サア、それは。

お國　心に靡くか。

元信　サア

お國　サア〳〵〳〵、返事はどうぢや、四郎次郎。

トきつとなる。元信、思ひ入れ。

銀杏　コレ、四郎次郎さま、和子のお爲ぢや、後室樣へ宮
仕へ。モシ、何事も仰せに任せて、ナア、コレ、御合點
が參りましたか。
　ト こなし。元信、思ひ入れあつて
元信　眼前大事を抱へし身の、返事を否むも道ならず、銀
杏の前が詞に從ひ、如何にも今より後室樣へ、お宮仕へ奉
らん。何卒和子の一命を
お國　助け得させんその代り、銀杏の前はこの家に叶はぬ。
爰から直ぐに追ひ返しや。
銀杏　すりや、自らは、お館には
お國　叶はぬ事ぢや。門外へ追ひ出し、猪狼の餌食ともな
すが、せめてもこれまでの、自らが腹癒せ。女子ども、
あの女を追ひ拂や。
女四　畏まりました。
あや　サア、銀杏の前　御前に叶はぬ
小萩　早う出やっ
元信　すりや、銀杏の前を
お國　我が見る前で追ひ拂や。
元信　でも、此まゝに館を出でなば
銀杏　アモシ、お家のお爲、二つには、和子のお命助ける
爲、わたしや此まゝ
　ト 枝折り戸の外へ出る。
元信　如何にお爲といひながら
お國　女を庇ふは僞はりか。
元信　ア、イヤ、全く以て
お國　銀杏の前を、追ひ拂や。
朝顏　女中、立たんせ。
銀杏　ハイ……おさらばでござります。
　ト 捨て鐘、唄になり、朝顏、小萩。銀杏の前を引立て
　向うへ入る。
元信　御覧の如く銀杏の前、この席を遠ざけまする上から
は、思し召しに叶ひましたか。
お國　心にかゝる山の端も、ないて焦れし男郎花、今日思
はずも逢うて滿足。自らが心にさへ從はゞ、この若が命
も助け、あの燈籠の一卷も……コリヤ、女子ども、この
若、それへ。
撫子　ハツ。
　ト 走り寄つて赤子を受取り、介抱する。
お國　手馴れし琴を、これへ持ちや。
あや　ハツ。

撫子　ト後に飾りし琴を、よき所へ持つてゆく。
常々お慕ひ遊ばせし、元信さまにお逢ひなされて、
さぞ御滿足。

あや　即ち長柄、お土器、めでたう用意仕りました。
ト長柄の銚子、三方に土器をよき所へ置く。

お國　オヽ、よう心が附きました。コレ、元信、いま思はず
も自らが、世を味氣なう思ふゆゑ、この短册へ一首の歌。
これを其方へ
ト以前の短册を渡す。元信、取つて思ひ入れあり

元信　「秋草を形見とか見ん女郎花、衣の色に咲ける道の
邊」……誠に、世を味氣なう思し召したるこのお歌。元
信、お目にかゝりし上は、此お心に引かへて、やがてめ
でたう戀歌の一首。まづそれまでは四郎次郎、頂戴いた
すでござりませう。
ト短册を袱紗のまゝ懷中する。

お國　すりや、銀杏の前は只今より

元信　何しに未練が殘りませう。

お國　嬉しや滿足。まだこの上に自らが、其方へ詳しう云
ひたい事も、唱歌に准へしこの爪琴。

元信　お調べあるも又一興……さはさりながら心得ぬ、野
末にかゝる御殿の造り。
ト思ひ入れ。よき時分より差し金の蝙蝠、夥しく御殿
の内を舞ふ。元信、キツと目を附け
ヤ、かゝるお居間に蝙蝠の
ト思ひ入れ。この聲に撫子悄り、途端に赤子泣く。お
國御前、思ひ入れ。

お國　何を其やうに
トしなだれる。

元信　でも、蝙蝠の

お國　コレ。
ト琴をジヤンと掻きならす。琴唄のかゝりになり、時
の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、元興寺の荒れ寺、本尊の
後朽ちたる體、柳しげり、草蓬々たる有さま。よき
所に油紙帳を吊り、笈を置き、六部野宿の體。紙帳
の内に一ツ鉦の音して、蝙蝠、夥しく群がり、時の
鐘、蟲の音、物凄き體にて道具とまる。
矢張り堂の内にては赤子の聲、琴唄かすめて聞える。
ト向うより駄荷藏、銀杏の前を引立て、立廻りなが

銀杏　こりや其方は、宵に逢うたる馬追ひぢやな。
駄荷　知れた事だワ。狩野の元信、銀杏の前、金にすべいと思つたに、手盛りをくつたこの駄荷藏、爰で逢つたが天の與へだ。女め、一緒にうしやアがれ。
銀杏　イヤ〳〵、自らは元信さまのお爲に、この身を捨てて入水する。爰放してたもいなう。
駄荷　さてこそ、元信と云ふからは、四郎次郎に違ひない。彼奴が在所を、キリ〳〵吐かせ。
銀杏　イヤ、其お在所は、どうも云はれぬ、マア、爰放して
駄荷　エヽ、面倒な。うしやアがれ。
ト引附ける。銀杏の前、立廻り。よき時分より捨て鐘きびしく、紙帳を破り、又平、世話六部の拵らへにて顏を出し窺ふ。駄荷藏、これを知らず、銀杏の前を引立て行かんとする。又平、後より駄荷藏を、引附ける。駄荷藏振りかへつて
ヤア、うぬは野宿の六部めだな。マア、その女を
トかゝるを見事に當てる。駄荷藏「ウン」と倒れる。
銀杏　ヤア、其方は又平

又平　銀杏の前さま、何ゆゑお一人、この所へ
銀杏　不審は尤も。自らは元信さまと只二人、豐若さまを介抱なし、行くへ定めぬこの大和路、思ひがけなうお國御前、閑居へ便り、お家の系圖、若君まで、後室樣の手に渡り、夫のお側にある時は、元信さまの御身の難儀と、その場を立退き、身を沈め、死ぬる覺悟ぢや。コレ又平、回向を頼む。南無阿彌陀佛。
ト前の流れへ身を投げんとする。又平、これを留めて
又平　お待ち遊ばせ。合點のゆかぬ今の仰せ。お國御前は久世の里、その隱れ家にて歿り給ひ、御菩提所ゆゑ荒れ果てし、大和なる元興寺へ御埋葬。この世にござらぬ後室に、お逢ひなされし今のお詞。して、その館と仰しやるは
ト赤子泣く。
銀杏　アレ、あの爪音の聞える所。殊に若君豐若の、せわらせ給ふあの泣き聲。
ト又平、思ひ入れ。琴の音、赤子の泣き聲する。
又平　誠や、かゝるいぶせき荒れ寺に、琴の音あるに幼な子の、泣き聲ほのかに聞ゆるは、もしや狐狸の業なるか。

初演の舞臺錦繪　花井才三郎の元信

銀杏　イヤ、ナウ、お館にあのお姿。

又平　ドレ。

ト堂の崩れより窺ひ見て

ヤ、、後室始め並みゐる侍女。元信さまにも、その席に

ト駄荷藏、起きあがつて

駄荷　ナニ元信が

ト駈け行くを、又平、引廻し、立廻りあつて錫杖の仕込みを拔き、駄荷藏を見事に切つて

又平　ハテナア。

ト思ひ入れ。時の鐘、風の音にて、この道具、元へぶん廻す。

元の御殿の道具に戻る。爰にお國御前、琴を調べゐる。元信、よき所に赤子を抱き、眠りゐる。後に撫子、あやめ、朝顏、小萩、ゐならび、軒に矢張り燈籠あり、琴唄、時の鐘にて道具とまる。

撫子　元信さま

あや　四郎次郎さま

四人　お目覺まされませう。

ト元信フツと心附いたる思ひ入れにて

元信　後室樣の琴の音に、思はず知らず睡眠の、前後忘せし無禮の段

お國　絶えて久しき元信へ、聲も枯れ野の自らが、唄の唱歌も爪音も、調子も狂ふ

ト思ひ入れ。

元信　以前に變らぬ御音聲

四人　さぞお氣欝にいらせられませう。

お國　女子ども、元信を慰むる、銚子土器。

四人　畏まりました。

とこの時、下の方、生垣の蔭より

又平　その御酒宴のお相手に、拙者も罷りなりませう。

ト誂らへの合ひ方にて出で、よき所へ住ふ。

元信　ヤア、其方は又平ならずや。よくも存して參りしぞ。

お國　ナニ、又平とは、元信ゆかりの下部よな。下ざまの身を以て、自らが目通りへ、酒宴の興に同席とは、緩怠至極、爰下がりや。

又平　イ、ヤ、この席下がりますまい。合點のゆかぬ後室樣、殁りたまふと聞きつるに、生けるが如き御有樣。何とも以て心得ぬ。

元信　すりや、後室には、疾よりこの世を去り給ふか。

又平　疑がはしくば又平が、所持なすところの尊像の、奇特を以て

ト懐中より錦の袱紗に包みし厨子を出し、お國御前へさしつける。ドロ／＼になり、お國御前、苦しきこなし、その姿忽ち生なりの異形なる形となり、前なる琴もこの途端に、大卒塔婆の括りたるになる。この時、下手より銀杏の前、窺ひ出て

銀杏　ヤア、後室樣のお姿は

元信　この世を去りし死人の相好。

又平　さるにても館の結構、並みゐる侍女も、仔細ぞあらん。

ト尊像をさしかざす。大ドロ／＼にて、御殿一度にバラ／＼と變り、朽ちたる荒れ寺になり、緣側より茅薄生ひ茂る。この途端に四人の侍女、一度に消えて、めい／＼損れたる賓頭盧、仁王の頭、如意輪觀音、青苔附きし五輪になる。

さてこそ妖怪、ござんなれ。

元信　最前おくりし後室の、詠歌の短册。

ト懐中より出す、紙位牌になる。元信、驚ろき

日増院夏山妙道大姉。さては世に亡き御戒名。

ト思ひ入れ。

お國　ア、ラ無念や、殘念や。恨みの念の去りやらず、再びこの土に歸り來て、詞交せし四郎次郎。共に奈落へ誘引せん。來れや元信。

又平　小癪な事を

元信　正しく系圖はあの燈籠。

ト幼な子を銀杏の前へ渡し、立ちかゝる。ドロ／＼にて心火燃えあがり、燈籠のあたりへ立ちのぼる。この時、燈籠碎けて、牡丹の花瓣、ハラ／＼と落ちて、古き佛前の燈籠となり、系圖の一卷、中より落ちる。

これぞお家の系圖の一卷。

ト手早く取上げる。

又平　御手に入りしか、元信さま。

お國　やはか渡さん、その一卷。

トきつとなる。又平、走り寄つて

又平　成佛あれや。怨敵退散。

ト持つたる厨子にてお國御前を打つ。大ドロ／＼にて、魂ひ飛び去つて、煙り四方より立ちのぼり、お國御前の姿碎けて、髑髏殘る、又平駈けより、髑髏を取上げ

ハテ恐ろしき、執念ぢやよなア。

ト三人キツと見得、大ドロ〳〵にて、燒酎火立つて、よろしく、

ひやうし　幕

第一番目　大詰　名古屋館の場

役名――駿河前司久國。名古屋山三妻、葛城。名古屋小山三。腰元、宮路。下部、志賀内實ハ犬上團八。下部、彦平。不破伴左衞門實ハ天竺德兵衞。座頭、德市實ハ岩倉夜叉丸。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、一面の上障子、正面、金襖、彩色の花鳥。上の方に柳の立ち樹。下の方、松の立ち樹。柴垣、植込み、手水鉢、石燈籠を餝りつけ、舞臺前、水船に泉水のかゝり、よき所に少し小笹茂り、上の方に久國、上下衣裳にて刀を拔きかけ、立ち身。葛城、襠衣裳にて、これを隔て、宮路の腰元を圍うてゐる。序の舞にて幕明く。

久國　慮外な女を討ち果すを、なぜ葛城どの、止め召さるな。

葛城　これはマア、久國さまの、いつにない御立腹。コレ宮路、何をマア其やうに

宮路　サア、何も御慮外は致しませねど、御案内もなう、奧へお出でなさるゝを、お止め申したというてからに

葛城　そりや惡い、其方が惡い、ナ……サア、以後をキツと嗜みや。イヤ申し、久國さま、わたしがお詫び申します。マア〳〵、御料簡なされて下さりませう。

久國　うぬ、ぶツ放す女なれども、葛城どのゝ詫びゆゑ、赦してくれるぞ。

葛城　ソレ、お禮申しや〳〵。

ト宮路、ウヂ〳〵して

前の　有り難う存じます。

トこれにて皆々住ふ。

葛城　さうして、あなたの今日のお出では。

久國　久國、今日參つた譯は……イヤ、女に申して詮ない事、承れば、夫山三には病氣とやら。然らば小山三元近に。

葛城　サア、その小山三どのには、室町の御前より、未だ下がりもござりませぬ……女に云うて益なき事とあれ

ば、わたしが聞くにも及ばぬ事。
久國　おッつけ小山三、退出なさば、とくと面談。
葛城　それがよろしうござりませう。ソレ、宮路、久國さまへ、お茶なりと。
宮路　畏まりました。
ト立ちあがる。てんつゝになり、向うより彦平、石持の羽織にて尻からげ、門番の形にて、六尺棒を持ち、「下がれ〳〵」と云ひながら出る。跡より夜叉丸、座頭の拵らへにて、木琴を脊負ひ、竹杖を突き、出て來る。
彦平　下がれ〳〵と、これ程云ふに、下がらぬか〳〵。
夜叉　ヤレハア、下がれの上がれのと、錢相場ぢやアあんめえし、口やかましいおさぶだア。
彦平　コレヤイ〳〵、爰をどこだと思ふ。名古屋山三さまのお屋敷だワ。
夜叉　サア、それだアによつて、えざわざむくり申した。
彦平　そりやア、なぜ〳〵。
夜叉　聞いてくんなさい。此お屋敷へは、おらが親仁が、先年上つてがいに、御贔屓にあづかつたといふこんだが
彦平　ムウ。して、われが親仁の名は、何と云つた。

夜叉　三朝と云ひ申した。
彦平　成る程、三朝といふ座頭は、六年あとに此お屋敷へ來た事がある。しかもその時、矢ッ張りおれが、下がれ下がれと云つたが、ハ、ア、そんならおぬしは、息子座頭か。
夜叉　さうだア。モシ、そんだから、通してくんさい
彦平　サア、そんなら通してやりたいものだが、今日はお客もある程に、通す事はならぬ。下がれ〳〵
ト棒にて叩き立てる。
夜叉　ヤレ、聞分けのない、通り申すよ。
彦平　ヤレ、情の剛い盲目めだ。
夜叉　ヤレ、情の張つた二本棒だ。
ト兩人爭ふ。
葛城　コリヤ〳〵、騷がしい、何事ぢや。
ト彦平、下にゐて
彦平　ハツ、只今御門の勤番いたし居りまするところへ、この盲人が、先年當お屋敷へ上がりました、三朝の悴と申して、通りますゆゑ、それで制しますのでござります。
葛城　さういふ事なら、なんぞ願ひの筋であらう。大事ない、これへ通しや。

彥平　畏まりました……サア、お坊、奥樣のお許しだ。ソレ、上がつたり〳〵。
夜叉　そりやこそな。親仁の時も、凹んだんべい。
彥平　嘘はない。
兩人　ハヽヽヽヽヽ。
彥平　サア〳〵、來やれ〳〵。
　ト矢張りてんつゝにて、本舞臺へ來り
夜叉　ハイ、どんたもよろしう下さりませえ。
　ト下にゐる。
久國　コリヤ〳〵、盲人、其方達には、生國を尋ねるが話しの最初。マア、いづれの者で、名は何と申す。
夜叉　わしかなア、わしやづない遠國だア。
久國　遠國と申すは、奥州であらう。
夜叉　オヤ、見通しだアよ。
宮路　さうして、名は何と云ふえ。
夜叉　德市と申しますて。
葛城　いま聞けば、先達て上がりし、三朝が悴とあれば、定めし三味線を、よう彈きやるであらう。
夜叉　アレハア、わしやア不器用だから、三味ナア嚙り申さない。その代りに、按摩ナア大將だて。
葛城　して又、なんの賴みで屋敷へはめて夜なべで、お草臥れナウなさるべいから、療治の企てべいと、それで罷り申した。
夜叉　サア、按摩ナア名人だから、殿さアも奥さアも、定めて夜なべで、お草臥れナウなさるべいから、療治の企てべいと、それで罷り申した。
彥平　べら坊め、なんぞ願ひでもあるやうに吐かして、按摩を取る。イヤ、あんまり手もない座頭めだ、これでも、われが脊中へ脊負つて來たのは、座頭の坊のお定まり、琵琶か三味線であらう。國の名物、仙臺淨瑠璃でも、語つて聞かせろ〳〵。
夜叉　ヤレハヤ、このふとは、當推だアよ。わしが脊負つたア木琴だアでば。
久國　その木琴は先つ頃、洛中に流行いたした、珍らしき樂器。前司久國、所望したい。
葛城　ほんに、こりやよからう。久國さまへおもてなし、何をがなと思ふ折から
宮路　さぞ面白い事でござりませう。
彥平　それ〳〵、私しも前方聽きましたが、それは〳〵おつりきなものでござります。コレ、お坊、折角のお望みだほどに、その木琴を、やらかせ〳〵。
夜叉　アレ、親仁ナ聽きめして、わしがのはあんでもない。

それだが、それえにおもしやるこんだア、ちくとんべいぶん鳴らすべい。

ト木琴を出して前へ置き

わしが聲さア親不孝で、おかしかんべい。誰れぞそこで謳つてくんさい。

皆々　所望ぢや〳〵。

トこれより下座へ取り、「だまされて咲く室の梅」の唄になり、夜叉丸、木琴を鳴らす事よろしくあつて納まる。

ヤンヤ〳〵。

夜叉　いつまでぶッ叩いても同じ事だア。

久國　イヤ、なか〳〵、一興であつたわえ。

葛城　ほんに、夫の病氣慰めにもならうほどに。マア、奥へ行て、酒でも飲みや。

彦平　犬も歩けば、棒鱈にならぬやうに、頂戴しろ〳〵。

夜叉　そいつはよかんべい。

久國　見たところが、屈竟の若い者。眼が明いてあるならなんぞの役にも……オヽ、幸ひ〳〵、この祝儀に、紙花をくれう。

ト懐より紙に包みし、二幕目のお國御前の落ち毛を出し、扇に乗せて

ソレ、祝儀の紙花。

ト夜叉丸へ突きつける。

夜叉　こりやア御馳走だア。

ト云ひながら、拈つて見て

お殿樣、こりやア

久國　それこそは、佐々木の後室、お國御前が一念の、執着とゞめしこの黒髪、一字へ納めとらせんと、懐中なしたを其方へ紙花。

ト夜叉丸、ムッとして

夜叉　こんな物を、あんにしべい。

トそこへ投げ出す。薄ドロ〳〵になり、この髪、蛇にない、うごめく。皆々、驚ろき

葛城　ても恐ろしい執着心。

久國　まだ怨念の晴れやらず

皆々　忽ち落ち毛の、蛇となりしは

トこれを聞いて

夜叉　エ。

ト驚ろき立ちあがり、思はず目を明く。皆々、夜叉丸を見て

葛城　盲人、そちや眼が見えるか。
夜叉　あんのお前
ト下にゐて
痲疹で潰れで、皆目だアて。
ト思ひ入れ。
皆々　ハテナア。
夜叉　ドレ。お次で御酒さアねだるべいか。
葛城　そんなら盲人。
夜叉　奥さア
ト久國「ムゥ」と立ちかゝる。葛城、キツと隔てる。
後方お目にぶらさがりませう。
彦平　ドレ、案内してやらうか。
ト唄になり、彦平先に夜叉丸、わざと探り〳〵奥へ入る。
久國　合點のゆかぬあの盲人。
葛城　それに不思議な今の蛇。
宮路　ほんに、お國御前さまとやらは、怖いお心でござりますなア
葛城　イヤ〳〵、そりやお國御前さまばかりぢやない。可愛いゝ男を寢取られたら、誰れしも女子は同じ事。さういふうちにも、こちの人山三どのにも、もし惡性な事でもあると、そりや猶更、わしは巳の年巳の月巳の日巳の刻に生れたゆゑ、それは〳〵念の入つた、蛇の性ぢやわいの。
宮路　それはマア……よい事でござりますなア。
久國　初めて承つた葛城どのゝお年。巳の年巳の月巳の日巳の刻の誕生とは、ハテ珍らしいが、それは格別、いつ下からうか知れぬ小山三。それより奥へ推參して、元春に面談せう。
ト立ちあがるを見て
葛城　イヤ、マアお待ちなされませ。取亂したる病の床へ、どうしてあなたを
久國　ハテ、いらぬ斟酌
ト振り拂つて
ト奥へ行かうとする。葛城、入れかはつて
元春に
葛城　ても性急な久國さま。
久國　生れついたる短氣の蟲、奥へ踏んごみ、面談なすワ。
ト兩人、思ひ入れ。この時、向うにて
小山　待つた。

葛城　ありや慥かに小山三どの。

小山　元近、歸館いたしてござる。まづ／＼お扣へ下されい。

ト大小入り、亂れのやうなる鳴り物になり、小山三、持上下衣裳にて出てくる。跡より團八、奴の形にて、小山草履を持ち、附添ひ出て、直ぐに本舞臺へ來り、小山三、兩人の中へ入る。

宮路　小山三さま、只今お下がり遊ばしましたか。

ト久國、團八を見て

久國　ヤア、其方は

ト團八「ア、モシ」と思ひ入れ。これにて皆々よろしく住ふ。

小山　これは／＼、駿河の前司久國どの、只今あれより見受けますれば、姉者人と、何事のお爭ひでござりまするな。

久國　イヤ、貴殿のお下がりを相待ち居つた。あまりの事に待侘びしさ、奥へ參つて御舍兄と。それを兎や角、後での氣の毒。

小山　して又、拙者をお待ちの仔細は

久國　外でもござらぬ、佐々木の一族、狩野四郎次郎元信こそ、大切なる預かりの、日月の印を紛失させし大罪人、剩へ嬰子糵若、銀杏の前もろとも同道なし、皆暮れに行くへ知れず、名古屋山三元春には、親しき知音の事なれば、隱まひ置かるゝは定の事、受取り立歸るやうにと、久國御意を受けて參つた。とく／＼お渡し下されい。

小山　こは存じも依らぬ只今のお詞。尤も四郎次郎儀は、我れ／＼が親、名古屋山左衛門が、元服烏帽子親となつて、元信と名乘ります仲ながら、佐々木の家沒落の後は、音信とても承らねば

團八　イヤ、憚りながら、左樣でもござりますまい。文通の儀はこの奴も、思ひ當つた儀もござりますれば

葛城　コリヤ／＼、新參者の其方が、何を存じて。殊に其方達が口出し致す席ではない。扣へて居やうぞ。

久國　ア、コレ／＼、葛城どの、其やうに叱らつしやるな。跡先も辨まへぬ、下郎とは云ひながら、存じた事なら申すが正道。ヤイ、して、如何いたした。

團八　サア、元信がこの館に、隱まひあるかないか、そこのところは存じませぬが、とつくりお尋ねなされたら、在所は慥かにそんじよそこ、實正知れぬといふ事は

小山　ヤイ／＼、默り居らう。すりや、其方が心では、元

信が在所、我れ／＼が
葛城　滅多な事を口外して、主人へ難儀をかけるのか。
團八　でも、定めしその在所を
小山　まだ吐かすか。慮外な奴の。この所に用事はない。
次へ立て／＼。
團八　ネイ。
葛城　宮路、其方も次へ立ちや。
ト思ひ入れ。
宮路　畏まりました。
團八　そんなら、お旦那。
ト久國と顔見合せ
ドレ、大部屋で休息せうか。
ト合ひ方になり、團八、宮路、下座へ入る。
葛城　ほんに、下部といふものは、何を聞いてか、しども
ない、をかしいものではあるわいの。
ト久國、小山三の側へ寄り
久國　小山三、もし隠まひなくば、ないにして、いづれに
居るか、行くへが聞きたい。
小山　これはしたり、久國どの、下郎が詞を誠にして
久國　イ、ヤ、たとへ下郎が申さずとも、在所はよつく存

じの筈。小山三どのが云はずば、山三の奥方、存じた
所を申してくりやれ。
葛城　夢いさゝか存じませぬ。
久國　アノ、小山三も
小山　毛頭存ぜぬ。
久國　然らば身共が、刀にかけて
小山　アノ、某に
久國　云はして見せう
小山　そりや、如何して
ト久國、刀へ手をかけ立ちあがる。小山三、突き廻し
て立ちあがる。葛城、この中へ入り、三人よろしくち
よつと立廻り。小山三の懐より摺込みの袱紗を落す。
久國、手早く取上げ、裏の發句を見て
久國　「傘に塒かさうよ濡れ燕」―
小山　それを。
ト來るを、袱紗を持ちかへ
久國　傘は名古屋の即ち定紋、濡れ燕はどれ合ひの、四
郎次郎と銀杏の前、塒かさうは隠まはんと、書面を憚か
る袱紗の返書、元信どのへ元春と、書いてあるのが何よ
り證據。發句にそれと底意は知れた。これでも在所は知

れぬのか。

小山　サア、それは……とは申すまい。

久國　なんと。

小山　余に燕を取なせしは、五月雨月の兄が秀逸、自讃心で取あへず、短册ならぬこの袱紗、拙者が方より元信へ、送らんものと思ふうち、佐々木の家は沒取ゆゑ、ツイそれなりに懷中なし、この場の仕儀に迷惑至極。

葛城　元より知らぬ在所のお尋ね……必らずともに久國さま、疑ひお晴らし下さりませ。

久國　すりや、どうあつても知らつしやらぬか。

小山　如何にも。

久國　そんなら面晴れ、佛神かけて、この誓紙へ血判おしやれ。

ト懷より連判狀を出す。小山三、受取り、開き見て

小山　こりや逆意の連判。

ト久國、引取り

久國　この誓紙へ血判するか、ならにやア在所を云ふ心か。

ト小山三、思ひ入れあつて

小山　在所知らねば云ふ事も、なんと誓紙へ、血判いたさう。

久國　すりやアノ、これへ。

葛城　ア、コレ、滅多な

小山　モシ……兄も勸めて共々に

葛城　すりや後までは何事も

小山　拙者が胸に

葛城　包む袱紗の

久國　發句の手爾波。

小山　奧の一間で、暫しが間

久國　小山三どの、久國奧で、相待ち申すぞ。

ト唄になり、久國、奧へ入る。兩人、後見送り、二重舞臺へ上がり

小山　元信一家が忍び居る、在所を探す前司久國、何卒佐々木の越度となりし、寶の印を詮議なし、めでたく家の再興を、なさせんまでは當館に、密かに隱まひ置かせんと、心を籠めし袱紗の一句。

葛城　ほんに味よう云ひくろめ、一つは遁がれ又一つ、朧氣ならぬ誓紙の連判。してマア事の納まりは。

小山　ハテ、互ひに云はれぬ在所と連判。事に望めば愚人の久國。

ト討つて捨てるといふ思ひ入れ。

葛城　それでは、もしや
小山　武士の身の上、義ゆゑに命を
葛城　エ。
ト思ひ入れ。
小山　モシ。
ト制して唄になり、障子下りる。ト、どろ〳〵になり、よき所より夜叉丸、矢張り、座頭の形にて、印を結びたるまゝセリ上がる。ト直ぐに引抜き、誂らへの形になり、本縛樂のあしらひにて、夜叉丸あたりを見廻し、思ひ入れあつて
夜叉　建武の花を榮えたる、吉野の皇居も時なるかな、いま義政の世に到つて、南朝方は跡もなく、亡びし中に我れ一人、その場を遁がれ身を忍び、竹杖外道の奇術を學び、折を窺ふ岩倉の夜叉丸。然るに天竺德兵衞が、謀叛に與みし、この館へ、座頭となつて入込んだも、名古屋の重寶、飛龍丸の一振り、天下を掌握なさんには、無くて叶はぬ名劍ゆゑ、德兵衞にも今日姿を變へ、共々に入込む筈。どちらへなりと取り得れば、大望成就は疑くうち。ドレマア、そろ〳〵寶藏から、飛龍丸の在所を嗅いで見ようか。

ト下の方へノサ〳〵來ると、障子の內にて
久國　怪しい賣僧め。そこ動くな。
ト管絃になり、障子上がる。久國、其盆を押へゐる。
夜叉丸、見て
夜叉　こりや最前の久國とやら。我れを捕へて云ふ事ありとは。
ト此うち久國、下へ下りて
久國　汝が入込む初めより、只者ならぬと思ふに違はず、その振舞ひ。望みある身の某へ、幕下とならば見遁がしくれん。心を改め、味方なさんや。
夜叉　ハヽヽヽ、如何にも久國、よい推量。我れこそ南朝、恩地が一族、四海を騷がす岩倉夜叉丸。汝如きに身をひそめ、膝を屈する者でない。無益の事を云はうより、某に味方しろ。
久國　ヤア、舌長なその一言、我れに與みせぬ者ならば、此まゝ見遁がし置くべきや。三寸繩に縛しあげ、室町御所に引ッ立てるぞ。
夜叉　ヤア、いらざる愚人め。たとへ鎖に繫ぐとも、神變不思議の幻術にて、忽ちこの身は雲霞、滅多にわいらが手に合はうか。

久國　そこを手練の太刀先にて、夜叉丸、汝を
ト白刃を拔いて切りかける。夜叉丸、キッと印を結ぶ。
ドロドロになり、久國、動かれぬ思ひ入れ。此うち奥
より小山三、下座より團八出かけこれを見て
小山　さてこそ怪しき、をこのえせ者。
團八　ドレ、奴めが引ッ縛つて。
ト かゝる。同じく五體竦む。
小山　者ども、來れ。
トこれにて上下より股立ち鉢卷き侍ひ二人づゝ、鐵砲
を持ち、バラバラと出て
侍ひ　曲者、動くな。
ト取卷く。
小山　身動きなさば、火蓋を切らうか。
夜叉　サア
團八　腕を束ねて繩かゝるか。
夜叉　サア
皆々　サアサアサア
小山　ソレ、打ちとめい。
侍ひ　ハッ。
ト筒先を向ける。

夜叉　ソレ。
ト舞臺前の水艚へ見事に飛び込む。パッと水煙り立つ。
皆々これをキッと見て
皆々　これは。
久國　詮議ある曲者は、この水中へ飛び入りしか。
小山　出口々々をさし固め、門戸を閉おて館の隅々、吟味
いたさば召捕らん。必らずぬかるな。
團八　油斷ならぬは水門口。正しく拔け道。
小山　其方達は、急いで裏手へ。
團八　心得ました。
ト侍ひは下座へ入る。團八は花道へ、ツカツカと行く。
よき程に向うにて「上使」と呼ぶ。これにて皆々思ひ
入れ。
久國　ナニ、上使とな。
小山　元近下城の折までも、何御沙汰なき上使の入來。合
點ゆかざる今日の仕儀。
ト思ひ入れ。
久國　仔細は兎もあれ義政公より、上使とあれば、出迎ひ
召され。
小山　志賀內、引け。

團八　ハツ。

ト　これにて團八、引返して下の方へ入る。太鼓謠になり、向うより德兵衛、燕手、長上下にて出て來り、花道にとまり

德兵　足利將軍義政公より上使として、新參ながら罷り越したる、不破伴左衛門重勝。

小山　俄の事ゆゑ、設けの席もしつらひませねど、まづまづこれへ、お通り下され。

德兵　上使でござれば罷り通る。許し召され。

ト　太鼓謠の切れにて、德兵衛、本舞臺へ來り、ズツと上へ通る。

小山　出仕は一つ室町ながら、未だ知る人にも相成りませぬ。拙者は主、名古屋山三が弟、同苗小山三元近でござる。

久國　某ことは、駿河の前司久國、折よく來合せ、貴面いたす。

兩人　以後はお見知り下されい。

德兵　これは〳〵、拙者はこの度義政公の、お見出しにあづかる、不破伴左衛門重勝でござる、以後は別懇に賴み存じます。

小山　何かさて、思ひ設けぬ上使の趣き、一通り仰せ聞けられ下さりませい。

德兵　如何にも。

ト　席を改め

義政公よりの上使。

小山　ハア、。

德兵　この度、若君義尙公、御誕生の嘉儀として、義政公より名劍のお授けあるべきところ、然るべき一振なし。これに依つて、名古屋の家に相傳なす、飛龍丸の太刀、差上げよとの嚴命、了承あつて重勝へ、急ぎ一腰、渡されてよからう。

小山　すりや、家の重寶、飛龍丸の一腰……御所望あるは身の面目、何しに違背はござらねども、兄元春へ一應申し聞け

德兵　上使と聞けば早速に、出迎ふ筈の名古屋山三、上を恐れぬ無禮の仕方。

ト　きつと云ふ。この時、下座にて

葛城　館の主、名古屋山三、お上使樣へ、お請け致すでござりませう。

ト　管絃になり、葛城、銚子、杯を持ち出る。德兵衛、

見て

徳兵　こりや元春と思ひの外、して其方は

葛城　即ち山三が妻の葛城。元春ことは、いつぞやより所勞によつて、室町御所の出仕も止め居りますれば、義政公にもよう御存じ。それゆゑ妻の私しが名代。

徳兵　して、仰せ越されし上使の趣き、とくと承知いたされたか。

葛城　成る程、あれにて承知いたしてござります。御上使樣には御酒一獻、久國さまにも御相伴。

ト銚子杯を徳兵衞が前に置く。

久國　イカサマ、身共も御上使の、お相いたすでござらうか。

小山　餘りと申せば粗末の至り。ハテ、何をがなおもてなし……オヽ、幸ひ。

ト合ひ方になり、以前の木琴を見附け、思ひ入れ。撞木の手拭掛けを木琴の上に置き、これへ最前の袱紗を帆のやうにして、船に見立て、徳兵衞が前へ持ち來り

取りあへず小山三が、御上使樣へこの島臺。サヽ、これにて一つお過し下され。

久國　見れば以前の木琴へ、手拭掛けた袱紗の眞帆。

徳兵　お心添への寶船、イヤ、どうも云へませぬ。

ト杯を取上げる。葛城、つぐ。

小山　イヤ、こりや福神の船ならず、國々渡海の廻通船。

徳兵　なんと。

ト思ひ入れ。

小山　板子一枚下は地獄と、恐ろしき業とはいへど、馴れては安き浪の上、その世渡りを引かへて、いらざる企て船頭が、山の上越す天下の望み、及ばぬ事に身の果は、獄門の木にかゝるであらう。

徳兵　イヽヤ、獄門合點、磔刑承知。望みかゝつた大綱の心をなんぞ雀が知らん。あぐちも切れぬ小山三が、我れをもてなす船の島臺。心に叶はぬ。持つて下がれ。

ト立ち際に木琴を蹴返す。ドロ〳〵になり、この木琴の内より、以前の髮の毛の蛇出て、這ひまとふ。徳兵衞、これを見て怖るゝこなし。皆々キッと徳兵衞を見て

葛城　又もや以前の落毛の蛇。

小山　出づるや否や恐るゝ風情。

久國　こりや重勝にも、蛇は

三人　お嫌ひと見えますな。

　ト これにて德兵衞、キッとなつて

德兵　イヤ、好きでござる。

　ト 其まゝグイと引ッ摑む。蛇、手にうごめく。

三人　アノ、お好きとな。

德兵　好物ものゝ御饗應。重勝、賞翫仕つた。

　ト 懷へ入れ

して、蜷川の名劍は

葛城　後刻あなたへ。

德兵　然らば暫時

小山　御上使樣。

德兵　案内おしやれ。

　ト 唄になり、德兵衞、葛城、小山三、奥へ入る。障子

下がる。久國殘る。下座より團八出て

團八　久國さま。

久國　いま來つたる伴左衞門、正に彼奴こそ天竺德兵衞、

折を見合せ胸中を、明かして彼れと事を計らん。

團八　味方に入れては鐵の、楯をついては敵はぬ德兵衞、

柔らをくれて、此方の一味に。

久國　その儀はちつとも氣遣ひない。それにつけても先達

て、我が取り置いたる佐々木の預かり。

　ト 懷より序幕の日の印を出し

この日の印を山三はじめ、家内の奴等に見せてはむづか

しい。團八、われに暫しのうち

　ト 團八へ渡す。

團八　しつかりと預かりました。拙者がこの家へ身を寄せ

しも、何かの事を嗅ぎ出す爲。

久國　隨分ぬからず心を配つて

團八　合點でござります。

久國　我れはこれより德兵衞を……ソレ。

　ト 絃になり、下座へ入る。

團八　サア、面白くなつて來たわえ。久國さまの望みの通

り、すつぱりうまくゆく日には、おれも忽ち國取り大名、

併し、得てこんな事は、床へ廻る先になつて、貰はれる

やうな日にあふものだ。

　ト 奥にて

宮路　ハイ／＼、畏まりました。

　ト これにて團八、後に窺ふと、矢張り合ひ方にて、下

座より宮路出て

ほんに、今日のやうな忙しい事はないわいの。ドレ、お

燈籠へ灯の用意を
ト下の方へ來る。團八、後より抱きつく
エヽ、誰れぢやいな。惡い事を……爰放して下さんせ。
トやう／＼振り拂ひ、團八を見て
志賀内どのぢやないかいの。

團八　成る程、今は志賀内だが、おしつけ、見やれ、馬に乘つて、槍を突かして見せるワ。コレ、宮路、さうなる時は、おぬしが今ウンと承知さへすれば、直ぐにも女房だ。どうだえ／＼。

宮路　エヽ、毎日々々アタしつこい。わしやそんな事は知らぬわいな。

團八　サア、その知らぬところを敎へてやりたい。ツイマア爰で
トまた抱きつかうとする。突きのけて此方へ逃げる。此うち捨ぜりふ。下座より彦平、ウカ／＼出て、この中へ入る。團八、彦平を捕へる。兩人、惘り。宮路、下座へ逃げようとするを、團八、捕へてくる。

彦平　エヽ、味をやるな／＼。

團八　サア、その味をやらせないから、この通りだ。

宮路　コレイナア、そりやどうなりとぢやけれど、わたしや色がましい事では、どうも

彦平　コレ／＼、そんなら物は相談、おれが水入らずに、仲人してやらうか。

宮路　サア、それでは
ト困る思ひ入れ。

團八　こいつは有り難い。コレ、親分、頼む／＼。

彦平　頼むと云はれては、一番肌を脫がずばなるまい。コレ、姫え、おぬしもどうで一度は、亭主を持たにやアならぬものだ。そんならアノ志賀内と、夫婦になつてやつてくれゝば、おれも頼まれた甲斐があるといふものだ。
ト宮路、思ひ入れ。

宮路　アイ／＼……もう、お前までがそれ程に、云うて下さんす事ぢやによつて

彦平　承知か／＼。
ト宮路うなづく。
サア、値がなつたといふものだ。とてもの事に、爰で內祝言をさせたいものだ。ドレ、西の宮を五ンつく當つて來よう。

團八　オツト、幸ひ爰に銚子杯。
ト有あふ銚子杯を出す。

彥平　イヤ、そいつは奇妙々々。
ト此うち宮路は拔き足して、ソッと下座へ逃げて入る。ドロ〳〵にて、よき所へ誂らへ仕掛けの蛙出る。
兩人、これを知らず、宮路と思ひ
サア〳〵、嫁御から、飮んで獻したまへ〳〵。
ト杯を蛙へさし、酒をつぐ。蛙、酒を飮む。彥平、その杯を團八へやる。團八、酒を飮むうち
めでたく一つ謠はずばなるまい。……高砂や、この浦船に帆を揚げて……めでたい〳〵、子分といへば眞實の子も同然。これから二人ながら、孝行にして下さいよ。
ト蛙、口を動かす。
團八　アレ、舅がよくつて仕合せだと云ひます。
彥平　そりやア嬉しい。成る程、おぬしが惚れたも無理はない。目許なら口許なら、ハテ、尋常な生れつきだぞ。どうぞ早く子を生んで、孫の顏を見せて下さい。
ト蛙、口を動かす。
團八　なんだ、もし女の子を生んだら、お玉とつけよう……お玉はよからう。
トこれより出鱈目のをかしきせりふ、いろ〳〵あつて
ナニ寢よう。おらア先刻から待ちかねてゐるワ。

彥平　エ、畜生め。
ト蛙の尻を叩く。蛙、ピョイと飛ぶ。
これから手酌で樂しまう。コレ、嫁御、おらア此方を向いてゐるから、ちつとも遠慮はないよ。ハテ、そんな野暮な親ぢやアないわな。
ト此方向いて獨り酒を飮んでゐる。團八、蛙にしがみつく。ドロ〳〵になり、團八の持つてゐた日の印を咬へて、よき所へ消える。團八、悶絕する。彥平此うち心附かず、フト振りかへり、團八を見て呼び生けると、團八、心附き
團八　あの宮路めは
彥平　べら坊め、今まで女房と一緒だつたぢやアないか。
ト團八、懷を探して
團八　ヤア、さては大事の日の印を、取りやアがつたな取りやアがつたな。
彥平　此奴は、いろ〳〵な事を吐かしやアがる。何をおれが知るもので
團八　知らぬと吐かしやア、殺しても取返すぞ。
彥平　うぬ、親に手向ひか、ならばして見ろ。
團八　しかねるものか。

ト切りかける。

彦平　此奴か〳〵。

ト同じく拔いて切りかける。此うち始終薄ドロ〳〵、兩人、切りあひながら下座へ入る。矢張りドロ〳〵、大小の合ひ方になり、障子上がると、徳兵衛、印を結びゐる。この時、今の蛙、日の印を啣へ舞臺へ出る。

徳兵　岩倉の夜叉丸……ナニ、すりやその印だ、佐々木の預かり、日月の印の一つとな。ドレ

ト下りて來て、これを取り、改め見て

誠に……ナナ、ナニ……そりや、氣遣ひおしやるな。飛龍の太刀は、はや某が手に入つたも同然、安堵おしやれ……ムウ、その浪頭の名鏡は、肌身離さずこの通り、

ト懷より序幕の鏡を出し

飛龍丸さへ取り得し上は、貴殿も我れも、かねての本懷、達せん事は瞬くうち、喜ひめされ〳〵

ト始終、蛙と物語りの思ひ入れ。奥にて

葛城　御上使樣、いづれへお越しなされました。

トこの聲にて徳兵衛、蛙に思ひ入れ、薄ドロ〳〵にて蛙、また元の所へ消える。徳兵衛、鏡と印を懷中して何氣なき思ひ入れ。合ひ方になり、奥より葛城、飛龍丸の箱を持ち出で

重勝さま、これにお出でなされましたか。

彦平　葛城どの、飛龍丸は、いよ〳〵お上へ。

葛城　サア、名古屋の家の重寶ではござりますれど、義政公の御所望に、任せますも、一つの譽れと、これへ持參いたしました。イザ、お受取り下さりませ。

ト三方へ箱を載せて、徳兵衛の前へ出す。徳兵衛、トックリと改め

燒刃金色、飛龍の天に映ずる勢ひ、聞きしに優る天晴れの名作。君にもさぞやお喜び、一振り受取る上からは、最早重勝、お暇申さん。山三どのへも、よろしう頼み入ります。

ト飛龍丸を持つて立ちあがる。葛城、思ひ入れ。

葛城　ア、申し。

ト袖を扣へる。

徳兵　御用かな。

葛城　オ、堅。

トぢつと手を持つて、恥かしき思ひ入れ。徳兵衛、振りきり

徳兵　如何めさるゝ。

葛城　サア、こりやアノ……伴左衞門さま、惚れました。

ト顏を隱す。

德兵　ヤ。

ト合ひ方變る。

葛城　女子の果敢ない心から、先刻に初めてお目にかゝり、ても立派な殿御ぢやと、フッと思ふと遣る瀨なう、心で心を幾度か、思ひ返せどいとゞ猶、忘られぬのがこの身の因果。あなたのお氣には染むまいけれど、どうぞ一度は、わたしが願ひを……叶へて下さりませいなア。

ト思ひ切つて云ふ。德兵衞、ムッとして氣を替へ

德兵　ハ、、、、、こりや、葛城どのには、御酒まゐつたな。新參者と思し召し、重勝を弄らつしやるのか。

葛城　なんの、あなたを、勿體ない。

德兵　イヤ、云はつしやるな。承つた事がござる。葛城どのは、もと島原、上林の太夫とやら。山三どのと深く馴れそめ、根曳きされての夫婦仲。その元春といふ、夫のある身で

葛城　サア、そこが花にはうつらふ習ひ。昨日までも今朝までも、山三どのより外の男は、見もせまいぞと思うたも、どうした緣に引かれてや

德兵　そりやアノ眞實

葛城　ハテ、嘘に男に惚れられませうか。

德兵　茲な、いたづら者めが。

葛城　エヽ。

德兵　二世をかけたる妹脊仲、それになんぞや操を捨て、初めて逢ひし某まで、人非人と笑はすや。誠に流石流れの身の、素性を顯はす賤しき浮れ女。伴左衞門は武士ぢやぞ……さらばだ。

トすつと行かうとする。此せりふのうち葛城、面目なき思ひ入れあつて、この時

葛城　さうぢや。

ト德兵衞が持つたる獅龍丸に手をかける。德兵衞、留めて

德兵　こりや、なんとする。

葛城　なんとゝは重勝さま、思ひあまつて女子の口から、恥かしい事云ひ出して、今のお詞聞いて後、どうして生きてゐられませう。せめてあなたのお刀で、死ぬるがわたしの身の本望。留めずと放して。

德兵　イヽヤ放さぬ。死ぬるに及ばぬ。

葛城　とは又どうして。

德兵　それほど我れへ執心なら、心中見た上、得心せう。

葛城　そりやアノ、ほんまに。

德兵　刀にかけて。

ト葛城、思ひ入れあつて

葛城　その心中は

ト德兵衞が持つたる飛龍丸を拔いて、手早く箱の上にて指をポンと切る。大ドロ／＼、これにて德兵衞、苦しみ、茫然となり、懷より序幕の白氣立ちのぼる。諸所にて數多の蛙の聲する。葛城、白刃を持ち、キッと思ひ入れあつて

さては自らが、巳の年月揃ひし血汐を、飛龍丸へ注ぐ時は、蝦蟇の妖術消ゆるとある、夫の指圖に計らふところ、疑ひもなきこの場の樣子。ハテ、不思議な事もあるものぢやなア。

トしやんと白刃を鞘へ納める。ドロ／＼打ちあげる。蛙の聲やむ。直ぐに遠寄せ。德兵衞、心附き、思ひ入れあつて

德兵　よしなき事に、思はぬ隙入り。ソレ

ト葛城を尻目にかけ、立ちあがる。この時、左右より軍兵四人、四天の形にて槍を持ち、ツカ／＼と出て、德兵衞を取卷き

四人　やらぬワ。

德兵　こりや伴右衞門を何とする。

ト下座にて

小山　ヤア、伴左衞門となつて入込みしは、逆賊の張本、天竺德兵衞、幼名赤松政則へ、名古屋小山三見參々々。

トつゝかけにて、小山三先に、宮路、肌脫ぎ、紅絹の襷、長刀を持ち、團八、彥平、脫ぎかけの形にて出て、德兵衞を取卷く。

德兵　ヤア、上使に來りし伴左衞門を、何を以て逆賊とは。

小山　ホヽ、そも汝の來りしより、彼奴こそと心をつくるに、蝦蟇の奇術を行ふのみか

葛城　心も猛き丈夫の、僅かの小蛇に恐るゝゆゑ、それと察せし天竺德兵衞。

宮路　この上たとへ爭ふとも、詮なき事と心を定め

團八　降參するがその身の德兵衞。この志賀內もこれまでの、惡事を悔んで又元の、團八の名に返り忠。

彥平　忠も不忠も內證は、親子の仲で最前は、危なく互ひに討ち果す、命を拾つて幕際へ、似合はぬ顏の實事師。

小山　斯く取卷く上からは、俗姓明かして

皆々　降參なせ。
德兵　ヤア、小穢なる鼠の輩、たとへ本名あればとて、汝等如きに名乘らんや。イデ一々に、目に物見せん。
　ト印を結び、いろ〳〵あつて、その奇特なきゆゑ
ヤ、、、、、これは。
小山　最早如何ほど行ふとも、汝が奇術は消え失せたるワ。
德兵　ナ、なんと。
葛城　よも、合點がゆくまい。夫山三が教へに隨ひ、幸ひ自らが巳の年度、揃ひし血汐を其方に近寄り、この飛龍丸へ注ぎしゆゑ、蝦蟇の妖術、忽ち消えしと知らざるや。
德兵　すりや、色に事よせ葛城が、その名劍にて切り離せし、指の血汐に妖術を挫きしか。チエ、、殘念な。
　ト思ひ入れ。
斯くなる上は我が本名、名乘つて聞かせる、よつく聞け。如何にもわいらが推量の通り、伴左衞門となつて入込みしは、天竺德兵衞、誠は赤松滿祐が一子、天下を握らん大日丸、政則とは、おれが事だ。
　ト肌を脱ぎ、着込みの形にて、キッと見得。
皆々　さてこそな。
德兵　この上は、切つて〳〵切り死だ。どいつも、こいつも觀念なせ。
小山　ヤレ待て政則、飛龍丸の一腰に、過ちなければ仇なき其方、この場は見遁がす、早まるな。
　ト此うち久國出かけ
久國　ヤア、足利の祿を喰みながら、勇氣に恐れ逆賊を、見遁がし歸す大腰拔け。ドレ、某が政則を、
　ト拔いて切つて行く。德兵衞、その手を握つて
德兵　敵ながらも仁ある小山三、その返禮に故あつて、我が手に入りし、この日の印、佐々木のゆかりへ、渡しめされ。
皆々　ナニ、日の印とは
久國　それを。
　ト振りほどいて取りにかゝるを德兵衞、下の方へ突きやる。小山三、下の方へ隔てる。印は葛城の手に入る。
小山　ヤア、汝こそ謀叛の大罪。連判添へて、室町御所へ。
久國　イヤ、我れよりはアノ政則。
德兵　生けよと云ふとも運の窮まり、心に殘るは足利の、この浪頭の名鏡は、池の藻屑と、なすが腹癒せ。
　ト鏡を出して其まゝ前なる水船へ打込み、こなし。ドロ〳〵になり、一面に水氣立ちのぼる。皆々、これを

見て
葛城　すりや、浪頭の名鏡とや。
小山　水氣盛んに、アレ〳〵
久國　奇特は眼前
團八　この場の不思議
彦平　希代な事も
皆々　あるものぢやなア。
　ト此うち德兵衛、二重舞臺へ上がり
德兵　早この上は足利の、惠みに育つ天ヶ下、この土の土
　は踏まざる政則。
　ト一腰を腹へ突き立てる。
小山　殘るは以前の岩倉夜叉丸。取逃がさぬやう
四人　心得ました。
　ト久國、葛城の持つ日の印へ心意氣。
團八　久國、動くな。
德兵　方々、さらば。
皆々　どつこい。
　ト二重舞臺に德兵衛、上の方に小山三、久國に詰め寄
　せ、葛城は日の印と飛龍丸を三方に載せ持ち、宮地は
　長刀を構へ、下の方に彦平、團八、軍兵四人、各々引
　張りよろしく見得、カケリにて　幕
　右幕の間遠寄せ。
　本舞臺、三間の間、眞中に跳らへの樋の口、左右石
　垣。この上へ玉椿の垣根。この前通り浪板。爰に前
　幕の軍兵四人、矢張り四天の形にて、各々槍を搔込
　んで見得。支度出來次第、引返す。
軍一　赤松政則發起なし、切腹したとはいふものゝ
軍二　いま一人の岩倉夜叉丸、尋ね探して討取れと
軍三　仰せは受けしが、その行くへ、いづくに埋んでうせ
　るとも
軍四　搦め捕つたら褒美の山。まづ樋の口が合點がゆかぬ。
軍一　いづれも、一度に。
三人　合點だ。
　ト樋の口へ槍を突ッかける。ドロ〳〵になり、四人、
　苦しみ、目くるめいて左右へ倒れる。バッタリ音して
　本神樂のやうなる鳴り物、時の鐘にて、樋の口明くと、
　中より大蛙、前幕の水船へ打込みし鏡を啣へ、ノタリ
　ノタリと出てくる。この時、四人、心附き
四人　ソレ

ト一度に矢槍を突きかける。ドロ〳〵にて四人、タヂ
タヂとなる。蛙は前の水船へ飛びこむ。四人、これを
見て

オ、、

ト驚ろく思ひ入れ、よろしく、

ひやうし　幕

幕引附けると、ドロ〳〵にて、水船を泳ぎゐたりし蛙、
花道へ飛びあがる。この蛙、引抜きにて、中より夜叉
丸、坊主、誂らへの形にて、鏡を持ち、スツクと立ち
あがり、キツと見得。出端のやうなる誂らへの鳴り物
になり、花道を振つてゆく。よき程に正面を向き、印
を結ぶと、其まゝ夜叉丸、また蛙になり、ノタリ〳〵
と入る。打込み。

第二番目　序幕

生玉境内の場
重井筒の場
木津川堤の場

役名——羽生屋助四郎。赤井長助實ハ茨木逸當。木
戸番、彌十。見世物師、藤六。質屋番頭、利兵衛。
與右衛門妹、お宮。重井筒の女主、妙林。藤六妹
おかね。箱廻し、金五郎。藝者、小さん實ハ元信
妹、繒合。山住伊平太。村越良助。重井筒下女、
おさの。渡し守、又平。木津川與右衛門實ハ土佐
又平重興。

本舞臺、三間の間、淺黄幕。上の方に石の鳥居、こ
の前に葭簀張りの茶見世。お宮、やつし前垂れにて、
茶を汲んでゐる。この床几に妙林、錣のある頭巾、
比丘尼姿の拵らへにて、腰をかけてゐる。正面に逸
當、居合抜きの拵らへにて、刀を差し、小僧を相手
に口上を云つてゐる。下の方に見世物芝居のかゝり、
女の立ち姿を描きし看板を出し、この前に彌十、木
戸番の拵らへにて、札を持ち、呼んでゐる。下の方
に、錢箱に鹽を盛りあげ、柿の幟に大女淀瀧といふ
のを立て、すべて大坂生玉、鳥居前の體。幕の内よ
り口々の仕出し大勢、行き違うてゐる。辻打ちにて
幕明く。

彌十　サア〳〵、評判ぢや〳〵、評判の蛇使ひは、これで

二番目序幕

ござい〳〵。
逸當　お立合ひのお方は皆御存じの、拙者定見世は即ち堂島の御藏前、赤井長助が家の看板、飾り置いたるあの大太刀、後々にては鎖鎌の早業……左樣でござい……毎度御披露いたす齒磨、反魂丹。御用のお方は荷箱の脇へ寄つて、お求めおかれませう……御用なれば居合ひの前方。この間に仰せつけられ下さりませう。
ト齒磨の箱を持つて賣り歩く。仕出し皆々、捨ぜりふにて買つて入る。逸當、こなしあつて
ヤレ〳〵、今日は夥しい參詣であつた。
みや　暑いので、さぞ草臥れなさんしたであらう。
逸當　イヤモ、口が酸くなりました。お宮さん、ぬるくして一杯飲まして下さいまし。
ト妙林を見て
オヽ、島の内の井筒屋の御隱居樣、ようお參りなされました。
妙林　先刻にから見物してゐましたが、いつも〳〵、面白い事でござります。
ト辻打ちになり、向うより助四郎、丁稚附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

助四　イヤア、井筒屋の阿母、この暑いのに信心參りか。
妙林　これは助四郎さん、是が事について、お話し申さねばならぬ事がござります。丁度よい所でお目にかゝりましたわいな。
助四　おれも逢ひたくつて居た所だが、爰ぢやア話しも出來めえ。いつもの所で
妙林　一杯飲みながら話すのかえ、嬉しいねえ。
小僧　モシ、親方、今の間に、わしは辨當にして來ませう。
みや　そんなら、わたしやちよつと、水を一手桶汲んでくるほどに、長助さん
逸當　見世の留守は、わしが番をしてゐます。
妙林　これは女中さん、お世話になりました。
みや　お靜かにお出でなされませいな。
助四　そんなら阿母、サア、參りませう。
ト辻打ちになり、妙林、杖を突き、助四郎と一緒に鳥居の内へ入る。お宮入る。彌十、下りて
彌十　ヤレ〳〵、今日は思ひの外に錢になつた。太夫どのは、さぞ暑かつたであらう。太夫さん〳〵、爰へ來て、ちつと風に吹かれなさい。太夫さん
ト呼ぶ。内にて

藤六　アイ〳〵、何の用でござんすえ。
ト藤六、張り子鬘、顏に化粧したる心にて、着流し、前帶、大女の拵らへにて、大團扇を使ひながら出る。
彌十　オヽ、太夫さん、暑いに御苦勞でござりますなう。
藤六　アイ、これも勤めの苦勞ぢやと思や、さのみ苦勞にもござんせぬわいなア。
ト女のこなし。
彌十　時に、今日は大きに入りもあつたによつて、立前を先へ渡すによ。
ト四文錢な一本、錢箱より出してやる。藤六、取つて
藤六　ムウ、そんならこれが、今日の勤めでござんすかいな。
彌十　不承ではあらうが、マア、それで湯でも飮んで下せえ。
藤六　コレイナア、彌十さん、今日は入もたんとあつたによつて、どうぞまちッと、心を附けて下さんせいなア。
彌十　ハテ、さう云はずと、それで晩まで不承しなせえな。
ト藤六、ムッとして
藤六　なんだ、四文錢一本で、不承しろと云ふのか。
彌十　それだといつて、いくら遣られるものか。
藤六　おきやアがれ、この摺粉木め。さう吐かしやア、おれもモウ大女は否だ。
ト鬘を引ッたくり、尻をからげる。下に足駄を穿いてゐる。
コレ、ヤイ、よく物を積つて見たがよい。この溫氣な時分に日がな一日、女の眞似をして、長い物を引擂り廻つて、靑臭い蛇いぢりは、わしやアしねえワ。コレ、可愛い女にせえ、滅多に貸さねえ代物まで、商賣なりやこそ嘗められても堪忍してゐるわえ。なんでも立前を、殖やして寄越せ〳〵。
逸當　コレサ〳〵、藤六どん、何も稼業づくの事だ。靜かに云ふがよからう。
彌十　それ〳〵、初めからの約束、一本で不足ならば、いくら取る氣だ。なんぼ口の戾らねえ木戸番だといつて、そんなに通りは食はねえよ。
藤六　この野郎め、一本やそこらの錢で、ヂッとしてゐる藤六だと思ふか。うぬア人を、いゝ見世物にしやアがつたな。
逸當　ハテサテ、見世物魂ひ百までといふから、彌十どん、こなたも、もうちつと、大儀をしてやらつしやいな。

藤六　否だ〳〵。錢箱ぐるみ持つて行くわい。
彌十　こいつア飛んだ事を云ふ。持つて行くなら行つて見ろ。

ト鉢卷を締め、立ちかゝる。辻打ちになり、藤六、彌十をくらはす。逸當、支へる。向うよりおかれ、世話女房の拵らへにて、懷に赤子を入れ、出て來り、この中へ入り

かれ　これはしたり、兄さん、マア、待ちなさんせ。
藤六　妹か、邪魔だ。そこを退けやい。
彌十　ぶつならぶつて見ろ〳〵。

ト行くを逸當とめ

逸當　ハテマア、料簡さつしやい〳〵。

ト彌十を連れて鳥居の内へ入る。おかれ、藤六をとめて

かれ　コレ、兄さん、もうよいわいなア。
藤六　ヤイ、妹、この兄はナ、この暑いのに女の眞似をして、蛇まで使つて苦勞をするに、わりやア何をしてゐるのだ。
かれ　イ、エイナア、この子の晝寢が、いつもよりはちつと遲い加減かして、飯拵らへや何かで、ツイ隙取つたわいなア。
藤六　べら坊め、うぬは、その餓鬼にばかり打かつてゐるワ。コレ、その子を預けた與右衞門はナ、この頃は井筒屋の内を、叩き出されてゐるとの事だ。
かれ　そんなら、また元の、木津川へ戻つてかいなア。
藤六　それだによつて、里扶持の金が埒が明かねえワ。なんでもこれから、この子を與右衞門の所へ連れて行つて、これまで溜つた里扶持と諸入用、算用して取らにやアならぬ。サア、妹、木津川へ歩め。
かれ　それぢやというて、與右衞門さんが、大事の子ぢや、頼むというて、預けなさんしたによつて、主ぢやとて、なんの如才がござんせうぞいなア。
藤六　如才も利中散もいるものか。預けを引いても構はねえ。一緒に歩め。

トこの時、赤子の守り袋落ちる。赤子笛。

かれ　マア、待ちなさんせいなア。
藤六　エヽ、うしやアがれといふに。

ト無理に引ッ立て行く。この時、後へ逸當出て、落ちてある守り袋を拾ひ、思ひ入れあつて入る。藤六おかれを引ッ立て、花道へかゝる。辻打ちになり、向うより

與右衞門、着流し、一本差しにて出て來る、跡より利兵衞、質屋にて、掛け物の箱を持ち出る。藤六、與右衞門と花道にて行きあひ

與右　見世物師の藤六どのぢやアねえか。

藤六　與右衞門か。いゝ所で逢つた。おぬしに用があつて行く所だ。

與右　そんなら幸ひ。マア、あそこへござりませ。

ト矢張り辻打ちにて、本舞臺へ來る。與右衞門、こなしあつて

藤六どの、見れば妹衞に、わしが預けた子を抱かせ、この與右衞門が所へ用とは。

藤六　ハテ知れた事。里扶持の溜り、この子の物入り、諸入用引ツくるめて十兩ほどだ。知つての通り、この妹が、男に別れて歸つてゐるうち、こなさんの頼みといつて連れて來た。初めのうちは里扶持も、月々に寄越したが、この頃ではさつぱり沙汰なし。重井筒へ行つて聞けば、疾に内を追ひ出されたとの事。それで、わざ／＼妹を連れて、今お身樣の所へ行かうといふのだ。里扶持を勘定してもらはうかい。

ト利兵衞、こなしあつて、與右衞門が側へ行き

利兵　モシ、與右衞門さん、道々申しました、この一軸の御挨拶は、どうでござります。

與右　質屋の利兵衞どの、その事も承知だが、いま聞く通りの譯だによつて、ちつとの間

利兵　待つてゐるでござりませう。

ト此方へ來てゐる。

與右　藤六どの、段々こなたの云はつしやる通り、無沙汰にしたは惡かつたが、コレ、爰にも急に掛合ひ事　これとてもマア金づく。どうぞ四五日のところを

藤六　これサ、與右衞門、今まで待つた代り、今日は是非とも、逢つた所で笠を脫げだ。十兩の金を算用してくりやれ。

ト此うち揚弓の音になり、鳥居の内より助四郎出て、下の方に聞いてゐる。

利兵　與右衞門さん、此方も急な賣り物。早く挨拶をして下さりませぬか。

與兵　サア、その事も今

利兵　埒が明かずば、望み手のあるこの一軸。お前が是非とも買ひたいと仰しやるゆゑ、先樣を云ひ延して、元金で賣る代物。いま聞いた其方の樣子、十兩位の金を、待

つてくれろの口振りでは
藤六　それ〳〵、覺束なすびの松もどき、甘口ぢやアゆく
めえ。是非勘定が出來ずば、代官沙汰にしても取るによ。
與右　イヤ、それでは。
利兵　質請けの三百兩が出來ますか。
與右　サア
利兵　外へ賣りませうか。
與右　サア、それは
藤六　十兩の金が出來るか。
與右　サア
三人　サア〳〵〳〵、
藤六　どうするのだ。
ト この時、助四郎、前へ出て
助四　その金、おれが拂つてやらう。
ト ずつと出る。皆々見て
三人　ヤア、こなたは。
與右　狩生屋の助四郎どの、こなさんが、この場の手詰め
を
助四　見かねて用立つ男づく　マア、里扶持の十兩をやる
がいゝ。

與右　忝い。兎も角も。
ト 懐より金包みをやる。與右衞門取つて
ト 藤六が前に持つて行き
その子の里扶持諸入用、耳を揃へて十兩とは、足下を見
て胴慾な……イヤ、足手搦みな、どうでお世話。いま暫
らくのうち、厄介にして下さりませ。
ト 金を遣る。藤六、取つて懐へ入れ
藤六　イヤモ、金さへ取る事なら、いつまでも世話をする
のサ
かれ　ほんに、わたしや與右衞門さんに、氣の毒でござり
ますわいなア。
藤六　ハテ、ナニ氣の毒な事があるものか。妹、われはそ
の子を抱いて、片日蔭の出來るまで、本陣の所で
かれ　そんなら連れ立つて、一緒に歸らうわいなア。
藤六　こりやアどなたも、おやかましうござりました。
ト 揚弓の鳴り物にて、藤六おかれ、鳥居の内へ入る
利兵　モシ、與右衞門さん、私しが方の、この質請けは。
助四　利兵衞どの、待つてやらつしやい。
利兵　エ、。
助四　今までは與右衞門が、云ひ延べ立てもあらうが、こ

れからはわしが顔づくで、料簡してやつたがよい、

利兵　ムウ、餘人ではなし、助四郎どのゝ挨拶、待つ事は待ちませうが

與右　そりやア長くとは云ふめえ。三日のうちに請け出す、證據はこの一腰。

ト脇差を取つて利兵衛に渡す。

利兵　この脇差を證據とは。

與右　木津川の與右衛門が魂ひ、こなさんに預けるからは、慥かな證據。

利兵　成る程、しつかりと預かりました。

助四　時に、その質物の一軸とやら、ちよつと見ても大事ないか。

利兵　云はゞお前も懸り合ひ、とつくりと御覽じませ。

ト箱を明けて渡す。助四郎、袱紗を開き、鯉魚の一軸を出し

助四　ハテ、噂に聞いた、これが鯉魚の一軸か。

トいろ／＼見て

成る程、こりやア三百兩もするであらう。イヤナニ、與右衛門、改まつた事を云ふやうだが、いま用立つた十兩の金の、證文がちよつと書いてほしいが

與右　そりやア何枚でも書いてやりませう。

ト硯の無き思ひ入れ。

利兵　矢立は爰にございます。

ト腰より出してやる

與右　さうして、文言は。

助四　おれが望むもをかしい。利兵衛どの、こなた、よいやうに。

利兵　ドレ／＼、そんならわしが、文言を云ひませう

ト與右衛門、半紙を出して書く。

一札の事、一つ、金十兩なり、右は、我れら急に差支へ入用にて、難儀いたし候ふところ御恩借にあづかり、借用申し候ふところ實正なり、返濟の儀は、御入用の節、何時なりともきつと返濟申すべく候ふ。後日の爲、仍て一札件の如し。

ト書いてゐる。此うち助四郎、茶見世の火吹竹と一軸を、摺りかへ、一軸は懐へ入れ、火吹竹を袱紗に包み、箱に入れ。元のやうにして置く。此うち證文を書きしまひ

與右　これでようございますか。

助四　よいとも／＼。

ト疊んで懐中する。利兵衛、一軸の箱を取り

利兵　左樣なら、明後日の夕方

與右　木津川の、わしが宅まで

利兵　お尋ね申して參りませう。

助四　おれもこれから、北向の八幡樣へ參つてゆかう。

與右　助四郎さん、今日は思はぬ、段々の深切。

助四　なんの禮に及ぶ事かな。

ト辻打ちになり、助四郎は下座へ、利兵衛は脇差を差し、向うへ入る。與右衛門、殘り、こなしあつて

與右　ヤレ／＼、藤六に預けたあの子の身の上、どうか斯うかと案じたに、質請けの日延べまで、一寸遁がれといふものゝ、井筒の內でとつくりと、果に賴んだ三百兩、明日までには出來るであらう

ト見世を見て

この妹も、見世を明けて、どこへ行つたか……ドレ、手酌で一杯、頂戴いたさうか。

ト藥罐の茶を飮む。派手な流行り唄になり、向うより伊平太、世話侍ひ。小さん、藝者。おさの、仲居。跡より金五郎、廻し男にて、三味線箱を持つて出る。

伊平　なんと小さん、島の內より、また氣が變つてよからうがの。

小さ　わたしやお百度をあげるによつて、早うお宮へ參りたいわいなア。

さの　小さんさんの願掛けなら、わたしも共々、ナア、金五郎さん。

金五　ハテマテ、茶見世へ

伊平　サア／＼、來やれ／＼。

ト皆々本舞臺へ來る。與右衛門、矢張り上の床几に腰をかけて莨のんでゐる。

これサ、小さん坊、無性やたらに、お百度／＼と、神いぢりも大概にするがよい。さうしてマア、なんの願を掛けるのだ。

金五　ハテ、それは云はずと知れた、戀の願ひの願掛けでござりませう。

伊平　なんだ、戀の願掛けだ。

金五　お前樣のお心が知れぬによつて

ト此せりふの間、おさの小手招ぎして與右衛門、囁く。おさの呑みこみ、鳥居の內へ入る。

伊平　なんと云ふ。身共の心が知れぬによつて

金五　あんまりお前が浮氣だといつて、それで小さんさん

か、お百度をあげて
伊平　願掛けとは有り難い。この伊平太に限つて、なんの浮氣な心があらう。その證據は
ト小さんに抱きつくを振り放し
小さ　エヽ、嫌らしい。
ト突きこかす。この時、鳥居の內より、お宮、出て來て
みや　申し〳〵、伊平太さまとは、お前樣でござりますか。
伊平　ムウ、身共だが、なんぞ用でも
みや　いま神樂堂の前の茶見世で、お屋敷の衆が、急に逢ひたいによつて、連れまして來いと、待つてござるわいな。
伊平　ナニ、屋敷の者が逢ひたいと。
みや　ちよつとお出でなされませいな。
伊平　それでも今爰に、ちよつと仕掛けた
みや　イエ〳〵、早うお出でなされませいなア。
伊平　オヽ、サ、行くは行くが
みや　マアお出でなされませいなア。
ト辻打ちになり、お宮、伊平太を無理に連れて入る。
小さ　ほんに、いつも〳〵アタ嫌らしい。あの伊平太づら。
金五　丁度よい所へ呼びに來たといふもの。

與右　そりやアこの與右衛門が、ちよいと思ひ附きされ。
ト前へ出る。
小さ　ヤア、與右衛門さん
與右　あの茶見世で見てゐたが、邪魔になりさうなと見たゆゑに
小さ　そんならお前が
與右　仲居のおさのに云ひつけて、妹を似せ勅使、邪魔は彼方へやりましたが
ト思ひ入れあつて、前へ出ると、合ひ方になる。
小さんさま、外ならぬ事、遠慮はなけれども、帶解村にござる兄御、元信さまから、お便りがござりましたか。
小さ　この間、文の便りの御返事に、段々御病氣もお心よくなりましたとの事ぢやわいなア。
與右　それは何より。兄御の病氣さへ御本復なら、その上にては、追ひ〳〵御吉事。それについて、いつぞやお預け申しました、アノ月の御判は
小さ　肌身離さず、持つてゐるわいなア。
ト懐より守り袋を出して見せる。
與右　それさへござりますれば、おッつけ世に出る時節もござりませう。隨分ともに御大切に。

ト小さん、懐へ入れる。

金五　この金五郎も蔭ながら、こなたの深切、何やかや、小さんの話しに

與右　申せば長い一通り。餘人が聞いては憚る事。私しも爰に長う居りましたら……何かのお邪魔に

小さ　なんの、そんな事が

ト與右衛門、こなしあつて

與右　「二人になつて入るや門涼み」……ゆるりとこれで

ト小さんを押しやり

お涼みなされませ。

ト唄になり、與右衛門、二人へこなしあつて入る。あと合ひ方。

金五　ほんに、いつとても深切な與右衛門どの、二人が事を何となく、粋を通して今の詞。この金五郎は、どうやら氣の毒にもあり

小さ　なんのマア、それ知られたが大事かいなア。樂しみなうては勤まらぬ。あの與右衛門さんぢやとて、累さんに

金五　逢ふ夜の數の重井筒、人目忍んで小格子に、戸のたてられぬ人の口、ふさぐ時には、わしも其方に

小さ　無理云はるゝは女の心で

金五　嬉しいといふはきつい嘘。

小さ　アレ、又あんな事を

金五　そんなら眞實

小さ　お前に逢はうと、今日の他所行き。

金五　首尾が叶うて

小さ　金五郎さん

金五　小さん

小さ　オ、嬉し。

トこなしあつて抱きつく。この時、後に伊平太、藤六が連れ、出て來り

伊平　二人ながら、見附けたぞ／＼。

ト兩人、驚ろき

小金　ヤア、お前は

ト恟り、うろたへる。藤六、鉢卷をしめ

藤六　ヤイ、此奴等は、伊平太さまをはぐらかして、盗み喰ひをしたな。

金五　ア、イヤ、滅相な。そんな覺えはござりませぬ。

伊平　默りやアがれ。おれが後で聞いてゐれば、金五郎さん、小さん、オ、嬉しいと、抱きついたでないか。おれ

か不義者見附けた。動くなと云つたは、こりやマア芝居でも極まつてゐるせりふだ。二人ながら覺悟しろ。

小さ　たとへ、どんな事があらうとまゝ、金五郎さんに科はござんせぬ。わたしが放埒。

藤六　ソレ、見やアがれ。叩いて見たら、まだ何を吐かさうも知れぬわい。

伊平　これサ、藤六、あの野郎は云はゞ間男、ぶち殺しても大事ねえ。

小さ　コレイナア。どうぞ滅多な事して下さんすな。

藤六　やかましいわい。おれも伊平太さまに云ひ附けられたからは、見世物師の藤六が、いま出來合ひの侍ひになつて、わいらをどうするか見やアがれ。

ト辻打ちになり、後に飾つてある居合拔きの太刀を持つて來て腰に差し、腰に鎖鎌を持つて思ひ入れ。此うちに向うより、良助、大小、足輕の拵らへにて、赤合羽と柳行李を割掛けにして、菅笠を持ち、息せき出て、舞臺へ來て、小さんを見て、ちよつと思ひ入れあつて、下の方、小屋の前に窺つてゐる。藤六は、大太刀を差し、前へ出て

コレ、見たか。柄鞘かけて八尺六寸、赤銅作りの、この鎖鎌の早業、うぬらが手足を叩き落すぞ。

ト突張り返つて邪魔になるこなし。

小さ　何を阿房らしい。それで人が切られるものかいなア。

伊平　エヽ、いま〳〵しい。これサ藤六、そんな眞似をせずと、小さんを引摺つて行けサ。

藤六　合點でござります。

ト行くを金五郎とめて

金五　モシ、藝者は廻しの預かりもの。滅多な事さつしやりますと、料簡しませぬぞ。

藤六　エヽ、やかましいわい。自體、うぬが邪魔になるわい。

ト矢張り辻打ちにて、金五郎を引附け、鎌にて打たうとする。伊平太、小さんを捕まへる。藤六、鎌を振りあげる。この時、鎌の先拔けて、良助が前へ飛ぶ。良助、思ひ入れあつて、鎌を取り、額へちよつと疵を附ける。伊平太、藤六、これを知らず

伊平　サア〳〵、藤六、來やれ〳〵。

ト小さん金五郎を引ッ立て行きさうにする。この時、良助、前へ出て、伊平太を突き廻し、立ちはだかり

良助　お侍ひ、待たつしやい。

伊平　なんだ、此奴は。見ればワイ〳〵天王見たいな形をして、この伊平太に待てと云ふは

良助　用がある。

伊平　なんと。

良助　なぜおれが額をぶち割つた。

　ト鎌を出して見せる。伊平太、藤六、悄りして

伊平　ヤア、そんなら今の鎌が飛んでか。これがほんの、鎌飛び頭驚ろけども人知らずだ。おらア知らねえ、知らねえ。

小さ　ほんに額に

　ト小さん、良助を見て

ヤア、其方は。

　ト思ひ入れ。

良助　ア、イヤ、往來の旅人、御主人の御用で急ぎの道、出合ひ頭に額に疵がついては、料簡ならねえといつも、こいつも、マアさう思つて居をらう。

　ト眞中へドッカリと坐る。伊平太うろたへ、藤六、俄に鉢卷を取り、太刀を差したなり、良助が前に手を突き

藤六　これは〳〵、お侍ひ樣、成る程、これは畢竟、怪我のはずみと申すもの。何分にも御料簡を

良助　やかましいわえ。人の面體へ疵を附けて、料簡しろで事が濟むかえ。

　ト脇差をヒラリと拔いて見せる。藤六、ギョッとする。良助、脇差を構へて

サア、この場に居合せた奴等は、殘らず切つて切り死だ。さう思つて覺悟しろ。

　ト構へる。

伊平　ア、コレ〳〵、待つた〳〵。早まるまいぞ〳〵。

　ト藤六を連れて來て、金で扱ふがよいと仕方する。良助、構へてゐる。

藤六　ヘイ〳〵……ヘ、、ハ、、、、。成る程、段々お腹の立つのは、御尤もでござりまするが、外に誰れも居合せたと申す譯でもなし、近頃不躾ながら、疵の御養生で濟みます事なら、そこの所は此方から

良助　療治代を出さうと云ふのか。

藤六　左樣でござります。

良助　料簡いたし憎い所なれど、主人の用先、心が急く。して、その療治代は、マア、如何ほど。

　ト伊平太、指を二本出して見せる。藤六、見て

藤六　先づ輕少ではござりまするが、金子二兩で
良助　イヤ、料簡否だ。
藤六　エヽ。
良助　金二兩で料簡したと聞えては、矢ッ張り切り死がましだわい。
　ト脇差を構へる。
藤六　ア、申し、お待ちなされませ。左樣なら金五兩で
良助　イヽヤ、料簡ならぬ。
藤六　左樣なら、ズッと飛んで、十兩々々。
良助　ムウ、十兩なれば
藤六　御料簡がなりますか。
良助　して、その金子は。
藤六　畏まりました。
　ト伊平太の方へ來て
サア／＼、いろ／＼に根切つて、やう／＼十兩に極めました。
伊平　それはお骨折り。先づ茶を一杯。
藤六　伊平太さま、早く金を出さつしやりませ。
伊平　イヤサ、その金は藤六、おぬし、ちよつと貸してくりやれ。

藤六　エ、。
伊平　先刻われが、里扶持に取つた十兩、地內で見せたのを、ちよつと貸してくりやれ。
藤六　アノ、この十兩を
伊平　元の起りは、てめえが仕出來した事だ。ハテ、親の物は子の物といふぢやアないか。
良助　サア、十兩は、どうだな／＼。
伊平　アレ／＼、あの通りだ／＼。
藤六　エヽコレ、出しは出すが、伊平太さん、大分お前にも貸しがある。
　ト云ひながら、懷より最前の十兩を出して
ハイ、療治代の金十兩。
良助　慥かに受取つた。
藤六　コレ、伊平太さん、何の仲でも勘定は勘定、きつとして下さりませ。
伊平　ハテ、善は急げ、勘定は勘定にするがいゝ。
良助　そんならこれで、小さんとやらの事も
伊藤　云ひ分はねえのサ。
　トこの前より妙林、出かゝりゐて、この時
妙林　イヤ、その云ひ分は、此方にあるぞや。

ト前へ出る。皆々見て

小さ　ヤア、お前は

伊平　亀井筒の妙林。

妙林　内の抱への藝者の小さん、廻し男に只なくさまれては、藝者屋の暖かり干あがりますわいの。

良助　すりや、こなたの内の抱へゆゑ、しつかりと買はにやなりませぬ。

妙林　小さんが揚げ代、いつぞや島の内の内へござつたお侍ひ見れば、こなたは、ちやが

良助　如何にも、身共は小さんが身寄りの者。
ト懐より今取つた十兩の金を出し

良助　揚げ代に、ソレ十兩。

妙林　アノ、この金を

良助　取つて置きやれ。
ト妙林、取上げ見て

妙林　今まで、なんぼ損をした事やら知れぬが、雜用ぐるめに、負けて置かうか。
ト懐へ捻ぢこむ。雷鳴の音、靜かにする。妙林、思ひ入れ

ア丶、情ない、夕立がするさうな。

伊平　イカサマ、少しごろつくやうだが
ト下座よりおさの、駕籠舁きに駕籠を吊らせ、出て來て

さの　どうやら夕立が來さうなゆゑ、駕籠を云うて來ましたわなア。

妙林　オヽ、そりやよう氣が附いた。サア、小さん、夕立のせぬうち早う去にませう。

小さ　わたしや、まだ願掛けがあるゆゑ

妙林　内へ戻つて、晩方なりと行きやいなう。

良助　そんなら、もうお歸りなされまするか。何事も拙者が後から、ナ、御合點でございまするか。
ト小さんに呑みこます。

妙林　廻し男は猫に鰹節、駕籠にはわしが附いて行くが、併し又夕立で、ゴロ〳〵は來やせまいか。

藤六　妙林どの、よい物がある。この鎌を、雷のまじなひに提げて行くがよい。
ト鎖鎌を妙林にやる。妙林、取つて

妙林　成る程、こりや好い物がある。雷除けに持つて行きませう。

良助　金五郎どのには、外にお話しもあれば

金五　地内の茶屋まで御一緒に
　ト此うち小さん、駕籠に乘つて
小さ　そんなら金五郎さん
　ト金五郎へ思ひ入れ。妙林、駕籠の垂れを下ろし
妙林　サア、駕籠やつてもらひませうか。
　ト辻打ちになり、妙林、鎌を持ち、おさの、駕籠に附いて向うへ入る。金五郎良助、鳥居の内へ入る。跡に伊平太、藤六、殘る。
藤六　なんの事だ。まんまと十兩、棒に振つたワ。
　ト呆れる思ひ入れ。揚弓の音にて、下座より助四郎出てくる。
　こりやア助四郎さまか。
助四　藤六、どうだ。引ッ張り物は錢になるか。
藤六　蛇使ひの押ッかぶせで、マア、相應でござります。
助四　時に、先刻は云はれなんだが、この間頼んで置いた
藤六　彼の毒かい。
助四　これサ。
　ト伊平太へ思ひ入れ。
藤六　ナニ、大事はござりやせん。わたしらが仲間は、どことい ふ事はねえ、ほつき歩くが商賣で、見込みで高野の玉川の水を、取つてくれろと頼ましやつたゆゑ、流しの六兵衞に云ひつけて、コレ〳〵、取寄せたこの毒水。
　ト見世物の錢箱の中より德利を出し
　こりや何になされますえ。
助四　おぬしに何も隱す事はねえ。おれが育ッたけ惚れてゐる女めに、足があつて邪魔になるゆゑ、もし、いよいよ妨げすれば、この毒水でコロリ山椒。
藤六　柳の下で水ぢやアねえ、毒とはいゝ思ひつきサ。
伊平　コレ〳〵、藤六、なんと、おれもちつと入用だが、配分する事はならぬか。
助四　イエ〳〵、わしが取りにやつた物だから、外へは
伊平　成る程、これも尤も。
藤六　いま持つてござりますか。
助四　イヤ〳〵、取りに寄越すまで、預かつてもらひたい。
藤六　そんなら、この毒は、矢ッ張り錢箱へ。
　ト元の錢箱へ入れる。此うち與右衞門、ちよつと出てこれを見て入る。
伊平　時に、おれも社内に用があれば。
藤六　モシ、助四郎さん、あれを取りに寄越す時、丸じるしは、合點かえ。

助四　ハテ、よく錢にびろつく男ではあるぞ。
ト辻打ちになり、伊平太、鳥居の内へ入る。助四郎は向うへ入る。直ぐに逸當、捕り手を連れ、出て來り
逸當　ソリヤ。
捕手　動くな。
ト藤六を取卷くゆゑ、倒りして
藤六　ヤア、居合拔きの長助どの、こりやどうだ。
逸當　我れこそは山名の家來、茨木逸當。姿をやつしたは仔細あつて……家來、大小。
捕手　ハツ。
ト藥箱の後より、兩腰を出して渡す。
藤六　して、私しへの御詮議は。
逸當　最前外より預かりしと、其方が妹の介抱の子悴は、佐々木賴賢が忘れ形見、豐若であらうがな。
藤六　イ、ヤ、一向に覺えござりませぬ。
逸當　隱すまい。證據は最前拾ひ取りし、笹鶴錦のこの守。こりやコレ佐々木家より外にあらざる品。殊に誕生の年月日時、符合なせば、豐若に極まつた。御主人樣の妨げ、尋常に渡せばよし、異議に及ぶと、藤六、われが身の上だぞ。

藤六　ア、モシ／＼、佐々木とやら、一向に私しは存じませぬが、いよ／＼それに極まれば、なんのお隱し申しませう。首を切るとも、燒いて食ふとも御勝手次第。
逸當　すりや、某に渡すか。
藤六　サア、渡しは渡しませうが、妹めが可愛がつてゐるゆゑ、譯を聞かせて、密かに私しが
逸當　必らずぬかるな。
藤六　モシ、御褒美は承知かえ。
逸當　豐若と引替へ。
藤六　畏まりました。
逸當　某は罷り歸る。其方は後に殘り、荷箱片附け夕方に。藤六、キッと申しつけたぞ。
ト神樂になり、逸當、家來を連れ、向うへ入る。藤六に捕り手附き、鳥居の内へ入る。下座より與右衛門。良助、出て來り
良助　土佐の又平重興さま。
與右　コレ。
ト押へる。合ひ方になる。
良助　成る程、今のお名は、木津川の與右衛門さま。よい所で、お目にかゝりました。

與右　村越良助どの、なんぞ火急な御用かな。

良助　サア、改め申すには及びませぬが、後室の惡事より、元信さまの御難儀、妹御も淺ましい藝者奉公、何かにつけて、お世話になるはこなたばかり。佐々木家の若君まで引取り、お世話下さるその中へ、心ないと思し召しませうが、かねて申しあげ置きし通り、彼の月の御判、鯉魚の一軸、差上げなば、佐々木家は元より、元信さまにも本地へ御歸參と、勝元公の御推擧、御内縁ある勝元公、密かにお使ひ。畏まつたと飛んで參つた、仔細は斯くの通りでござります。

與右　サア、その儀もかねて御内意ゆゑ、月の御判は先達て尋ね出し、お妹御小さんさまへお預け申し、鯉魚の一軸の儀は、何者か質入れ致しあるを聞き出し、此方へ請け戻す約束なれど、何をいつても三百兩。

良助　左やう承つたゆゑ、僅かで御用に立つまいなれど、忠義のはしくれ、お受取りなされて下さりませう。

ト内がひより百兩包みを出し、扇に載せて置く。

與右　こりや百兩……不躾ながら、貴樣の御身分で

良助　忠義の爲と、たつた一人の娘を

與右　天晴れ……ハテ、小身者には惜しいお人。

良助　何とぞ跡の二百兩を

與右　その儀は、わしが女房累、今日のうちに拵らへる約束なれど、姑の不機嫌で、家出いたし居れば、わしが名代に、島の内へござつて、女房と對談して下さりませ。

良助　イヤモウ、折々參つて、お見知り申す累さま。

與右　女房を褒めるぢやないが、隨分働らき者、深切もある女一疋。

良助　左樣なら、直ぐにこれから參りませう。

與右　わしも一緒に、そこまで行きませう。

良助　そんなら與右衞門さま。

與右　サア、行きませう。

ト辻打ちになり、兩人、向うへ入る。奥バタ／＼にて藤六、赤子を抱き、出て來り、ウロ／＼するうち、又バタ／＼するゆゑ、居合抜きの藥箱へ赤子を隱し、うろたへて下座へ入る。下の方より、お宮、出て見てゐて、藥箱の子を出し、錢箱を明け、中の徳利を出し、跡へ子を入れ、徳利は今の藥箱へ入れ、下の方へ入る。矢張りバタ／＼にて、下座よりおかね、藤六を追うて出て來り

かね　コレ、兄さん、預かつた子を、どこへやらしやんし

たべら坊め、おれが知るものか。

藤六　かれお前が拖いて來て、知らぬといふて濟むかいなア。

藤六　濟まうが濟むまいが、打ッちやつて置きやアがれ。

ト辻打ちにて藤六、薬箱を抱き、おかれを蹴飛ばし、一散に向うへ入る。おかれ、捨ぜりふにて向うへ入る。下座より伊平太出て

伊平　最前聞けば、色の邪魔をする奴を、毒で殺すとは、よい思ひつきぢや。あの金五郎めを

ト見世物の錢箱を持出すところへ、下座よりお宮出て、この體を見て

みや　こりや、この箱を、どこへ持つて行くのぢや。

伊平　エ、わいらが知つた事ぢやアない、そこ退け。

みや　イエ、その箱にはちつと

ト錢箱を爭ふうち、金五郎出て、伊平太を留め

金五　何か知らぬがその錢箱、いるなら持つて行くがよい。

みや　下さんすかえ

トお宮、錢箱を持ち、辻打ちにて向うへ入る。跡にて伊平太、金五郎、鳴り物なかり、面白きタテ、さまざまあつて、「ドッコイ」ととまる。曲撥にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、世話場。上の方に佛壇、下の方に小袖簞笥、神棚、壁に三味線二三挺かけ、向う長暖簾。下座の口、二階、障子たて、格子附きの門口、へッヘ重井筒といふ提灯かけ、すべて島の内の茶屋の體。佛壇の前に妙林、以前の形にて、木魚を叩き、看經してゐる。助四郎、以前の形にて立ちかゝりゐる。流行り唄にて道具とまる。

妙林　南無妙法蓮陀佛々々々々々々々。

ト木魚を無性に叩く。

助四　これサノヽヽ、妙林どの、妙な事を云ふ。そりやア何の事だ。

ト妙林、助四郎を見て

妙林　ムウ、羽生屋の助四郎さん。……ちつと志しの佛があるゆゑ、看經してゐますわいの。

助四　サア、看經は聞えたが、南無妙法蓮陀佛とは。

妙林　サア、志しの佛は、この世でも、あの世でも樂がしたさ、宗旨の念佛ばかりでは覺束なさに、それで法華念佛一連かけて、南無妙法蓮陀佛サ。

天保九年六月中村座上演　三世尾上菊五郎の累

助四　おきやアがれ、湯屋の欠伸といふ看經た……時に、今日も今日とて、段々吹込んで置いた、娘の累の事は。
妙林　サア、そりや承知ぢやによつて、あの婿の與右衛門めも、四五日あとに許り出して、悪ろあひの詫び事もきかず、お前の事を累めに、勸めこんでゐますわいの。
助四　さうして、アノ累が見えぬが、どこへ行きましたえ。
妙林　サア、風呂へ行きましたが、どこを洗うてゐるか。大概、面の皮も揺剝けやう。
助四　イヤ、長いといへば、先刻も生玉あたりをうろついてゐた與右衛門、湯の道で出ツくはし
妙林　悪性根入れるも知れぬ……コレ、おさのやノ\。
さの　アイノ\。
　　ト　おさの、暖簾口より出て來り
阿母様、なんでござります。
妙林　累めが風呂へ行きをつたが、遲いゆゑ、迎ひに行ておぢや。
さの　風呂へ行きなさんしたは今の先、洗ひなさんす間もあらうに。
妙林　また、彼奴が蟲頭口。行けと云うたら行き居らう。
さの　ハイノ\……お主と病、ドレ、お迎ひに行つて來ませうか。
　　ト　おさの、下駄を穿いて出かける。誂らへの出の鳴物になり、向うより累、洗ひ髪、藁たばねの島田、湯あがりの浴衣を抱へ、引摺りを穿き、出て來り、花道にて行きあひ
累　おさの、どこへ行きやるぞいなう。
さの　サア、お前が遲いとて、阿母様の焦立ち、風呂まで迎ひに行く所でござんす。
累　遲いというて、何も用のある筈は無いが、誰れぞ來てぢやないかや。
さの　アイ、來てゞござんす。ソレ、ちよこノ\來て、ソレ、あのお人の名は
　　ト　忘れしこなし。
累　エ、モウ、自烈たい、誰れぢやぞいの。
さの　サア、アノ、宗三に似た
累　ムウ、あの羽生屋の助四郎づらか。
さの　アイ、その面でござんす。阿母様と何やら話して
累　そんなら、かねて云うた此方の
　　ト　ちよつと思ひ入れ。
さの　サアノ\、また遲いと、荒神様が

ト袖を引ッ張る。

累　エヽモウ、辛氣な事ではあるぞ。

ト矢張り、右の唄にて、兩人舞臺へ來て、内へ入る。

助四　オヽ、こりやア累、洗ひ髪の湯あがり。ほんに坊主も惚れにやアならねえてな。

累　助四郎さん、ようお出でなさんしたな……おさの、あの鏡臺取つてたも。次手に嗽ひも

さの　アイ〳〵、合點でござんす。

累　助四郎さん、お許しなされて下さんせ。

トおさの、よき所へ鏡臺を持つてくろ。累、これに向ふうち、はんぞう、その外、化粧道具いろ〳〵持つてくろ。

妙林　コレ、累、この二三日は、とつけもない長い湯だが、こりやア捲し出した與右衞門めと、湯あがりに小宿入りでもするのか。

累　なんの母さん、そんな事を

さの　それ〳〵、累さんに限つて、そんな事の無いは

妙林　また口出しせずと、わが身は奥へ行きや〳〵。

さの　アイ〳〵。累さん、用があるなら呼ばしやんせ。

ト合ひ方になり、おさの、奥へ入る。

助四　時に、阿母、この間から云つて置いた事を、累に打明けて、早く相談に目鼻を附けちやアくれめえか。

累　助四郎さん、わたしに相談とは、何の事でござんすぞいなア

妙林　その譯を假名で云へば、斯うよ。女の子を小さい時から、お手車でお嬢様育ちにするも、末に樂がしたさ。おぬしも十六から自前を稼がせ、先づ二三年は食ひつぶし、やう〳〵去年あたりから藝者一疋、わが身の名から重井筒と、やう〳〵賣ると思ふと、あの與右衞門に腐れつき、不手勝手に眉毛を落し、ごたつくのが否さに、入り聟に入れてやつたところが

助四　あの木津川で、食ふや食はずのうらく者、一日の出入りも出來ねえから、來るより早く泣きの種、どうでいゝ、じんじやくしねえ事と、阿母が離縁して見れば

妙林　一旦引かせたおぬし、また引き眉毛で座敷へ出したら、猶外聞も惡からうと、助四郎さんに相談したところが、有り難い思し召しなお人よ。

助四　幸ひおれも女房は無し、親は無し、有る物といつちやア、金ばかり。小糠三合持つたら、入り聟に行くなとの譬へは裏表、こんな形の物が腐るほど有つて、聟にな

らうといふは、マア、阿母にも樂をさせ、時鳥の走りと
簞を一緒に食つて、芝居はいつでも三日目よ、出來合ひ
形の浴衣を着まいと思ふなら、この相談に乘つて見るが
よいのサ。
ト累、此うち顏を直しまひ、煙草のみながら思案して
ゐる。
妙林　コレ、累、助四郎さんが今のやうに云うても、返事
の無いは
助四　得心か。
累　サア、深切に云うて下さんすを、無得心ではござん
せぬけれど
妙林　與右衞門に未練が殘つてゐるな。
累　なんのマア。
妙林　イヤ／＼、さうであらう。名を取らうより得の世の
中、わが身のやうな馬鹿律義な者に、見せる物がある。
ドレ／＼
ト合ひ方になり、妙林、佛壇より、五立目の戒名と、
髑髏を取つてくる。累、悔りして
累　エヽ、氣味の惡い。そりやアノ
妙林　しやれかうべぢやわいの。

助四　日藏院花山妙塔大姉……ムウ、こりや病人の呪ひに、
仕置き場から貰つて來たのか。
妙林　イエ／＼、こりやわしが兄、山城久世の里、世繼瀨
平どのゝお主の白骨。一昨日、飛脚が來て、狀に云うて
寄越すには、おれが高野へ納めに行く筈なれど、年寄つ
て行く事がならぬゆゑ、どうぞ其方から納めてくれと、
賴んで寄越したこの佛、わしも若い時に、恩になつたお
人ゆゑ、受取つて置いたが、これについて、怖い話しが
ござんすわいの。
助四　怖い話しとは、阿母、どんな事だ／＼。
妙林　サア、この佛樣は、近江の國、佐々木さまのお妾
殿樣お薨れなされてより、お國御前さまというて、なに
不足ない御隱居樣であつたが、狩野四郎次郎とやらいふ
若い男に惚れて、どうやら騙されたというて、戀しいと
口惜しいとの戀病、たうとう狂ひ死に、さま／＼の怪が
あつたとの事。それも何ゆゑ、あまり男に惚れ過ぎるゆ
ゑ。累なども好い手本、與右衞門が事思ひ切つて、風向
きの好い船へ、乘りかへるのがマア、當世といふものぢ
やわいなう。
ト髑髏と戒名を袱紗へ包み、鏡臺の上へ載せる。

累　ほんにマア、そのお國御前さまとやらは、怖い人でござんすなア。

助四　イヤ又、怨念も怖いが、世の中でいつも怖いのは、錢の無え事よ。それに怖くないのは、おれだて。先づ、ちよつと話しに歩くにも

ト懐より財布を出し

二百兩位は小遣ひ、惚れな女がくれろと云ゃア

累　アノ、下さんすかえ

ト思ひ入れ。

妙林　累、あの二百兩貰つて、何にしやる。

累　その金を貰うたなら、お前に樂がさせられうと。

妙林　わしに樂がさせたいとは、ヤレ／＼、孝行な娘ぢや。善は急げ。ドレ／＼

ト合ひ方になり、妙林、暖簾口より銚子杯を持つて出て、累の前に置く。

助四　祝言とは、有り難い／＼。

妙林　サア、累、わが身飲んで、助四郎さんに獻しや。

累　アノ、わたしに獻せとはえ。

妙林　ハテ、祝言の杯。添へ聟、仲人、待ち女郎、七役が流行るから、三役するわいの。

ト助四郎、ニッコリとして、衣紋を直し、嫌らしき思ひ入れ。

累　申し／＼、そりやマアあまり早急な。云うても身祝ひ、祝儀の物や何やかや。

妙林　なんの、添ひ寢するのが直ぐに祝儀。

助四　それとも氣にかゝるなら、蛤の吸ひ物は、、、きんだしのこの貝殼。

ト櫛箱より二つ三つ貝を出す。

妙林　島臺代りの鶴鍋は。

助四　オット、それには、この燗鍋のつゝる、鍋は無いか無いか。

妙林　モシ、その鍋には、こりやどうでござんす。

ト以前の鎌を出す。

助四　そりやアなんだ。

妙林　ハテ、島臺のつる……かま、といふ地口は、どうでござります。

助四　おきやアがれ。どうしてそんな物が、爰の内にある。

妙林　サア、こりやア先刻生玉で、ごろつきさうなゆゑ、雷の咒ひに、居合拔きのを借りて戻つたが、そんならこれでもゆかず。

ト鎌をそこへ抛つて置く。

助四　アヽコレ、なんぞ鶴龜々々。

ト いろ／＼考へ

オヽ、有る／＼。

ト以前の財布を杯臺の上へ置き

ヽ、ヽ、ヽ、つるかね、は、どうだ／＼。

妙林　イヤモウ、鶴龜より何よりめでたい、紫摩黄金の島臺、サア／＼、娘、早う杯ぢや／＼。

助四　千年萬普の、二百兩の金を奉る。ハヽヽヽヽ。

ト なかしみに唄ふ。累、不承々々に杯を取上げる。この うち流行り唄、時の鐘にて、良助、以前の形にて、向うより息せきと出て來り、掛け行燈を見て頷き、門口へ來る。簾口より小さん、行燈を持ち出てくる。

小さ　おさのどのが、いま湯を使うてぢやによつて、わたしが持つて來たわいなア。

ト よき所へ行燈を置く。

良助　ハイ、ちと御免なされませ。累さんに、ちよつとお目にかゝりたうござります。

ト 内へ入る。

累　ヤア、お前は

妙林　先刻に生玉で逢うた、良助どのとやら、わしが内へ、なんの用があつて。

良助　サア、拙者が參つたは

小さ　アイヤ、大方、與右衛門さんの詫びにでもござんしたのであらうわいなア。

良助　成る程、あなたの御推量の通り、何か親御のお心に背き、不縁いたしたと承り、親は泣寄り、お詫びに參つてござる。

妙林　コレ／＼、無駄口を叩かつしやるな。累は疾に、外の聟を取つたわいの。

小良　エヽ。

ト 恟り。

助四　たつた今、祝言の杯も濟んだ。花聟といふは、この羽生屋の助四郎、なんと累も、牛を馬に乘りかへたぢやアないか。

良助　すりや、累どの。眞實か。

小さ　申し、累さん、ほんまかいな／＼。

ト 両方より詰めよる。

累　ほんまでなうてかいなア。

ト 助四郎、累に、杯臺の上に財布を見せびらかして懐

へ入れる。
母さんの氣に入らぬ、與右衛門どの、どうせ末の遂げられぬ事と、主の事はさつぱり、思ひ切つて助四郎さんと

小さ　夫婦にならんしやんして、女子の道が立つかいなア立つかいなア。昨日までも今日までも、たとへ添はれぬ義理合ひで、別れてゐても女房ぢやと、眞實見せて與右衛門さんの、手詰めの金まで……サア、かね〲云ひ交した事もありながら、手の裏返す今となつて、男を持つて、濟むかいなア〲。

ト累の胸ぐらを取つて振り廻す。助四郎、金を見せる。累、キッとなつて

累　濟まぬといふて、どうするえ。

ト振り放す。

小さ　エヽ、お前はなア。

ト寄らうとするを良助、此方へ引廻し

良助　これサ、小さんさま、お前も一旦、主と頼んだ與右衛門さまの事ゆゑ、氣を揉まつしやるも尤もだが、わしも聞いて心は早鐘、つく〲思へば何かの樣子。

トちよつとこなしあつて

たとへ誠の不實にもしろ、まだ去り狀もやらぬうちは、跡で存分云はれるほどに、そこが男に生れた強味、急く所でない。マア〲、堪えて見物さつしやれ。

助四　ハヽヽヽヽ、去り狀出さうが出すまいが、女が寢返り打つからは、もう叶はねえ。ナウ、累。

累　さうでござんす。かいしよのない。與右衛門さんに、飽きが來て乘りかへたお前、これから可愛がつて下さんせと云ふもその金。

トちよつと助四郎の懷へ思ひ入れ。

助四　エヽ。

ト思ひ入れあるを、累、助四郎の袖より手を入れ

累　サア、助四郎さん、行て寢やんせう。

ト引寄せる。助四郎、有頂天の思ひ入れ。

小さ　こりやモウどうも

ト寄らうとするを良助、引留める。妙林、立ちふさがり

妙林　小さん、わりや與右衛門が身寄りか。

小さ　エ。

良助　イヤ、身寄りでもござるまいが、舌たるいこの場の仕儀。

助四　イヤ、岡燒餅は、よしにして

妙林　今日出來立ての繹の名披露目・

累　その杯を助四郎さん、‥‥モシ、與右衛門どのへ、よう云うて下さんせえ。

小さ　そりや又あんまり。

ト　また寄らうとするを、良助、キッと留める。助四郎、立ちかゝるを、累、引廻して

累　ハテ、構はずと、來なさんせ。

ト　獨吟

〽飛鳥川、昨日の淵は今日の瀨と、變る心とつれなさを、云はで焦るゝ螢さへ

ト　この唄にて累、助四郎を連れ、中二階へ上がり、障子を引立て入る。妙林、兩人に思ひ入れして暖簾口へ入る。良助、小さん殘り、呆れし思ひ入れあつて

良助　小さんさま。

小さ　良助どの。

良助　最前、生玉で、與右衛門さまにお目にかゝり、無ければならぬ鯉魚の一軸、その質請けの三百兩、キッと累が拵らへて、渡す手筈と頼もしい、その心とは打つて變つた、今の體裁。

小さ　現在身寄りの、其方やわしが見る前で、人も多いに、あの羽生屋の助四郎の、心に從ひ、あの二階へ、ようもようも行かれた事ぢや。わしや、腹が立つて／＼、早う與右衛門に、この事云うて、存分に云はせてたも。

良助　成る程。

ト　行かうとして

イヤ／＼、與右衛門さまが聞かしつたら、男の役目・

ト　切る眞似をして

御主人方の御苦勞を、一人に脊負つた與右衛門さま、もしも御身に凶事あつては‥

小さ　でも手詰めの金といひ、憎さも憎し、二人の者。

良助　いつそ拙者が、與右衛門さまに成り代り、いよ／＼不義に極まらば

ト　殺さうといふ思ひ入れ。

小さ　そんなら、其方が

良助　毒喰はゞ皿、あの金も

小さ　わたしも共々

良助　主家のお爲。

小さ　兄上の爲。

良助　義理と忠義に

小さ　累さんを

良助　コレ。
　ト押へる。
〽妹背變らで逢ふ夜半を、重ね扇の風かせる、ついぞ枕の現にも、忘れぬ人を今さらに、さらぬ別れのしやらほどけ、やがて結ばん、閨の帶。
　ト此うち小さん、そこにある風呂敷を取つて、行燈へかける。身拵らへする。良助、襲刀を合せる。よき程に二階の障子を明け、累、以前の金財布を持ち、探り探り階子を下りる。小さん良助は二階へ行かうとして累に行きあたる。
累　誰れぢやえ〳〵。
小さ　さう云ふ聲は累どの。
良助　不義の成敗。
　ト切りかける。ちよつと立廻りに、行燈の風呂敷取れる。
累　早まらしやんすな。不義でない證據はこの金。
　ト財布を出す。
良助　なんと。
　ト合ひ方。
累　サア、飽きも飽かれもせぬ仲を、義理ある母の慾心ゆゑ、別れてはゐるなれど、心は連れ添ふ與右衞門どの、無ければならぬ二百兩、昨日文での頼みゆゑ、この身に心がけてゐる、助四郎が女房になると、騙して取つたこの金、どうぞ渡して下さんせいなア。
　ト良助へ渡す。
小さ　さういふお前の心と知らず、人非人と恨んだが恥かしい。
良助　それ〳〵、貞女と云はうか、賢女と云はうか、この二百兩手に入れば、此方の百兩合せて三包み、鯉魚の一軸手に入れて、元信さまには本地へ御歸參。
　ト財布の小判を改めるこなし。
小さ　兄上が元の御身になつて、銀杏の前さまと、天下晴れての夫婦になれば、わたしも願うて金五郎さんと
良助　この二百兩で、三方四方の喜び。
小さ　累どの、仇には思はぬ此お金。
兩人　エヽ、忝ない。
　ト捺めて時の鐘。累、思ひ入れあつて
累　すりや、その金があれば、狩野四郎次郎元信さんは、本地へ歸つて、銀杏の前さんとやらと、夫婦にならしやんすかえ。

ト薄ドロ〳〵、燒酎火出る。

エ、、忌々しい。

兩人　エ、。

ト大ドロ〳〵、誂らへの合ひ方にて、良助の持つてゐる小判、段々とつながり、蛇の如くになつて、小さんの方へ這ひよる。小さん、悔りして、逃げ廻りながら、側にある眞鍮、銚子杯などを打ちつける。良助、一腰を拔いて切り拂へど、身内自由にならぬこなし。此うち累、茫然としてゐる。小さん鏡臺を押しかこすと、鏡臺の髑髏、おのれと累が方へ飛んで、仕掛けにて累が顏へ附く。ウン」と倒れる。一時に小判のひらめき、ドロ〳〵、しやんとゝまる。

小さ　ても恐ろしい。

良助　何は兎もあれ、累どのゝ氣絶。累どの〳〵。

ト呼びかける。累、ウンと氣の附きたるこなし。

累どの、心が附きましたか。

ト正面向けて引越す。累が顏へ、髑髏、吸ひついてゐる。

小さ　ヤア、累どのゝ顏へ

良助　怪しい髑髏。

ト手をかけて、無理に引き離す。累、誂らへの惡女の顏になる。

累　小さんどの。

小さ　ヤア、お前のその顏は

累　わしの顏が、どうしたえ。

小さ　サア

ト小さん慄ふ。

累　コレ、小さんどの、こなたは夫與右衞門どのと、ねんごろしてゐやうがの。

小さ　エ、、滅相な。なんのマア

累　イヤ〳〵、日頃の素振りといひ、良助、わが身、仲立ちか。

良助　どうして拙者が

累　憎いと思ふ小さんどの、誠わが身は、狩野元信が妹縫合、證據は隱せし月の御判。

小さ　イエ〳〵、こりやわたしが大事の守。

累　守もすさまじい。こりや山名さまから、お觸れのあつた品。此方へ渡しや。

ト小さんの懐へ手を入れ、守り袋を引出さうとする。良助、立廻りに突きのけ

良助　何とも怪しい累が有樣。もうこの所に長居はならぬ。
小さんさま
小さ　合點ぢや。
　ト行かうとするを
累　イヽヤやらぬ。
　ト留める。雷の音になり、立廻りのうち、二階より助四郎、暖簾口より妙林、出て來り、有りあふ傘にて小さんに打つてかゝるを、小さん、傘を取つて逃げ出す。
助四　ヤア、累のこの顏ぢやア、もうこの金は
　ト取らうとするを
妙林　イヽヤ、こりやアわしが
　ト妙林、金を拾ふうち、累、良助の持つて來た赤合羽を引ッかむり、そこにある以前の鎌を持ち、跡追ひかけて向うへ入る。續いて行かうとする良助を、助四郎妙林、金を拾ひながら留めるをかしみ。立廻りよろしき見得にて
　　ひやうし　幕
時の鐘のツナギにて、直ぐに引返す。
　本舞臺、一面の草土手、上下藪疊、よき所に柳の立ち樹、吊り枝。水船の岸の草叢、蓮の葉。木津川といふ榜示杭。一體にこの道具、仕掛け物、手凄き誂らへよろしく、爰にお宮、以前の錢箱を抱へ、行かうとしてゐる。伊平太、立ちふさがつてゐる。時の鐘にて幕明く。ト立廻りあつて
みや　こりやお侍ひさん、道を塞いでどうするのぢやー
伊平　知れた事、その錢箱の内にやア、おれもちつと欲しい物が入れてある。引ッ浚はうと思ふ所へ、あの箱廻しの金五郎めが、邪魔ひろいだばつかりに、逃がしたと思つた女、雨の晴れ間を土手傳ひ。よい所で逢つた。その品おれに、早く渡せ。
みや　イヽヤ、これには此方も、ちつと大事にせにやならぬ、品が入れてあるこの箱、やはか其方へ渡さうか。道を明けて通しなさんせ。
伊平　うぬ、堅意地をまき出すと、殺生してもふんだくるぞ。いらねえ命の掛替へあるか。
みや　その掛替へは持たずとも、此方も命の根限り。
伊平　渡せ。
みや　そこ退きや／＼。
　ト烈しき立廻りよろしくあつて、伊平太、箱を引ッた

くり、お宮を突きとばし、下座へ入る。お宮、跡追ひかけて入る　雷、本雨バラ〳〵にて、向うより累、赤合羽をかむり出て來り、舞臺へ來て倒れると、跡より小さん、半開きの傘をさしかけて、舞臺へ來る。大雷、小さんも倒れる。雷、本雨、シヤンとやむ。小さん、やう〳〵心附きし體にて

小さ　ヤレ〳〵、嬉しや。もう爰まで逃げのびたら、よもや累さんが

累　オヽ、その累は、先へ來て待つてゐる。

小さ　エヽ。

ト逃げようとするを引ツ捕へ

累　わたしをそれほどまでに、怖がつて逃げるからは、どうでも與右衛門どのと譯があるの。

小さ　なんのマア、疑ふ事も品による。金五郎さんと譯あるこの身、それが潔白な證據ぢやわいなア。

累　イヤ〳〵、今時の藝者の手、主と譯を附けて、年季を踏むもまゝある事。ぶつて〳〵ぶち据ゑて、根輪際云はせうと思うて、持つて來た鎌の背打ち。カウ〳〵〳〵ト小さんをむごく打ち据ゑる。この立廻りに小さんの守の紐切れて落ちる事。累、ちやつと取上ぐる。チヨ

ント月出る。累、見て

こりやコレ、佐々木家を立つる、月の御判とやら。

小さ　アヽコレ、それを

ト取らうとするを引附け

累　これを持つてうせるからは、いよ〳〵お尋ねの狩野元信が妹繪合。お役所へ連れて行く。立ちや。

小さ　イエ〳〵、そりやわたしが大事の守。此方へ返して下さんせ。

累　固意地を吐かすと、この鎌で叩き切つても連れて行く。

小さ　イエ、その守を

ト取りにかゝる。累、鎌にて打つてかゝる。これより凄き合ひ方にて、兩人、タテ、さま〴〵あるうち、守は川中へ打込む。ツヽそれをと立寄るを、小さんへ鎌にて打つてかゝる。小さん、鎌に取りつき、爭ふ拍子に、鎌を正面の藪垣へ打込む。累「ヤア」と鎌を取つて土手へ上がりて、藪垣へかゝる。内より右の鎌にて累を切る。これにて「アツ」と累、土手よりコロ〳〵と草叢へ落ち、また取附いて這ひ上がる。本釣り鐘。

累　ムウ、藪の内より、わしを切つたは

ト蟲の聲。

文化十四年八月中村座上演　三世尾上菊五郎の累の亡靈

與右　オヽ、木津川の與右衛門だ。

累　その與右衛門が、なんでわしを

ト立ちかゝると、コロ〳〵と草叢へ落ちる。途端、藪垣を押分け、與右衛門、右の鎌を振りあげ、下をキッと見下ろす。

小さ　ヤア、與右衛門か。

與右　コレ。

トつか〳〵と土手を下りる。累、與右衛門が袖を引切る。直ぐに膝に引敷き、鎌にて止めを刺す。焔硝火燃える。ゴンと時の鐘、忍び三重。小さん、慄へながら

小さ　すりやアノ累を

與右　逢ふは別れの始めとは、今こそ思ひ累があらまし、良助どのに聞くよりも、宙を走つて木津川堤、あの藪陰でこの場の様子。日頃に變る嫉妬の悪念。お主になんの女房一人と、不便ながらも鎌の刃に、二十日の月の命も引汐。心からとはいひながら、不便な最期でござりましたなア。

トほろりと思ひ入れ。

小さ　悋氣は女の嗜みとはいへ、累の嫉妬は、お國御前の一つは執着。外に仕様もあらうのに、早まつた事しやつたなう。

與右　それも宿世の皆業因。せめて未來は蓮葉に、木津川の水葬禮。

ト死骸を水船へ入れる。

小さ　この流れにこそ大切な、月の御判を

與右　尋ね探すも今宵の闇。明けなば手に入れ、差上げませう。

小さ　そんなら妾は

與右　拙者が隱れ家

小さ　すりや、木津川村へ

ト行かうとする所へ、伊平太、箱を抱へ出て來り

伊平　ヤア、小さんか。いゝ所で逢つた。うせう。

トかゝる。與右衛門、取つて突きのける。

與右　こりやア伊平太……その箱は

伊平　サア、こりやア

與右　云はずと知れた、毒であらう。

伊平　それ知られたら

トかゝらうとして、血に辷り

ヤア、この血は。

トかゝらうとするを與右衛門、箱を取つて水船へ打込

み、「それを」とくる伊平太を、ポンと當てる。
小さ　これは。
與右　サア、ござりませ。
ト早見得にて與右衛門、小さんを連れ、向うへ走り入ると、下座よりお宮、走り出て、伊平太に突きあたり、透して見て
みや　ヤア、お前は伊平太。
伊平　あまめ、又うしやアがつたか。
ト伊平太かゝるを留めて
みや　最前の箱には、大事のお子が入れてある。どこへやつた。サア、それを云やいなう。
伊平　なんだ、箱の中には大事の子。
ト思ひ入れして
ムウ、そんなら今の箱の中には
みや　早う渡しや。
ト伊平太を捕へる。
伊平　それで様子が知れたわえ。與右衛門が連れて行つた小さんは、慥かに元信が妹繪合。月の御判は、あの小さんが持つてゐるに違ひあるまい。引ツ捕まへて……さうだ。

みや　さう聞いては猶の事、伊平太、其方はやる事ならぬ。
伊平　エヽ、面倒な。邪魔をすると、ぶち殺すぞ。
みや　今の箱を渡しやいの。
伊平　そこ離せ。
ト立廻り。よき程に月隠れる。忍び三重、見得にて、また立廻り、程よく月出る。よき程に水船より陰火燃える。ドロ〳〵にて、兩人悶絶する。寐鳥、ドロドロ、本水の中より累の亡霊、好みの誂らへ、赤子を抱き、スツと出る。伊平太心附き、起きあがらうとして與右衛門の小袖を見附け
伊平　こりや與右衛門が袖。なんぞの玉になりさうなものぢや。
ト持つて行かうとして、フツと累の顔を見て、慄りして腰をぬかし、恐れる思ひ入れ。累、赤子をいろ〳〵介抱して、蘆間へ行き、水中に以前打ち込みし御判の入つた守を取上げる。此うち赤子泣くゆゑ、守を口に咬へ、赤子をいぶりつけ、上の方、蘆の間の中に立つて、我が姿と赤子を見て、ホロリと思ひ入れ。ちよつと消える。途端にお宮、心附き、伊平太を見附け
みや　ヤア伊平太、心が附いたら最前の品を、返しや〳〵。

ト云つても、伊平太、腰の立たぬ思ひ入れ、怖いと仕方して逃げようとする。お宮とめる。此うち又ドロドロにて、下の方へ累出る。向うより又平、桐油、菅笠、小田原提灯を持ち、何心なく出て來て伊平太が姿を見て、不思議さうに下の方へ來るうち、ドロ〲、累の亡靈、差し金にて、伊平太の持つてゐる片袖、おのづと又平が提灯の上へ來る。又平、合點のゆかぬこなしにて

又平　合點のゆかぬ、この袖は

伊平　それを。

トよろめきながら立ちかゝる。大ドロ〲、伊平太、連理引きと一緒に、累、上の方へ宙乘り。赤子泣く。お宮、又平に縋る。又平、累の宙乘りに提灯を落される。

累　嬉しやそれで

又平　ハテ、怪しや。

トきつと見上げる。よろしくあつて、

ひやうし　幕

第二番目二幕目　木津川村の場

役名――木津川與右衛門實ハ土佐又平重興。茨木逸當。判人、權九郎。質屋番頭、利兵衛。與右衛門妹、お宮。見世物師、藤六。同妹、おかね。箱廻し、金五郎。藝者、小さん實ハ元信妹繪合。羽生屋助四郎。山住伊平太。渡し守、又平。

本舞臺、三間の間、上の方、押入れ。下の方、大津壁。正面、暖簾口。いつもの所、門口。茅屋根。下の方、下地窓。幕の内より逸當、前幕の形。權九郎、判人の形にて、内へ入りかけてゐるを、お宮、前幕の拵らへにて、これを支へゐる。在郷唄にて幕明く。

みや　こりやお二人さん、どこへ行かしやんす。

逸當　イヤ、どこへも參らぬ。夜前、木津川堤にて、女が殺されてゐたとの訴へ、檢分に參つたところ、島の内の重井筒の娘の累。この家の主與右衛門が、女房になつたる女ゆゑ、疑ひかゝつた。早く與右衛門に逢はせてくれ。

權九　おれも、その重井筒の懸り合ひ、此ぜげんの權九郎が判で、藝者にやつたあの小さん、昨夜から行くへが知れぬ。もしや廻しの金五郎、元方に緣のある爰の內ゆゑ、與右衞門に逢ふと云へば、留守とも居るとも煮切らぬ挨拶ゆゑ、奧へ踏んごみ、家探しするのだ。

みや　イヽエ、そりやならぬわいなア。小さんさんに緣があればとて、此方へ來やう筈はなし、また累さんぢやというて、一旦緣の切れた兄さんが、知らう筈もなし。逢うて聞かいでもこの通り。外を御詮議なされませいなア。

逸當　イヽヤ、外に勘の附け所は無い。目の附け所は爰の與右衞門。

權九　是非とも奧へ

　ト行かうとするを

みや　イヽエ、わたしも與右衞門の妹、逢はすまいと云うたら金輪際。

逸當　面倒な。

　トちよつと立廻りあつて、お宮を振り切り、暖簾口へ駈けこむ。直ぐに內より抛り出され、見事に中返りする。合ひ方になり、暖簾口より與右衞門、浴衣、ちよつと挾み帶、莨盆を下げて、出てくる。

兩人　ヤア、與右衞門か。

與右　夏の月、蚊を疵にして五百兩、晉子が發句に夜を更かし、枕の許をヂダバタと、晝寐の夢を覺ました此奴等。妹、どこの唐變朴だ。

みや　サア、この二人はナ

逸當　オヽ、身は當所の役人、茨木逸當。

　ト腰の痛むこなし。

權九　おれは島の內のぜげん、井筒屋へやつた小さんが、判人の權九郎だワ。

與右　木津川の人殺し、小さんが駈落ち、この與右衞門が知つてもゐやうかと、それで詮議に來たのか。

權九　知れた事だ。

與右　ハヽヽヽヽ、ぜげんが煮燒きをして賣つた小さん、女房といへど緣を切つた累、二人が身の上に、どんな事が起らうとまゝ、この與右衞門が知るものか。

兩人　ヤア。

與右　トサア、突ッ放しても大事ない譯なれど、洗つて見れば緣のある、小さんどのゝ身の上、行くへを尋ね、返すとも、年季の金を償ふとも

權九　筋道を立てゝ下さるか。

與右　果が事もその通り、縁は切つても去り狀やらねば、わしが女房、殺した奴を詮議して
逸當　身共に搦めて渡すぢやまで。
與右　兩方ともに、今夜の五ツまで。
みや　兄さん、お前、請合うて
與右　ハテ、待つというても爰は暑い。穢くとも奥で
逸當　そんなら與右衞門
權九　キツと返事を
與右　待つてござりませ。
ト唄になり、逸當、權九郎、奥へ入る。與右衞門、お宮に囁く、お宮、吞みこみ、これも奥へ入る。この唄長く、バタ〳〵にて、向うより金五郎、尻からげ、頰かむりにて走り出て來り、直ぐに舞臺へ來て、門口を明け、ツイと入る。
金五　與右衞門さま、內にござりましたか。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。
與右　金五郎さん、キヨト〳〵しい、恟りしたわな。
金五　その恟りより、まだお前の、恟りする事があつて來ましたよ。
與右　まだ恟りする事とは。

金五　サア、木津川の渡し場に、果さんの浮き死骸、疵だらけでゐると聞いて、驚ろくまい事か、駈けつけて見たところが違ひなく、今朝御檢分が來て、それから殺し手の御詮議最中。與右衞門さん、なんと恟りしたぢやござりませぬか。
與右　成る程、その話しも、先刻ちよつと聞いたが、人といふものは、いつ何時と知れねえものだてな。
金五　そんなら先刻、聞かつしやりまして
與右　南無阿彌陀佛……とサ、心で回向してゐるのサ。
金五　人殺し、捕つた。
ト側にある莨盆にて打つてかゝる。ちよつと立廻りにて、與右衞門、煙管にて手早く留めて
與右　こりや、なんとなされます。
金五　サア、こりやア、與右衞門さん、お前がもし人殺しと、代官所から今のやうに、捕り方でも來た時にやア、便りに思ふ小さんは元より、お前には大切な、大恩のある叔父御、あの又平さんのお嘆き。そこ爰を思ひやつて見りやア、これまで世話になつた恩といひ、わしが代りに名乘つて出る氣。與右衞門さん、なんと、身に暗い事があればあるやうに、明かして云つちやア下さるまいか。

天保九年六月中村座上演　三世尾上菊五郎の累亡靈

與右　ウム、累を殺した人殺しが、まだ誰れとも知れぬゆゑ、もしやわしかと案じてくれるは、忝ない。現在の女房、そんな事をしていゝものか。
金五　そんなら、いよ〳〵
與右　明日が日縛られる法もあれ。
金五　ウム、それで落ちつきました。
ト兩人、思ひ入れ。金五郎、門口を締める。障子屋體より小さん、しを〳〵として出てくる。
小さ　お前は金五郎さん、よう來て下さんした。
金五　ア、小さん、おぬしは爰へどうして
小さ　サア、爰へ來たにも、いろ〳〵な譯あつて、島の內へも歸られず、それで與右衞門さんを賴んで、昨夜から忍んでゐるわいなア。
金五　そんならアノ駈落ちして……昨日生玉で、二人の譯ある事を、あの妙林婆アが嗅ぎつけたゆゑ、やかましういぢりくさつて、內にも居られず、それゆゑに、駈落ちしたら身の代を
與右　ハテ、そりや又與右衞門が、よいやうに
小さ　ほんに、わしゆゑ、いかい苦勞を……又その上に恐ろしい

與右　アコレ……勤めのうちは、そんな事は、いくらもあるものだ。ハテ、落ちついてござりませ。
ト唄になり、向うより助四郎、利兵衞、連れ立ち出て來り、舞臺へ來り、門口をしやくつて見て
助四　こりやア、なんで晝中に締めてゐる。誰れもゐねえかゐねえか。
與右　オイ〳〵、誰れだ〳〵。
ト與右衞門、兩人に奧へ行けといふこなし。これにて兩人、思ひ入れあつて、上手へ入る。この時、小さん、比翼紋の者を落しゆく。與右衞門、捨ぜりふにて、門口のかき金を取り、戶を明けて
オ、誰れかと思つたら、羽生屋の助四郎さん。
助四　與右衞門、內にゐたか。さて〳〵今日も、暑いぞ暑いぞ。サア〳〵、入らつしやれ〳〵。
利兵　ハイ〳〵、御免なされませ。
ト兩人、內へ入る。
與右　質屋の利兵衞どの、明日の約束ぢやアないか、
利兵　サア、昨日生玉で、明日とお約束を申しましたが、どうも親方が得心いたしませぬゆゑ、お口入れの助四郎さまと御同道で、脇差も持つて參りました。先づ〳〵こ

れはお返し申しますほどに、お斷わり申して來いと、親方が申しつけでござります。
與右　コレ〳〵、こなたも見世を預かつてゐて、一旦呑みこみながら
助四　サア、その譯をおれも云へど、何をいうても親方が不承知。
與右　ムウ
ト思案のこなし。
して、その一軸は。
利兵　サア、今日金が出來ましたら、あげませうと、持つて參りました。
ト風呂敷より一軸の箱を出す。
與右　これサ、持つてくる位の深切があるなら、長い事ではなし、待つて下さい。この一軸を人手にやつては、この身ばかりか、幾人の憂き難儀、命づくにもかゝはる大事。一日半日を待たれぬといふ無得心なら、この與右衞門も絕體絕命、命一つを切りにかけ、この掛け物はおれが借りた。金出來次第、渡してやらう。
ト思ひ切つてキツと云ふ。
利兵　モシ〳〵、その腹立ちは、親方に仰しやりませ。私しが預かつて來たこの一軸は、持つて歸らにやア濟みませぬ。
與右　持つて行かれるなら行つて見さつしやれ。滅多に渡しはせぬ。
利兵　これは無法な事云はつしやる。キリ〳〵寄越さつしやれ。
與右　イ、ヤ、腕づくでも
利兵　イ、ヤ、此方へ。
ト兩人、一軸の箱を奪ひ合ふ事。トヾ一軸の包み解けて、中より序幕の火吹竹落ちる。
與右　ヤア、こりや一軸と思ひの外
利兵　ヤア〳〵、ほんにこりやア火吹竹。昨日、生玉へ持つて行つて、直ぐに內へ持つて歸り、戶棚へ入れて錠をおろし、今日明けて來たばかりで、一軸が火吹竹になつてしまうた。こりやア夢なら覺めてくれ。三百兩の質物。三百兩々々々。こりやアどうせう〳〵。こりや斯うしてはゐられぬ。
ト狂氣の如くうろたへ、一散に向うへ入る。與右衞門呆れたる思ひ入れにて
與右　オイ〳〵、利兵衞々々々。マア、待て〳〵。

ト行きかけて

あの一軸が紛失しては……こりや質屋めを詮議して。ソレ

ト一散に花道へ行きかける。

助四　與右衞門、待ちやれ。

與右　なんだか知らぬが、ちつと氣が急く。後でゆつくり聞きませう。

助四　コレ、三百兩といふ代物が、さう早急に出るものか。用がある、マア待ちやれ。

ト合ひ方。

與右　ムウ。おれに用とは。

助四　返してくりやれ。

與右　そりやアノ、十兩の金かえ。

助四　イヽヤ、九十兩だ。

與右　エヽ。

助四　あれほど昨日生玉で、鳥居の先で

與右　その時借りたは十兩。

助四　ハテ九十兩、物覺えの悪い男だ。

ト懐より證文を出し

コレ、しかもおぬしが直筆で、書いたこの證文。云ひかけをせずと九十兩、いま返しやれ。

ト證文を見せる。與右衞門、取らうとする。

ドツコイ、それから御覽じろ。なんと慥かな證據であらうがな。

與右　ムウ。助四郎、こりやアなんだな。十兩の上へ九の字を書き入れて、この與右衞門を、深い所をやつたのだな。

トきつと云ふ。

助四　なんだ、深い所へやつた。コレエヽ、九十兩借りたものを十兩とは、コレ、天道樣が見てござる。たつて四の五と爭ふなら、砂利の上へ引摺り出すぞ。でんどへ出たら又どんな、身の疵が出やうも知れぬ。それより貸した九十兩、返して濟ますが、爲であらうよ。

與右　サア、それは。

助四　サア〳〵〳〵。與右衞門、返事は、ドヽどうだ。

與右　ムウ。

ト口惜しき思ひ入れ。バタ〳〵にて、向うよりおかれ、前幕の錢箱を引抱へ出て來る。跡より藤六、追ひかけ出て、花道にて

藤六　コレ、その錢箱を持つて、どこへうしやアがる。

かね　知れた事、與右衞門さんから預かつた大事の子、里扶持の金も取りながら、お前が失したというては濟まぬゆゑ、持つて行て譯云うて、共々尋ねてもらふわいな。

藤六　べら坊め、とても失なつたもの、どうなるものか。打ツちやつて置きやアがれ。

ト云ひながら舞臺へ來り、おかね、内へ入り

かね　與右衞門さん、お前に濟まぬ、云ひ譯がござんせぬわいなア。

ト奥よりお宮、出て來り

ろや　ヤア、おかねさん、何でござんす。兄さんに濟まぬとはえ。

かね　サア、お前から預かつた、大事のあのお子を、兄さんが癲癇やら、どうした事やら、この箱へ入れて、失したといふ事ゆゑ、お前に濟まぬわいなア。

藤六　云ひ譯が無いと、吠え面をかはくが、失したものをどう仕樣があるものか、料簡さつしやい。

與右　何と云ふ。アノ預けて置いた幼な子を、そりやアどこへ失した。ちつとでも心當りは

みや　モシ〳〵、兄さん、あの子の行くへは知れてゐやんす。昨夜からお前に話さうと思うたれど、どうぞ聞かせずに取戻さうと、人を頼んでやつたが、あの子は山住伊平太といふ侍ひが、連れて行たわいなア。

與右　そりやアどうして。

みや　サア、昨日生玉で、この藤六さんが、どこへやらやると云うて、ソレその箱へ入れておやゆゑ、跡へ廻つてソツと見世物の錢箱へ入れたを、あの伊平太が錢箱ぐるみ、持つて行たわいなア。

與右　すりや、毒だと思つたあの箱は

みや　預かつたお子を入れて置いた箱ぢやわいなア。

與右　ヤ、、、、。

ト當惑の思ひ入れ。

さうとは知らずに和子樣を。ホ、ホイ。

トうろたへ、自團駄踏んで泣き伏す。

藤六　なんの事だ。身ぐるみ負けたやうな面をして、餓鬼は伊平太どのが連れて行つたと、現在の妹の詞。此方の肩は拔けたといふもの。ドレ、おらア歸るべい。

ト行かうとして、以前の小さんの簪を拾ひ取り

ムウ。蝶花形に喜の字崩しの比翼紋。こりやア藝者の小さんが簪。

與右　ヤア。

天保九年六月中村座上演　坂東彦三郎の助四郎

三世尾上菊五郎の累亡靈　尾上菊次郎の小さん

トぎつくりこなし。

藤六 これが爰に落ちてあるからは、重井筒を駈落ちした小さんは與右衛門、おぬしが隱まつて置くな。

與右 イヽヤ、おらア

藤六 知らぬものが、どうしてこの簪が爰に落ちてある。

與右 サア、それは。

助四 蹊者を引摺り込む位はまだな事、まだ大それた金の云ひかけ。與右衛門、證文通り、恐れながらとやりかけようか。

與右 見す〳〵知れた

藤六 妙林婆アに賴まれた、小さんを出すか。

助四 でんどへ出ようか。

與右 サア

二人 サア〳〵〳〵。

藤六 慥かに奧が

助四 面倒だ。踏んごめ。

藤六 合點だ。

トこの時、行きかゝる藤六を、與右衛門とめるを振り拂ひ、上手屋體へ踏んごむ。與右衛門は助四郎を引附ける。藤六、奧より見事に返る。上手障子を明け、内より又平、廣袖にて、莨盆を持ち、ズッと出てくる。誂らへの合ひ方。

又平 流れ渡りを橫に暮らす、渡し守の浮世又平が御寢所へ、泥臑踏んごみ立ち騷ぐ、うぬはどこの猿松だ。

藤六 オヽ、痛い〳〵。コレヤイ、おらア猿松ぢやない、見世物師の藤六さまだ。

又平 その藤六が、なんでおらが部屋へ、五體を荷ひ込んだのだ。

藤六 知れた事、重井筒を駈落ちした、小さんが埋んであらうと思つて。

又平 どうしたと。

藤六 サア、先刻ぜげんの權九郎めを、先へ嗅ぎに寄越したが、居ないといふのはお定まり。ところをおれが今爰で、退引きならぬ小さんが簪。斯ういふ證據があるからは

又平 如何にも小さんは隱まつた。

與右 ア、モシ、それでは

又平 ハテ、木津川で親分と、野郎どもに立てられる、この又平が隱まつたと云ふからは、どの道仕埒は附けてやる。わつぱさつぱと騷ぎやアがるな。

藤六　これサ、親分、お前がさう呑みこむものを、わしがごたつくものか。料簡しなせえ。
助四　して、與右衛門、おれが貸した金の方は。
又平　ハテ、それもおれが呑みこんで、濟ましたら云ひ分あるまい。
助四　そんならわれが
又平　與右衛門、爰へ出や。
與右　ハイ。
　ト思ひ入れ。變つた合ひ方。
又平　與右衛門、今日から叔父甥の緣は切つたぞよ。
與右　エヽ。
又平　イヤサ、親なき後は叔父親と、不便を加へ幼少より、育てしところ、町人を賤しみ、武士を好んで佐々木家へ奉公、名も又平といたかしく、大小を挾んだれど、不運にして主家の滅亡。又この木津川村へうろついて來たゆゑ、おれが名跡も讓らうかと、與右衛門といふ名を、われにくれて、おれはわれが名の又平と、叔父甥の名を變へ變へに、世話をする者があつて、累が所へ入り聟に、行くと間もなく出て來てから、體裁の悪い今日の仕儀、甥ながらも見下げ果て、名を取返して、今よりおれが木津川與右衛門、われは元の又平と、又あるまじき不孝の見せしめ。
與右　すりや、今日よりお前が元の與右衛門に、おなりなされて
又平　われは又平、緣切つた。それも內證では役に立たぬゆゑ、疾に庄屋へ屆けて置いた。
みや　そんなら兄さんと緣切らしやんして、お前が元の與右衛門ぢやと、アノ庄屋樣まで
與右　お詫びを申すに申されぬ、この身の不始末。
かね　側で聞いても氣の毒な。
藤六　なんの、他人の嘆きは三日も堪える。して、小さんが身の上は。
　トこの前より又平、一札をサラ〳〵と書いて
又平　其方の存分、片附けてやらうといふ一札。
藤六　文言は讀むには及ぶまい。
又平　藤六どの。
藤六　木津川與右衛門。
又平　助四郎どの、證文も、與右衛門が名前、おれが引受けたら云ひ分あるまい。
助四　して、その仕埒は

又平　今宵の五ツ。
藤六　それまで爰でも待たれまい。
みや　狹いが奥で、お二人さん
助四　そんなら與右衛門
又平　奥は蚊がひどい。蚊燻しをして進ぜろ。
助四　キツと返事を、待つてゐるぞよ。
ト唄になり、助四郎、藤六、おかれ、暖簾口へ入る。又平、心にかゝる思ひ入れ。與右衛門、前へ出て
與右衛門は思案のこなし。お宮は氣の毒なこなし。又
與右　叔父者人の御立腹、御尤もとも道理とも、一言半句の返す詞は無けれども、拙者が緣をお切りなされて、後の難儀を引受けて下さるは、まだ私しにお情の
又平　イヤ、他人になんの情をかけう。こりや與右衛門といふ名が恥かしいからぢや。
與右　すりや、どうあつても
又平　勘當のしるしには、ムウ、幸ひな物がある。お宮、あのお札箱を爰へ。
みや　アイ〳〵。
ト合ひ方になり、門口に掛けてある札箱を取り、又平の前へ持つてくる。

又平　コレ、又平や、こりやおれが朝夕拜む、祖師の御首題。現世の祈禱と、我が身を祈つた甲斐もなく、今日の不始末。思へば無理な願ひに、お題目の罰は、性は善なりとやら云うて、生れる時は善心でも、心を鬼にするも佛にするも、氣の持ちやう。サア、このお札もその通り、お題目といへば有り難いが、心は蓮へど首題と云へば、いまはしい讀み聲。緣切つて叱り手が無いと思つて、必らずその首の臺へ乘らぬやう、きつと愼しみ居らうぞ。
與右　又も親身のその御意見、有り難うござります。
ト ほろりと愁ひの思ひ入れ。この時、向うにて
庄屋　サア、斯うお出でなされませ。
トてんつゝ、時の太鼓にて、向うより庄屋、案内して、後より野袴、ぶツ裂き羽織、大小の侍ひ二人中間附添ひ出て、門口へ來て
サア〳〵、又平どの、ではない、また元の與右衛門どの甥子にやつた名を取戻したほどに、人別を書き替へてくれと、いま云はれたゆゑ、お役所へその趣き、お屆け申したところ、めでたい事がある。渡し守の與右衛門は、年久しう勤めて居る名といひ、殊にお手傳ひ馬その外、御用向きも神妙に勤める、愛い奴ぢやとあつて、今日か

天保九年六月中村座上演　三世尾上菊五郎の與右衛門

ら川役人に仰せつけらるゝと、アレ、齋藤さまからお迎ひが來ましたわいの。

又平 すりやアノ、この與右衛門を

侍ひ 卽ち武士にお取立てあり、衣服大小は、庄屋方にて着替へさせん。

同 拙者ども同道して、直さま御前へ參り申さう。

みや そんなら、いよ〳〵叔父さんには

又平 オヽ、侍ひになるは嬉しいが、差しつけぬ大小や着る物。お宮、庄屋樣まで一緒に行て、手傳うてくれ。

みや アイ〳〵、合點でござんす。

庄屋 サア〳〵、早く歩まつしやれ。

ト又平の手を取つて連れて行かうとする。與右衛門、又平の袖をちよつと抑へ、ヂツと顏を見上げ

與右 ア、モシ……めでたい御出世に、繰り言は不吉ながら、もしや拙者が、老少不定で

又平 サ、その過ちのないやうに、意見にやつた今の御首題、妙法蓮華經、第二十五の厄年ぢや、よう信心せいよ。

ト與右衛門の袖を拂ひ 門口を締める。時の太鼓になり、庄屋を先に侍ひ、又平、お宮を連れ、花道の中程まで行き、又平、思ひ入れあつて、下に坐り、兩手を廻し

木津川の人殺しは、卽ち私し。サア、お役人樣、繩おかけ下さりませう。

侍ひ 神妙の覺悟。出かした〳〵。

ト又平に繩かける。

みや そんなら、どうでも

又平 コリヤ、見苦しい。何もかも云ひ聞かせ、最前得心したではないか。未練な奴め。

みや それぢやというて

又平 コリヤ……サア、お引きなされませ。

ト時の太鼓、三重になり。皆々、向うへ入る。與右衛門、門口を明け、向うを見送り、思ひ入れあつて合ひ方。

與右 叔父者人、須彌山より高き御恩の御意見、懲らしめのため名前まで、お取上げとは思へども、たつてお詫び申さぬは、よく〳〵不運なこの身の上。お家を立てうと守り育てし、豐若君と露知らず、現在お主を家來の身で、あの木津川の底の藻屑。元信さまへ差上ぐべき、大切な掛け物も、心を盡せど又ぞろ紛失。不便や女房累まで、忠義〳〵が殘らず不忠。弓矢神にも神佛にも、見離され

たる又平が、どうで死ぬとのしめしの御首題。いま切腹をなす體、首の臺とは卽ちお仕置、これを一つの腹癒せに、御免なされて下さりませ。

ト與右衛門、愁ひのこなしあつて、身拵らへして

南無阿彌陀佛。

ト刀を抜き、腹切らうとする。此うち後へ金五郎、窺ひ出て

金五　與右衛門さま、こりや何となさるのぢや。

ト縋り留める。

與右　イヽヤ、死なにやアならぬ譯ゆゑに、死ぬるのだ、そこ退かつしやれ。

金五　コレ、待つた。

與右　エヽ、邪魔なさるな。

金五　イヽヤ、殺しやせぬ〳〵。

ト與右衛門、腹を切らうとするを、側にある御首題の箱にて留める。いろ〳〵爭ひ、留める事あつてトヾ、この箱の蓋取れ、中より與右衛門の片袖と、二百兩の包み金、書置、バラリと落ちる。

與右　ヤア、お札箱よりこの品は……合點のゆかぬ。

金五　ドレ

ト金五郎、書置を取上げ見て

ナニ〳〵……「甥又平へ書置きの事」

ト兩人恟り。

與右　ドレ……ナニ〳〵……「其方妻累こと、昨夜木津川にて殺され候ふよし、その節不思議に人殺しの證據となるべき、片袖、我れら手に入り候ふ間、持ち歸り見るところ、其方の袖ゆゑ、卽ち我れら元の與右衛門と相成り人殺しと名乘り出で申し候ふ。

ト金五郎、書置を引取つて

金五　又々妹宮ことも、一軸質請けの爲、金二百兩にて勤め奉公に出し候ふも、其方へ忠義を立てさせ申すべき志しに候へば、少しも我れ〳〵へ未練殘され申すまじく候ふ。又平へ、叔父與右衛門。」

與右　ヤア〳〵、すりや、この身の罪を叔父者人が

金五　その身に引受け、代官所へ

與右　妹までも苦界の勤め。

金五　叔父は親なり

與右　こりや死ぬにも死なれぬ又平が、身を切り刻めといふ事か。

金五　又平どの。

與右　金五郎どの、ハテ是非もなき

兩人　事ぢやなア。

ト兩人、腕を組んで愁ひの思ひ入れ。合ひ方にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、眞中暖簾口。上の方、鼠壁。下の方佛壇、膳棚、竈、上流し。竹垣。茅屋根。下座、仕掛けの藪疊、振り出し柳の立ち樹、葉充分に茂り、下手、繩すだれ。いつもの所に門口、すべて與右衞門内奥座敷の體。よき所に丸行燈を置き、二重の上に助四郎、藤六、逸當、權九郎、いづれも臑押しなしてゐる。さんげ〳〵にて、道具とまる。

藤逸　ヨイ〳〵〳〵。

ト拳を打つ。

藤六　オツト、あいこ〳〵。

藤逸　サア、ヨイ〳〵〳〵。

ト又打つ。

逸當　オツト、おれが勝ちだ〳〵。

權九　サア〳〵、押すぞ〳〵。

ト兩人、臑押しなして

助四　オヽ、痛い〳〵。とんだ臑の強い、麩屋の男ださうな。

逸當　サア〳〵、約束通り、頭をくらはせるぞ。

藤六　とんだ事を云つたものだ。虎が婆アに負けるといふ事があるものか。其方をくらはせるぞ〳〵。

逸當　ハテ、藤六、おぬしがのは虎ぢやアなくて、猫のやうだによつて、婆アにやア負けるが當り前、くらはせるぞ〳〵。

藤六　イヤ、くらはせるといへば、もう五ツをくらはしさうなものだが。

權九　それサ、わしらはお前方より先へ來てゐるが、助四郎さま、お前は又なんの用で

助四　おらア與右衞門に金を貸して、サア〳〵どうだのお定まりぜりふ、果ては今夜の五ツを限り、奥へ入つても餘程の間。

逸當　身共は木津川堤の人殺しの詮議。これも與右衞門めに、疑ひかけて五ツの約束。

藤六　わしやア小さんが駈落ちの仕埒。

權九　サア、わしに返事をせうと云つたも五ツ限り。

藤六　おれも又、五ツと奥へ入つたが

皆々　早く五ツにして、挨拶を聞きたいものだが。

助四　それよ。いつもは時の切れで、奥の一間で待つてゐると、いくら入つても、何をしてゐるか知らないからよけれども

藤六　斯う割出して待たされちやア、どうも斯うも仕様がない。

權九　茶も腹の脹るほど飲むし、莨には醉ふ。

逸當　鰯押しに虎拳。

藤六　白髭明神お渡し申すまで出てしまつたが、これからどうして五ツまで待たうか。

助四　この間、中橋の寄席で聞いた、落し話しにしようか。

權九　イヤ〳〵、それよりは今流行る、畫本を其まゝ、敵討が聞きたい。

逸當　敵討もよからうが、なんでも話しは怪談がよいてな。

藤六　怪談とは、なんの事だ。

助四　知れた事、なんでもおッかない話しの事だ。

權九　アノ、化け物話しか。

藤六　こいつは面白からう。そんな話しと來ちやア、おれが又得手物だ。途方もなく怖いのを一つ、話さうか〳〵。

逸當　オツト、待つたり〳〵。身共は斯う見えても大臆病、聞かぬ先から、ちり毛元がゾツとする。もつと側へ寄つてもらはう。

助四　それ〳〵、先づ行燈を斯う側へ寄せてトよき所へ行燈を直し

サア〳〵、みんな爰へ、寄つたり〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト皆々、行燈の側へこぞり寄り

藤六　時に、どうで五ツまで待たにやアならぬこの人數。

權九　サア〳〵、燈心もしたゝかぶち込んで

助四　さらば化け物話しを

皆々　始めようか。

ト皆々寄りこぞる。この時、薄ドロ〳〵にて、誂らへ、行燈消え、陰火立ちのぼる。皆々これを見て「ワッ」と倒れ、腰の立たぬこなし。助四郎は下手、權九郎は上手、藤六逸當は向うへ逃げて入る。あと一ツ鉦、凄き合ひ方になり、暖簾口より小さん、ツカ〳〵と出て來り

小さ　アイ〳〵……わたしを呼ばしやんすは、誰れぢやぞいな。慥か呼んだやうなが、行燈も消して、この暗がり。トあたりを探り廻るうち、いづくよりか赤子の泣く聲

する。小さん、聞き耳立て

ハテ、合點のゆかぬ、幼な子の泣く聲。聞けばどうやら豐若さまの……又平どのが誤まつて、あの木津川へ……爰にござらう筈もなく……エヽ、暗うて黑白も分らぬ。どうぞ灯を……オヽ、それ〳〵。

ト火打ち箱を尋ねる事。此時矢張り一つ鉦、凄き合ひ方、掠めて薄ドロ、燒酎火燃えあがる。仕掛けの行燈の中より累の亡靈、以前の赤子を抱へ、現はれる。行燈より脇へ離れると、矢張り行燈へ灯つく。小さんは此うち火打ち箱を引寄せ、火を打ちゐる。フト行燈を見て不思議なこなし。赤子笛。

エヽ、氣味の惡い。灯をつけようと思へば、いつの間にやら行燈のともりしは……。

ト赤子、頻りに泣く。

アレ〳〵、又も頻りに幼な子の泣くは、いよ〳〵

トあたりを尋ね、フト累の姿を見附け

ヤ、お前は累さん、アレ〳〵

ト逃げようとして逃げられぬこなし、いろ〳〵あつて

この身にさら〳〵覺えの無い事。矢ツ張りわたしを疑うて、恨みを云ひに、迷うてござんしたかいなア。

ト累、思ひ入れ。

エヽ、なんぢや、恨みは晴れた……そんなら、わたしを恨んだも、お國御前の執着、與右衞門どのに云ひ譯してもらひたさ、二つには、間違ひとはいひながら……豐若さまを木津川の藻屑となせし、夫の不忠が雪ぎたさ、水中より連れて戻つた、と云はしやんすからは、そんならその子が豐若さまか。エヽ、忝ない〳〵……なんぢやえ、まだ、その上に、水底へ沈みし月の御判まで、

ト累の亡靈、懷より御判の入つた守を出し、小さんに渡す。小さん、こなしあつて

サア、取り得て渡すを詫びの種、この世は夫の心に違ひ果敢ない別れをするとても、未來の縁を與右衞門どのへ、結びくれよと、わたしへ頼みか。

ト累の亡靈、思ひ入れ。

そりやモウ、わたしが云はいでも、さういふ心と聞いたなら、結ばいでなんとせう……なんぢや、まだ云ふ事があるとは……ナニ、大切な鯉魚の一軸、行くへならなつたれど、誠は羽生屋の助四郎が持つてゐる。今宵木津川の川口へ釣出すほどに、手に入れんとや、……月の御判に豐若さま、一軸の在所まで……與右衞門どのはさぞ喜びッか

かりや繫がる兄上と、わたしが身の納まり、エ、忝ない。

ト思ひ入れ。この時、頻りに赤子泣く。奥よりおかね出て

かね　ヤ、、その泣き聲は、與右衞門さまから預かつたお子。

ト累の亡靈を見て、「あれえ」と飛びのき

ヤア、お前は累さん。ナニ、その子が乳に饑ゑてゐると云はしやんすか……さうなうてかいなア、可哀や〳〵。

ト怖々子を抱きとり、乳を吞ませる。赤子、泣きやむ。累の亡靈、嬉し氣にニッコリと笑ひ、思ひ入れあつて

累　嬉しや和子と月の御判、一軸の在所まで告げ知らせ、それをこの身の願ひの種、未來の緣をお前に賴めば、この身の本望、さりながら、戀しと思ふ與右衞門どの、名殘り惜しいは小さんさま、きづなの隙もなき魂の、最早あの世へ、さらばや〳〵。

小さ　南無阿彌陀佛々々々々々。

トどろ〳〵にて、累の亡靈、正面の壁へ消える。心火燃え立つ。おかね、跡を見て驚ろき

かね　今まで見えた累さんは

小さ　この世を去つた、今のは亡き魂。

かね　エ、。

小さ　この事必らず世間へは……累どのゝ嫉妬ゆゑ、迷うて出たと云ひ觸らし、この子の事は沙汰無しに。

かね　成る程、わたしも密かに聞きました、この子の素性は佐々木のお胤。

小さ　世にも大事な

かね　豐若さま。

小さ　コレ。

ト押へる。兩人よろしくこなし。ゴン送りにて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、元の道具に戻る。爰に金五郎、藤六を引附けてゐる見得、早めの合ひ方にて道具納まる。

藤六　この野郎め、おれをどうしやアがる。

金五　どうと云つたら、うぬらは寄つてたかつて、與右衞門どのを苛めたばかり、爰の叔父御が名まで取返し、科を引受け、代官所へ行つたゆゑ、それおやア濟まぬと與右衞門も、代官所へ駈込み訴訟。これといふのも助四郎と、うぬらがいろ〳〵の目論見。この金五郎も破れかぶれ。うぬも相手だ、覺悟なせ。

藤六　又平や與右衞門が科人になつたを、ナニおいらが知るものか。うぬが爰にゐるからは、小さんもゐやう。おれに渡せ。

金五　たとへ知つてゐるにもせよ。われに滅多に……先づそれよりは、一緒にうせい。

藤六　小さんを渡せ。

兩人　なにを。

トこれより輕業の鳴り物、三味線入り、兩人たゞしみの立廻り、よろしくあつて、拵らへ出來次第、與右衞門、バタ／＼にて向うより走り出て來り。直ぐに內へ入る。

藤六　ヤア、與右衞門か。

與右　金五郎どの、口惜しい。いま一足遲いばかりに、代官所の評定濟んで、叔父御は牢舍、この身の罪と譯を云つても、今日や明日の間に合はず。これといふも、元の起りは鯉魚の一軸。

トこの時、小さん、奥より出て來り

小さ　オヽ、與右衞門どの、その在所は知れました。

藤六　なんと。

ト小さんにかゝるを金五郎、引附け

金五　イヤ、その譯を聞かせては面倒だ。此奴は斯うして

ト引摺ゑ、藤六が兩方の耳を塞ぐ。

與右　して、在所が知れたとは。

小さ　サア、今の先、アノ累さんが、迷うてござんした。

與右　ヤア、なんと。

小さ　嫉妬につのり、惡い心も、皆お國御前が輪廻の爲す業。それを悔んで迷うてゐた。コレ／＼、月の御判。まだその上に、木津川へ沈めた若君も、無事に連れてござんしたわいなア。

與右　ヤヽ、すりや、アノ藻屑となした若君を

小さ　おかねさん、早うこれへ。

かね　アイ／＼。

ト赤子を抱き、出て來り

申しいなア、此やうに、まめで戾つてござんしたわいなア。

藤六　ヤア、その餓鬼を

金五　ドツコイ、もうちつと聞かずにゐたり。

ト耳を押へる。

與右　ムウ、すりや、御判といひ、若君まで、女房累が……エヽ、忝ない。して、一軸は。

小さ　あの助四郎が摺りかへて持つてゐる。今宵川口まで釣出すほどに、奪ひ返せと、これも亡き人のお前へ貞節。

與右　すりや、助四郎めを釣り出す、所も丁度木津川口。

小さ　アヽモシ、これを功に累さんと、未來は緣を

與右　そりや云はずとも、二世の夫婦。

小さ　せめてこの世も附きそふ形見。

ト累が緋縮緬の襦袢をやる。與右衞門、取つて

與右　この品は。

小さ　累どのがお形見の襦袢。

與右　すりや、これを着て、出入りの場所へ

小さ　難波祭りの練子と見せ

與右　群集に紛れて、あの一軸。

ト襦袢を抱へ、行かうとする。藤六、振り放し

藤六　うぬをやつては

小さ　早うござんせ。

與右　合點だ。

ト双方よろしき見得にて、曲搔、與右衞門は向うへ入る。皆々舞臺によろしく、屋體囃子にてツナギ、引返し

瀬來

第二番目　大詰　木津川口の場

役名――山住伊平太。羽生屋助四郎、茨木逸當に箱廻し、金五郎。惡者、雁九郎。同、蔦藏。木津川與右衞門實ハ土佐又平重興。

本舞臺、下の方より大きな橋を見せ、この橋の向うより上の方へ、花車の先ばかり四五本見せ、木際に誂らへ柳の立ち樹。爰に助四郎、伊平太、逸當、前幕の形。惡者二人立ちかゝり、矢張り祭の太鼓にて幕明く。

助四　ヤレ〳〵、先刻には怖い事であつた。

逸當　それサ、四人が五ッを待ち草臥れ、なんのせずともよい事を、化け物話しを始めようと、云ふが早いか行燈から

助四　思ひ出しても、首筋元がゾッとする。なんでもありやア、累の怨念であらう。

伊平　その場に居ないで大きな仕合せ。時に助四郎、おれ

に何か頼みたい事があると

惡一　わしらを爰まで連れてござつたは

惡二　なんの用でござりますな。

助四　その用は、高くは云はれぬ。

ト兩人に囁く。

惡人　そんならアノ與右衛門めを

助四　コレサ……時に爰はどこだ。

惡者　木津川口サ。

助四　ヤア〱、船場へ行くと思つたら、矢ッ張り木津川口へ來たか。こいつは氣味が惡いわえ。

惡一　わしどもで氣味が惡くば、この川筋の船頭どもを、頼まつしやりませ。

助四　なんでも強い奴を、頼む〱。

惡二　合點でごんす。……オヽイ〱、雁九郎、蔦藏。

兩人　オヽイ〱、なんだ〱。

ト橋を渡つて雁九郎、蔦藏、船頭の形にて出て來り

雁九　捉六、胴八、おいらを呼んだのは

蔦藏　ヤア、伊平太さまもゐなさるか。何の用でござんすね。

伊平　サア、その用は、おれが聞かさう。斯うだワ。

ト囁く。

雁九　そりやア氣遣ひさつしやりますな。わしどもが吞みこんだら

蔦藏　どんな奴でも叩き殺して、川へざんぶり、後腹の病めぬ仕事。

雁九　檜垣に乘つたと、落ちついてござりませ。

トばた〱にて、與右衛門、以前の襦袢を着て走り出て、皆々を突きのけ、助四郎をとめて

與右　ヤア、助四郎か。

助四　うぬは與右衛門。

與右　ハテ、よい所で逢つたなア。

助四　ハテ、惡い所で逢つたなア。

與右　サア、大切な一軸を、摺りかへて持つてゐる事は、天眼通で知つて來た。この與右衛門に渡すまいか。

助四　ソレ、頼んだは此奴だぞ。

皆々　動きやアがるな。

トばた〱にて向うより金五郎、藤六、掴み合つて出て來り、花道にて

藤六　コレ〱、與右衛門が爰へ來る〱。

皆々　ナニ與右衛門が來る。

與右　べら坊め、與右衛門は疾に先へ來てゐるわえ。
藤六　もう來やアがつたか。サテ早い奴の。
金五　與右衛門どのがゐるからは、おれも加勢に
　ト立廻りしい〳〵、兩人、舞臺へ來て
與右　うぬらが爰で落ちあふ事、知つて追ひかけ來たから
は、もう叶はない助四郎、尋常に懷の一卷渡せ。
　ト助四郎が懷中へ手を突ッこみ、引出す。
助四　何を小癪な。
　ト爭ふはずみに一軸を水船へ打込む。大ドロ〳〵、水
氣立つて、跳らへの鯉、拔け出てひらめく。與右衛門
キッと思ひ入れ。
與右　さてこそ、土佐の御先祖經隆さま、丹精を凝らし、
描きし鯉の一軸、水に寫せば縮絹を放れ、生けるが如く
働らくと、噂に聞きしが、アレ〳〵〳〵、いま水中に丈
あまりとなつて、泳ぎ狂ふこの場の不思議。希代の名畫
も、あるものぢやなア……イデ取上げて、元の掛け地へ。
皆々　さうはならぬ。
與右　小癪な。
皆々　どつこい。
　トこれより跳らへの鳴り物にて、與右衛門、皆々を相
手に鯉のタテ、いろ〳〵あつて藤六、柳の樹にのぼ
り、落ちる事よろしく、ト皆々を切り殺し、掛け地
を取上げる。金五郎、鯉の目玉を抉る。これにて掛け
地へ戻る。
與右　まんまと掛け地へ戻つた活鯉。
助四　それを
　ト寄るを抉り殺す。
金五　出來た〳〵。
　トよろしき見得。
まづ今日はこれきり。

打出し

阿國御前化粧鏡（終り）

御經第一の卷は勿體なくも安房の國市川村の小湊に誕生水の岩井に橘その一座より信者の執持夏の間の歸花御法の梅と連れ咲は法華妙者の福牡丹七里賑ふ龍口に旗まんだらの雨祈り隙なくかゝる鵜飼船の利益は卽ち海上に今も殘つて學田の題目

日蓮聖人御一代記
祐念上人御傳記　報恩講譽榮

御經第二番目は實に有難き淨土の宗門さても奇妙と飯沼に隣りならびの絹川や木おろし舟のさなの唄さまサ草刈る三日月かまよ散るや累が浮名の紅葉菊が手織りの古布染におもひは深見與右衞門が無筆女房の七太刀にこれ名僧の身替り名號

靈驗妓場緣日

法懸松成田利劍

六字
七字　〆而十三幕

表のカタリは、この狂言初演の折のカタリである。日蓮記の文句が入つてゐるのは、この時の一番目が、日蓮記だつたからである。これは怪談といふ狂言でもないので今度は省いて置いた。下揭の凸版は同じく初演の折發行された櫓下番附の一部である。本文に挿入した凸版も、初演の折の繪本番附である。

　この累は最近に至つて復活され、度々の上演を見た。本文に挿入した寫眞は最近上演の舞臺寫眞である。

法懸松成田利劍

序幕

木下川堤の場

淨瑠璃　色彩間苅豆　淸元連中

役名――木下川與右衞門實ハ久保田金五郎。腰元、累。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕、誂らへの草土手、柳の立ち木、同じく吊り枝澤山とりつけ、上の方に淸元連中居並び、舞臺先、蛇籠を伏せたるしがらみ附きの浪板、木下川堤といふ榜示杙、本雨の樋、すべて誂らへの通り、時の鐘、浪の音にて幕明く。

ト吉例の通り頭取出て、淨瑠璃の役ぶれ口上あつて、直ぐに前彈きにかゝる。

〽思ひをも心も人に染まばこそ、戀と夕顏夏草の、消ゆる間近き末のつゆ、元の雫や世の中の、おくれ先立つ二道を。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより與右衞門、浴衣の形、素足にて出る。後より累、他所行の形、日傘と書置とを持ち、兩人とも俄雨にあひし體にて出で來り、花道よき所にて

〽同じ思ひに跡先の、わかちしどけも夏紅葉、梢の雨やさめやらぬ、夢の浮世とゆき惱む、男に丁度靑日傘、骨になるとも何のその、跡をあふ瀨の女氣に、こはい道さへやう〳〵と、互ひに知らぬ野邊の草、葉末の露か螢火も、もし追手かと身づくろひ、心關屋を後になし、木下川堤に着きにけり。

トこの振りにて本舞臺へ來る。矢張り時の鐘、浪の音いけころし、蟲の音聞える。

與右　コレ累、思ひがけないこの所へ、其方はどうしておぢやつたぞ。

かさ　どうしてとは胴慾な。一緒に死なうと今までに、云ひ交したを反古にして、わたしを置いてお前一人、覺悟の書置、そりやお前聞えませぬ。生きるとも死ぬるとも、お前の側を離れはせぬ。一緒に殺して下さんせ。

與右　成る程切なる志し、さりながら、其方の養父は預か

りの、撫子の茶入れ紛失、それゆゑにこそ屋敷は閉門、それさへあるに又ぞろや、一緒に死ねば心中と、浮名が立つては親への不孝、爰の道理を聞き分けて、其方は爰から歸つてたも。

〽云ふ顔つく／＼打まもり、ひよんな縁でこのやうに、つい斯うなつた仲ぢやゆゑ、迷惑さんすが氣の毒で、云ふ事さへも十分一、勿體ない事ながら、去年の初秋うら盆に、祈念さまのお十念、その時ふつと見染めたが、ほんに結ぶの神ならで、佛の森の新枕、初手から蓮の臺ぞと、心で祝ふ菩提心、後生大事の殿御ぢやと、思ふ心にいつとなく、奥のつとめの長局、役者ひいきの噂にも、どこやら風が成田屋に、似たともやうも福牡丹、楊枝差しにも袱紗にも、お前によそへて樂しむ心、お年忘れに奥御殿、琴や鼓のそのあとは、打交りたる騒ぎ唄、〽入れぼくろ／＼、起證誓紙は反古にもなるが、五月六月は萬更反古にもなりやせまい〽うたふ辻占いまの身に、當りてわたしが岩田帶、是非に死なねばならぬ身と、口說き嘆けば與右衛門も。

與右　ハテ、是非に及ばぬ。それ程までに思ひつめた其方の心。可哀や腹の忰まで、此まゝ殺すも世の成行き。不便の者の心根ぢやなア。

〽深き心を白玉の、露の命を我れゆゑに、思へば便なき心やと、手を取り交し嘆きしが、せめて義理ある親たちや、生みの親へもよそながら、今宵限りの暇乞ひ、不孝の罪は幾重にも、お免しあれと諸共に、川邊にしばし泣きゐたる〽折柄聞ゆる舟のうち、身にしる雨の聲遠く〽夜や寒き誠に又は闇の友、筆の鞘にて蚊やりさへ、まかせそつと思へばほんに、埒もなか戸のしらむ東雲。

ト薄ドロ／＼になり、燒酎火出て、この時、前の流れへ誂らへの髑髏に草刈り鎌の錆つきたるを差し金にて漂ひ流れくる。與右、これへ目を附けて思ひ入れ。

〽不思議や流れにたゞよふ髑髏、助が魂魄錆びつく鎌、それと見るより與右衛門が、心に覺えありノ＼と、しるしの鎌を引きぬけば、はつと累が美はしき、顔も忽ち惡女の相好、これも報いか淺ましやと、立退く爰にとりついて。

ト此文句のうち與右衛門は髑髏を取上げ、鎌を拔くと、ドロ／＼にて累の顔、仕掛けにていつもの通りの累の顔に變る。累はこれを知らぬこなし。與右衛門見て、恟り思ひ入れ。これより嫉妬のクドキになる。

〽捨てゝ行くとはさりとては、外に樂しみあればこそ、わしを騙して胴慾な、さうとは知らず今までに、もしやにかゝる戀の慾、兎角浮世がまゝならば、帶の矢の字の前垂れに、針打ちやめておとしばら、駒下駄はいて歩いたら、誠に〳〵嬉しかろ、ならぬ先まで思ふのも、今更心が恥かしい、むごいわいなと取りついて、變る姿を露知らず、色を含みしとりなりは、哀れにも又いぢらしや、男も今は詮方なく、聲をひそめて。

與右　道理〳〵。死ぬると云ふは皆僞はり、國へ歸參のこの與右衞門、足手纏ひと思へども、その心底を聞く上は、これより直ぐに國元へ、其方を連れて

かさ　そんなら一緒に、連れて行て下さんすか。

與右　サア、少つとも早く、先へ立ちや。

かさ　エ、嬉しうござんす。

〽いそ〳〵先へたちまちに、邪慳の刃も血汐のもみぢ、鐵田の川の瀨と變る、男の裾にしがみつき。

ト此うち與右衞門、身拵へして、累を先へやりすごし、以前の鎌にて一かせ切る。累、驚ろき、與右衞門にしがみつき、捨ぜりふにて口說き立てる。與右衞門は累の懷中鏡を出して差しつける事あつて

かさ　こりや、わたしを騙して

與右　オヽ、殺す仔細は

〽これを見よと、累がたしなむ延べ鏡、見すればハツと飛びのいて、もしや外に人もやと、見れど映せどわが顏の、變り果てにし有樣に、如何はせんともだえ泣き、與右衞門累を引据ゑて。

與右　コリヤ累、因果の道理を今爰で、語つて聞かせん。よつく聞け。

〽足蹴にてうと蹴返して。

この與右衞門が金五郎と云ひし時、其方が爲には實の親菊が夫の助を殺せしその報い、めぐりめぐりてその顏の、變り果てたは前世の約束、其方が爲にはこの與右衞門、卽ち親の敵なれば、騙して此の場で返り討、これも因果と諦めて。

〽成佛せよと無二無三、打つてかゝれば身をかはし〽なう情なや恨めしや、身は煩惱のきづなにて、戀路に迷ひ親々の、仇なる人と知らずして、因果はめぐる面影の、變り果てにし恥かしさ、悋氣嫉妬のくどき事、我れと我が身に惚れすぎし、心の中の面なや、さはさりながらむごらしい、生みの兩親今の親、我が身にまでも此やうに

大正十四年七月　市村座上演

守田勘彌の與右衛門　尾上菊五郎の累

つらき心は前の世の、いかなる恨みかいまはしと、くどきつ泣いつ身をかきむしり、人の報いのあるものか無きものか、思ひ知れやとすつくと立ち、振り亂したる黑髮は、この世からなる鬼女の有樣、摑みかゝれば與右衛門も、鎌取り直し土橋の上、襟髮つかんで一ゑぐり、情容赦も夏の霜、消ゆる姿の八重撫子、これや累の名なるべしと、後に傳へし物語り、語り傳へて。

トよろしくあつて、累は仕掛けにて土橋の上に宙乘りになる。與右衛門は襟髮を引かれながらキツと見得。この時、黑の捕り手四人、バラ〳〵と出て

捕手　人殺しの與右衛門、動くな。

ト取卷く。

與右　何を小癪な。

ト身構へる。大ドロ〳〵、カケリにてよろしく

幕

大切

平井渡し場の場

與右衛門內の場

墮地獄の場

役名――神田川の與吉實ハ絹川甚三郎。巴屋仲居、おさえ。久保田の下部、八助。與右衛門母、お萱。庄屋、杢兵衛。仲人、甚五兵衛。泣き女、おむく。八助妹、おりえ　蜂山藤六。下部、伴助。判人、安右衛門。若黨、惣次。平井の船頭、萬助　百姓、三婦六。累の亡靈。木下川與右衛門實ハ久保田金五郎。祐念上人。

本舞臺、うしろ淺黃幕、正面、藁葺き渡し守の小屋、左右に唐もろこし、藤豆の棚みし體、よき所に、井筒天道といふ石の杙立ち、前通り浪板。すべて平井渡し場の景色。爰に船頭萬助、役場半纏を引ッかけ襦袢腹がけ、百姓三婦六は鍬を荷ひ、その外百姓二三人、ワヤ〳〵云つてゐる。よき所に船頭神田川の與吉と、娘おさえの二人の死骸に、菰をかけたのが並べてあり、念佛太鼓に、幕明く。

皆々　三婦六さま、こいつは大變でござる〳〵。

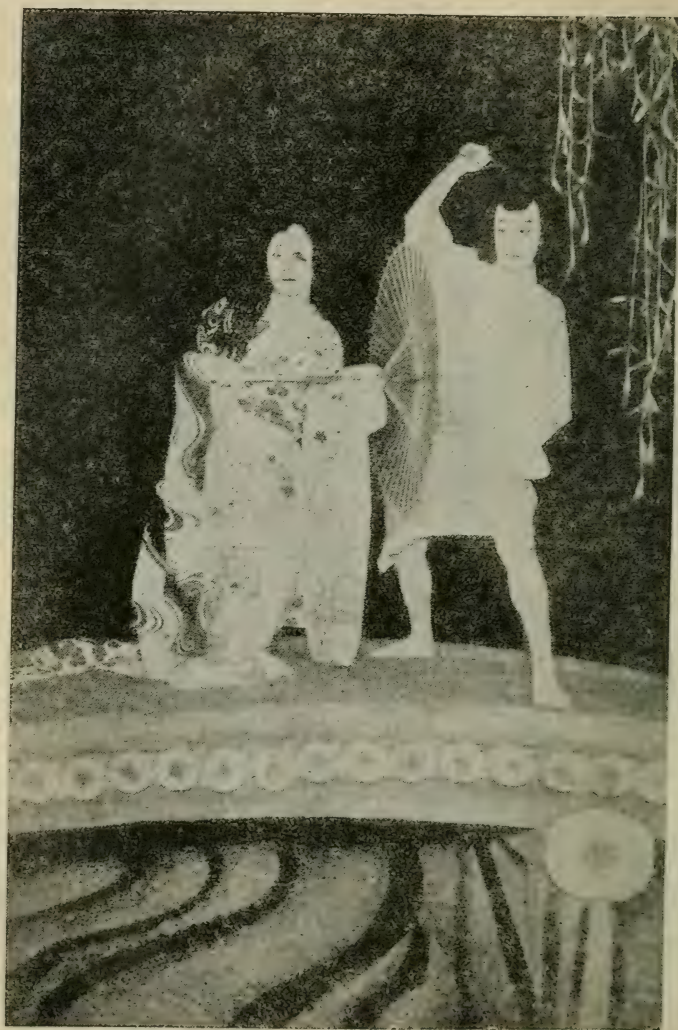
三婦　サア、とんだ事だ。女と男の死骸、見れば着る物がズタ〳〵に切れてゐます。

萬助　サア、わしもさう見ましたが、切られたにしては、

一向疵が見えませぬ。
三婦　大方心中でもござらうか。さういへば昨夜遅く、吾妻の森の前通りを、美しい女を連れて、男が一人通つたが、これは大方喧嘩をして、ぶち殺されたと思はるゝが、コレ、何だか男が持つてゐます。
ト一同寄つて取つて見て
皆々　アヽ、こりやア莨入れだ〳〵。
萬助　中に何だか書いた物もあるが、濡れてゐるでござらう。何しろ着る物が切られて、體に疵がござらぬ。マアマア、この始末を、庄屋どのに知らせて來ます。こなた衆、跡を頼みます。
皆々　合點でござる。早く行つてござい。
ト念佛太鼓になり、萬助、向うへかゝると、この時向うより若黨惣次、スタ〳〵と出て來り
惣次　モシ〳〵、お前方は、御近所のお方でござりますか御近所のお方でござりますか。
ト急いで云ふ。
萬助　成る程、この村の百姓でござる。
惣次　左樣なら聞きますが、若い男の死骸が、この渡し場にあると聞きましたが、左樣かな〳〵。

萬助　ござる〳〵。男ばかりではござらぬ、女もゐます。二人ながら着る物が切れて、惣身には疵は見えませぬ。
惣次　どうぞ、その死骸を見せて下さい。
皆々　サア〳〵、これだから、見さつしやい〳〵。
トこれにて惣次、驅け行き見て
惣次　ヤヽヽヽ、こりや若旦那の死骸、いま一人は養子先のおさえさま。こりやどうでも心中に、違ひないわい違ひないわい。
萬助　モシ〳〵、由縁のあるお人かえ。何か持つて居ます何か持つて居ますよ。
惣次　左樣かな。改めて見ませう。
皆々　さうさつしやれ〳〵。
ト惣次、驅け寄り、死骸を、よく〳〵見て
惣次　ヤア〳〵〳〵、昨日お渡し申した、祐念さまの名號が、コレ〳〵、この通りに切れてゐるといひ、お二人ともに、惣身に疵が見えませぬ。
ト名號を見せる。
皆々　イヤア、それは奇妙だ〳〵。
萬助　モシ〳〵、この莨入れに何かござります。これもよく見さつしやるがよい。

大正十五年二月　歌舞伎座上演
尾上梅幸の累　市村羽左衛門の與右衛門

大正十四年七月　市村座上演
守田勘彌の與右衞門　尾上菊五郎の累

惣次　併し、刃物で死なぬ事ならば、叶はずとても呼び生けて見ようか。

萬助　それがよからう。その上爰に大磯の、小用封じの藥がござる。水を吐かせるにはよいと聞きました。この小用藥を握らしたら、水を吐くでござらうワ。

皆々　その上、この濡れた手紙を火で干したら解りませう。

惣次　そんなら、頼みます〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト小屋の焚き火へ持ちゆき、件の手紙を三婦六、火であぶる事。萬助は小用藥を二人の死骸の手に握らせる。惣次は死骸を抱いて

惣次　與吉さまア、おさえさま〳〵。

皆々　與吉やアい。おさえやアい。

ト取まぜて呼び立てる。てんつゝ、念佛太鼓にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、世話屋體、上の方に障子、ならんで精靈棚、正面のれん口、鼠壁、軒に盆提灯を吊し、門口に竹の簀戸、竹藪、すべて木下川村與右衛門母親の隱れ家、よき時分より百萬遍の鳴り物になり、爰に百姓大勢、大珠數に取りつき、庄屋杢兵衛、眞中に伏せ鉦を打ち、下男八助は門口で鯰を拵らへてゐる見得にて、道具とまる。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵。

杢兵　願意宿得平等一切生發菩提心。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵……庄屋樣、御苦勞にござります。

杢兵　イヤ、皆の衆も、暑いに御苦勞々々。

ト此うち八助は鯰を拵らへ、手を洗ひ、茶を持つて出で來り

八助　お庄屋樣をはじめ、村のお方、御親切に、ようお念佛をあげて下さりました。私しは八助と申しまして、この內の母御には家來筋ゆゑ、此やうに世話を致しまする。

杢兵　その上聞けば、貴樣の妹のおりえどのを、この家の與右衛門どのに娶合せるとは、何よりめでたい事でござるて。

皆々　イヤモウ、おめでたい事でござる。

八助　これは御挨拶、痛み入りまする。ところで晩の祝言に、わざと鯰を拵らへましたゆゑ、移り香が致しませう

と、御遠慮いたしました。
杢兵　成る程、百萬遍に鯰の濱燒も、隨分よくござらうて。
皆々　ハヽヽヽヽ。
　トこの時、障子の内にて
かや　コレ〳〵八助、又さしこみが來ましたわいの。
　ト合ひ方になる。八助、さしよつて障子を明ける。おかや、母の拵らへ、木綿蒲團を敷き、病人の體にて寄りかゝりゐる。
八助　モシ〳〵、今日はお鹽梅は、どうでござりまするな。
かや　イヤモウ、變る事もござらぬが、して與右衞門は、まだ留守かいの。
八助　左樣でござります。境町のお醫者樣へ、藥を取りにお出でなされました。
かや　それは孝行な。嬉しうござる……コレ、八助や、今夜忰に女房持たすも、お邸の旦那樣へ、あれの心が直りましたと、それを知らさう爲ばかりに。
八助　外というても面倒ゆゑ、私しが妹を、急にあなたへ憚りながら、嫁御樣には勿體ない。併し後で私しが、小舅顏を致すのではござりませぬて。
かや　これといふのも私しは、與右衞門が親御、久保田家に勤めたる水仕の女、忰は旦那のお胤ながら、子供の内に仕落ちがあつて、わしが在所の木下川村、
八助　親旦那からお預けなされ、以前は久保田の若黨八内、小松川に住ひますれば、日には何度も折見廻り、少つとも早く與右衞門さま、御歸參なさるゝ種にもと、そこで俄に、祝言のまなびでござります。
かや　何やらかやら其方の世話、この母も喜びますわいの。
　ト喜ぶうちに胸先を押へ
　アイタヽヽヽ。
八助　また差込みが始まりましたか。
杢兵　ドレ〳〵、杢兵衞が押へてやりませう。
　ト介抱する。
皆々　わしらは與右衞門どのを迎へながら、尋ねて來ませう。
八助　お頼み申します。
皆々　サア〳〵、冷えぬやうにさつしやれ。
　トてんつゝになり、杢兵衞介抱し、障子を閉す。百姓皆々向うへ入る。八助は七輪で湯を沸かしにかゝる。向うよりおむく、在鄕嬶アのこしらへ、甚五兵衞、羽織田舍者にて、片手に帳を下げ、兩人出て來り、直ぐ

に内へ入り

二人　八助どの、さぞお取込みでござらう。

八助　これは仲人の甚五兵衛どの、雇ひのかみ様も、ござりましたか。

甚五　コレ、八助どの、わしはマア皆の頼みで、妹御の嫁入りの中へ、なんぼ田舍でも、與右衛門どのはもと侍ひ、家來の妹ぢやというて、それ〴〵の格式もあり、わざと嫁御は、駕籠にしましたて。

むく　サア、その駕籠も在郷だけに不自由ゆゑ、お寺へ頼みまして、死人を入れる迎へ駕籠、やう〳〵と工面をしました。

八助　それは世話でござつた。

ト この時、障子の内より杢兵衛、出て來り

杢兵　これは仲人どの、ござりましたか。時に八助どの、あの病人は、どうでもむづかしうござるてや。

八助　イヤモウ、私しもさう思ひます。

杢兵　あの様子では、どうで今夜中には方が附きませうが、暑い時分ゆゑ、直に葬式を出さずばなりますまい。そこで庄屋杢兵衛が、コレ〳〵、帳を拵らへて持つて來ました。葬禮の入用を書き立てませう。

甚五　モシ〳〵庄屋様、葬式もお急ぎであらうが、盆前でもござれば、祝言も急いでもらひませうて。

八助　イカサマ、祝言も、祝言も、延び〳〵にはなりますまいて。

むく　コレ〳〵、八助どの、同じ葬禮婚禮でも、どちらを先へと極められまい。わしは待女郎だから、婚禮から先がよからう。

杢兵　イヤ〳〵、葬禮を先へ廻すがよい。

甚五　イヤ〳〵、婚禮を先へせねば、物のきまりがない。

婚禮だ〳〵。

杢兵　イヽヤ、葬禮だ〳〵。

ト 兩人爭ふ事ありて、持つたる帳面を互ひに打ちつけ取替へる事。八助おむく、その中へ入り

二人　マア〳〵、靜かになされまし〳〵。

八助　お二人ながら、其やうに深切に云つて下さる事なり、どうで何方が遲いか早いか、こりやいつそ入用物を、帳へ附けて置くがようござります。

二人　さうしませう〳〵。

八助　先づ、わしが指圖しませう。

ト 中へ入り

ソレ、そこへ鯣に長熨斗。

この場は本脚本に缺けてゐますが
畫だけ御覧に入れます

李兵　オット合點。
ト取替へし葬禮帳へ記す。
八助　さて此方が位牌に香爐。
甚五　オツと附けました。
ト婚禮帳へ附ける。
八助　それから蓬萊の鶴龜。
李兵　よし〳〵、書きました。
八助　とむらひの繩。
甚五　よし〳〵。
八助　娘の綿帽子。
李兵　承知〳〵。
八助　施主の編笠。
甚五　オツと附けました。
八助　蛤の吸ひ物。
李兵　附けました。
八助　白强飯に奴豆腐。
甚五　書きました〳〵。
八助　先づ、あら方そんなものかな。
ト此うち、おかやの呻く聲する。
皆々　イヤア、阿母が取詰めはせぬか。

むく　モシ〳〵、阿母さんが大分せきなさるが、あれでは婚禮か葬禮か、どちらが先へ廻らうね。
八助　ハテ、貴樣は婚禮なれば待女郞、葬禮なれば泣き女、どちらへ廻つても二役だよ。
むく　そりや御祝儀とお布施を、取込んで勝負しやせう。
甚五　併し、婚禮に泣くまいぞ。
李兵　葬禮に笑つては濟まぬよ。
八助　なんでも帳面通りにするがよい。
李兵　さうサ〳〵、わしらは百姓だから、こんな事はたべつけ申さぬ。
甚五　それで帳を拵らへて來ましたから、帳の通りにしますのサ。
むく　そんならわたしや娘御さんを、お連れ申しやせう。
八助　さうして下さい。
甚五　サア〳〵、早く支度して來ませう。
八助　わしも病人に藥を進ぜませう。
李兵　ナニサ、藥も無駄な話だ。
八助　サア、ござりませう。
ト念佛太鼓になり、おむく甚五兵衞は向うへ入る。八助李兵衞は奥へ入る。この時、李兵衞甚五兵衞又ぞろ

帳を遣へて持つて行く事。この鳴り物にて向うより與右衛門、手に薬疊と苧殻を持ち出て來る。後より段八、木綿袴の股立とり、大小足輕にて附いて出て來り、
花道にて

段八　然らば若旦那様、絹川どのゝ預かりの、お家の茶入れ紛失の、その品あなたの働らきにて、お手に入りましたとな。

與右　不思議に手に入るこの茶入れ、記し添へたる鑑定書、慥かに似せ物さりながら、茶入れは即ちおれが手に。

段八　それにつけても木下川にて、累を殺せし人殺しは、與右衛門と、内々取沙汰あるゆゑに、親旦那様人知れず、木下川薬師へ参詣と號し、あなたと面談なさる爲、夜に入らばお駕籠にて、親旦那とお前様、お逢ひなさるゝその事も、いろ／＼取計らひました。

與右　歸參いたさばその後にて、隠し置いたる寶を出し、立身出世は瞬くうち。

段八　今宵旦那の下屋敷、

與右　小村井村の別れ道、地藏の前にて、初夜を合圖に。

段八　然らばその節

與右　行け／＼。

段八　ハツ。

ト時の鐘、段八、引返して入る。與右衛門、舞臺へ來り、内へ入る。八助、奥より出て

八助　若旦那、お歸りなされましたか。

與右　八助、まだ阿母は死なないか。ハテ、丈夫な年寄りだ。

八助　モシ／＼、假初にも母御様の事、左様に仰しやるお心から

ト　あたりを見廻し、門口を締めると、合ひ方になり、思ひ入れあつて

モシ、與右衛門さま、如何に遺恨がござればとて、絹川氏の御子息様、殊に連れ添ふ女まで、累どのも手にかけた、又その後にてあなたの仕業。

與右　ナニ／＼、どうしたと／＼。

八助　ハテ、お隠しなされまするな。情ない事には、諸方で薄々噂を致しまする。絹川氏の養女の累、さすれば同胞二人とも、お前の仕業で家も絶え、もしその祟りが御身分に、かゝりもせうかと案じられ、コレ此やうに戒名も附けて、影ながら法事のまなびも、あなたのお身に間違ひの出來ぬやう。モシ、それが苦勞になりまする。

ト杢兵衛が渡せし戒名を出して見せろ。與右衛門、空うそぶいて

與右　イヤ、そんな事は知らぬ。何をおれが。

八助　イエノ〳〵、あの時に私しは、通りかゝつて見附けました。お隱しなされまするな〳〵。

與右　さう云はれちやア是非がない。併し、この身の幸ひは、われが今でも苦勞する、歸參の種の茶入れが思はず

ト懐よりちよつと見せる

八助　エ、すりやアノ、茶入れが

與右　われが百年尋ねても、出まじき寶を蛇の道は、蛇ぢやアねえが與吉めは、絹川甚三の餓鬼の頃、口論募つて遺恨の始まり。女はおれが密夫した、助が女房の生んだ娘、生けておいては親仁の敵と、いらざる事も吐かさうかと、それで二人は……併し、今更案じるは、阿母の所から、與右衛門どのと名宛のある、おれが持參のあの文を、入れて置いたる貢入れ、ツイ落したが、あいつが耳にならねばよいが。

八助　エ、、左樣ならアノお手紙が……ハテ、そりやア心がゝりな。

ト思ひ入れ、

與右　コレ、その戒名を見せろ。

八助　ヘイ。

ト渡す。與右衛門見て、思ひ入れあり

與右　この戒名は妙林信女、アノこれが、累に附いた戒名か。

八助　左樣でございます。

ト思ひ入れあつて

與右　累が面の變つた時、木下川堤へ上がつた髑髏、何者が書いたやら、妙林信士と記してあつたが、いらざる坊主の左平次に、書いた事でもあらうかと、思つてゐたが髑髏は助、それも錆附く古鎌に、彫つた印しは幸崎氏、ありやア石和で借りた鎌、十何年のその間、髑髏も離れぬ鎌といひ、この戒名の妙林信女、ハテ、物事は爭はれぬ。

八助　すりや戒名に見覺えが

與右　なに知るものか。コレ、佛いぢりも、いゝ加減にしろよ。

ト戒名を投げる。八助拾ひ、戴き、懐中する。この時向うより百姓一人、走り出て出る。爰にて與右衛門は茶入れの箱を盆棚へ置く。

百姓　コレ〳〵、八助どの〳〵、今夜は盆の十三日、急がしい晩ぢやによつて、早くするがよい。アレ〳〵、嫁御どのを駕籠へ入れて、擔ぎ込みます〳〵。

ト云つて引返して入る。

與右　さうか〳〵、それは大變。おれはわざッと袴でも穿かうか。

八助　私しは嫁の門火と、精靈のお迎ひ火と、一緒に焚きませう。

ト盆棚より水向け道具、婚禮の道具と取り違へ、八助、うろたへ騷ぐ思ひ入れにて、門口へ出て迎ひ火を焚きにかゝる。杢兵衞出て

杢兵　サア〳〵、急になつたの。嫁と精靈と一緒に來るか。サア〳〵、とんだ事だ〳〵。手傳ひませう手傳ひませう。

ト盆棚へ火を灯し、行燈へも火を灯す。合ひ方、鐃鉢入りになり、向うより百姓一人、白張りの高張りをともし、後よりさんすいなる乘り物を擔ぎ、これへ百姓一人、紙燈籠をさしかけ出る。乘り物の先へ百姓一人、袴にて、粗末なる戒名を持ち、後より百姓一人、位牌を持ち、甚五兵衞は羽織袴にて編笠をかむり、おむくは白布の帽子をかむり、百姓皆々、湯灌盥、手桶、鏡臺、針箱の類を青竹に通し、壹荷にかつぎ出て來り、花道中程へ下ろし

甚五　コレ〳〵、先の衆、向うの樣子は、よいかな〳〵。

皆々　大方よいでござらうて。迎ひ火を焚いてゐます。

むく　コレ〳〵、おりえさん〳〵、聟樣のお内へ來ましたよ。

トこれにて乘り物の戸を明ける。内におりえ、嫁の拵らへ、綿帽子、古き白無垢の振り袖にて顏を出し

りえ　そんなら爰が、與右衞門さまのお内かえ。

甚五　左やう〳〵。

むく　わしや恥かしいと、又なまめかさうと思うて。

甚五　イヤ、とんだ小浪だ。

りえ　わたしが來たこと兄さんへ、お知らせなされて下さりませ。

むく　オット合點、ソリヤ、駕籠をやりませう。

トまた舁きあげ、皆々、門口へ据ゑる。

杢兵　どなたも御苦勞、サア、聟樣、嫁御へ水向けをさつしやれ。

與右　心得ました。

ト駕籠に向ひ、水向けなして

これはどなたも、遠方御苦勞でござります。

甚五　これは聟樣、いかいお力落し、わざと嫁御の手を引かつしやりませ。

與右　アヽ、さうかえ。ハテ、面倒なものだ。

ト駕籠の側へ寄る。薄ドロ〳〵、上より心火燃えて乘り物の上へ立ちのぼり、パッと消える、與右衛門は駕籠に向ひ

サア、おりえどの、手を取りませう。

ト凄き合ひ方。駕籠を明け、内よりおりえの手を取り連れて出る。この時變つて累の亡靈、おどろなる髪を島田わげに結び、與右衛門に手を引かれ出て、與右衛門の顏を見る。與右衛門、慄りして思ひ入れ。皆々の目には見えぬ思ひ入れにて

むく　モシ、與右衛門さま、よい御器量で

皆々　ござらうがな。

ト云はれ、與右衛門、こなしあつて

與右　以前の家來八助が、妹のおりえ、さのみな女であるまいと、思ふに相違のこの面は、まだ執念の

八助　若旦那、不束者でござります。

與右　ハテ、うるさい器量だ。

かさ　家來の妹、足らはぬわたし、今からよろしう、お目かけられて

トこなしあつて

オヽ、おほもつ。

皆々　アヽ、めでたい〳〵。

ト件の合ひ方にて、與右衛門は取つたる手を振り切らうとするを、累の亡靈はキッと捕へ、離さぬ思ひ入れ。これにて是非なく手を引いて内へ入り、よき所へ座に附く。これにて亡靈は與右衛門の顏を見ながら手を離す。八助、あたりの樣子を見て

八助　コレ〳〵、こりやアどうだ〳〵。婚禮だといふにお前方は、葬禮の樣子だの。

甚　ナニ〳〵、これも帳面通りサ。ソレ、見さつしやれ……婚禮覺え帳とござるワ。先づ編笠、これは仲人、綟燈籠に香爐位牌。

むく　待女郎には白布の、帽子を着せて一升泣き、二升泣きでもお望み次第、めでたく手見せに、ワアヽヽヽ。

ト泣き出す。

八助　コレ〳〵〳〵、何をめでたい祝言に……そいつは大

方帳面か。
杢兵　わしも先刻からさう思うた。爰にあるのは葬禮の覺え帳、内へ附けたは、ア、、なんだ。
　ト見る。
八助　ドレ、見せさつしやれ。
　トよく〳〵見て
そりやこそ〳〵、葬禮帳へ附けたは、殘らず婚禮道具、そんなら先刻のいさかひに
甚五　兩方、帳が變つたさうな。
八助　イヤ、粗相な衆だ。
むく　そんなら祝うて、ホ、、、、、、。
甚五　どうした〳〵、なぜ笑ふ。
むく　ハテ、これでめでたく帳面消すのサ。
二人　何をたはけた。
　トこの時障子屋臺より、おかや、取りつき〳〵出てくる。
與右　コレサ阿母、病氣の形で、なぜマア爰へ。
かや　ハテ、わしもめでたい祝言の、祝ひと聞いて、病もどうやら
八助　それは何より、おめでたうござります。
かや　コレ〳〵、倅、今更云ふではなけれども、仔細あつてもらうた嫁は、八助が妹のおりえ、家來ぢやと思うて、我まゝを云ふまいぞ。
與右　ナニ年寄りの、愚痴の。愚痴を云はねえものだ。
かや　イヤ〳〵、愚痴ではござらぬて。得て斯ういふ事で
杢兵　ハテマア、ようござるわいの。
むく　マア、何よりは杯事を、ちつとも早う。
八助　成る程、めでたく固めの杯、妹が飲んで聟樣の、この若旦那へ。
　ト銚子杯を持ち來り、よき所へ置き
サア〳〵、杯、おぬしが始めて
　ト　杯臺をさし置く。累、杯を取つて思ひ入れあり
かさ　わたしが始めて
八助　サア、聟樣へ
　ト銚子を持つ。累は杯を取る。
千秋萬歳の千箱の玉を奉る……ア、、めでたい〳〵。
　ト酌をする。累の亡靈、飲んで
かさ　憚りながら
　ト差出す。與右衛門取上げる。八助、酌して
八助　めでたうあなた
　ト與右衛門、飲まんとする。その手を取つて

かさ　いよ〳〵お前は、この杯を
　ト恨しめげに見る。
與右　二世の固めと
かさ　その片眼こそその昔、助が左の片目から、その業因が娘の累、これもこの世をかためめ杯。
　ト與右衛門の手をとめる。與右衛門、思ひ入れあつて、その手を拂つて酒を飲まんとする。薄ドロ〳〵凄き合ひ方、持つたる杯の酒、心火となつて立のぼる。與右衛門、キッとなつて
與右　ハテ、恐ろしい。
　ト酒を落す。皆々これに心附かす
皆々　三國一ぢや、嫁とりすまいた、しやんしやん〳〵。
　ト皆々、手を打ち
ア、、おめでたうござります。
八助　これはどなたも、いろ〳〵お世話を。
甚五　さて仲人は宵の程、開きませうか。
八助　そこをわざつと御酒一つ、奧であがつて下さりませ。
皆々　左樣ござらばお辭儀なし
かや　わしは夜風の障らぬうちに
八助　馴染みの寢間へ

かや　ドリヤ、また横になりませうか。
皆々　ドリヤ、御馳走になりませう。
　ト唄、時の鐘にて皆々奧へ入る。おかやは障子の中へ入る。與右衛門と累の亡靈だけ殘る。八助、思ひ入れあつて
八助　さて、これからが木綿蒲團も有合ひの、一對そろふ相生の、何よりかより、屛風さら〳〵。
　ト床を敷き、六枚屛風を立てる。與右衛門は屛風の外にゐる。八助は累の亡靈の手を引き
サア〳〵、妹、恥かしからうが、あの上へ
　ト屛風の後を廻つて床の上へ連れてくる。此うち始終薄ドロ〳〵、爰にて又おりえと變り
りえ　兄さん、わたしや勿體ない、若旦那樣を男に持つては。
八助　ハテ、阿母樣がわしへのお頼み、お許しの出た家來の妹。
りえ　現在お主を
八助　ハテ、おしげりなされませ。
　ト唄、時の鐘にて、八助、心遣ひして奧へ入る。おりえ、思ひ入れあつて

りえ　モシ、若旦那樣、あなたも爰へ
與右　おれがどうして、そこへは少つと
りえ　そんならわたしが、お否かえ。
與右　サ、さうではないか。
りえ　左樣ならば。
ト屏風の中から及び腰に手を伸し、與右衞門の手を取る。振りもぎるを又手を伸ばし、無理に引ッ張る。これにて與右衞門、ヨロ〳〵として思はず屏風の中へ入ると、爰でおりえは、また累の亡靈と入れ變る。
與右　それ程までに
かさ　お否かえ。
ト顏を出す。矢張り、薄ドロ〳〵。變りし累の面體ゆゑ、與右衞門は思ひ入れ。累の亡靈も思ひ入れあつて
與右　又も累か
かさ　妻をかさねし與右衞門どの、邪慳の刃に木下川の、みちくる汐の、恨みの炎。
ト此あたりより奥よりおむく、酒機嫌にて出で來り、屏風の中へこなし。
與右　すりや、一念は浮かみもやらず
かさ　消えても消えぬ胸の火の

與右　恨みを云ふか。
かさ　骨肉、土に戻るといへど
與右　その魂ひは
かさ　五百生まで、忘れぬ恨み。
與右　エ。
ト思ひ入れ。屏風の外にゐたるおむくは、ワナ〳〵震へしが、この時「ワッ」というて倒れる。與右衞門はおむくの聲に驚ろき
また來たか。
ト屏風の外へ駈け出る。亡靈は床の上へ俯伏しになると、爰にて又おりえの姿と變る。與右衞門は胸を撫で、ホッとしたる思ひ入れ。おむくこなしあつて
むく　イヤ、恐ろしい。
りえ　アノマア聲で
ト顏をあげる。おりえの顏ゆゑ、與右衞門見て
與右　今ではおりえ。そんなら死靈も
トこの時、障子の内にて、おかやの聲にて「ワッ」と云ふ。三人思ひ入れ。
むく　又かいなア。
與右　今度は障子の

むく　ほんに此うち。
　ト明ける、内におかやは一重帶にて首くゝり、下がりゐる。三人見て
りえ　アレ、阿母樣が、なんで非業の
與右　死をとげたるも死靈の業か。
むく　今度は葬ひ。サア忙がしいワ。
　ト大泣きに泣きながら奥へ走り入る、此うち外の藪より判人安右衞門、窺ひゐる。與右衞門、思ひ入れあつて
與右　かゝる障化のある上は、期を延してもしもの事。手に入つたりし茶入れを持つて
　ト盆棚に上げ置きし件の箱を取つて
　少つとも早く持參して
　ト行かうとする。おりえ縋つて
りえ　そんならわたしと緣組みあつたが
與右　委細は後で知れるは治定。おれは茶入れを
　ト振り切つて門口へ出る。外にゐたる安右衞門、走り寄つて件の箱を引ッ凌ひ
安右　嬉しやこれこそ結城の重寶。
　ト引ッ凌つて向うへ走り入る。

與右　南無三、うぬを。
　トごん／＼になり、與右衞門は向うへ後追うて一散に入る。おりえ、うろたへ
りえ　コレイナア、阿母樣があのやうに。コレ、兄さんいなア。
　ト呼び立てる。奥より八助、おむく、甚五兵衞、杢兵衞、百姓皆々出て
八助　コレ／＼、妹、何事だ／＼。
りえ　アレ、あのやうに阿母樣が
むく　首かゝりしてあのやうに。
八助　ヤア／＼／＼、長の煩らひお年の上、とりのぼせてか、こりや斯うしては
甚五　直ぐに下ろして何氣なう、死骸は棺へ
八助　お賴み申します。
甚五　心得ました。皆ござれ。
　ト皆々障子の中へ入り、跡を閉す。
杢兵　サア／＼、これからはおれが受取りの葬禮だ。八助どの、帳面通りに、コレ／＼
　ト帳を出し
　先づ第一が鯣に長熨斗。

八助　ナニ〳〵、どうした。
杢兵　さてその次が綿帽子、蛤の吸ひ物、こいつは今頃
　蛤は、船堀へ買ひにやらうか。
八助　コレ〳〵、庄屋様、又お前の帳面も、違つた〳〵。
杢兵　婚禮帳と葬禮帳、斯う物事がはまぐりに
八助　なぜ蛤だの。
杢兵　ハテ、ぐりはまの地口よ。
八助　ハテ、埒もないお方ぢや。
　トこの時薄ドロ〳〵、香爐にパッと煙硝火立つ。おり
え、のぼせて苦しむ體にて
りえ　コレ、兄さん、わたしや俄にこの胸先、その上熱う
てならぬわいなア。
八助　どうした〳〵。折も折とて霍亂か。庄屋様、湯を沸
かして
杢兵　合點ぢや〳〵。
　ト走り入る。
八助　薬があつたが
　ト紙入れより薬を出し、おりえに含ませ
サア〳〵、こりやア飯沼の弘經寺から出る御夢想の妙薬。
いま湯が沸くワ。

　ト抱きかゝへる。
りえ　こりやマア何で此やうに、身内が熱して
八助　惣身俄に火焔の如く、それには變つて水の如く、汲
み流すほど玉の汗。
りえ　苦しいわいなア。
　トのたるを押へて思ひ入れあり
八助　阿母様の非業の上、また妹までこの體は、正しく主
人に恨みの死靈、報いは眼前、南無阿彌陀佛南無阿彌陀
佛。
　ト介抱する。誂らへの祐念の出の合ひ方になり、向う
より所化二人、黒衣、白の脚絆、網代笠にて
二人　飯沼祐念寺地藏堂建立。
　ト箱を擔ぎ、一人は鉢を持ち出て來る。後より祐念上
人、朽葉の麻衣、白股引手甲、塗り網代の笠、錫杖
を突き、鉢を持ち、修行の體。後より供男、兩掛けの
箱を擔ぎ、出て來る。
所化　御免なさい。祐念寺地藏堂建立、お志しをお願ひ申
しまする。
祐念　南無阿彌陀佛々々々々々〳〵。
　ト門口に立つ。八助、聞きつけ

八助　幸ひの所へ祐念さま、何か俄の病氣もあり
ト思ひ入れあつて、おりえを寢させ、盆に米を載せて
持ち出で
ハイ／＼、上げませう。
所化　御回向。
ト鉢で受けて
祐念　四趣十羅五逆消滅彌陀平等即心成佛、南無阿彌陀
佛南無阿彌陀佛。
ト回向のうちにフト思ひ附き
ハテ、心憎きこの家の樣子、正にこの家は、非業にこの
世を去る靈有つて、病難ありと覺えたり。ハテ、恐ろし
き死靈の祟り。
ト家の棟を見詰めて思ひ入れ、八助、こなしあつて
八助　すりや、何と仰しやります。この内には死靈の祟り
があると仰しやりまするか。ア、誠に爭はれぬもの。
志しまする佛は、女子でござりまするが、六日以前相
果てまして、それも非業で今日が丁度
祐念　初七日の逮夜でござるか。
八助　左樣でござりまする。よい折柄にあなたのお出で、
サア／＼、穢うはござりまするが、これへお通りなされ
ませ。
ト花茣蓙を出して敷ふ。
祐念　然らば回向いたして進ぜう。免さつしやれ。
ト内へ通り
コリヤ、弟子共は殘り、供の男は飯沼の旅宿へ、先へ戻
れ先へ戻れ。
供男　ヘイ／＼、お先へ參ります。
ト向うへ入る。
祐念　して、只今お話しの、橫死めされた婦人は、身寄り
の衆かな。
八助　イエ、左樣でもござりませぬが、譯ござりまして私
し方にて、戒名を附けまして、弔うて遣はしまする。
祐念　それはお奇特。して、戒名はナ。
八助　ヘイ／＼、即ちこれでござりまする。
ト件の紙の戒名を位牌へ貼り、盆棚より持つて來り差
出す。祐念、取つて
祐念　妙林信女……ハテ、心得ぬ。
ト思ひ入れ、合ひ方變つて
この法名は、男と女と分れども、恨みは同じその者に、
今にその念かゝりあり。その昔、祐念若かりしとき、所

は甲州石利川にて、非業に死したる魂魄の、とゞまる髑髏に草刈る鎌の、鑄ひ附きありし其まゝにて、河原にありしを取上げて、妙林信士と髑髏に記し、解脫を祈れどきゝ入れず、髑髏は忽ち水中に落ちて、一つの心火えんえんたり。これぞ祐念行法の、到らぬ所と身を悔み、年を重ねてこの程、婦人の戒名頼む者あり、授け得させし法名は、妙林信女、これも卽ち愚僧が手蹟。

ト思ひ入れあつて

もしやその者、五體は不具にあらざるや。

八助　へイ〳〵、玉を欺むく容貌も、死ぬる今際は片眼かい、足さへ縮む俄の跛。

祐念　それにて思ひ當りたり。それぞ正しく下總の國、羽生村にありし農人、助といふ者の恨みならん。して、この家の主は

八助　へイ、與右衞門と申しまする。

祐念　その與右衞門こそ、素性は正に金五郎とやらんか。助が恨みのその念殘つて、障化をなすも今この時。

八助　その怨念を祐念さま

祐念　救ふは佛の誓願にて

トこの時臥したるおりえ、思ひ入れあつて

りえ　兄さん、何やらわたしが目先へ。

ト苦しむ。

八助　ヤ、何か其方の

ト駈けよつて介抱する。

祐念　して、その女は

八助　卽ち妹、只今俄に熱氣の苦しみ。

祐念　すりや、その婦人も

トおりえの側へ寄り、よく〳〵見て

ハテ、恐ろしきかな。これも卽ち女の死靈。

八助　然らば何卒その女

祐念　附添ふ死靈に解脫をすゝめ、法德未熟にあらんずなれど、念佛行者の祈りを以て、退けくれん……外にこの家に死人もあれど、それも死靈の爲せる業、女が體の裏へぬうち、近きに退け

八助　何卒苦痛をお助けあつて

祐念　成佛得脫いたさせくれん……コリャ死靈、成佛願はば五體を退けよ。さなきに於ては祐念、諸佛の功力によつて追ひ退けん。行者の法力しるしを見せん。信者の各々、一同に、百萬遍こそ肝要ならん。

八助　然らばこれにて念佛修行、世に有り難き名僧の、わ

れをお助けなさるゝぞ。

りえ　そんならわたしを祐念さまの……エ、、有り難い。

祐念　サア、支度々々。

ト唄になり、祐念は佛前へ向ふ。八助は苦痛のおりえを抱へる。この見得にて舞臺眞中へ黒幕を振り落す。

大ドロ／＼になり、日覆より紫雲下る。舞臺前へ蓮の盛りをセリ上げる。舞臺にも一面に黒幕を敷き、上の方に怪しき燈籠、これに六道亡者中と書いたるを出す。尤も極樂の道筋、七月十三日の體。道具納まると。ドロドロ打上げ、踊り地になり、向うより亡者大勢、いづれも白きなり、經帷子、胡麻鹽髪をさばき、手を打つて踊り出て、舞臺を踊り歩く。尤もこの中に、惡侍ひ蜂山藤六と中間伴助の亡者も交つてゐる事。

皆々　ソレ／＼／＼、ヤットヤ。

ト勞れたる體にて皆々、寢はらばうて

亡一　ヤレ／＼、今宵は盆の十三日、まだ十六日までは間があるの。

亡二　それ／＼十六日は天下晴れて、おいらが物日だから、思ひ入れ踊らうワ。

亡一　そりやアさうと、六道に迷つてゐるおいらだから、極樂手合ひは安くするの。

亡三　そりやア當り前よ。併し、十三日の踊りは、おいらが去年から始めたのよ。

藤六　さうか、身共は武士の亡者だが、なぜ十三日を踊り日に極めたな。

亡四　ハテ、お前も解らねえものだ。娑婆に内のある者は、迎ひ火も焚きかけて洒落て行くが、おいらはごろつきだによつて、第一、娑婆へ行つても落ちつく所がねえ。

亡五　それ／＼、おいらは去年精靈棚へ居候ふに行つて見たが、イヤモウ、狹くつて、夜ッぴてひどい蚊に責められた。

伴助　地獄で責められた上に、娑婆まで行つて蚊に責められては、外聞が惡い。

亡六　さうサ、おいらもごろつきだが、ごろつき地獄はイサミがよいて。

亡七　コレ／＼、この頃來た脊の高い男は、謠の師匠だといふが、それでもごろつきか。

亡八　イヤ、あの男は三番叟がいゝさうだから、舞はして見ようか。

亡九　イヤ〳〵、娑婆と違つて、三番叟は、をかしなものだね。
皆々　そこもあるな。
亡二　コレ〳〵、みんな聞かッし。盆の十三日に來る仲間は、頭をくらはすが習ひだ。今日來た奴は、素敵にくらはすがよい。
亡十　その上に、音頭をあげさせませうか。
皆々　さうサ〳〵。
亡三　モシ、お屋敷の亡者さん、お前もあの折さんも踊んなさいな。
藤六　身共など、お國に居つた時分は、鹿兒島踊りが名人ぢやてな。
伴助　折助〳〵と云はねえがいゝ。折助が地獄へ來ちやア草鞋も出來ねえ。
亡四　亡者が草鞋を買つて何にするものだ。時に皆の衆や、亡者が寄つて、腕押しか臑押しか、角力をとらうぢやあるまいか。
皆々　そいつはよからう、やるべい〳〵。
亡一　おれが行司へ廻らう。
皆々　貴様、一番とらッし。
亡一　角力は不得手だ。
皆々　とりねえ〳〵。
伴助　わしが一番、ひねつて見ようか。
皆々　折助が相手か。こいつは見物だ。
ト亡者一は蓮の枝を持つて行司をする。亡者の二と伴助と角力よろしくあつて
亡一　西、針の山〳〵、東、血の池〳〵、こなた針の山、かなた血の池〳〵。
ト思ひ入れあつて兩方別れになる。
皆々　矢ツ張り、踊りがいゝ〳〵。
亡三　コレ〳〵、先刻來た屋敷者の二人、てめえ達は新參だから、施餓鬼の飯を取つて來さつし。
藤六　その飯が出ますかえ。
皆々　無緣法界の蓮の飯か、團子があるから拾つて來い。
藤六　侍ひが團子を拾ひに行くのか。
伴助　主從二人で參りませう。
皆々　早く行け〳〵。
二人　ハテ、人使ひの惡い亡者だ。
ト踊り地になり、兩人入る。あと亡者一同踊つてゐると、この鳴り物をかりて、向うより神田川の與吉、白

の浴衣、白の下帶、白帶、白の腹がけ、白の手拭を向う鉢卷にて、摺鉢を提げ、おさえ、同じく白の形にて、手を引いて出て來り

與吉　さつき平井の土手で、てめえもおれも、尋ねる茶入れが手に入つて、ヤレ嬉しやと思つたら、何だかヒイヤリしたやうだ。

さえ　わたしを逐つて來たものか、抱いて寢ようと無理口說き、お前に逢うて嬉しやと、思つた後は夢うつゝ。

與吉　その時相手の折助め、まだ／＼外に拾つたところ、摑むと直ぐにぼんやりと、朝霞晴れぬ心持ち、それにしても、あの折助めに逢ひたいものだ

さえ　わたしもお前にお守を、貰うたまでは覺えてぢやが、跡は一向譯もなう。爰はマアどこぢやぞいな。

與吉　來る道々も此やうに、摺鉢が捨てゝあるから持つて來たが、爰はマアどこだか

ト向うを見て思ひ入れあり

知れた／＼、向うの燈籠に六道といふ字が書いてあるワ。ア、そんなら爰は青山の六道だ。こいつは目黑へ來た道で、狐に化されたと見えた。氣を附けろ／＼。

ト眉毛を濡らして二人とも、ウロ／＼と舞臺へ來る。

皆々見附けて

皆々　ソリヤ、新入りが來たぞ／＼。踊らせろ／＼。

ト取卷く。與吉は持つたる摺鉢にて無性になぐり

與吉　どうしやアがる／＼。うぬらは何だ。住吉踊りの化け物か。寄りやアがるな。

亡一　コレ／＼、爰へ初めて來た者には、踊りの音頭をあげるが習ひ。音頭を取らんせ／＼。

與吉　ナニ音頭をとれ。べら坊め、木遣りはやつたが音頭は知らぬワ。

亡一　そんなら、コレ／＼女中、お前、音頭を取らんせ。

さえ　そりやア伊勢音頭かえ。そりやア兩國へ出たよ。

皆々　イヽヤ、こりやア極樂音頭だ。

さえ　そんなものは知らぬわいな。

亡一　そんならわしが敎へてやらう。先づ、白蓮華を斯う持つて

ト音頭になり

〽七月の十六日は佛の慈悲よ。奈落の底の罪人も、呵責の炎まぬかれて、踊り狂へど情なや、十七日の曙は、元の奈落に苦しむと、盂蘭盆經に說かれたり、亡者のいづれも合點か。

大正十四年七月　市村座上演
尾上菊五郎の與吉　坂東秀調のおさえ

皆々　オヽさて、合點ぢや。
　ト一同手を振つて踊り出し、二人を無理に中へ入れようとする。與吉は無性に擂鉢を振り廻してくらはす。此うち下座より藤六と伴助、飯とお迎ひ團子を蓮の葉へ入れて持つて出て來り、浮れて踊り込む。與吉おさえは思はず兩人を見附け
與吉　ヤア、うぬは折助だな。
伴助　わりやア與吉か。
さえ　ヤヽヽヽ、藤六さんかえ。
藤六　おさえだな。
與吉　茶入れの在所を知つたうぬら
藤六　おいらは知らぬワ。
　ト逃げるを、與吉おさえ、取押へ
與吉　逃がしはしねえぞ〳〵。
さえ　蜂山さん、茶入れの在所をどうぞ、お前
與吉　吐かさねえと、締めるぞ〳〵。
　ト二人を捕へて締めあげる。
皆々　イヤア、喧嘩だ〳〵。
　ト立ち騒ぐ。
與吉　コレ〳〵、こんた衆の知つた事ぢやアねえ。此奴等は盗人だよ。腰押しをすると同類だよ。
皆々　イヤア。
與吉　サア、茶入れは、どこへやつた〳〵。
伴助　アイタヽヽヽ、おらア茶入れは、知らねえ〳〵。
與吉　イヽヤ、知つた筈だ〳〵。
藤六　コレ〳〵、與吉、そりやアてめえが無理といふもの、下郎は知らぬ、存じた者は身共ぢやワ。
與吉　アヽ、お身さんが知つてか。知つてゐるならどこにある。質においたか、但しは賣つたか、サア、それを云へそれを云へ。
さえ　早う云はんせぬと、抓るぞえ〳〵。
　ト太股を抓る。
藤六　コレサ、痛いワ〳〵。ナニ隠すものか、ナア伴助。
伴助　左やう〳〵、旦那、云つて聞かして、早うお歸しなされませ。
藤六　今こそ云ふが、あの茶入れは、質屋から正銘を引上げ、娑婆にある與右衛門が手へ入つたは、ありやア似せ物、まこと正眞正銘は
さえ　云はしやんせぬと、抓るぞえ〳〵。
藤六　云ふわえ〳〵。誠の茶入れは龜井戸の、巴屋の庭の

中へ隱して置いたワ

與吉　そんなら、いよ〳〵あの茶入れは

さえ　その植込みの女郎花、根元に隱してござんすか。

藤六　隱してあるから二人は早く。

伴助　まだこの上に鑑定書、小用藥と吹きかへたを、平井の渡しの船頭が、通じ藥と心得て。

與吉　すりや書き物は渡し守、うぬらが白狀、相違はないか。

藤六　ナニ、間違ひがあるものか。少つとも早く手に入れて

與吉　それを持參し、歸參の願ひ。

さえ　逢ひがなくば、與吉さん

與吉　爰から直ぐに、來い

ト二人とも身繕ろひして駈け出すを、皆々取卷き

皆々　ならぬぞ〳〵。

與吉　寶を取りに駈け出すを、邪魔ひろがずと通さねえか。

亡二　コレ〳〵、新入り、通してやつたら、どこへ行く。

與吉　歸參の種の茶入れと添へ狀、爰から直ぐに

藤六　どこを當途に行く氣だよ。

與吉　ヤア。

ト思ひ入れ。

伴助　爰は娑婆とは大違ひ、おれもてめえも一つ日に、死んだばかりに新盆に、死んでは築地へ歸られねえ。

藤六　わいら二人も、死んだわエ、。

與吉　ヤ、、、、そんならおれも、おさえも一緒に

さえ　して、何者がわたしらを

藤六　送りに行つたはわれが親、助をこの前殺したる、金五郎こそ今では與右衞門、その惡者がこの間、返り討にとわいらを殺した、爰は卽ち

皆々　西方彌陀の國だわエ、。

兩人　エ、、、、。

ト驚ろく。

藤六　二十四時の經つたる二人、後へといつてはこれ程も、歸られぬから云ひ聞かした。それが行かれる位なら、何しに行かずにゐるものか。疾においらが取りに行く。

伴助　取りに行かれぬ所だから、すつぱり在所を云つたのだ。わいらは死んで爰へ來て、自由に往來がなるものか。それでも娑婆へ取りに行くか。

與吉　サア、そりやア。

藤六　茶入れは今頃あの內で、庭の普請に取出して、瓦と

一緒に捨てたであらう。
與吉　エヽ、さうなつちやア
藤作　歸參が出來ぬか。
與吉　どうしてそれぢやア
藤作　取りに行かぬか。
與吉　サア、そりやア。
皆々　サア／＼／＼、ハヽヽヽヽ。
ト皆々笑ふ。與吉おさえ、ヂツとなつて
與吉　そんならおいらが遺恨ある。あの與右衞門が仕業にて、おれもてめえもその砌り
さえ　刃にかゝつて世を去りし、二人は娑婆にと思ひしに
與吉　十萬億土へいつの間に
さえ　來るも誠に幻しの
與吉　敵は知れても、其奴も娑婆に
さえ　恨み云ふのも冥土から
與吉　なんの屆かう、コレおさえ
さえ　與吉さん
與吉　エヽ、いま／＼しい。
ト兩人向うを見て泣き落す。皆々笑ふ。この時、日覆より

○　與吉ヤアイ、おさえヤアイ／＼。
ト微かに呼び聲、二人は聞きつけ
與吉　ヤヽ、ヽヽ、どこでかおれが名を呼ぶが
さえ　さう云はしやんすりや、わたしが名も
與吉　微かにそれと
○　與吉ヤアイ、おさえヤアイ。
與吉　さてこそ呼ぶは向うの方、おれと一緒に。
ト行かうとするを、皆々引留め
皆々　この世へ來ては、歸さぬ／＼。
與吉　エヽ、退きやアがれ。
ト皆々を毆りのけ／＼、おさえを引立て向うへかゝる。皆々留めるを取つて投げ退け向うへ走り入る。矢張り日覆にて
與吉ヤアイ。おさえヤアイ。
ト呼び聲する。藤六、伴助、思ひ入れ。
藤六　二人が行つたその道を、伴助つけろ。
伴助　心得ました。
ト跡追うて行くを皆々捕へて
亡一　彌陀の御國を馳落ちとは、憎い亡者め。
皆々　本田善光その餘は覺えぬ。

藤六　それは昔の本田善光
伴助　わしは善公、どうぞ歸して
皆々　ならぬワノ＼。
二人　婆婆へ娑落ち。
皆々　地獄紛失、逃がすなノ＼。
ト追ひかけノ＼追ひ廻し、兩人下座へ逃げて入る。皆皆追ひかけて入る。此うち風の音、湯のたぎり、大釜の沸きかへる音して、後の道具よき程に黑幕切つて落す。
本舞臺、元の平井の渡し場の道具に戻る。
ト爰に與吉おさえの死骸、元の通りにあり、惣次、萬助、三婦六、百姓大勢立ちかゝり
皆々　與吉ヤアイ、おさえヤアイ。
ト呼び生けてゐる。よき程に兩人、心附いたる思ひ入れにて、ツカノ＼と立ち上がる。
惣次　ヤ、、、お二人ながら氣が附きましたか。
皆々　氣が附きましたか。
與吉　そんなら今のは
さえ　お前もわたしも

與吉　ちつとのうちに、あの世の交り。
さえ　心の附いたも
惣次　お前が御所持の六字の名號。
さえ　ほんに、わたしも懷中に
ト名號を出し開き見る。
與吉　ヤ、、、祐念さまのこの名號、切れたる疵も七所、わしが着るもの、おさえが形も
さえ　二人合せて七所、切れたも慥かに
惣次　刀疵、それにお二人惣身に
與吉　疵一ケ所も見えざるは、これが誠に劍難七太刀
さえ　わたしら二人が身替り名號。
與吉　念佛行者の功力のしるし。
二人　エ、、有り難い。
萬助　水を吐かせる小用藥。これもお役に立ちませう。
與吉　そんならこれが
惣次　殊にあなたが握りつめ、離さぬこれなる貢入れ、中には與右衞門母親より、こまノ＼書いたるこの文言
ト件の文を出す。
與吉　ドレ。
ト取つて、あらまし見て

宛て名は與右衞門、これを持つたる奴こそは、おいら二人を返り討と、討つたる敵。

さえ　お前は早う誠の茶入れを

與吉　秋草しける女郎花、根元を穿つて

ト有りあふ鍬を持つて思ひ入れ。

惣次　この子はわしが預かりました。お前は早う

與吉　そんなら頼んだ。どなたもお世話。

皆々　めでたうござつた。

さえ　首尾よう取り得て

與吉　合點だ

ト屋體囃子になり、與吉は鍬を掻いこみ、一散に向うへ入る。舞臺の人數は、めでたい〳〵と皆々手を打つてゐる體にて、道具廻る。

本舞臺、元の與右衞門の世話場に戻る。爰に祐念、眞中に撞木を持ち、左右に所化、側におりえ、平伏してゐる。八助甚五兵衞おむく、その外大勢、珠數に取附き、百萬遍の見得、責め念佛にて道具納まる。

ト念佛打ちあげる。

祐念　祐念つら〳〵かんがみるに、りえが難病、死靈の祟りに相違なし。正に累が業なるべし。いかなる八獄の罪人たりとも、佛陀の力を仰ぎ、只一心に頼まんに、浮まずといふ事あるべからず。祐念が法力に德あらずとも、唱ふる念佛に德あらざらんや。附き添ふ靈魂、天魔外道に等しき障化、因果の道理を辨へて、菩提の道に赴けよ。只有り難き念佛の行者、百萬遍こそ肝要ならめ。各々隙なく念佛修行。

皆々　ハア、有り難うござります。

祐念　卽ちりえを珠數の中に取込めおき、各々丹精をこらし、念佛修行いたされなば、魑魅魍魎の所爲にもせよ、大願剛力の本懷、諸佛五念の怪力、一代經卷の金言空しからじ。いかなる三障四魔をも直ちに退け得さすべし。急いで各々、念佛々々。

トおりえを眞中に据ゑ、その側に祐念、鉦を構へ、思ひ入れあつて

願はくば童女を苦しめ、成佛を願ふは、必定劍難水死の累、他力本願佛力法力傳授力、如何でしるしのなからんや。本願念佛の功德を以て、直ちに成佛なさしめ給へ。光明遍照十方世外、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、……南無阿彌陀ン佛。

大正十四年七月　市村座上演　尾上菊五郎の累の亡靈
守田勘彌の祐念　尾上榮三郎のおりえ　大谷友右衛門の八助

皆々　ト鉦を打つ。
　南無阿彌陀ソ佛。
　ト百萬遍の思ひ入れ。くぎれ〳〵に祐念、持つたる珠數にて數を取ること。よき時分より、薄ドロ〳〵になり、後の盆棚へ累の亡靈現はれ、キツとなると、仕掛けにて、この體を其まゝ、おりえの後へ現はれ、後より抱へしめる。これにておりえ、苦しむ思ひ入れ。祐念、目を附け。
祐念　コリヤ、りえよ、累が死靈は、其方が目によう見ゆるか。
りえ　アイ、わたしを抱へて胸元を、アゝ、苦しうござんす。
皆々　イヤア。
　ト顫へ出す。
祐念　すりや其方を、アノ死靈が
　ト思ひ入れあつて、おりえの髻つかんで引据ゑる。この時、累の亡靈も引附けられし思ひ入れ。
ヤイ累、汝これまで佛の道に疎くして、一滴の水、一枝の花、佛へ供養の心なく、天罰直ちに非業の死をとげ、罪なき者を苦しむるは何事ぞ。念佛の功力を以て、成佛得脱なさしめん。五體を立去り、苦痛を助けよ。さなきに於ては、この上修羅の苦患をうけん。退けよ、離れよ、得脱いたせ。
　ト珠數にて散々に打ち据ゑる。おりえも累も打ち倒され、打伏しゐる。
各々、念佛々々〳〵。
皆々　南無阿彌陀ソ佛〳〵。
　ト百萬遍になる。よき程に累の亡靈、顏をあげ、おりえの顏をヂツと見て、よろめき〳〵門口へ行き、振り返つてゐる。念佛とぎれる。
祐念　コリヤ〳〵、りえよ、累は〳〵。
りえ　あの門口へ出て、わたしが顏を恨めしげに見て居ります。
祐念　念佛々々〳〵。
皆々　南無阿彌陀ソ佛〳〵。
　ト顫へ聲にて責めかけ〳〵申す。累の亡靈、耳をふさぎ、そろ〳〵と又歸り來り、おりえの側へさしよる。
祐念　コリヤ、りえよ、累は〳〵、もう居ぬか、どうぢや。
りえ　アイ。
　ト嬉しさうにあたりを見て、側に居るゆゑ、悸りして

居りまする。

祐念　いづれに居る。

りえ　また爰に居りまする。

ト苦しき思ひ入れ。祐念、聲を荒らげ、立ちあがつて天を睨み

祐念　實業正覺の阿彌陀佛、天眼天耳の通を以て、我が云ふ事をよく聞かれよ　こかうしゆいの善行にて、てうせ列願の名を現はし、極重惡人無他方便、ゆいせうめうじ、必定我界の本願は、誰が爲に誓ひけるぞや。この上は祐念が行力、盡きしか盡きざるか、地藏菩薩の奇特にて、直ちに立去れ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト懐中より錦の袱紗に包みし地藏の畫像を取出し、さしかける。大ドロ〳〵になり、累の亡靈、苦しむ思ひ入れ。八助はおりえを圍ふ。

かさ　アラ淺ましや恨めしや、今の累が死靈の起り、もと下總の國羽生の土民、助といふ者、與右衛門が仕業にて、生れもつかぬ五體の怪我、殊に二歳の娘を捨て置き、助を鎌にて殺害なし、その髑髏この地に流れし、助が娘は即ち累、親の敵と知らぬ身の、契りを結び與右衛門と、死なんとせしとき父の怒り。さるによつて、面體變つて、親に等しき惡女の相好。又そろ我れを殺害なし、その恨みやむことなく、緣ある者をとり殺し、又は苦痛を見せたるに、祐念行者の法力に、近よる事の叶はぬか。アラアラ〳〵、淺ましやなア。

祐念　死靈の累り、さもありなん。なれども無心のこの女、苦痛を助けよ、退けよ離れよ祐念が、あの世の苦患は助けくれん。成佛得脱、立去れ〳〵。

ト畫像をさしつけ〳〵詰め寄る　累の亡靈、これにて恐れて跡しさりに、タヂ〳〵となり、魂棚よき所まで追はれ行きしが、爰にて煙硝火夥しく立ちのぼる。累の亡靈消える。皆々「ワツ」というて倒れる。八助はおりえを抱へて思ひ入れ、祐念、煙立つ方を見て

ハテ恐ろしき、亡靈ぢやなア。

トきつとなる。大ドロ〳〵、見得にて

ト引附ける。直ぐに双盤のツナギ、引返し、　幕

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面、石の大地藏、白張り提灯、松の大樹、供養札開帳札立ち、所々に稲叢、尤も仕掛けもの。爰に與右衛門、上下大小に

改め、件の安右衛門を引附けゐる。傍へに乗り物、持ち槍、箱提灯、合羽籠、挾み箱、供廻り大勢、それ〳〵の形、段八附添ひ扣へゐる。行列三重、時の太鼓、捨て鐘にて幕明く。

皆々　お迎ひ。

ト安右衛門、振り切つて行くを、與右衛門、引ッ捕へ

與右　おのれ無法にこの茶入れ、奪つて駈出す町人め、身動きするを手は見せぬぞ。

安右　さう云ふてめえは木下川與右衛門、上下姿のその形は、こりやアどうだ。

與右　ヤア、過言な奴め。以前は侍ひ、暫らく流浪の與右衛門が、今日屋敷へ、歸參の迎ひ、殊に所持するこの茶入れを、奪ひ取つたる不敵な奴。

段八　主人へ近づく

皆々　慮外な奴め。

安右　それでも茶入れはかゝり合ひ、蜂山さまから頼まれて、似せ物まで拵らへたは、わしが仕事だ。それだによつて、茶入れとあるゆゑ

ト行くを捕へて引附ける。この時、双盤の鳴り物、向うより八助、走り出て來り

八助　ヤ、、、若旦那樣、さては歸參の願ひが調ひ

與右　家老中より迎ひの同勢。

八助　めでたき出世の其うちでも、果が死靈に阿母樣は

與右　病死なしたか。老ぼれ一人さもあらん。殊更手に入るこの茶入れ、その町人めが邪魔するゆゑ。

安右　茶入れの似せ物拵らへたは、藤六さまとわしが業、それだによつて

ト茶入れへ手をかける。八助、捕へて

八助　似せ物ありと聞く上は、油斷大敵旦那樣、しかと改め、その上にて

與右　如何にも茶入れの、實否を糺して

ト八助へ差出す。供廻り提灯さしつける。八助、茶入れを見て

八助　ヤ、、、こりや私しが盗ませし、あの茶入れには相違して、眞赤な似せ物。

與右　すりや、この品は似せ物とや。それといふのもおのれが手ぬかり、思へば〳〵大だはけ。

ト八助を足蹴にする。

八助　すりや、似せ物は蜂山どの、この者語らひ拵らへしか。誠の茶入れの在所を吐かせ。

大切

安右　イヽヤ知らない、おれもあなたへ差上げて、鉢山さまは切られた上は、行くへは誰れも知らないワ。
與右　すりや、その品の在所は知れぬか。ホイ
八助　うつけた下郎め、家來、縄うて。
段八　ハツ。
　ト かゝるを、八助、立廻つて段八の刀を拔き取り、腹へ突き立てる。
皆々　これは。
八助　この八助が申し譯、役に立たずとどん腹かき切り、くたばる私し。何卒お心改められて
與右　また意見立て、聞く耳持たぬ。一旦歸參の迎ひといひ、期を延さず、これより直ぐに、この似せ物を誠と云ひ立て、持參の上にて茶入れの詮議。者ども、隠密。
皆々　ハツ。
八助　その穢しまのお心ゆゑ、非業の果が死霊にて、妹は難病。
與右　たにそれしきに屈せんや。おのれも門出を穢せし下郎め。
八助　そんならどうでも……エヽ、末々御身の
　ト 引廻す。

安右　この事訴へ
　ト 駈け出すを與右衛門引附ける。その間に八助、刀を拔き、バッタリ落入る。安右衛門、逃げようとするを切り倒し
與右　刀を清めい。
段八　ハツ。
　ト 手桶を持ち行き注ぐ。この時薄ドロ／＼になる。正面の地藏へ心火燃える。與右衛門、キッと目を附け
與右　又も果が怨念來るな。障化なきうち、歸參の門出。者ども、供せい。
皆々　ハツ。
　ト 大ドロ／＼、一同顔を上げると、供廻り殘らず累の顔、持ち道具提灯あたりの高札、すべて累の顔になる。正面の大地藏、同じく累の顔になり、目口動く。與右衛門、ギヨツとして段八を見ると、これも同じ顔ゆゑ
與右　又も死霊の
　ト 段八を見事に切る。皆々驚ろき騒ぐを、一々切り倒す。此うちドロ／＼、殘りは逃げて入る。道具その他も元へ戻る。與右衛門、キッとなつてこの沙汰なきうち、急ぎ目見得の

大正十四年七月市村座上演
守田勘彌の與右衛門

尾上菊五郎の與吉
坂東秀調のおさえ

ト思ひ入れして、股立ち取つて向うへかゝる。双盤になり、揚げ幕より與吉、件の姿にて誠の茶入れの箱を持ち、鎌を提げ出て來り、兩人行合ひ

與吉　ヤア、與右衛門か。

與右　南無三、爰な

ト引返して東へかゝる。向うよりおさえ、件の錆鎌を持ち出て來り、本舞臺へ押し戻し、三人立廻つてキッとなり

與吉　久し振りなる金五郎、今のその名は與右衛門が、上下ためつけ我が父の、難儀となつた茶入れを尋ね、歸參と聞いて駈けつけた。して、その品は正銘なるか。

與右　われが家にて失つた、寶を尋ねた某ゆゑ、直ぐに差上げ、歸參の門出。

さえ　この程途中で無體のあり條、その時送りのこなさんは、石和川にて殺害なせし、助が娘の同胴三人、妹の累も殺したる、親の敵に妹の仇。

與吉　暗がり紛れの返り討、一旦死んだも祐念の、その名號の德により、蘇生なしたる神田の與吉、實名絹川甚三郎、おれが切られた返報に、今又われに張を云ふ。サア、惡事を殘らず白狀しろ。

與右　さてはうぬらは石和にて、助を殺した發端より、殘らず知つた上からは、今こそ明すよつく聞け。如何にも石和で殺生の助、まつたこの累程も殺し、うぬら二人も殺らせしが、祐念行者の利益にて、事現はれしか、口惜しい。

さえ　もうこの上は親の仇、累が敵、覺悟しや。

ト鎌を持つて向ふ。

與吉　與吉が助太刀、後れを取るな。

さえ　云ふにや及ぶ。敵の其方。

與右　その品渡せ。

二人　覺悟しや。

與右　ナニ小さし出た

ト立廻りよろしく、この時、大ドロ〳〵、魂ひ飛び來り、引き戻す。與右衛門、キッとなつて

與吉　これも累が

與右　又も障化を

さえ　覺悟。

ト三人立廻つて見得。

與右　まづ今日はこれぎり。

めでたく打出し

法懸松成田利剣（終り）

御贔屓よりの御好みに任せ古き世界の民谷何某妻のお岩は子の年度妹の袖が祝言の銚子にまとふ嫉妬の朽繩それも巳年の男の縁切りしかお媒に直助が三下り半の去り状は女の筆のいろは假名いま專ら流行の出雲が作へ不躾もお差圖ゆゑに書き添へし新狂言は歌舞伎の榮

東海道四谷怪談

第二番目

五幕續

表のカタリはこの狂言初演の折のものである。左掲の凸版も初演の櫓下番附に現はれたものである。カタリに暗示される筋も、番附の番面も、實際の本文とは大分違つてゐる。これは、まだろくに脚本も出來ぬうちから宣傳の意味で早く發表する習慣だつたので、どうしても舞臺に現はれるのと、櫓下番附のとは違つてゐるのが慣ひであつた。
本文に入れた錦繪は、個々に附けた說明をお讀み願ひたい。特にこの狂言は南北物でも上演度數が多いので、最近の舞臺寫眞を二種挿入して置いた。また挿入の繪番附は、悉く初演のものである。

東海道四谷怪談

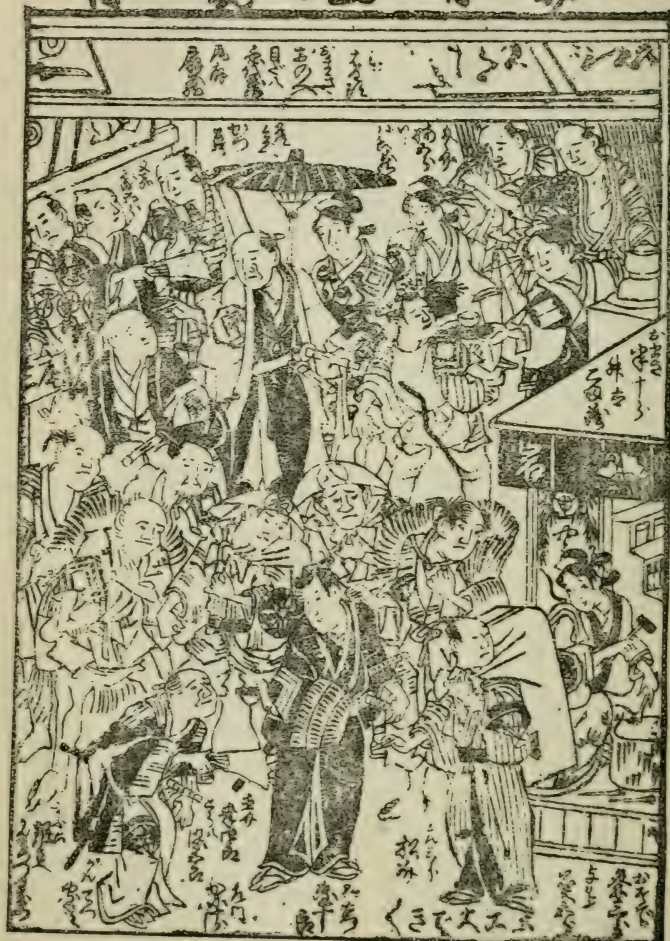
序幕

淺草觀世音額堂の場
宅悦住居の場
裏田圃の場

役名――小間物屋、與七實ハ佐藤與茂七。奥田庄三郎。伊藤喜兵衛。同娘、お梅。同乳母、お槇。たいこ醫者、尾扇。藥賣り、直助。藥賣り、藤八。お岩妹、お袖。四谷左門。茶屋内儀、お政。通人、文嘉。柏屋彦兵衛、大三つの升太。按摩、宅悦。宅悦女房、お色。伊右衛門妻、お岩。民谷伊右衛門。

本舞臺、三間の間、正面額堂、座元紋附きの團子提灯、掛け茶見世の道具よろしく、上の方楊枝見世、爰にお袖、やつし娘、浴衣にて、楊枝をこしらへてゐる。側に庄三郎、菰かぶりにて寢てゐる。額堂の内には、文嘉、通人の形。彦兵衛、店者いこしらへ。此方の床几に桃助、石藏、地廻りの形にて茶を飮んでゐる。お政、茶屋女房にて茶を汲んでゐる。双盤大拍子にて幕明く。

彦兵　かみさん、ま一つおくれんか。
まさ　ハイ〳〵、大分おかはきなさいますな。
彦兵　えらう走つて來たさかい、かわきくさるわいの。
文嘉　かみさん、わつちやアゆるりとしやせう。
まさ　ハイ〳〵。
ト汲んできて
桃さん、もつと上げませうか。
桃助　踵でふんづけてくんな。
石藏　コレ、大概に飮みや。面が湯氣にあかるワ。カウ、氣をよくしてゐると、お飯を入れてくれと云ふぜ。いゝ加減にしやな。接待ぢやアねえわえ。
桃助　べら坊め、接待といふがあるものか。茶代は節句に水引で、結はへて持つて來て置くのだ。
石藏　おつウ云やアがる。觀音様の長芋ぢやアあるめえし。
桃助　カウ、お政さん、あの子はいつから出た。石や、見

や、剛氣なもんだぜ。
石藏　剛氣に婀娜だな。おらア初めて見たぜ。
まさ　その筈サ　あの子は昨日から代りに賴まれて出たが、櫻枝見世にやア惜しいもんだなう。
桃助　ちげえねえ、粂三に其まゝだぜ。イヨ、大和屋大和屋。
石藏　よせえ、可哀さうに、まぜッ返すなえ。
ト　これにて文嘉、彦兵衛も見て
文嘉　成る程、鮮かだの。カウ、ありやア何か、月三兩の三月縛りとでもいはざア、話しは解るまいかの。
まさ　なにサ、その癖さうでねえさうでございますよ。
彦兵　ほんにきやうといものぢやな。なんと、花三本ぐらゐで話しは出來まいか。
まさ　左樣サ、出來ない事もございますまいよ。
桃助　そんなら地獄をするか。
まさ　どうして、そんな事はしめえわな。
石藏　風が惡いと思つて、おらッちには、隱すの〳〵。
まさ　ナニ隱すものかね。本當に堅いとよ。
桃助　しら〳〵しくお前のやうに嘘をつく者はねえぜ。
石藏　年中大筒の額の下で、商賣をしてゐるから、鐵砲は當り前だらう。
桃助　鐵砲と云やア聞きねえ。奧州の獵人が、素的な木菟を生捕つて來て、奧山で見せるさうだ。
石藏　さうか。この繪圖か。
桃助　それよ。
ト　柱に掛けてある繪圖面を取つて見せる。
彦兵　これかいな、えらい物ぢやな。
文嘉　なんだ、丈の高さが五尺五寸、胴の大きさが四尺二寸……こいつは大層な木菟だの。
ト　皆々立寄り見る。双盤太鼓にて、向うより喜兵衛、袴、大小、老けたる拵らへ。お梅　振り袖の娘、お槇、乳母の拵らへ。尾扇、醫者にて、中間一人附き出て來り花道にて
喜兵　コリヤお梅、今日は大分氣合ひもよささうなが、あまり又推して歩行いたすにも及ばぬことだ。駕籠なと申しつけうか。
うめ　イエ〳〵、私しは矢ッ張りこれがよろしうござりますれど、あなたがさぞ、お氣まだるう思し召しませうと存じまして。
まき　サア、何事も其やうにお氣遣ひ遊ばすのが、それが

矢ッ張りあなたの御持病。今日は御保養かてらの御參詣、お氣儘におひろひ遊ばし、また御下向には、なんぞお氣に入りましたお人形でも、大旦那樣へ、おねだり遊ばしませ。

尾扇　左樣〳〵、兎角にその御持病には、御鬱散が肝要でござります。ちとあれなる茶屋にて、御休息遊ばしまするがよろしうござりませう。

喜兵　イカサマ、左樣いたさう。サ、來されや〳〵。

ト皆々緋毛氈へ來り、床几へ腰をかける。

まき　ようお出でなされました。

まき　御覽遊ばせ。此やうにも御參詣絶えず、群集いたします觀音樣はござりませぬ。今日は私しも、とも〴〵に、御願かけ致しまするほどに、あなたにも、彼のお方に早う

サア、早う御利益にて、御本腹遊ばすやうに、御信心遊ばしませ。

うめ　此方はこれ程思うてゐても、あなたの方にはよそ外に、又どのやうな……お神籤など、取つて見やいなう。

ト思ひ入れ。

まき　畏まりました。私しが呑みこんで居りまする。

尾扇　イヤ又、數多の醫者をも見たなれど、娘ッ子の病症を見定めるは、乳母にはしかずと、千金方に論じてござるて。全くこれは、戀煩ひと見えまするて。

ト お梅、恥かしき思ひ入れ。

まき　また尾扇さんの、其やうな事を。

棋助　石や、聞いたか。あのお嬢樣は戀煩ひだとよ。てめえを思つてゐるのぢやアねえか。

石藏　うさアねえ。戀の煩ひなら、瀧に打たせて見ればいい。

彥兵　大切な錢金遣うてさへ、容易に出來んものが、女子の方から煩ふほど慕ふとは、どこの和郞か、えゝ月日の下に生れくさつたなア。

文嘉　此方でなければ、お寢間の伽に行きてえね。

棋助　モシ、おつう云ひなさるね。

喜兵　たとへ戀ひ病であらうとも、氣にいつた男なら、金にあかしても聟に致し遣はす。ハテ、當時出頭の師直さまの御家來、伊藤喜兵衞が一人の孫……ナア尾扇老、乳母もとも〴〵、お梅が胸中承つた上では、また如何やうとも取計らうて遣はさう程に、左樣心得めされい。

まき　畏まりました。この儀は又私しが、追つて申し上げまするでござりませう。

尾扇　それがよろしうござるて。何事を仰せ出されうが、これが一つ出來ぬと申す儀はござらぬて。少々御不快とあれば、御保養の故とござつて、四谷町邊に御別莊をもおしつらひ。何でもあなたの御意次第でござりまするて。

喜兵　イヤモ、それも全く御主人、師直公の御發明と申し、御威勢によつて我れ〳〵に至るまで、斯く活計歡樂に年月を送ると申すものぢや。見さつしやれ、我が君に敵對いたせば、鹽冶どのゝやうに、家國をも失ひ、家中の者ども、散り〳〵と罷りなるて。左樣なうろたへた主人へ仕官いたすもこれ因縁。それを思へば、冥加至極の身の上ではないか。

尾扇　左樣でござりまするて。

　トこれを聞いてお袖、無念のこなし。此なかむりし庄三郎も、顔を上げて同じく思ひ入れ。矢張り右の鳴り物にて、向うより直助、藤八、二人とも藤八五文の藥賣りにて、呼びなから出て來り、花道にて

藤八　カウ直助、てめえ今日は本郷から板橋の方を流すと云つたぢやアねえか。なぜ爰を流すのだ。

直助　サア、おれも少つと此方に用があるから、斯う向けて來たのよ。

藤八　コレ隱すな、知つてゐるぜ。てめえこの頃ぢやア山の女にかゝつて、賣り溜も親方の方へ遣らねえさうだが、そんな事があつちやア、外の賣り子へも外聞が惡いぜ。

直助　ナニサ、わッちやア後月から、大山道者を當てに、川崎の方まで流して行つたワ。その賣り溜を、谷中の方まで持つて行かれるものか。いつか一度は持つて行くわな。

藤八　おつう混濁めをきめてゐるな。きめると云へば、大三つで一合きめようぢやねえか。

直助　そいつもよからう。

藤八　サア〳〵。行くべえ〳〵……藤八五文。

直助　奇妙。

　ト呼びながら二人は舞臺へ來る。お政見て

まさ　一服のんでおいでな。

直助　アイ〳〵。

桃助　オイ〳〵、一つくんな。

直助　ハイ〳〵。

石藏　オイ〳〵、爰へも一つくんな。

藤八　ハイ〳〵。

石藏　カウ、こりやア何にきくの。

藤八　第一、癪のつかへ、頭痛眩暈。
直助　腎精を增し、脾胃を補ふ。岡村藤八、オランダの傳法でござります。
文嘉　そいつア耳寄りだね。おれにも一つくんな。
直助　ハイ〳〵。
藤八　ハイ〳〵。
彥兵　わしも求めようかな。
直助　これは有り難うござります。
まさ　掛けておいでな。
直助　今日は大分お取込みでござりますから、お紋さんの見世で一服やりやせう。
藤八　又ひりにかゝりやアがる。そんならおらア、大三つで待つてゐるぜ。
直助　氣前を見せて、いゝのを二合半とくらはせやな。
藤八　そんなら早く來さつし。待つてゐるぜ。
直助　アイサ、今に行くワ。
ト藤八、呼びながら下座へ入る。直助、楊枝見世の方へ來て
お袖さん、お前昨日から見世へ出たさうだの。
そで　ソレイナア、爰のお紋さんに賴まれて、それでわたしが名も、矢張りお紋というて、昨日からこの見世へ。
直助　ア、さうかえ。そんなら藤八お紋奇妙、逗ぐれぬ仲だ。マア、一服やらかしやせう。一つお貸し。
ト楊枝見世に腰をかける。
そで　サア、のましやんせ。
ト行火を出してやる。神樂になり、向うより宅悅、按摩の拵らへにて出て來て、直ぐに舞臺へ來て
宅悅　おかみさん、今日はお賑やかでござりますね。
まさ　オヤ〳〵宅悅さん、先刻からぬしが待つてお出でだよ。
文嘉　時に按摩さん、おつりきな奴があるなら、ちよつぴり行きてえの。
彥兵　此方にも格好な代物を、一切り賴みますぞや。
宅悅　好いのがござりますとも。わしの所は、按摩と灸を据ゑるが商賣、その片手業に致しますから、お出でなさいまして、年增が厭ひたければ大を据ゑる。中年增は中、娘は小を据ゑる。又グッと大年增は、袋艾を据ゑてくれろと仰しやりますれば、そのつもりで呼びにやります。
文嘉　成る程、そいつは奇妙。
ト手を打つ。

直助　御用かね。
文嘉　ナニサ、内證の話しよ。どうでおいらは大にしよう。
彦兵　此方は小にしてほしい。
宅悦　先づ見てからの御相談になされませ。
　ト桃助、この話を聞き
桃助　カウ、按摩さん、お前の所では地獄をするのか。
石藏　そんならおいらも買ひに行くぜ。
桃助　道理で又がそんな話しをしたッけ。ずるい坊主だぜ。
宅悦　どう致しまして、わしが宅で其やうな事を……尤も灸點の看板は、女が閻魔へ灸を据ゑてゐる看板ゆゑ、そこでお客方が、地獄へ行かう〳〵と仰しやりますて。一月を十日づゝに仕切つて、一分二朱ぐらゐでお出でなさるゝを、これを十日づゝ地獄と申して、割は別してお得用でござります。また大の方がお好きなら、熱い事は焦熱地獄、取分け大なぞは、ようきゝまするて。
文嘉　そんなら、ちよつと据ゑてもらはう。
彦兵　わしも腰の輕くなるやうに、燒いて來ようか。
文嘉　そんならおかみさん、歸りに寄りやす。
まき　お待ち申しますぞえ。
宅悦　サア、御案内いたしませう。
　ト矢張り右の鳴り物をかり、宅悦先に、文嘉と彦兵衛は下座へ入る。桃助は石藏に囁やき
桃助　何でも彼奴が内で、えてをするにやアちげえねえ。
石藏　行つてごだついてやるべい。
桃助　サア、來や〳〵。
　ト二人は宅悦の跡を追つて下座へ入る。
喜兵　さて〳〵、何を申すやら、一えん解らぬ事どもばかりぢや。
尾扇　イヤモウ、がさつな儀でござります。
まき　ほんに私しと致しました事が、御新造樣から、お楊枝をおことづかり申して參つたに、とんと打忘れましたでござりました。幸ひあれにござりまするが、どのやうなのがよろしうござりまするか。お慰みにあなた、御覽遊ばしませぬか。
うめ　女子どもへ土產に、調べて遣はしませうか。
喜兵　オヽ、さうしやれ〳〵。おのしも參つて見てやりやれサ。
　ト皆々楊枝見世へ來て
まき　お土產は斯樣いたしませう……韻に羽根楊枝と房楊枝と……御覽遊ばせ。江戶香と申しまする齒磨にも、矢

張り御贔屓の成田屋の似顔が描いてござりまする。
うめ　尾扇さん、お前も、歯磨なとお取りなされませぬかいなア。
尾扇　イヤ〳〵、愚老は少と心願の儀がござつて、楊枝歯磨ならば斷ち物でござる。あなたのお土産には、アレ、あそこにござる役者の紋所を描きましたのは、どうでござりまする。大方、梅幸か、三升なぞが御意に入りましたらうな。
まき　ほんに、其やうなのがよろしうござりませう。
喜兵　何にせい、コレ女子、いろ〳〵取揃へて、これへ出しやれ〳〵。
尾扇　サヽ、早く御覽に入れさつしやい。
ト このうちお袖、知らぬ顏をしてゐる。
喜兵　この女めも何をウツカリ致して居るぞ。早く出さぬか出さぬか。
そで　申し、あなた方は、慥か高野の御家中でござりまするな。
喜兵　ハテ、この女も、商賣は致さず、異な事を訊く女子ではある。如何にも師直公の藩中ぢやが。
そで　サア、それなれば賣られぬゆゑ。
喜兵　高野の家中へ賣られぬとは、そりや又なぜ。
そで　あまり御威勢が強いゆゑ、お求めなされたその上で、御意に入らぬその時は、又どのやうなお祟りを、受けまいものでもないゆゑに、それでどうも賣られませぬわいな。
尾扇　ハヽア、さては鹽冶浪人の身寄りの者と見ゆる。エヽ、賣らぬと申さば買ふまいワ。軒を並べていくらもあるわサ。
そで　外でお求めなされませ。
尾扇　それをおのしに習はうか。こいつ出過ぎた女めでござるわえ。
ト 直助、中へ入り
直助　コレサ、どうしたものだ、そんなに愛嬌のねえ……イエ旦那、これは斯うでござりまする。この娘は昨日から、この見世へ雇はれて、代りに出ました者ゆゑ、楊枝の値段も、ろく〳〵存じませぬゆゑ、それで只今のやうに申し上げたのでござります。必らずお氣にさへられて下さりますな。
尾扇　イヤ〳〵罷りならぬ。餘りと申せば失禮な奴だ。
直助　そこをどうぞ、御堪忍なされて遣はされませ。

尾扇　なんのいらざる庇ひ立て。われもよく五文と出る奴だ。

喜兵　ハテ、打ッちやつて置きめされ。たとへ鹽冶浪人が、どれほど御主人を恨まうとも、當時足利家にても格別のお扱ひにて、新地御拜領なされてお屋敷替へ、御威勢強きあなたに對し、扶持方離れた素浪人ども、いらざる我慢も貧からと、イヤハヤ、馬鹿な女ではあるて。

ト これを聞いて、庄三郎も無念の思ひ入れ。

尾扇　おのれ、屋敷へ連れゆく奴なれども、今日は其まゝにさしおくぞ。

まき　折角の御參詣、もうあなたにも、御料簡なされて遣はされませ。

喜兵　よしない事に參詣の妨げ。サヽ、來やれ〳〵。

直助　これは大きに有り難うござりまする。

ト 大拍子になり、喜兵衛先に、お梅、お槇、尾扇に中間附いて下座へ入る。

カウ、お袖さん、坊主が憎けりや袈裟までと、お前の云ふのも尤もだが、あゝ云つて見た時にやア、直ぐに敵へ氣取られるわな。併し、斯ういふわしも、以前はお前の親御、四谷左門さまとは同じ家中の、奥田將監が下郎の直助、御短慮とはいひながら、御家中は散り〴〵。わづか小者のわしまでも　藤八五文の藥賣り。おれはまだしも、左門さまのお娘御が、今では楊枝見世の雇ひ女、これも時世と諦めて、貧しい暮らしもとも〴〵に。

そで　かけも構はぬ小者の其方、それ程までに、この身を思うて。

直助　思うてどころか、屋敷にゐるその時から、附けつ廻しつしてゐた事、まんざらお前も忘れはしまい。色になりと、女房になりと、なつてくれる氣はねえか。

ト 云ひながら、お袖に寄り添ふ。お袖ムツとして

そで　以前其方は下郎の直助、わたしが父さん左門さまと、將監さまは同じ格式。その小者の輕い身でゐながら、浪人したと見くびつて、わたしを捕へてアタ嫌らしい。聞く耳は持たぬわいなア。

直助　なんだな、輕いの重いのと、燈籠佛樣へ願かけをしやアしめえし。元は小者にもしろよ、運が向きやア商賣うりでも、二十や三十の元手はコレ、爰にも持つてゐるサ。お前がウンとさへ云へば、おれも又、三度飛脚へ狐の附いたやうな形をして歩きもしねえワ。なんぞおつりきな商賣を見附けて、お前だつてこんな所へ出しやアし

ねえ。どうだ〳〵。

ト云ひながら、しなだれる。お袖立つて

そで　たとへ有德に暮らさうとも、嫌な人には片時も。

直助　お前まだ屋敷氣質がやまねえの。それぢやアおれに

恥をかゝせるやうなものだ。お袖さん、どういふものだ。

そで　エヽモ、知らぬわいなア。

ト振り放し、下手へ入る。直助、跡を見送り

直助　あんなに又强情な女もねえものだ。口が酸くなつた。

ト茶見世の方へ來て

一杯おくれ。

まさ　アイ……カウ藤八さん、いま聞けばお前の名は、直

助さんといふさうなが、どつちが本當の名だえ。

直助　なにサ、藤八といふなア、この藥を賣る親方の名で

おれが名は直助サ。

まさ　さうかえ。さうして先刻から聞いてゐりやア、あの

子を口說いてゐるが、誠に馬鹿々々しい。なんの、あん

なのに口をすぼめる事があるものかな。あの子はあゝ見

えても、エテに出るわな

直助　なに、エテに出るとは。

まさ　コレ。

ト直助に囁く。

直助　そんなら眞面目に見せておいて、矢ッ張りさうかえ。

それで出來りやア、奇妙。

まさ　口では立派な事を云つても、內證は火の車ださうな。

直助　そんならどうぞ、今晚直ぐに

まさ　それだといつて、その形ぢやア。

直助　そりやアすつぱりと極めてくるのサ。

トかすめたる大拍子、双盤の太鼓になり、向うより酒

屋の小僧升太、德利を提げたる樽拾ひの形にて出て來

り

升太　大三つはよろしうございく。

ト呼びながら來る。

まさ　カウ直さん、行くならどうせいるから、五合取つて

置かうかの。

直助　いゝやうにしてくんねえな。

まさ　カウ〳〵、御用どん、藪の按摩さんの所へ、好いの

を五合持つて行つてくんな。

升太　エヽ、あの地獄の看板の出てゐる、桂庵の按摩さん

の所かえ。

直助　ナニ、按摩で桂庵もするのか。

まさ　左やうサ。
升太　丁度お前のやうな、怖い顔の閻魔が灸を据ゑてゐるから。
まさ　なんだなこの子は。お客を捕まへて
升太　ナニお客なものか、この人は藤八五文だ。
直助　馬鹿を云ふな。これでも晩にやアお客さんだ。
升太　ア、そんならお前、あすこの内へ行くのか。いゝ年をして、よせばいゝのに。
直助　この小僧、色氣なしな事を云ふ奴だ。
まさ　そんな憎まれ口をきかずと、早く持つて行きな。
升太　持つちやア行くが、置いて行けはあやまるぜ。
まさ　いゝ加減に口もきゝな。人も聞いてゐるわな。小僧のくせに。
直助　爰に一本あるから、肴も少し氣取つて置いてくんな。
　　ト　お政へ錢四百文を渡す。
まさ　これぢやア多いわな。
直助　剩りやア茶代よ……小僧や、早く持つて行つてくれよ。
升太　そんなら錢は爰から取るのだな。
まさ　ア、しつこい、早く行きな。番頭さんへ云ひつけるによ。
升太　云ひ附けたら、味噌を買ひに來ても、まけてやりやアしねえ。
まさ　サア、持つて行きな。
　　ト錢を數へてやる。
升太　そんなら行つて來よう……大三つはよろしうござい、大三ッはよろしうござい。
　　ト呼びながら下座へ入る。
直助　イマ〳〵しい餓鬼だ。ドレ、おれも出直して來よう……ほんに、これも遣つておかう。
　　ト懐から二朱一つ出してお政に渡し
まさ　そこに如才があるものかな。阿母アを手なづけてうまく頼んだ。あほりが肝腎だよ。
直助　どうか今夜で病みつかせ
まさ　色にするとも、女房にするとも
直助　奇妙〳〵ドレ、行つて來ようか。
　　ト直助下座へ入る。お政後を見送り
まさ　直さん、早く來なよ。成る程、口はきいて見やうものだ。酒の尻尾と、引手で三百、下駄でも買はうか。

初演錦繪　岩井粂三郎のお袖　坂田半十郎のお政

五世松本幸四郎の直助　　松本染五郎の藤八

イヤ、矢ッ張り米屋へ入れておかう。ドレ、行つて來ようか。

ト下座へ入る。双盤になり、向うより、づぶ六、泥太、非人の形。願鐵、乞食坊主の形にて、左門、浪人者の親仁、編笠を持ち、皆々に引摺られ出て來る。少し後より伊右衛門、黒羽織、大小、浪人の拵らへにて出て來る。非人皆々花道にて

一同　サア。來やアがれ〳〵。

づぶ　太え親仁だ。此奴がほんの、乞食の上前取りといふのだ。

一同　何でも引摺つて行け〳〵。

ト皆々、左門を捕まへて舞臺へ來る。

づぶ　コレ、わりやアどこの奴か知らねえが、おいらが仲間にも、渡り引きのあるものだワ。

泥太　われも只のぐれぢやアあるめえ。いゝ年をしやアがつて、馬鹿な野郎ぢやアねえか。

願鐵　青天井に草むしろ、一年中の寢所は、行きあたりバツタリ、蟋蟀にも附合ひがあるワ。

づぶ　まして土一升米一掴み、御繁昌の御地内で、敷石の上の住居だワ。サア、誰れに渡つて地内で貰つたのだ。

願鐵　何も云ふ事はねえ。頭の所へしよびいて行け。

一同　それがいゝ〳〵。

ト一同寄つて左門をこつく。

左門　おてまへ達の仲間に、左樣な作法のあると申す事も存ぜず、この所にて物貰ひ致し居つたは、身が不念、何分にも容赦おしやれ。

泥太　ナニ容赦しろ。容赦しろで濟むものか。サア、われが貰ひ溜めを、爰へ出せ〳〵。

左門　イヤ、往來の合力受けうと存じたのみ、未だ一錢も手取りは致さぬ。

づぶ　こんな奴を打ッちやつておくと、仲間のきまりが惡いワ。

願鐵　見せしめの爲に、着物も何もふん剝いて

泥太　筋骨を拔いてやれ。

一同　それがいゝ〳〵。

ト皆々寄つてたかつて左門を打擲する。伊右衛門この中へ入り、四人を隔て、左門を圍ふ。其うち下座より喜兵衛、お梅、お槇、尾扇、出て窺ふ。

伊右　イヤ〳〵、ちと待ちやれ〳〵。

ト伊右衛門と顏見合せて

左門　ヤ、こなたは
　ト ちよつと思ひ入れ。
づぶ　モシ〳〵、あなた、知る人かは存じませぬが、わし等が渡世の邪魔をするこの親仁を、なんで留め立てなさるのだえ
泥太　仲間の法を破られては
願鐵　おいら達の世渡りが出來やせぬワ。
づぶ　知る人でも構ふ事アねえ。
一同　ふん剝げ〳〵。
　ト 騷いで立ちかゝる。
伊右　マア〳〵、待ちやれ〳〵。身共も敢へて知る人と申すではなけれども……それ〳〵、身共今日はちと志しあつて、當觀世音へ參詣の道すから、詳しい樣子は存ぜねども、何か老人を捕へて手籠めに致す樣子。勿論、當人にも心得違ひと存じ居らるればこそ、手出しもえゝ致されぬと相見ゆる。然らばこれには理非は解り居るやうなもの。老體のお人、見る目も氣の毒に存ずるゆゑ、此お人になり代り、武士たる者が其方どもへ對して、詫びを致すほどに、此まゝに勘辨いたしてはくれまいか。
づぶ　ナニ勘辨しろえ。なんぼお侍ひ樣でも。乞食の法は御存じありやすまい。貰ひ溜めを出させた上、身ぐるみ脫がせて持つて行かにやア、仲間の法が立ちやせぬワ。
伊右　成る程、左樣な儀もあらうて。然らば斯樣いたさう。これに少々金子貯へ致し居る間、その詫び代と致し、遣はすほどに、此まゝに料簡いたしくりやれ。
　ト 鼻紙入れより一朱を四つ出してやる。左門見て
左門　イヤ、その金子借り受けては
伊右　ハテ何事もこの場は拙者に
　ト 思ひ入れ。
づぶ　ヤア、この旦那から一朱で四つ
一同　それは有り難うございます。
泥太　身ぐるみ剝いでも、一本が物は無えところへ、あなたがお出でなすつたばつかり、親仁にも仕合せ。此方も仕合せ。
づぶ　外の奴らの來ぬうちに
願鐵　辨天山で一杯やらうか。
一同　それがいゝ〳〵。エ、有り難うございます。
　ト 皆々下座へ入る。左門あたりを見廻し、思ひ入れあつて
左門　御覽の通り、尾羽うち枯らす今の身の上。御深切、

千萬忝なう存ずる。只今の恩借は、明日キッと返却いたすでござらう。

ト云ひ捨てたまゝ行きかける。伊右衞門は袂を扣へ思ひ入れ。

伊右　マヽ、ちとお待ち下され、

ト合ひ方、風の音になり、伊右衞門手をつかへ

これはあなたのお詞とも存じませぬ。舅は親なり、聟は倅、たとへお岩と別れ居つたとて、あなたは正しく實の親。

左門　サア、それゆゑにこそ今の金子、借りともなう存ずるゆゑ。

伊右　そりや又何ゆゑ。

左門　一旦舅聟の緣組みは致したなれども、最早娘のお岩も、此方へ引取るからは、聟でもなく、舅でもござらぬゆゑ。

伊右　左門さま、なぜ又お岩を返しては下さりませぬ。互ひに惚きも惚かれもせぬ仲。殊にはこの程懷姙いたし、子まで儲けし二人が中。何があなたのお氣に入らいで

左門　そりや御自分の心に問はッしやれ。尤も娘お岩めも、不所存にてころび合ひ、親の許さぬ夫婦仲。畢竟、遣らう、貰はうと、きッとした仲立ちはなけれども、そりやこの道ばかりは別なものと、その儘に捨て置いたが、氣にはさえられな、聟のこなたの根性が、おれの氣に入らぬ。

伊右　ヤア。

左門　とサア、申す譯は、未だ御主人御繁昌の砌り、お國許にて御用金紛失。その預かりは早野勘平が親三太夫、越度と相なり、切腹いたして相果てた。その盜人もこの左門、よッく存じて罷りあれど、その論議中にお家の騷動、それゆゑたうとうそれなり、胸に包んで何事も、云はずにゐるは身が情。それゆゑ娘は添はされぬ。

伊右　默らッしやい、左門どの。いま其許は、聟でもなく舅でもないとお云やつたぞよ。すりや赤の他人でござるぞよ。赤の他人の伊右衞門に向つて、ヅカ／＼と物云はッしやるが、して又何ぞ手前が盜んだと申す、證據でもござるかえ。

左門　ハヽヽヽヽヽ、證據呼はりさつしやるは、自分の惡事を、自分の口から白狀いたすやうなもの。その以前娘の所へ、結納の帶代にと、贈られたるその金子は、一兩々々お家の極印。

伊右　ヤア。
左門　それも云はぬが男の寸志。その儘にして戻した事、貴公覺えがござらうがな。
伊右　イヤ、あの金は配分金。
左門　云はッしやるな。まだ騒動にならぬ前、なんで配分おしやつた。
伊右　サアそりやア
左門　跡先き揃はぬ詞の端。それゆゑ娘はえゝ添はせぬ。
伊右　すりや、どうあつても
左門　今の恩借はきッと返す。お岩を返す事は罷りならぬ。
伊右　ならずばいゝワ。畢竟舅と思ふゆゑ、詞を盡し、手を下げて、持ち上げればつけ上がり、往來の人に合力受け、食ふ事もならねえ分際で、心が違ふの、氣に入らぬのと、痩せ我慢も貧乏から。貢いでやらうと存じたに身のほど知らぬ老ぼれめ。
左門　身の錦繍をまとふとも、不義の富貴は望みにないワ。
伊右　なんと。
左門　ドリヤ、歸宅いたさうか。
ト唄になり、左門向うへ入る。伊右衛門、跡見送り
伊右　この身の悪事を氣取つた左門、露顯いたさば後日の妨げ。最早生けては……跡追ッかけて。さうだ。
ト早めたる双盤になり、伊右衛門、跡追ひかけて向うへ入る。喜兵衛みな／＼、山門の中より出て、跡を見送り
喜兵　今のは慥か鹽冶浪人。併し今一人のあの若者。古主の鹽冶を思はぬ様子、さすればどうぞ此方へ引き込み、御主人へ推擧なし、何かの様子を糺さするには屈竟。
まき　お梅さまの御病氣も
尾扇　種は矢ッ張りあの侍ひ。
うめ　ほんに床しい
喜兵　ヤ。
ト思ひ入れ。お梅恥かしきこなし。この前より、寢てゐたる庄三郎起き上がり、喜兵衛の前へ出て
庄三　御報謝お願ひ申しまする。
ト面桶を出す。
喜兵　物詣りの歸るさ。手の内を遣はせ。
中間　ソレ、取らせるぞ。
ト錢を出して取らせる。
庄三　ハイ、有り難うござります。御大身の旦那様、ますます御繁昌で、その上おめでたい事だらけでござります。

喜兵　何がめでたい。

庄三　最前、よそながらちよつと承りますれば、あなたのお主樣は、お屋敷替へでござりますと承りましたが、定めしお住居のよい所でござりませう。いづれの邊へお屋敷替へでござりまする。

喜兵　ハテ、非人のくせに、それ聞いてどうする。身が主人を、何人と存じて居る。

庄三　エ……サア、どなた樣やら、そこは存じませぬが、あまり御出世のおめでたさ。むさくろしい非人でも、せめてあなた方のお名でも承りますれば、私しが身の守りにでもなりませうと存じまして

喜兵　イカサマ、主人の御出世を、それほどにめでたいと喜ぶなら、非人とても萬更憎うはない。云つて聞かさう。手前が主人は、當時出頭第一の、高野師直さま、この度のお屋敷替へは、鎌倉花水橋の向う河岸の、葛飾臺と申す所に、新地を下され、新たにお屋敷が建つ。さて家老用人は申すに及ばず、中間下々に至るまでも御加增あつて、イヤモ殊の外のお物入り。なんと御威勢は、ひどいものであらうがな。

庄三　エヽ、すりやお屋敷は花水橋の向う、葛飾臺へ新らしく……そこがお上屋敷でござりまするな。

喜兵　オヽサ、卽ちそこがお上屋敷と定まるのサ。

トうか／＼話してゐる。庄三郎、いろ／＼に口惜しき思ひ入れあつて、持つてゐたる面桶の錢を、喜兵衞に見えぬやうにあたりへ捨てる。尾扇これを見附けて

尾扇　ヤイ／＼、このドウ乞食め。折角旦那が合力なされた錢を、なんでおのれ捨てたのだ。冥加を知らぬ罰あたりめ。

庄三　どう致して私しが

尾扇　でも、たつた今、愚老が見て居つたな。

喜兵　何ぢや、合力した錢を捨てた。ハヽア解つた。道理こそ詳しく屋敷の樣子を、覗ひ出すと思つたが、察するところ鹽冶浪人。非人になつて御主人を、附け覗つても及ばぬ事だワ。

尾扇　左樣々々。いらざる非人が齒向ひ立て。屋敷へ引ツ立て、拷問して、一味の奴らを白狀させうか。

トかゝる。庄三郎ちよつと立廻りあつて、見事に投げる。

喜兵　ヤア、非人に似合はぬその手の內。

ト刀を拔きかけるを、庄三郎、面桶で留めて

庄三　イヤ、私しも腹からの非人でもござりませぬ、小さい時から角力好き。少つとづゝやつたら、小力のあるのが身の病。喧嘩より親の勘當。せう事なしに非人をして生きてゐたいが卽ち人情。それを滅多にお侍ひ、瓜や西瓜ぢやあるまいし、滅多に切られちやなりませぬ。

ト振りほどいて立廻りのうち、庄三郎、懐中から廻文を落す。尾扇、手早く取り上げ

尾扇　「廻文狀」……さてこそ一味の

庄三　南無三、それを

ト驚いて寄るを突き退け、尾扇は廻文を持つて花道へ駈け出す。庄三郎、追ひかけて行かうとするを、喜兵衛とめる。この時向うより小間物屋の與七、實は佐藤與茂七、小間物屋の荷を擔ぎ出て來て、尾扇の持つた懐文をひツたくり、懐へ入れ、舞臺へ來る。尾扇、追ひかけ歸り

尾扇　ヤイ町人め、今の品を

庄三　ヤア、こなたは佐藤

與茂　エヽ、この狂人乞食が何を云ふやら。ハヽヽヽヽヽ……モシ／＼旦那方、この非人は何を無禮致したかは存じませぬが、この邊にまごついてゐまする、ありやア宿なしの狂人、狂人を捕へ、理窟を仰しやるは、不狂人の同じく狂ふ世の譬へ。何事も、御勘辨なされて遣はされませ。

喜兵　イヤ／＼、狂人と申すは、其方が扱ひの嘘と申す者。身共が主人の名を聞いて、屋敷の所書へまで、覘ひ出したこの非人、鹽冶浪人に相違ない。それゆゑ身共が

與茂　すりや、あなた方には

尾扇　師直公の御家老、伊藤喜兵衛さまだワ。

與茂　ハ、ア、それゆゑ爰にて

ト思ひ入れ。

中間　鹽冶の浪人、屋敷へ引ツ立て、拷問するワ。

與茂　これは又、怪しからぬ事を承はりまする。この乞食は、いつも／＼他愛ない事を申しまする狂人、なんの鹽冶浪人でござりませう。よし又浪人にしたところが、なんでお屋敷へ引ツ立てゝ、拷問をなされまする。但しお上からお觸れでもござりましたかな。

喜兵　ヤア。

與茂　なんぼお家は斷絶でも、その家來の浪人まで、引ツ捕へて根葉を斷やさうといふやうな科もござりますまい。なんと、そんなものぢやアござりませぬか。

喜兵　ムウ。

ト詰まる。

尾扇　それはそれにしてもやらうが、いま愚老が持つて駈けだした物を　なぜ途中で引ッたくつた。

與茂　あなたの持つてお出でなされた物とは、これでございますか。

ト懐中より三つ折にした鼻紙を出して見せ

私しも麁相な。あなたが藥の引き札を配つてお出でなされたと存じまして取りました。これは大きに麁相、眞平御免下さりませ。サア、お返し申します。

ト返す。

尾扇　イヽヤ、身共が持つて行つたのは、それではない。この非人の懐中から落した廻文。

與茂　イヽエ、そんな物は存じませぬ。わしが取りましたのはこの鼻紙。大方あなたの、お覺え違ひでございませう。それとも非人、本當に廻文とやらを落したのか。

庄三　イエ、鼻紙でございます。

與茂　それ御覽じませ。矢ッ張り初手から鼻紙を、廻文狀なぞとは、お醫者樣、あなたも少し狂人と見えますて。

尾扇　エヽ、馬鹿を云ふな……でも、見す／＼

喜兵　よいワ／＼。捨てゝ置け。たとへば、どのやうに浪人めらが、羽ばたきをしたとても、何として／＼。

與茂　イヤモウ、氣遣ひの氣の字もある事ぢやアございませぬ。殊にこんな狂人の非人、御料簡なされて遣はされませ。

尾扇　無性に非人を庇ふ町人。われも大方

與茂　どうしましたえ。

尾扇　イヤサ、町人が挨拶。狂人とあれば、料簡して遣はさう。

與茂　それは有り難うございます……サア／＼、狂人の乞食、早く裏の田圃へ行つてナ……サア、早く行け／＼。

庄三　ハイ／＼。これは旦那樣、有り難うございまする。

ト庄三郎に、廻文はおれの懐にあるといふこなし。

庄三郎、頷いて下座へ入る。

まき　ほんにモウ、どうなる事かと、大抵案じましたわいなア。

うめ　ソレイナウ。もう行かうぢやございませぬか。

喜兵　イカサマ、さぞお梅も待ち遠であつたらう。そこから駕籠に乘つて歸るがよからう。

尾扇　ちつとも早く參りませう。

與茂　左樣なら、もうお歸りでござりまするか。
尾扇　慥かに懐中
ト思ひ入れ。
與茂　お靜かにいらつしやりませ。
ト與茂七、こちらの床几へ腰をかけて思ひ入れ。
喜兵　それはさうと、先刻の浪人。
うめ　ま一度、一目
喜兵　其方も見たいか。
うめ　アイ。
喜兵　おれも逢ひたい。
うめ　エヽ。
まき　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、喜兵衛の一群れ、靜かに向うへ入る。與茂七殘り、こなしあつて
與茂　すんでの事にこの廻文
トあたりを見て、思ひ入れあつて
爰のおかみさんは、見世を明けて、どこへ行つてゐるかしらん。
ト双盤になり、下座より宅悦の女房お色、出て來て
いろ　お政さん、この間は……オヤ〳〵、居ないさうだ。

與茂　男の茶見世だけ、流行らうがね。
いろ　オヤ與茂七さん、お前さんが茶見世を出せば、山中の女は皆殺しだよ。
與茂　有り難いね。此方が先へ死ぬであらう。時にお色さん、常住山へ行つて商ひをするが、小間物屋といふものは、是非女を相手にしてする商賣だから、うまい事を云はれては倒れ、横目で見たといつては倒れ、差引いて見ると、餘ッぽど割りの惡い商賣だね。
いろ　嘘ばつかり、山中の女がお前の來るのを、毎日々々待つてゐるよ。
與茂　氣をよく貸すからの事サ。大きなべら坊だ。
いろ　時に素的なものが出來たよ。
與茂　さうだとサ。この頃二三日山へ來ないが、大層美しいさうだの。
いろ　コレサ、この見世だアな。
ト楊枝見世を指さす。
與茂　爰はお前、お紋さんの出てゐた所だ。
いろ　そのお紋さんが病氣といつて、一昨日から雇つて出した子だがの。內は餘ッぽど苦しがりださうだ。
與茂　ムウ。粂三に似てゐるといふ評判だが、本當か。

いろ　ずぶ大和屋と來てゐる。其くせ溫なしくつての、屋敷出ださうだ。
與茂　そいつは猶いゝな。名は何と云ふえ。
いろ　先の名は何といふか知らねえが、爰の內へ出てから矢ッ張りお紋さんよ。
與茂　名はお紋さんだの……內はどこだえ。
いろ　北新町だよ。
與茂　宗旨は何だ。
いろ　法華だとよ。
與茂　寺はどこだ。
いろ　エ、。
與茂　葬ひは何時だ。
いろ　何を云ふのだ。
與茂　ホイ、あんまり浮れたやつサ。そいつはどうかなるまいかね。
いろ　なるどころか、エテ物に出るわな。
與茂　それは妙法蓮華經。
いろ　直ぐに法華で洒落たの。
與茂　法華の幸ひだ。今夜直ぐに出かけようが、出るだらうか。

いろ　商賣だもの。出なくつて。
與茂　サア〳〵、行きやせう〳〵。
いろ　剛氣に急ぐの。マア、荷をどこぞへ預けて來ねえよ。
與茂　イカサマ。カウ、キッと晩には
いろ　いゝと云ふ事サ。
與茂　ちよッぴり酒で
いろ　さうサ。
與茂　こいつは浮いて來たわえ。
　ト荷を脊負つて立上がり、ちよつと思ひ入れあつて
　斯うして騒げば騒ぐものゝ、同じ姿をやつしても、あの奥田の御子息は
いろ　ナニ、奥田より大三つがいゝわサ。
與茂　忠義ゆゑとて、菰かぶりとは
いろ　そんなに呑めるものかな。五合でいゝやな。
與茂　ア、、さぞや苦患を
いろ　そこが地獄サ。
　ト氣を變へ
與茂　おきやアがれ。
　ト二人はてん〳〵に思ひ入れ、双盤にてこの道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重世話屋體、白く反古貼りつぎの襖、上の方、破れ障子たてたる一間の屋體、よき所に小さき衝立二枚、貼交ぜの屛風。門口に閻魔の灸を据ゑてゐる看板と、奉公人口入れの看板と二つ出しあり。爰にお大、とやにつきし毛の抜けたる女、髪を島田に結ひ、白歯にて眉毛のなき拵らへ。文嘉、彦兵衞、以前の形にて住ひ、按摩宅悦、盆ヽ灸をほぐしてゐる。よき所に角行燈をつて、誂らへの流行り唄にて、道具とまる。

文嘉　カウ〳〵、おらア素的な大がいゝぜ。

宅悦　ハイ〳〵、この位がよくきゝます。

文嘉　コレサ〳〵、本當のを据ゑられて堪るものか。

宅悦　それは承知でござります。マア〳〵、表向き人氣が悪うござりますから、それで灸をほぐして居ります。

彦兵　わしは又、一向年のゆかぬ子がよいぢや。至つて小さいがよい。

宅悦　エヽ、番太郎で賣る灸の事でござりまするか。

だい　モシ〳〵、わたしの前でそんな事は、ちつと差合ひだね。

宅悦　コレサ、お前は早く、身拵らへでもしねえかな。

だい　アイ〳〵。

ト唄になり、向うよりお政、ぶら提灯を持ち、直助、羽織着流しに着替へ出て來り、花道にて

直助　カウ、お政さん、いよ〳〵あの楊枝見世のお袖さんを、買はしてくれるか。

まさ　お袖といつたか知らねえが、今ではお紋さん、どうであゝいふ事に出る日にやア、否應は無いのサ。

直助　そいつは奇妙。

まさ　コレサ、その奇妙が悪いよ。藤八が現はれるから、お云ひでないよ。

直助　それは承知だよ。

まさ　サアお出で。

ト舞臺へ來り

宅悦さん〳〵、お客を連れて來たが、いゝかねえ。

宅悦　アイ、そりやア有り難い。サア、お入りなされませ。

直助　ハイ、御免なせえ。

宅悦　あなたのお望みは、大か、小かね。

直助　なにサ、灸を据ゑに來はしません。彼のお紋といふを

宅悦　エヽ、定紋をお据ゑなさるのかな。

直助　なにサ、灸の事ぢやアねえ。
まさ　コレ、それは承知だがね、表向き灸のつもりにして置くのサ。そこで看板に閻魔様が灸を据ゑてゐるのサ。
直助　ハ、ア、成る程こいつは、奇妙。
まさ　コレサ。
ト直助、口を押へる。
文嘉　いま聞けば、お紋とやらは、先刻見た子だ。おいらも何ならそれにしてえ。
彦兵　さうぢやわいの。とても金出して買ふ位なら、えいのがよい。わしもそれにしませう／＼。
宅悦　さう大勢で一人の子を目がけてはなりません。こりや斯う致しませう。あなた方は大と小のお望み。跡からお出でなされたはお紋さん、恨みッこのないやうに、籤取りがようございますて。
まさ　左様サ、両方の名を書いて、緣結びがようございませう。
皆々　それがよい／＼。
直助　おらア外の子ぢやア否だ。
宅悦　マア／＼、何にしろ、運は天に任せて
ト宅悦、緣結びの籤を拵らへる。お政これを結び、思ひ入れあつて
宅悦　サア／＼、みんなしんを取つて、明けて御覧じませ。
文嘉　おれのは何だ。文嘉にお大。
宅悦　こりやアあなたのお望み通りだ。
彦兵　わしは彦兵衛お小。
直助　ドレ、そんなら差詰め、おれは藤八お紋、奇妙。
ト浮かれて云ふ。
宅悦　斯う誂らへたやうに極まる事もないものだ。
まさ　マア、お前はお紋さんの來るまで、あの障子の内に寢轉んでおいで。
直助　先刻の小僧は、酒を持つて來さうなものだ。
まさ　わたしが一遍行つて來よう。
直助　そんなら頼むよ。
宅悦　その次手に、かのもナ。
まさ　承知だよ。
ト唄になり、お政は向うに、直助は上手障子屋體の内へ入る。
文嘉　サア、おいら達のは、どうするものだ。
宅悦　お前は年増だね。
彦兵　わしは若いのぢやぞや。

宅悦　畏まりました、マア、ちつと橫におなりなさりませ。

ト宅悦、小さき衝立を眞中へ置き、蒲團を二つ敷き、屛風を立て、行燈を暗くして置く。文嘉寢ころびゐる。宅悦、お大に囁き、奥へ入る。お大うなづき、側にある硯箱を引寄せ、懷中鏡を出し、眉毛を引くこなしあつて、彦兵衛の側へ來り

だい　モシ、お休みなされやしたかえ。

彦兵　オイ〳〵、先刻からお出でを待つてゐたのぢや。

だい　わたしやお山さんといふ名ぢやござりませぬ。

彦兵　ハヽア、成る程さうぢや。

ト お大の顏を見て

イヤア、お山どころぢやない、惣嫁のやうぢや。

だい　なんだえお前、おやまだの、さうかだのと、日光道中記を見たやうな事をお云ひだね。

彦兵　お前、年は幾つぢや。

だい　アイ、わたしが年は、とつて十歳。

彦兵　鷄の化け物なら、木菟よりは流行るであらう。なんぼ若いのがよいといふて、あんまり若過ぎるな。

だい　よしか、本の年は

彦兵　六十八か。

だい　可哀さうに、たつた十六サ。

彦兵　逆さまにして六十ぢや。

だい　エヽ、モウ、口の悪い。

ト こなし。合ひ方になり、向うよりお袖、以前の形にて、草履を穿き、爪立つて拔き足にて出て來り、門口へ來て

そで　ハイ、御免なされませ。

ト小聲にて云ふ。宅悦出て來り

宅悦　オイ〳〵、御苦勞〳〵々。今夜は大分遲かつたの。

そで　ハイ〳〵、內の樣子が、ちつと出惡うござりましたゆゑ。

宅悦　サア〳〵、あそこの障子の內へ

そで　ハイ、有り難うござります。

ト お袖、障子屋體へ入る。

文嘉　カウ〳〵、おいらが年增はどうしたのだ。

宅悦　ハイ〳〵、只今。カウ〳〵、お大さん、もう來さうなもんだ。

ト思ひ入れ。お大出て來り、眉毛を拭き、宅悦はお大に囁き、奥へ入る。お大、文嘉の側へ來り

だい　ヤツトコショ、もうお休みかえ。

文嘉　オイ、剛氣に待たせたの。
だい　アイ、年がよると、歩くのに大儀だからね。やうやう杖に縋つて
文嘉　エヽカウ、お前いくつだ。
だい　アイ、年は七十九サ。
文嘉　べら坊な年増だの。年寄りでなくつてもの事だ。あんまり年増過ぎるの。
だい　それでも二人や三人位の客は何ともないよ。お前は大年増がいゝと云ふからわたしが來た。この位の年増はもう滅多にはござりません。頭は黒いやうなれど、殘らず白髪サ。こればかりは本の事サ。皆さんがよく御存じサ。
文嘉　叮嚀に年の寄つた人だね。何たる因果だ。
　トこなし。合ひ方、バタ〳〵になり、障子の内よりお袖逃げて出る。直助追うて出て來り、思ひ入れあつて
直助　どうして〳〵逃がすものか。
そで　それぢやというて、どうマア其方と顔が
直助　合はされぬのも尤もだが、お袖さん、お前は孝行なのだなう。
そで　エヽ。

直助　マア下にゐな。おれが云ふ事をとつくりと聞きなせえ。お前の親も、わしが主人も、不慮なお家の騒動にて、今の流浪。親の難儀を貢ぎの爲、淺ましい此すぎはひ。外の人は兎も角も、わしは推量してゐるゆゑ、せめて少つとも手助けになつて進ぜうと……サア、斯う云つてもわしが無理に口說くゆゑ、お前は得心あるめえが、わしが云ふ事を聞いてくれゝば、こんな商賣させはしねえ。それともお前は好き好んで、さういふ勤めをしなさるのかえ。
そで　なんのマア、苦しいこの身の世渡りも、いま云ふ通り親の爲。
直助　親御を思ふ心なら、わしが云ふ事、聞いた方がよからうぜ。又この事が親御へ知れたら、昔氣質の左門さま、貧乏しても穢らはしい、武士の名までをよごすといひ、殊によつたらお主の名まで
そで　エヽ。
直助　サア、三方四方まん丸く、わしが詞に附く方がよからうぜ。
そで　勤めといふは身すぎばかり、餘儀ない事の譯云うて、頼めば人に鬼もなく

直助　その代りにやア、うまい事もねえといふものだ。ハテ、只惚れて口説くと思ふから料簡が違ふ。本の深切といふものだ。マア、この金で親御にも
　ト懐より金を出し
そで　そんなら以前のよしみにて、大枚のその金を給でも買つて着せるがいゝぢやアねえかえ。
直助　浪人なれば大枚だが、今ぢやア十や二十の金、商人の身ぢやア何でもないのサ。
そで　その深切な心なら、少つとの間その金を
直助　貸すといふのは他人の事だ。ハテ、いくらでも
そで　嬉しうござんす。
　ト金を取りさうにする。
直助　只嬉しうござんすとばかりでは、まづいな。
そで　それぢやといふて
直助　マア、一緒に寝る位の事は
そで　エヽ。
　トこの時奥より宅悦出て来り
宅悦　お紋さん、何しに爰へ出てゐるのだ。早く客の所へ行きな。
そで　ハイ〳〵。
直助　いま涼みに出たのだ。サア、座敷へ行かう。
そで　どうぞそればかりは
宅悦　そんな事を云つて済むものかな。
直助　ハテ、いゝわな。マア、来なせえ。
　ト直助、お袖の手を取つて障子屋體へ入る。此うち彦兵衛出て
彦兵　わしがげんさいめは、居らぬかえ〳〵。
宅悦　さうでござりますか。お小さん〳〵。
　トこれにてお大出て、また眉毛を引き、顔を出す。ト文嘉も出て
文嘉　カウ〳〵、お大さん
だい　ハイ〳〵、いま参ります。
　トまた眉毛を拭いて顔を出す。この拍子に衝立倒れて三人顔見合せ
文嘉　ヤア〳〵、頭が島田で
彦兵　顔が年増。
宅悦　面は濱に似て、啼く蝙蝠に似たり。丹波の國から生捕つた。代はお戻り〳〵。
文嘉　おきやアがれ、とんだものを一座廻し
彦兵　新造のお小さんも凄まじいわいなう。

文嘉　とやについた者を、お大さんも氣が強い。
たい　お大さんだといつて、安くおしでないよ。この三月臨機があつたよ。
彥兵　お小さんはどうしたのぢや。
たい　大分損をしたとサ。
文嘉　重く洒落やアがる。
　ト突き倒し
　サア、歸らう〳〵。
宅悅　歸るなら勤めを置いて行かつしやい。
文嘉　ナニ勤め。押しの強い。こんなものに二百でも置くものか。
彥兵　厚かましい奴があるぞや。其方から錢取つても否おぢや。
たい　否おぢやも凄まじい。
二人　眞平御免なさい。
たい　それぢやアお前方は逃げる氣だね。
文嘉　エヽ、やかましいわい。
宅悅　勤めがなければ、歸す事はならぬぞ〳〵。
　ト爭ふ。流行り唄になり、向うよりお色先に、與茂七出て來る。跡より大三つの升太、五合德利を下げて出て來り
いろ　大三つの升太、どこへ持つて行くのだ。
升太　お前の所サ。
いろ　誰れがさう云つた。
升太　額堂のおばさんがさう云つたから、持つて來た。
いろ　ドレ〳〵、おれに渡した。
升太　イエ〳〵、誂らへた人に渡しませう。
いろ　いゝわな。錢さへ拂つたらよからう。
升太　ナニ、錢は先刻取りやした。それでなくては、お前の所へ持つて來やアしません。額が惡いものを
いろ　この小僧は外聞の惡い。お客も聞いてゐる前で
升太　人の聞いてゐる時でさへ、拂はねえもの、誰れもゐねえ時は猶拂ねはえ。
與茂　ハヽア、こいつは違えねえ。マア〳〵、内まで持つて行くがいゝ。
　トこれにて三人鉄塞へ來る。
升太　代が濟んでゐるから、置いて行きませう。
たい　サア〳〵、勤めをおくれ〳〵。
兩人　否だ〳〵。
宅悅　放すな〳〵。

ト文嘉と彦兵衛は宅悦を突き倒し、一散に逃げ出す。
たい　小僧どん／＼、つらめえてくんな。
ト升太、兩人を捕へ
升太　此奴等は泥坊か。
だい　その人達は食ひ逃げだ。
升太　とんだ奴等だ。サア、金を出しやアがれ。
文嘉　あんな面の奴に、誰れが金を出すものか。
升太　あんな面でも、初手から承知の上であらう。錢を置かねえが最後、これから山へ來た時に、子供を集めて囃させるぞ。
文嘉　イヤ、それは恐れる。山でそれを囃されては
彦兵　これがほんの劍の山。
升太　針の山をば、棒ほどに觸れて歩くぞ。
兩人　そんなら出します／＼。
ト二人とも二朱づゝ出す。升太取り
升太　これさへ取りやア赦してやるワ。
文嘉　なんの事はねえ、三途の川で剝がれたやうだ。
升太　こま言吐かさず、手に手を取つて死出の山、づんづん連れて、うしやアがれ。
兩人　イヨ高麗屋の若旦那。

ト文嘉と彦兵衛、一散に逃げて入る。
たい　小僧どん、おかたじけ。先づその金をおくれ。
升太　この金か。遣りは遣らうが、アレ／＼、そこを見な。
だい　なんだえ。
ト振りかへる。
升太　べら坊あまやアい。
ト一散に走り入る。
だい　ヤイ小僧め、泥坊々々。
ト同じく追ひかけて入る。
いろ　なんだ、イケ騷々しい。
宅悦　騷々しいどころか、泥坊だ。
いろ　恐ろしい亡者だ。併しその埋め草に、いゝお客をお連れ申した。サア、此方へお入りなされませ。
ト與茂七、内へ入る。
宅悦　ようお出でなされました。
與茂　ハイ／＼、わしは急ぐから、早いがようございます。
いろ　あのお紋さんはゐるかしらん。
宅悦　丁度此方へ來てゐる。
いろ　それは幸ひ。ちよつと頼んで
宅悦　然し今の二の舞はあやまるぜ。

いろ　ナニ、そんな氣遣ひは少しもない。
宅悦　そんならおれが呼んで來よう。
　ト宅悦、奥へ入る。お色、行燈をよき所へ置き、風呂敷なかけて暗くする。
與茂　なぜ眞暗にした。
いろ　爰が地獄の名代所サ。
與茂　成る程ナ。
　ト上手よりお袖出て來る。
そで　退引きならぬ所へ、呼び出して下さんしたゆゑ、ひやいな所を
いろ　コレ、お紋さん、隨分おとなしいお客だから、叮嚀に勤めなよ。
そで　ハイ、有り難うござります。
いろ　おしげりなされませ。
　ト與茂七の側へお袖を押しやり、お色奥へ入る。お袖、思ひ入れ。
そで　モシ、お休みなされましたかえ。
與茂　どうして〳〵、一人で寢る位なら、内で寢てゐるのサ……コレサ・どうしたものだ。此方へ寄んなせえ。なぜウヂ〳〵してゐるのだ。エヽ、眞暗で顏が見えねえ。ちよつと行燈を
そで　アヽモシ、灯をおつけなされずとも。
與茂　エヽ、恥かしいか。畜生め。
　トこなし。お袖思ひ入れ。
そで　モシ、私しはあなたへ、お願ひがござります。
與茂　なんだ、お願ひとは。どうせろくな事ぢやアあるめえ。
そで　サア、申し憎い御無心ながら、私しが斯ういふ事に出まする譯、お聞きなされて、どうぞ不便と思し召し、一つ寢だけは
與茂　なんの事だか、一向わからねえ。マア〳〵、その譯を話しなせえ。
そで　ハイ〳〵、お恥かしい事ながら、私しの內は、もと武家でござりまするが、樣子あつて父さんは浪人、一人の姉さんもござりまするが、さる屋敷へ縁附きましたところ、懷姙して、どういふ譯やら離緣になり、今日一日の煙りも、立てかねまする程の貧苦の中へ、病氣の姉を引取りましたゆゑ、よんどころなう晝の間は楊枝見世、夜は此やうな淺ましい、すぎはひを致しまするも、せめて少しのお錢を貰ひ、父さん姉さんを過したいばかり、

心にもない隱し勤め。お情深いお客樣に、この身のしがを打明けて、お願ひ申すは無理ながら、どうぞ切ないわたしが身を、不便と思し召しまして、一つ寢いたします事は、お免しなされて下さりませうなら、ハイ〱、有り難うござります。

與茂　成る程。聞けば氣の毒な事だが、親の爲に斯うした勤めをしようより、いつそ吉原へでも行つて、花魁になつたら好さゝうなものだぜ。

そで　イエ、此やうな事いたしまするも、親姉へは一向沙汰なし。

與茂　ハテ、隱れて出るのか。孝行者だの。その孝行な心を聞いて、猶々思ひが增して來た。お前、よく積つても見なせえ。中には腹を立つて歸る客もあらうし、また、とても孝行する位なら、思ひ切つてその譯を云へば、出やう次第でいゝ旦那が附かうも知れぬ。つい一通りの客だといつて、二朱や一分は遣る氣になるわサ。

そで　それがなります程なれば、申し憎い事、お賴み申しは致しませぬ。

與茂　どうしてもならぬといふは、ハ、ア、云ひ號けでもあるといふ事か。

そで　エ、……イエ、さういふ譯でも

與茂　そんなら何もいゝぢやアねえか。

そで　でも、どうぞこればかりは

與茂　ハテ、惡い合點だ。

そで　アレ、およしなされませ。

ト飛び退くはずみ、行燈の風呂蹴落して明るくなり、兩人顏見合せ

與茂　ヤア、其方は女房

そで　お前は與茂七さん、面目なうござんす。

ト顏を隱して思ひ入れ。與茂七ムッとして

與茂　面目ない……イヤ面目ないも凄まじい。コレ、お袖、てめえは〱、屋敷の騷動あつてから、散り〱に別れたが、今まで便りをせぬおれゆゑ、忘れ果てゝこんな勤めに出るのだな。現在亭主がありながら、男欲しさの徒らか。あんまり呆れて物が云はれねえ。

そで　モシ、與茂七さん、樣子御存じないからは、そのお腹立ちも尤もでござんすが、男欲しさの徒らとは、あんまりむごい仰しやりやう。お屋敷の騷動より、みな散り散りに御浪人。今もお話し申した通り、親の爲に斯うした勤め。徒らな心なら、何しに親のしがまでも、打明け

て話しませう。これまで一度の便りもなう、つれないお前に操を立て、切ない苦しいその譯も、聞き分ける人は稀れにして、大概みんな無得心、それを兎やかう云ひ抜ける、人一倍のこの苦勞、誰れに立てうと辛苦をすると思うてぞ。わたしの斯うした勤めより、恨みは却つてお前にある。現在女房のある身でゐながら、斯ういふ所へ遊びに來て、女房と知らず此わしに、貞女を破らせやうとさしやんした。斯ういふ所に、遊んでゐる間はありながら、女房の所へは、便りする間はござんせぬか。ほんに〳〵あんまりな、お前の心に引くらべ、逆捻ぢな今の腹立ち。あんまりぢや、あんまりぢやわいの。

與茂　さう云はれて見れば一言も無いが、さぞかし今までいかい苦勞。おれも折々其方の所へ、便りしようと思うてゐれど

そで　イエ〳〵、その便りのない事は、實は恨みは致しませぬ。その譯は、由良之助さまの思し立ち、御主人の敵討

與茂　コレサ、譯も無え事を聞きかじつて、ズハラ〳〵と。外の浪人にそんな噂があるか知らぬが、おれは少つともそんな氣遣ひはない。今は商人、小間物屋の與茂七、何しに敵討なぞは

そで　サア、女子は口のさがないものゆゑ、お隱しあるは御尤も。斯うした所へウカ〳〵と、遊び歩くも、敵に油斷さする爲。

與茂　これはしたり、又しても敵々と、そんな時代な事を聞くも否。久しぶりで女房ども、今までの事は、腹が立つならあやまらう。行燈の明るくなつたが結ぶの神。

そで　成る程、迂濶に大事も……ほんに思へば久し振り。ようマア、まめでゐて下さんしたなア。

與茂　おぬしも無事で、めでたい〳〵。

ト奥よりお色出て來り

いろ　ハイ、きまりましたらお勤めを

與茂　ほんに、それ〳〵

ト金を出してやる。

うぬが女房に勤めを出すのも

いろ　エヽ。

與茂　これも話しの種だらう。時に、先刻の酒があるだらう。

いろ　爰にあるが、冷でござります。

與茂　冷でも構はぬ。

いろ　たんとお樂しみなされませ。

ト酒を出して、奥へ入る。

與茂　サア、嗅ア、一つ飲まつし。

そで　ほんにマア、いつの間に其やうな物云ひに

與茂　へゝ、古風な事を云ふ奴サ。

ト この時奥の障子を明け、直助、この樣子を聞いてゐる。

そで　お前、酒を深うはあがらぬぢやないかえ。

與茂　なんだ、さゝをあがらぬ。お富士樣の蛇ぢやアあるめえし。併し、誠に久しぶりで、女房と二人で水入らずの酒盛り。

そで　斯ういふ所へ、遊びにござんすからは、定めし方々へも、行かしやんしたでござんせうな。

與茂　どうして／＼、てめえの所なればこそ。

そで　そんなら、初手から知つてござんしたか。

與茂　なにサ、知りもしねえが……カウ、よく詞咎めをするなア。さう云へばおれも云はねえぢやアならねえ。今まで多くの客に出たうちぢやア、定めし自由になつたのもあつたらう。

そで　イエ／＼、神さんかけて、そんな事はござんせぬ。
その證據にはコレ、お前にもあの通り

與茂　そりやこそ、おれと知つてゐても

そで　イエ、知らねばこそあのやうに

與茂　もしおれのやうに、無理やりにあゝしたらどうする。

そで　そりやわたしが心一つ、人を見て法とやら、勇み肌のお客なら、馴れぬながらも職人の、女房でござると嘘ついて、亭主の病氣に勤めはすれど、心は清ききよ鐘、かけて去なして又明日の夜。坊さん客には此方から、帶も解かいで永々と、お談議説いて詫び事も、御出家方は濕なしう、緣なき衆生は度し難しと、得心づくで歸るわいなア。

與茂　また店向きの商人ならば。

そで　宵を限りの四つの鐘、これが別れの後朝と、思へば遲うどこへ行て、歸らにやならぬ勘定も、ツイうかうかと算盤の、たま／＼ごんせと騙してやる。

與茂　侍ひ客の山さんなら、拔ける手管はあるまいが。

そで　武家は元より此方の物。手討ちにあはうが、殺されうが、忠義の爲とたらしこみ、頼めばグッと侍ひ冥利、せう事なしの褒めそやし、去なした跡へ旅人客、一しを哀れに、年貢の代りの勤めと云へば、淚々の片手にも、小豆一升、大根一把、貰うた事もあるわいなア。

與茂　ハテナア、商賣に馴れるとはいひながら、天晴れ噓の上達。來世は必らず、閻魔に舌を拔かれるぞや。
そで　イエ、その氣遣ひはござんせぬ。この世からなる地獄の責め。
與茂　イカサマ、云やればそんなもの。思はず今宵逢うたのも
そで　ほんに地獄で佛とやら
與茂　もうこれからは奈落の底も
そで　離れぬ夫婦。
與茂　女房ども。
そで　こちの人。ほんに夢ではないかいなア。
與茂　夢なら覺めるな。
そで　オ、嬉し。
ト縋り附き、互ひに懷へ手を入れる。與茂七はお袖が懷の財布を引出す。お袖は與茂七の廻文を引出す。
與茂　貧苦に迫ると云ひながら、この金は
そで　さてこそ義士の廻文狀。
ト與茂七手早く取る。
與茂　これ見られては
そで　エ、。
與茂　女房なれども
ト思ひ入れ。
して、この金は
そで　その金は……マア寢て話さうわいなア。
ト唄になり、屛風を引廻す。直助、こちらへ出て來て、いろ／＼口惜しき思ひ入れあり。無性に手を叩く。奥より宅悦、お色、出て來り
いろ　モシ／＼お前、如才もなくて、靜かになさいまし。
宅悦　夜更けさふけ、世間の前もありますわな。
直助　やかましいわえ。うぬら、よく女の二重賣りをしやアがつたな。
いろ　モシ／＼、聲高に仰しやりまするな。いつ二重賣りを致しました。
直助　しねえものか。おれが買つた女は、この屛風の中にゐるわえ。
宅悦　そりやお前、一人で買うてゞはあるまいし、廻しといふ事もござります。
直助　ナニ、隱し賣女の癖に、廻しも氣が強い。あの女は泥坊だ。大騙りだ。それを承知で買はせるからは、うぬらも盗人の同類だ。

いろ　なんぼ出たらめの惡態でも、泥坊と云はれては濟みませぬ。それには何ぞ證據がござりますか。

直助　證據といふは、この屛風の中に寢てゐる野郎も、大泥坊だ。

　　トこの時、與茂七、お袖出て來り

與茂　先刻から聞いてゐれば、盜人の、泥坊のと、そりやア誰れの事だ。

直助　外でもねえ、うぬ等二人の事サ。

與茂　ヤア、さういふわれは、ハテ見たやうな

直助　見た筈サ。以前屋敷の同家中、奧田の家に下部奉公、今は商人藥賣り、藤八五文で仕出した金、地獄の女のおこわにかゝつちやア男が立たねえ。それゆゑ騙りといふ事サ。

與茂　そんなら今のその金は

直助　女が懷中、財布の金、ほつかと渡して置いたのも、もしやにかゝつたその上で、夫婦呼はり剩さへ、おれが錢で買つた酒まで、只飮まれていちやつかれちやア、佛のやうな男でも、胸の炎は地獄の廻し。うぬらは盜人、大騙り、とサア、云つてはあんまり有りふれた、憎まれ口も餘ッぽど古風。どうで賣女に出るからは、一座廻しを合點で、おれが方へもすべよく出れば、金も遣らうしこの場も濟ます。洒落てしまふがいゝぢやアねえかえ。

與茂　イ、ヤならぬ。武士の相方、金銀づくで外の男に、添ひ寢さす事罷りならぬ。

直助　なんだ、武士だ。コレ、以前は武士でも、今は浪人、町家の住居の小間物屋、それでも武士か。

與茂　ヤア。

直助　女房々々とイケ騷々しく、どこで貰つて、誰れが仲人、よし又相對づくの夫婦にもしろ、隱し賣女も同然だ。買ひに來たおらア客だ。但し武士の浪人が、女房を稼がせても濟むか。

與茂　サア、それは。

直助　ソレ見ろ。おらア畢竟深切づくで、親の難儀とあるゆゑに、金まで遣らうといふ男を、ヌッペリ騙して一文の、働らきもねえ浪人を、亭主でござると嬉しがる。思へば矢ッ張り親に孝。金もいらずば此方へ返せ。貧乏神のとッついた、うぬらに金は授からねえ。キリ／＼爰へ出してしまへ。

　　トいろ／＼惡口云ふ。與茂七、口惜しき思ひ入れ。

與茂　エ、コレ、貢ぎの金はありながら、義士の神文、外

へ遣はぬ配分金。

直助　ヤ。

與茂　エ、、石、瓦も同じ事。

ト我が懐へ思ひ入れ。これにてお袖、思ひ入れあつて、以前の財布を取出し、直助の前に投げ出す。

直助　すんでの事に、危ない事。

そで　それ返したら、云ひ分もござんすまい。

直助　あつても云はねえ。ナニ、未練らしく

そで　最前いろ／＼深切に、云うたこの金、その時も、底に針ある詞の端、取るまいとは思うたれど、そこが侍ひ世につれて、親の葬儀とツイ金を、入れて置いたが此方の誤まり、それを云ひ立て盜人の、ヤレ騙りのと聲高に、僅かな金で腹立てる、ほんに貧するわたしより、心のむさい直助どの。千金萬金積んだとて、なんの心に隨はう。たとへ浪人であらうとも、わたしが好いた心が金。日本中の寶をば、一つ所へ山と積んでも、替へられぬ大事の男。この後わたしがどういふ苦患、身を切り賣りにしてなりと、可愛い丶男の爲と思へば、辛苦な事もござんせん。ほんに今までアタ嫌らしい、附けつ廻しつ無理口說き。この後フツツリ、うるさい頭拂うたと思や、此やうな嬉しい事はないわいな。

直助　それ程までに惚れた男と

そで　嫌な男と比べては、毒と藥の隣り同士、目に見るさへも嫌ぢやわいなア。

直助　ムウ。

ト思ひ入れ。流行り唄になり、向うより藤八、以前の形にて出て來り

藤八　あの野郞め、どこへはまり込んでゐるかしらん。なんでも、ビリにかゝつてゐるに違えねえ。大方爰らだらう……ハイ、御免なさりませ……ヤア、爰にゐるな／＼。

直助　ヤア、お前は

ト逃げにかゝる。

藤八　ドツコイ／＼、大方こんな所にゐるであらうと思つた。道理でこの頃は賣溜めも寄越さず、藥も固めて卸し賣り、親方へ仕切りの金まで、みんな汝が引摺り込んで、女狂ひとは太え野郞だ。

直助　モシ／＼、わしがなんの、そんな事をするものかな。賣溜めも、藥の代も、明日親方へ持つて行くところでござります。

藤八　そんなら何しに爰へ來てゐるのだ。

直助　サア、爰へ來たのは……オヽ、それ〳〵、肩がつかへたから、灸を据ゑに來たのサ。爰は灸點所だから。ナウ。おかみさん

いろ　左樣々々、いま据ゑかゝる最中でござります。

宅悦　そこに艾がほぐしてあるワ。

直助　コレサ〳〵、本當に据ゑなくつてもいゝわサ。

藤八　灸を据ゑるとは嘘つきめ、矢ツ張りビリにはまりやアがつて

直助　どうして〳〵、いま灸を据ゑかゝる所サ。

ト肌を脱ぐ。

いろ　ソレ、皮切りぢや。

ト本當に灸を据ゑる。

直助　熱々々……これが本當の焦熱地獄、もうよい〳〵。

藤八　たつた一つで、もうよいとは、ハテ、よく利く灸だ。この灸は一つで二朱か。もう一つ据ゑると、お直しになるだらう。何でもかでも、賣溜めと藥を持つて行かねばならぬ。サア、寄越せ〳〵。

直助　明日わしが持つて行きますよ。

藤八　何を。うぬは親方の所へ出入りは叶はぬ。おれに取つて來いと云はれた。キリ〳〵出しやアがれ。

ト直助が懐へ手を入れて、以前の財布を引出す。

そりやこそ〳〵。爰に持つてゐる癖に……藥の代の代りにやア、着物を脱ぎやアがれ。

直助　これも取るのか、情ない。

藤八　みんな親方の仕着だ。灸を据ゑに來るのに、羽織で極まつて來ずともの事だ。サア〳〵、脱げ〳〵。

ト直助を裸にして、羽織、着物を取上げ、金財布も取上げ

太え奴でござるわえ。

ト抱へたまゝ表へ出て

どなたもおやかましうござりました。

宅悦　斯う丸裸にされては、此方の勤めも

いろ　ちやアふうかえ。

直助　ふられたからは、遣らずともいゝわえ。

宅悦　ほんに今まで藥賣りの、藤八が態は、奇妙。

藤八　誠に太々しい奴でござるわえ。

ト雜物を抱へ、藤八向うへ入る。與茂七この様子を見てゐて

與茂　成る程、金持ちは違つたものだの。一文無しの素浪人でも、親方の物を引摺り込んで、着物まで剝がれるや

うな事アねえ。金持ち〳〵と、金びら切つた商人が、立派な形だの。人の金で金持ちと云はうなら、お金藏の番人は、みんな金持ち盗人、騙りと云つたその身が、いま目前、ほんの正銘、大盗人。ハテサテ、氣の毒千萬な。

そで　ほんに思へばあの金を、取らぬが仕合せ盗人の、既に同類、オヽ、怖い事。

宅悦　カウ〳〵、裸でおらが内に、ゐられてはあやまるぜ。

いろ　早く出て行きなせえ〳〵。

直助　エヽ、やかましい。いま出て行くわえ。いま〳〵しい。とんだ所で恥つらを

與茂　恥と思はゞ逃げ支度。思へば灸まで無駄に据ゑ

そで　山も見られぬあの姿。

與茂　此方は姿から夫婦連れ

そで　手に手を取つて

宅悦　お歸りなら、提灯を貸して上げませう。

與茂　アイ、そんなら提灯借用代。

ト　また懷から二朱出してやる。

宅悦　これは有り難うござります。

與茂　カウ、あんな者が内にゐるから、油斷をしなさるな。

いろ　今に叩き出しますよ。

宅悦　ハイ提灯。

ト　藪の内と書いたる提灯を與茂七に渡す。

そで　サア、モシ、こちの人

與茂　今宵は内でしつぽりと

直助　うぬ、これ見よがしに

與茂　羨ましいか。

直助　どうで今夜は

與茂　積る話しを

そで　道々二人が

宅悦　早く出て行け。

ト　宅悦かゝる。直助、宅悦を擲り倒す。與茂七、お袖は門口で寄り添ふ。

直助　日當は提灯。

ト　直助「ムウ」と行くを、お色、シヤンと門口を閉す。これを木の頭にして、よろしく

幕

禪のツトメにてツナギ、引返し。

本舞臺、向う一面栗丸太の垣、土手板、上の方に稲村、石地藏、すべて觀音裏田圃邊の道具、爰に、づ

ぶ六、泥太、願鐵、以前の菰かぶり、庄三郎、同じ形にて、皆々酒を飲んでゐる。禪のツトメにて幕明く。

づぶ　なんと、今日のやうな仕事が毎日あればいゝ。

泥太　一人前二朱づゝの立前サ。

庄三　いゝ仕事をしたな。おいらにも沙汰なしに。

願鐵　それだからこんなに奢るのだ。

づぶ　てめえの仲間入りの時も、矢ッ張りこんなに奢つたぜ。

泥太　これ見や、これが二升目の酒だ。素人でもこんなに奢るものはあるめえ。

願鐵　ナニあるものか。昔の紀文大盡でも、おいらにやア叶ふめえ。肴を見やな。

づぶ　なんだ、鯛だな〳〵。

願鐵　鯛も野暮に身ばかりはないワ。あら煮だワ。

泥太　さうサ、素的なあら煮だな。あんまり叮嚀に身を取つてしまつたな。

づぶ　その代り、どんないゝ女がしやぶつた骨かも知れねえ。

庄三　そりやア大方、富士屋のお剩りだらう。先刻見てゐたら、鼻の缺けたカサかきがしやぶつてゐたッけ。

づぶ　エ、、穢ない事を云ふな。おらア穢ねえ事を云ふと、直に胸が悪くなるわえ。

泥太　ざまを見ろ。てめえの形が綺麗な形か。

づぶ　それでもおらア綺麗好きだ。決して捨てゝある菰は着た事がない。しつけのかゝつた新らしい菰ばかりだ。

願鐵　菰にしつけがかゝつてゐるものか。

泥太　體にしつけがあるといふのだ。

庄三　こいつは違えねえ、大笑ひだ。

一同　ハ、、、、、

づぶ　大笑ひか中笑ひか知らねえが、なぜみんなおれを安くして笑ふよ。太平楽ぢやアねえが、この仲間ぢやアおれが一番古いワ。腹からの宿なしだ。憚りながら田圃のづぶ六さんといつちやア、人に知られた宿なし様だ。あんまりこめてくれるな。

一同　ソリヤ、づぶが、怒つた〳〵。

づぶ　なんだ此奴らア。

ト無性に腹を立てゝゐる。

願鐵　ヤアー、小屋の始めの一踊り、づぶ六踊りが所望ぢやが、合點か。

一同　オヽサアテ合點だ。

ト皆々、づぶ六の手を持ち添へ、踊りながら下座へ入る。

庄三　ハテ、騒々しい奴らだ。

ト思ひ入れあつて、あたりを見て

今日晝間地内にて、とり落した廻文状。その時來合せた與茂七どの、どうぞ安否が聞きたいものだが。

ト時の鐘、合ひ方になり、向うより與茂七、ブラ提灯を提げて出て來て、透かし見て

與茂　庄三郎が居る所は、慥か爰ら。

庄三　さういふ聲は與茂七どのか。

與茂　庄三郎どの……コレサ、嗜みめされい。如何に若いといひながら、最前とても思案もなく、高野の家の侍ひに、身の上を悟らるゝやうな事。畢竟、身共が參り合せたればこそよけれ、重ねて氣を附けさつしやるがようござる。

庄三　御厚志の御意見、忝なうござる。併し鬱憤忘れかね、思はず知らず

與茂　それも尤も。御主人御無念の程、朝暮忘れぬ我れ我れなれば、かゝる姿も皆忠義。

庄三　それにつけてもその砌り、とり落したる義士の廻文。

與茂　その廻文も身共が所持。これより直ぐに某は、鎌倉表へ立ちこえ、それより都山科へ通達して、思ひ思ひに出立の、支度を知らするこの廻文。

庄三　鎌倉へお出でとあらば、敵の近邊、身の上を悟られぬやう、拙者が姿と

與茂　成る程、非人の姿となり、貴殿は江戸に徘徊なす、一味の者へ

庄三　最前聞きたる屋敷替への趣き、花水橋の向う河岸へ引移るとある、この旨いち〳〵知らすでござらう。

與茂　然らば姿を變へ〳〵に

ト手早く着類を脱ぎ、庄三郎の襤褸と着替へ、庄三郎も與茂七の衣裳を着て

庄三　この提灯は

與茂　非人に提灯はいらぬ物。これも貴殿へ

庄三　然らは與茂七どの

與茂　後して面會

庄三　隨分御無事で

與茂　お別れ申す。

ト與茂七は、菰を冠り、よろしく向うへ入る。庄三郎、

こなしあつて

庄三　これにて先づは一つの安堵、……併し急に違つたこの姿、仲間の乞食どもが見附けたら又面倒。少つとも早く今のうちに、さうぢや〳〵。

ト庄三郎は領いて、下座へ入る。直ぐに向うより四谷左門、最前のまゝの形で出てくる。後より伊右衛門追ひかけ出て

伊右　アイヤ左門どの、お待ちなされい。しつこく申すやうでござるが、お岩ことも身ごもつてまで居る仕儀でござるゆゑ、勘辨下されて、どうぞ此方へお返しなされて下されい。

ト左門、ちよつと振返り、知らぬ顏して行きかける。

待たッしやい。一言の挨拶もなく、近頃無禮でござらうぞ。

左門　無禮といふ事、よく知つてゐさつしやるな。身共が物を申さぬは、一旦娘をやつたよしみ。親の氣に入らぬ婿ゆゑ、取返したあのお岩。幾度云つても御返答は、ならぬといふより外は無い。それゆゑ無駄に物は申さぬ。こなたも若い者のやうにもない、女一人ではあるまいし、しつこく云はずと、思ひ切つたがよいわサ。

伊右　すりや、どのやうに申しても

左門　君子に二言なしサ。

伊右　貴樣が君子か。ハ、、、、、君子はその罪を憎んでその人を憎まず。よしや手前に不始末な事がござらうとも、そこが親身。若い者ゆゑ、意見を云つて下さつてもよさゝうなものを、僅かな事を云ひ立てに、娘を引揚げ、苦しまぎれに、遊女はしたにでも賣る心か。大概そこらでござらうがの。

左門　ハ、、、、。成る程、おのれの心に引くらべ、大事な娘を添はして置いたら、おのれこそ夜鷹にかな賣りこくるであらう。それが不便さ二つには、盜人根性のある者を、緣家にしてはこの身の穢れ。

伊右　なんと。

左門　云へば云ふ程その身の破滅、年寄りは惡い事は云はぬ程に、諦めてしまはつしやれサ。

伊右　イヤ諦めぬ。一旦武士が云ひ出した事、刀にかけても。

左門　刀にかけて、どうおしやる。

伊右　最前といひ、今といひ、飽くまで身共をさみする老ぼれ。女房の緣に繫がりやこそ、舅あしらひもモウこれ

まで。娘を返さぬ上からは、他人の左門、打果すのが武士の意地。

左門　年は寄つても四谷左門。ナニやみ／＼とお身達に

伊右　その舌の根を

ト白刃を拔いて切りかける。左門も拔き合せ、立廻り。左門、手ひどく切りつける。伊右衛門あしらひかね、石地藏の後へ廻る。左門、及び腰に切らうとする。この時、伊右衛門、石地藏を突き倒す。左門の足のあたり。擬となる。すかさず左門を一かせ切る。よろしく立廻りあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面のまさき垣。上の方、富士權現の賽錢箱、すべて裏田圃の道具。爰に直助、頬かむりにて、與茂七の衣裳を着たる庄三郎を出刃にて刺し殺してゐる。時の鐘にて道具とまる

直助　戀の敵の佐藤與茂七、宵の意趣、思ひ知つたか。

ト止めを刺し

後日に見咎められぬやう、面の皮を

ト持つたる出刃にて面の皮をくり

刃物があつては

ト思ひ入れあつて、垣根の中へ刃物を隱す。バタ／＼にて下座より、左門、朱に染まり、出る。跡より伊右衛門、拔刀にて出で、ちよつと立廻りあつて左門を切り倒し、止めを刺す。

伊右　強情ぬかした老ぼれめ、刀の錆は自業自得。ハテ、いゝ態だわえ。

ト直助、伊右衛門を透して見て

直助　さういふ聲は、慥か民谷どの。

ト同じく直助を透して

伊右　奥田の下部直助か、どうして爰へ。

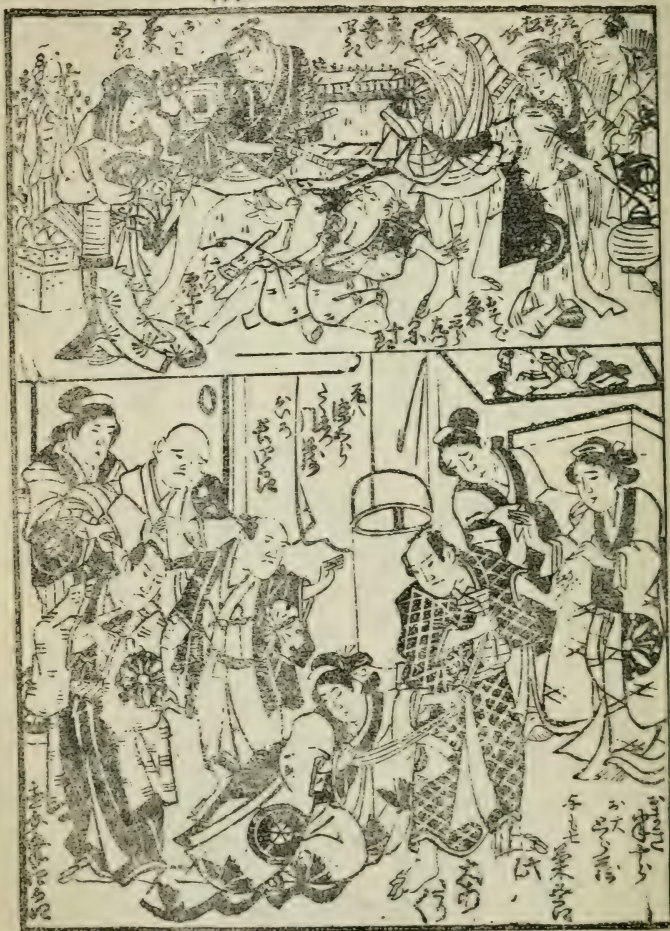
直助　戀の意趣ある佐藤與茂七。たうとう爰で

伊右　女房の親の四谷左門、お岩を返さぬその上に、國で盗んだ用金を、氣取つた老ぼれ、後日の障り、それゆゑ是非なく

直助　丁度揃つた人殺し

伊右　よく似た事もあるものだ。

トこの時向うより、足音するゆゑ、二人とも小隱れする。時の鐘、合ひ方になり、向うよりお岩、手拭をかむり、安下駄を履き、糸立を抱へ、辻君の姿にて出て來り

序幕

いは　もう餘程夜更けであらうに、このマア父さんは何をして、歸りの遲い事やら。お年の上といひ、宵からの胸騷ぎ。急に案じられるゆゑ、お迎ひに出て見たが、どこにお出でなさんす事やら。
　ト云ひながら舞臺へ來る。下手よりお袖、小挑灯を持つて走り出て來て、思はずお岩に突きあたり
そで　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。心の急く者でござります
いは　ヤ、其方は妹ぢやないかいなう。
そで　オヽ、姉さんかいなア
　ト　お岩の姿を見て
お前マア、味いな形をしてゐなさんす。殊に夜更けといひ、只の身でもないのに、冷えては悪いぢやござんせぬか。さうしてマア、なんぼ別れてゐればとて、夫のある身で、賤しい辻君の
いは　ア、コレ、滅多な事云やんな。……成る程、朝夕貧しい暮らしをするゆゑ、其やうに思やるも尤も。又わしが此やうな物を抱へてゐるゆゑ、猶更さう見える筈ぢやが、先刻に内を出る時、少しバラ附いてゐたゆゑ、傘は無し、それでこれを……マア〳〵、わしよりは其方の身の上。お屋敷に居る自分、與茂七といふ云ひ號けがありながら、この頃聞けば、味な勤めとやらに出やるげな。
そで　エ。
いは　なんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘があらう事かと、サア、表向きでは云はねばならぬが、そこを云はれぬわしが身も、有やうは、其方の推量の通り、賤しい業を勤めるも、年寄つた父さんが、貧苦の上にわしらへ氣兼ね、現在娘の姉妹にも隱して、朝夕觀音樣の地内へ出て、一錢二錢の袖乞ひなさるゝといなう。お留め申すも、隱してお出でなさるゝ所へ、其やうな事云うたら、面目もないとて、もしひよつと……ほんに日頃の御氣性ゆゑ。そこでわしが思ふには、内の事さへ相應に廻つたなら、父さんの御苦勞もやむであらうと、思ひ附いた辻君も、肌は觸れねど譯云うて、矢ッ張り袖乞ひ同然な、今の世渡り。
そで　わしも同じその心で、父さんにもお前にも、隱してこの頃二三度は、恥かしい事に出ますけれど、それが勿怪の幸ひやら、今日云ひ號けの與茂七さんに、不思議にお目にかゝつて、いろ〳〵話しのその上にて、又どこへやら行かしやんしたゆゑ、その後慕うて爰まで來る道、

どうやら頻りに胸騒ぎ。

いは　ムウ、さう云やれば、わしも父さんの歸りが遲いゆゑ、矢ツ張り胸騷ぎ、なんぞ凶事がなければよいが。

ト此うちお袖あたりを見て

そで　エ、モ、氣にかゝる所へ、それ〳〵姉さん、お前の側へも、血がこぼれてゐるわいなア。

ト提灯を出す。

いは　エ、そ氣味の惡い……オ、、大さうな血ぢやわいなア。

トあたりを見て、お岩は左門の死骸、お袖も庄三郎の死骸を見附けて思ひ入れ。

いは　ヤア、そりやこそ父さん

そで　ヤ、、覺えの召し物、印しの提灯、與茂七さんもこの所で

兩人　こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

ト兩人よろしく泣き伏す。この時、伊右衛門、直助、ソツと兩花道へかゝり、窺ひゐる。お岩、左門の死骸を抱き起し

いは　申し、父さんいなア〳〵、氣を確かに持つて下さんせ。敵は何者でござんす。コレイナア、物云うて下さんせいなア。

そで　ほんにマア、父さんといひ夫まで、一つ所で敢へない御最期。

いは　時が延びたか、もう死に切つて、今際の際の一言さへ、叶はぬ事か、淺ましい。

そで　ほんに果敢ない

兩人　別れぢやわいなア。

ト兩人大泣き。この時、伊右衛門、直助、バタ〳〵と足音をさせて駈け來り

伊右　夜陰に何やら女の泣き聲……ヤア、わりや女房お岩ぢやないか。

いは　ヤア、お前は伊右衛門どの、父さんが殺されて居ますわいなア。

伊右　ヤア、こりや舅どのを何者が、……エ、コレ、今一足早くんば、おめ〳〵とは討たすまいもの。エ、、殘念千萬な。

直助　此方に居るのはお袖さんか……ヤア〳〵、こりやア先刻見覺えのある提灯といひ、さては與茂七どのは

そで　父さんと同じ所で此やうに

直助　オ、〳〵〳〵、これは大變〳〵。

伊右　すりや、お岩が妹の云ひ號け、佐藤與茂七もこの所で……察するところ舅の身の上、危ふい所へ駈けつけて、助太刀せんと思ひし與茂七、却つて共に討たれたに違ひあるまい、さすれば討ちし曲者は、餘程手だれと見えるわえ。

ト此うち直助、思ひ入れあつて

直助　南無阿彌陀佛。

ト伊右衛門の脇差にて腹切らうとする。伊右衛門とめて

伊右　ヤア、其方は奥田の下部直助、何ゆゑ切腹。

直助　ナア、切らねばならぬこの身の云ひ譯。安い奉公する者は、心も悪く現在の、御家中の娘御、これなるお袖さまに横戀慕、云ひ號けの與茂七さまの、ある事まで知つてゐながら、金ひら切つてこのお子を、無理に口說いた罰が當り、宵に思はぬわしが恥。二言三言云ひ合つた、揚げ句に切られた與茂七さま。わしに疑ひかゝらにやならぬ。わしも宵には與茂七さまを、恨んで見たが、よく〳〵、思へば、忠義一圖に凝り固り、二君に仕へず、貧しい浪人してござる、舅と樣をよい事にして、色にせうの何のと、思へば〳〵勿體ないこと。前非を悔いてせめてもの、その云ひ譯に來かゝるこの場。思ひがけない横死の樣子。それだに依つて

伊右　成る程、さう聞いては其方が身に、疑ひかゝると思ふも尤も、また疑ふまいものでもないが、其方は刃物帶した物も持たず、舅といひ與茂七どの二人の死骸、中間小者の其方の手で、やみ〳〵と討たるゝやうな人達でもない。そこを思へば、其方の業でないは明白なれど、さほど本心に返り、前非を悔い、云ひ譯いたす所存なら、與茂七討つたるその敵、探し出してあのお袖に、討たしてやるが其方の潔白。

直助　それは下郎が願ふところ。この身の面晴れ一つには、お袖さまへ今までも、無理なじやら附き申した云ひ譯、この身を粉に砕いても、敵討の助太刀を

いに　辛い貧苦の其うちも、云ふに云はれぬ才覺して、一日逢るも父さんを、少しも樂にさせましたいと、思ふばつかり。その父さんには敢へない別れ、なに樂しみに此の世に、生きてゐらるゝものぞいなア。

そて　さうでござんす。姉妹互ひに戀し合うて、辛い苦しい恥かしい、苦勞をしたのも皆無駄事。取りわけ戀しい與茂七さんに、逢うて嬉しと思ふ間も、なき別れとは

情ない、いつそ逢はぬその前に、死んだと聞いたら諦められう。夢見たやうな女夫の縁。
いは　親の死骸のこの場にて
そで　夫と共に親子四人
いは　あの世へ一緒に
そで　さうぢや。
　ト死骸の側にある刃物にて自害しようとするを、伊右衛門直助留めて
伊右　コリヤ、うろたへ者め。いま姉妹が自害して、親夫の敵は誰れが討つ。
兩人　エヽ。
伊右　妹お袖は親夫、一度に別れてその悲しみ、死なうといふは尤もなれど、姉のお岩は現在の、夫を捨てゝ相果てなば、孝は立つても、操は立つまい
いは　でも別れたる夫婦仲、今更どうも
伊右　サア、飽きも飽かれもせぬ仲にて、殊に姙娠、子まで儲けし女房を、何とて身共は見捨てやう。男の心に叶はぬゆゑ、先づ逆らはず戻したが、死なれて見れば差あたり、去り狀やらぬ女房の親、此まゝにも捨て置かれず、身共の爲にも舅の敵。

いは　そんならこれから伊右衛門どの、便りになつて親の敵。
伊右　知れた事、女房が親は身共が親サ
そで　成る程、相對で別れたとはいふものゝ、去り狀取らねば矢ツ張り女房。
伊右　親の敵は身共が討たす。氣遣ひせずと、身共と一緒に。
そで　飽かぬ仲の元々へ、お歸りなされて父さんの、敵の助太刀、力になつてやらうとは、お羨ましいお二人さん
直助　ハテ、今もわしが申す通り、與茂七さまを討つたる敵、尋ねてお前に討たせれば、この身の潔白濟みませぬ。どうぞそれまでお前の命、わしに預けて下さりませ
そで　それぢやといふて、これまで愛想を盡かしたこなさんを
直助　サア、そこが前非を悔いたる直助、善心になるからは、是非ともお前のお力に
伊右　直助が申す通り、兎角悲しい辛抱も、つゞまる所は夫の爲、首尾よく敵討つまでは、その直助と假りの夫婦に。
そで　エヽ、

伊右　サア、それが即ち世を忍ぶ、世間の思惑、敵に油斷さする手段。
そで　でも直助どのと假初めにも、夫婦とよんでは、未來の夫へ
直助　立たぬも道理、さりながら、夫婦といふは人目ばかり、志しばかりがわしが潔白。
そで　それでも、どうやら
いは　ア、コレ妹、うはべばかりの夫婦になりや。姉が願うても、結んで欲しいこの縁組み、直助どのとやらの先刻の詞も、嘘か誠か側にゐて、とつくり敵を糺したなら、敵も矢ツ張り……サア、ついちよつと知れる手がゝりが、あるまいものでもない程に、姉が詞に從うて、假りに夫婦にナ、ソレ、なつた方がよからうぞや。
　ト呑みこませる。
直助　エ、。
そで　うはべばかりの、そんなら夫婦。
伊右　それで互ひに
いは　力と便り
そで　とは云ふものゝ、これがマア
いは　諦められぬが女氣の

伊右　それも尤も。
直助　併しいつまで云つたとて
伊右　盡きぬ名殘と
いは　盡きせぬ縁。
そで　鴛鴦の衾にひきかへて
いは　心の劍羽。
直助　やがて本望。
　ト兩人ニツコリ思ひ入れ。この時、最前の、づぶ六、泥太出て
づぶ　人殺しめ。
泥太　さてこそてめえは
　ト兩人へかゝる。伊右衛門は拔討ちにづぶ六へ一刀浴びせる。直助は泥太の腕ねぢ上げ
伊右　敵討ちと婚禮の、門出の血祭り。
直助　假初めながら祝言の
伊右　これが即ち色直し。
そで　涙の杯。
いは　さん／＼くどい
直助　エ。
いは　くり言ながら

ト死骸へ思ひ入れ。

伊右　どうやら、斯うやら

直助　ト両人顔見合せ、ニツコリと舌を出す。お岩、お袖は

死骸へ取りつく。

いは　思へば果敢ない

そで　ト伊右衛門、直助、非人を見事に投げる。お岩、お袖

は手を合せて拜む。双方よろしく顔見合せ

ハア、。

ト泣き落す。伊右衛門直助は、指先にて「ヨイ〳〵ヨイ」と〆める思ひ入れ。これをキザミにて、

ひやうし幕

二幕目

雑司ヶ谷四ッ谷町の場

伊藤喜兵衛内の場

役名――民谷伊右衛門。秋山長兵衛。關口官藏。中間、伴助。伊藤喜兵衛。同娘、お弓。同孫娘、お梅。同乳母、お槇。按摩、宅悦。小平父、佛孫兵衛。利倉屋茂助。小佛小平。伊右衛門妻、お岩。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面のれん口、下手に杉戸の押入れ、よき所に床の間、上の方障子、内に蚊帳吊つてあり、六枚屏風にて、いつもの所に門口、一體に造作こはし家作、雑司ヶ谷町、民谷伊右衛門浪人住居の體、四つ竹節の合ひ方にて幕明く。ト爰に伊右衛門、浪人の形にて、仕入れ提灯を貼つてゐる。下の方に孫兵衛、木綿やつし、老けたる拵らへにて、うづくまつてゐるを、按摩宅悦、執成してゐる體よろしくあつて

宅悦　モシ〳〵、伊右衛門さま、左樣ではござりませうが、そこが御料簡でござります。

孫兵　どのやうにもお詫び申しまするほどに、いま一兩日の所を

伊右　イヤ〳〵、待つ事はならぬ〳〵。いはゞあの小平めは、取り逃げ、駈落ち。捕へ次第身共が手討ちにせねば腹が癒えぬわえ。此やうな賃仕事いたし居るも、浪人暮らしの、こりや慰みと申すものぢや。御主人が榮えてゐるれば、鹽冶の家中、民谷伊右衛門、キッと致した侍ひぢやぞ。なんと心得て居るのぢや。返答次第で、年寄り

天保二年八月市村座上演

三世尾上菊五郎のお岩　二世關三十郎の伊右衛門

とは云はさぬぞよ。
ト細工を仕かけて立ちかゝる。
孫兵 ヘイ〳〵、御尤もでござります〳〵。どのやうに仰しやりましても、此方に一言の申しやうもござりませぬ。小平めが不届き、只今も仰しやります、取り逃げ致した代物は、マア何々でござります。
伊右 何と申して、おのれらが存じた品ではないワ。この民谷家に先祖より持ち傳へ居るソウキセイと申す唐薬。このりや外には少ない薬種、腰膝ぬけたる難病にも、忽ち眼前の不思議、浪人の身の不自由ながらも、外手さへ渡さぬ品。それを盗んで駈落ちひろぎ、コレ
ト粗末な脇差を出し
このかた〳〵丸を忘れてうせた。彼奴が雑物といふはこればかりだ。近所の案も氣の毒がつて、今朝早々、小平めが行くへの詮議。おれも常なら駈け出すが、何をいふも折悪う、女房の初産ゆゑ、人手が欲しさ、雇つた小平め、却つて主に手を煩らはせる。思へば〳〵腹の立つ。捕へ次第に、左様心得うせ居らうぞ。
ト叱りつける。孫兵衛思ひ入れ。
宅悦 御尤もでござります〳〵。按摩とりのわしが口入れで、雇ひに抱へた小平が駈落ち。折悪いお内儀の初産が、血が納まらないで後の御病氣。その中での駈落ち。誠にわしが旦那へ云ひ譯がござらぬ。親仁どの、こりやマア貴様は、何と思はつしやる。
孫兵 イヤモウ、何と申してようござりませうやら。併し常から私しが悴ながらも、正直者の役立たず、殊に取り逃げ駈落ちの、持つて参つたその品は、あなた様の御先祖から、お家に傳はるその薬種。ア、、何とも以て。
ト考へる。
宅悦 錢金は取り逃げの當り前。薬を持つて駈落ちは
孫兵 そんならもしや、古主の御病氣、あなたへ用ゆる心から、そのお薬を
伊右 どうしたと。
孫兵 ヘイ〳〵、憎い奴でござりまする。
伊右 コレ親仁、いま申したソウキセイは、僅かな物と思はうが、世間に稀れなる代物ゆゑ、薬種問屋へ持つて行つても、十兩や二十兩には直なるワ。先祖よりの添へ書、お醫者方の鑑定もある、相違ない代物だ。併しそれほど願ふ事なら、其方に免じて、一兩日の日延は致しくれう。その内に行くへ知れねば、薬種の代り、代金を持参いた

して、その上に濟ましてくれうぞ。左樣心得、歸れ〳〵。
孫兵　ハイ〳〵、それは有り難うござりまする　只今から
キッと尋ね出しまして、その上お詫びを申しませう。こ
れはお前、いかい苦勞をかけまする。
宅悅　イヤモウどうも、迷惑ながら掛り合ひ、誠に人の世
話は、爰が怖いて。
　トこの間に孫兵衞、草鞋を穿き、身拵らへする。
伊右　併し彼奴が宅は、どの邊であつたな。
宅悅　エヽ、深川の寺町邊でござりますれば、誠に遠方で
ござりまする。……歸りがけでも氣を附けて、尋ねなが
ら行かつしやいよ。
孫兵　イヤモウ、その心懸けでござりまする。左樣なら旦
那樣、お暇申しまする。
伊右　一兩日にキッと詮議して參れ。さもないと、われも
その分では差置かぬぞ。
孫兵　ハイ〳〵、畏まりました。宅悅さま、御厄介にござ
りまする。
宅悅　氣を附けてござれよ。
孫兵　ハイ〳〵。
　ト門口へ出て、ちよつと考へ

常から正直な小平め、取り逃げしをるとは、誠にこれが
子は三界の首枷、とはいふものゝ、藥とあれば、テッキ
りお主の
　ト思ひ入れ。
宅悅　まだござらぬか。
孫兵　ハイ、おやかましうござりました。
　ト唄になり、孫兵衞、菅笠を持ち、思案しながら向う
へ入る。
宅悅　さう云つてもあの親仁は、氣が氣ではあるまい
　トこの時蚊帳の中にて手をおつ音する。
ハイ〳〵、お藥かな。
伊右　氣を附けて下さいよ。
宅悅　畏まりました。
　ト屛風の中へ入る。伊右衞門思ひ入れあつて
伊右　この無けなしのその中へ、餓鬼まで產むとは氣のき
かねえ。これだから素人を女房に持つと、こんな時に亭
主の難儀だ。
　ト小言を云ひながら又仕事にかゝる。宅悅出て來て
宅悅　サア〳〵、藥だ〳〵。溫めてあげませう。
　ト七輪へ土瓶をかけて煽ぐ。

伊右　お岩の薬か、生れ子の薬か。

宅悦　イエ／＼、お岩さまのでござりまする。あの子はグッとも仰しやらぬ、鷹揚なお子様だ。誠にお前によう似て爭はれぬものでござりまする。

伊右　ナニ、おれに似てゐるか。

宅悦　左様でござりまする。

伊右　親に似たなら、定めし目玉が思ひやられる。

宅悦　ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。角兵衛獅子の合ひ方になり、向うより秋山長兵衛、さんすゐなる形、大小にて走り出て來り、門口より

長兵　伊右衛門どの、お宅か／＼。小平めを見附けて來た小平めを見附けて來た。

伊右　これは秋山氏、見當りましたか。

長兵　左様／＼。先づ心當りは下町邊と存じつき、わしの身寄りが築地にあるゆゑ、あの邊まで參り、新堀通りにかゝる道にて、見當りました。なんでも彼奴は、深川邊へ參ると見えました。

伊右　深川は彼奴が親の內でござる。今まで親仁も呼び附けて置きました。

長兵　オヽ、左様か。イヤ、何よりは貴殿が苦勞にさしつた、ソレ、持つて逃げた薬は、これでござらう。

ト木綿の小風呂敷に包みし薬包みを渡す。

伊右　これは忝ない。誠にこれが返れば安堵します。して小平めは

長兵　アレ／＼、あそこへ官藏どのが引ッ張つて參つた。

トまた角兵衛獅子の鳴り物になり、向うより官藏、浪人、件の形。伴助、中間にて、小平をグル／＼巻きに縛り、髪も亂れ、着類も破れし體なるを、二人して捨ぜりふにて手荒く引摺り來る。

小平　ハイ／＼、御免なされませ／＼。

官藏　御免といつて濟むものか。

伴助　うぬア太い奴だなア。

ト此やうなセリフ云ひながら舞臺に連れてくる。

兩人　サア、入りやアがれ。

ト內へ引摺り込む。

伊右　これは官藏どの、御苦勞千萬。秋山氏に様子を承つてござる。何かと忝なう存する。オヽ、伴助か、大儀であつたなア。

伴助　ヘイ／＼。モシ旦那、御安堵でござりませう。

官藏　コレ、伊右衞門どの、身共なぞが出ますると、直に斯樣ぢやて。懷中に後の一藥を持つてゐましたが、誠に見掛けに依らぬ太い奴でござる。

宅悦　コレ／＼、てめえゆゑにナ、おれまでが難儀をするワ。コレ、今まで親仁を呼び附けて置いたが、マア／＼てめえ、どういふ心になつたのだ。

　ト　これにて小平、やう／＼顏を上げ

小平　口入れして下された、お前にまでも苦勞をかけまする。フトした出來心。左樣なら、親仁も參つて謝りましたか。ア、氣の毒や、さぞ案じませう。申し、旦那樣、持つて走りましたお藥も、長兵衞さまがお取上げなされました。ソウ／＼、外に何も取りました品はござりませぬ。どうぞ御勘辨の上、穩便にお願ひ申しまする。

　ト　思ひ入れ。

伊右　ナニ、穩便に致してくれろとか。イヤ、此奴不屆きな事を吐かすな。おのれが取り逃げ駈落ちを、主のおれがナニ穩便に致すものか。誠に此奴、呆れる程な太い奴だ。

官藏　左樣々々。殊に常から此奴が申すを聞けば、此奴が古主は鹽冶の家中、おてまへが朋輩、小汐田又之丞が小者との事。親仁は勿論、女房子までござるとの事、誠に人は見かけによらぬものでござる。

伴助　左樣でござりまする。聞けば此奴の內に、その又之丞どのとやらが、居候ふにゐるとの事。

伊右　何といふ、同家中であつた又之丞が、こいつ小者か。ヤイ小平め、おのれ、いよ／＼左樣か。

小平　ハイ／＼、それに違ひはござりませぬ。私しが親元は、又之丞さまの御家來。御恩を受けしお主樣は御浪人の上、この間は御難澁。それに附き私しが雇ひ奉公、女房忰親仁まで、皆それ／＼に賃仕事やら商ひやら、貧な中へ主人の御病氣。その御用にも立たうと存じたゆゑ、あのお藥。全く惡氣では致しませぬ。主人の爲と忠義の盗み。捕へられたは誠に天命。旦那樣、どうぞお助けなされて下さりませ／＼。

　ト　いろ／＼に詫びるを聞いて

伊右　すりや何か、われが古主の又之丞が病氣につき、おれが家に持ち傳へた一藥を盗み取れと、又之丞がわれに頼んだのか。

小平　イエ／＼、毫頭主人は存じませねど、こりや私しが出來心で

伊右　出來心であらうが、忠義であらうが、人の物を盜まば盜人。忠義で致す泥坊は、命を助けるといふ天下の掟がある。たはけ面め。一葉も取り返し、取り替への金子さへ返せば助けてやらう。その代り、おのれが指を一本づゝ折つてしまふワ。

長兵　これはよい慰みでござらう。然らば十本の指を、殘らず折つて見ませうか。

宮藏　金の代りに指十本。イヤハヤ脆いものでござるな。

伴助　私しも稽古の爲に、折つて見ませう。

長兵　サア／＼。手傳へ／＼。

ト皆々小平に立ちかゝる。宅悦、捨ぜりふにて留める。小平思ひ入れ。

小平　ア、モシ／＼、この上指を折られましては、手が不自由となり、お主や親を過す事が出來ませぬ。

三人　それをおい等が知るものか。

小平　お慈悲でござりまする。どうぞこの儀は

長兵　エ、やかましい。猿轡でもはめさつしやい。

三人　合點だ／＼。

ト三人立ちかゝり、伴助、手拭を取つて、小平の口をゆはへて

伊助　これでようござりまする。

長兵　まづ手始めに鬢の毛を拔け。

宮藏　こいつはよからう。

ト立ちかゝつて、小平が小鬢の毛を拔き、莨を吹きかけ、指を折り、苛なむ。唄になり、向うよりお槇、前幕の乳母にて、供の中間、隅田川の酒樽と、重詰め物を持ち出て來り、門口へ來て

まき　ハイ、お頼み申しませう／＼。

三人　ア、誰れか來たぞ／＼。

伊右　客とあればその下郎、押入れへなりとぶち込め。

三人　合點だ／＼。うしやアがれ。

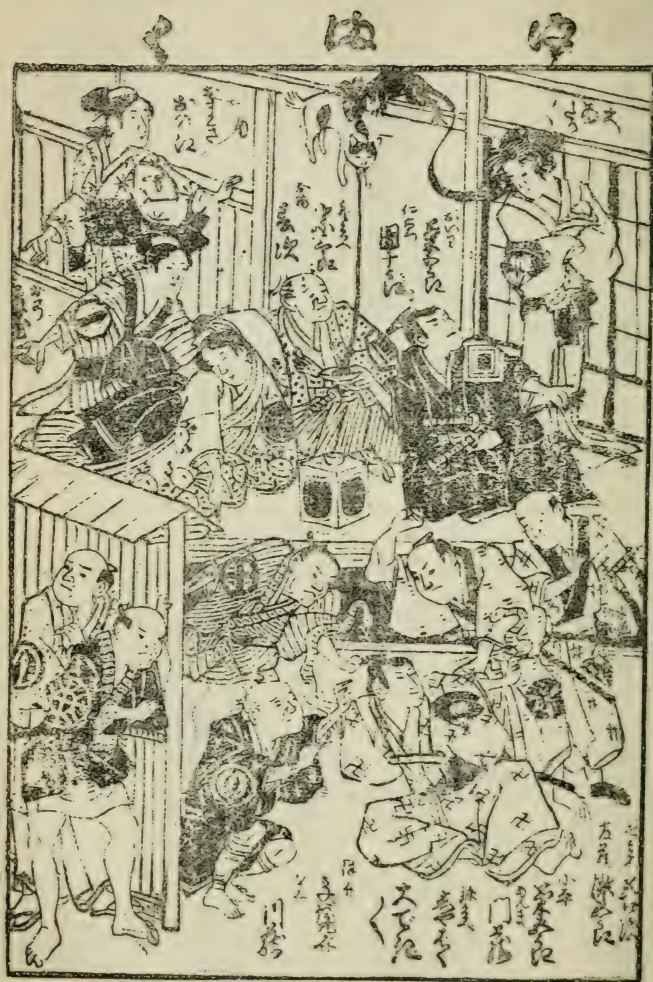
ト杉戸を明け、小平を打込み、戸をさす。此うち宅悦出迎ひ

宅悦　ハイ、どれからお出でなされました。

まき　ハイ、御隣家の伊藤から參りました。お取次ぎの儀を

ト云ふを長兵衛聞きつけ

長兵　ア、伊藤からのお使ひか。……オ、お乳母のお槇どのか。サア／＼此方へ、入りやれ／＼。

まき　ハイ／＼。左樣なら御免なされませ。

ト内へ入る。

長兵　伊右衛門どの、喜兵衛どのから使ひが來ました。

伊右　ア、左樣か。これへ／＼。誠に御近所にあつて、御疎遠仕る。御主人にもお變りはないかな。

まき　有り難うござります。主人喜兵衛はじめ。後家弓こと、よろしうお言傳を申しまする。承りますれば、御内室お岩さまが、お產ありしとおめでたきお噂。この品は、僅りお麁末にはござりますれど、お目にかけまする。また御酒とお煮染は、お夜伽遊ばしまするお方へ、お慰みの爲お目にかけますると、遣はしましてござりまする。よろしうお頼み申しまする。

ト重詰めに煮染め。酒樽。三重の組重へ、切り餅、白味噌、鰹節の類の詰めたるを差出す。

伊右　これは／＼、いつもながら御丁寧に、誠に痛み入りまする。忝なう存じまする。お入れ物は此方より持たせ遣はしませう。よろしく申して下され。

まき　畏りました。……また一品の粉藥、これは即ち手前隱居の家傳とござりまして、調合いたされまする血の道の妙藥、お岩さまへお上げなされても苦しうござりませぬと、わざ／＼遣はしましてござりまする。

ト懐中より粉藥の包みを出す。伊右衛門取つて

伊右　これはお心附かれ、忝なう存ずる。早速に用ひませう。コレ、てめえ、白湯を仕掛けてくれろ。

作助　畏りました。

ト別の土瓶へ水を入れてかける。この時、屏風の内にて、赤兒頻りに泣く。

まき　オヽ、やゝ樣が、いかうおむづかり遊ばしまする。して、御男子でござりまするか。

伊右　左樣々々。

まき　それはおめでたうござりまする。

ト此うち矢張り、兒はせわつて泣く。

これはしたり、いかうおむづかり遊ばしまする。大方虫がせゝりますのかも知れませぬ。私しが見てあげませう。

伊右　それは忝ない。何分よろしく

まき　ハイ／＼。

ト立ちあがり

コレ、こなたは先へ歸つて、申し上げてくりや。わしは只今歸りまするとお上へ申して下され。

中間　畏まりました。左樣ならご免遊ばしませう。

ト唄になり、お樽、風呂敷包みを持つて屏風の中へ入る

る。長兵衛、官藏、切溜めを出し、樽を引寄せ

長兵　伊右衛門どの、始めさつせえ／＼。

伊右　ハテ、せわしない手合ひだ。

ト云ひながら、打寄つて酒を始める。角兵衛獅子になり、向うより茂助、大風呂敷を肩へ掛け、質屋にて出て來り、内へズツとはいり

茂助　伊右衛門どの、お留守かな。

伊右　イヤ、宿に居る。

茂助　これは珍らしうお宿ぢやな。此方からお宅かと云ふと、留守と云はつしやるから、お留守かと云つたら、お宿とは珍らしい儀でござりまする。モシ、伊右衛門さま、この間からお貸し申しました蚊帳蒲團に、掻巻まで、代りも來ぬのに上げましたが、あの損料の元利〆め高二分二朱、サ、勘定なさるとも、品を返さつしやるとも、方附けて下さりませ。又その外に、去年中から不義理なあれなりの五兩の一件、サア、片附けてもらひませう。さもないと今日は、この地面のお屋敷へ、斷つて出ねばなりませぬ。サア、どうでござります／＼。

ト せき立てる。伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　これはしたり。この間は取込みがあるゆゑ、挨拶も延引いたすが、いづれ近々のうちに

茂助　イエ／＼、待ちませぬ／＼。左樣なら是非がない。御地面のお屋敷へ、お斷り申して

ト行かうとする。皆々とめて

長兵　コレサ、おいらが請合つたからは、あの一件は

茂助　イエ／＼、お前樣方のお請合ひ、これまで一つも解りませぬ。お構ひなされますな／＼。

ト行かうとするを、伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　利倉屋待ちやれ。

茂助　エ。

伊右　五兩の勘定、致してやらう。

茂助　エ、左樣ならアノ五兩を……サア、受取りませう。

伊右　イヤ、その金は無いが、その代りにはこれを渡さう

ト 藥包みに、鑑定書、殘らず附けて渡す。

茂助　モシ、これは何やら藥の包み。ア、これが、五兩の抵當になりまするか。

伊右　その唐藥は民谷の先祖、持ち傳へたるソウキセイ。賣り買ひなれば二十兩、それ以上にもなる藥種、相違のないはその添へ書、さる奥醫者の鑑定もある。不請であらうが利倉屋茂助、五兩の代りに預かつてくりやれ。

ト茂助、薬包みをよく〳〵見て

茂助　成る程、お醫者方の御判の据つたこの唐薬。さう仰しやれば違ひもあるまい。幸ひ私しが下質を送る、深川の金子屋、亭主は以前薬種屋あがり、それへ見せたその上にて

伊右　僅か五兩だ。預かつて置きやれ。

茂助　そんならこれはマアこれで

ト懐中し

これからは入れ替への代物、蚊帳と蒲團を持つて行きます。御免なされませ。

ト立ちかゝる。

伊右　これはしたり、まだその外に借り着の品を

茂助　あの二分三朱の勘定が濟まぬと、棚卸しが片附きませぬ。御免なされませ。

ト屏風へかゝるところへ、お槇出て來り、茂助をとめる。

まき　コレ、町人どの、產婦のお居間へ不躾な　開けば、何やら金子の事……コレ、それで大方、ナ、此まゝ置いて

ト思ひ入れし、紙に包みし小判壹兩、ツッと茂助に握らせ、茂助、思ひ入れあつて、

茂助　ヤア、こりや小判

まき　サ、產所へ聞えて徒ない事。それではこなさん

茂助　アイ、云ひ分もござりませぬ。誠にこれは、大きにお世話でござります。

伊右　何やらかやら、度々のお心附け。お禮を申さうやうもござらぬ仕合せ。

まき　何しに左様な。御心配御無用に遊ばしませ。私しはもう、お暇仕りませう

ト門口へ行く。

茂助　左様なら私しも、道までお供いたしませう。伊右衞門さま、唐薬の儀は、下質へ見せた上にて、その御返事を

伊右　何分預かつてもらはう……これはお乳母どの、よろしう頼みます。大儀でござつた。

まき　ハイ〳〵。あなた方も御ゆるりと。サア、茂助さんとやら

茂助　ドリヤ、お暇申しませうか。

ト連になり、お槇に茂助附き、向うへ入る。皆々思ひ入れあつて

長兵　コレ〳〵、民谷氏、あゝマア伊藤の屋敷から、こな

たの所へ叮嚀に、折々の見舞ひ。一度は禮に行つたとい
つて
伊右　サア、さう思つても、あの屋敷へは、どうも身共は
世間の手前で。
官藏　そりや又なんで。
伊右　ハテ、伊藤喜兵衛は高野の家中、今は町家のあの屋
敷。この伊右衛門は鹽冶の浪人。それゆゑどうも肩身が
すぼまつて
官藏　成る程、そこもあるわえ。
トこの時、上手の屋臺にて、赤兒泣く。
伊右　よく泣く餓鬼だ。蚤でもくふのか。
ト障子を明ける。此うちに木綿蒲團を敷き、お岩、産
後の體、襟に苧を引かけ、赤兒を抱き、いぶりつける。
此うち合ひ方。伊右衛門見て
お岩、今日は心よいか、どうだ。
長官　見舞ひに來ました。
トお岩思ひ入れあつて
いは　有り難うござりまする。産後と申し、この間の不順
な陽氣。その所爲かして、一倍氣持ちが
ト思ひ入れ。此うち、赤兒の上に、結構なる小袖かけ
あるを、伊右衛門見て
伊右　コレお岩、その小袖は見馴れぬ着付、そりやアおぬ
しが
いは　イエ／＼、こりや今、喜兵衛さまのお宅から、後家
御樣が内證で、わたしが方へ心附けて下さりました。お
前、禮に行て下さんせ。
伊右　ア、さうか。あの內からは、氣の毒なほど物を贈る
が、どうもおれは氣が知れぬて。
長兵　それだによつて、度々身共が申すは爰サ。以前は
以前、今は浪人民谷伊右衛門、敵同士の義理を捨て、あ
の屋敷へ行くがよからう。
いは　仰しやる通り隣家の事、どうぞお禮に行て下さんせ。
伊右　イカサマ、お岩が云ふ通り……すりや、ちよつと行
かずばなるまいが、何をいふにも、おれ一人では
いは　お前その心なら、お二人を連れにして
長兵　さうサ／＼、おいら二人が
官藏　行つて進ぜう。
伊右　そんなら直くに、思ひ立つ日を吉日と、行きませう
行きませう
兩人　さうさつしやい／＼。

大正十四年七月歌舞伎座上演

片岡市藏の宅悅　尾上梅幸のお岩

伴助　私しがお供を致しませう。
宅悦　お留守は私しが致しませう。ちよつとお禮にお出でなさるがようございます。
ト此うち伊右衛門、大小を差し、古き羽織を着て、支度する事あつて
伊右　イヤ、行きは行かうが、今日はまだ飯を炊かずに置いた。コレ、てめえ、飯を炊いてくれめえか。
宅悦　ハイ〳〵、何でも致しませう。
伊右　併し、あの押入れの奴を逃がすなよ。コレ、これが彼奴の扶持方だ。
ト一本薬を見せて
ほんに、この粉薬は、いま伊藤の屋敷から、お岩が所へ寄越さしつた血の道の薬。これを服むがよい。家傳だといふ事だや。
ト薬を渡す。
いは　左様でござりまするか。今お乳母どのが、その噂を致されました。爰へ下さりませ。白湯が沸いたら下さりませうが、モシ、お前は早う戻つて下さりませえ。
伊右　直に歸るわサ。サア行きませう。コレ、飯を頼むぞよ。

宅悦　心得ました。
伊右　行くぞよ、お岩
いは　アイ、必らず早う
伊右　何をしてゐるものか……サア、行きませう。
ト唄、時の鐘になり、伊右衛門に三人附き、向うへ入る。宅悦、奥へ入る。あと合ひ方、捨て鐘。お岩あとを見送り、思ひ入れあつて
いは　常から邪慳な伊右衛門どの、男の子を産んだというて、さして喜ぶ様子もなう、何ぞといふと穀つぶし、足手まとひな餓鬼産んでと、朝夕にあの悪口、それを耳にもかければこそ、針の蓆のこの内に……ひよんな男に添ひとげて、辛抱するも父さんの、敵を討つてもらひたさ。
ト思ひ入れ。この時、頭に差したる鼈甲の誂らへの櫛落ちる。取上げ見て
こりやコレ、母様のお形見の、三光のこの差し櫛。物好きなされし菊重ね、胸に工風の銀細工。身貧な仲でも離さぬは、どうで産後のこの病氣、とても命も危ふいゆゑ、わしが死んだら妹に、せめて形見と贈るのは、母の讓りのこの差し櫛。これより外に、この身に附いた
ト思ひ入れ。この時赤子頻りに泣くゆゑ、いぶりつけい

ぶりつけ、庵所を離れ、よき所へ來り、ヨロ〳〵として

ア、、また眩暈がする。血の道の所爲であらう。この粉藥、マア、これなと服んで

ト合ひ方。蟲の音。時の鐘、お岩、件の粉藥を茶碗へあけ、土瓶の白湯を茶碗につぎ、服む事あつて

これで少つとは心持も直らう。ドリヤ、大事の嬰兒を

ト抱き取らんとして、俄に病氣起りし體にて、苦痛の思ひ入れ、

ヤ、、今の藥を服むと頻りに、常より氣持が……ヤ、、こりや顏が熱氣して、一倍氣合ひが……ア、、苦しや苦しや。

ト思ひ入れ。宅悦、奥より何心なく出て來り

宅悦　モシ〳〵、お汁でも仕掛けませうかな。これはしたり、どうなされた〳〵。お前は、それ〳〵、顏色が變つて、どうやら樣子が。

いは　今の粉藥を服むと其まゝ……ア、、苦しや〳〵。

宅悦　ナニ粉藥をあがつて苦しいとは、藥違ひではないか。マア〳〵、風にあたつては惡い。サ、、此方へござつて

トいろ〳〵介抱する。赤兒頻りに泣く。お岩苦しむ。宅悦、あちこちしてゐる内、押入れの戸をやうやう明けて、小平出ようとするを見附け

ドッコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。

ト戸をたて、思ひ入れあつて

一方ふせげば又一方、二方三方、イヤ、とんだ留守を頼まれたわえ。

ト思ひ入れ。お岩苦しむ。駈けよつて介抱する。時の鐘にて、道具、鷹揚に廻る。

本舞臺、三間の間伊藤喜兵衛が宅、座敷の體。床の間、違ひ棚、よき所のれん。結構なる襖。下には生垣、枝折り門。よろしく飾りつけ、甚句の唄にて、道具とまる。

ト伊右衛門、上座に坐り、お弓、後家の役。お槇附き、銚子杯、鉢肴など取散らし、長兵衛、官藏、酒盛りの體。伴助、甚句を唄りゐる。二重舞臺よき所に喜兵衛、眼鏡をかけ、隱居の體にて、銀盤にて小判を洗ひ、箱にしまうてゐる。よろしく納まる。

伴助唄り、ころぶ。皆々笑ひになり

長兵　イヤ、どうでも伴助は越後產れゆゑ、甚句はきついものだ。

ゆみ　とてもの事に秋山さま、何ぞあなたのお隠し藝を、拝見いたしたうござりまする。

長兵　イヤ、それは迷惑、身共が藝と申しては、聲色ばかりでござるて。

喜兵　それは一興。聲色は誰れを遣はつしやる。

長兵　矢張り素地（坂東善次）の聲色サ。

官蔵　イヤ、貴公の素地も、あまり流行に遅れた。ちと外の者でもお遣ひなさい。

長兵　その外の者と申しては、然らば聲色のてんた／＼は、愛宕の下ではござらぬか。

官蔵　何を云はつしやる。

ト笑ひになる。奥より若黨、吸ひ物椀を三人用意して運ぶ

まき　お吸ひものが宜しうござりまする。あなた方へ上げませうか。

ゆみ　さうしてたも／＼。

トお槙、三人へ膳を据ゑる。伊右衛門、喜兵衛へ目をつけ

伊右　イヤ御隠居、あなたのそれに洗うておいでなさるは、目貫の類でござるかな。

喜兵　イヤ／＼、左様の品でござらぬ。これは親どもより貯へ罷り在る小判小粒でござるが、折々錆が出まするゆゑ、金銀を洗ひまするが、隠居の役でござるて。ハヽヽハヽヽ。

まき　サヽ、お麁末にはござりますれど、お吸ひ物にて御酒一献。

長兵　それは御馳走。時に伊右衛門どのへ膳が足りぬが、マア／＼これなと

ト手前の膳を据ゑようとする。

まき　イエ／＼、伊右衛門さまには、外に上げまするお吸ひ物がござりまする。マア／＼あなた方、お麁末ながら

三人　然らば御馳走に相成りませう。

ト銘々吸ひ物の蓋を取ると、中に小粒の金澤山入つてゐる。三人悔りして

長兵　このお吸ひ物は誠に珍物。

官蔵
伴助　イヤ、恐れ入りました。

ゆみ　常から願ふ伊右衛門さまを、御同道なされて下さりましたあなた方、どのやうに御馳走申しても、決してい

とひはござりませぬ。お心に叶ひましたら、槇や、お替
へ申して上げや。
三人　それは何より御馳走でござります。
ト云ひながら皆々袂へ入れる。
喜兵　何れも方へ御馳走は申せども、肝心の伊右衞門どの
へは、アヽ、何を馳走に
三人　その御馳走を、拜見いたしたうござるな。
まき　左樣御意なされまするなら、分けてあなたへ御馳走
に
ト あたりへ心遣ひして
お二人樣は、少しの間お席を
トこなし。兩人、呑みこみ
三人　心得ました。然らば此まゝ
ゆみ　お附き申して。
まき　サア、御案内仕りませう。
ト合ひ方になり、お槇先に、長兵衞、官藏、伴助附添
ひ奥へ入る。三人殘り、喜兵衞、洗つてゐたる小判を
手箱に載せ、伊右衞門の前へ差出し
喜兵　伊右衞門どの、不躾ながらこの品、御受納なされて
下されい。

伊右　見れば多くの金銀を、拙者が前へ差置いて、受納い
たせとお云やるは、何か仔細の
ト思ひ入れ。
ゆみ　その儀はわたしが、只今これにて
ト合ひ方をつてズッと立ち、お弓、奥より振り袖姿の
お梅の手を取り、よき所へ坐らせ、思ひ入れ。
これなる者は、病死いたしたわたしの連合ひ、又市どの
と二人が仲の、娘のお梅。
喜兵　これに居る身が娘の、お弓が嫁に儲けましたる孫の
お梅、どういふ縁か其許樣を、見染めましたが病の起
り。養生の爲淺草へ、同道なして又ぞろや
ゆみ　思はずお見受け申してより、この子の喜び。サア、
常々思ふ心のたけを
ト云はれて、お梅、恥かしき思ひ入れあつて
うめ　母さんの其やうに、心を附けておいつくしみ。何を
お隱し申しませう。いつぞやより御近所へ、お宅替へな
されし民谷さま、どうした事やらお目もじの、その時フ
ツと恥かしい、女心の一筋に、思ひ詰めたるこの身の
煩らひ、明暮れ思ふが戀病みの
ゆみ　枕につかねど顔形、日にまし痩せるその樣子。やう

やう聞へばあなたの事、忘れかねたる娘氣の

うめ　奧樣のあるお前樣、思ひ切らうと思うても、因果な事に忘れかね、せめてあなたの召使ひ、水仕奉公いたしても、わたしは大事ござりませぬ。どうぞお側に、お使ひなされて下さりませ。

ト恥かしき思ひ入れ。

喜兵　サア、お聞きの通り。ならう事なら聟に取り、梅が願ひを叶へてやりたさ。

ゆみ　あれ程までに思ひ染めし娘が心根。町人の身で暮らしなば、お岩さまの手廻りにて、お使ひなされて下さるか、但しあなたの妻にも、遣はしたう思うても、武士の家にて世間の聞え。殊に連合ひ病死の上は、位牌の手前、どうも左樣な

トこれにて伊右衞門、こなしあつて

伊右　委細の樣子を承り、申しやうなき娘御の心根。いはゞ拙者も民谷家へ養子の入り聟、義理のある女房お岩、これぱつかりは、氣の毒ながら

喜兵　然らば孫めが、斯程の願ひも

ゆみ　叶ひませぬも皆御尤も。この上は、わが身はあなたの事を

うめ　アイ、思ひ切ります。その證據は、爰でわたしは

ト帶の間より剃刀を出して

南無阿彌陀佛。

ト自害せんとする。皆々とめて

喜兵　こりや尤もぢや。其方が願ひが

ゆみ　叶はぬ時はと引きつめし、娘心も武士の胤。可哀や其方の願ひもこれでは

ト思ひ入れ。この時長兵衞出て來り、伊右衞門に向ひ

長兵　コレ、伊右衞門どの、こなたは大きな料簡違ひ、どうで死にかゝつてゐるあのお岩どの、遲いか早いか死んだ跡では、女房を持つは今の間だ。お二人の氣休めに、こなたはいつそ巢を替へる、その相談が、よさゝうなものだぞよ。

伊右　イヤ〳〵、この上有德になるとても、お岩を捨てゝは世間の手前、これぱつかりは出來ますまい。

トこれを聞き、喜兵衞思ひ入れあつて、伊右衞門の前へ坐り

喜兵　サア、伊右衞門どの、殺して下され、この喜兵衞めを、殺して下され〳〵。

伊右　お年寄りの突き詰めた樣子、この相談が調はねば、

なぜ又殺せと仰せらるゝな。

喜兵　サヽ、そこでござる。孫めが事を不便に存じ、聟に取らうも女房持ち、ア、どうがなと工風を凝らし、お弓にも知らさずに、身が覺えたる面體崩るゝ祕法の毒藥、お岩どのに服ませなば、忽ち相好變るゆゑ、その時こそは、こなたも女房に愛想を盡かし、別れ引きにもなつたなら、後へ持たせるこの孫と、惡い心が出たゆゑに、口外せねど、先刻こなたへ血の道の藥と、內へ持たせて遣はしたるは、面體變る大毒藥　併し命に別條なし。これかりは取得にして、よもや罪にはなるまいと、お岩が所へやつたるが、事叶はねば身の懺悔、それだによつて殺して下され。

ゆみ　すりや其やうな恐ろしい、企みの元もこの子ゆゑ

うめ　逆罰あたるはそりや眼前。

喜兵　こなたが得心ある時は、家の有り金殘らずこなたへ

長兵　その据ゑ膳を食はぬのは、こなたの料簡違ひといふもの。

喜兵　サヽ、腹が立つなら殺して下され。

ゆみ　ぢやと申しても、あなたを爰で

うめ　いつそわたしが

ト死なうとするを、お弓とめる。

長兵　承知はねえのか。

伊右　サアそれは

ゆみ　死ぬるこの子を、どうぞ助けて

伊右　ぢやと申して

喜兵　然らば身共を

伊右　サアそれは

兩人　サア

伊右　サア、サア／＼／＼

喜兵　積しまながら

ゆみ　御返事を。

ト思ひ入れ。伊右衞門、こなしあつて

伊右　承知仕りました。お岩を去つても、娘御を申し請けう。

喜兵　すりや御得心下されて

ゆみ　さすればこの子も

長兵　願ひが叶うて。

伊右　その代りには拙者もお願ひ。

喜兵　して其許の願ひとは

伊右　高野の屋敷へ推擧の程を

喜兵　承知いたした。お頼みなうても一家となれば
伊右　御息女もらへば聟舅、民谷の家名も、いつしか伊藤
の
ゆみ　思ひ立つ日も今宵は吉日。
喜兵　内祝言も直ぐに今晩。承知でござるか。
伊右　如何にも承知サ。
長兵　まづ何よりはこれにて杯。仲人はこの長兵衛。コレ、
お梅どの、へゝ、あやかり者め。
うめ　今更どうやら。
ゆみ　流石初心な。
喜兵　そりや、聟どのぢやぞ。
ト お梅を突きやる。伊右衛門へ倒れかゝり、恥かしき
こなし。伊右衛門、[illegible]を變へて
伊右　女房でござる。變せぬ金打。
ト 小柄を取つて金打の體。兩人見て
喜ゆ　ニヽ、忝ない。
ト 手を合せる。時の鐘、唄になり、この道具鷹揚に廻
る。
本舞臺、元の伊右衛門の世話場に戻る。爰にお岩、

面體恐ろしき樣子に變り、苦しみ倒れゐる。宅悦、
介抱してゐる體にて、道具とまる。
宅悦　イヤ、誠にとんだ留守を頼まれた。モシ、お岩さま
どうでござります。氣持はようござりますか。
いは　アヽ、何ぢやゝら、喜兵衛さまより下された血の道
の藥を嚥んで、俄に顔が發熱して……アヽ、苦しうなつ
たわいの。
宅悦　イヤモウ、大きに案じました。マア／＼よいさうで、
落ち附きました……これはしたり、もう日暮れたさうな。
灯をつけずばなるまい。ドレ／＼
ト 行燈を出し、灯をつけて
併し、今の藥で、どうして俄にあの苦痛を
ト 云ひさま行燈の灯にて、お岩が顔の變りしを見て、
恟りして
ヤア、お前は顔が
いは　顔がどうぞしたかいの。
宅悦　サア、少つとのうちに、マア其やうに
ト 云はうとして、思ひ入れ。
サア、其やうに癒るとは、大方そこが、家傳の良藥でご
ざりませう。

いは　わしも最前は俄の熱氣。どうなる事と思うたが、併し、苦痛も、少しは癒つたわいの
宅悦　イヤ、お仕合せでござります。イヤ、灯はついたが、油がなかつた。私しが、ちよつと買つて參りませう。
いは　さうして下され。この樣子では叶はぬ。コレ、爰にお錢が
　ト　あたりより小錢を五十ばかり通したのを探り取り
これを持つて、早う賴みますぞえ。
宅悦　畏まりました。
　ト　油注ぎを取つて
まだ〳〵、歸つて來るまではござりませうよ。
いは　早う賴みますぞや。
宅悦　ハイ〳〵。
　ト　門口へ出て、身慄ひして
ハテ、奇體な事だわえ。先刻までは何ともなくつて、ちつとのうち苦しむと思つたら、あれ程までも
　ト　これを聞きつけ
いは　まだ行かぬかいの。
宅悦　ハイ、鼻緒が切れましたから
　ト　時の鐘、合ひ方にて、宅悅、向うへ入る。お岩殘り

いは　何ぢややら、伊藤さまから下されたお藥は、血の道にはよいやうなれど、顏の熱氣は今に癒らず、惡い御酒なとたべた氣持ぢや。
　ト　この時赤兒泣く。
ア、、又せわるかいの。添へ乳してやりませう。
　ト　赤兒に添へ乳しながら
サア、今に父さんがお歸りであらう。爰では蚊がさしまする。マア〳〵蚊帳へ入つて、添へ乳してやりませう。
　ト　上の方蚊帳の内へ入り、赤兒を叩きつけてゐる。唄、時の鐘になり、伊右衞門、腕組み、思案の體にて出て來り、花道にて
伊右　今の喜兵衞が話しでは、命に別條ない代り、相好變る毒藥と申したが、もしや女房があの跡で　物は試しだ。
　ト　門口へ來り、ズッと入つて思ひ入れ。お岩、蚊帳の中より
いは　油買うて來て下されたか。
　ト　蚊帳の中から聲をかける。
伊右　イヤ、油は買ひに行かない。おれだ。
いは　オ、、伊右衞門どの、お歸りでござんすか。

伊右　どうだ、先刻貰つた藥は服んだか。血の道はどうだ
いは　アイ、血の道にはよいやうなれば、不思議な事には、服むと其まゝ發熱して、その苦しさといふものは、分けても面體彼此の痛み。
伊右　熱氣が強くて、その顔が
いは　痺れるやうに、覺えたわいなア。
　ト云ひながら、蚊帳より出て來る。伊右衛門見て愕り
伊右　ヤア、變つたワ〳〵。ちつとのうちに其やうに。ハテ、爭はれぬ。
いは　何が變りましたぞいなア。
伊右　サア、變つたと云つたは、オヽ、それ〳〵、おれが喜兵衛どのへ行つて來たうちに、てめえは大きに顔色がよくなつたが、それも先刻の藥の加減でがなあらう。顔が大きに直つた。
　ト呆れし思ひ入れ。
いは　わたしの顔附きが、よいか悪いか知らねども、氣持は矢ツ張り同じ事。どうで死ぬでござんせう。死ぬる命は惜しまねど、生れたあの子が一しほ不便で、わたしや迷ふでござんせう。モシ、こちの人、お前、わたしが死んだなら、よもや當分

伊右　持つて見せるの。
いは　エヽ。
伊右　女房ならば直ぐに持つ。しかも立派な女房を、おらア持つ氣だ。持つたらどうする。世間にいくらも手本があるわえ。
　トすつけり云ふ。お岩、呆れし思ひ入れ。
いは　コレ、伊右衛門どの、常からお前は、情を知らぬ邪慳な生れ。さういふお方を合點で、添うてゐるのも
伊右　親仁の敵討を頼む氣か。コレ、否だ。今どき親の敵も、あんまり古風だ。よしにしやれ。おれは否だ。助太刀しようと受合つたが、否になつた。
いは　エヽ、そんなら今更、アノお前は
伊右　オヽ、否になつた。否ならどうする。それで氣に入らずば、この内を出て行けよ。外の亭主を持つて、助太刀をしてもらふがいゝ。こればかりは否だの。
いは　エヽ、今更否だと云はんしても、外へ頼む當て便りもなき女の手一つ。さすれば願ひも叶はぬ道理。さりながら、わたしに爰を出て行けなら、成る程出ても參りませうが、後でお前は繼母に、あの子をかける心かいの。
伊右　コレ〳〵、繼母にかけるが否なら、あの餓鬼も連れ

て行け。まだ水子のあの餓鬼と、新規に入れる女房と、一口に云へるものかえ。
いは　すりや、こなさんは女には、實の我が子も
伊右　見替へねえでどうするものだ。われもおれを見替へたから、おれもわれを見替へるのだ。
いは　エ、、なんでわたしがアノお前を、誰れに見替へましたぞいなア
伊右　サテ、その見替へた男はアノ
いは　誰れでござんす〱。サア、聞きませう。云はしやんせ。
伊右　オ、、それ〱、あの按摩坊主に見替へた。わりやア彼奴と、間男をしてゐるな〱。
いは　エ、、何を云はしやんす。如何にわたしのやうな者おやというて、あのやうな男と、不義間男をしやうぞいなア。
伊右　わりやアしまいが、おれがノ、外で色事をしたらどうする。
いは　サア、そりや男の名聞とやら、どのやうな事さんせうが、願うて置いた敵討、力となつて下さらば、なんの、どのやうな事があつても

伊右　構はぬといふ代りには、敵討を頼むのか。品によつたら、餓鬼まで出來た女房だから、助けてもやらうが、知つての通り工面が悪い。コレ、何ぞ貸してくれろ。急にいる事がある。と云つて何も質草が
　トあたりを見廻して、落ちてある櫛を見て
コレ、これを借りよう。
　ト取り上げる手に縋り附き
いは　ア、、そりや母さんの形見の櫛、外へやつては
伊右　ならねえのか。コレ、有やうはナ、おれが色の女に、平常差す櫛がない。買つてくれと云ふから、これをやらうと思ふが、悪いか。
いは　こればツかりは、どうぞ免して下さんせ。
伊右　そんなら櫛を買ふだけの物を貸せ。まだその上にナ、おれも今夜は身の廻りがいるから、入替へ物でも工面せねばならぬ。何ぞ貸せ。サア、早く貸しやアがれ
　ト手荒く突き飛ばす。お岩、是非もないといふ思ひ入れ。
いは　何と云うても品は無し。いつそわたしが
　ト着る物を脱ぎ、下着になり
病氣ながらもお前の頼み。サア、これ持つて行かしやん

せ。
ト涙ながらに出す。伊右衛門取つて、よく〳〵見て
伊右　これぢやア足りねえ。もつと貸してくれろ。何も無えか……よし〳〵、あの蚊帳を持つて行かう。
ト駈け寄つて、吊つてある蚊帳を外し、持つて行かうとする。お岩、慴り縋り附き
いは　ア、モシ、この蚊帳がないとナ、あの子が夜一夜、蚊にせゝられて
ト取りつく。
伊右　蚊がくはゞ親の役だ、追つてやれサ。放せ〳〵。エエ、放しやアがれ。
ト手荒く引ッたくる。お岩、これに引かれ、タヂ〳〵として、蚊帳を離すとて、指の爪を剝がし、手先は血になり、撞となる。伊右衛門ふりかへり
それ見たか。エヽ、イケあたじけねえ。併し、これで足りればいゝが。
ト唄、時の鐘になり、伊右衛門セヽラ笑ひ、蚊帳と小袖を抱へ、悠々と向うへ入る。お岩やう〳〵起上がり
いは　コレ、伊右衛門どの、その蚊帳ばかりは
トあたりを見て
そんならもう行かしやんしたか。あの蚊帳ばかりはやるまいと、病みほうけても子が可哀さ。放さじものと取り縋り、手荒いばかりに指先の、爪は離れて此やうに。斯程邪慳なこなさんの、胤とはいへど、いとゞ不便に
ト思ひ入れ。赤児泣く。お岩、よろ〳〵しながら、あたりを尋ね、土火鉢を出し、蚊遣りを仕掛ける思ひ入れ。此うち、捨て鐘の合ひ方。向うより伊右衛門、件の品々を肩へ引ッかけ、宅悦の手を捕へて出て來り、花道にて
宅悦　モシ〳〵旦那、それはあんまりお情ない。さう致したらお岩さまと私しと、悪い浮名が
伊右　立てさせるのがおれが仕事だ。首尾よく致せば、コレ
ト囁く。
宅悦　エヽ、左様ならあなたは、今宵アノ内祝言を
伊右　コレ、口外するな。ソレ。
ト包み金を一分やる。
宅悦　エヽ、この金を下されて、アノ私しに
伊右　やり損ふとやらかすぞ。
ト刀の柄へ手を掛けて嚇す。宅悦、ブル〳〵して

宅悦　ア、、呑み込みました〳〵。
ト伊右衛門頷き、引返して入る。宅悦門口へ來り
お岩さま〳〵、さぞ待ち遠でござりませう。サ、、油々
ト行燈へつぎ、お岩の顔見ては、薄氣味の惡き思ひ入れ。お岩、蚊やりをあふぎながら
いは　オ、戻つてか。こなたの跡へ伊右衛門どのが戻つてござんして、吊つた蚊帳まで取り上げて
宅悦　ア、、又えて吉へやられましたか。ハテ、むごい心だ。……ア、、見ればお前は大分薄着に
いは　冷えては惡いといふ病氣、それを貸せと此やうに、剝いでしまうて
ト涙ながらにふさぐ思ひ入れ。
宅悦　剝いでござつたか。ア、、困つたものだ。お前もいかい御苦勞なさる。その苦勞をなさるより、いつそ亭主を持ちかへる、工面をなさるが
ト云ひながら、側へ寄つてお岩の手を取り
こりやアお前の手には、惡い筋がござります。一體コレコレこの筋は、女は貞女で苦勞の絶えぬ、これが筋ぢやて。そこでこの筋を切るがようござります。切るとは、その男の縁を切る事でござります。
ト云ひながら、お岩の手を取り、いろ〳〵嫌らしき身振りする。お岩、恟りして突き退け
いは　これはしたり、アタ滅相な。コレ、其方はマア武士の女房に、なんで其やうなみだら千萬。重ねて左樣な不行跡な事しやると、今度は免さぬぞよ。
ト強く云ふ。宅悦笑つて
宅悦　モシ、お前樣ばかり其やうに、眞實をお盡しなされても、あの伊右衛門さまは、遠から心が變つて居ります。それを知らずに貞女を立てると、跡で難儀をなされませうぞえ。それよりお前樣、いつそ私しと
ト云はうとする。お岩腹を立て
いは　何と云やる。貞女を立てゝ難儀をしようより、私しとゝは、そりや聞き事。サア、それを云や、それを云や。云はぬと、わが身は不義云ひかけるか。慮外な奴の。女でこそあれ武士の娘、侍ひの妻とも云はるゝこの岩が、品によつては
ト有り合ふ小平の脇差を取つて、スラリと拔いて立ちかゝる。宅悦は恟り、うろたへ
宅悦　これはしたり、何をなされます。危なうござります。
トその手を留めんとして、あちこちするはずみに、白

刃を誤つて後へ飛ばす。この白刃、後の欄間の下の所へ突ッ立つ。宅悦うづくまつて

モシ〳〵、お待ちなされませ〳〵。嘘でござります〳〵。今のやうに申したは、誠に嘘でござります〳〵。お前の貞女を見ませうと、存じたからの詐僞はり。モシ、必らずお腹をお立てなさるな。有りやうは、只今までとは事かはり、お前のやうなそでない顏の女なぞと、なんぼ私しがやうなものでも、ア、、うとましや〳〵、何の罰にか病氣の上に、二目と見られぬそのマアお顏。ハテ、氣の毒千萬なものだ。

ト此せりふのうち、お岩、不思議の思ひ入れあつて

いは　ナニ、わしの面が先刻のやうに、熱氣と共に俄の痛み、もしやあの時

宅悦　ナア、そこがお前は流石女氣、喜兵衛どのから參つたろ、血の道の藥は、ありやみんな嘘。人の面を變へる持藥。それをあがつたお前の顏は、世にも醜い惡女の面。それをお前は御存じないか。私しが斯う申すのが、疑がはしくば論より證據。コレ〳〵、爰の

ト櫛臺より鏡を出し

これでトツクリ御覽じませ。

ト　お岩猶々不思議の思ひ入れ。鏡を手に持ち

いは　何をマア、いろ〳〵の事云うて、人に氣ばかり揉ませろわいなう。

宅悦　何は兎もあれ、早くお顏を御覽じませ。必らず悧りなされますなえ。

ト宅悦、手を持ち添へて鏡を見せる、お岩、ちよつと見て、恐ろしき顏ゆゑ悧りして

いは　アレイナウ、誰れぞ後に

ト俯向くを、宅悦、猶も鏡をさしつけ、よく〳〵見せる。お岩、また惟々と鏡に向ひ、よく〳〵見て、思案の體。

ヤ、、着類の色あひ、頭の樣子、ヤア〳〵〳〵、こりやコレほんまにわしの面。マア、いつの間にわしの顏が、此やうな惡女の面になつて、マア、こりやわしかいの〳〵。ほんまにわたしの顏かいなう。こりやマアどうせう〳〵。どうしたらよからうぞいなう。

ト大悧り。途方に暮れて泣き落す。宅悦脊中を撫で

宅悦　サ、、御尤もでござります〳〵。それにも外に作者がござる。即ち隣家の喜兵衛さま。孫のお梅に伊右衛門さまを、貰ひたいにも女房持ち。流石向うは金持でも、

ちつとはお前に義理もあり、斷わらしつたを曲事と、血の道の藥と僞はつて、お前に服ませて顏を變へ、亭主に愛想を盡かさす工面。さうとは知らいでうか〳〵と、一ぱい參つたお岩さま、近頃以て氣の毒千萬。

ト殘らず口走る。お岩、だん〳〵と腹の立つてくる思ひ入れにて、鏡にうつる我が顏をヂッと見込んで

いは　さうとは知らず隣家の伊藤、わしが所へ心附け、日每に贈る眞實を、忝ないと思ふから、乳母や婢女へ最前も、この身を果す毒藥を、兩手を突いての一禮は、今に思へば恥かしい。さぞや笑はん、口惜しいわいの〳〵。

ト泣き伏す。宅悅さし寄つて

宅悅　まだ〳〵そんな事ぢやござりませぬ。愛想を盡かして伊藤の聟樣、お前と手を切るその爲に、どうぞ汝は女房と、間男いたせとお賴みを、ならぬと申せばスッパ拔き。よん所なう今の戲れ。お前の着類を其やうに、非道に剝いでござつたも、有やうは今宵が內祝言、聟の支度の入替へに、持つてござつたお前の代物。その上お前へ私しに、色を仕掛けてくれろと賴みは、卽ち嫁をこの內へ、連れて來るにもお前が邪魔、それゆゑわしを賴んだ間男。一部仔什はこの通り。なんぼ賴まれた事ぢやといううて、そのお顏ではどうして色に、イヤ、御免だ〳〵。

トお岩これを聞き、キッと思ひ入れ。

いは　もうこの上は氣を揉み死。息あるうちに喜兵衞どのへ、この禮云うて

トよろ〳〵する。宅悅、有りあふ衝立にて留め

宅悅　そのお姿でござつては、人が見たら狂人か、形もそぼろなその上に、顏のかまへも只ならぬ

トお岩また鏡を取つて、よく〳〵見て

いは　髮もおどろなこの姿。せめて女の身嗜み、鐵漿などつけて髮も梳き上げ、喜兵衞親子にこの場の禮を……コレ、鐵漿の道具を、揃へて爰へ。

宅悅　ヤ、產婦のお前が鐵漿を附けては

いは　大事ない、サ、早う。

宅悅　すりや、どうあつても

いは　エ、持たぬかいなう。

ト焦れて云ふ。宅悅、恟りして思ひ入れ。

宅悅　ハアイ。

トこれより獨吟になり、宅悅、鐵漿の道具を運ぶ事。蚊いぶしの火鉢へ、さんすいなるぜうづを掛け、麁末なるはんぞうに、道具とも揃へて持ち來る。これにて

お岩、こまかに鐵漿をつける事。此うち件の赤兒泣く。宅悦駈けよつて叩きつける。唄一ぱいに切れる。お岩、鐵漿をつけしまひ、件の櫛を見て

いは　母の形見のこの櫛も、わしが死んだら、どうぞ妹へ……アヽ、さはさりながらお形見の、せめて櫛の齒を通し、もつれし髪を、オヽ、さうぢや。

トまた唄になり、件の櫛にて俯向きになり、髪を解き、細かに梳く。赤兒泣くを、宅悦抱いてあちこちと歩く。此うち唄切れる。お岩、髪を後へ下げ、この時正面を向くと、生え際うすく拔けあがり、猶更凄き顏色となり、前へ落ち毛山の如くに溜る。右の拔け毛を、櫛と共に持つて思ひ入れ。

今をも知れぬこの岩が、死なば正しくその娘、祝言するはこれ眼前。たゞ恨めしいは伊右衛門どの、喜兵衛一家の者ども、なに安穩に置くべきや。思へば〳〵、エヽ、恨めしい

ト云ひながら、持つたる拔け毛を櫛もろとも、キツと摑み、思ひ入れ。この髮の毛の中より血汐、タラ〳〵と落ち、前へ倒れし白地の衝立へ、その血かゝる。宅悦見て恟り

宅悦　ヤヽ、落毛から滴る生血は

ト慄へ出す。

いは　一念通さで置くべきか。

ト叫びながら、ヨロ〳〵と立ち上がり、向うを見詰めて、立つたまゝ片息になる。宅悦、兒を抱きながら駈け寄つて

宅悦　コレ、お岩さま、モシ〳〵

ト思はずお岩の立ち身へ手をかけてゆすると、又ヨロヨロとして、上の屋體へバッタリこけかゝる。そのはすみに、最前鴨居に立ちし白刃、程よき所へ落ちかゝりゐて、思はずこけかゝりしお岩の咽喉を貫く。顏へ血かゝり、ヨロ〳〵と屏風の間をよろめき出て倒れる。宅悦驚ろき、慄へながら

ヤア〳〵〳〵、小平めの白刃で、思はず止めもこりや同然。ヤア〳〵〳〵、大變々々。

トうろたへ、兒を抱きながら騒いでゐる。此うち凄き合ひ方。捨て鐘。この時、誂らへの猫一疋出て、幕明きの切溜めへかゝる。宅悦見て

この畜生め。死人に猫は禁物だ。シイ〳〵〳〵。

ト追ひ廻す。猫は逃げて屋體の中へ駈け込む。宅悦追

天保七年七月森田座上演

三世尾上菊五郎の小平の霊　　尾上菊次郎のお梅

うて行く。このときドロ〳〵、障子へタラ〳〵と血かかる。途端に欄間よきあたりへ、大きなる鼠、猫を咬へて走り出る。猫は死んで疊の上へ落ちる。宅悦は慄へ慄へ見る。ドロ〳〵にて、鼠は一つの心火となつて消ゆる。

誠に大變々々。こりやこの内には、居られぬ〳〵。

ト兒を寢かして一散に向うへ逃げ出す。揚げ幕より伊右衛門、着類を着替へ、上下を着て、綺麗に拵らへ出て來り、花道にて宅悦に行きあひ

伊右　ヤア、わりやア按摩か。どうした。して、お岩を連れて逃げたか、首尾はよいか〳〵。

宅悦　ア、モシ〳〵、お前のお頼みだが、そこ所ぢやアござりませぬ。

伊右　そんならまだ逃げねえのか。エヽ、埒の明かない奴だ。コレ、おれは伊藤の屋敷で、内祝言をして來てナ、あのお岩はわれが引出してくれたらうと思つたから、今夜向うから花嫁を連れて來る。お岩がうせては、大變大變。

宅悦　左樣々々、大變でござります。お岩さまも大變。大きな鼠が……あの又猫も、イヤ大變々々、アノマア鼠が

ト云ひながら、無暗に向うへ逃げて入る。伊右衛門見送り

伊右　なんだ彼奴は、鼠々と、跡も吐かさず逃げうせたが、それにしても、お岩を引出すその相手は、誰れにしようない。

ト考へて

オヽ、あるぞ〳〵。あの中間の小平めを間男にして、彼奴等二人を叩き出し、いづれ今夜中にお梅を爰へ

ト舞臺へ來て内へ入り

お岩〳〵、どこに居る。お岩〳〵。

ト呼び立てる足許に、赤兒泣き出す。悄りして飛び退き

こりやアどうだ。この餓鬼を道端へ。すんでの事に踏み殺さうとした。お岩〳〵。

ト呼ぶうち、ドロ〳〵になり、又ぞろ大きなる鼠現はれ、赤兒を咬へて行くを、伊右衛門見附けて

ヤア、こりやア鼠がこの餓鬼を……エヽ、とんだ畜生だ。シイ〳〵。

ト追ひ散らし

うぬが餓鬼を鼠が引くも知らないか。コレ、お岩〳〵。

ト赤兒を抱へて求ね廻り、お岩の死骸を見附けて

ヤヽヽヽ、こりやアお岩が死骸、咽喉に立つたは小平めが赤鰯。そんなら彼奴が殺したか。それにしても、あの押入れの

ト駈け寄つて押入れを明け、縛られたまゝの小平を引出す。

此奴が繩目は矢張り其まゝ。そんならよもやお岩をば……此奴を相手に

ト思ひ入れあつて、いきなり小平の繩を解く。小平、急き込んで涙交りに伊右衛門に縋り

小平　旦那様。エヽ、こなたはなう〳〵。

伊右　なんだ此奴は。おれがどうした。

小平　兩手も口も叶はねば、お岩さまを此やうに、氣を揉み死に殺したも、みんなお前のさつしやる業。コレ、何もかもあの按摩が、隣り屋敷の喜兵衛さまと、云ひ合せたる一部行什、殊に面體忽ちに、相好變へたも藥の業。現在女房を今更に、宿無しにしてその身の出世、どうしてそれが榮えませう。エヽ、お前様は、見下げ果てたお人だなう。

ト強く詰めよる。

伊宅　やかましいわえ駄折助め。お岩が死んだも汝が刃物、そんなら主の女房を、うぬ、殺したな〳〵。

小平　エヽ、滅相な事云はつしやりませ。たつた今まで兩手も口も結へられ、どうして左様な

伊右　それでもソレ〳〵、兩手がその通り自由に動くワ。そんならお岩は、てめえが殺した〳〵。

ト捲し立てゝ怒鳴り散らす。小平、いろ〳〵に云うても耳にもかけぬゆゑ、思ひ入れ。

小平　さう云はつしやりますなら、成る程、お岩さまを殺したは、わしが科になつて、人殺しの罪も負ひませうが、その代りには、モシ旦那様、どうぞ盗んで走りました、唐藥のソウキセイ、あのお藥を私しに。

伊右　べら坊め、あの唐藥なら、先刻質屋へ五兩の質にやらかして、爰には無いワ。

小平　そんなら藥はアノ質屋に……先さへ知れゝば、參つて願うて

ト門口へ駈け出さうとする後より、伊右衛門、抜討ちに一刀切る。……小平、ワッと倒れながらも、その手に縋り

こりやお前、何科あつて騙し討ち。

伊右　知れた事、お岩が敵だ。たつた今、わりやア人殺しになつたぞよ。殊に隣家の企みの樣子、聞いたとあれば猶更に、生けて置かれぬ小佛小平。民谷が刀で往生ひろげ。

　　トまた切り附ける。小平、數ヶ所切られて苦しみながら伊右衞門に縋り

小平　僅か一夜の雇ひでも、假の主ゆゑ手出しをすれば

伊右　主に刃向ふ道理だワ。それだによつてなぶり殺し、お岩が敵だ。くたばれ〳〵。

　　トずた〳〵に切り倒す。このうち木魚の入りし合ひ方。向うより秋山、關口、足早に出て來て、内へ入り、この體を見て驚ろき

兩人　こりや小平めを、伊右衞門どの

伊右　何かを聞いたこの小者、殊に死んだるお岩が不義の

兩人　そんなら内儀のお岩どの

伊右　相ゝ變へて此奴等二人が、この家を迯げんとひろいだ不義者

兩人　聞けば聞く程野太い野郎め……して、この死骸は

伊右　世間へ見せしめ、二人の死骸、戸板へ打ちつけ、姿見の、川からどんぶり、直ぐに水葬。

　　ト押入れの戸板を外して、小平の死骸を戸板へ打ちつけようとする。この時、ドロ〳〵になり、小平の兩手の指、殘らず蛇の形になつてうごめく。兩人、膽を潰し

長兵　アレ〳〵、兩手の指が

官藏　どうやら蛇に

伊右　何をたはけた

　　トこの時向うより伴助、走り出て來り、内へ入り

伴助　伊右衞門さま〳〵、喜兵衞さまから花嫁御が、只今これへ御一緒に

伊右　それは早急。然らば二人の死骸は奥へ。

長兵　心得ました。

伴助　ヤア、小平が死骸にお岩さま、そんなら二人は間男心中二人を、戸板で直ぐにどんぶりと、仕事は奥で

三人　呑み込みました。

伊右　見られまいぞ。

　　ト唄、時の鐘にて、兩人は小平の死骸を杉戸のまゝ、氣味惡さうにさし擔ひ、伴助はお岩の死骸を引ッ抱へ、何れも奥へ入る。この唄をかり、向うより中間二人、箱提灯を持つて出る。喜兵衞、袴、大小、羽織にてお

喜兵　伊右衛門どの〳〵、約束の通り、喜兵衛が參つた參つた。
梅の手を引き、跡よりお槇。中間二人、吊り臺に絹地の夜具、六枚屛風さし擔ひ、出て來り、門口にて
伊右　これは〳〵御隱居には、早速に、お梅を同道。サヽ、これへ〳〵。
うめ　アモシ、只今も申します通り、最前いたせし內祝言、それさへあるに、あなたのお宅へ
喜兵　ハテ大事ない。伊右衛門どのも、家內に間違ひ出來し、家を賄ふ者なきゆゑ、緣者となつたを幸ひに、武家にあるまじき引ッ越し女房。それゆゑにこそあの通り、夜具も屛風も持たせて參つた。サヽ、大事ない〳〵。
まき　左樣ではござりませうが、何を申すも、お年のゆかぬお子樣を
喜兵　ハテ、大事ないと云ふに。
ト恥かしさうに、モヂ〳〵してゐるお梅の手を無理に引ッ張つて內へ入り、皆々座に附き、喜兵衛、思ひ入れあつて
時に伊右衛門どの、いよ〳〵貴公の申されし通り、お岩どのには

伊右　先刻內祝言の砌り、お話し申した男と逢ひ、小者の小平といふ者と、又ぞろの不義間男、事現はれしを存じつき、產後の女を同道いたし、この如く乳呑子を捨て置き、家出いたせし憎くき兩人、さすれば直ぐにお梅どの、今晩よりして泊めまする。舅御にも、左樣御承知下されい。
喜兵　アヽ、まだ外に男がござつたか。重ね〳〵の不埒千萬。併し、その間違ひも此方が爲には、誠にあうたり叶うたり。丁度折よく斯樣な間違ひも出來ぬもの。コレ、梅、これからは天下晴れて、其方は實の女房ぢや。何も考へてゐるには及ばぬ。乳母も喜べ〳〵。
まき　先刻も左樣なお話し、よもやとは存じましたれども、あの御病後の御樣子で、どうして家出なされしやら。マアヽ、それは格別、さし當つて御男子樣が
伊右　イヤ、誠に小兒に弱り果てます。
喜兵　サア、それゆゑ身共も今晩は、留守居がてらに泊つて進ぜる。明日は早々、乳母を尋ねる分の事。コリヤ、槇よ。勝手よき所へ、おれが床をとつてくれい。
まき　畏まりました。
トお槇は下手の方へ、持參の夜具を敷き、屛風を立て

て
ハイ〳〵、御隱居樣のお床は、これへのべましてござりまする。
喜兵　して肄どのと、孫めが寢間はな。
伊右　只今までお岩が罷り在つた一間。彼奴等へ面當て、矢張りあれへ臥りませう。
喜兵　成ろ程、それもようござらう……コリヤ、梅よ、これは其方が守ぢやほどに、大事にこれを、掛けて居やうぞ。
ト赤地錦の守り袋を渡す。
うめ　左樣なら、離さずに掛けて居りませうが、心がゝりは、あのお岩さまの事が
まき　左樣ではござりますれど、マア〳〵、それは格別でござりまする。
伊右　ハテ、大事ない、身がよいと申すに、誰れが何と申すものぢや。
ト少し立腹の體。
まき　イエ〳〵。誰れも左樣は申しませぬ。左樣ならばお前樣は
ト お梅の手を引き、上の方、お岩の寢てゐた床の上へ連れて行き
今宵は日頃のお恨みを
うめ　それぢやというて、もしひよつと、わたしが事ゆゑお岩さま
まき　ハテ、それ仰しやると、あなたの願ひが
ト無理に屛風を引廻し、此方へ來る。赤兒、頻りに泣く。
伊右　ハテ、折わるいあの乳吞子。
喜兵　今宵は身共が乳のない乳母、かんがくいたし、寢させて進ぜう。
ト赤兒を抱いて床の上へ上がる。
伊右　然らば舅御、何分よろしく
まき　して、私しは。
喜兵　何かゞ濟んだらめでたく開き、今宵の始末を娘にも、話してくりやれ。
まき　畏まりました。そんなら私しは、めでたくお開き申しませう。
伊右　何かと大儀。お內方へもよろしう傳言。
まき　あのお子樣を、何分お願ひ申しまする。
ト唄、時の鐘になり、お槇、中間を先に、供を殘らず

連れて向うへ入る。喜兵衛、屏風を引廻す。眞中に伊右衛門は一人立ち、思ひ入れ。

伊右　ハテ、物事も、これ程までに巧くゆくか。

ト正面のれん口より秋山、關口、ヌツと顔を出し

長兵　伊右衛門どの、戸板の二人を

官藏　早稻田あたりの流れへ突き出し

兩人　不義の成敗。

伊右　コレ。

ト押へる。兩人、顔を引ッ込ませる。

さてこれからは新枕。

ト凄き合ひ方、時の鐘になり、一間の屏風を明け

お梅どの、さぞ待遠で

トお梅、床の上に俯向きゐる。

お梅どの、これサ花嫁、俯向いてばかり居る事はない。恥かしくとも顔を上げ、日頃の戀の叶うたしるし、今宵めでたくこちの人、我が夫かいのと、笑うて見せやれ。

ト寄り添ふ。この時、薄ドロにて、お梅、顔を上げると、顔はお岩にて、恐ろしき顔色、恨めしげに伊右衛門を見詰め、皺枯れたる聲にて

うめ　アイ、こちの人、我が夫、必らずともに末長う

トきつと見詰め、件の守り袋を差出す。伊右衛門、ツツとせし思ひ入れにて、直ぐに側なる刀を取り、拔討ちにポンと首を切る。この首、前の縁へ見事に落ちると、お梅の本首になり、大ドロ／＼にて、この首へ數多の鼠むらがる。伊右衛門恟りして

伊右　ヤ、、、、、お岩めと思ひの外、矢ッ張りお梅だ。こりや早まつて

トうろたへて、刀を提げたまゝ下手の屏風を明けると、内に喜兵衛、赤兒を抱き、掻巻を着て寢てゐる。

コレ、舅どの／＼、珍事がござる。アノ間違ひで

ト喜兵衛を引起すと、その顔、凄き小平にて、赤兒を喰ひ殺せし體にて、口は血だらけにて振り返り、伊右衛門を見つめて

小平　旦那樣、藥を下され。

伊右　ヤア、わりやア小平め。現在小兒を

ト云ひさま、また拔討ちに首打ち落す。とよき所へ喜兵衛の本首、血に染みて出る。この首へ、蛇出てまとひつく。伊右衛門。よく／＼見て驚ろき

ヤ、、、、切つたる首は矢ッ張り舅。さては死靈の仕業よな。かゝる祟りに、ウカ／＼爰には

ト門口へ駈け出し、戸を明けて逃げようとする。戸はシャンと自然にしまる。恟りして跡すさりに退り、ホツと息をする。大ドロ〱にて心火燃える。伊右衛門これを見てギョッとして

ハテ執念の……なまいだ〱〱。

ト手を合せる……これをキザミにて、よろしく拍子

幕

三　幕　目　　砂村隠亡場の場

役名――民谷伊右衛門。伊右衛門母、お熊。佛孫兵衛。伊藤後家、お弓。同乳母、お槇。秋山長兵衛。鰻搔き、直助権兵衛。お岩の亡靈。小平の亡靈。佐藤與茂七。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、高足の土手、上の方に土橋、下に枯れ蘆、干潟の體。爰にお弓、お槇非人の姿、焚火に土瓶を吊し、舞臺一面流れの體、よき所に樋の口。石地藏。稻村。松の大樹、吊り枝。水草、すべて隠亡堀の景色。禪のツトメ、時の鐘にて幕明く。

ト お弓、病氣の體。お槇、介抱してゐる。

まき　イヤ申し、只今の御様子は、どのやうでござります。

ゆみ　イヤ、もう案じてたもんな。いつもよりは別して快い程に、案じてたもるな。たゞ心にかゝるは、行くへの知れぬ民谷伊右衛門。何の遺恨に親人様、娘までも殺害なし、恩を仇なる人非人、わしや腹が立つわいの〱。

まき　御尤もでござりまする。よしない者を聟殿と、なされたゆゑに、伊藤のお家は師直さまよりお取上げ、非人になつて此やうに、伊右衛門の行くへを詮議、乳母の私しが附添ひましての御奉公。必らず、きな〱思し召さぬがよろしうござります。

ゆみ　それ程までに、以前を忘れぬ志し、召仕ひとは思はぬわいの。

ト云ひながら、懐より守り袋を出し

コレ、この守りは、娘が横死の砌りまで、肌に附けたるお守なれど、あのやうなる時節にも、守の奇特の無いといふは、誠に死ぬる約束事、いま思へば、この守も恨めしいわいなう。

まき　ア、申し、また愚痴な事仰しやりまする。其やうなお心をお出しなされては、あのお子樣のお爲にもなりませぬ程に、いつものやうに御回向なされてお上げなされませ。私はお夜食の、御飯ごしらへを致しませう。

ト木魚入りの合ひ方になり、お槇は布袋の中より米を出し、あたりより小さき桶を出し、川水をすくひ、洗ふ。お槇、守を竹に吊し、回向する思ひ入れ。この鳴り物にて向うより佛孫兵衞、手に卒塔婆を持ち、川の中へ氣を附けながら舞臺へ來て、二人を見て

孫兵　ア、何ぢや。この衆は物貰ひにしては、さて人柄のよい女非人。コレ、こなた衆は、この川端にゐやるからは、ひよつと爰へ、杉戸に縫うたる男と女の死骸が、流れて來はしませぬか。どうぢやな。

ゆみ　イエ〳〵、見當りませぬが、その又死骸を、なんでお前は尋ねてござつたぞ。

孫兵　コレ、聞いて下され。わしの悴が、さる武家方へ奉公に行きをつた、先から駈落ち、今に行くへが知れぬ。今日聞けば、女と男の浮き死骸、戸板に打ち附け流るゝと、きつい評判。もしや悴が其やうな目にあひはせぬかと、心ならず。此やうな事内へ歸つて話しては、嫁や孫が案じ居らうと、云はれもせず內證で、靈岸樣へお參じ申し、御回向願うてこの塔婆、息才で居をれと祈禱。もし死にをつたらと思ふから、戒名附けてもらうて、出た日を命日。ア、うとましの娑婆世界。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れ。お弓、これを聞いて

ゆみ　ア、いづれを聞いても悲しい話。世間には似た事も

まき　間々ある事でござりまする。お前樣はそのお守を、毎日御覽の度に物思ひ、そりや斯う致しませう。私しが明日早々、靈岸寺へ持參いたして、納めて參りませう。

ゆみ　成る程、其やうなものかいの。持つてゐるほど淚の種、後生にもなるまい。そんなら納めて來やいなう。

まき　左樣いたしませう。晩程參りませう。

ト何心なく守り袋を取つてせりふのうち、薄き風の音になり、蘆間ザワ〳〵とうごめき、大きなる鼠一疋出て、件の守を咬へ行く。兩人見附け

ゆみ　ソレ〳〵、鼠が守を

まき　これはしたり、どこから鼠が

トうろたへて追ひ廻すうち、鼠は守を咬へたまゝ川へ

飛び込む。お槇悔りして

アレノ\鼠が

ト手を伸して捕へんとして、そのまゝ川へ、ヅル\/と落ちんとする。お弓うろたへ、お槇が帶の端をとらへ

ゆみ　コレ、危ないわいの\/。

ト引けども及ばず、孫兵衛も手傳つて、お槇が帶を捕へ引戻す。この時、お槇が帶の端、切れてお弓の手に残り、お槇川の中へ落ちる。お弓、ハツととりつめ、氣を失うて倒れる。孫兵衛、介抱して

孫兵　コレ\/、物貰ひの女中、氣を附けさつしやれ。

トいろ\/こなしあつて

これはしたり、あの鼠が出たゆゑ、一人の女は思はず川へ落ち込み、残つた女中は氣を失うて、こりや怪しからぬ……イヤノ\/\、通りがゝりの袖乞ひ女、おれも生中かゝり合ひになつては迷惑、といふて捨てるも氣の毒……ア、、いづくの女か、ハテ氣の毒な……人の事見て我が身の上。ア、、倅めはどうしをつたぞ。

ト側にありし赤合羽を、お弓に打着せ、卒塔婆を持つて思ひ入れあつて下座へ入る。佃節になり、向うより直助權兵衛、鰻掻きの拵らへ、誂らへのやすを擔ぎ、うさと樽を持ち、川のあたりを見やり\/、出て來て、花道にて

直助　さて、今年のやうに篦坊に漁の無い事は覺えぬ。シタガ、こゝらはどうか水の濁りがよささうな。ドレ、こゝらをやつて見ようか。

ト舞臺へ來り、川の中へ入る。腰たけになり、鰻を掻く事、此うちかすめて佃節。直助、捨ぜりふよろしく鰻掻きに何やらかゝりしゆゑ、取上げ見ると、髪の拔け毛一かたまり、この毛の中に鼈甲の櫛、摑み上がる。直助取つて、よく\/見て

ヤア、こいつア鼈甲だ。萬更でもねえ。ドレ、磨いて見ようか。

ト土手へ上がり、稲村の藁を取つて、櫛を磨いて見んと、煙草のみながら磨いてゐる。かすめし佃の鳴り物になり、向うよりお熊、世話の婆アにて、これも卒塔婆を持つて出て來る。後より伊右衛門、深き編笠、浪人にて、大小、びくを提げ、釣り道具を擔ぎ出て

伊右　申し母者人、お前も御健勝で、マア\/、めでたうございます。伊右衛門も安堵しました。

くま　イヤモウ、わしも其方の悪い噂を案じてゐましたが、マア／＼、息災な樣子を見て、安堵しました。知りやる通り、昔の連合ひ近藤源四郎どのが離別してより、師直さまへお末奉公。その砌り顏世どのを、御前樣へ執持たうと、かゝつて見たが、し太い顏世、強情ゆゑに鹽冶の騒動。その節師直さまの仰しやつたは、其方もしや後々に、難儀な身分となつたなら、これを證據に願うて來いと、コレ／＼

ト懷の風呂敷包みより書き物を出し、伊右衞門へ渡し

これは御前樣の判の据つたお書き物、師直さまのお直筆。いはゞわしへのお墨附も同然、願うて出て、其方の難儀を救はうとは思うても、今の亭主は鹽冶の陪臣ゆゑ、知られてはと思ふうち、民谷伊右衞門といふ浪人が、女房のお岩といふを殺し、その上隣りの屋敷の親子を殺して、立退いたとの噂まち／＼。それゆゑ此やうに

ト塔婆を見せ

これ見や「俗名民谷伊右衞門」其方は死んだと噂をさせる、その爲のこの卒塔婆、立てゝ置くのは、なんと智慧者であらうがの。

伊右　これは／＼、母者人のお志し、先づは大慶。併し隣家の喜兵衞、娘のお梅を殺したるも、死靈の業。それゆゑ工風をめぐらして、親子の者を寄せしは、朋輩の宮藏、彼れと小者兩人に、なすり附けて置くからは、よもやこの身にかぶれも來まいが、マア／＼、お前の氣休め、そこらへ立てゝ置かつしやりませ

くま　合點ぢや／＼。人目に立つやう。この土手の爰らへ立てゝ

ト好き所へ塔婆を立てゝ

コレ、伜、わしが住家を尋ねんと思はゞ、あの深川の寺町で、佛孫兵衞といふ苦しがり、必ずともに尋ねて來や。

伊右　心得ました。この間に尋ねませう。わしは當分、本所蛇山庵の坊主を頼んで、暫らく隱れ家。

くま　そんなら伜、其方の住家へ

伊右　尋ねさつしやりませ。

ト木魚入りの合ひ方になり、お熊、そこへ卒塔婆を立てたまゝ、急いで入る。此うち直助、鎌を磨きながら聞いてゐる。伊右衞門、川を見廻してゐるうち、入相の鐘。

もう入相か。ドレ、爰らへ下ろして

ト釣竿を二三本川へ下ろして、煙草を出して、直助が

文久元年七月中村座上演

八世片岡仁左衛門の伊右衛門　坂東彦三郎のお岩の靈と與茂七

煙草たのんでゐるのを見て
火を借りませう。
直助　お附けなされませ。
ト出ながら、笠の中を覗き
伊右衛門さん、お久しうござります。
伊右　ヤ、さう云ふてめえは直助か。
直助　アイ、その直助も今では改名、鰻掻きの權兵衛。モシ、伊右衛門さま、云はゞお前はわしが爲には、姉の敵といふところだね。
伊右　コレ、洒落か無駄かは知らないが、なんで身共が、てめえの敵。
直助　ハテ、忘れなすつたか。わしが女房の姉といふなア四谷左門が娘のお岩。わしが女房は妹のお袖。そんなら萬更わしとお前は、敵同士でねえ事もなからう。爰で逢うたりや優曇華の、女房が姉のお岩が敵、民谷伊右衛門、イザ立上がつて勝負なせ……と云ふところだが、そこを云はねえの。その代りはお前が又、出世する話しが出來ると、今のお前の貰はしつた、師直さまの書き物を、わしは借りに行きやす。その時知らねえ顏をなさるなよ。
伊右　どうして〳〵、その時はわれにも遣らうが、おれも有やうは出世の種を
直助　種を蒔くなら權兵衛が、ほじくり出しても尋ねて行きやす。
伊右　そりやア承知サ。てめえとおれの仲だもの。ナニその時に
ト話しのうち、釣り絲へ魚の附きし樣子にて、ピク〳〵引く。伊右衛門、手早く上げる。小鮒かゝりゐる。
ア、、出來たな。
ト云ふうち、外の竿また動き出す。
そりや、又かゝつたワ。
ト大きな聲で云ひ、伊右衛門、その竿を上げると、今度は鯰がかゝつて上がる。
ソレ、逃げるワ〳〵。
ト側にてあせり、手傳うても、ぬらつくゆゑ、立てゝある卒塔婆を拔き、鯰をやう〳〵押へ、卒塔婆はあたりへ捨てる。この時、氣を失ひしお弓があたりへ卒塔婆落ちる。この前よりお弓心附き、胸撫で下ろし居たりしが、この時思はず卒塔婆を取上げ、よく〳〵見て
ゆみ　ヤ、、卒塔婆に記せし戒名の、下に俗名民谷伊右衛門。そんならもしや、父さんと娘を殺したる、民谷はこ

の世を
トこの聲を聞いて、伊右衛門、お弓を見附け、さてこそといふ思ひ入れ。顔を外けて、直助の袖を引き、何やら書いて見せる。お弓はこれを知らず、思ひ入れあつて
申し〳〵、あなた樣、ちとお聞き申したい事がございます。
直助　ア、何だえ。
ゆみ　外でもございませぬが、爰にありまする卒塔婆に、民谷伊右衛門とございまするが、この人は病死でも致したのでござりまするか。
直助　ナニ滅法界な。伊右衛門は死にはしませぬ。コレコレ爰に
トうか〳〵云ひかける。伊右衛門、袖を引いて、目くばせする。直助領き
ほんに、死んだ〳〵。コレ、死んだに依つて、塔婆を仕立てたのだ。生きてゐる者に、ナニ塔婆を立てるものか
死んだ〳〵。
ト無性に云ふ。お弓こなしあつて
ゆみ　して、そりや、いつの頃の事でござりました。
直助　ア、そりやア何よ、慥か今日は、大方、それそれ、四十九日だ。
ゆみ　エ。すりや、相果てまして四十九日に……エヽ。
ト云ひかけて無念泣きに泣き入る。直助見て
直助　コレ〳〵、其やうに泣くのは、こなたは兄弟か、亭主か、なんだ。
ゆみ　イエ〳〵、私しが親と娘を、この民谷伊右衛門と申す者が、殺害いたして行くへ知れず、その敵たる伊右衛門を、女なりともおのれやれ、一太刀なりとも恨みんと、斯樣な姿になりましたに、その敵が病死と聞いては、誰れを敵と打ちませう。願ひの綱も切れ果てゝ
ト無念の思ひ入れ。伊右衛門聞き、また直助へ書いて見せる。
直助　コレ〳〵、非人の女中、よし又伊右衛門が生きてゐても、ナニあの人は、敵ぢやアない〳〵。
ゆみ　エヽ。して、民谷を退けて、誰れが敵でござりまする。
直助　コレ、まこと殺したその時の相手は、秋山長兵衛、關口官藏、家來が一人、此奴らが殺したのだ。伊右衛門さんと思ふのは、こなたの大きな料簡違ひサ。

三世關三十郎の直助　　文久元年七月中村座上演

ゆみ　そんならあの時仲人せし、あの兩人が仕業なるか。何の恨みで父さん娘。思へば〳〵口惜しい。

トきつとなる。伊右衛門、よき時分より、そろ〳〵立つて窺ひ來り、この時、臑にて、だしぬけにお弓を前なる川に蹴落す。水音して、姿、深みへ落ち入る。兩人顏見合せ

直助　伊右衛門さん、成る程お前も、强惡だなア。

伊右　この强惡も、見やう見眞似の

直助　そりやア誰れを

伊右　おぬしが仕草を

直助　アノ、わしが平常を

伊右　見習つたのよ。

直助　誠に感心。……奇妙。

ト時の鐘になり、思ひ入れあつて直助、下座へ入る。伊右衛門こなし。

伊右　いらざる所にうせたばつかり。益ねえ殺生

トこの時、釣竿、ビク〳〵引く。急いで上げ見て

南無三、餌を取られた。

ト附けかへる思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより長兵衛、頰かむりに顏を隱し、キヨロ〳〵として出て來り、伊右衛門を見つけ

長兵　ヤア、民谷氏。爰にござつたか〳〵。

伊右　コレサ、密かに〳〵。

長兵　コレ……民谷氏、こなたがお岩と小平を殺し、又その上に喜兵衛親子も、殘らず、こなたのした事だに、おいら主從三人へ、思ひがけなき疑ひかゝり、もうこの上は面晴れに、これから直ぐにお上へ訴へ、あの人殺しは民谷が業、伊右衛門でござりますと、貴樣の舊惡一々云ひ上げ、おいらが身拔けをせねばならぬ。必らず後にて恨まつしやるな。伊右衛門どの、斷わりましたぞ〳〵。

伊右　コレ〳〵、そりやアおてまへ、これまで懇にした甲斐がないといふものだ、譬へにも云ふ如く、人の噂も七十五日、其うちには又どのやうな風が、吹くまいものでもござらぬて、

長兵　コレ〳〵、それ手前も存じてゐるから、當分われらは遠國　影を隱すつもり。それでよからう。

伊右　サ、さう致せば手前も安堵。

長兵　然らばこなたの安堵の代り、路銀を貸しやれ。

伊右　ナニ路銀を……コレ、日頃から苦しがりの身共。どうして金の工面は

長兵　出來ない。出來ずば此まゝ訴へるか。
伊右　ア、コレ、それをこなたが
長兵　云はぬ代りに路銀を少し
伊右　どうして金は
長兵　貸さずば直ぐに
　ト行きかける。
伊右　ア、コレ、それ云はれては
長兵　路銀はどうだ。
伊右　サア
長兵　サア
二人　サア〳〵〳〵
長兵　路銀の工面は出來ぬのか。
　ト云はれて伊右衛門、思ひ入れ。懐よりお熊の渡し
　た書き物を出し
伊右　コレ、この書き物は師直さまの、御判の据つた墨附
　き同然。おれが持から斯ういふ廻りで。コレ。
　ト長兵衛に囁く。長兵衛呑みこみ
長兵　成る程、さういふ手堅い書き物なら、路銀の代りに、
　當分身共が
伊右　預けるからは、金が出來たら、その時引替へ。

長兵　承知しました。民谷氏。
伊右　秋山どの。
長兵　隨分ともに、氣を附けさつしやい。
　ト時の鐘、蟲の音、合ひ方になり、長兵衛、向うへ入
　る。伊右衛門、後見送り
伊右　よしなき秋山うせたばつかり、口ふさぎの墨附も、
　彼奴に渡したこの身の舊惡。ハテ、いらざる所へ、うせ
　ずとよいに。……南無三、暮れたな。ドリヤ、竿を上げ
　ようか。
　ト伊右衛門、竿をあげてしまふ。凄き合ひ方。薄ドロ
　ドロ。このとき、兩方の雨窓を下ろし、暗くなる。前
　の流れへお岩小平を兩面に打ちつけし、前幕の杉戸、
　流れ寄る。伊右衛門見て
ヤヽ、覺えの杉戸は
　ト思ひ入れ。この時大ドロ〳〵にて、件の杉戸、自然
　と正面の上手へ立ちかゝる。その拍子に、掛けてある
　菰落ちると、お岩の死骸、水に溺れ、肉脱せし見ぐろ
　しき拵らへ、首は本首を出し、鼠の咬へし最前の守り
　袋を手に握つて居る、ドロ〳〵烈しく、兩眼見開き、
　恐ろしき相にて伊右衛門を見詰める。伊右衛門、思ひ

入れ。
お岩、迷つてゐるか。コレ、女房、免してくれろ、往生しろよ。

ト お岩の亡靈、伊右衛門を見詰め、守り袋をさしつけ凄き聲音して

いは 民谷の血筋、伊藤喜兵衛が、枝葉を枯らさん、この身の恨み。

ト 物云ふゆゑ、伊右衛門悔りして、手早く／＼菰を掛け

伊右 まだ浮かまぬな。南無阿彌陀佛々々々々々々々。此まま川へ突き出したら、鳶や烏の餌食となり、業が盡きたら、佛になれ。

ト 突き出さうとする。杉戸、バツタリとかへつて、裏のかた小平の死骸、首へ藻をかむり、同じく恐ろしき凄き拵らへ。薄ドロ／＼にて、藻はバラリと落ちて、小平、兩眼見開き、片手を差出し

小平 お主の難病、藥を下され。

ト ぢろりと見る。伊右衛門又ギョッとして

伊右 又も死靈の……立去れ／＼。

ト 拔討ちに死骸へ切り附けると、大ドロ／＼になり、この死骸戸板の上のまゝ殘らず骨となつて水中へ落ちる。何もなき綺麗の杉戸となる。伊右衛門ホッと溜息つき、杉戸を川中へ落し、キッとなる。バッタリ音して、正面の稻叢より直助權兵衛、鰻掻きを持つて窺ひ出る。途端に早變りの佐藤與茂七、非人の姿、油紙に包みし廻文狀を首にかけ、糸立に卷きし一腰を持つて、樋の口より出てキッと見得。窺ひながら出て高土手へ上がる。これより誂らへの鳴り物になり、伊右衛門、廻文狀へ手をかけ、直助、この中へ入り、だんまりよろしくあつて、直助、鰻掻きにて打つてかゝるを、與茂七、拔討ちに鰻掻きを切り折り、權兵衛と書いた燒印のある柄の方、與茂七の手に入り、廻文狀は直助の手へ入る。三人、立廻りよろしく、足許に落ちてある魚籃を取つて、三人取上げると、ドロ／＼になり、右の魚籃、忽ち人の顔になり、籃の中より心火燃えあがる。三人、顔見合せ、キッと思ひ入れ。ドロ／＼打上げ、心火消えて、暗くなると、柝の頭、三人、三方へ別れてホッと思ひ入れ。……拍子

幕

四幕目

深川三角屋敷の場
寺町孫兵衞內の場

役名——鰻掻き、直助權兵衞。佛孫兵衞。孫兵衞女房、お熊。蜆賣り、次郎吉。小平女房、お花。古着屋庄七。米屋長藏。小汐田又之丞。赤垣傳藏。按摩、宅悦。女房、お袖。小平の亡靈。佐藤與茂七。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體。正面、暖簾のかゝりし納戸口。鼠色の古びし壁。一つ竈、引窓。上手の方、卒塔婆まじりの生垣、草むしたる五輪の頭なぞも見え、下手の方寺の入口にて、黑き冠木門をとりつけ、門口よりその門へ物干竿をわたし、前幕の、小佛小平の着物干してある。入口の醬油樽に樒の花を突ッ込んであり、すべて深川三角屋敷、法乘院門前のかゝり。爰に金子屋の手代庄七、風呂敷包みを持ち、長藏、米屋の若い者、叺を持ち、煙草をのんでゐる。蜆賣り次郎吉、荷を擔いで立つて居り、仕出し、花を買つてゐる。序幕のお袖、世話女房の拵らへ、山刀を持つて樒の根を廻してゐる。弔ひの鳴り物、てんつゝにて、幕明く。

長藏　モシ、米を持つて參りました。

そで　どうぞ、いつもの所へ明けて下さんせ。

長藏　オット呑みこみやした。

庄七　わしが賴んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん。

ト云ひながら干し物を見てゐる。長藏は押入れを明けて米櫃へ米を入れる。

そで　庄七さん、お前もせはしない。冬の日で其やうに早く干るものかいな。元の通りにして置きなさんせ。

庄七　成る程、どうして見ても、爰が一番日當りがよいやつサ。

ト元の所へ干して置く。

仕出　コレ〳〵お內儀、爰へも花を十六文賣つて下さい。

そで　ハイ〳〵、只今あげまする。

長藏　モシ、今入れた米の錢はどうなされやす。待つて居りやせうか。

そで　どうぞ、もそつと待つて居て下さんせ。お前に話しがござんす。

庄七　わしも急に賴みたい事があつて、また來やした。何

にしろ、ちよつとお目にかゝりたいね。
そで　せはしない、此やうに手がふさがつて居るものを……サア、お持ちなされませ。
仕出　アイ、錢はそこへ置きましたよ。
次郎　小母さん、蜆買うて下され〳〵。
そで　ホ、、、、今買うてやるほどに、ちつとのうち、そこに遊んでゐや。ほんに可愛らしい……サアお前さん、お持ちなされませ。
ト仕出しに花を渡す。
仕出　アイ〳〵。今日はこの法乘院に、弔ひがござるかな。
庄七　しかも二つあるが、イヤ、珍らしい亡者を持ち込んだな。
長藏　オランダからでも渡りはしまいし、亡者に珍らしいといふ事があるものか。
庄七　コレ、こなたは萬年橋へ流れ附いた、戸板の死骸の噂を、まだ聞かないのか。
長藏　その話は聞いたが、そんなら今日の佛は、戸板を脊負つた土左衛門にお土左の弔ひかね。
庄七　男と女を戸板の兩面に釘附けにして、どんぶりやらかすといふは、成る程、世の中には、むごい奴があるものサ。
そで　どのやうな悪い事をして、其やうな目にあうたやら。ほんに氣味の悪い話しでござんすな。
仕出　そりやアてつきり、間男出入りでござります。
長藏　それだからお袖さん、お前、間男はしない事だ。
庄七　併しこの庄七となら大事あるまい。
長藏　おきやアがれ。
仕出　こなさんは、その弔ひを、見に行く氣はござらぬかな。
同　サア〳〵、行つて見ませう。そんならお内儀どなたも詣つてお出でなされませ。
そで　ト弔ひの鳴り物になり、仕出し、門の中へ入る。
庄七　時にお袖さん、お頼みといふは外でもないが、どうぞ又この着物を、ざつと振り出してもらひたいね。
ト風呂敷包みより、お岩の死骸が着てゐたる衣裳を出す。
そで　もう日暮れぢやに、洗うたというて、干る事ぢやござんすまいぞえ。
ト手に取り上げ見て、思ひ入れあつて
この着物はどうやら見覺えのある、慥かにこりや、わた

天保二年八月市村座上演

三世尾上菊五郎の與茂七　　片岡市藏の直助

しか姉さんの……モシ庄七さん、こりやお前、どこから買うてござんしたえ。

庄七　こりやア何サ、あすこに干してある着物と一緒に、戸板の土左に

長藏　ハ、ア、それぢやアお株で湯灌場物だね。

そで　エ、、何ぢややら氣味の惡い。

庄七　コレサ〳〵、ナニそんな物ぢやアない。コレ、お前も野暮な事を云ふものだ。たとへ湯灌場物だといつて、門前住居をしてゐて、香花を賣るお内儀が、それを嫌つてなるものかな。成る程お前も、まだ商賣じみないぞ。

そで　ぢやというて、わたしや其やうな物なら御免ぢやわいなア。シタガ、モシお前、その着物は、どこから借りて來やしやんしたえ。

庄七　そりやア何サ、おいらが見世の流れだが、あんまり穢れてゐるから、ざつと振り出してもらつて、せりにでも出さうと思つてサ。

長藏　おきやアがれ。見す〳〵知れた土左衞門の着物を

庄七　これサ、胸氣な事を云ふまい。お袖さん、この男の云ふ事を、必ず誠にせまいよ。何しにおれが湯灌場まで買つて歩くものか。それほど慾張りはしねえわサ。

長藏　あんまり慾張られねえ事もあるめえ。

庄七　成る程、胸氣な事を云ふ男だぞ。

ト門口にある中盥ゝ中へ、その着物を浸けて

斯うして置くから、どうぞお頼み申しやす。

長藏　ほんに胸氣といへば、お袖さん、米の代はどうしてくんなさる。一體置きかへのつもりだから、先頃の代の濟まぬうちは、入れるぢやアなかつたが、お前が度々さう云ふから持つて來たが、いま直ぐに代を遣はして下されまし。

そで　サア、尤もでござんすが、こちの人が歸らしやんしたなら、直ぐにも持たして上げるほどに、後まで待つて下さんせ。

長藏　そりやア迷惑なものだ。

トこのうち次郎吉、表で樒の葉を持ち、遊んでゐる。

庄七見て

庄七　この子は小佛小平どのゝ子だが、ハ、ア、蜆を賣りに來て遊んでゐるな。

長藏　ヨシ〳〵、おいらが内へ行つて、あの婆さんにいひ附けてやるぜ。

次郎　それではわしが叩かれます。否ぢや〳〵。

ト泣く。お袖、駈け寄つて
そで　お前方も可哀さうに、其やうな事云うて泣かしてか
　らに
庄七　ハヽヽヽ。そんならどうぞお頼み申しやす。
長蔵　モシ、親方へは、後程と云つて置きますぞえ。
そで　ほんに憎らしい伯父さんぢやなう。
　ト佃節、木魚の音になり、長蔵、庄七は向うへ入る。
　お袖、次郎吉の顔を拭いてやる。
次郎　小母さま、蜆買うて下されい。
そで　商ひしようと先刻から、爰で遊んでゐたお前の物、
　買うてやりたいが、今日は大事の佛の日ぢやによつて
　ト錢を出して
　蜆はいらぬほどに、これを持つて行きなさんせ。
　ト次郎吉に遣る。
次郎　イエ／＼、蜆買うて下されねば、錢はいりませぬ。
そで　ホヽヽヽ、ほんに正直な溫なしい子ではある。
　コレ、其やうに思ふなら、斯うしなさんせ。わたしに賣
　るだけその蜆を、川へ放して下さんせ。それではよから
　うがな。
次郎　アイ／＼、そんなら、あの川の中へ逃がしてやりま
　せう。
そで　オヽ、さうして下さんせ。お前は悧巧な子ぢやなア。
　ト次郎吉を見詰めて、ホロリとせし思ひ入れ。木魚入
　りの合ひ方、寺の門の中より孫兵衛、しを／＼出て來
　り、次郎吉を見て
孫兵　わりや次郎吉、また今日も蜆賣りに出をつたなア。
　アヽ、何にも知らずに生き物の
　ト云ひながら、干してある着物に目を附け
　あそこに干してある着物は、忰が死骸に
そで　エ。
孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々。
次郎　祖父樣、今日は蜆が賣れぬゆゑ、晩に婆樣に、また
　叩かれるわいなう。
孫兵　オヽ、いとほしなげに、年端もゆかぬ孫めに、此や
　うな商ひさせて。コレ、案じやんな、祖父が錢遣るほど
　に、これを今日の賣溜めぢやと、あの婆めに見せてやり
　や。
　ト懷より小錢を出して、次郎吉に遣る。
次郎　あの小母樣にも、只錢を貰つた。
孫兵　そんなら何と云ふ。爰の内の小母樣にも、只錢を貰

うたと云ふのか。

ト此うちお袖、茶を汲んで來り、孫兵衛へ思ひ入れあつて

そで　すりやお前さんが、此お子のお祖父さんかいな。マア、お茶一つお上がりなさんせ。モシ、此方へお入りなされませ。

孫兵　これは〳〵、お手で下さりませ。ほんに孫めに錢下されたさうにござります。忝なうござりまするが、なぜ又、錢とつては下されぬぞいの。

そで　今日は大事の佛の百ケ日ぢやによつて、それでの事でござんすが、ほんに、いとしらしい子ではござんすわいなア。

孫兵　でもマア、若いに似合はぬお優しい。それに引かへ、聞いて下さりませ。この孫めが婆は、わしが後添ひではござるが、それは〳〵邪慳なやつ。少つと商ひがたるいと、年端もゆかぬこの坊主めを、ぶつたり、抓つたり、それを見るのが不便でござるわいの。

そで　それはマア可哀さうに。その婆樣の代りに、お前、いたほしがつてあげなさんせ。してお前は、この近所でござんすか。

孫兵　アイ、この二三町先でござるが、こなさんは、この頃爰へ越してござつた樣子でござるの。

そで　わたしも段々不仕合せな事がござんして、先月爰へ參りまして、此やうに、香花を賣つたり、濯ぎ洗濯、艱難な暮らしをして、お恥かしうござんすわいなア。

孫兵　ナニそれが恥かしうござらう。コレ、艱難の暮らしといへば、この子の母親めを聞いて下され。それは〳〵甲斐々々しい生れ。まだなま若い身の上で、正月の薺から始めて、嫁菜たんぽゝ、ほうれん草、又は枝豆、ゆで玉子、ありとあらゆる出商ひ。その艱難の中で、舅のわしをば、よう孝行にしてくれまするて。

そで　それはマア、奇特なお方でござんすなア。そんならこの子の親子の衆は、夫婦養子とやらでござりまするかえ。

孫兵　イエ〳〵、悴めは、わしが爲には血を分けた

ト云ひかけ、着物に目を附けて、こなし。

そで　それでは賴もしうござんせう。モシ、必らず心細う思はしやんすなえ。コレイナア、父さんがもう待つてぢやあらうほどに、商ひやめて、祖父樣と歸つて、なんぞよい物を、父樣に買うてもらはしやんせ。

次郎　コレ、祖父様、父様に、よい物買うてもらうて下されや。

ト　これを聞き、孫兵衛、堪りかねて

孫兵　南無阿彌陀佛々々〳〵々々々。

ト　花道へ行きかける。

そで　モシイナア。お前もマア何ぢややら心細いやうな。可哀さうにこの子も、一緒に連れて行かしやんせいなア。

孫兵　アイ〳〵、ほんに年寄ると、何かにつけて涙もろうて。サア、次郎吉、祖父と一緒に……これは大きに厄介になりました。

そで　モシ、また寺詣りの次手に、必ずお寄りなされませ。

孫兵　ほんになア、袖ふり合ふも多少の縁とやら。悴が死にからあのやうに

そで　エ、

孫兵　もう洗濯物を、取り入れさつしやれし。

ト　入相の鐘、頭になり孫兵衛、次郎吉を連れて、したしたと向うへ入る。お袖殘り、思ひ入れ。

そで　ほんに、あのお人も年寄つて、何ぢややら、いかう物案じのある樣子、兎角苦勞の裟婆世界……待たぬ月日は早いもの。今日は義理ある父さん、云ひ號けの夫與茂七どのゝ百ケ日、同じ場所にて同じ日に、親や夫を非業の刃に失ふといふは、よく〳〵因果なわたしの身の上。まだその上に、枕こそ交さね、今の權兵衛どのを夫に持ちしも、何卒お二人の仇敵……モシ、堪忍して下さりませ……アヽ、もう日が暮れるに、庄七さんに頼まれた洗濯物。これは斯うして置いて、明日の朝の事。

ト　外へ出て、竿に掛けてある着物を探つて見て

この着物はまだ乾かぬ。こりや、もそつと斯うして置いて。ドリヤ、お燈火を上げうかいなア。

ト　四ツ竹節の合ひ方、木魚の音になり、お袖は佛壇へ灯を入れ、行燈をともす。この時分、上手のまさ木垣の奥の卒塔婆へ、白張りの提灯に灯をつけて立てる。この鳴り物にて、向うより直助權兵衛、川魚を取る簗を三つ四つ提げて出て來り、門口にて

直助　コレ、日が暮れかゝつたに、干し物がしまはずにあるワ。

ト　内へ入り

なんだ、この盥の中にも洗濯物があるな。イヤ、大さうに稼ぐな。それに引かへ、おらア今日はあぶれてしまつた。

そで　あぶれたとかえ。
直助　隠亡堀へ三つ四つ、土を伏せておいたに、目そつ子にもお目にかゝらねえ。
そで　其やうな事ちやうござんせう。モウあまり、物の命を取る事は、よして下さんせ。
直助　馬鹿な事を云ふぞ。鰻掻きが殺生をやめては、腮をつるしてゐなけりやアならない。カウ、腮をつるすといへば、米はどうした。
そで　最前持つて来る事は来たけれど、後までと軽く云うて置いたぞえ。
直助　それ見た事か。早速お差支へだ。カウト、たつた一枚の単衣は、大家が立て催促に飛んでしまふし
　トかんがへて
オツト、あるぞ／＼、天道人を殺さず。いつやら斯ういふ物を拾つた。
　ト叺莨入れから前差の櫛を出して
コレお袖、この櫛はいくらぐらゐ貸すであらう。
　トお袖、何心なく手に取つて見て、驚ろき
そで　モシ、この櫛は、どこで拾はしやんしたえ。
直助　二三日あとに、猿子橋の下で、鰻掻きにかゝつて上かつたが、てめえ見覚えでもあるやうか。
そで　ある段かいなア。この櫛は、わたしが姉のお岩さんが、母さんの形見ぢやというて、大抵や大方、秘蔵した事ぢやござんせぬ。行く／＼は、わたしへ譲つて下さんす約束。それがどうして川の中に……それにまだ不思議なは、あの庄七さんが、洗うてくれいと頼ましやんしたこの着物、姉さんが夏中着てゐやしやんした単衣物に、寸分違はぬ
直助　コレ／＼、てめえも馬鹿な事を云ふものだ。着物の模様や櫛の形は、世間に同じ物はいくらもあるワ。
そで　イエ／＼、着る物は兎も角も、この櫛ばかりは、それに違ひはござんせぬ。
直助　そんならそれにしておいて、おれが工面が直つたら、受けててめえにやらうから、ちよいとこれを曲げて米屋の拂ひを
そで　イエ／＼、どうぞそればつかりは、堪忍して下さんせ。姉さんの大事に差したその櫛、わたしが見ては、どうも其やうな事はならぬ。こりや、明日お隣りの小父さんなと頼んで、四谷まで届けねばならぬわいなア。
直助　コレサ、てめえが貰ふ約束の櫛だといふではないか。

そんなら其やうに無駄な事をせずとも、てめえの物にして置くがいゝではないか。

そで　イエ〳〵、實の姉妹なら、其やうな事しても大事ござんすまいが、義理のある姉さんの櫛、この儘にして置いては、わたしの心が

直助　成る程、てめえも馬鹿律氣な……その心だものを、今時の女に似合はねえ、死んだ亭主へ義理を立つて、斯うしてゐても、夫婦といふはほんの名ばかり。コレ、おらア毎晩變な心持ちだ。

そで　エヽ、お前も、わたしも願ひが叶ふまでは、その約束ぢやござんせぬか。それを承知でありながら、又しても又しても其やうな事を

直助　オツトあやまつた。のろい奴だが、どうなりと御意次第。

　ト思ひ入れあつて

時に、御新造樣、私しめは甚だ空腹、どうぞ夕飯を一膳、お願え申しやす。

そで　ホヽヽヽ、何を冗談。ほんにまだ夕飯前でござんすか。そんなら飯持つて來てあげるほどに、必らずその櫛は、どこへもやつて下さんすなえ。

直助　ハイ〳〵、畏まり奉りました。

そで　エヽ、何ぢやぞいなア。ホヽヽヽヽ。ドリヤ、夕飯の支度しようかいなア。

　ト唄になり、お袖こなしあつて、暖簾口へ入る。直助殘り、思ひ入れ。

直助　ヘヽヽヽヽヽ、なんのこつた。姉の櫛であらうが、阿母の足袋であらうが、おれの手に渡つては、安穏に置くものか。こいつ質にやるより、いつそのくされ、大家の內儀さんをだまくらかして、バッタりに賣つてしまはうわえ。それにしても女といふものは、親の形見だの妹に讓るのと、大事にするといふは、成る程罪の深いものだぞ。

　ト櫛をひねくりながら門口へ出ようとする。一つ鉦、誂らへの合ひ方、薄ドロになり、行燈と佛壇の灯、明るくなつたり暗くなつたりする。と、盥の着物の中より、細い手スッと出て、直助の足を捕へる。直助これを見て、仰天して、持つたる櫛を落すと、これにて右の手は盥の中へ引込む。薄ドロやむ。直助、ホッと思ひ入れあつて

ハテナ。今のは慥か女の手だが、何にしても、こいつは

稀有だわえ。

ト腕を組む。合ひ方。暖簾口よりお袖、日光膳の上へ粗末な燗德利と猪口をのせ、飯櫃と一緒に持つて出て來り

そで　サア、夕飯にしようぢやないかえ。

直助　もう膳を持つて來たのか。コレ、酒の買つたのはあるか。

そで　アイ、取つて置いたわいなア。

直助　そんなら熱く燗をして來て下ッし。

そで　モシ、それに如才があるものかいなア。

ト德利を見せながら、そこに落ちてある櫛を見附け、取上げ見て

あれほど姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやといふに、此やうに捨てゝ置かしやんして、ほんに男といふものは。モシ、こりやわたしが預かつて置くぞえ。

ト直助思ひ入れあつて

直助　何も借り取りにするといふではあるまいし、明日は直ぐに持たしてやるがよい。畢竟おれが鰻掻きへ引ッかかつたから、てめえにも渡るといふもの。さうでないと水の底で、腐つてしまふ代物だ。コレ、うぢ／＼してゐるうち、米屋の野郎が來るとうるさいワ。野暮を云はずと、貸して下ッし。

そで　成る程、思うて見れば、云はしやんす通り、お前が見附けたればこそ、姉さんの仕合せ。その上、榮耀に使ふといふではなし、細い暮しの煙りの代。姉さん、ちつとのうち貸して下さんせえ。

ト戴いて

サア、持つて行かしやんせ。

直助　そんなら聞き分けて貸してくれるか。

ト盥は眞中、お袖は上の方、直助は下の方から手を出して、及び腰に櫛を受取らうとする。また薄ドロになり、盥の中より女の手出て、櫛を持つたる直助の手を握る。直助見て悔りし

アレ／＼、また細い手が

トそつとして、櫛を盥の中へ落し

エ、不氣味な

そで　何をお前は其やうに仰山な……櫛はどうしたのぢやえ。

直助　櫛か。櫛は盥の中へ……ア、そんならてめえは、今のは見ないか。

そで　そりや何を
直助　こいつはいよ〳〵稀有だわえ。
　　ト ぢつと思ひ入れ。
そで　お前もマア何を云はしやんすやら。そして、櫛は盥の中へ落したと云はしやんしたな……エヽモウ、氣味の悪い。そんなら、お前探して見やしやんせ。
直助　嫌な事の。モウ〳〵あの櫛へかゝり合ふ事は御免だ。てめえ、よく探して見るがよい。
そで　それぢやというて、無いもせぬものを
　　ト お袖、あちこち探して見る。一つ鉦、薄ドロ〳〵の合ひ方になり、お袖、盥の中の着物を振つて見ると、初めのうちは本水にて、絞るうちに自然に血汐と變り、したゝる。直助、これを見附けて
直助　エヽ、それ〳〵、その着物は、血だらけだワ〳〵。
そで　エヽ。
　　ト 慴りして、絞りあげた着物を盥の中へ落す。途端に盥より一疋の鼠、櫛を啣へたまゝ飛び出す。薄ドロドロ、一つ鉦。
直助　それ〳〵、鼠が櫛を
　　ト 追ひかけると、鼠は櫛を佛壇へ置き、消える。直助、櫛を取り上げて
　　何にしても、今夜は變ちきな晩だぞ。コレ、その盥の中から、鼠が櫛を咬へて飛び出して、佛壇へ置いて行つたワ。
そで　そんならその櫛を、鼠が佛壇へ
直助　コレ、その櫛はおらア否だ。てめえ差してゐて、明日早く姉御に屆けるがよい。
　　ト お袖の髪へ櫛を差してやる。
そで　アヽモシ、其やうな所へ差しては
　　ト 櫛を直さうとして、自分の手を見て
　　エヽ、氣味の悪い、どうせうぞいなア〳〵。
直助　今の血が附いたのだ。ドレ〳〵、おれが洗つてやらう。
　　ト 手桶の水にてお袖の手を洗つてやる。
そで　モシ、早うその盥を、どこぞへ片附けて置かしやんせ。
直助　オツト合點だ。イヤ、とんだ洗濯物を賴まれたぞ。
　　ト 門口の外へ出す。
そで　わたしやモウ、怖さも怖し、氣にもかゝる。ひよつとマア、姉さんの身の上に

後日二番目序幕

直助　ハテ、物は氣にかけると方圖のないものだ。必らず案じないがよい。

そで　それもさうかいな。ドレ、そんならわたしや、夜鍋仕事にかゝらうわいなア。

トお袖は針箱を出し、河岸揚げの肩當てを刺しにかゝる。直助見て

直助　ア、、なんだ、木場の河岸揚げの肩當てだな。そいつを差し溜めて、賣るといふ始末か。素敵に稼ぐやつサ。

ト四つ竹節、木魚の合ひ方になり、寺の門の中より宅悦、頭巾をかむり、足力の杖を擔ぎ、笛を吹きながら出て花道へかゝる。直助聞きつけ

オイ、按摩さん／＼。

ト呼ぶ。宅悦とつて返して門口へ來て

宅悦　お呼びなされましたか。

直助　オツト此方へ入らつしやい。

宅悦　ハイ／＼、御免なされませ。

ト内へ入り、頭巾を脱ぐ。

直助　ア、、足力だな。こいつは奇妙だ。さうして按摩さん、お前は見えるの。

宅悦　左樣でござりまする。

ト云ひながら直助を、つく／＼見て

ヤア、こなさんは慥か、淺草でいつぞや逢つた、藥賣りの藤八ぢやアないか。

直助　道理で聞いたやうな聲だと思つたが、その時の灸點屋だな。イヤ、こいつは飛んだ人を呼び込んだ。

そで　お前は宅悦さん、どうして爰へ。

宅悦　ヤ、お紋さんか。お前はどうして爰にマア……ハ、ア、そんならとう／＼この人を亭主に持つたのか。イヤ、蓼くふ蟲も好き／＼だぞ。

直助　これは御挨拶だ……時にこなたは、まだ淺草にゐるのか。

宅悦　ちつとあの邊には居悪い事があつて、この頃まで四谷の方に行つてゐやした。

そで　モシ、四谷は、どの邊にゐやしやんしたえ。

宅悦　水道町の近所サ。ナニ、やう／＼一月ばかりしか居ませぬて。

直助　お坊も兎角尻が据らない樣子だな。

そで　あんまり色事を稼がしやんすからの事サ。

宅悦　ナニ稼ぎもせぬ癖に……イヤ、時に療治をなされますか。

直助　折角呼び込んだものを只も返されまい。ザツとやらかしてもらひませう。
そで　モシ、一服のましやんせ。
ト煙草吸ひ附けて出す。
宅悦　お前の吸ひ附け煙草も久し振りだ。こいつは仕合せが直りませうよ……サア、致しませう。
直助　どうぞきつく頼みやす。
ト四つ竹節の合ひ方になり、宅悦、捨ぜりふにて、直助の肩を揉み出す。お袖、矢張り縫ひ物をしてゐる。
宅悦　イヤモシ、いつやら中田圃の騒動は、誠に珍事ちうような事でござりました。一體あの一件は
ト云ひかける。直助、思ひ入れ。
直助　ア、、かゆい／＼。カウ按摩さん、思ふさま頭を掻いてもらひたいね。
宅悦　それでもお前、まだ昨日あたり結つた頭を、二十六文の出入りだ。お紋さん、ちよつと櫛を貸しなさい。
そで　そんなら待ちなさんせ。ちよつと黄楊の櫛を取つて來て
宅悦　モシ／＼、お前の頭に、それほど差してゐるではないか。

そで　でも、この櫛で頭を掻いては堪らぬわいな。
ト奥へ行かうとする。宅悦、無理に櫛を取つて
宅悦　この櫛はどこか見たやうな櫛だが……さうだ／＼。イヤ、この櫛について、とんだ話がありますよ。
そで　エ。この櫛について話があるとは、そりやどのやうな
宅悦　その櫛は、お前どこから買つて差してゐなさるかは知らないが、こりやア山の手の四ッ谷町で、民谷伊右衛門といふ浪人の女房、お岩どのといふ女の、差してゐた櫛であつたが
直助　コレ、こなたは詳しい事を知つてゐるの。
宅悦　知らないではサ、あの邊は療治場でござりましたて。
そで　モシ、そのお岩さんといふ女中は、どうぞしなさんしたかえ。
宅悦　どうしたどころか、イヤ、大騒動でござりやした。
そで　エ、、そりやマアどうした譯で
宅悦　モシ、世の中に怖いものといふは、嫉妬深い女と、人切り庖丁を差してゐるお侍ひサ。その民谷伊右衛門といふ侍ひの女房、お岩といふ女は、嫉妬から起つて、亭主に殺されやした。

そで　エヽヽヽ。
直助　お袖、こりやマア大變だぜ。
宅悦　ハヽア、そんならお前方、由縁でもござるかね。
直助　由縁どころか、そのお岩といふは、このお袖が姉だよ。
宅悦　エヽ。
　ト宅悦、恟りする。お袖、宅悦を捕へて
そで　モシ、そりやマア誠でござんすか、ほんの事かいなア。ほんの事かいなア。
宅悦　ほんの事はほんの事だが、わしは又そんな緣引きのある事は知らず、ツイうか／＼と、とんだ話をし出して
そで　イエ／＼、よう云うて聞かして下さんした。してマア姉さんには、何の科あつて其やうな
宅悦　サ、わしもその一件には係り合つて　　イヤ／＼、係り合つたといふ譯ではないゆゑ、詳しい譯は知らないが、早く云ふと、その亭主の伊右衞門どのが、女房に飽きが來て、外の女を足にしようとしたのを、少し燒きかけたから起つた騷動だといふ話だ。それから、その伊右衞門といふ人は、氣が違つたか、自棄になつたか、その外に二三人を殺して影を隱したが、イヤモウ、思ひ出すと、ゾッとする程恐ろしい事が……イヤ又その筈の事かえ。さして科もないお岩どのを、それは／＼むごい殺しやう……イヤ／＼、この話はやめやせう。何だか目先へ死骸がちらつくやうだ。何にしても、その民谷伊右衞門どのといふ男は、強惡な侍ひサ。
　ト思ひ入れ。直助こなし。お袖、思ひ入れあつて
そで　チエヽ、いかに夫の高下ぢやというて、科もない姉さんを、其やうにむごたらしう殺すといふ事が……わたしが爲には義理ある姉さんの敵、その伊右衞門どのゝ在所を、云うて聞かせて下さんせ。モシ、敎へて下さんせ敎へて下さんせ。
　トこづき廻す。
宅悦　これサ／＼、どうしてわしがそれを知るものか。こりやマア、ひよんな話をし出したわえ。
そで　イエ／＼、なんぼでも、お前から詳しく聞かねばならぬ。サ、姉さんを、どのやうにむごたらしく殺したのぢや。サ、もつと云うて聞かせて
宅悦　イエサ、わしやアそんなに詳しくは
　ト宅悦は持てあましたる思ひ入れ、段々門口の方へ出て行く。お袖、附きまとつて

そで　サア、その伊右衛門どのゝ在所を早う
宅悦　これは又迷惑な。有りやうは、わしも人の話で聞いたが、何にしてもお力落しでござりやす……わしはお暇申しますて。
そで　イエ〳〵、もつと聞きたい事がござんす。どうぞ云うて聞かせて
　ト宅悦の足を摑まへる。
宅悦　これはしたり、わしは今夜大事な出入り場の御隱居を療治せねばならぬ。マア妾を
そで　イエ〳〵、詳しく聞かぬ其うちは、なんぼでも放す事は
直助　コレお袖、可哀さうに、歸してやるがよい。大抵譯は解つてゐるワ。
宅悦　左やうサ、いくら饒舌つてもこんな物。ヤレ〳〵、氣の毒な
　トこそ〳〵逃げ出す。
直助　コレ、療治代を持つて行かないか。
宅悦　成る程、肝腎な物を
　ト歸りかけて
　イヤ、妾が按摩の辛抱どころぢや。
直助　コレサ〳〵、足力の杖もあるよ。
宅悦　それも按摩の辛抱どころぢや。
直助　これサ、道具が無くつては、商賣は出來まいが。
宅悦　それも按摩の辛抱どころだ。
　ト四つ竹節に木魚の入つた合ひ方になり、宅悦、這々の體にて向うへ逃げて入る。直助、ヂツと思ひ入れあつて
直助　コレ、お袖、おれも初めて聞いたが、さて〳〵とんだ事になつたなア。
　ト氣を持たせるやうにヂツと云ふ。お袖、途方にくれたる思ひ入れ、オロ〳〵して
そで　思ひがけない姉さんの、刃にかゝつて果敢ない御最期。さういふ事とは露知らず、明日はこれなる樒に添へ、文にこま〴〵便りをと、思うてゐたのに今の噂。父さんといひ姉さんまで、非業にお果てなさんすといふは、モシ、わたしやどうせう、どうせうぞいなア。
　ト泣き伏す。直助ヂツと思ひ入れ。
直助　斯ういふ噂を聞く端か、種々樣々な稀有な事。コレ、その樒もおれが拾うて來て、思はずおぬしが手へ渡るも、死んだ姉御が一念の

そで　わたしに届けて下さんしたのか。それ程までに姉さんの、妹を思うて下さんす、形見のこの櫛、今は仇なる姉聟の

直助　その伊右衛門も武士の浪人、舅左門どのゝ仇敵、討たねばならぬ身を以て、却つてその身が敵となれば、コレ、親の敵、姉の敵、討つべき者は其方一人、何をいふにもか弱い女。エ、コレ、この直助も、繋がる縁のあるなれば、ナニ安穏に敵をば……左門どのも草葉の蔭で、口惜しからう、無念であらう。

ト心ありげに云ふ。

そで　如何に甲斐ない女子ぢやとて、ナニ安穏に仇敵

ト口惜しいこなし。

直助　そんなら其方は親左門、姉のお岩に夫の與茂七、その三人の敵をば、見事女の手一つで。その仇討は覺束ない。おれも以前は武家奉公、二人や三人相手にも、仕兼ねぬ手ぶしは持ちながら、赤の他人である時は、粹狂らしく助太刀も……エ、コレ、腕がムヅ／＼するなア。

ト猶もお袖に氣を持たせる思ひ入れ。合ひ方變つて、お袖、思ひ入れあつて、德利と猪口を持つて、直助が側へ寄り、手酌にて一口飲んで、直助の前へ置き

そで　サ、一つ飲んで下さんせ。

直助　これは御馳走。そんなら一つ注いでもらはう。

トお袖の酌にて一つ飲み

成る程、女の狹い心では、酒でも飲まねば立ちきれまい。話を聞いてもこの胸が、いはゞ他人のおれでさへ

そで　イエ／＼、お前を他人にせまい爲、女の方から獻した杯。

直助　ヤ。

そで　モシ、もう祝言は濟んだぞえ。

ト思ひ入れ。直助こなし。

親と夫の百ケ日、今日が過ぎれば今宵から、約束通りお前と女夫に

直助　そんならおぬしは、帶紐といて

そで　アイナア。

ト思ひ入れ。

直助　イヤ、そりや惡からう。おれもおぬしに有やうは、のろけ切つた心から、女房になつたら力にならうと、約束はしたものゝ、よく／＼思つて見る時は、草葉の蔭の與茂七へ、それでは其方の

そで　操を破つて操を立てるわたしが心……モシ、其やう

大正十四年七月　歌舞伎座上演

市川左團次の直助　市川松蔦のお袖

な事は捨てゝおいて
　トまた手酌でグッと飲んで
お前も、もう一つ飲ましやんせぬかえ
直助　酒ならいくらでもお辭儀は無しサ。
　トお袖、酌をして、直助また飲む事あつて
そで　酒ならお辭儀無しと云はしやんすが、さうして女子
は え。
直助　イヤ、女といふものは怖いものよ。
そで　それでお辭儀をさしやんすのかえ。
直助　マア、ざつとそんなものよ。
そで　そんならわたしや、一つ飲まうわいな。
　トまた手酌で飲む。
直助　イヤ、こいつは素的に、今夜は大分出來がよい。
そで　わたしやモウ、氣が揉めてならぬによつて
　ト直助にしなだれるこなし。
直助　成る程、氣が揉めるも無理はない。たつた一人の姉
貴がひよんな
そで　サ、それぢやによつて、どうぞ力に
直助　そんならいよ〳〵直助と、夫婦になつたその上で
そで　一人ならず二人三人、打たねばならぬ仇敵。

直助　助太刀しよう。
そで　エ。
直助　討つてやらうワ。
そで　エ、すりやアノほんまに
直助　女房になるか。
そで　必らず見捨てゝ下さんすなえ。
直助　たうとう首尾よく
そで　エ。
直助　ア、素的に醉つた。
　ト云ひながら、脇の方を向いて舌を出し
サア、寢よう、寢ようぢやないか。
そで　わたしやもつと夜鍋をしようわいな。
直助　そんなら勝手にするがよい。おれも有やうは、赤の
他人が勝手だ。
　ト云ひながら表を締める。
そで　エ、モ、寢る事は寢るけれどナ
　ト思ひ入れあつて、佛壇へ手を合せ拜むこと。直助見
て
直助　コレ、今に敵は討たしてやるワ。
　ト唄になり、直助、お袖の手を引き、そこに立てまは

したる屏風の中へ入り、引き廻す。合ひ方になり、向うより與茂七、一本差し、隱亡堀で手に入つたる鰻搔きを持つて出て來て、花道にて思ひ入れあつて

與茂　いつぞや計らず大切なる、廻文狀を失ひし、その折手に入るこの品に、アリ〳〵名前の彫り附けし、權兵衞といふ者こそ、法乘院の門前にて、香花商ふ家なりと、聞き出せしが詮議の手がゝり、主に逢うて廻文の、有無を糺したその上にて、すべによつたら藪の穴、つゝむ大事にや替へられぬ、不便ながらも……何は兎もあれ、この持ち主に逢うた上。オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて舞臺の方へ來かゝる。薄ドロ〳〵になり、門口に干してある小平の着物の裾に陰火燃え立ち、誂らへの小蛇つきまとふ。與茂七これに目を附け

ヤヽ、陰火と共に蛇の、あれなる衣類に附きまとふは、ムウ、非業の最期に世を去りし、正しく死靈の

ト思ひ入れあつて、ツカ〳〵と舞臺へ來かゝると、ドロドロ打ちあげ、陰火、蛇と共に消ゆる。與茂七、審かしげに思ひ入れ。

さても不思議な。ハテナア。

ト思ひ入れあつて、氣を變へて門口を叩き

モシ〳〵、お賴み申します〳〵。

トこの聲を聞き、屏風より直助出て

直助　オイ〳〵、誰れだ〳〵。

與茂　どうぞ線香を一把賣つて下さい。

直助　アヽ、お氣の毒だが、線香は切れ物でございやす。

與茂　そんなら爰にある、樒を賣つて下さりませ。

直助　樒かえ。そりやア滅法界に高い。一本で百より廉くはまからない。そしてそれは賣れてある花だ。外へ行つて買はつしやるがいゝ。

與茂　まだ日が暮れて間もないに、怪しからず早く寢たわえ。アヽコレどうぞ

トちよつと考へて

モシ〳〵、外に干してある洗濯物を、盜人が持つて行きます。アレ〳〵、盜人が洗濯物を持つて行くワ〳〵

ト大きな聲で云ふ。直助驚ろき、とつかは起きて、門口を明け

直助　さつぱり忘れて寢てしまつた。お前、よく氣を附けて下さりやした。

ト洗濯物を持つて内へ入らうとして、與茂七を見て

こなたは慥か

ト暫らく見てゐたりしが愕りし
ヤア、幽靈だ。幽靈が來た／＼。
　トとつかはと内へ飛び込み、門口を押へてゐる。
與茂　ナニ幽靈が、どこに／＼
　トうろ／＼する。
直助　コレ、幽靈が來た／＼。
　トこの聲にお袖も起きて來り、うろたへ、直助に縋る。
そで　エヽ、氣味の悪い、どこに幽靈が居るぞいなア。
直助　門口に立つてゐるワ／＼。コレ／＼てめえ、幽靈除けは持たねえか／＼。
そで　わたしや其やうな物は持たぬわいな。藤八五文は幽靈には利かぬかいなア。
直助　コレ、近所の衆、幽靈が出た。來て下さい／＼。
　ト無性に騒ぐ。
與茂　無性に幽靈々々と云ふが、おれが目にはさつぱり見えない。コレ、幽靈どん／＼、どこにゐるのだ／＼。
直助　エヽ、幽靈たけ／＼しいとは、こなたの事だ。
與茂　ナニ、わしが幽靈だ。そりやア人違ひだ。わしやアそんな者ではない。マア、何にしろ、爰を明けて下さりませ。

直助　イヤ／＼、滅多に明ける事はならない。幽靈に近附きはないぞ／＼。
與茂　これはしたり、ちよつとお目にかゝりたい事がござりやす。門の戸を明けてもらひやせう。
　トお袖、聲に聞き耳立て、
そで　モシ、今ものを云はしやんしたは、以前の夫與茂七どのに、よう似たものごし。
直助　サア、それだによつて幽靈だといふのだ。
與茂　モシ、幽靈か幽靈でないか、お目にかゝれば解ります。マア／＼爰を明けて、正體を見さつしやい。
　トこの聲を聞いて、お袖、直助を掻きのけ、門口を明けて、與茂七を見て愕りし
そで　ヤ、お前はほんに、與茂七さんぢや／＼。
與茂　お袖か。コレ、おぬしが在所を探したが、變つた所で、ハテ面妖な。
そで　エヽ、わたしよりお前が面妖な。そんならキツと幽靈ぢやござんせぬな。サア／＼、此方へ入りなさんせ。
　ト與茂七を内へ入れ、いろ／＼と思ひ入れあつて
ほんに幽靈ぢやない、正眞正銘、寸分違はぬ、與茂七さんぢや／＼。……モシ、わたしやお前が人手にかゝつ

て、死なしやんしたと思うたゆゑ
ト直助の方を見て、こなしあつて氣を變へ
ようマア、達者でゐて下さんしたなア。
ト云つて俯向く。直助も思ひ入れあつて
直助　そんならいつぞや中田圃で、バツサリやつたと思つ
たは
與茂　ヤ。
直助　いつも達者で、おめでたうござりやす。
トこなし。與茂七、直助を、つく／＼見て
與茂　慥かこなたは淺草で、見知り越しの藥賣り、慥かそ
の名も直助どの、ハテ、變つた所に……コレお袖、爰は、
てめえの内か。
そで　アイ、マア、其やうなものぢやわいなア。
與茂　して、この人は、なんで今時分來てゐるのだ。
そで　サア、あの人はナ
トちよつと口ごもり、そこにある宅悅の置いて行きし
足力の杖を取つて
オヽ、それ／＼、按摩ぢやわいの／＼。
直助　ナニ、おれを按摩だ
そで　按摩ぢや／＼、モシ、按摩さんになつてナ、……按
摩さんぢや／＼わいなア。
與茂　ハヽア、藥賣りが按摩と化けたか。
直助　さうサ、藥賣りが按摩と化けるは、まんざら緣のな
いでもないが、以前は赤穗の御家中が、小間物賣りや袖
乞ひと
與茂　どうしましたとえ。
直助　世の中といふものは、さま／＼なものサ。
與茂　ハテ、思ひがけない女房の内へ、尋ね當つておれも
安堵、その上按摩まで呼んで置いてくれるといふは、ハ
テ氣の附いた……コレ、お前さん、一療治やつてもらは
うか。
直助　そんなら、いよ／＼按摩にするのか。
そで　サア、按摩さんぢやによつて、療治してあげなさん
せ。
直助　イヤ、按摩とは、あんまりむごい。
與茂　サア、揉んで下さい。
直助　わしやア足力療治で、無性矢鱈に踏んで踏み附ける
が、それが承知なら、療治さつしやるがよい。
與茂　その荒療治が此方の望み。併し足力の道具は、わし
が貸してやりませう。

直助　こりやア珍らしい。そんなら道具を御持參で
與茂　わしが持參の足力の、杖は卽ちこの品だ。
　ト合ひ方、鰻り、與茂七、持ち來りし鰻掻きを出す。
　直助見て、思ひ入れ。
直助　ヤ、こりやコレいつやら六ぱ島、隱亡堀で失うた
與茂　そんならこれはこなさんの
直助　商賣道具サ。
與茂　その柄にしつかり權兵衞と、ありノヽ彫り附けある
からは、そんならこなたの今の名は
直助　以前は直助中頃は、藤八五文の藥賣り、今は深川三
角屋敷、寺門前の借家住ゐ、見世で商ふ代物は、三文花
に線香の、煙りも細き小商人、後生の種は賣りながら、
片手仕事に殺生の、簗を伏せたり砂村の、隱亡堀で鰻掻
き、ぬらりくらりと世を渡る、今のその名は權兵衞と、
金箔の附いた貧乏人サ。
與茂　そんならこなたは、この家の御亭主。して、お袖は
何ゆゑ爰に。
直助　この女かえ。こりやアわしが女房サ。
與茂　ヤ。
そで　アモシ、それを云うては

直助　いゝわえ。以前の亭主に在所を知られ、いつがいつ
まで其やうに、白を切つてもゐられまい。與茂七どのと
やら、この女はわしが嬶アさ。
與茂　そりや早一旦この與茂七と、夫婦別れをした女の、
再緣するも間々ある習ひ。併し未だに去り狀を、渡さぬ
からは女房のお袖、誰れが許して再緣したのだ。
そで　サア、さう云はしやんすも皆尤も。譯を話せば長い
事、父さん始めお前まで、人手にかゝつて
直助　ヤイノヽ。今となつては百萬だら、云ひ譯するほど
罪が深い。所詮穢れたおぬしの體、性根を据ゑて、おれ
の見る前、先の亭主と別れてしまへ。又こなさんも薄の
ろく、心の腐つた女の跡を、おはへて歩くも恥の上塗り。
未練を云はずとこの女は、わしに下さい、貰ひましたよ。
　ト圖太く思ひ入れ。與茂七も、こなしあつて
與茂　成る程こなたも横車、押し手を強くスッパリと、女
房をくれとよく云つた、その大丈夫な氣性に免じ、長熨
斗附けてこの女、進上しまいものでもないが、只は遣ら
れぬ、望みがある。
直助　望みといふは古風なお仕着、大概知れた紋切り形、
女の手切れは、金と轉んで

與茂　イヽヤ卑劣な、何しに金を
直助　ムウ。して又何をこなさんは
與茂　望みといふは金でない。場所は砂村六ぱ島、隱亡堀の闇の夜に、啼かぬ烏のいどみ合ひ、その時思はず失ひし、小間物仲間の符牒の書附け、拾つた人はこなさんと、知つたはこれなる道具から。女房とその品替へ〳〵に
直助　變つた物と女と引替へ。併し此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、その連名も四五十人、徒黨を集める廻文と、この權兵衞は睨んで置いた。
そで　その書き物なら淺草で、わたしもちよつと見たわいなア。
與茂　ア、コレ、……そんならいよ〳〵こなさんは
直助　拾つて持つてゐるならば、握つてゐても益ない反故、返してやりたいものなれど、拾はぬ物は是非がない。外を探すが、マア近道でござりやせう
ト空うそぶく。與茂七うなづき
與茂　成る程こなたも中々以て、一筋繩ではいかれぬ氣性。併し云ひ立する時は、見す〳〵間男、密夫の權兵衞、以前の身なれば女敵討、また町人なら衛により、耳鼻削ぐか金銀を、强請つて取るも間々ある習ひ。その兩樣にかかはらず、只管望むはその書き物、渡さぬうちは外へは決して。この家の內にいしかつて
そで　そんならお前は、この家のうちに
與茂　方の附くまで掛り人。
直助　顎をつるすが承知なら、そりやアこなたの勝手次第サ。
與茂　一人の女房に二人の男
直助　ハテナ、何方へ札が落ちるであらう。
與茂　そりやア此方が先なれば
そで　蔓一筋に、わたしが心で
直助　二人へ立てる心中を
與茂　見たいは體か懷中に
ト寄るをお袖は隔てゝ
そで　モシ、只何事も、わたしが胸に。
直助　上から見えぬ人心。
與茂　鏡にうつるものならば
そで　さぞ恥かしい
直助　昔の御亭主
そで　モシ
與茂　今宵はさぞかし

直助　ヤ。
與茂　おやかましうござりやせう。
　ト三人、味合ひよろしく、キッパリとなる。唄になり、お袖案内して、與茂七奥へ入る。直助殘り、こなしあつて
直助　ハテ面妖な。いつぞや淺草田圃で、殺らしてのけたと思つた與茂七。生きてゐるのも不思議の一つ。そんならあの時殺したは、何奴であつたか、よく／＼運の盡きた奴。それは兎もあれ、彼奴が欲しがる廻文狀、この書き物を舖直さまの、屋敷へ持ち出し、恩賞受けたその上で厄[illegible]で敵とやら、あの與茂七めを……イヤ／＼、それよりいつそ手短かに、この家の内でグッサリと
　ト思ひ入れあつて、そこにある出刃庖丁を取つて、奥へ行かうとする。この時、お袖出て
そで　マア／＼待たしやんせ、こちの人
直助　そんならわりやア今の樣子を
そで　モシ、與茂七どのも以前は武士、もしもお前に怪我あつては、誰れを力に親姉の
直助　ハヽヽヽヽ、お爲ごかしにあやなして、以前の男の與茂七を、庇ひ立てする詞の端々。

そで　エヽモ、男の癖に廻り氣な。一旦お前に大事を頼つへ、女房となつた上からは、金輪奈落お前と一緒に。モシ、與茂七どのを殺す手引きは、ナ
　ト直助に囁く。直助こなしあつて
直助　そんなら其方が與茂七を、酒に醉はしてこの所へ
そで　屛風を引いて寢入り端。
直助　合圖はおぬしが行燈の
そで　灯を消す折忍び寄り
直助　あの與茂七を、たつた一突き。
そで　モシ。
　ト押へる。
直助　必らず合圖を
そで　違へぬやうに
直助　合點だ。
　ト思ひ入れ。こなし。時の鐘、合ひ方になり、直助下座の藪へ入る。お袖、思ひ入れ。奥より與茂七窺ひ出て、思ひ入れあつて
與茂　お袖、主の權兵衞、いづれへやつた。
そで　誰か遁がれぬ用事とやらで
與茂　他行なしたが、それぞ幸ひ、歸りを待ちうけ

ト つか〳〵と表へ行かうとするを、留めて思ひ入れ。

そで　モシ、待たしやんせ、あの直助も以前は武士、殊に常から剛氣の者、大事を抱へたお前の身に、もしも過ちある時は、古主へ不忠になりませうがな。

與茂　その心配もさる事ながら、今も奥にて云ふ通り、一味の廻文、彼奴めに拾はれ、大事を知られし上からは、所詮生けては置かれぬ奴。

そで　さう思はしやんすなら、仕樣もやうは……モシ。

ト 囁く。

與茂　ムウ、すりや、いよ〳〵其方が手引きして

そで　わたしが親も鹽冶さまの御家來なりや、わたしが爲にも矢ッ張り御主人、お爲にならぬ直助どの、殺す手引きも御奉公。

與茂　出かしたお袖。して又合圖は

そで　寢靜すゝめて正體なき、折を窺ひ行燈の

與茂　灯を消すを合圖と定め

そで　枕に立てし屏風越し

與茂　あの直助を、たつた一討ち。

そで　モシ。

ト 押へる。……

與茂　コレ、必らず共に

そで　怪我せぬやうに

與茂　承知いたした。

ト 二人は諜し合せるこなし、おたがひに見廻す。時の鐘、靜かに合ひ方。舞臺廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う鼠壁、眞中のれん口。上の方折り廻し、一間の反故ばり障子屋體。下の方、誂らへの門口。下座の方黒板塀。爰にお熊、蜆の籠より錢を出して數へてゐる。孫兵衛、次郎吉を庇うて捨ぜりふ。合ひ方、禪のツトメにて道具納まる。

くま　コレ、此ざまアなんだ。今日一日擔いで歩いて、賣溜めはこればかり。うぬ、大方錢をくすねたらう。サア、爰へ出せ。

孫兵　コレ、婆どの、可哀さうに子供を、其やうに叱らぬものぢや。して、賣溜めの錢はなんぼある。

くま　見さつしやれ、こればかりだわな。

ト そこへ百三十の釣銭を抛り出す。孫兵衛見て

孫兵　ハテ、五つか六つの子供の商ひ、それ程あればよい

ではないか。コレ、坊や、泣くなよ〳〵。よく稼いだ。
坊はよい子ぢやぞ。

くま　エヽ、こなさんがさう甘やかすによつて、兎角商ひに出しても錢をくすねて、買ひ喰ひばかりしやアがる。サア、錢をどこへ隱して置く。出さねえか。この餓鬼は、出しやアがらないのか。

ト抓る。次郎吉、泣き出し

次郎　イエ〳〵、どこへも隱しはしませぬ。婆樣、堪忍して〳〵

孫兵　これはしたり、可哀さうに、どうしたものぢやぞいやい。

くま　こなさんは、そんな結構人だによつて、世間で佛孫兵衛といひますワ。その子も同じ代物ゆゑ、小佛小平。わしは身腹痛めぬ子の所爲かして、一倍間拔に思はれます。其奴がこしらへた餓鬼だによつて、薄馬鹿の筋を引かぬやうに、性根を叩き直さにやならぬ。エヽ、退かつしやい〳〵。

孫兵　コレ、おのれは年端もゆかぬ者を、常住三界ぶち打擲、もう〳〵、手荒い事はおれがさゝぬ。手ぶしかけると聞く事ぢやないぞ。

くま　こなさんが庇ふだけ猶腹が立つ。うぬ、どうしてくれう。エヽ、小面の憎い餓鬼だ。

ト蜆の籠を持つて立ちかゝる。

孫兵　この鬼婆アめ、何をしをるのぢや。

くま　何を、この提灯爺イめが。

孫兵　おのれ、なんと吐かしをる。

くま　うぬ、餓鬼め、どうするか見やアがれ。

ト籠を持つて打つてかゝる。孫兵衛もお熊に摑みかゝる。禪のツトメをかすめ、佃の合ひ方に時の鐘をかむせたる鳴り物。向うより小平の女房お花、世話女房の拵らへ、手拭をかむり、前垂れ、裾を高からげ、茹で玉子の籠を提げて出て來て、直ぐに內へ入り

はな　ハイ、只今歸りました。

トこの體を見て急いで中へ入り

こりや何事でござります。マア〳〵、御料簡なされませ。

ト双方を留める。

孫兵　お花や、聞きやれ。この婆アが、また坊主を窘めるわいの。

くま　コレ、其方のひり出したこの餓鬼、平常わしが可愛がつてやればよい事にして

孫兵　ヤイ〳〵、うぬ、この坊主をいつ可愛がつた。大福餅一つ買うてやつた事はあるまいがな。

はな　ハテ、もうようござります。マア〳〵、御料簡なされませ。コレ、次郎吉、何を其方は婆様の、御機嫌を背いたのぢや

孫兵　また賣溜めが多いの少ないのと云うて、いぢりをるわいの。

くま　コレ、親仁どの、何も商賣ぢやもの、賣溜めの事云はいでかいの。これぱつかりは憎まれても云はにやなりませぬ。コレ、お花、今夜なんぼ程商ひしやつた。

はな　ハイ、まだ勘定は致しませぬが、ちよつと御覽じて下さりませ。

ト玉子の笊をお熊の前へ出す。お熊中を見て

くま　こりや、まだ賣り切らずに持つて來やつたの。

はな　ハイ、三つ剩りました。

孫兵　オヽ、よう賣りやつたの。サヽ、ひもじからう、茶漬でも食うたがよい。コレ、賣溜めはさぞ澤山あらうな。

トお熊、籠の中の錢を見て

くま　アイ、大方四百五十か、五百ばかりもござりやせうよ。

孫兵　ヤア、そりやマア大枚な商ひぢや、それで其方も機嫌が直つたであらう。オヽ、大儀であつた〳〵。

くま　又この位ゐ商ひせねば、水も飲まれるものではない。どこの牛の骨か馬の頭か、知れもせぬ病人を、内へ引摺り込んで、大抵物のいる事ではない。コレ、お花、とてもの事に、なぜ皆賣つてごんせぬのぢや。

はな　ハイ、そりやお前に明日の朝、茶うけにあげうと思ひまして

くま　ホヽヽヽヽ、そりやよう氣が附いたが、わしや其やうなもの食ふのは否ぢや。コレ、次郎吉、阿母が野良かはいて賣り殘した玉子、早う賣つて來い。

孫兵　可哀さうに今日一日、蜆かついで歩いて、草臥れたであらう。もう料簡してやりやいの。

くま　イエ〳〵、あのやうな病人の掛り人がゐるもの、うつかりしてゐると、生きながら餓鬼道へ落ちにやならぬ。サア、よい子ぢや、ちやつと賣つて來や。

ト猫撫で聲をして次郎吉に玉子の籠を持たせ、二人に見えぬやうに次郎吉を抓る

次郎　アレ、痛いわいの〳〵。

孫兵　オヽ、どうしやつた〳〵。

次郎　婆樣がわしを抓つて
はな　エヽこの子はよう嘘を。あれ程平常いとしがつてゐやしやんすもの、ナニ婆樣が其やうな事……コレ、そんな事は捨てゝ置いて、早う賣つて來やいの。
次郎　アイ／＼。
　ト泣きながら門口へ出る。
孫兵　エヽうぬ邪慳な
はな　アモシ……サア、怪我せぬやうに行つて來やいの。
　ト涙ながらにすかして出す。次郎吉は籠を提げながら
次郎　玉子々々、ゆで玉子々々
　ト悲し氣に呼び歩いて向うへ入る。合ひ方、時の鐘。
くま　成る程、瓜の木に茄子の實へ、其方の亭主ぢやが、あの小平の意氣地ない所に、よう似てゐるわいの。わしが生んだ子を褒めるぢやないが、そりやこなさん達に見せたい。歴とした侍ひ、それも今は浪人して……ほんに浪人といへば、腰拔けの病人どのは、まだ死にさうもないが、あれがほんの穀つぶしとやら。
　ト障子の內をちよつと見て
　ドリヤ、賣溜めの勘定でもしようか。
　トお熊、籠の蓋へ明けた錢を持つて奥へ入る。孫兵衛お花殘り、顔見合せ、思ひ入れ。
孫兵　成る程、あの婆アも年寄るほど、根性が惡うなる。わしも年寄つて、退去りも外聞が惡さに、捨て置けばよい事にして、附け上がりをる。コレ、お花や、わが身もさぞ、うとましからうが、マア辛抱してくりやれ。また仕樣もあるであらう。
はな　エヽ勿體ない。母さんは甲斐々々しいお生れゆゑ、私しどもや連合ひの致す事は、お氣に入らぬも尤もでござります。それはさうと、こちの人が留守の內も、くれぐれ氣を附けて進ぜろと云うて置かしやんした御病人樣今日は少しもお心ようござんすかえ。
孫兵　今スヤ／＼と寢てござつたが、どうも捗らぬ御病氣、あなたへ對しても、あの婆めが邪慳ゆゑ、おりや氣の毒で……ほんに、藥あげてもよい時分であらうぞや。
はな　ハイ／＼、溫めてあげませう。
　トとつかは立つて七輪へ藥土瓶をかけ、煽いでゐる。
　障子屋體にて
又之　お花は歸りやつたか。孫兵衛や／＼。
孫兵　ハイ／＼、若旦那樣、お目が覺めましたか。
　ト合ひ方になり、孫兵衛、上手の障子を明けると、一

間に小汐田又之丞、浪人者の拵らへ、病ひ鉢卷、搔卷、によりかゝり木綿布子を肩に掛けて、あへいでゐる體。

又之　今宵は大分寒氣が強いが、雪でもチラつきは致さぬのか。

孫兵　イエ〳〵、雪は降りませぬが、この寒さでは、御病氣にさはりませうかと、私しも大きにお案じ申しまする。

トお花、茶碗へ藥を入れて持つて來て

はな　ハイ、お藥をおあがりなされませ。

ト又之丞、藥を服みながら

又之　お花、小平はまだ歸らぬか。

はな　もう彼れこれ三月あまりにもなりまするゆゑ、お暇を願つて、歸る時分でござりまするが

又之　イヤ、大方今宵は歸るであらう。

孫兵　エ。

又之　お花、其方、さぞ待遠であらうな。

はな　ホヽヽヽ、あなた何を冗談ばつかり。

ト思ひ入れ。孫兵衞は小聲で念佛を唱へゐるこなし。

又之　夫小平は雇ひ奉公、妻の其方は女の身として夜商ひ。その艱難の暮らしの中へ、斯樣に長々の病氣にての掛り人。それをうたてく思はず、よう世話しておくりやる深切、コレ、寢た間も忘却は致さぬぞや。忝ない〳〵。

孫兵　なんの其お禮に及びませう。この親仁めは、お前の御親父樣のお草履摑み。また伜の小平めは、お前の御家來。お屋敷の騷動から、御家來由良之助さまはじめ、御家中も散り〳〵ばら〳〵。畢竟私し風情を、御家來と思し召せばこそ、便り寄つてお出でなされた若旦那、粗末に致すと罰が當ります。また艱難の中と云はしやりますが、この親仁は、ずんど工面がようござりまするぞや。併し金の有る振りを致すと、人が貸せ〳〵と云うてうるさし、第一はこの嫁などが、金の簪買うてくれいの、ヤレ、錦の振り袖が欲しいのとねだりまするゆゑ、無い振りをして居りまする。ナニ千兩箱の二つや三つ、神棚へも載せて置きますて。ハヽヽヽヽ。

はな　ホヽヽヽ、父さんの何云はしやんすやら、いつもいつも冗談ばつかり。

ト云ひながら、又之丞の掛けて居る搔卷に目を附け

モシ、あなたのお召しなされました、この着る物は

孫兵　ほんに、こりやおれが布子ぢやが、夏中質屋の庫へ

はな　アモシ……こりやマア、誰れが持つて參りましたぞいなア。

又之　こりや最前、あの次郎吉が持つて參つて、寒氣を防ぐ爲、身共に着せるやうにと云うて、あの小平が屆けたと申す事ぢやて。

孫兵　エヽ、アノ悴の小平

　ト愕りする。

又之　又この搔卷も屆けたぢやて。

孫兵　すりや、それ程までにお主樣を……悴、出かしをつた。南無阿彌陀佛々々々々々々。

はな　ホヽヽヽヽ、父さんとした事が、何を云はしやんすぞいな。又さういふ事なら、早う戻らしやんすりやよいに。

　ト門口を覗いて見たり、イソ／＼して

モシ／＼、若旦那樣、お御足を撫つてあげませうかいなア。

又之　イヤ／＼、今宵は大分快い。構やるな／＼。

はな　ハテ、御遠慮には及びませぬわいなア。

　ト又之丞の足を撫つてやるこなし。孫兵衞は口の内で念佛を唱へてゐる。靜かなる木魚の合ひ方、禪のツトメ……向うより次郎吉、三布蒲團を繩で縛り、引摺つて來て、門口へ來て格子を明ける。お花立つて來て

小平どの、歸らしやんしたか

　ト次郎吉を見て

こちの人かと思うたりや次郎吉、そりや何ぢやぞいの

次助　父樣が、これを旦那樣に着せろと云うて、屆けさしやつたわいの。

　ト蒲團を内へ入れる。

はな　そんならこれも若旦那へ、お着せ申せと、アノ父さんが

孫兵　何と云ふ。それも悴が屆けやつたと云ふのか。

はな　アイ……エヽ、何の事ぢやぞいの。年端もゆかぬ者に、此やうな重い物を屆けさせずと、なぜ主が自身に持つて、早う歸つては下さんせぬぞいなア。

孫兵　南無……エヘン／＼／＼。

　ト咳に紛らす。

又之　ヤレ／＼、次郎吉、大儀であつた。爰へ來やれ、褒美を取らさう／＼。

　ト側の袋の中より菓子を出して次郎吉に遣り

コレ、父が歸ろであらう、温なしうしませうぞ。ほんに賢い奴ではある。お花、褒めてやりやいの。

はな　ハイ／＼……コレ、久しぶりで父樣と一緒に寢ゝす

るのぢやが、嬉しいかや〳〵。

又之　その子よりも、第一其方が

　トお花を見る。お花、恥かしき思ひ入れ。

身共も嬉しい。ハヽヽヽヽ。

　ト思ひ入れ。孫兵衛俯向いてゐる。唄になり、向うより赤垣傳藏、大小、ぶッ裂き羽織、小提灯をともし、出て來て、門口にてこなしあつて

傳藏　頼みませう〳〵。

はな　ヤ、こちの人が歸らしやんしたさうな。

　トとつかはと門口へ行き、戸を明けて

小平どのかいなア〳〵。お前はマア

　ト傳藏を見て

ホヽヽヽ、わたしとした事が

　ト氣の毒なるこなし。

傳藏　ナニ人違ひかな。ハヽヽヽヽヽ……イヤナニ女中、孫兵衛どのと申すは此方かな。

はな　左樣でござりまする。あなたは何方から

傳藏　身共は小汐田又之丞に、用事あつて參つた者。ちと免しやれ。

　ト内へ入る。又之丞見て

又之　ヤ、貴殿は赤垣傳藏どの

傳藏　小汐田氏。さて一別以來

又之　これは〳〵、ようこそ御入來、先づ〳〵これへ。

傳藏　然らば御容赦下されい。

　ト座に附く。又之丞よき所へゐざり出で

又之　先づは御健勝にて

傳藏　貴殿にも御無事と申したいが、承れば、何か御病氣との事。

又之　さればでござる。痛風とか申す病にて、未だに步行が心に任せぬやうでござる。

傳藏　ハテサテ、これは御不自由でござらう。イヤナニ、孫兵衛どのとやら、何かと又之丞どのゝ世話致さるゝと申す事。身共も古朋輩の事、祝着いたす、忝なうござる。

孫兵　ハイ〳〵、若旦那も長々の御病氣にて、此やうな見苦しい内へ、お隱まひ申して置くといふは、ほんの名ばかり。ほんに心は矢竹に思ひまするが、貧乏人の事、思ふやうに甲斐は廻らず。それでも奇特に、この嫁女が手一つで、晝は人樣の濯ぎ洗濯、夜は鯣やうで玉子

　トお花茶を汲みながら孫兵衛の袖を引き

はな　イヽ、エイナア。

天保二年八月市村座上演
十二世市村羽左衛門の又之丞　三世尾上菊五郎の小平の亡靈

ト傳藏の前へ持ち行き

ハイ、あなた、お茶一つ。

傳藏　イヤ／＼、構やるな／＼。

トお花は孫兵衛に囁く。

孫兵　オヽ、よう氣が附いた。二合半とつて來やれ。コレ西横丁の酉の宮がよいぞや。そして、何ぞ肴を見つくろつて

はな　ハイ／＼。

ト門口へ出かゝるを、孫兵衛こなしあつて

孫兵　コレ／＼／＼、お花や、酒買うて歸りに、ちよつと法乘院へ寄つて、爺がお願ひ申して置いた物を下されませと、其方、持つて來て下されい

はな　ハイ、そりや何でござりまするえ。

孫兵　何であらうと、持つて來やれば解るワ。コレ、必らず悔りせまいぞや。

はな　エヽ、何ぢやゝら氣味の惡い……ドリヤ、酒買うて來ようかいなア。

ト木魚入りの合ひ方になり、お花は德利を提げて向うへ入る。又之丞は傳藏へちよつと心遣ひして

又之　コリヤ／＼、孫兵衛、その坊主が眠うなつた樣子ぢや。納戸へ連れて行つて寢さしてやれ。

孫兵　ほんに、何も知らぬ子供は佛。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……左樣なら、あなた、御ゆるりとお話しなされませ。

ト孫兵衛は傳藏に會釋し、次郎吉を連れて奧へ入る。木魚入りの合ひ方。傳藏あたりを見廻し

傳藏　さて小汐田氏、身共今宵貴殿の隱れ家を尋ね、わざわざ參つたは餘の儀ではござらぬ。兼ねての一儀も、早近々のうち

又之　すりや、敵の館へ亂入の

傳藏　コリヤ。

トあたりを見廻し、懷より小判を出し

この金子は由良之助どの、四十七人へ配分の金子。小汐田氏、お受取りなされい。

又之　何か存じませぬが、大星どのゝお志し、忝なうは存じまするが、餘人は格別拙者儀は、敵の門内へ踏み込みますると、先づ生きて再び歸らぬ所存でござれば、所持いたしても不用の金子。

傳藏　さればでござる。拙者はじめ、皆左樣に思ひましたが、由良之助どのゝ申さるゝは、もし敵地にて討死いた

すその砌り、死後に金子所持なき時は、塩冶浪人活計に
迫り、師直の館へ亂入なし、切り取りなさん企てと、世
の人目を防がん爲、これは各自肌に附け、持參あるやう
大星どのゝ指圖でござる。
又之 ハヽア、流石は大星どのゝ御料簡は又格別。然らば
受納いたすでござりませう。
ト金を受取り、其まゝ前へ置き
赤垣氏、してその夜の手配りは、貴殿には御承知でござ
るかな。
傳藏 その儀も大星どのより、書き物にして斯くの通り。
密かに披見あるやうに
ト思ひ入れあつて、懷中より書き物を出して、又之丞
の前へ置く。又之丞こなしあつて開き見る。合ひ方。
又之 ムウ、成る程、四十七人二手となし、表門より二十
四人、裏門より二十三人、伍々を略して三人一組、三々
九人を一手となし
傳藏 大星どのゝ兼ねての練磨、甲州山鹿の采配にて
又之 寄の太鼓にて人數を繰り入れ
傳藏 如何にも/\、破の太鼓には人數を分ち
又之 急の太鼓に切り入つて
傳藏 織部、大鷲、不破なんど、太刀打槍術手練の荒者、
三九二十七人は、爰に押し伏せ、彼所に責め立て
又之 殘りの人數は四方を圍め、八方くま/\眼を配り
傳藏 目ざす敵を取逃がさぬやう、或ひは矢襖槍襖
又之 ハヽア、天晴れ/\。敵師直天を翔け、大地を潜る
術ありとも、首をあげんは瞬くうち。
傳藏 コレ……密かに披見。
又之 ハテサテ感心。
ト兩人こなしあつて書き物を見てゐる。かすめたる佃
の合ひ方、時の鐘になり、向うより前場の古着屋の庄
七、米屋の長藏、弓張り提灯を持つて出て來り、花道
にて
庄七 コレ/\、長藏どの、貴樣はどこへ行くのだ。
長藏 わしやア孫兵衞の所へ催促に行くが、お前はなぜ彼
所の內へ催促に行くのだ。
庄七 聞かつせえ。おらが庫へ泥坊が入つて、二品三品代
物が紛失したが、調べて見れば、みんなあの孫兵衞が所
から置いた質。そりやア僅な代物だが、四ツ谷町の利倉
屋から、下質に下がつてゐる、ソウキセイといふ唐藥、こ
の置き主は浪人者の、民谷伊右衞門といふ者ださうだが

この一品が金目の代物サ。

長藏　なにか、それで彼所の內が怪しいによつて、探りに行くのか。

庄七　マア、そんなものサ。

長藏　ハテ、とんだ事があるものだ。

ト話しながら兩人、舞臺へ來て

庄七　孫兵衞どの、お內でござるかな。

長藏　ハイ、御免なさい。

ト門口を明ける。この聲を聞いて傳藏、手早く書き物を懷中する。奧よりお熊、出て來り

くま　ハイ〳〵、何方からござりました。

ト二人を見て

こなた衆は、西橫町の金子屋に、米屋の若い衆、大方祿な事ではござんすまい。

長藏　これは來がけからの御挨拶、さう云はれては猶の事だ。

ト懷より帳面を出し

この間から書出しをあげて置きました米の代、一貫六百匁はどうさつしやります。是非とも今夜は拂つてやつて下さりませ。勘定して下さい〳〵。

くま　サア、尤もでござりますよ。命を繫ぐ米の代、長くとは云ふまい、もう二月か三月のところを

長藏　イエ〳〵、どうして〳〵待たれませぬ。今夜は是非とも勘定してもらはにやなりませぬて。

ト此うち庄七、又之丞の引掛けてゐる布子、側にある搔卷蒲團に目を附け

庄七　モシ、ちつとお免しなされませ。

ト提灯を持つて、あちこちと見て

これだ〳〵、これに違ひない。見世の符牒もまだ其まゝ。モシ、お前さん、この品は、どこから持つてお出でなされましたえ。

又之　どれから持つて參つたやら、身共も存ぜぬが、親の小平が屆けたと申して、あの次郎吉と申すが持參いたしたて。

庄七　ヘイ、左樣なら、あの年端もゆかぬ次郎吉どのが、この品々を……モシ、お前さん、それは積もりにも知れた事。イヤ、これは捨て置いて、この外に、ソウキセイと申す藥包みが、參つては居りませぬかな。お返しなされて下さりませ。

又之　待て〳〵町人、何か合點のゆかぬ物の云ひやう。そ

のソウキセイを身共に返せとは
庄七　イヽエサ、モシ、わたしが和らで物を申すうち、お返しなさるか、あなたのお爲でござりませうぞえ。モシ、お前は見かけによらぬ、盗みをさつしやりますな。
又之　ナニ、ドヾどう致したと。
　ト きつとなる。
庄七　ハテ、腹をお立てなされまするな。コレ、御覧じませ。お前の引掛けてござる布子、爰にある搔卷蒲團、見世の符牒が附いてゐますぞえ。わしどもの庫へ泥坊が入つて、外の物には手も附けず、この三品と、只今申したソウキセイ、右の四品が紛失しました。三品は早速爰で見當りましたがモシ、とてもの事に藥も爰へ、出さつしやるがようござります
又之　コリヤヤイ町人、爰に身共が古朋輩も聞いて居らるるに、覺えない無實の難題、殊に大それた盗人なぞとはおのれ、いま一言云うてお見やれ、免さぬぞ。
　ト 脇差引寄せてキツとなる。お熊思ひ入れあつて
くま　モシ／＼、其やうに嚇しかけては、町人といふものは、ビク／＼して云ふ事も云ひませぬわな。モシ、あなたも聞いておいでなされまするが、質屋が疑ぐるも無理ではござりませぬぞえ。その病氣には、無くてはならぬといふ、ソウキセイとやら、箒星とやらいふ藥を、お前が盗んだであらうといふ證據は、ソレ、引掛けてゐさつしやるその布子、搔卷の出所を、詳しく云はつしやりませ。わしらも世間へは、どうか盗人を飼つて置くやうに思はれては立ちませぬわな。サア、その品々は、どこから取つてござつた。それとも誰れぞ持つて來ましたか。それを有體に云はつしやりませ。イケ太々しい。
又之　ハテ、合點のゆかぬ。すりや、物の間違ひか　コリヤ、この品々は、只今も申した通り、この家の子悴次郎吉が
くま　ヘエイ、年端もゆかぬあの餓鬼が、……そんならその品々を。お前もマア積りにも、ハヽヽヽヽ。
　ト 奥へ向ひ
コレ、小僧や／＼、爺イどの、餓鬼を早く連れて、ござらつしやいな／＼。
　ト 大聲に呼び立てる。孫兵衛、次郎吉が連れて出て來り
孫兵　婆、何を其やうに、けたゝましく呼ぶぞいやい。
くま　呼ばないでどうするものか。殊によると爰の内の者

は、殘らず盜人になる詮索でござるわいの。

孫兵　何と云ふぞいやい。そりやマアどうした譯で

長藏　コレ、孫兵衞どの、わしも先刻から來て待つてゐるが、米の代はどうさつしやる。

くま　エ、、何をぐち／＼。その餓鬼を此方へ寄越さつしやい。

ト次郎吉を無理に引ツたくり

コレ、小僧よ、あの搔卷や着物は、われが持つて來たのか。サア、有體に云へよ。

次郎　アイ、あれはわしが

ト云はうとするを、お熊「云ふな」といふ思ひ入れあつて、睨みながら抓りあげる。

イ、エ、わしぢやない、知らぬわいな／＼。

又之　コレ、知らぬでは濟まぬ。サ、有やうに申せといふに。サ、、どうぢや／＼。

トお熊、また睨めるゆゑ

次郎　知らぬわいな／＼。

又之　エ、、それではこの場が。エ、、鈍な奴ではあるわいやい。

ト又之丞、氣を揉む。お熊、したり顏にて

くま　なんと、どうでござりまする。子供は正直、知らぬと云ひますぞえ。そんなら誰れが持つて來ませう。この盜人は

孫兵　おれぢや、この親仁ぢや。

皆々　ヤ。

孫兵　その搔卷と蒲團を盜んで來たは、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、コレこの親仁ぢや。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト淚ながらにこなし。

くま　エ、、この親仁どのは耄碌して、埒はござらぬわいなう。

庄七　この盜人は、見す／＼知れた浪人どの。それとも盜人でないならば、ソレ、そこに金もあるではないか。藥と共に四品、締めて元利六兩足らず、勘定すれば盜人の

又之　惡名拔けるとお云やつても、金輪奈落この金は

庄七　そんならこなたは矢ツ張り盜人。但しその金爰へ出すか。

又之　サアそれは。

長藏　米の代は拂はないか。

孫兵　サアそれは。

皆々　サア／＼／＼。
長藏　エ、小ぢれつてえ、ヘギクタ親仁め。
庄七　金を出さねば
二人　いつその事に
ト長藏は孫兵衛、庄七は又之丞を引ッ捕へ
これでもいゝか／＼。
ト打ち据ゑる。最前より傳藏、手を組んで樣子を聞いてゐたりしが、この時ズッと立つて、長藏庄七を投げのける。兩人、這々に起上がり
長藏　アイタ、、、、この侍ひは、なんで此やうに
庄七　コレ、盜人の肩を持つのか。
ト立ちかゝるを、傳藏、懷中より金包みを出し、兩人へ投げ附ける。
兩人　ヤア、こりやア何だ。
傳藏　それで其方達、云ひ分はあるまいかな。
トこれにて兩人、金を見て
庄七　ヤア、これは小判でキッチリ六兩。
長藏　爰へも一分。そんならこれは
傳藏　おのれら商人の身を以て、病人と申し、老人を相手に、手籠めに致す無法者。只置く奴ではなけれども、その分に免し遣はす。キリ／＼この家を歸り居らう。
ト威丈高に云ふ。
長藏　ハイ／＼、歸ります／＼。コレ、庄七どの、長居したなら又どのやうな、ひどい目にあはうも知れぬ。
庄七　痛い目するは辛抱するが、罰が當つて立ち切れない。
くま　コレ、こなさん達歸るなら、その提灯のあかりをかすり、わしも隣の念佛講へ。
孫兵　何をおのれが後生三昧。八萬地獄へ眞逆樣に
くま　アイサ、それも承知サ。鬼のやうな亭主が欲しいよ
ト三人門口へ出かゝる。孫兵衛、次郎吉を抱き上げ
孫兵　コレ、坊よ、わりやほんまに父に逢つたか。
次郎　アイ。
孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々々。
くま　サア、行かないのかな。
ト寺鐘の合ひ方になり、孫兵衛、次郎吉を連れて奥へ入る。三人は行かうとして、囁き分ひ、お熊と庄七は下座へ、長藏は提灯を消して向うへ入る。傳藏、こなしあつて、物も云はずにツト立つて行きかける。又之丞、袂を押へ、
又之　アイヤ、お待ち下され傳藏どの、物も云はずに立出

でらるゝは、すりや拙者めを誠の盗賊と、思し召しての事でござるか。

傳藏　イヤ、其許が盗賊でない事は、身共がよつく存じ居る。ハテ、行歩叶はぬ身を以て、左樣な業がなり申さうか。

又之　して又何ゆゑ拙者めに、一言のお詞もなく、お歸りあるは。

傳藏　例へその身に穢しまなくとも、四十餘人の義士のうち、左樣の惡名受けられては、世の人口は防がれず、浪人の貧苦に迫り、盗賊夜盗なしたりと、噂あつては亡君への不忠。計らず汚名を受けられしは、その身の不運と諦め召されい。

又之　すりや拙者めは敵討の、一列に加はる事は相成りますまい。

傳藏　この度の一儀は、由良之助どのゝ智略を以て、忠心無二の魂ひを見拔き、まつたその身の行状まで、一分一點曇りなき、義士を選んで四十七人、その連判の人數のうち、左樣の惡名うけたる者は、中々以て大星どの、よも承引はござるまい。

又之　サ、御尤もなる赤垣氏の、仰せではござれども、そこを只管お執成しを以て、是非ともお供いたすやう

傳藏　そりや一方ならぬ貴殿の事、申しては見ませうが、十が九ツ、一列には叶ひますまい。その上、いつ全快も計られぬ貴殿の御病氣。お氣にはかけられな、亡君のお心にも叶はぬといふ。ハテサテ、氣の毒千萬な。

又之　すりや、どうあつても拙者めは

傳藏　小汐田氏、御縁もあらば又重ねて

ト立ちかゝるのを

又之　モシ

ト留めるを振り切り

傳藏　隨分堅固で、保養めされい。

トこなし。時の鐘よろしく、傳藏向うへ入る。時の鐘あと合ひ方、又之丞思ひ入れあつて

又之　チエ、思へば〳〵、よく〳〵武運に盡きたる某。最早敵討の日限も近附く折に、かゝる難病。又その上に計らずも、盗人なりと惡名受け、四十餘人の一列に外れ、おめ〳〵と生き長らへ、どの面下げて世の人に、武士の生き面會はされう。もうこの上は是非に及ばぬ、今日只今腹かツさばき、未來に於て主君へ云ひ譯。オヽ、さうぢや。

ト いざり寄つて脇差を取る。この時分より奥にて、孫兵衛の打つ一つ鉦聞える事。又之丞、脇差を抜き、袖にて拭ひ、白刃をキッと見る、トこれより物凄き誂らへの合ひ方、寢鳥、薄ドロ〳〵をかむせ、小平の亡靈、ありし姿のまゝに、、藥包みを持ち、門の外へポッと現はれる。又之丞、思ひ入れあつて

小汐田又之丞武運に盡き、敵一人討ちとらず、四十餘人に先立つて、生害いたす無念の心中、亡君尊靈、憐れみ給へ。

ト腹へ突き立てようとする。急に腕すくみ、腹切れぬこなし 又之丞、訝かり、又こなしあつて、突立てようとする。この時小平の亡靈、ふうわりと立つたままに門口を通り拔け、又之丞の側へ坐る。又之丞、氣も附かず

ハテ心得ぬ 手先しびれて、腹切る事の叶はぬは、こりやどうぢや。

ト云ひながら、フト小平を見附け

ムウ、それに居るは、小平ぢやないか。

ト寢鳥、薄ドロ〳〵、凄き鳴り物、一つ鉦。又之丞思ひ入れ。

ヤ、、なんと申す。いま切腹なしては犬死。手に入る良藥にて、難病全快なした上、敵討の一列に加はれと申すか……コリヤヤイ、それをおのれに習はうか。身共はおのれゆゑに、盜賊の惡名受け、一大事の人數をも省かれたワ。エ、、玆な不忠者めが。

ト小平の襟髪へ捕へやうとする。このとき亡靈の衣裳ぬげて、白裝束、亂れ髮、誂らへ物凄き幽靈の姿になる。ドロ〳〵烈しく

何と申す。身共を大切に思ふゆゑ、心に思はぬ盜みを致し、良藥を取り得たれば、これを服して全快なせとか エ、、流石は下郎の淺ましい。おのれがその藥品を盜みしゆゑ、この又之丞はナ、身に覺えなき盜賊の惡名、敵討の供も叶はず、さすれば全快なしたとて、何の益なきこの體。留め立て致すな、南無阿彌陀佛。

ト又腹へ突き立てようとする。ドロ〳〵烈しく、小平の亡靈、これを留めるこなし……又之丞いらつて

エ、、聞分けなくまだ留めるか。下郎ながらもこれまでの、忠義に免じ捨て置けば、某に恥面かゝせしその上に、猶も武士道捨てさするか。もうこの上はおのれをも手討に致した上、邪魔を拂うて潔く切腹いたす。覺悟

なせ。

ト刀を取り直して小平を蹴りながらに追ひ廻す。一つ鉦、責め念佛の鉦……小平の亡靈、眞中へスックと立ち

小平　あなたの願ひを叶へんと、苦しい悲しい恐ろしい、云ふに云はれぬ艱難にて、やう／＼手に入るこの藥。それにて全快なした上、どうぞ首尾よく本望の、門出あるやう旦那樣

又之　何をおのれが。覺悟なせ。

ト摺り寄つて烈しく切り附ける見得。大ドロ／＼になり、小平の亡靈、柱の中へ消える途端、又之丞スッパリと二つに卒塔婆を切る仕掛け。ドロ／＼やむ。又之丞ギョッとして

ヤ、小平を手討と思ひしに、姿は消えてこの卒塔婆。ムゥ、俗名小佛小平。」ヤ、こりやどうぢや。

ト呆れし思ひ入れ。このとき向うよりお花、白木の位牌を抱へ、一散に走つて出て、門口より驅け込み

はな　舅御樣、モシ、孫兵衞さま、こりやマアどうせう、どうせうぞいなア／＼。

トうろ／＼取り亂して泣き伏す。孫兵衞、鉦と撞木を持ち、よろめきながら出て來り

孫兵　オヽ、悲しからう、尤もぢや／＼。おりや間がな隙がな佛壇の前で、この鉦撞木を杖柱、いつそ泣き死に死にたいにも、命めが自由にならず。よく／＼業のつくばつた親仁が身の上、嫁女、推量してくれ／＼。

はな　お前が最前歸りには、お寺へ寄つてくるやうにと云はしやんしたゆゑ何心なう、法乘院さまへ行つて、親仁が願ひました品をと云うたれば、方丈樣がお手づから、下さんした白木の位牌。不思議な事と手に取り見ればコレ、俗名小平、施主は親御のお前の名、悔りせまいか、わたしやモウ、その場で直ぐに、死にたうござりましたわいなア。

ト大泣きに泣く。又之丞、さてはトこなしあつて

又之　すりや伜小平が、この世を去りし魂魄の、身共が難病救はんと、寒氣を防ぐ衣類といひ、良藥までも業通にて、取り得て我れに與へしのみか、切腹までも止めしは、死んでも盡きぬ忠義の心底、忘れはおかぬ忝ない。さうとは知らず、我れに惡名負はせし小平、憎さも憎しと追ひ詰めて、手討になせしと思ひしに、姿は幻し消え失せて、斜に切つたはこの卒塔婆。

はな　そんならこちの人、小平どのは今までの、在りし姿を現はして、爰に居やしやんしたか。妻のわたしや次郎吉には、なぜに逢うては下さんせぬ。わしや逢ひたい、なつかしいわいなア。

ト泣き伏す。

孫兵　オヽ、尤もぢや〳〵。尤もぢやがコレ嫁女、位牌になつたを見た其方より、現在伜が浮き死骸、隠亡堀で見附けた時の悲しさは、コレ、どのやうにあらうと思やる。その上何者の仕業やら、むごたらしい、目も當てられぬ殺しやう。淚のありたけ泣いた上、法乘院さまへお願ひ申し、葬むつたのは今日の夕方。嫁や孫めに知らさぬのは、少つとも遲う聞かさう爲。この親仁が心一つに、收めてゐた胸のうち。嫁女、若旦那様も、御推量なされて下さりませ〳〵。

ト愁ひのこなし。又之丞思ひ入れあつて

又之　聞けば聞く程、不便なは小平が成行き。さるにても、元より正直正路な生れ、非道を働らく者でない。殺せし奴は何者か。

トきつと思ひ入れ。この時また物凄き合ひ方、薄ドロになり、陰火燃え、奥より次郎吉、駈け出して來り、スックと立ち

次郎　わしを殺したは民谷伊右衛門。

はな　ヤヽ、すりやこちの人が稚子の

孫兵　體をかりて物云ふのか。

又之　その民谷伊右衛門こそ、不義士の隨一、近藤が伜にて、親にもまさる憎し者。

はな　そんなら敵は民谷伊右衛門。

トきつとなる。

次郎　イヤ〳〵、惡人なれども一旦は、主人と頼みし民谷どの、敵と思ふは道でない。この上は若旦那様、少しも早うこの藥を

又之　心づくしのこの良藥、如何にも服せしその上にて、この一埒を大星どのへ、演舌なさば、我が惡名も晴れし上、大事の供に立たんは必定。氣遣ひ致すな、忠義の小平、今ぞ良藥服用なさん。

ト孫兵衛とつかは水を汲んでくる。又之丞、それを服む。

次郎　嬉しやそれにて未來の本望。

トドロ〳〵烈しく、又之丞、放心して倒れる。次郎吉も倒れる。鳴り物打あげ、陰火消える。よき時分、庄

庄七　七、表に窺ひゐて、この内へ駈け入り
　さてこそ塩冶の浪人者、師直さまへ
　ト又之丞へかゝる。又之丞、スックと立上がり、庄七を捻ち上げる。皆々驚ろき
孫兵　ヤ、あなたはお足が
又之　誠に……さては難病、全快なしたか。
はな　草葉の蔭にてこちの人
孫兵　さぞ喜んで
又之　エ、、忝ない
庄七　何を。
　トかゝるを、突き廻してポント切る。トお熊窺ひ出て
くま　ヤ、人殺し
　ト聲立てるのを、孫兵衛引ッ捕へ
孫兵　エ、、妥な魔王めが。
　ト押へつける。又之丞、血を拭ふ。お花は右に位牌、左に子を抱いて泣き落す。この見得よろしく、時の鐘の送りにて、舞臺廻る。
　本舞臺、元の三角屋敷に戻る。眞中に屏風立て廻してあり、矢張り誂らへの合ひ方にて道具とまる。ト屏風の中よりお袖、書置を片手に、行燈を下げて出で來り、行燈をそこへ直し、思ひ入れあつて
そで　水の流れと人の身は、移り變ると世の譬へ、思へば因果なわたしの身の上。實の父さん元宮三太夫さま、まだその上に一人の兄さんありと、聞いたばかりでお顔は知らず、義理の父さん姉さんは、非業にお果てなさんした、その敵を討ちたいばかり、女子の操を破りしからは、所詮この身は
　ト思ひ入れあつて、守り袋より臍の緒書を出す。凄味の合ひ方、門の中より直助、出刃を手拭にくるんで持ち、抜き足にて、内を窺つてゐる事。お袖、こなしあつて
　この臍の緒の書き物は、血を分けし親の形見、せめてはこれを見さんに、わしが死んだその後で、屆けてもらうて……これがこの世の
　トこなしあつて、行燈の灯を吹き消す。この途端、捨て鐘強く、忍び三重になり、直助、出道へ行き、出刃を口に啣へ、尻をからげ、キッと見得。このとき上手の生垣を押分け、與茂七、窺ひ出る。お袖は屏風の中へ忍ぶ。兩人とも窺ひながら内へ入り、屏風こしに奥

茂七は一刀、直助は出刃にて、グッと貫く。屏風の中にお袖の「ワツ」とうめく聲に、兩人仕濟ましたりと思ひ入れあつて屏風を取り除けると、お袖、書置と臍の緒を持ち、手を負つて苦痛の體。兩人、お袖へ手をかけて貫かうとする途端、チョント知らせにつき、月出る。三人これにて顏見合せ、悄りして

直助　ヤ、正しく男と思ひしに

與茂　屏風の内なは女房お袖

兩人　ヤ、、こりやどうだ。

ト思ひ入れ。これより本調子の合ひ方になり、お袖、苦しきこなしあつて

そで　同じ合圖に二人の夫、手引きなしたは疾よりも、わたしが命を捨てる覺悟。只恥かしいは與茂七どの、わたしが操を破りし元は、義理ある父さん姉さんの、敵が討ちたさ一つには、お前が長らへゐやしやんすとは、神ならぬ身の夢にも知らず、矢ッ張りいつぞや淺草の、裏田圃にて父さんと、同じその夜に人手にかゝり、死なしやんしたと思うたゆゑ、お前の恨みも晴らさう爲、直助どのを力と賴み、操を破つた面目なさ、お前に顏が合はされうか。お手にかゝつて死ぬるのが、せめての云ひ譯。

また直助どのには約束の、養父の敵姉さんの、仇を討つたるその後は、この書置に添へてある、わしが一人の兄さんを、尋ねてこの譯、云うて聞かせて下さんせ。返す返すも與茂七どの、この世の緣は薄くとも、未來は同じ蓮の上、夫婦になつて下さりませ、賴みますわいなア。

トこなし。與茂七、思ひ入れあつて

與茂　出かした女房。其方が在所を探せしも、いつぞや計らず淺草にて、この與茂七が所持なす密書、手に取り見たる女ゆゑ、不便ながらも品により、命は身共が貰はんと、思ひ居りしにかゝる成行き。さはさりながら合點ゆかぬは、何を證據に某が、裏田圃にて人手にかゝり、相果てしと

そで　思ひ詰めしは死骸の顏、破れ損じてそれぞとは、知れねど着類は見覺えある、お前の定紋、それゆゑに。

與茂　ヤ、、それにて思ひ合はすれば、奧田將監が悴庄三郎と、仔細あつて互ひに衣類を脫ぎ替へしが、さては身共に遺恨ある者、この與茂七と取違へ、騙し討ちに討つたるか。

直助　ヤ、、すりや中田圃にて殺したは、奧田の悴、庄三郎どのであつたか。ホ、ホイ。

ト悄りする。
與茂　さてはおのれが庄三郎を
ト詰め寄るを
そで　モシ。
ト與茂七を留め
この書置を兄さんに、逢うたらどうぞ
ト差出す。直助取つて、臍の緒の書き物を見て
直助　元宮三太夫娘袖。
トまた大悄り。
ヤ、すりやお袖が親は元宮の
そで　アイ。
ト思ひ入れ。直助、手早く與茂七の一腰を取つて、お袖の首を打ち落し、一腰を投げ出して摚と坐る。
與茂　ヤ、女が首を
直助　打たねばならぬ云ひ譯は
ト出刃を腹へ突ッ込み、苦しき思ひ入れ。
與茂　所詮助けて置かれぬ權兵衞、さはさりながら何ゆゑに
直助　人の皮着た畜生が、往生際の懺悔ばなし、聞いて下され、與茂七どの。

與茂　ヤ、なんと。
トこれより竹笛入りの合ひ方になり、直助こなしあつて
直助　元この直助は奥田の家來、身状が悪さに主人の勘當因果の起りはこのお袖、附けつ廻しつ口說いても、得心せぬは夫があるゆゑ、與茂七殺したその上で、この身の願ひを叶へんと、裏田圃での暗まぎれ、騙し討ちに殺したは、古主の御子息庄三どのと、聞いて知つたは、たつた今、親兄夫の仇敵、討つてやらうと僞つて、女房にしたは情ない、この直助が血を分けた、妹と知つたはこの書き物、槍一筋の親は侍ひ、その子は畜生主殺し、末世に殘る直助權兵衞。
與茂　すりや、それゆゑにこの切腹、まだしも惡念發起は奇特。
直助　地獄へ急ぐ置き土産、いつぞや手に入る廻文狀。
ト廻文狀を出す。與茂七取つて
與茂　慥かに落手、未來成佛し
トこの時、表に窺ひゐたる長藏、ツカ〳〵と內へ入り
長藏　さては鹽冶の
ト廻文狀へ手をかけるを、與茂七、手早く白刃を取

つて長藏を切り下げ

與茂　飛んで火に入る

ト刀を拔く。これにて長藏、見事に中返りする。與茂七、見事にこれを蹴返す。極まり頭。

直助　南無阿彌陀佛。

ト引廻す。與茂七、廻文狀を口に咬へ、後手に長藏に止めを刺す。この見得よろしく、

幕

大詰

夢の場
蛇山庵室の場

役名——民谷伊右衞門。伊右衞門母、お熊。近藤源四郞。秋山長兵衞。小林平内。商賣り、半六。植木屋、勘太。魚屋、三吉。船頭、浪藏。關口官藏。下部、伴助。お岩の亡靈。佐藤與茂七。

大詰の口上觸れ濟むと、ドロ〳〵になり、幕の前より銀紙細工にて「心」といふ字を上へ引いて取る。ドロ〳〵烈しく、幕明く。

本舞臺、三間の間、正面、緣側附きの亭屋體、伊豫簾かけあり、左右の柱に七夕の短冊竹を立て、屋根より軒づらへ唐茄子這ひまとひあり、入り口、栗丸太の枝折り門、爰へも唐茄子まとひある仕掛け、あたりは萩の盛り、百姓家の體。ドロ〳〵打上げる。

ト唄淨瑠璃、トヒョとなり、鷹一羽、外れて来り屋體の中へ入る。唄一くさり切れる。誂らへの合ひ方、向うより伊右衞門、袴、着流し、大小、庭下駄を穿き朝顏を描きし綺麗なる切子燈籠を持ち、後より長兵衞、綺麗なる奴の拵らへにて、首玉の附きし犬を曳いて出る。この途端に正面の簾卷きあげる。内にお岩、模樣やつし、夏なりの振り袖、美しき在所娘の拵らへにて糸車にて糸を繰りゐる。よき所に綺麗なる行燈を灯しある。その上に件の鷹とまりゐる體。空には月を引出す。舞臺一面、螢むらがる。

伊右　天の川、淺瀨白浪ふくる夜を
いはうらみて渡る鵲の橋……鵲ならぬこの鷹の、外れてや爰へ羽を休め

伊右　秘藏の逸物いづれにと、尋ね来りしあの庵、女竹に結ぶ短冊は

長兵　ほんに今宵は七月の、七夕祭り星合の、その日に外れた小霞は、天の川へ飛びはせまいか。
伊右　何を阿房な……併し外れたる鷹は、慥かにこのあたりぢや、サヽ、尋ねてくれ〳〵。
ト思ひ入れ、また唄淨瑠璃になり、両人、門口へ來る。長兵衞、内を覗いて愕りし
長兵　モシ、旦那〳〵、御覧じませ。あのやうな美しい女が、糸をとつて居りまする。
伊右　ナニ、美しい女が糸を曳いてゐるとか。
長兵　左様でござりまする。
伊右　ドリヤ〳〵……成る程、鄙の住居には珍らしい女。其方は案内して、鷹の事を問うて見ぬか。
長兵　左様いたしませう。
ト内へ入り
コレ〳〵、姐え〳〵、おらが旦那が合さしつた鷹が外れて、行くへが知れぬが、もし爰の内へ舞ひ込みはせなんだか、どうだ〳〵。
いは　ハイ、その鷹は、コレ御覧じませ、わたしが側へ來て、此やうにとまつて居りますわいなア。
長兵　イヤア、こいつは妙々。そんなら旦那を呼び申して來よう……モシ〳〵旦那、鷹が居ります居ります。
伊右　オヽ、左様か〳〵。然らば貰ひに参らうか、其方も参れ。
ト門口へ來り
女中、免しやれ。
ト内へ入り、あたりをちよつと見て
さて〳〵風雅な住居ぢやな。イヤ、手前ことは、此あたりに住居いたす者ぢやが、今日小鳥狩りに罷り出で、手飼ひの鷹が外れたぢや。聞けばこの家へ參つたとの事、申し受けて歸りたいが、渡してはくれまいか。
いは　これはマア、改まりましたお頼み。あなた様の手飼ひのお鷹とあるなれば、御遠慮なう御持参遊ばしませいな。
伊右　それは忝ない。然らば持ち参るでござらうが、ア、夜に入つて歩行いたすは道の程。コレ、さぞ暗うて難儀な事であらうな。
長兵　モシ〳〵旦那、ナニ暗い事がござりませう。今晩は七夕の祭り。アレ〳〵、お月様がお上がりなされて、晝のやうでござります。殊にあなたはお狩りの御用意とあつて、お手細工のその切子燈籠、それを灯して参れば、お提

灯より明るうござります。サヽ、お歸りなされ〳〵

ト云ひながら、切子燈籠を軒へ掛け、心なしにせき立てる。

伊右　これはしたり、さて、おのれ氣のきかぬ奴ぢや。あれ程表は暗いではないか。暗いによつて歸らぬと申すに、おのればかり月夜ぢやと申すが、斯うしやれ、この鷹を据ゑて、その犬を曳いて、おのればかり、先へ歸りをれ歸りをれ。たわけ面め。

トこれにて長兵衞、ムツとしたる思ひ入れにて

長兵　コレ〳〵、あんまりそんな大風な事を云ふなえ。今でこそこなたの折助になつて、旦那々々と云ふが、以前はおれも朋輩の秋山長兵衞、犬も朋輩、鷹も朋輩、曳いて歸らば、サア貴樣が曳け。イヤ、てめえ曳いて行け行け。

ト犬の綱を伊右衞門に投げつける。

伊右　イヤ、こいつが〳〵。以前は以前、只今は予が折助ではないか。おのれ曳いて、歸りをれ〳〵。

長兵　ナニ予が折助だ。コレ、あんまり大風を云ふな。今でこそ出世して大祿とり。以前は民谷伊右衞門とて、われもヒツテンテレツクでナ、嫌がられた惡仲間。女房のお岩も駈落ちして行くへなし、その一件でおいらも此ざま。それといふも、われがした事だワ。畜生を曳いて歸りやアがれ。

伊右　イヤ、おのれ歸りをれ。

ト兩方より犬を突きやり

長兵　オ、とき〳〵〳〵。

トけしかける。犬は吠える。お岩。この中へ入つて

いは　これはしたり、マア〳〵お待ちなされませ。其やうにばかり仰しやらいでもよいぢやござりませぬか。承りますれば、主家來とはいふものゝ、以前は御朋輩と仰しやるからは、お二人樣のその仲を、わたしがお貰ひ申しませう。左樣なされて下さりませいなア

伊右　主の其方が左樣に申せば、身共は隨分この者と、仲直りも致し遣はさうが

長兵　相手の民谷が承知なら、此方にも云ひ分は無いが、コレお孃、そもじ、仲人に入るか。

いは　アイ、わたしが仲を結ぶわいなア。

長兵　そいつは面白い……イヤ、これ〳〵、爰に用意して來た酒がある。爰で始めようか。

ト腰に附けたる瓢簞を取出し

姐え、茶碗を貸さつし。
いは　アイ／＼。
ト湯呑を出し
何はなくとも、コレ／＼爰に、今日の節句を祝うたさし
さば、これなと當座のお肴に。
ト鉢の儘出す。
伊右　イヤ、さしさばとは面白い。其方とわしと其さしさば
のやうに、二人斯樣に引ッ附いてゐたいわいの。
トしなだれる。
いは　これはしたり、わたしがやうな在所女に、なんのあ
なたが
伊右　これは痛み入つたお詞。只今にては身共は獨身。そ
の證人は、それ／＼、その折助ぢやて。
長兵　さうサ／＼。女房もあつたが、どうした事やら行く
へなし。マア、何にしろ、亭主役に姐御、始めさつし。
いは　そんならわたしが、お始め申して。
ト長兵衛酌して、飲む思ひ入れあつて
このお杯は、どなたへお上げ申しませう。
伊右　差づめ我れらが戴きませうか。
長兵　さうサ／＼、この旦那へ、さしさば／＼。

いは　憚りながら
伊右　戴きませう。
ト兩人酒を飲み、嫌らしく寄り添ふ。
長兵　コレ／＼、旦那の伊右衛門、朋輩の折助にも、飲ま
せてくれぬか／＼。
伊右　成る程、おのれへ獻すワ／＼。
長兵　イヤ有り難いな。
ト瓢簞を取つて無暗に飲む。
伊右　コレ／＼折助、ちと廻さぬか／＼。
長兵　ナニ廻さぬかとは、おれが廻せば善次舞だ。今の流
行りは神事舞だな。
いは　その舞、舞うて見せなさんせ。
長兵　どうして／＼、あれは舞へまい。
伊右　そこを我れらが頼みぢやほどに
長兵　イヤ／＼、御免だ／＼。
伊右　コレ／＼、手傳うてくりやれ。
いは　アイ／＼。舞はんせいなア／＼。
長兵　イヤこれは迷惑。
ト鳴り物になり、伊右衛門お岩二人して、長兵衛を摑
まへて、目を押へて、クル／＼廻して突きはなす。長

兵衞、グル／＼廻りながら下座へ入る。これを見て、犬も吠えなから一緒に附いて入る。あと合ひ方になり兩人殘り、顏見合せて

伊右　ハテ、たわけた奴ではないか。……イヤ、それはさうと、其方は、この邊の百姓の娘なぞといふ事か、左樣か／＼。

いは　アイ、わたしや此あたりの民家に育ちし、賤の女子にござりまする。

伊右　ア丶、其方は民家の娘か。民家の文字は變れども、いはゞ我れらが家名にて、民家は民谷。

いは　すりや、あなたの御家名は、民谷さまと申しまするか

伊右　いかにも民谷……して、其方の名は何といふぞ。

いは　アイ、わたしがその名は

ト思ひ入れあつて、あたりを見廻す。薄く風の音、竹に結びし七夕の短冊、ヒラ／＼と落ちて、お岩の傍へ吹きくるを、手早く取つて見て、思ひ入れ。

即ちこれが私しの

ト差出す。伊右衞門取つて、その歌を見て

伊右　こりや七夕へ捧げたる、百人一首の歌……「瀬をはやみ、岩にせかるゝ瀧川の

いは　われても末に逢はんとぞ思ふ」……われても末に

ト伊右衞門の顏をチッと見込み

逢うてたまはれ、民谷さま。

伊右　ヤ、さういふ其方は

いは　岩にせかるゝその岩が、思ふ男は、お前ならでは。

ト膝にもたれ、思ひ入れ。

伊右　岩によう似た賤の女の、振りの姿は以前に變らぬ、妻のお岩に

いは　岩にせかれしわたしが戀人。今日からわたしを

伊右　色にするのぢや。コレ。

ト引寄せる。

いは　また移り氣の

伊右　移り易きは人心。

ト褄の端を引き、刀を提げて、ヅカ／＼と屏風の内へ引く

いは　誰れも見えねど、アレ／＼鷹が

伊右　下世話で云はゞ夜鷹とも

いは　そんならわたしや夜鷹かえ。

伊右　灯があつては

ト丹檠の灯を消す。

いは　アモシ、蚊遣りも無いに。
伊右　ほんに藪蚊が
　ト團扇を持つてあふぐと、殘らず螢ゆゑ
ヤ、螢の蟲が
いは　身で身を焦す螢火も、露よりもろき果敢ない朝顏、
　日の目にあはゞ忽ちに
　ト燈籠に目を附ける。
伊右　情るゝ花も
いは　露の命も
伊右　咲く朝顏も
いは　吹く秋風も
伊右　ヤ。
いは　オヽさむ。
　ト伊右衞門にもたれかゝろ。唄になり、伊豫簾下りる。
　合ひ方になり、奥より長兵衞、件の犬を曳いて出て來
　て
長兵　ア、醉つたぞ〳〵。酒を飮んで善次舞をしたから、
　誠に目が廻つて、アレ〳〵、まだ此やうに、そこら
　中がグル〳〵と廻るワ……併し、あの民谷めは、爰
　の娘をしめたかしらぬ。エヽ、畜生め。

　ト犬にふざけると、犬は怒つて長兵衞の頸へくひつき、
　踏みちらして逃げ込む。
オヽ、痛い〳〵、あの畜生めは、長い頭を既に嚙らうと
しをつた。コレ、民谷氏々々々……ドレ、ちつと様子を
窺つてやらう。
　ト簾の隙間から内を覗き、悧りしたる思ひ入れ。
ヤヽヽヽ、ありやアなんだ〳〵。今の娘のあの顏は、
ありやア人間ぢやアあるまい〳〵。サア〳〵、こいつは
爰にはゐられぬ。この燈籠でも提げて、早く逃げて行か
うか。
　ト軒の切子燈籠へ手をかける途端、ドロ〳〵になり、
　燈籠へお岩の怖き顏現はれる。長兵衞「ワッ」と云つて
　腰をぬかし
これはどうだ〳〵、とんだ物が……コレ、民谷どの〳〵。
　ト呼び歩き、思はず軒を見ると、遣ひまつりし唐茄
　子、殘らずお岩の顏になる。
南無阿彌陀佛々々々々々……爰にはゐられぬ〳〵。
　ト始終ドロ〳〵にて、こけつまろびつ向うへ逃げて入
　る。時の鐘、凄き合ひ方になり、靜かに伊豫簾上がる。
　伊右衞門は鷹を摑ゑ、刀を提げて立ち身。お岩その裾

ト抑へてゐて

いは　こりやモウお前、お歸りなさんすかえ。

伊右　オヽ、夜の更けぬ間に歸宅いたさう。左樣いたして、又の御見を

いは　それ見やしやんせ。お前さんは可愛いお方、お岩さんといふお內儀さんがあるゆゑに、いはゞわたしをお弄りなされて

伊右　イヤ〱、なんの其方を弄らうぞ。併しお岩と申したる、妻もあつたが至つて惡女、殊に心もかたましい、女ゆゑに離別いたして

いは　すりや先妻のお岩さん、それほどまでに愛想がつきて、未來永劫、見捨てる心か。伊右衞門樣。

ト伊右衞門をキッと見詰める。伊右衞門ゾッとしたる思ひ入れ。

伊右　さういふ其方の面ざしが、どうやらお岩に

いは　似たと思うてござんすか。但し面影冴えわたる、あの月影のうつるが如く、月は一つ、影は二つも三つ汐の、岩にせかるゝあの世の苦患を

伊右　ヤヽ、なんと。

いは　エヽ、恨めしい、伊右衞門どの。

伊右　ヤ。

ト飛びのくはずみに、持つたる鷹は鼠と化して、伊右衞門目がけて飛びかゝる、月に雲かゝり薄ドロドロ、黑幕落ちて、舞臺一面に闇の景色。この途端、お岩引拔いて、物凄き幽靈の姿に變る。大ドロドロ。伊右衞門キッと構へて

伊右　さてこそお岩が執念の、鼠となつて妨げなすか。

いは　共に奈落へ誘引せん。來れや民谷。

伊右　愚かや、立去れ。

ト拔いて切つてかゝる。大ドロ〱、燒酎火數多あはれ、伊右衞門を妨げる。伊右衞門、心火を切り拂ひ〱精魂疲れて苦しむ思ひ入れ。よきキッカケに絲車へ心火うつり、車は忽ち火焰となつて、片輪車に火の附いたまゝクル〱と廻る。お岩の亡靈、伊右衞門を連理引きに引きつけ、キットなり、よろしく見得。ドロ〱にて兩人の姿をせりおろす。この時、幕明きの心の文字、下へ引下ろす。大ドロ〱にて、百萬遍の鉦の音、念佛の聲聞える。黑幕切つておとす。黑幕のうち、道具變る。日覆より雪降つてゐる。

本舞臺、庵室の體。上の方、障子屋體、眞中に紙帳吊つて、內に伊右衛門、病氣にて寢てゐる體。丸太の門口。外には一面雪つもりし體にて、白布を敷き、よき所に流れ灌頂、手桶添へあり、柳に雪つもりし景色、爰に淨念、黑衣、坊主にて鉦を打ち、植木屋の勘太、蒲鉾屋の半六、魚屋の三吉、船頭の浪藏、珠數に取りつき、百萬遍の體。源四郎、白半天、股引、世話六部にて、笈を下ろし、足を洗うてゐる。すべて數の內、蛇山の道具。雪降りにて、よろしく道具納まる。

淨念　願意宿得平等一切精靈發菩提心、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……これはどなたも御苦勞でござります。

勘太　イヤモウ、わしらは同家中に勤めてゐるうちから、懇ろな人ゆゑ、一倍氣の毒に思ふのサ。

半六　さうでござる。殿樣の屋敷がたりむくつてから、此やうに蒲鉾賣りで世を渡つて、今では町人の方が、はるか增しでござるよ。

三吉　さういへばお前方も、二本差して二百石も取つた衆だが、今では一日が又兵衛取りの職人とは、洒落た身の上でござるの。

浪藏　それ／＼、屋敷出の衆が、おいらの長屋へ引越して、庭仕事やら商人やら、よく早く覺えたものだ。おいらは武士になつたら、さぞ腰が重からうと思ふの。

淨念　イヤモウ、合長屋だけ、深切な事でござります。時に六部どのは、今日江戸へ着かしつたか。

源四　左樣でござります。生國は奧州生れ、昨日お江戸へ着きまして、道々も聞いて來ましたが、六部宿をさつしやる庵室との事、逗留內はお賴み申します。

淨念　イヤモウ、ゆるりと江戸も見物さつしやるがよい。

源四　ハイ／＼、左樣いたして參りませう。

半六　六部どの、奧州は、どの邊でござる。

源四　ハイ、赤穗でござりまする。

浪藏　ア、鹽冶どのゝ御城下だの。

源四　左樣でござりまする。

ト　この聲を聞き、勘太と半六、六部を見て

二人　さう云はしつしやるは、源四郎どのではござらぬか。

源四　これは眞壁、堀口の御兩所。ヤレ／＼、久しぶりでお目にかゝりました。

勘太　まづは御健勝の段

半六　お互ひに大慶に存じます。

源四　イヤモウ、達者で居ると、申すのみの儀でござる。お互ひに浪人仕り。亡君御菩提の爲と存じ、廻國に出ましてござるが、各々方はそのお姿、未だ好い主取りもござりませぬかな。
勘太　左やう／＼、イヤモウ、僅かな知行を取らうより、その日暮らしが増しでござりますて。
半六　私しなぞは商ひにかゝりまして
源四　ア、左やうか。して、見ますれば百萬遍の樣子、それも町家の附合ひとやら申す儀でござるかな。
三吉　ア、コレ六郎さん、ぬし達は以前の朋輩だといつたが、この庵に掛り人の病人の、祈禱の爲の百萬遍でござる。
浪藏　幸ひお前も、念佛を助けて下さりませ。
半六　ア、コレ／＼、さつぱり忘れてゐました。コレ、源四郎どの、この庵に掛り人の病人は、其許の御子息
勘太　民谷伊右衞門どのでござります。
源四　ヤ、、離縁いたした女房の實子、江戸屋敷に勤め居つた、伊右衞門でござりまするか。
二人　左やうでござる。
淨念　ア、左やうなら、病人どのゝ親御でござりまするか。さう致せば、あの阿母の爲には、このお方はお連れ合かな。
勘太　ア、モシ／＼、そのお話しは少し御遠慮／＼。
ト云ふなといふ思ひ入れ。この時紙帳の中、バタ／＼と音して、病氣にやつれし伊右衞門、刀を引さげ、紙帳を切つて落し、熱氣に浮され、正氣を失ひし體にて走り出て
伊右　おのれお岩め、立去らぬか／＼。
ト白刃を振り廻す。大勢寄りかゝつて押しとめ
皆々　また起りましたか。氣を鎮めてござりませ。皆が居ますぞ／＼
ト取すがつてとめる。伊右衞門、皆々の顏を見て、胸撫でおろし
伊右　ア、夢か……ハテサテ恐ろしい。まだ死なぬ先にこの世から、あの火の車へ……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
ト思ひ入れ。源四郎立ちよつて
源四　コリヤ、ヤイ悴、わりや、この親が目にかゝらぬか。
伊右　ヤ、誠にお前は親仁樣。どうしてこれへ。
源四　年寄つて浪人すりや、二君に仕へる所存もなく、後

世を願うて廻國修行。

伊右　すりや親人には、主取りなさらぬお心がけとな。

勘太　我れ／＼とてもその通り、よしなき企て致さうより

半六　その日暮らしが誠に氣樂サ。

源四　して、其方が病氣の起りは。

伊右　僅かな女の死靈の祟り。

源四　ハテサテ、それは難儀であらうに、いづれも方の何かとお世話して少しも

伊右　ハイ、心よいやら惡いやら、折に觸れては熱の差引き。どうでこの身は浪人の、有附きあるまで庵主のお世話。

源四　存ぜぬ事とて、何かとあなたの

淨念　イヤモウ、御懇ろゆゑ愚僧が方に。

源四　然らば拙者も暫らく御庵に

伊右　どうで、この雪のやむまでは、親も倅も掛り人。どなたも後方。

皆々　また念佛を

伊右　お頼み申します。

ト時の鐘になり、淨念案内して、源四郎皆々奧へ入る。伊右衛門殘つて思ひ入れ。上の方障子を明け、お熊、同じく病ひ鉢巻にて出て來り

くま　コレ、伊右衛門、緣の切れた親仁どの、思ひがけなうこの庵へ。わしも離別のこの後は、高野の家へ取り入つて、頂戴したるあの書き物、今にでも持つて行きや、大なり小なり御褒美だやが、其方に渡したあの墨附、必らず共に

伊右　どうで長らくこの庵に、掛つてもゐられぬゆゑ、平内どのを頼み込み、近々高野へ有りつく手段。それもお前の下された、御判の据つた書き物ゆゑ

くま　それは耳寄り。併し高野へ奉公と、聞いて顏面目た親仁どの、わしらが心に叶はぬ事を

伊右　それも合點。いづれ近々この身の落附き。それは格別、して母人は、いつもの鼠が

くま　イヤモウ、今日も數多の鼠、これも大方

伊右　子年のお岩が、親子の者を苦しむる、思へば／＼、執念深い女め。

ト口惜しさうに思ひ入れ。雪降つてゐる、鐘のツトメたかすめ、向うより小林平内、半合羽、大小、足駄に傘。赤合羽の中間、挾み箱を擔ぎ、侍ひ一人、菅笠合羽にて附いて出て、門口にて

平内　この庵室に同居のお方、伊右衛門どのに用事ござつて。

ト この聲を聞き、伊右衛門思ひ入れ。

伊右　これは小林平内どの、この大雪に。サヽ、これへ。

平内　許しめされい。

ト 上座へ通り

この程内談いたせし通り、貴公御所持の殿の墨附、拙者も披見のその上にて、いよ〳〵御判に相違なくば、貴公を同道いたせよとの仰せ。お目見得の節の用意の衣服、大小相添へ。家來その品。

中間　ハツ。

ト 廣蓋に衣服大小を載せて差出す。お熊、嬉しさうに受取り、伊右衛門の所へ持つて行き

くま　これは〳〵あなた樣、このマア雪に、御苦勞に存じまする。

平内　伊右衛門どの、殿より下され物、受納おしやれ。

伊右　忝なう存じまする。然らばお目見得の儀は、貴殿方より

平内　それも其許所持おしやる、殿の御判の据りし墨附、披見いたさう。

ト 伊右衛門思ひ入れ

伊右　サア、その墨附の儀は、かゝる他人の入り込む草庵、殊には病中、それゆゑ外へ預け置きましてござれば、後方までに。

ト お熊、心得ぬ思ひ入れにて

くま　コレ〳〵悴、あれほど其方に渡した大事のもの

伊右　ハテ、お氣遣ひなされまするな。いづれ後方御披見あつて

平内　然らば拙者は又ぞろこれへ。必らず共にその節は

伊右　お目にかけるでござりませう。御前よろしうお暇いたさう。

平内　

ト 合ひ方、時の鐘になり、件の品を殘し、平内は家來引つれ引返して入る。お熊、側へ寄り

くま　コレ悴、あの大切な書き物を、其方は、なんで秋山、あの品渡して少しのうちを

伊右　それも矢ツ張りこの身の爲に、訴人しようと申した

くま　すりや彼の品で

伊右　取返して參ります。お氣遣ひなされまするな。

ト お熊思ひ入れ。この時、暮れ六ツの鐘鳴る。

くま　ありやもう暮れ六ツ。

伊右　お前もわしも熱氣の時刻、冷えないやうになされませ。

くま　わが身も大事に。

伊右　ドリヤ、灯をつけませうか。

ト合ひ方、時の鐘になり、お熊、奥へ入る。伊右衛門行燈へ灯を入れ、門口を明けて

ア、、つもつたワ。眞白になつたな。

トあたりを見廻す。門口に菰をかむり、秋山長兵衛、寢てゐる體。よく〳〵見て

ア、、この大雪に軒下の宿無し。初雪の樽拾ひよりも、みじめな態だ。

ト云ひながら、濡れ灌頂に向ひ、卒塔婆を見て、

戒名附けても俗名の、矢張りお岩と記し置くは、世上の人の回向なと、受けたらよもや浮まうと、後の祭りも怖さが一倍。産後に死んだ女房子の、せめて未來を

ト手桶の中の柄杓を取つて側へ寄る。寢鳥、薄ドロドドロ、一つ鉦になる。伊右衛門、白布の上へ水をかける。この水、布の上で心火と燃える。伊右衛門、悔りしてタヂ〳〵となる。ドロ〳〵烈しく、雪は頻りに降る。布の中よりお岩の亡靈、産女のこしらへ、白裝束、亂れ髪、腰より下は血に染みし姿、極く凄き思ひ入れにて、子を抱いてスツと現はれ出る。伊右衛門フツと見附け、ギヨツとして、後へ退る。入れかはつて、亡靈上の方へ行く。亡靈の足跡、雪の上へ血にて一つ〳〵附く事。伊右衛門、後じさりに內へ入る。亡靈も續いて入る。內に、引千切りし紙帳ちらばつてゐる。その上を亡靈踏んで廻る。これにも血の足跡附く事よろしく、亡靈、お熊の寢所の方をヂロリと見やつて、恨めしげな樣子にて立ち身。伊右衛門、側へ寄つて思ひ入れ。

ハテ、執念の恐ろしい……コレ、亡者ながらもよく聞けよ。喜兵衛が娘を嫁にとつたも、高野の邸へ入り込む心。義士の面々手引きしようと、不義士と見せても心は忠義、それをあざとい女の恨み、舅も嫁もおれが手に、かけさせたのも汝がなす業。その上伊藤の後家も乳人も、水死したのも死靈の祟り。殊に水子の男子まで横死させたも、根葉を斷やさん亡者の祟りか。エ、、恐ろしい女めだなア。

トきつと云ふ。亡靈、この時振りかへり、抱いたる子を見せる。伊右衛門、聞き耳立てて

ヤ、そんならあの子は、亡者の手しほで
ト嬉しげに赤兒を受取り
まだしも女房、出かした／＼。その心なら浮んでくれろ。
南無阿彌陀佛々々々々々。
ト兒を抱いて念佛を云ふ。亡靈、兩手にて耳を押へ、
きかぬ思ひ入れ。このとき門口に臥したる長兵衛、魘
はれ聲にて起上がり

長兵　ア、また鼠が……畜生め／＼。
ト刎ね起きると、ドロ／＼。鼠、數多むらがつて障子
の内へ入る。伊右衛門、吃りして、抱いたる赤兒を取
落す。この子は忽ち石地藏になる。これにて伊右衛門
呆れし思ひ入れにて振りかへる。この時亡靈、ドロリ
と見て

いほ　オホヽヽヽヽヽ
ト皺枯れたる聲にて凄く笑ひながら、壁際にて見事に
消える。始終、大ドロ／＼、障子の内にてお熊の唸り
聲聞える。伊右衛門思ひ入れあつて

伊右　ハテ、恐ろしい。
ト思ひ入れ。ドロ／＼打上げる。長兵衛心づき、内を
覗いて

長兵　コレ、そこに居るのは、伊右衛門どのか。

伊右　秋山どの、ヤレ／＼、こなたを尋ねる最中。コレ、
貴樣に渡した書き物にて、高野の家に有り附けた。早く
あの品、戻して下さい／＼。

長兵　サア／＼、戻すよ／＼。おれもこなたに無心云ふ、
金の代りのあの書附、持つて歸つたその夜から、どこか
らうせるか大きな鼠、髮の毛爪まで嚙られて、誠に難儀
だ、返してしまはう／＼。

伊右　すりや、こなたへも鼠が附いたか。ア、これもお
岩が……南無阿彌陀佛々々々々々……サア、返す氣な
れば、あの書き物を

長兵　返すは返すが貴樣の仕業で、多くの人を殺したゆゑ、
既にその科此方へかゝつた。殊に官藏件助まで、昔傍輩
への人殺し。コレ／＼民谷、これには大方、譯があらう
な／＼。

伊右　サア／＼、その譯といふは、元おれが主は高野の家
中の娘ゆゑ、師直さまへ手蔓なよさに、件のおれが浪人
の、身を苦に病んで高野の家へ、仕官の願ひ、それがこ
の節首尾濟みあつて
ト話をしてゐるうち、よき時分、ドロ／＼になり、上

の欄間の中より、お岩の亡靈、恐ろしき樣にて、長兵衛の頭の上へ眞逆樣に下りる仕掛け、長兵衛の襟にかけたる手拭にて、長兵衛を縊り殺す。長兵衛「ワッ」と聲を立てるゆゑ、亡靈、長兵衛の口を押へる。長兵衛落入る。直に襟首を捕へしまゝ、長兵衛の體を中に浮かせて欄間の間へ引摺り込む。伊右衛門はフッと見附け恟りし、立ち寄らんとするとき、天井より血汐、タラタラと落ちる。伊右衛門、キッと見上げて

これもお岩が……重ね〴〵も恐ろしい。

トこの時、ドロ〳〵打上げる。上より墨附、伊右衛門の前へ落ちる。手早く拾ひ取つて

こりや秋山へ預けし墨附。これさへあれば

ト思ひ入れ。向うより小林平内、身輕なる姿になり、捕り手四人を從へ、走り出て來て、門口へ寄り

平内　伊右衛門どの〳〵、先刻の契約、開見の爲に早速これへ。

伊右　それは御苦勞、さりながら、貴公の出立ち、何とも以て。

平内　かゝる姿も高野の家中、伊藤喜兵衛が親子の者ども殺害なせしは關口官藏、下部伴助二人が仕業と、早速召捕り、路にて預け、次手に書き物披見の爲。サ、少しも早う

伊右　委細承知仕る。然らばこれにて内見あつて、何分よろしく

ト差出す。平内取上げると、薄ドロになり、件の鼠出る。墨附を開くと、この書き物鼠喰ひにて判とも文言も喰ひ散らしある體。平内恟りし

平内　ヤ、こりやコレ御判も文言も、鼠の齒にて喰ひ裂きあれば、反故も同然。こりやどうぢや。

ト呆れる。伊右衛門取つて、よく〳〵見て

伊右　誠に喰ひ裂く鼠の仕業。これもお岩が死靈の業か。ハテ、是非もない。

平内　エヽ、役にも立たぬ暫時の隙入り、この旨主人へ言上いたさん。さすれば最前渡せし品々、家來ども、取上げい。

捕手　ハツ。

ト件の衣服を廣蓋のまゝ取上げる。

伊右　すりや下されし品々まで

平内　持歸つて右のあらまし、披露いたさん。餘りと申せば、たわけた民谷。イケ馬鹿々々しい。

伊右　足早に向うへ入る。伊右衛門見送り

トあざ笑ふ。時の太鼓になり、平内、捕り手を連れ、

業も死靈の祟り、もうこの上は、立てた卒塔婆も

折角母の志し、この身の出世のこの墨附、鼠の仕

ト門口へ行かうとする。最前より窺ひゐたりし近藤源

四郎、走り寄つて伊右衛門を引留め、キッとなつて

源四　コリヤ伜、わりや腹立つてあの卒塔婆を、踹にもか

けん心ぢやな。

伊右　施餓鬼回向も聞き入れぬ、あの亡者めが戒名なりと

ト行くを捕へ、思ひ入れあつて

源四　ヤイ、道わきまへぬ不忠者めが。……こりやヤイ、

聞分けのない亡者より、無得心な不義士のおのれ。あの

母親が縁につれ、敵高野の館へ取入り、奉公願ふ道知ら

ず。さすれば親の身共まで、不忠の汚名を取るわいやい

エ、、見下げ果てたる畜生め。

伊右　親仁どの、敵の館へへつらふも、義士の輩手引きの

ト思ひ入れ。伊右衛門こなしあつて

爲に。

源四　まだ吐かすか。なんのおのれにその一言、この親は

え、聞くまい。か、る未練な民谷の一族、武士の風上に

置かれぬ奴。親が手にかけ

ト腰へ手をかけ、刃物なきゆゑ思ひ入れ。

以前にあらぬ、今は出家も同然な、人に物乞ふ修行の身。

ト側にある伏せ鉦の撞木を取つて、伊右衛門をした、

かに打ち

勘當ぢや。親でも子でもないおのれ。

伊右　エ、、左樣なら親仁樣、アノ私しを

源四　親ではない。エ、、勝手にしをれ。

ト撞木を打ち附ける。唄になり、源四郎、立腹の思ひ

入れにて、奥へ入る。伊右衛門殘つてこなし。

伊右　昔氣質の偏屈親仁、勘當されたも、矢ッ張りこれも

お岩の死靈か……イヤ、呆れたものだ。

ト思ひ入れ。この時、障子の中にて物音して、お熊の

苦しむ聲。

くま　アレ〳〵、鼠が〳〵

ト狂ひ出て、のたうち廻る。所々へ鼠が群がる。薄ド

ロドロ。伊右衛門介抱して

伊右　コレ〳〵阿母、心を慥かに、氣を慥かに。コレ阿母

コレ、……エ、、畜生め。

ト撞木を取つて鼠を追ひ廻し

天保七年七月森田座上演

七世市川海老藏の伊右衛門　　三世尾上菊五郎のお岩の靈

モシ〳〵、また刻限だ。お頼み申します〳〵。
トこの聲に、淨念はじめ以前の四人、出て來り
淨念　起りましたか〳〵。少つとも早く、お念佛〳〵。
四人　心得ました〳〵。
ト苦しむお熊を珠數の內にとりこめ
サア、お念佛〳〵。
淨念　南無阿彌陀ン佛。
四人　南無阿彌陀ン佛〳〵。
ト伊右衛門も珠數に取附き、百萬遍を繰り出す。お熊矢張り苦しむ。薄ドロ〳〵、よき時分、お熊の側へお岩の亡靈、白裝束、亂れ髮にてホツと現はれ、お熊を捕へ、惣身をゆすり〳〵、いろ〳〵と引廻す。お熊、ます〳〵苦しむ。皆々これを知らず
伊右　サア〳〵、念佛々々。
ト皆々念佛を高らかに唱へる。亡靈、伊右衛門の顏を見詰めながらお熊を苦しめる。伊右衛門思ひ入れ。
又も死靈の眼前に……サア、念佛々々。
皆々　なまアいだ〳〵〳〵。
ト責め念佛になり、亡靈、珠數の中より這ひ出し、耳を押へ、ヨロ〳〵と門口へ行きかける。お熊少し苦しみとまる。淨念、お熊に向ひ
淨念　コレ、阿母、心持ちはどうでござる。
くま　どうした事やら、少し苦痛が
トお熊、伊右衛門、門口を見る。途端にお岩の亡靈、恐ろしき顏色にて振りかへり、兩人を見る。
伊右　ハテ、恐ろしい……サ、、念佛々々。
皆々　南無阿彌陀ン佛〳〵。
トお岩の亡靈、又ヨロ〳〵と歸り來り、珠數の中へ這ひ込む。又お熊を捕へ、探ぐるやら引廻すやら、いろいろに苦しめる。お熊、ます〳〵苦しむ。トヾ亡靈、お熊の咽喉へくらひつく。ワツ〳〵というて咽喉、血だらけになり、落入る。伊右衛門見附け、ギヨツとして
ヤ、、、、、母者人を此やうに
ト立ちかゝる。始終大ドロ〳〵。體の竦むこなし。
皆々この時、フツと亡靈の姿、見えし思ひ入れにて、「ワツ」と驚き、珠數も投げ出し、奥へ逃げて入る。
伊右衛門、刀を取り
おのれ死靈め。
ト白刃を拔いて切り附ける。亡靈、伊右衛門を苦しめ苦しめ、後ずさりに壁のあたりへ寄る。伊右衛門、恐

れて、障子ごしにトンとよろけかゝり、障子倒れる。内に源四郎、首を縊りし體にて死んでゐる。亡靈、壁の中へ消える。一度の仕組み。伊右衛門、恟りして

ヤ、、、、、親仁樣にも首かゝり。兩親ともに暫時の内に……エ、、淺ましき此なきがら、これも誰れゆゑ、お岩めゆゑ。エ、、口惜しい。

ト無念のこなし。バタ〳〵になり、向うより官藏、伴助、一散に走つて來て、内へ駈け込むゆゑ、恟りして飛び退く。後より平内、捕り手を連れ、窺ひ〳〵出て來て、門口に樣子を窺ふ。

官藏　伊右衛門どの〳〵、こなたの舊惡何もかも、拙者が業と云ひ立てゝ、伴助までも繩かゝり

伴助　お前のお身に科もなく、云ひ拔け立つて事納まり、油斷を見濟まし、繩拔けして爰まで來ました。

官藏　少つとも早くこの隙に、落ちさつしやい〳〵。

伊右　何かと貴公の心遣ひ。然らば一先づこの場を落ちのび

二人　影を隱さつしやい〳〵。

伊右　合點だ……併し路銀を

二人　捕つた。

ト伊右衛門に打つてかゝる。拔討ちに二人を切つて捨て

伊右　その手は喰はぬ。おれもさうとは

平内　ソリヤ。

捕手　捕つた〳〵。動くな。

ト踏ん込むを、切り捨て〳〵、見事に殘らず切り立てる。組み子の後より赤合羽に菅笠、中間體の者が窺り門口に窺つてゐる。伊右衛門、身拵らへをし

伊右　死靈の祟りと人殺し、どうで遁がれぬ天の網、併し一旦遁がれるだけは

ト門口へ出かける所を、表より笠を礫に打つ。心得て白刃を拔く。合羽の男、脫ぎ捨てる。佐藤與茂七にて兩人ちよつと立廻つて、キツと見得。

與茂　民谷伊右衛門、爰動くな。

伊右　ヤ、わりやア與茂七、なんで身共を

與茂　女房お袖が義理ある姉、お岩が敵の其方ゆゑ、この與茂七が助太刀して

伊右　いらざる事を。そこ退け佐藤。

與茂　民谷は身共が

ト立廻る。これより薄ドロ、陰火燃えて伊右衛門を苦

三世菊五郎の三回忌に上演したので、丸の中は三世菊五郎。雪降りの景は初演以來で珍らしい。

嘉永五年五月河原崎座上演

七世市川海老藏の伊右衛門　四世尾上菊五郎のお岩の靈

しめ、立廻りのうち鼠數多現はれて、伊右衛門の白刃にまとひ附くゆゑ、思はず白刃を取落すを、すかさず與茂七、伊右衛門に切り附け、立廻り。これにて成佛得脱の

伊右　おのれ、與茂七。

ト立ちかゝる。ドロ〳〵、心火と共に鼠むらがり出で、伊右衛門を苦しむる。與茂七、附け入つてキツと見得。ドロ〳〵烈しく、雪しきりに降る。この見得にて、よろしく

幕

此あと雪を用ひて、十一段目めでたく夜討。

東海道四谷怪談（終り）

(前略)盆狂言の儀種々及相談候處、尾上菊五郎兼々天滿宮信仰にて、此度心願の旨有之、悴松助同道仕、筑紫太宰府へ參詣仕度由、暫く御當地をも相離れ候ゆゑ、御暇乞の口上申上度段、相頼候に付き、打寄相談仕る處、先代私座にて元祖尾上菊五郎、太宰府へ參詣の砌、御名殘を仕り、忠臣藏の狂言、由良之助となせの役儀相勤め、御評判に與り候先例も候得者、右の役儀相勤め、口上申上候樣申聞候處、菊五郎申候者、右大役にて不及儀と辭退仕候故、團十郎始め粂三郎源之助幸四郎其外の者共、端役をも不厭相勤遣し可申候樣、深切に申吳れ候に付、打寄相勤め、漸く得心仕右の役相勤申候、右に付菊五郎、兼て工夫仕置候、四谷宿お岩物語男女之怪談新狂言六幕御座候間、右狂言三幕宛引分け忠臣藏大序より第六段目迄を初日の一番目と仕り、二番目世話物相添、且又後日七段目より敵討迄、怪談三幕、右一番目二番目二日替り狂言と仕り、總座中罷出奉入御覽候(下略)

——初演の口上書——

獨道中五十三驛

畫双六三目の

六反

御贔屓笠頭

附

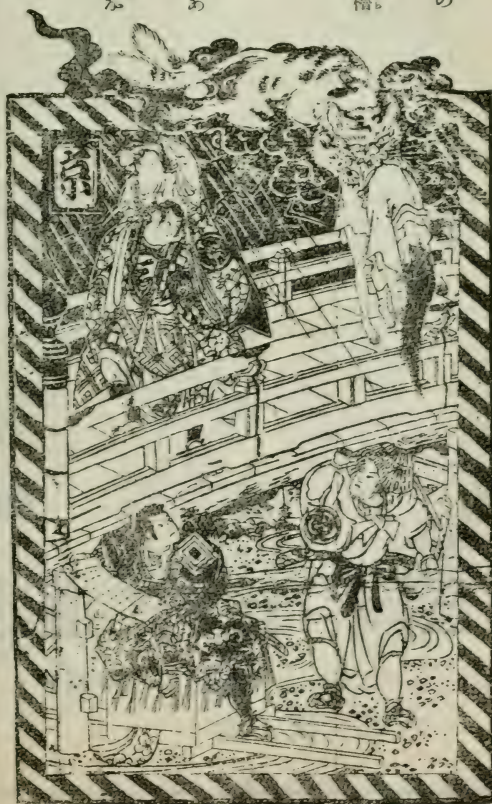
花の東へ若殿の戀女房其輿入を進む乳人重の井が道中双六で浮した作者の手の内に短かき賽を振り出してサア〳〵行かうとせかれてもお供に附添ふ者もなく本の裸でどうこれが業平ならぬ旅衣きつゝ馴れにし妻とてもそぐはぬ縁の妹と脊に負うて昔の芥川これは桂のかはゆさと石部宿のたはむれに縣の小まんと長右衛門これも以前は刀差し今は野末の手綱帯屋に浮き名も伊達の頭冠り與作踊りの中入に草津宿場で持あます腕白者の三吉が乗つたり〳〵雲の上神さそひから街道の名所舊跡殘りなく三つ子の玉島とう〳〵身を日本中に引き馬の駄右衛門が仕入れ荷は由井の吉岡紺屋にて善と惡とを染分手綱

京都守護職由留木某　振込め〳〵　大鳥毛御國入榮
御取立依御召不時參勤

並

花の都の殿造り眞似事の其遊興を大津繪で浮かした趣向の忠臣見世でまんざら赤堀氏とう〳〵國を追出され捨る神より助けたる愛等が武士の石井が重き思ひをいつしか水右衛門流れ渡りし大井川首たけ惚れた戀の淵へ重なる妻は小夜の山子故の闇に呼かける姑護鳥も今日の怪合に頭分は猫石と構へて此事沙汰せねど浪も早手に千里をば一夜に走る桑名屋徳藏舟日暮の全盛に派手な遊びの駿河舞彌勒町の天乙女仕掛は羽衣夏の富士の裾もやう過去物語を曾我菊の弟草なる前生をそれと白井の權八が目じるしの紋どころをゆるりと江戸の水に合うたる龜山染

表のカタリは、この狂言初演の折のものである。下掲の凸版も、初演の櫓下番附の一部である。

本文に挿入した錦絵は、初演のもあるし再演のもある。その一々に説明を附けて置いた。

獨道中五十三驛

京都三條大橋の場
紫宸殿雛祭の場
石山寺道中双六の場
野路の玉川の場
石部宿旅籠屋の場
鈴鹿山だんまりの場
關の地藏堂開帳の場
龜山城下仇討の場
庄野より四日市の場
桑名沖難風の場

序幕

役名——藤川官太夫。大江息女、重の井姫。坊主、願哲。石井半次郎。赤堀源吾。按摩慶政後ニ彌次郎兵衞。由留木馬之助。伊勢參り、五郎吉。里見小源次。大野文平。仕丁、藤作。同、兵內。岩倉運八。馬士、ぐれ八。腰元、藤浪。奴、逸平。腰元若葉。石井左內。奴、大津又平實ハ由留木調之助。馬士、自然生の三吉實ハ丹波與八郎後ニ桑名屋德藏。赤堀水右衞門。帶屋長右衞門後ニ北八。赤羽屋五郎作。飛脚、太郎助。盜人、崖藏。同、かつさき九郎。同、鴨居の鷹八。雲助、灘六。信濃屋後家、おかや。堂守り、西念。女非人、おはぎ。關の小萬。信濃屋お半。一子與之助。白井權八。由井民部之助。鶉の權兵衞。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。上の方に、橋の袂を見せ、よき所に高札場、石の榜示杭。爰に水右衞門、深編笠、大小、尻からげにて、與惣兵衞を殺し、刀を突き立て、手拭にて手疵を結へゐる。官太夫、股立ち、大小にて、九重の印を持ち、願哲、坊主にて、袋入りの雷丸を差し、中間一人を締め殺しゐる。すべて京都三條大橋、夜の體。雨車、時の鐘にて幕明く。

官太　悴、出かした。これこそは九重の印。して、願哲には、雷丸を

願哲　縊り殺して、まんまと此方へ

官太　二品共に、手に入る上は、この身の大望。エヽ、忝ない。併し、伜水右衞門には、薄手を負うたと相見える。少しも早く、この所を。

ト水右衞門、刀を納め、こなしあつて、下座へ入る。

願哲　かねてあなたのお頼みゆゑ、日暮れを待つて日の岡から、附けてくるとも白川筋、たうとう爰の橋詰めで、下郎めは愚僧の引導。官太夫さま、ズッシリとお布施に有附かにやアなりませぬぞえ。

官太　事成就の上からは、褒美は望み次第。先づそれまでは、二品とも、其方へ預ける程に、必らず人目にかゝらぬやう。

ト件の印を渡す。

願哲　そんなら何と仰しやります。御褒美のその代り、この二品を預かれとか。

官太　それこそは、由留木の重寶九重の印。さりながら、その印こそは南天竺の、今有舍那記鵞頓連の祕文を籠めたる守ゆゑ、龍宮城にてこれを望む間、必らず船中を厭ふ。又、その雷丸は、血汐をあやせば忽ちに、雷鳴轟く、稀代の劍。

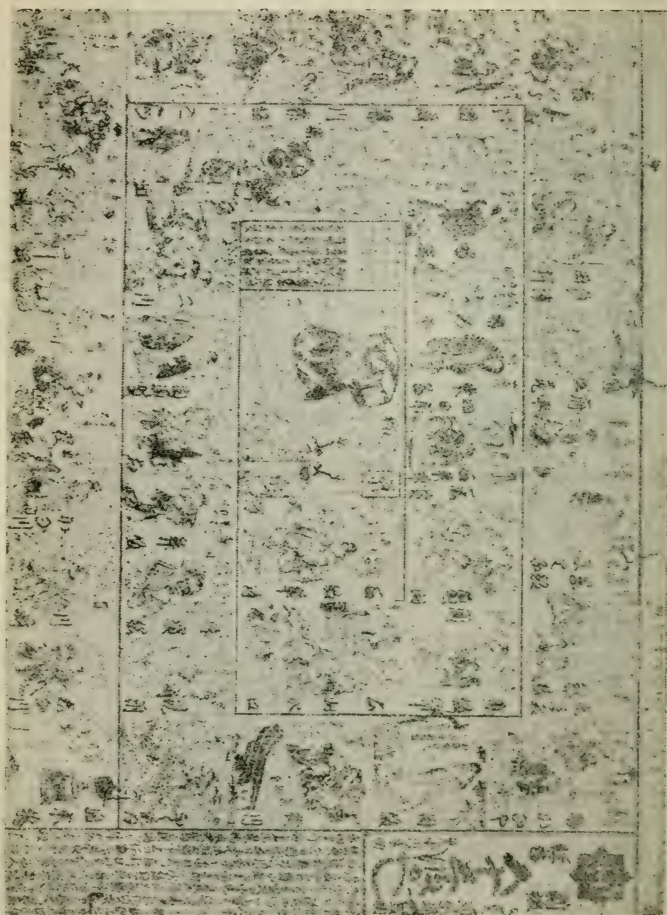
願哲　すりや、この品が、お手に入れば

官太　兄たる若殿馬之助どのは、誠は身が胤にて、小笹の方と密通の折から宿せしを、大殿にも御存じあれども、それを荒立て云ふ時は、家の瑕瑾と、知らぬ顏にて置かるゝうち、大殿には御病氣。その砌り、二品の寶は、弟調之助へ相渡せとの事。さある時には此方の手筈。それゆゑ本國篠山より、與惣兵衞を待ち受け、人知れず討つて捨て、折を見合せ某より、差上げるものならば、家督は差詰め馬之助どの。

願哲　それのみならず、御子息の水右衞門どの、重の井姫に心を掛けられ、遂りし文も途中にて捲上げたれば、どうせ生けては置かれぬ。それはさうと、大切なるこの品を、子供衆二人ありながら、どういふ譯で私しへ

官太　預ける仔細は、水右衞門は、實の伜とは申せども、赤堀の家相續いたし居れば、別家の事なり、また兄の定之進は、幼名源之丞と申して、これなる與惣兵衞が伜。弟源吾めは、兎角事を破り勝ちゆゑ、彼れこれ以て心ならず、それゆゑわざと其方へ。

願哲　エヽ、聞えました。シタガ、二人のこの死骸、此まゝ置くは事の破れ。寺岡ならぬ寺役に、この鴨川へ水雜炊。

初演の櫓下番附（双六の體裁になつてゐるのが面白い）

官太　イヽヤ、計らふ仔細もあれば、矢ッ張り此まゝ。
願哲　然らば懇情は、人知れず、
官太　夜半に紛れて、この場を早う。
願哲　官太夫さま。
官太　願哲坊。
願哲　心得ました。
官太　はや行け。
願哲　ハッ。
ト時の鐘、雨車になり、願哲、二品を持ち、下座へ入る。向うより中間一人、提灯を持ち、跡より長合羽の侍ひ、竹村定之進、傘をさし、頭巾にて顔を隱し出て來る。これにて官太夫、小隱れする。兩人、舞臺へ來り、件の中間、與惣兵衞の死骸に爪づき、よく／＼見て
中間　ヤアコレ、爰に與惣兵衞さまが。人殺し／＼／＼。
ト提灯を捨て、下座へ逃げて入る。定之進は驚ろき、身構へしてゐる。官太夫、そろ／＼花道の方へ行きかける。小柄を拔いて手裏劍に打つ。定之進これを受けとめる。官太夫は向うへ逃げて入る。これを追うて定之進も向うへ追つて入る。時の鐘にて、道具變る。

本舞臺、三間の間、高足の紫宸殿。黒塗り、高欄、同じく欄間。左右に櫻の立ち樹、同じく吊り枝。簾を下ろし、爰に里見小源次、大野文平、隨身の形にて階の左右に扣へ、藤作、兵内、仕丁の形にて扣へ、彌生雛祭りの模樣よろしく、下がり葉にて道具納まる。
小源　頃も彌生を幸ひに、大江の御息女重の井姫さまを妃と准へ、若殿馬之助さまの雛遊び。
文平　その御趣向ゆゑ、我れ／＼も、階下を守る隨身の出立ち。さるにても姫君には、兎角に心解けぬ御樣子。
兵内　それゆゑに、我れ／＼までも、雛祭りにこの姿。併し、肝心の寢る時は、離れ／＼の床のうちではあるまいかな。
藤作　畢竟、お屋敷なりやこそ。どうやら天王樣でも擔ぎさうな形でござる。
皆々　左樣でござる。ハヽヽヽ。
トばた／＼と音して、管絃になり、簾を卷き上げる。中に由留木馬之助、冠り裝束の形、太刀を引ッ提げ行かうとする。侍ひ二人、留めてゐる。
侍ひ　先づ／＼、お鎭まり遊ばしませう。

馬之　イヽヤ、留めるな〳〵。斯くまで慕ふを素氣なくも、恥辱を與へし重の井姫。いづれへ參りしぞ。汝ら側にありながら、存ぜぬとは申されまい。サ、、それ申せ。
侍ひ　サア、私しどもはお錠口に、お待ち請け申せしが、更にお出でも無きゆゑに、所々方々とお尋ね申せしに、お姫樣にはお裝束の其まゝにて、お庭傳ひにどこへやら。
小源　すりや、姫君には、御殿の內には
藤作　お出でなきとや。
四人　イヤ、大變な儀でござる。
馬之　返す〳〵も憎ツくき奴。例へ館を離るゝとも、遠くは行くまい。皆も續け。イデ、某が。
ト侍ひを突きのけ、花道へかゝる。渡り拍子になり、向うより、奴の又平、毛槍を突き廻して、キツとなつて
又平　待つた〳〵。暫らく、お待ちなされませい。
馬之　我れへ恥面かゝせし重の井姫、追ひ行く道を遮ぎつて
四人　留めて出でたる其方は
又平　元は當家の若殿樣、兄御の勘氣に大津繪の、雷ならぬごろつきは、その名も吃の又平と、いま改めて馬之助さま、お見知り置かれて下されませ。
馬之　その又平が何ゆゑに、留めて出でたるその心は
又平　あなたのお爲。
馬之　なんと。
又平　殿上人の形に似ぬ、その荒々しきお心では、內裏女郞も振らねばならぬ。
四人　なんと。
又平　サア、振るとは奴がこの槍で、色よい返事を突きとめて。
馬之　して又、槍が返事とは。
又平　戀には心も長柄の槍、手管の管槍樣々に、その數槍も千段の、遂にはほぐれて大身槍、さらば御殿へ、振りこむべいか。
ト鳴り物になり、又平、皆々を押戻し、舞臺へくる。
四人　然らば奴が請合うて
又平　キツと色よい御返事を。
馬之　賢うは云ひ廻せど、元が白痴の調之助、大切なる家の寶、二品ともに紛失させ、今はその態、恥かき足らいで大津繪の、筆の命毛、やう〳〵と、其かぼそい根性ゆゑ、勘當せしに、又もや推して予が目通り。これぞと申

す功もなく、それとも其方がにじり書き、なんぞその繪に徳があるか。
又平　東坡が露竹は、露を含んで紙中を濕ほし、金岡が馬は草を食むと、一心凝つたる奴が筆勢、疑はしくばこの畫面、
ト懐より大津繪を出す。
四人　なんのおのれが。
ト四人かゝるを　又平よろしく立廻り、キッとなる。この時、風の音して、件の大津繪を空へ吹きあげる。皆々、空を見て
小源　渦巻き上る風に連れ
文平　雲に紛れて、アレ〳〵〳〵。
藤作　如何なる邪法か。
馬之　何とも怪しい。
トきつとなる。この時、向うにて
源吾　名畫の徳が、それ〴〵の、筆意をそれにて、御覧に入れん。
ト誂らへの鳴り物になり、向うより腰元藤浪、振り袖形、褄折り笠にて、藤の枝を擔ぎ、顯哲、辨慶にて七つ道具を脊負ひ、慶政、座頭にて、杖をつき、褌の垂れを犬咬へ、石井半次郎、若衆の形、袴、大小にて鷹を据ゑ、赤堀源吾、上下、大小にて、衣を肩へ掛け、傘を脊負ひ、鬼の面と叩き鉦、奉加帳を一つに結び、これを持ち出て來り、皆々花道へとまる。
小源　今、この奴めが、怪しの振舞ひなす折柄、皆それぞれの大津繪出立ち。
藤作　何ゆゑ留めて出でたのだ。
藤浪　譯は何やら知らねども、若殿樣のお諫めに、お側勤めの藤浪が、かたげた藤のうら若き、今日の趣向の思ひ附き。
顯哲　坊主頭を幸ひに、顏は垢にて汚れた儘、穢いところが武藏坊。
慶政　蟬丸さまの流れを汲み、座頭は杖を、つく〴〵ぼうし、按摩、肩癖、慶政が、お療治ながら、お屋敷へ、來る道すから狂ひ寄る、犬は丹波のしつぺい太郎。
半次　志賀、唐崎が預かりの、鷹を据ゑしは半次郎。
源吾　鬼一口の角折つて、かん〳〵叩く唄念佛、顏は眞赤い赤堀まで、何かな君を慰めんと
五人　參上仕つてござります。
又平　待ちかねた〳〵。サア〳〵早う、爰へ來た〳〵。

ト鳴り物にて、皆々舞臺へ來る。

源吾　彌生の御祝儀と申し、殊に又、今、室町どのよりお上使は、御家督續ぎ目の儀、重ね〴〵

五人　恐悅至極に存じ奉りまする。

馬之　事定まれど、思ふに任せぬ憎ッくき重の井、例へ何れへ逃げ去るとも、草を分けても尋ね出し、一度枕を交さねば、身が武士道が

願哲　そんなら、なんと仰しやります、お姫樣は駈落ちをなされましたか。然らば私しが尋ね出し、是非にお取持ち、とサア申したところが、人も知つた小町と辨慶、色の道は實にうとい……コレ〳〵藤浪、其方も、とも〴〵お姫樣の、靡くやうにしてくれまいか。

藤浪　どうしてマア、年端もゆかいで、其やうなませた事を、わたしや否でござんす。

慶政　そんなら拙者めが、座頭の盲目探しに探して來ようか。

源吾　兎や角申すうち、時刻が。イデ、源吾めが引き戻して

馬之　身共に恥面かゝせたる、姫の行くへを手分けなし

皆々　イデ、我れ〳〵が

ト立ちあがる。この時、向うにて

左内　イ、ヤ、お行くへは石井左内、それへ參つて、申し上ぐるでござりませう

ト序の舞になり、左内、上下、大小にて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

半次　すりや、親人。重の井さまには。

左内　全く姫君には、我が君を嫌ひ給ふに非ず、誠は佛道御歸依あつて、佛門に入る堅きお願ひ、御父君にも御承知あつて、石山寺の秋月禪師を師と賴まれ、今日よりは染衣のお姿。さすれば五戒を保つ御身を、又ぞろお召しあつても、君のお寢間にあつて詮なき事。これも定まる佛緣と、お諦らめられ、然るべう存じまする。

馬之　すりや、父上のお許しにて

源吾　尼となつては、兄が願ひも

又平　ヤ。

源吾　さりとは惜しいものでござる。

又平　すりや、姫君のお心を、舅御樣にも御推量あつて

左内　ア、コレ、只何事も、佛は見通し、

慶政　まだしもそれが定ならば、せめてはこれで、旗、天蓋。

ト烏帽子装束を脱ぎ、左内へ渡す。

左内　藤浪どの、この品持参し、ちつとも早く方丈へ。

藤浪　そんならこれより

又平　この又平は女中のお供。併し、お上使、後方までに。

馬之　某とても上使のお受け、且つは重の井剃髪の、吟味を遂ぐる其ために。

左内　この左内めは、何かの手番ひ。

四人　我れ〳〵はお供の用意。

藤浪　直ぐにわたしも。

ト立ちあがるを、頴哲、留めて

頴哲　藤浪どのは、愚僧がちつと

ト捕へる。

藤浪　エヽ、怖らしい。否でござんす。

ト突きのけるはずみに、頴哲が懐より手紙落ちる。この時、半次郎の据ゑし鷹、手を離れて、右の手紙を咬へ飛び行く。

半次　ヤヽ、大切なるあのお拳

左内　雲井はるかに、アレ〳〵〳〵。

半次　跡を慕うて、オヽ、さうぢや。

ト風の音になり、半次郎、向うへ入る。これを犬附いて入る。慶政、恟りして

慶政　ヤア、おれの大切なあの犬を、逃がしちや築地へ歸られねえ。跡追ツかけて、さうだ。

ト同じく向うへ走り入る。左内、思ひ入れあつて

左内　倅が事も心にかゝれど、それは私し。サア、藤浪どの

藤浪　左内さま。

又平　サア、ござらつしやいまし。

ト唄になり、左内先に、藤浪、件の装束を持ち、又平皆々附添ひ、下座へ入る。馬之助、頴哲、源吾殘り

源吾　馬之助さま、兼ねての大望。

馬之　コリヤ。

ト管絃になり

して、官太夫へ、頼み置いたる一條は。

頴哲　官太夫さまのお頼みゆゑ、赤堀さまと心を合せ、與惣兵衛めをおッ方附け、實は此方へ捲きあげたれど、見咎められては一大事と、雷丸は源吾さまへ渡し、また九重の印は、草津の萩の根下に埋め置けど、心がゝりゆゑ、折々見るに、その所爲かして、時ならぬ萩の盛り。

馬之　出かした〳〵。して又、源吾めは雷丸を

ト源吾、ウザ〳〵しながら

源吾　サア、その一腰は

ト思ひ入れ。

馬之　その雷丸は

源吾　サア、お手渡し致さんと存ずるうち

馬之　如何いたした。

源吾　何を隱さう、祇園町の、山形屋の抱へ、小萬と申す藝子に入れ揚げしが、それも石井の下郎、與作めに引ッたくられ、身共は金の遣ひ損。

願哲　其お手際を御存じゆゑ、渡してくれよと兄御樣よりこの手紙。

ト懷より出さうとして無きゆゑ、うろたへ、あちこちと探し

イヤア、大變ぢや〳〵。

馬之　コレ、願哲、何を其やうにうろたへるのぢや。どうしたのだ〳〵。

願哲　イヤ、どうしたどころか。官太夫さまよりの密旨の御狀

源吾　落せしと申すのか。それは大變事。

ト三人あちこちを尋ね廻して

ハ、ア、慥かに先刻のアノ鷹めが

願哲　大切な手紙を浚つて行つたか。紋治が鷹を生んだといふ鷹もあれば、親の物は子の物と、持つてうせたか、情ない。

源吾　とはいひながら兄よりの、密書とあれば心がかり。

馬之　鷹は義鳥にして、三年餌めば、たとへ外れても、その人の拳に返る。さある時にはその密書、石井親子が目にかゝらば

源吾　これもまた心懸り。

馬之　心にかゝる其うちにも、只忘られぬ重の井姫。

源吾　その儀は拙者が今一應、もしゆかぬその時は

ト件の鬼の面を取つて

每年春の末つ方、噂に殘る鬼の怨念、白羽の立つが人身御供。

トこの以前より、後へ藤作、出かゝりゐて

藤作　すりや、その鬼の面にて鬼と僞はり

源吾　その神託はもどかれず

藤作　重の井姫は又もお妾。

馬之　そんなら必らず……とはいふものゝ、何かにつけて邪魔になる調之助。

願哲　石井親子も人知れず

源吾　折を窺ひ、諸ともに

馬之　コリヤ。

　ト　あたりへ思ひ入れ、よき見得にて、管絃になり、簾下りる。鳴り物になり、この道具變る。

　本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、岩組みの道具、左右、松の樹木、同じく吊り枝。正面、高足、朱塗りの欄干、上の方より筋かひに石段、上の方、岩間より清水の樋を小桶へ取り、堂の上に重の井姫、十二單衣の雛の形にて、經机を置き、若葉、藤浪、腰元にて、三方に烏帽子、裝束を載せ、持つてゐる。すべて石山寺の道具よろしく、音樂にて納まる。

若葉　殘りなく、千里の山を目の下に、左は瀬田の青柳橋。比叡の嵐に散る花は、晝も湖水に螢かと、どうもいへぬこの景色、道理こそ爲時さまのお娘御、紫式部さまが源氏とやらを、爰のお寺でお書きなされたげないなう。

藤浪　兎角に上々のお姫様方は、お寺がお好きと見えるわ

若葉　それぢやというて、弘法さまではあるまいし、爰のお寺で御剃髮とは、餘りと申せば、お痛はしい。

藤浪　ま一度御思案遊ばして

若葉　御變替へ遊すが

二人　よろしうござりませう。

　ト　此うち重の井姫、導師の思ひ入れあつて

重の　「うき身をし、渡ると聞けば蜑小船、法に心をかけぬ日はなし。」……たとへ一夜の枕でも、交せしからは、女子の道は破らじと、誓ひも固き石山寺の、聖の教へに尼の身と、お顏は知らねど、いとしいお方へ。

若葉　イエ〳〵、そりやあまり一圖な思し召し、例へなんと御意なされても、平に御剃髮は、お止り遊ばしませ。

藤浪　其やうに、キナ〳〵思し召さずとも、ちと御境内でもおひろひ遊ばすが

二人　よろしうござります。

　ト　馬士唄になり、向うより又平、件の奴にて一升德利と竹の皮包みを提げ、自然生の三吉、脚絆三尺帶の形、火の用心の紙寶入れ、馬の沓を腰に挾み、出て來り

三吉　モシ〳〵、わしやア門前の茶屋へ、米を附けて來たのだ。無性に、來い〳〵と、どこへ連れてござる。

又平　どこといつて、賴みてえ事があるから、マア、來い

と云ふのに。
ト三吉を引摺り、舞臺へ來り
モシ〳〵、お姫樣、お前樣があんまりふさいでござるゆゑ、そこで何ぞお慰みにと思ふうち、馬士が寄り合つて賽を拋つてゐるゆゑ、お慰みにお目にかけようと思つて、連れて參りました。
三吉　コレ〳〵、この奴さんはとんだ事をいふ。こりやアわしらが仲間で遣り取りする三つぼの狐、
ト云はうとして口を押へる。
若葉　ナニ、狐とや。
藤浪　オヽ怖。
ト思ひ入れ。
若葉　して、狐をどうするのぢやえ。
三吉　ナニサ、今やつてゐたのは……ナニサ、それ〳〵、ありやア道中双六サ。
若葉　それなれば、わしらも知つてゐる程に、お慰みに相手にならうわいな。
藤浪　こりや面白からう。サア〳〵、お姫樣、あなたもお慰みに遊ばしませ。
三吉　エヽ、とんだ話しだ、ナニサ、双六ぢやアござりやすめえ。
又平　でも、今、双六だと云つたぢやアねえか。サア〳〵、始めて、お目にかけやれ〳〵。
三吉　サア、さうは云つたが、肝心の双六が……オヽ、あるある。
ト腰に挿したる油紙の扇を出し
コレ〳〵双六と申したのは、これでござります。東海道五十三次、宿々の名物、關所、川々の駄賃附け、詳しく書いてござります。
又平　サア、お姫樣も遊ばしませ。
ト重の井姫が手を取つて、無理に連れて來る。若葉、藤浪も附添ひ下りる。
又平めは、爰で酒と致しませう。
ト竹の皮包みを出し、德利の口より酒を飲みゐる。この時、かすめて入相の鐘。
重の井　それぢやといふて、自らは、どうする事やら。
三吉　ナニサ、造作はござりませぬ。斯うでござります。
ト三尺帶の間より、賽を一つ出し、振つて見せ
ソレ、一より一宿。二が出れば、二宿づゝ行くのでござります

又平 コレサ、一なぞと云つちやア、お姫樣にやア解らねえ、矢ツ張り、一つの事でございます。
若葉 サア／＼、そんならこの小石は、わしがしるしぢやぞや。
ト あたりにある小石を取つて、扇の上へ載せる。
藤浪 わしはこの松葉ぢやぞや。お姫樣、あなたは
ト 重の井姫、思ひ入れあつて、簪を取つて
重の これになとしてたも。
ト出す。若葉、取つて
若葉 香葉菊のお簪、お姫樣のぢやぞや。
藤浪 こりやあなたには、梅幸が御贔屓と見えまする。
三吉 おつなものが御贔屓だ。去年來たが、好かねえ奴。
又平 サア／＼、早く始めねえか。大分暗くなつた。ドレ、灯を持つて來よう。
ト 又平、醉つたこなしにて奥へ入る。
三吉 そんならわしがしるしは
ト 煙草入れの中より、香箱の片々を出し
これがわしのでございます。そんなら振出しますぞ。
ト 双六晉頭になり、賽を振つて
ソリヤ、四なれば程ケ谷、ツイと富士の裾野へ參りやす
ト 重の井姫に廻す。重の井姫見て、思ひ入れ。
重の そんなら妾が
ト 振る。
三吉 二なれば川崎と。
ト 段々廻す。
若葉 エヽ、もう一つの事で神奈川ぢやわいな。
藤浪 わしは品川ぢやわいな。
ト 三吉また賽を取つて
三吉 ナニサ、女中方、お靜かにござるがよい。時に、お姫樣え。なんぞ賭け事が無くちやア張合ひがございませぬ。斯うしませう。わしが負けたら……と云つたところが何も賭ける物が……オヽ、それ／＼、門前へ繫いで置いた馬を上げませう。又お姫樣が負けたならば……モシ、その時には、承知かえ／＼。
ト 思ひ入れ。
重の ハテ、どうなりとあなたの……サア、そりや其方の心次第に。
三吉 きつとさうかね。親の頭に松三本、じぶを食ひッこなしだヨ。
ト この時、奥より又平、手燭を持ち、醉うたる體にて

出て來り

又平　勝ち目は、どうだな／＼。側がいゝと思つて、寶を
せまいぞ。お姫樣、油斷なされますな。

ト云ひながら手燭を置き、寢入る。

三吉　ソラ、六で鞠子と參ります。サア、お姫樣。

ト廻す。重の井熟々、三吉の顏を見詰めてゐる。脇の方
へ賽を投げる。三吉、捨ぜりふにて、賽を探し取つて

ア、、お姫樣は大磯だ。

重の　それとお顏は知らねども、渡せし品のあればこそ、
いつか尋ねて大磯と、思へどこの身の儘ならぬ。

ト若葉、振りながら

若葉　人目の關や箱根の關、逢うて三島の原過ぎて

三吉　話したならばその時は、思ひ興津の海よりも

重の　深／＼も迷ふ自らの、心も知らで白須賀の

若葉　二道かけし二川と

藤浪　堅くも守る石藥師。

三吉　その心ゆゑ此方でも、後の證據と庄野宿、肌身離さ
ず大事に掛川。

ト段々振り廻す。ト、三吉、上がつて

オツト、しめたぞ／＼。ソリヤ、わしが先へ上がつた。

サア／＼、約束通りだ。お姫樣は、わしが存分にせにや
アならねえ。

ト重の井姫を捕へる。腰元兩人、隔て

若葉　これはしたり、馬士の身で、お姫樣を捕へて、どう
せうと思やるのぢや。

重の　ハテ、大事無いわいの。一旦約せし上からは、この
者の心任せに

若葉　それぢやというて、あなたには、御剃髮の折といひ

藤浪　且は尊き御寺にて。

重の　ハテ、佛も元は凡夫とやら。この者には重の井が、
話す事があるゆゑに、其方衆は、マア、奧へ

若葉　それぢやと申して。

重の　ハテ、行きやいなう。

二人　ハイ、。

ト合ひ方になり、兩人こなしあつて、奧へ入る。三吉
思ひ入れあつて

三吉　モシ／＼、お姫樣、これは大きにお慮外申しました。
只今のは、ありやアほんの座興でござります。ドリヤ、
私しもお暇を致しませう。

ト行かうとするを、重の井姫、留めて

重の　約束の上からは、是非とも自由にならねばならぬ。
三吉　それだといつて、馬方が。どうしてあなたを
重の　この賭け事より自らが、大事にかけて
　ト懷中より、袱紗に包みし件の香合の片々を出し
共かたし。
　ト三吉、合せて見
三吉　ヤ、、、。そんならあなたが、五年以前、大原の神
事で、雜魚寐祭りの暗まぎれ。
重の　ついした事で只一度。どうぞ行く末添ひ遂げたく、
後の證據と渡せし香箱。
三吉　模樣は水に鴛鴦の、しつくり合うたも、盡きせぬ緣。
重の　その時宿せしお腹の嬰兒。
三吉　そんならあの時、たつた一度で。
重の　それから今の由留木家へ、引取られしが、男嫌ひと
云ひ通し、あなたへ立てる女の操。
三吉　して〳〵、二人がその仲に、儲けしその子は
重の　石井左內が情にて、人知れず產み落し、與惣兵衛と
相談して、藁の上より餘所外へ
三吉　それとも知らず、この年月。そんならおれゆゑ、今
までに

重の　肌を穢せば道立たずと、それゆゑ尼にと、この御寺
へ。
三吉　思はずめぐり逢つたのも
重の　觀音樣の引合せ。
三吉　とはいふものゝ、馬士の身で
重の　それも妹脊で結んだ緣。
三吉　その心なら、人の見ぬ間に。
重の　ア、モシ。
三吉　五年振りだの〳〵
　ト抱く。又平、醉うて寢てゐたりしが
又平　ア、、知らぬが佛だ〳〵。
　ト大音に云ふ。二人恟りして飛び退き、三吉、又平を
見て
三吉　エ、、恟りさせた。奴どのは寐言ださうな。
　ト重の井姫に囁き、あたりを見廻し、掛樋の下にある
桶を取つて來り、雪洞の上へ冠せる。これにて又平起
きあがり
又平　ア、、寐たワ〳〵。引ツかけた心持ちはどうもいへ
ぬ。コロリとやつたが、もう何時ぢや知らぬ、さうして
マア、灯が無うて、どこがどこやら、お姫樣も又、おれ

一人を置いて、どこへござつたやら。馬士めはどうした誰れぞ灯を、貸してくれぬか〳〵。……誰れも居らずばおれ一人。目が無ければ、由留木の嫡子調之助。

トきつと云ふ。兩人もほぐれてキッとなり、これより合ひ方になり、又平、手を合せて

南無大慈大悲の觀世音。非業に去りし丹波與惣兵衞、頓生菩提。假りにも我が乳人役、三條の橋詰めにて、盜賊の手にかゝり、無念な最期も皆我れゆゑ、弟の石井左内、これも定めて無念にあらんが、仕官の身の上、兄の敵もえ討たれず。悴一人ありと雖も、官太夫が養子となれば、他人も同然。まだも賴みはその昔、手廻りの女お三とやらに、懷姙させし二人の子、總領は丹波與八郎、妹は明石のお松、音信不通に緣切りしが、今は池鯉鮒の八つ橋村とやらへ緣づきしとの事、心がゝりはこの二人。委細は下部、伊達の與作に申し含めしと、常々聞きしが、この者にてもあるならば、定めて敵は討たんずなれども、行くへ知らねばこれとても。又二つには姙娠の悴も矢ツ張り與作が介抱。それとも知らず、うか〳〵と、それで親子の孝道が、立たうと思ふかイヤサ、茲なたはけ者めが。……とサ、與惣兵衞がこの世にあるなら、定めて此やうに云はれうが、この世になきゆゑ、これとても

ト三吉に當てゝいふ。この以前より、奥より左内出て窺ひゐる。三吉、思ひ入れあつて

三吉　さては、素性は丹波の家にて

重の　お前の親御は與惣兵衞さま。

三吉　とサ、知つたところが後の祭り。父の最期もえい知らず、なに面目に存らへん。せめては未來で申し譯。

ト探り寄つて、又平の脇差を取る。重の井姫も思ひ入れあつて

重の　そんならわたしも共々に

三吉　南無阿彌陀佛。

ト腹を切らうとする。

左内　ヤレ、待て、早まるな。其方が死なば女房まで。二人が死なば幼な子が、誰れを便りに成長なさん。

又平　親への孝道立てんと思はゞ、まだこの上にも姿を變へて、父の敵と寶の詮議。

三吉　其お詞を聞く上は、この身は盜賊、强盜とも、なつてお家の寶を取り得ん。もしも敵にめぐり逢はゞ、その時こそは父上に

又平　手向けん時のその晴れ着。

ト以前の烏帽子、裝束を探り取つて渡す。三吉、探り見て

三吉　こりやコレ慥かに、高位の裝束。

又平　馬士にも衣裳を、この場の餞別。

左内　差し古せども身が差添へ。

三吉　こりや、一腰は、伯父御樣より

左内　伯父とは誰が事。伯父甥なら內馬追ひへ、厩手の代り。

三吉　とは云ひながら、せめてお顏を。

ト三吉、冠せし桶を取る。三人、顏を見合つて

重の　明けてそれぞと名乘られぬ、わたしが爲にも舅御樣。

又平　亡きその跡を弔らふも、失ふ寶のその行くへ、尋ね求めて敵討ち。

左内　その時こそはこの左內が、寶の甥ぞと改めて、先づそれまでは、明けてはどうも

トまた件の桶を冠せる。皆々思ひ入れあつて

三吉　すりや、しおほせたその上で

重の　やがて名乘らんその時は、暗き矢標も晴れ渡り

又平　再び興す丹波の家名。その時こそは主從の

左内　伯父の名乘りも

重の　夫婦の名乘りも

三吉　そんならそれまで

重の　二人が仲の

左内　小桶は左內が取上げて

トまた桶を取る。四人、顏見合せて

重の　心引かれず、これより直さま。

三吉　やがて吉左右

重の　何から何まで。

又平　相待ち申す

左内　早くお行きやれ。

三吉　ハツ。

ト三重、時の鐘になり、三吉、裝束を抱へ、重の井姫を連れ、向うへ入る。又平、思ひ入れあつて入る。左內、跡見送り

左内　獅子は我が子を谷へ落し、その勢ひを見ると聞く。子は又親を失へば、岩を裂いてこれを探すと。調之助さまの諫めにめでゝ、やがて寶の吉左右を

ト思ひ入れ。この時、風の音して、空より以前の鷹、淩ひし手紙を落す。左內、見て

ナニ〳〵……「かねて申し含めし通り、此たび本國丹波

篠山より、御家督の儀に附き、お家の寶雷丸、まつた九重の印、丹波與惣兵衞下さんと致し候ふ間、途中に於て、人知れず殺害なし、二品を奪ひ取り、それを功に某が胤なる馬之助へ、首尾よく家督ある上は、重き恩賞遣はされべく候ふ。藤川官太夫、下部段介へ。」……ヤ、、さては兄を殺害なし、二品の寶を奪ひしは、彼の官太夫が仕業であつたか。さるにても、宛名は即ち下部段介。一つには骨をひしいで兄の敵、二つには寶の詮議。この一通が手に入る上は、まづ差當る馬之助どの、これを證據に糺明させん。オ、、さうだ。

ト行きかゝる。この以前より後に源吾、手槍を持ち、窺ひ寄つて、左内を貫く。左内、立廻り、手負ひにて、キツとなつて

おのれ、源吾め。騙し討ちとは卑怯未練な。

源吾　イヽヤ、卑怯ではない。主人の云ひ附け。

左内　ナニ、主人の云ひ附けとは。

トこの時馬之助、出かゝりゐて

馬之　官太夫と心を合せ、與惣兵衞を殺害なし、寶を奪ひしは、皆某が計らひだ。それを知つたる其方ゆゑ。

左内　斯くまで積る惡逆無道。たとへ深手は負ふとても、やはか一太刀。

トまた立廻つて段々手を負ふ。この時、奥より腰衣の同宿出で、これを見て「ワツ」と云うて向うへ入る。源吾、左内を突き伏せ、止めを刺さんとするを、馬之助、留めて

馬之　ヤレ、待て、源吾。

ト囁く。

源吾　成る程、天晴れ妙計。

ト件の手紙を引裂き、雪洞にて燒捨て、奥へ向ひ

我が君へ刃向ふ狼藉者、方々、出合はつしやい／＼。

ト呼び立てる。奥より又平、手燭を持ち出る。向うより半次郎、袴股立ち、後より逸平、奴の形にて附添ひ、走り出て來り

三人　して、狼藉者とは何者でござるな。

ト三人、左内を見て

半次　ヤ、、、。こりや、養父左内どの。

逸平　何奴が親旦那を。……見れば數ヶ所のこの槍疵。

又平　さるにても、相手は何者。

馬之　外でもない、この馬之助。

三人　すりや、何ゆゑに

馬之　ト音樂になる。
現在主人に、家來の身として、云ひ掛けひろぐその上に、劍戟を振ふ無禮な奴。やむ事を得ず、源吾めが槍先に。さはいへ、不仁の至りぞと、世の人口を防がんため、未だ止めは

半次　御立腹はさる事ながら

又平　忠義一圖の左內さま、良藥は口に苦く、金言は耳に逆らふと、それゆゑにこそ、かゝる仕合せ。

逸平　何を申すもこの深手。どういふ譯かは存じませぬが、罪の次第によつては、切腹をも仰せつけらるべきを、忠勤全き大旦那樣。小者、はしたか何ぞのやうに、あまりと申せば酷たらしい。

源吾　汝、下郎の分として、殿の御前でツカ／＼と。この如く劍戟を以て、御主人に立ちかゝる無法者。源吾お側にありながら、家來の身として見遁がしならうか。半次郎どの、何とでござる。

半次　サア、それは。

馬之　まだも息のあるうちに、其方達に見せて殺すが、これ、面晴れ。ソレ、源吾、早く止めを。

源吾　心得ました。

ト左內に跨り

主人に刃向ふ人非人め。この源吾が、この場に於て。

ト左內の咽喉を貫く。皆々無念のこなし。この時、向う、バタ／＼にて、里見小源次、麻上下の侍ひにて、走り出て來り

小源　大殿樣より調之助さまへ、火急のお使ひ。

ト又平が前へ出す。開き見て

又平　すりや、內々室町どのに、申し出せしその願ひ、御承引ござあつて、由留木の家督

馬之　即ちこれなる馬之助へ。

又平　イヤ、上意の上からは、いま改めて馬之助どの、尋ぬる一儀これあるゆゑ、それにてとくと承らん。

ト馬之助を引きのけ、上座へ直る。管絃になり

寶詮議日延べの願ひ、室町どのにも聞濟みあつて、家督は即ち某へ。

馬之　例へ何と申すとも、順を以て、道を糺すが、天下の掟であるを差措き、何とも以て。

小源　それゆゑにこそ馬之助さまへ、別に賜はる品がござる……ヤア／＼、用意の三方、急いでこれへ。

侍ひ　ハ、ア。

ト奥より侍ひ、三方に腹切り刀を載せ、持ち出て來り、
馬之助の前へ直す。愕りして

馬之　ヤヽ、この短刀を、何ゆゑあつて身が前へ

又平　その仔細、申し聞かさん。…… 未だ部屋住みの身を以て、推して姫との婚禮に、畏れ多くも內裏のまなび。これ第一のお咎め。武官の身にてありながら、假にも大君の御裝束、時に取つての謀叛の兆し その首討つて二品の、寶の日延べ致せよと、室町どのよりの御內意。

馬之　ぢやと申して。

半次　さなき時にはお家の浮沈。

又平　但しは、某踏みつけ、腹切らさうか。

馬之　サア、それは

又平　潔く切腹あるか。

馬之　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

半次　さりとては又、御未練千萬。

逸平　して、これなる源吾めは。

又平　討つて捨てるも刀の穢れ。門前より追ひ拂へ。

逸平　お暇出でし上からは、ちつとの間も御前に叶はぬ。

逸平　キリ〳〵この場を、立たつしやい。

ト引のける。

源吾　居ろといつても此方で居ないワ。ナニ、コレ、高が知れた、百石や二百石。大男なら一かたげにも足らねえワ。

逸平　こま言云はずと、立たつしやい。

源吾　エヽ、行くといふに。

ト逸平、源吾を追ひ立て、向うへ入る。この時、半鐘鳴る。小源次、思ひ入れあつて

小源　最早刻限。

又平　とく〳〵それにて。

馬之　未練には非ざれど、佛の庭に血汐をあやさば

又平　イヤ、尊とき法の庭、幸ひ、大悲の數へには、五逆滅相。せめて未來は

半次　その介錯は半次郎。

又平　とく〳〵用意、

馬之　南無阿彌陀佛

ト腹へ突き立てる。半次郎、刀を振上げる。これにて鳴り物になり、この道具變る

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黃幕。東西舞臺前

とし、一面に萩の盛り、生ひ茂り、この間々に流れ水の浪板。上の方に野路の玉川と書きし石の榜示杭。下手に柳の立ち木、同じく吊り枝、平舞臺眞中に三吉、廣袖、一本差し、件の裝束を引提げ、十二單衣の重の井姫を脊負ひ、立ち身。紙砧の音、蛙の聲、本調子の合ひ方にて、道具納まる。

ト直ぐに空へ滿月を引出す。三吉これを見やり、思ひ入れあつて

三吉　「明日も來ん、野路の玉川萩こえて

重の　色ある浪に月宿るらん。」

三吉　その月清き玉川に、恥らふこの身の芥川。

重の　昔男も及びなき、その殿振りにいやましの

三吉　思ひがけなき高位の姿、さりとはひよんな業平も

重の　領を云はゞ侍ひの

三吉　胤も今さら世にお乳の人、馬方、船頭、或ひは非人、又は山賊、強盜と、樣を變へるも實の詮議

重の　たとへいづくの野邊までも、どうぞ一緒に

三吉　イヤ、行く先それと白玉か、何ぞと人の咎めなば

重の　ハテ、その時は妾が身は、露と答へて消えなんと

三吉　その心底なら、これより直ぐに、業平もどきで東路へ。

重の　そんなら、此まゝ

三吉　ちつとも早く。

ト浪の音になり、下座より、半素袍の下ばかりの侍ひ大勢、松明を照らし、バラ／＼と出て來り、兩人を取巻き

皆々　動くな。

ト三吉、重の井姫を下ろし、後へ圍ひ

三吉　こりや理不盡に、何とする。

侍一　ヤア、ぬけ／＼と僞り者、形もそぐはぬ其いでたち。察するところおのれこそ

侍二　重の井姫を石山より、連れて立退くその曲者。

侍三　詮議なす我れ／＼が役目。サア、尋常に姫を渡して

一同　繩にかゝれ。

三吉　イヽヤ、一旦我が手に入つたこの女、うぬらに、うま／＼渡さうか。

一同　さういや、いつそ、踏み附けて。

三吉　何を小癪な。

ト禪のツトメになり、三吉、一腰を拔き、皆々と立廻り、トヾ一同、下座へ逃げて入る。三吉、これを追ひ

かけて入る。重の井姫殘り、ウロ〳〵して

重の　コレ、長追ひして怪我してたもるなえ。後先き知らぬ野末の道、妾一人で如何にせん。早う戻つて下さりませ。與八郎さまいなう。

トあちこち、ウロ〳〵してゐる。時の鐘、浪の音になり、向うより逸平、旅奴の形にて、上り下りの荷の附きし馬の手綱を持ち、槍を擔ぎ出て、直ぐ舞臺へ來る。

ア、心細い。便りない。便る軒端も荒野の果。こりやマア、どうしたらよからうぞいなう。

トこの聲を聞いて、逸平、月影に透し見て

逸平　ヤ、、さう仰しやるは、姫君樣ではござりませぬか。

重の　ヤア、さう云やるは、左内の下部逸平か。よい所へ來てたもつたなう。

逸平　思ひがけない。夜中と申し、この所へ只お一人。

重の　さいなう。石山寺で剃髮染衣と、思ふ折から計らずも、思ひ染めし戀しいお方、互ひの形見と所持なせし、香箱もしつくり巡りあひ、それから迷ふ煩惱の、出家を止まり、其お方と連れ立つて、この所まで落ち延びしが追手の者が大勢來て、繩掛けんとあるゆゑに、それを相手に長追ひして、妾一人只爰に。

逸平　ムウ……して、その戀しい男とは、いづくの何人。

重の　サア、其お方は、

トこの時、下座にて、バタ〳〵と人音する。

アレ、あの人音は、

逸平　イカサマ、人目にかゝつては又ぞろ御難儀。其お方の御姓名も、ゆつくり後で承らん。先づ、あなたには、幸ひのこの葛籠の內。

ト手早く馬に付けたる葛籠を下ろし、重の井姫の十二單衣を脱がせ、葛籠を抱へ、姫の手を取つて

暫らくこれにて。

ト萩の茂りたる後へ隱れる。浪の音になり、向うより源吾、頰冠り、尻からげに出て來り、あたりを見て

もう夜が明けるに間もあるまい。時ならぬ萩の盛りは、根下へ隱せし九重の印の奇特。人に氣取られては一大事。今の內に、それ〳〵。

ト刀を拔き、榜示杭の下を掘り、錦の袱紗に包みし印を取出す。此うち、逸平、重の井姫を葛籠に入れたる心にて、これを脊負ひ出て、行きにかゝる。源吾と顏見合せ

ヤ、わりや奴の逸平、怪しい葛籠。慥かに中には。

トかゝるを逸平、立廻つて

逸平　イヤ、この葛籠より、主人の敵の赤堀源吾。殊に、何やら掘出した、怪しき一品、奴に渡し、覺悟しろ。

源吾　イ、ヤ、その品。

ト兩人立廻りのうち、月隠れる。これにて暗がりの思ひ入れ。件の印を奪ひあふはずみに、草鞋へ取落し、源吾、無性に探れど知れぬ思ひ入れ。逸平、こなしあつて

逸平　イヤ／＼、敵討ちは若旦那。我れは一先づ姫君を。

源吾　ナニ、姫君とは。

逸平　この間に、さうだ。

ト逸平、葛籠を脊負ひ、一散に向うへ入る。源吾、思ひ入れあつて

源吾　ハ、ア、草鞋へ落したと思つた印も、さては今の奴めが。イヤ、こりや斯うしては

ト一散に逸平の後追ひかけて向うへ入る。舞臺に今の十二單衣、件の印落ちてゐる。馬士唄になり、向うよりぐれ八、馬士にて、小田原提灯を持ち出る。後より五郎吉、月參りの伊勢參りの形、奥州逆井村同行二人と書きし笠を持ち、出て來り

五郎　モシ／＼、もう何時でござりませうね。

ぐれ　今に夜が明けませう。伊勢參りどんだの。夜通しかえ。

五郎　アイ、わしやア奥州逆井村の者サ。お伊勢樣から京を見物して、いま歸りサ。

ぐれ　ハア、さうかえ、

ト云ひながら、馬を見つけ

ヤア、こりやアおれが馬だ。奴どのを乘せて、後へ提灯を取りに歸つたが、馬を乘り捨て……それに片荷の葛籠が見えねえが、泥坊にでも會つたのか。何にしろ、斯うしても置かれめえ。併し此方の荷は恙なし、奴どのゝ荷ばかりは、ハ、ア、途中で乘り逃げか。まだ駄賃は取らず、いま／＼しい目にあつた。

ト呟きながら馬を曳き直す。

五郎　そりやマアとんだ目に會ひなすつた。併し、馬に別條なくつて仕合せだ。

ぐれ　さうサ、伊勢參りどの、隨分靜かにござれ。

五郎　アイ／＼。

ト兩方へ別れ、ぐれ八は馬を曳きながら、件の印を踏む。五郎吉は十二單衣を踏む。ドロ／＼にて兩人、足

の竦む思ひ入れ。

二人 アイタヽヽヽ。

ト兩人、二品を拾ひ上げ、提灯にて見て

ヤア、こりや結構な。

ト思ひ入れ。下座にて人音するゆゑ、ぐれ八は印を懐にして馬を曳き、急いで下座へ入る。

五郎 なんだか結構な物を拾つたわえ。賣つたら定めし、錢になるだらう。

トまた人音するゆゑ、五郎吉、小隱れする。下座より慶政、以前の姿にて、丸裸にて出て來り

慶政 たうとう追剝ぎに身ぐるみ取られ、この通り眞ツ裸。裸で道中がなるまいし、いま〳〵しい。

トあたりを、ウロ〳〵して、逸平が持ち來りし槍を見つけ

ヤア、槍が一本落ちてある。ハテ、やり放しな奴があればあるものだ。この槍を賣つて、路銀の足しにしようかえ。

ト下座、バタ〳〵にて、三吉、慶政の衣裳に着替へ、件の裝束を抱へ、頭に手拭を冠り、出て來る。これにて慶政、小隱れする。

三吉 人目にかゝりし姿をば、又も變へるは幸ひの、座頭の身形。旅の按摩と姿をやつし。併しこの場で見失ひし姫の行くへ。もしや追手に捕へられしか。但しは先へ落ち延びしか。ハテ、心ならぬ。

ト慶政、後より窺ひ寄つて、件の槍を構へ

慶政 おのれ、泥坊。

ト槍を突きかける。三吉この穂先を捕へ、立廻つて、眞中より槍を切り折り、石突の方を取り、慶政をポンと當てる。慶政、當てられながら、件の裝束を持つたまゝ、ヌヂ〳〵となつてへたる。三吉、槍の折れを杖に突きながら

三吉 丁度、杖まで。

ト五郎吉、窺ひ出て、慶政の持つてゐる裝束を取り

五郎 ヤ、これも同じく結構な。

三吉 ヤ。

ト振り返り。五郎吉、裝束を頭より冠り、體を隱す。

三吉、こなしあつて

按摩、鍼イ。

ト一聲呼び、時の鐘になり、足早に向うへ入る。これにて靜かにこの道具變る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。向う大形の襖。下手赤壁、丸の中に、石部油屋と記し、上の方に折曲りの障子屋臺、この側に風呂場を取附け、誂らへの五右衛門風呂据ゑてあり。掛け行燈、軒口に伊勢金毘羅の月參り札掛けてあり。いつもの所へ門口、すべて石部宿旅籠屋の體。爰に幕の内より、おわた、おやす、留め女にて客を引いてゐる。馬士唄にて道具納まる。

ト旅人の仕出し大勢、捨ぜりふにて、行き違ふ。屋體には伊勢參りの崖藏、金毘羅參りのかッさき九郎、同じ形の雁八、思ひ〱の旅形にて、足を洗うてゐる。

やす　お泊りなされませ〱。
崖藏　カウ〱、姐さん、この草鞋は失なさないやうにして置いてくんな。
やす　ハイ〱。
九郎　草鞋掛けも一緒に置きますよ。
わた　皆さん、御一緒でござりまするか。
雁八　ナニサ〱、國々は別だが、道連れになつたのサ。座敷も何も一緒でようござる。
やす　ハイ〱。

トそこら片附けてゐる。向うより宿役人、觸れ書を持ち、出て來り
役人　オイ〱、お觸れだよ〱。
わた　おふれ〱、風の神をおふれ。
役人　惡く洒落るな。コレ〱、この人相書は、エヽ、何とかいふ泥坊が、何とかいふお姫樣を、何とかいふ所から連れて逃げたさうだ。ア、何とかいふ役人樣が、詮議をしろと云ひ附けて行かれた。もし此方の內へ、斯ういふ者は泊らぬか。
崖藏　何とかいふ字づくして、さつぱり解らねえ。
九郎　お姫樣の駈落ちだの。
やす　マア、旦那の歸るまで、それを置いてお出でなされませ。
役人　さうしませう。キッと氣を附けさつしやい、ア、解らぬお觸れだ。
わた　私しどもにも判りませぬ。
雁八　姐さん、どこの座敷だえ。
やす　サア〱、此方へお出でなされませ。
ト宿役人下座へ、皆々は奥へ入る。おわた、觸れ書を片附ける。馬士唄になり、向うよりおかや、婆アの拵

らへ、浴衣の上ッ張り高からげ、旅形。娘お半、同じく旅形。後より以前のべれ八、雨掛けを擔ぎ出てくる。東の口より帶屋長右衛門、町人の旅形、合羽にて、跡より供男、雨掛けを擔ぎ、出てくる。後より宿引き、二人の菅笠を持ち出て來り、双方捨ぜりふにて舞臺へ來り、おかや、長右衛門を見て

かや　モシ〳〵、そこへござつたのは、長右衛門どのではござらぬか。

長右　さう云はつしやるは、柳の馬場の、信濃屋の阿母かえ。

かや　アイナア。

長右　ヤレ〳〵、お久しや〳〵。

かや　コレイナア、有やうは、わたしやお前の迎ひに出たのぢや。お前は子供の折、江戸へ奉公にござつて、今は相應な町人の所へ、養子にならんしたとの事。そこで親御の幸之進さまは、始終は内へ呼び戻すか。又は向うで養子にしても、約束の娘は貰はうと云うてござる。其うち先月幸之進さまは御病死。

長右　左樣でござります。實親の病死の知らせがござつたゆゑ、取るものも取りあへず、只今上京。

かや　サア、上つてござると聞いたゆゑ、迎ひかてら、娘を連れて伊勢參宮。なれども、いはゞ娘にも縁の掛つた事なれば、どうかと思うたが、併し、この子の實親といふは、駿州由井の憲法紺屋、次郎作といふもの。わたしが身延へ參詣の歸るさ、養女に貰うたお半。又お前へ云ひ號け、爰で逢うたは互ひの仕合せ。マア〳〵、お前もお力落し。併し、お前は御無事で、おめでたうござります。

ト　この話しのうち、おわた出て

わた　モシ、お泊りかえ〳〵。お泊りなされませ。

宿引　オイ〳〵、おわたどん、旦那はお泊りだよ。

わた　それは有り難うござります。モシ、あなた方も、お泊りなされませいな。

かや　さうしませう。今夜は爰へ泊つて、ゆつくり、お前とも話しませう。

長右　さうなされませ。

宿引　ソレ、お洗足を。

わた　ハイ〳〵。

ト　盥、手桶を持ち來る。皆々捨ぜりふにて、足を洗ひ屋體へ上がる。

宿引　お荷物は此方へお出しなされませ。

ぐれ　モシ、荷物をお渡し申します。

かや　ハイ〱、御大儀でござんした。

わた　どうせ御一緒でござりませう。

長右　一緒でよいとも〱。

宿引　ハイ〱、左様なれば。

ト荷物を一緒にして持ち、奥へ入る。

わた　お脚絆を濯ぎ出して置きませう。

ト皆々の脚絆を持ち、奥へ入る。

かや　イヤモウ、何から先へ云はうやら。モシ、長右衛門さま、爰にゐるのがわしが娘、親御幸之進さまと約束した、お前の云ひ號けの、お半でござりますわいなア。

ト長右衛門、お半を見て

長右　エヽヽ、あのお子が、わしと云ひ號けかえ。

かや　オイナウ。

長右　アヽ、この子がわしの女房になるのかえ。

かや　まだ一向年がゆかぬによつて、お前の世話勝ち、氣には入るまいが、末始終面倒見てやつて下され。

長右　イヤ、阿母、ほんまにこの子が

かや　ほんまでなうてかいの。

長右　ト長右衛門、お半をよく〱見て

奇妙……福徳の三年目、去年の春の富より嬉しい。

ト お半、長右衛門を、つく〱見て

はん　コレ、母さん、そんならあのお方が、云ひ約束の、

かや　オイナウ。其方の婿どのぢやわいなう。

はん　エヽ。

ト悄り。

かや　何ぢや其やうに悄り。

はん　それぢやというて、あのマア顔。

かや　ヤア。

はん　わしや、ツツとモウ。

ト辛氣なこなし。長右衛門、イソ〱して

長右　こりやモウ、親の病氣が結ぶの緣、モウ〱、江戸へは歸られぬ。今まで知らずにゐたが、口惜しい〱。

供男　モシ〱、それでも江戸の養家へは、法事しまひ次第、歸ると仰しやつたではござりませぬか。

長右　サア、さうは云うたが、もう歸らぬ。何も養父の家に義理は無い。今までは江戸にゐて、北八といふ名であつたが、京の内へ戻れば、押小路の帶屋長右衛門といふ旦那樣、實家の名跡立てねばならぬ。

はん　それでもあなた、是非江戸へお歸りなされずばなりますまいなア。
長右　イヤ／＼、わしが斯う云うて置いて、騙して、また江戸へ行かうかと思うて、娘心に案じるのか。コレ、必らず案じる事はない。モウ／＼、どのやうな事があつても、江戸へは行かぬ／＼。
はん　イヽエイナア。さう仰つしやらずと、矢ッ張り江戸へお出でなさる方が
長右　ヤア。
はん　サア、あなたが京へお歸りなさらにやよいがと、それを案じて。
かや　コレ、この子は、なんぼ年がゆかぬとて、わつけもない。
はん　それぢやというて、わしや。
ト思ひ入れ。
ぐれ　成る程、こりや病も起りさうなものだ。婿さんのあの顔では。……イヤ、その病氣を癒すには、よいお守がござりまする。
かや　お守りとあれば、此方も金箱の娘。兎角災難遁がるるやう、お守が大切ぢや。して、馬士どの、其お守は、どのやうなお守でござるぞ。
ぐれ　モシ／＼、其お守は又と無い、有り難いお守。
ト前に拾ひし九重の印を出し
これは、わしが草津で拾ひました結構なお守。百文なら上げませう。
かや　何ぢや、百ぢや。百では高い。お守は十二銅が當り前なものぢや。
ぐれ　お前、お守を根切つては、験が惡うござります。
長右　コレ／＼、其お守、おれが買つてやりませう。大事な女房に掛けさせる守ぢや。
ト百文投げてやる。
ぐれ　左樣なら差上げませう。
ト件の印をおかやに渡し、百文取る。
かや　それでもお前、氣の毒だね。
長右　ナニサ。ちつとのうちも江戸にゐたから、錢金は綺麗サ。
供男　嘘ばつかり、今までついぞ百と纏まつた錢を、遣つた事はありませぬものを。正月、髮結ひに初剃りさへ
長右　コリヤ／＼。ツカ／＼と何を吐かす。
供男　それだといつて、大風ばかり。この長の道中、馬に

一つ乗りもしないで。

長右　これはしたり。……コレ〱、てめえは、これから直ぐに江戸へ引ッ返し、この様子を養父へさう云つて、もう江戸へは歸られぬ趣きを、云うてくれ〱。

供男　おらが旦那は、鏡を見た事が無いと見える。

長右　また吐かすか。

ト奥よりおわた、出て來り

わた　モシ〱。サア、あちらの座敷へお出でなされませ。

かや　ほんに、さうしませう。コレ、お半、此お守は、何ぢややら、結構らしいもの。わが身の肌に附けてゐや。

トお半の懐へ右の印を入れ

サア、長右衛門さん。

長右　ハイ〱、マア、お先へ。

かや　左樣なら御免なされませ。

わた　サア、お出でなされませ。

ト馬士唄になり、おかや先に、お半、おわた附添ひ、奥へ入る。ぐれ八、下座へ入る。おやす出てくる。

長右　カウ〱、女中、わしは直ぐに風呂へ入りたいが。

やす　ハイ〱、お風呂はこれでござります。お浴衣もこれに置きまする。

ト上手の風呂を教へ、疊みたる浴衣を置き奥へ入る。

供男　モシ〱、お前さん、江戸を立つて、一度も湯へ入らつしやらぬが、なぜ又今夜に限つて

長右　湯へ入らずに居られるものか。あゝいふ女房を持つからは、ちつとは磨いて

供男　泥坊を見て繩だね。

長右　これでも綺麗になるわえ。

供男　むくろじの因縁を知らぬな。

ト馬士唄になり、供男、奥へ入る。長右衛門は捨ぜりふにて裸になり、風呂へ行く。五右衛門風呂の底の沈みたるを、蓋と心得、取除けて、片足入れかけ、火傷して

長右　アツ、、……この風呂は底が無い。

トいろ〱思ひ入れ。側にある手水場の下駄を見つけこなしあつて

ハ、ア、これだな。こいつは風雅だ。

ト下駄を穿き、風呂の中へ入る。馬士唄になり、向うより慶政、件の裸身、跡より前幕の犬、褌の先を咬へ、出て來る。

慶政　シツ〱。この畜生め。もうおのれに用は無いワ。

まだ大津繪の趣向だと思つてゐるか。コリヤ、なんぼ畜生でも、おれが姿を見て、ちつとは氣の毒だと思へ。彌次郎兵衞とも云はるゝ侍ひが、若殿の切腹から、其まゝ邸を、たうとう駈落ち。昨夜草津で追剝ぎにあひ、身ぐるみ取られて眞ッ裸。柔弱非力の某ゆゑ、命を的の盜人には、迚もかな

犬　ワン。

　ト啼く。

慶政　それゆゑ、あんな奴には、ちつともかま

犬　ワン

慶政　とはいふもの丶、錢は無し、行く先とても定まらず。

　こりや一とし

犬　ワン

慶政　せにやならぬ

犬　ワン。

慶政　ハテ、間の好い畜生め。

　ト慶政、犬を蹴倒す。これにて犬逃げて下座へ入る。

犬までおれを馬鹿を見るやうにしをる。

　ト褌の間より袱紗包みの一巻を出し

まだも賴みはこの一巻。こりや先年亡びたる、楠家の軍術奧儀の祕書。故あつて身共所持すれど、運よくこれは昨夜取られず、この品好む武家方へ、賣り渡せば、金に有りつく品なれど、差當つても持ち腐れ、今夜泊る旅籠もなし。昨夜から何も食はず、腹がへつてちつとも歩かれず。旅はくひ物、くらひ物とは、よく云つたものだなア。

　ト思ひ入れあつて舞臺へ來り　あちこち見廻しゐる。

　此うち長右衞門、風呂よりあがり、體をあふぎながら

　慶政裸でゐるゆゑ、風呂を尋ぬると心得て

長右　モシ／＼、お前、風呂を尋ねさつしやるなら、爰でござりまする。

　ト云はれて、慶政、思ひ入れあつて

慶政　ハイ／＼、それは有り難うござりまする。マア、御ゆるりと。

　ト入る氣になる。

長右　今よく沸いて來ました。サア、お入りなされませ。

慶政　ハイ／＼。

　ト我れを忘れて、件の一巻を、浴衣の間へ隱し、狼狽てゝ風呂へ入らうとして、同じく足を火傷して

アツ、、……モシ／＼、あなた、この風呂へは、どうしてお入りなされました。

長右　ハイ、風呂へ入るには別にむづかしい事はございりませぬ。體を濡して、足から先へドンブリと。
慶政　それはかねて承知して居りますが、この風呂には底がござらぬから
ト云ひながら、長右衛門の脱ぎ捨てし下駄を見つけ
ハヽア、解りました。これは珍らしい。
ト右の下駄を穿いて風呂へ入り
ヤレ／＼、結構々々。
ト此うち長右衛門は側にある浴衣を着ようとする。件の一卷轉げ出る。長右衛門、取上げ
長右　ハテ、こいつはおつな物が、
ト何心なく懐へ入れ、浴衣のまゝ奥へ入る。慶政これを知らず
慶政　アヽ、いゝ心持ちだ。南無妙法蓮華經。……「ヤアぬかしたり猫傾城、その手で深味へかきのめされ」
ト悪い聲にて浄瑠璃を語る。此うちお安、膳を持ち出て來り
やす　モシ／＼、こりや、あなたのお召し物でございまするか。
慶政　イヤ／＼。
ト伸び上がり見て、思ひ入れ。
オイ／＼、おらがのだ／＼。
やす　左様でございますか。モシ、お膳も爰へ置きます。夜具も直ぐに持つて參りまする。
慶政　エヽ。……イヤ、そいつは有り難い。
ト狼狽てゝ風呂よりあがる。お安これを見て
やす　オヤ／＼、お前さん、下駄を穿いて風呂へお入りかえ。悪い冗談ばッかり。
慶政　ナニ、悪い冗談。爰の内が悪い冗談だ。底の無い風呂といふがあるものか。足を火傷するゆゑ、そこで下駄を穿いて入つた。
やす　モシ／＼、底はある筈でございます。
ト風呂場を見て
ほんに、底が取除けてございます。
慶政　それは蓋ではないか。
やす　これは五右衛門風呂というて、早く沸くやうに底が浮いて居ります。その底を踏まへて入るのでございます。
慶政　ハヽア、そこの所に氣が附かなんだ。
やす　御ゆるりとおあがりなされませ。
ト　お安、奥へ入る。慶政、長右衛門の脱ぎ捨てし着物

を着て

慶政　ハテ、よくしたものだ。先づ間違ひで湯へ入ると、それから着物が出來るし、飯にありつく。寐所が出る。こいつは奇妙々々。……ヤア、あまりの嬉しさに、今の浴衣が見えぬが、あの中の……ハ、ア、そんなら今の男が。

ト奥へ行きさうにして

イヤ／＼、あれを取返しに行けば、折角着た着物を取られる。ハテ、儘ならぬ事だ。よし／＼、後に彼奴が寐靜まつた時分に、あはよくば路銀まで……ドリヤ、食事にありつかうか。

ト思ひ入れあつて膳を持ち、奥へ入る。奥より逸平、以前の葛籠を持ち出て來り、あたりを窺ふ。向うより灘六、雲助の形にて、白羽の矢を持ち出て來り、門口より窺ふ。内には逸平これを知らず

逸平　姫君樣、さぞ窮屈でござりませう。先程承りましたあなたの戀人、與惣兵衞さまの落し胤、與八郎さまとは、下郎めも、只今までかつふつ存ぜず。併し、その與八郎さまは、自然生の三吉小僧とかいふ盗賊と

トあたりへ思ひ入れ。この時下座よりぐれ八出て、門口の灘六と囁く事あつて、向うへ入る。灘六は猶も樣子を窺ふ。

サア、それも確かに實の詮議。あなたは正しく大江の姫君、御剃髪のお望みありしところ、與八郎さまゆゑ墮落して、お心柄とはいひながら、玉の臺に引きかへて、奴の脊中に葛籠の中。これも浮世の皆成行き、恨んで下さらず、この上は、主人の敵を尋ねる次手、與八郎さまのお行くへも、探し求めて、お逢はせ申しませう。

ト此うち灘六、持つたる白羽の矢を門口へ突刺し、わざと足音高くさせて

灘六　サア／＼、爰の内だ／＼。

トこれにて逸平、葛籠を後へ圍ふ。

サア／＼、皆の衆、早くござれ／＼。

ト向うより、ぐれ八案内して、神主附き、百姓大勢、簑笠にて出て來り

神主　イカサマ、この内に矢が立つたワ。

灘六　みんな入つて、探せ／＼。

ト皆々、ドカ／＼と内へ入る。

神主　神のお告げに違ひなく

皆々　この葛籠だ／＼。

ト手を掛ける。逸平とめて
逸平　こりや理不盡に、この葛籠を何とする。
灘六　何ともせぬ。この葛籠の中には大江の姫君、重の井
　　　娘、隱れたる事、神は見通し。
逸平　なんと。
神主　この白羽の矢に短册が、附いて立つてゐるからは、
　　　鈴鹿の魔神へ、生贄に供へるのだ。
逸平　すりや、神の告げにて
灘六　暇がいつては神の祟り、皆の衆、早く
皆々　合點だ〳〵。
　　　ト葛籠へかゝる。
逸平　イヤ、合點のゆかぬ詞のはし〳〵。神は非禮を受け
　　　給はず、正しく騙りの拵らへ事。葛籠は滅多に
灘六　エヽ、四の五と面倒だ。ちつとも早く
逸平　イヽヤ、渡さぬ。
　　　ト逸平、灘六、立廻りのうち、皆々寄つて葛籠を持ち
　　　向うへ一散に入る。
　　　南無三、葛籠を
　　　ト灘六を蹴り退け
　　　いづくまでも

　　　ト後追ひかけて向うへ入る。灘六も續いて入る。この
　　　物音に、奧よりおわた、お安出る。おかや、お半の手
　　　を引き、長右衞門附いて出てくる。
わた　今のは慥か鈴鹿山の、鬼ヶ窟の人身御供。
やす　今朝から逗留の奴どのゝ、荷物の中がお姫樣とやら、
　　　側にゐてさへ知らぬものを、ほんに神樣は見通し。
かや　人身御供とは恐ろしい。斯ういふ娘を持つた身は、
　　　餘所の事でも、怖やの〳〵。
長右　なんの、餘所の事を構ふ事は無い。鬼に食はるゝ娘
　　　も運づく。それに引きかへ今爰で、めでたう祝言する喜
　　　び。人の運は、これ程にも違ふものか。お半ぼう、さぞ
　　　嬉しからう。
はん　わたしや、いつそ祝言するより、人身御供の方がま
　　　しぢやわいなア。
かや　其やうな事云はずと、爰で逢うたが幸ひ、卽ち吉日。
　　　ちよつと祝言のまなび。
わた　これはおめでたうござります。ちよつと、お酒を持
　　　つて參りませう
やす　そして、直ぐにお床を爰へ取りませう。
　　　トおわた奧へ行き、銚子杯を持つて來る。此うちお安、

よき所へ床を敷き、屛風を立てる。長右衛門、イソイソして

長右　これは氣の利いた手合ひ達ぢや　そんなら爰で

かや　善は急げぢや。サアお半。

はん　それぢやというて、わたしやモウ。

かや　ハテ、恥かしい事はない。其方から飲んで、聟どのへ。

ト嫌がるお半に、無理に杯を持たせ、おわた、つぐ。お半、飲む眞似して酒を明け、杯を抛り出し、ツンツンしてゐる。長右衛門、これを戴き

長右　思ひがけなきこの祝言　この杯の一滴が、わしが爲には壽命の藥、養老の瀧、菊の酒、天の甘露も、これには及ばぬ。

ト一つ受けて飲み干し

仲人無ければ聟のわしが、二役勤めて、一つ。……「高砂やこの浦船に帆を上げて、後は何だか知りませぬ。」

ト謠ふ。

皆々　エヽ、おめでたうござりまする。

かや　仲人は宵の程。

やす　お床も爰へ延べたれば

かや　お半も爰で

はん　イヽエ、わたしも一緒に

ト立つを、長右衛門引留め

長右　ハテ、恥かしい事はないわいの。

はん　それでもどうも

皆々　ゆるりとおしげりなされませ。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。

はん　モシ、母さん。

ト立たうとする。

長右　これはしたり、如何に年が行かぬとて、祝言すればおれが女房、亭主と一緒に、寢るに怖い事があるものか。

はん　それぢやというて。

長右　ハテマア、自由になつてゐや。

はん　アレ、否ぢやわいな。

トこの途端、バタ／＼にて、向うより三吉、慶政の着物に、頭巾を冠り、按摩の形にて駈けて出て來り、直ぐにガラリと内へ入り、門口を締める。これにて長右衛門、愕りして

長右　エヽ、愕りさせた。貴樣はなんだ。

三吉　ハイ。……按摩でござります。

長右　ハテ、仰山な入りやう。悪い所へ
はん　よう來て下さんしたなア。
三吉　お療治を致しませうか。
長右　イヤ〳〵、按摩に望みはない。早く行つてもらひませう〳〵。
はん　アヽ、コレイナア、折角來たものを、揉んでもらひなさんせ。
長右　エヽ、邪魔らしい。併し、其方の詞を背いても悪い。そんなら、按摩さん、ちつとばかりやつて下さい。
三吉　ハイ〳〵。
ト合ひ方になり、長右衛門の後へ廻り、肩を揉む、長右衛門、思ひ入れあつて
長右　コレお半、其方は年がゆかぬゆゑ、恥かしい事もあらうが、親の許した云ひ號け。その云ひ號けの夫のおれを、嫌ふ樣子。よう物を積つて見や。江戸では北村屋八兵衛というて大金持ち、北八北八と、人にも知られ、今度京の本家へ歸れば、帶屋の長右衛門、何方へ廻つても仕合せのよい男、その御新造樣になる其方、何も不足はありさうも無いもの。親にまで樂をさせるがその身の孝行。コレ、見や、ちよつとした路銀でさへも、この位ゐ持つてゐる。まだその上に、斯ういふ大切な品がある。
ト慶政が持つて來た一巻を出し
金でも買へぬ大切の寶物。斯ういふ福神を嫌ふといふがあるものか。
ト此うち三吉、始終これに目を附けてゐる。
三吉　モシ、そりやア何でござりまする。
長右　何だといつて、盲目が聞いて役に立つものか。コレ、お半、いま云つた事が解つたなら、おれの云ふ通りに
はん　なんぼ親の云ひ號けでも、お前のやうな。
長右　ヤ。
三吉　成る程、娘御の云ふのが尤も。こんな面で云ひ號けも
長右　なんだ、この按摩は。盲目で目が見えるか。
三吉　イヽエ、皆目
長右　こんな面とは。
三吉　面と申したのは……わしが面の事でござります。
長右　面がようても、目が見えなくつちやア何にもならぬ。おれは少々不器量だが、目は明らか。
三吉　モシ、旦那、お前さん目は二つあるが、鼻がござりませんね。

長右　馬鹿な事を云ふ。この位ゐ立派な鼻が。

三吉　でも、觸つて見ても知れませんよ。餘ッぽど奥の方だと見えます。

ト無性に顏を撫で廻す。

長右　エヽ、何をする。おれの鼻が手探りで知れるものか。鼻は低いが、目は明らか。ちよつと薄暗がりでも、コレコレ、爰にあるこの書附けでも見える。

ト件の觸れ書を取つて

なんだ、これは人相書だな。「一つ、年頃二十四五歲、中脊にして色白く、眼中淸しく、右の高頰に黒子一つ、右の者は自然生小僧三吉と申す馬士にて、大家の姫を奪ひ立退く曲者、召捕つて差出す者に於ては、褒美たるべきものなり」……この通り。なんと眼は鮮かであらうがの。

ト三吉これを聞き、思ひ入れあつて

三吉　そんなら配符がもう廻つたか。ハテ、恐ろしい。おはん戀に上下の隔ては無いと、思ひ合うた仲ならば、お姫様と馬士と、さぞかし道々仲ようして。それに引きかへ、心に思はぬ

長右　婿は金持ち。手入らずのお娘を

三吉　ヤレ、殺生な。

長右　ヤ。

三吉　ハテ、羨ましい。

ト思はず長右衛門の頭をピッシャリくらはす。長右衛門、恟りして

長右　アイタヽヽ。この座頭は、なぜ、おれが頭を

三吉　イエ、お頭のお療治を。

長右　イヤ〳〵、もうよい。てめえが爰にゐては、お半と氣味合ひの邪魔になる。もうよい程に、早く出て行け。

三吉　でも、お下をば。

長右　うるさい按摩だ。いゝといふのに。

三吉　ハイ。

ト三吉、そろ〳〵探り、長右衛門が側にある脇差をソッと懐へ引込み、門口へ出て、思ひ入れ。

長右　まだ行かねえか。

三吉　お療治代を。

長右　ソリヤ

ト端錢を三吉の足のあたりに投げてやる。探り取つて

三吉　有り難うござります。

ト門口を外より締める。合ひ方になり、長右衛門、嫌がるお半を無理に引立て、やがて

長右　エ、、來やれといふに。
ト唄になり、屏風を引廻す。此うち三吉、門口にて、件の脇差を懐より出し、旅人の足を洗ひし盥の水にて、片脇の石を取出し、寢刃を合せながら、キツと目を見開き、白刃を見る、木釣り鐘。思ひ入れあつて
三吉　今宵も最早、子の下刻、陰中の陰、九分にして、破軍、西に光り微なり。時刻もよしや旅人が、所持する品は、慥かに名だゝる……もしや尋ぬる品ならば、取り得し上にて姫の在所。先づ差當るあの旅人、路銀もしツかり。それ〳〵。
ト凄き合ひ方になり、門口を、メリ〳〵と破り、内へ入り、屏風の内へ忍び込む。此うち、慶政窺ひ出て、この體を見て、懐へ〳〵、門口の破れし所より逃げて出て、一散に向うへ入る。屏風のうち、バタ〳〵と音してお半逃げて出る。内より帯を踏まへる。この途端に屏風倒れる。内に長右衛門、裸にて縛られ、三吉、白刃を突附けゐる。
はん　そんなら今の、按摩さんは。
長右　座頭と見せたも、さてはこの頃噂ある
三吉　知れた事、泥坊だワ。

長右　ヤ、、、、。
三吉　うぬが所持する今の品、取得ん爲の出來合ひ按摩。詞の甘い其うちに、路銀もろ共その一品、キリ〳〵爰へ、出しやアがれ。
長右　イエ、この品は。
三吉　こま言云はずと、出しやアがれ。
長右　ハイ〳〵、元が拾つたこの一品、何事も命が物種。自由にお取りなされませ。
ト三吉、長右衛門の懐より、一巻と路銀を出す。
ヤア、そんなら路銀も。
三吉　やかましいわえ。
ト件の一巻を開き見て
こりやコレ、楠家の軍學の祕書。ハテ、思ひも寄らぬ……これも何ぞの。
ト懐中する。この時奥より、以前の崖藏、九郎・雁八、手下の形にて、おかやを縛り出て來り
三人　お頭、首尾は。
三吉　先へ入り込む、手下の者ども。
崖藏　家内の奴等を縛り上げ、有り金、又は金目の代物
九郎　また旅人の荷物や路銀

雁八　殘らず淺つて
三人　こかしましたよ。
三吉　出かした／＼。
長吉　そんならわしらが荷物も、風呂場へ脱いだ着物まで
かや　わしらも殘らず丸裸、因果な宿へ泊り合せて、この
難儀を
長右　云ひ號けの女房と、姑に逢うた嬉しさ引きかへて、
併し女房に怪我もなく、こればかりがまだしも取得。
三吉　みんな見やれ。この面で、手入らずのこの娘を、せ
しめるとは押しの強い。
崖藏　イカサマ、まだ手入らずのお初穗を、そんな野郎に
戴かせるは惜しいもの。
九郎　行きがけの駄賃に、モシ、頭、爰で娘を
三吉　それだといつて、可哀さうに
三人　わしらが押へて。
ト立ちかゝる。お半こなしあつて
はん　アモシ、其やうになされずと
三吉　エヽ、得心か。
はん　アイ。
三人　頭、おつだね。

長右　コレ／＼、お半、長右衛門といふ夫がありながら、
其やうな泥坊に
三人　どうしたと。
長右　イヤ、お泥坊樣。その娘は、わしの女房、これを横
奪とはお胴慾、あなた、間男でござりまするぞ。
九郎　やかましいわえ、いくら女房と吐かしても、娘は不
承知。
三人　ナアお娘。
はん　今からわたしをどこへなと、連れて行つて下さんせ。
かや　コレ娘、如何にわしとはなさぬ仲、實の親は由井の
紺屋、次郎作が娘ぢやとて、いつの間に其やうないたづ
ら者に。
はく　アイ、なんぼ親の云ひ附けでも、好かぬお方をどう
してマア。親を捨てゝも思ふお方に、附くが女子の操と
やら、その代りには、コレ申し、どうぞ母さんの命ばか
りは。
三吉　氣遣ひするな。そんなら、いよ／＼、おぬしはおれに
はん　必らず見捨てゝ、下さんすなえ。
三吉　さういふ氣なら盗人冥理、なんで見捨てゝよいもの
か。

長右　コレ〳〵、お半、おのれ、おれが見る前でその體裁。
エヽ、おのれはなア。
ト寄りかゝる。
三人　ビク〳〵ひろぐと、芋刺しだぞ。
ト手下三人、長右衛門をおかやと一つに縛り附ける。
脊中へ負つたやうな形に見える。
三吉　お嬢、では、おれと一緒に餘所へ行く氣か。
はん　アイ、たとへいづこの浦までも、
長右　おのれ、行く氣か。
三吉　知れた事だワ。うぬらは勝手にどこへなりとも。此方は、ソロ〳〵
三人　頭、出掛けやせう。
ト三吉、お半の手を引き、皆々附添ひ、花道へかゝる。
かや　なんぼ生さぬ仲ぢやとて、母を振り捨て、不孝者めが。
はん　母さん、免して下さんせ。
長右　お半が代りに引取りし、婆アを脊に長右衛門、これも因果な生れ附き、二人馱面の川水に
かや　浮き名を流す泡沫の
三吉　あはれな態わえ。

皆々　ハヽヽヽヽヽ。
長右　ハア。
ト泣き落す。
三吉　サア、來やれ。
ト靜かなる禪のツトメにて、三吉、お半の手を引き、皆々向うへ入る。長右衛門、おかや後見送り、こなし。
此まゝ道具變る。
本舞臺、うしろ黑幕、この前一面の岩組み、眞中に岩窟、これに古びたる白木綿の戸帳、靈鬼窟と書きあり、上の方に杉の神木、注連を飾り、これに女の額を描きし板、大いなる釘にて打附けあり、一面に杉の吊り枝。すべて鈴鹿山の道具。爰に毒蟲の彌藏、仕丁の形にて、白衣と鬼の面を持ち、灘六、簑笠にて松明を持ちゐる。山颪しにて道具納まる。
彌藏　灘六、首尾は。
灘六　喜ばつしやい。まんまと首尾よく姫は此方へ、アレアレ、向うに見える松明こそ、それに違ひない。官太夫さまへお渡し申せば、互ひに褒美。
彌藏　この面にて鬼神の形をなしなば、心弱き女の事、忽

ち姫は氣絶なさん。そこを幸ひ御主人へ。
灘六　またその上にこの書狀、これは遠州赤羽屋、五郎作へ質入れなしたる、雷丸の劍の儀につき、官太夫さまへ屆ける狀、これも次手に、こなたの手から。
藏　心得た。
ト右の狀を取る。
灘六　心がゝりは、姫の供した奴めが、後追ひかけて來ては、何かの邪魔。
彌藏　とても事に、道にて其奴を
灘六　おッ方附けて、後からわしは
彌藏　ちつとも早く
灘六　合點だ。
ト灘六、一散に向うへ入る。
彌藏　何かの手番ひ、これでよし。この上は岩窟にて、ソレ。
トこの時、戸帳の中より手を出して、彌藏の首を押へる。
ヤ、、先に誰れやら。
ト振り切らうとする。內より強く引くゆゑ、引摺り込まれる。直ぐに山颪しになり、向うより以前の大勢、松明を灯し、棺を擔ぎ、神主附添ひ出て來り、よき所へ下ろし
神主　ヤレ〳〵、みんな、御苦勞々々々々。最早丑三ツの刻限、魔神の出現に間もござるまい。
皆々　美しい娘を鬼に喰はすとは、恐ろしい事おやなう。
神主　イヤ〳〵、さうでない。なんぼう美しうても、神の指圖で喰はれるとは、よく〳〵前世に罪のある女でござらう。……アレ〳〵、あの神木に女の顏が釘で打附けてござるが、あれもどこのか女の嫉妬で、呪ふ事と見えまする。あゝいふ罪をするから、女はいづれ鬼なぞに喰はれますて。
皆々　ハテ、恐ろしい事でござるの。
トこの時、雨車、雷鳴り出す。
神主　イヤ、恐ろしいといへば、今に鬼が出やうも知れませぬ。
皆々　今の內、早く逃げませう〳〵。
神主　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト皆々、わや〳〵云うて向うへ入る。山颪しになり。戸帳の內、バタ〳〵と音して、彌藏、一太刀切られ、中返りして出て、直ぐに棺へかゝる。棺の中より白刃

出て、彌叢な見事に切り倒す。これなキッカケに戸帳落ちる。内に白井權八、丸に井の字の紋の着附け、拔刀、件の鬼の面と山衣を片手に持ちて立ち身。これと共に、棺をメリ〳〵と毀し、中より由井民部之助、若衆、武者修行の形にて、同じく丸に非筒の紋所、拔刀にて出る。これにて空へ半月現はれる。双方これを見やり、キッと見得。誂らへの鳴り物になり

民部　石床洞に止まつて、荒く空しく拂ふ。
權八　玉案林に拋つて、鳥獨り啼く。
民部　それは卽ち仙家の賊。
權八　爰は名におふ鈴鹿の岩窟。
民部　古へ田村將軍の、退治給ひし鬼神の靈魂、爰に殘ると愚人の流言
權八　その虚を計つて姫君を、奪はん奸者の企みと聞き、先へ入込み窺ふところ、贄の棺は姫ならで
民部　大日本を武者修行、贄の婦人の身に代り、入り來りしも鬼神の正體、見極めんずと思ひしに、賊とも覺えぬ其いでだち。
權八　我れも武道を修行の旅路、かゝる深山幽谷を、夜陰に一人さまよふも、我れに勝りし武術の猛勇、出會はん事もと日頃の望み。
民部　ハテ、不敵にも小人の、賴もしき心掛け。幸ひ木の間に洩れし月影、この場に於て互ひの手練、太刀筋交すその以前、名乘る手前が姓名は、着せし衣類の紋どころ、丸に非筒を御自分にも
權八　丁度似寄りの手前が定紋。氏は白井の
民部　アイヤ、互ひに浪人、名乘りは詮なし。身共も氏は、由井の何某。
權八　それゆゑ互ひに
民部　非筒の定紋。
權八　年も、姿も
民部　似寄りし二人。
權八　この場の武術をくらべこし。
民部　振分け髮の頃よりも
權八　磨き置いたる魂ひを
民部　つい云ひ掛けし
權八　非筒の角菱。
民部　丸く納めぬ
權八　武士の意地づく。

ト兩人、ツカ〳〵と寄つて、權八、刀を拔きかける。

民部之助これを留めて、キツと見得。鳴り物替つて、立廻りよろしく、此うち月隠れる。兩人、空を見やり

民部　葉越しの月の雲隠れ

權八　隠れし姫のその在所、

民部　イヽヤ、存ぜぬ。それよりも、殘りし勝負を

權八　何を小積な。

トまた立廻り、倒れし彌藏起きあがり、この中へ入る。彌藏の懐より件の書狀落ちる。これを民部之助拾ひ、懐中して、權八、民部、双方より、彌藏を見事に切る。彌藏、苦しむ。民部は權八を仕留めし心、權八は民部を切りし心にて、兩人、思ひ入れあつて

兩人　ハテ、雉子も鳴かずば

ト兩人思はず悔りして、双方へ飛び退く。彌藏、見事に返る。兩人、裾にて刀を拭ふ、双方一時に木の頭。よろしくキザミにて、

ひやうし幕

道具出來次第、この幕切つて落す。

本舞臺、淺黄幕、眞中に九尺の開帳小屋、白木綿の幕を張り、この前に須彌壇、この上に花立て種々の供物あり。下手に關の地藏開帳の立て札。同じく大塔婆立てあり。上の方に葭簀張りの掛け茶屋。床几二脚ほど並べ、爰に垂れ駕籠一挺。この駕籠の上に秋葉山奉納の白刃を附けし額結びつけあり。駕籠舁き二人、この側に茶を飲んでゐる。茶屋の亭主、茶を汲んでゐる。西念、堂守りにて鉦を叩きゐる。下手におはぎ、女乞食、與之助、菅笠を冠り、さゝらを持ち、踊つてゐる。參詣の仕出し大勢立つてゐる。双盤、伊勢音頭にて、賑やかに道具納まる

與之　島さん、紺さん、花色さん、遣てかんせ、抛らんせ。

仕出　ハア、山田の相の山の押ッ冠せだな。

同　可愛らしい好い小僧だ。

皆々　サア〳〵、遣りませう〳〵。

ト皆々錢を遣る

はぎ　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

亭主　お入りなされませ。お茶お上がりなされませ。

皆々　今日もよいお天氣でござります。

ト皆々茶屋へ入る。

亭主　ハイ〳〵、どなたもお早うござります。

ト皆々へ茶を汲んで出す。

仕出　いつも〳〵賑やかな事。お開帳は大當りでござるの。
亭主　イヤモウ、毎日の群集。取分け、今日は四月八日、お釋迦樣の御誕生で、藤澤の智行さまがお出でなされて、お十念がござりました。又、お開帳にもござるとの事で、お法衣も頭巾も、爰へ置いてお出でなされました。
皆々　それは有り難い事でござるの。
西念　これに安置し奉るは、洛陽大德寺の開山、一休禪師開眼の地藏尊、六道能化の活佛でござる。近う寄つて御拜をなさるとも、なさらぬとも御勝手次第。只お賽錢さへ上げれば、其お賽錢を、この活佛の堂守りが、救ひ取らんとの御誓願は、くび〳〵と浴るほど、のんだりそわか。
　ト卷き舌で云ふ。
仕出　あの坊さんは、いつも〳〵醉うてゐるの。
亭主　左やうサ。おへない飮んだくれでござります。
西念　その筈サ、酒盛如來のお弟子だもの。
駕甲　嘘アねえ。噂をしたら、おいらも飮みたくなつた。
同乙　ちよつと向うでやつて來べい。
　ト駕籠へ向ひ
　モシ、旦那、ちよつとお待ちなされて下さりませ。

駕甲　サア〳〵、來や〳〵。
　ト駕籠舁き兩人、下座へ入る。仕出し、捨ぜりふにて、東西へ別れて入る。
はぎ　エ、、この餓鬼は、ちつとのうちも野良をかはく。精出して踊らねえか。……よく、メソ〳〵と泣きやアがる。不吉な餓鬼だぞ。
　ト頭を喰はせる。双盤になり、向うより講中の者二人、出て來り
コレ〳〵、西念どの〳〵。
　ト西念、居眠りしてゐるゆゑ、講中、側に有り合ふ鉦を仰山に叩く。西念、愕りして
西念　これに安置し奉るは
講甲　ア、コレ、西念どの、貴樣また、醉つたの〳〵。
西念　ア、、愕りした。いま美い女と酒盛りをしてゐる夢を見てゐたが、惜しい事をした。
講乙　お株で、下らなくなつてゐるぜ。よくそんなに酒が飮めるの。
西念　なぜ。咽喉に穴が明いてゐるから飮めるのサ。何も不思議な事はねえ。また酒でも飮まなくつて一日もゐられるものか。奉納といつちやア、牛蒡や薩摩芋の揚げた

のばかり。おらア坊主でも、こんな物は食はねえ。
講乙　なぜ〳〵。
西念　「坊さん牛蒡食つて縛られた」といふ例しがある。
講中　何を云はつしやる。
西念　それだから今朝智行さまが、置いて行つたこの袈裟、法衣と頭巾。そいつを質に置いて、海老でも鮑でも買つて食ふ氣だ。なんといゝ氣前だらう。
講甲　とんだ事を云ふ。その法衣や袈裟を、わしらは取りに來たのだ。
西念　なぜ〳〵。
講乙　なぜといふ事があるものか。今日は四月八日で、灌佛の法會だから、お開帳には又、智行さまがござる筈。その品々を取つて來いとの事。それでわざ〳〵來たのだ。質に置かれて堪るものか。
西念　ナニ、今日は何だと、灌佛だ、人を馬鹿にした。乾物ものが食はれるものか。生臭がいゝ。
講甲　よく食ふ事ばかり云ふ坊主だ。マア、何にしろ、その袈裟法衣を寄越さつしやい。
西念　コレ、持つて行つて何にする。
講乙　智行さまに、お開帳を賴むのだ。
西念　コレ、馬鹿な事を云はつしやい。開帳が人賴みをする程むづかしいものか。智行さまも坊主なら、おれも坊主だ。智行さまの頭ばかり圓くて、おれが頭は三角か。何も坊主毛色を分ける事はねえわえ。
講甲　おへねえ氣紛れだ。管を巻かずと、袈裟や法衣を早く寄越さつしやい。
西念　そんなに欲しくば持つて行きやアがれ。
ト袈裟法衣、頭巾を投げ出す。
講乙　勿體ねえ坊主だな。
西念　ナニ、寺町の髪結床へ行きやアしめえし、勿體ねえも凄まじい。間抜け講中め。
講甲　この生臭坊主め。講中に向つて間抜けと吐かしたな。
西念　云つたら、どうした。
講乙　太え坊主だ。住持の所へ引摺つて行かにやアならねえ。
講甲　サア〳〵、あゆびやアがれ〳〵。
ト兩人にて西念を引摺り出す。
西念　うぬらは、この名僧を打ちやアがつたな。
二人　やかましい、うしやアがれ。
ト茶屋の男、捨ぜりふにて留める。西念、無性に惡態

なつく。講中これを捕へ、袈裟法衣、頭巾は舞臺へ置いたまゝ、捨ぜりふにて摑み合ひながら下座へ入る。

げぎ　ヤレ／＼、とんだ氣まぐれな坊さんだ。今のごてつきに錢を取りそくなつた。いま／＼しい。間の惡い事だ。

ト双盤になり、太郎助、飛脚の拵らへにて出てくる。下座より赤羽屋五郎作、町人の旅形にて、供男に箱入りの刀、兩掛けの荷を擔がせ出て、兩人舞臺にて摺れちがひ、五郎作は向うへ行きかける。太郎助、荷物の札を見て

太郎　モシ／＼、少しお待ちなされて下さりませ。

五郎　私しでござりますか。

太郎　左樣でござります。お荷物には、遠州濱松宿、赤羽屋五郎作と記しござりまするが、お前樣が

五郎　ハイ、即ち五郎作でござりまする。して、お前樣は。

太郎　ハイ、私しは三州八つ橋の、左次兵衛の女房、お三と申す者の使ひでござりまするが、さる方より内々申し參りましたは、雷丸と申す短刀が、お前樣のお手に入つたとの事、その御相談を致しくれよと、金子も少々持參いたしましたて。

五郎　ハテ、それはよい所でお目にかゝりました。その雷丸は京都にて求めまして、それから諸所をめぐり、只今歸り道でござります。して又、金子は、何ほど御持參なされました。

太郎　三十兩持參いたしましたが、して、その刀は。

五郎　即ちこれでござります。

ト箱の中より雷丸の短刀を出して見せる。此うち供の男居眠りゐる。

併しながら、三十兩位ゐでは、この品は手離されませぬ。

ト箱へ入れて、床几の上へ置く。

太郎　して、どの位ゐなら、お賣渡しなされまするな。

五郎　京都にて六十兩の抵當に取りました品、隨分値賣りも出來さうな、代物ではござりますれど、元金ならば上げませう。

太郎　成る程、左樣に仰しやる品、兎やかうも申されますまい。殊に、女の身で、わざ／＼私しを頼み、飛脚に立てます位ゐの譯。こりや隨分御相談が出來さうな譯でござりまする。

ト此うちおはぎ、件の短刀をソッと取出し、駕籠の上に附きし額に打つてある白刃と摺り替へ、素知らぬ顏をしてゐる。兩人これに心附かず

五郎 兎も角もお話し致しませうが、爰は道中、幸ひあの茶屋で
太郎 左樣いたしませう。
ト兩人、供を連れて茶見世へ入る。おはぎ、跡見送り
はぎ 今の話しの樣子では、大金になる代物。こいつはまんが直つて來たわえ。
トこの時駕籠舁き二人、出て來り
駕甲 これは〳〵、大きに手間どりました。サア〳〵、急いでやらう。
ト駕籠を舁上げ、行きにかゝる。おはぎ、悧りして
はぎ コレ〳〵、その額はちつと
ト結へし額へ手を掛ける。
駕甲 エヽ、乞食め、何をしやアがる。
トおはぎを突倒し、駕籠は一散に下座へ入る。おはぎ、起きあがり
はぎ オヽイ〳〵。その駕籠待つてくれ〳〵。
ト下座へ行きさうにする。與之助、同じくおはぎに附添ひゆく。
エヽ、邪魔な小僧だ。ちつとの內待つてゐろ。
ト地藏堂の中へ與之助を入れて

餘ツぽど遲れた。ドレ一走り。オヽイ〳〵。
ト駕籠を呼びながら下座へ入る。馬士唄になり、向うより鶉權兵衞、雲助の形にて、馬を曳き、この馬に小萬、京の藝子の形にて乘り、出て來り
權兵 コレ、小萬さん、向うがもう關の地藏樣だ。お開帳を拜んで行きなさい。
小萬 コレイナア、お前、わたしの名を、どうして知つてゐなんすえ。
權兵 とぼけなさんな。京都祇園町の藝子、關の家の小萬さん、海道まで聞えたお前。わしも二三度京へ通しに行つた時、餘所ながら見覺えて知つてゐやすよ。
ト小萬これを知らず、心遣ひの思ひ入れ。權兵衞、此うち舞臺へ來り、下手へ馬を引据ゑ、小萬を抱き下ろして
ソレ、與作に早く逢はれるやうに、地藏樣でも拜みなせえ。
小萬 ほんにマア不思議な。わたしが名といひ、與作さんの事まで
權兵 知らなくつてどうするものか。與作は矢ッ張りおれが仲間の馬士、常住お前の話しをして、のろけて居るの

よ。

小萬　そんなら與作さんは、この近所にゐなさんすか。

權兵　ゐるとも／＼。お前の乘つて來た馬は與作が馬だ。おれが借りて出たのよ

小萬　さうでござんすかいな。ほんに、丁度好いお方に。コレイナア、お前、どうぞ與作さんに

權兵　サア、逢はせる事は造作もないが、お前はどういふ始末で、一人爰まで來たのだ。

小萬　サア、わたしはお前、あの與作さんが、石井の家來で、兵助さんといつた時分、フト云ひ交して一度が二度、たび重なりし遊所通ひ。それゆゑお主の御勘當。今は與作と名を改め、野末の駒を命の手綱と、文の便りに、聞いた時のその悲しさ。又その中へ搗てゝ加へて、由留木の御家中、赤堀源吾といふ人が、わたしを身請けするというて、身代の手附け六十兩、親方さんへ渡したゆゑ、それが苦になり、わたしは病氣。其うちに源吾さんも、お屋敷を勘當との事、それからわしも祇園町を、駈落ちして與作さんの、行くへを尋ねに、はる／＼と、知らぬ旅路の憂き苦勞も、わたしゆゑ勘當の、身とならしやんした與作さんゆゑ、逢うて段々便りにと、それでわたしは

權兵　駈落ちして來たとは、心中者だの。

　トこの時、地藏堂の中より與之助出て

與之　先乘りさん、お山さん、やてかんせ、跳らんせ。

　トさゝらを摺り、踊る。小萬、見て

小萬　ほんに可愛らしい子ぢやないかいなア。

權兵　ナニ、こりやア相の山の乞食の子サ。

小萬　乞食の子にしては、人柄の好い顏だち。可哀さうな事でござんすなア。

　トこの時、下座よりおはぎ、出て來り

はぎ　ヤレ／＼、早い駕籠舁きめ。皆暮に見失ひ、たうとう無駄骨。いま／＼しい。

　ト與之助を見て

コレ／＼この餓鬼はなぜ爰へ出てゐる。迷子になつたら、どうせうと思ふ。よく世話を燒かせる餓鬼だぞ。

　トこづき廻す。小萬、側へ寄り

小萬　ア、コレ、可哀さうに、其やうにせずとも。

はぎ　ハイ／＼。イエモウ、お構ひなされまするな。大の蟲持ちで、メソ／＼泣いてばかり。いつそ、くたばつてしまへばようござります。

小萬　でも、むごたらしい、お前の子ぢやないかいなア。
はぎ　イエ〳〵、わたしの子なら仕方もござりませぬが、こりやア與作といふ人の所から、預かつた餓鬼で、まさか息のあるうちは、乾干にもされぬもの。それにマア、里扶持といつちやア、一文も寄越さず。わたしも元からの乞食でもなけれど、食ふ事がならぬゆゑ、せう事なしに乞食をするのサ。これもみんなこの餓鬼ゆゑ、ほんにほんに、こんな、埋らぬ、厄介者はござりやせんのサ。
權兵　そんならその子は、與作が子か。それぢやア矢ッ張りお前の腹から
小萬　イエ〳〵、これを思へば、常々與作さんの話し。大江家のお姫樣、相手の知れぬ不義をして、身持ちになりしを、左內さまの計らひにて、人目を忍び平產あり、與作さんが預かつて、人知れぬ所へ、里に遣つたといふ事を話しなさんしたが、慥かにお名は與之助さま。
はぎ　ほんに違ひはござりませぬ。よくお前、云ひ立てを御存じだね。
權兵　知つてゐる筈よ。與作と云ひ交した、祇園町の藝子、小萬さんだものを。
はぎ　オヤ〳〵、さうかえ。それは、マア〳〵、よいお方にお目にかゝつた。……サア〳〵、お前、與作さんと緣ある人なら、この子を返します〳〵。
ト與之助を小萬へ突附けて
ヤレ〳〵、これで厄介を、拂つた〳〵。
小萬　モシ〳〵、與作さんから預かつたこの子を、わたしに返すとは、そんなら與作さんは
はぎ　里扶持の工面が出來ぬから、この頃は行くへ知れず。
小萬　エ、
はぎ　噂を聞けば、遠州小夜の中山の近所に、侘び住居との事。わたしもそこまで尋ねて行かうと思うても、路銀も無し。お前も亦この子を引取るが迷惑なら、里扶持の勘定しておくれ。それもならずば、この餓鬼を、男の子でも大事ない、宮川町か、紀州海道の、三日市へでも叩き賣つて、金にせにやアならぬ。結構なお山さん、よもや里扶持の勘定せざアなるまいがな。
小萬　サア、其お子を引取つても、女子の一人、又これから遠い旅路。
ト思ひ入れあつて頭の櫛を拔き
コレ、女中さん。其お子の里扶持とやら、どの位ゐ上げてよいやら知れねども、與作さんの行くへを尋ねてから

此方へ引取るそれまでのうち、これを賣りなとどうなとして、少しの間其お子の、御介抱をお頼み申します。

ト おはぎ、この櫛を取つて見て

はぎ そんなら里扶持の代りに、この鼈甲の櫛をわたしにおくれかえ。

小萬 不足ではあらうが、どうぞそれで。

はぎ ほんまにおくれかえ。オヤ〳〵、結構な、投賣りにしても十四五兩が物は……ほんに〳〵、都の藝子さんだけ、氣前のいゝあなた。イヤモウ、あなた、お世話いたさなくつてなんと致しませう。わたしもこれから足を洗つて、遠州へ尋ねて參りませう。モシ〳〵、あなた、與作さんにお逢ひなされても、乞食をしてゐた事は、これそれでござりますぞえ。どうぞ沙汰無しにお頼み申します。

小萬 そんならそれで得心かえ。

はぎ 得心の段かいな。これから直ぐに足洗ひの相談、わたしはこれでお別れ申しませう。ハイ〳〵、大きに有り難うござります。よいお方にお目にかゝりました。ホ、ホ、、、。サア〳〵、お坊さん、おんぶをなされまし。

ト 與之助を脊負ひ

こりやあなた、大きに有り難うござります。これで今の駕籠の額が、ちつとは埋つたっ併し、あれも惜しいもの。

小萬 エ、。

はぎ ハイ、又お目にかゝりませう。

ト 双盤になり、おはぎ、無理に追從云うて下座へ入る。權兵衞、跡見送り

權兵 エ、よくしやべる女だ。あゝ現金にはならぬものだ。ハ、、、、サア小萬さん、これからちつとも早く。

小萬 イエモウ、お前とは、えい行くまいわいなア。

權兵 そりや、なぜ。

小萬 與作さんは、疾に遠州とやらへ行つてござんすげな、

權兵 ヤ。

小萬 それに馬まで貸したなぞと、わたしを騙して、こりや外へ。

權兵 成る程、さう推量したら隱すも無駄。おぬしを與作に逢はせると、騙して、正は、赤堀源吾どのに渡す工面よ。

小萬 して、こなさんは源吾どのに。

權兵 ゆかりかゝりは無けれども、おれの主人は大江の家中、本庄助太夫さま、源吾どのゝ兄、官太夫さまと心を

合せ、大江由留木の兩家を奪はんと、密事まで段々合ふ程の仲。それを氣取つて同家中、白井兵左衞門が悴權八、主人助太夫さまを討つて立退く。それゆゑおれも、この通りの浪人。主人同士の緣引きにて、源吾どのゝ世話になるうち、又ぞろや源吾どのも浪人。なれども、身請けの濟んだおぬしを、外へ、うま〳〵取られちやア、六十兩の埋め場も無し、浪人した源吾どのゝ武士が立たぬ。丁度逢つたが物怪の幸ひ、おぬしは是非とも源吾どのへ。

小萬　てつきり、こんな事であらうと思うたわいな。わたしも一旦親方の所を、駈落ちして出たからは、元より覺悟の命一つ。與作さんに逢はぬうちは、なんぼ果敢ない女子でも、さう自由にはならぬわいなア。

權兵　自由にならうがなるまいが、是非とも連れて行かにやアならねえ。

ト小萬の手を取る。

小萬　わたしや否ぢやわいなア。

ト振り切る。

權兵　一緒に歩べ。

小萬　エヽ、知らぬわいなア。

ト双盤になり、權兵衞、小萬を追ひ廻す。小萬、砂を打ちつけ、下座へ逃げて入る。權兵衞、眼へ砂の入りし思ひ入れにて

權兵　うぬ、逃がしてよいものか。

ト同じく下座へ入る。馬士唄になり、向うより長右衞門、裸にて、ブラ〳〵出て來り

長右　アヽ、思へば人の身の上ほど、解らぬものはない。誰れあらう、北村屋八兵衞、北八々々と人も知つた町人が、石部の宿で泥坊にあひ、裸で道中しようとは思はなんだ。なれども腹がへつた。向うは關の地藏、マア〳〵、あすこへ行つて

ト舞臺へ來り、以前の袈裟法衣を見附け

なんだ袈裟法衣……幸ひこれを着て

ト法衣を着て袈裟を掛け

法衣で形は出來たれど、奴頭はおつなもの。

トあたりを見廻し

あるワ〳〵。

ト地藏の冠りし茜木綿の頭巾を取つて

これを冠つて、これから何ぞ食物を……あるワ〳〵、芋の丸揚げとは忝ない。

トお盛り物の揚げ芋を取つて無性に食ふ。

殘り一本は中食に、何ぞ包む物を……あるぞ〳〵、肝腎の一卷は取られたれど、袱紗は殘つてある。これに包んで。

ト袱紗へ芋を包む。バタ〳〵と人音するゆゑ、長右衞門うろたへ、地藏の錫杖を持ち、正面に向き、地藏になる。下座より小萬出て來り、長右衞門の後へ隱れる。直ぐに權兵衞出て來り、あちこち探し

權兵　ハテ、めんえう。たつた今、爰へ逃げて來た小萬が、見えぬといふは不思議だ。外に人は無し、地藏がゐても役には立たず。

長右　默れ。

ト大きな聲をする。權兵衞、恟りして

權兵　エ、。

ト不思議さうに見て

この地藏は生きてゐるやうだが、併し、桐山に似てゐるやうでもあり、もしや物を云ひはせぬか。

ト少しヅッとしたる思ひ入れ。長右衞門、仕濟まし顏にて

長右　善哉々々。汝元來慾心增長、それを見出ださん爲に、假に女と現はれ、汝が心を引き見しなり。

權兵　ヤア、。

長右　善哉々々。あはよくばあの女を、賣らんとなしたるその罪少なからず、よつて人界地獄へ連れ行くなり。

權兵　イヤア、。

長右　善哉々々。女の事は思ひ切り、おのれが面を、よく〳〵淨玻璃の鏡へ映して見ろ。女にはくひやひ無し。まだ〳〵、一昨年死んだおのれの女房から、言傳があつた。

權兵　ナニ、女房から言傳がありましたか。なんと申しました。

長右　善哉々々。汝が女房の言傳には、娑婆で地獄をしたゆゑに、あの世へ行つても地獄へ落ちる。

權兵　そんなら地獄に居りますか。悲しや〳〵。

長右　善哉々々。なれども地藏が情にて、極樂へ導きたりその女房が申すには、極樂も大入りにて、土間も棧敷も賣切れて、蓮の臺には居所が無いから、割込み半座を分けて待つてゐるから、早う來いと。

權兵　ナニ、待つてゐるから早う來いと。

ト思案して

イヤア、滅多には行かれぬ。まだ娑婆に仕殘した用があると云つて下さりませ。

ト長右衛門を見て

長右　どうもをかしい。桐山に正の地藏樣だ。

ト紛らす。

權兵　善哉々々。

ト寄らうとする。此うち西念、講中、茶屋仕出し、大勢出て來り

權兵　なんだかおつだ。

西念　貴樣はなんだ。

權兵　どうもしねえが、をかしな地藏。

西念　ナニ、地藏がをかしい。この馬士は地藏を馬鹿にする。地藏が馬鹿にされちやア、この堂守りが濟まねえぞ。

長右　さうとも〳〵。其やうな奴をこの宿へ置くと、宿内の爲にならぬ。早く宿外れから追ひ出してしまへ。追ひ出さぬとわいらまで、卷添へに地獄へやるぞ。

皆々　イヤア、

長右　キリ〳〵送れ。

西念　背に腹は代へられぬ。

皆々　キリ〳〵行かつしやい。

權兵　とんだ目にあふものだ。

皆々　サア、來さつしやい。

ト双盤になり、皆々權兵衛を連れ、向うへ入る。

長右　大べら坊め。サア〳〵、女中、もう氣遣ひない。

ト小萬を前へ出す。

小萬　わたしや、ほんまの地藏樣かと思うてゐたわいな。危ふい所をあなたのお庇で

長右　嬉しいと思ふなら、なんぞ禮を

小萬　サア、其お禮は。

長右　其お禮には

ト抱きつくを、悧りして突きのけ

小萬　アレ、惡い事を。

長右　ナニ、惡い事をするものだ。

ト小萬を無理に抱かうとする。この時、向うより慶政、以前の形にて、スタ〳〵出て來て、この中へ入り、ゴツチヤになる。小萬、下座へ逃げて入る。長右衛門、慶政を見て

長右　うぬは泥坊だな。うぬが着てゐるのはおれの着物だ。此方へ寄越しやアがれ〳〵。

慶政　イヤ〳〵、着物より大切な、おれが一卷、此方へ返せ。

ト武者振り附くを、振り放し

長右　うぬ、泥坊め。
　　ト兩人立廻り、なかしみ、いろ〳〵あつて、よろしく道具變る。

　　これにて舞臺一面、黑幕を振り落す、下手に殘りし開帳札變つて、龜山城下の下馬札になり、時の鐘、馬士唄になり、向うより源吾、白の行衣、金毘羅參りの神酒箱を脊負ひ、大小にて出て來る。下座より牛次郎、同じく白の行衣、脚絆、大小にて、以前の額を脊負ひ、秋葉參りの形にて出で來り、兩人、心附かぬ思ひ入れにて

源吾　お旅人は、金毘羅へ御下向かな。
牛次　イヤ〳〵、拙者は遠州秋葉山へ參詣の者でござる。おてまへ樣は、金毘羅御參詣かな。
源吾　左樣でござる、餘程夜更けに立ちましたが。
牛次　イヤ〳〵、もう夜の明けるに間もござるまい。アレ〳〵、東が明るくなりました。
源吾　イカサマ。この樣子では、今日も天氣でござらう。
　　ト鷄の聲する。城の時の太鼓。これをキッカケに、黑幕を切つて落す。向う一面、龜山の城の遠見。爰にて初めて兩人、顏を見合せし心にて
牛次　ヤ、其方は赤堀源吾ならずや。
源吾　さいふは石井牛次郎か。
牛次　ハテ、よい所で逢うたなア。
　　トきつとなつて
源吾　如何に、源吾、若殿馬之助と申し合せ、我が父石井左内を討つたる事、覺えやあらん。この所にて出合ひしは、汝が不運、某が、優曇華の花。最早叶はぬ、尋常に、親の敵と勝負せよ。
牛次　小癪な丁稚め。如何にも左内は、身が手にかけた。汝も共に返り討ちだぞ。覺悟ひろげ。
源吾　無益の廣言。恨みの一太刀。イザ
牛次　イザ
二人　イザ〳〵〳〵。
　　ト鳴り物になり、兩人、脊負ひし品を取除け、拔き合せ立廻り。此うち、長右衞門、慶政、駈けて出て來り
長右　着物を返せ〳〵。
慶政　一卷を渡せ〳〵。
　　ト立廻りの中へ入り、あちこち突き廻され、慶政は落ちたる白刄の附きし額を拾ひ、一散に下座へ逃げて入

ろ。長右衛門もうろたへて
長右　ヤア、拔いた〳〵。喧嘩だ〳〵。
ト喚きながら、下座へ入る。兩人は褄はず立廻り。この時、下座より、菖蒲革の侍ひ大勢、棒を持ち出て來り
侍ひ　ヤア、何者なれば御城下にて、刃傷に及ぶ不屆き者、仔細を申せ。たつて鎭まらずば、踏み附けて、召捕れ召捕れ。
ト各々わめく。
半次　ヤレ、聊爾あるな、方々、某ことは由留木の藩中、石井左内が悴、同苗半次郎、これなる者に父を討たれ、お上へ願ひし敵討ち。即ち御免許の墨附も、所持なし罷りある。
ト懷中より狀を出して侍ひに渡す。これを取り、改めて
侍ひ　ナニサマ、かゝる墨附ある上は、相違なし。敵討ちとあれば、武門の義理、直さま我れ〳〵檢分の役目、心置きなく、勝負あれ。
半次　忝なき御芳志、この場に於て
源吾　何を小積な。
トまた立廻りよろしくあつて、トゞ半次郎、踏み込んで源吾を切り倒し
半次　親の敵、思ひ知つたか。
ト止めを刺す。
皆々　お手柄々々。
トこの前へ淺黃幕を振り落す。
右の下馬札、庄野宿の榜杭に變る。下手より段々と松の並木を引出す。馬士唄になり、向うより慶政、件の額ばかりを抱へて出てくる。長右衛門も同じく追ひかけ出て
長右　ヤレ〳〵、足の早い野郎だ。着物を返せ〳〵。
慶政　イヤ、着物より一卷を寄越せ。おれも路銀が一文も無さに、鈴山で拾つた納め太刀、これなと賣つて路銀にと思ふうち、あんまり駈けたので、刀の身は、何處かへ振り落して、鞘ばかり。いま〳〵しい。
長右　そんな事より着物を返せ。
慶政　エヽ、しつこい男だ。
ト一散に東の歩みへ駈け出す。長右衛門同じく追ひ駈けて入る。この時雷鳴る。東の揚げ幕より權兵衛、刀

の身を持ち、足を手拭にて結へ、跛を引きながら出て来り

權兵　アヽ、小萬めを源吾さまに渡して、金にしようと思ふうち、關の宿でとんだ奴に突ぜッかへされ、たうとう小萬をつん逃がしてしまうた。方々尋ねるうち、龜山の城下で源吾どのは、石井半次郎に討たれたとの事。その近邊をまごつき歩くうち、夜明け方に踏んがけたこの刃物で、思はぬ怪我。おれが足を切ると、忽ち雷が鳴り出したが、此奴は慥か噂に聞く、雷丸とやらぢやアないか知らん。何にしろ、持つてゐたら、何ぞの役に。これから江戸へ行つて、丹波を殺した權八を、探し出して、こいつも褒美。うまい〳〵。

ト舞臺へくる。釋のツトメになり、向うより灘六、葛籠を脊負ひ、駈けて出る。跡より逸平、追ひ駈けて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

逸平　又ぞろ葛籠を目がける曲者。

灘六　一旦目がけた重の井姫、生贄をやりそくなつて、やうやう見つけたこの葛籠。此方へ渡せ。

逸平　小積な。うぬらに渡さうか。

ト立廻りのうち、灘六、權兵衛を突きのけ、下座へ逃げて入る。逸平同じく權兵衛を突きのけ、下座へ追つて入る。權兵衛、起きあがり

權兵　アヽ、痛い〳〵。狂人見たやうな奴等だ。アヽ、こいつは駕籠にでも乘らずばなるまい。

ト此やうな事を云ひながら下座へ入る。これにて舞臺の道具、段々上の方へ引く。

小高き土手を引出す。爰に土竈を据ゑ、菓子の箱など並べ、茶店の套に腰かけ、右の掛け茶屋を引出す。庄野宿の棒杭變つて、石藥師と書きし石塔になる。東のあゆみより慶政、長右衛門駈けて出て來り、互に疲れたる體にて

慶政　アヽ、せつない〳〵。

長右　さても〳〵、息の達者な男だ。おれは息が切れて、どうもならない。

慶政　おれだといつて、咽喉がひッつくやうだ。なんと、物は相談だが、ちつと靜かに駈けようではないか。

長右　マア、何にしろ、水でも湯でも、一口飲まねば、堪へられぬ。幸ひ向うに茶店がある。ちつと休息してから、また駈けようではないか。

慶政　貴樣、錢があるか。

長右　錢がある位ゐなら、貴樣に相談はかけぬ。其方の懷中を當てにす。

慶政　ハテ、よく似た事もあるものだ。おれは一文もないが、向うは親仁だから、飲み逃げとやらかさう。

長右　どうせ、駈け次手だから、また駈け出すがよい。

ト兩人、舞臺へ來り

慶政　オイ〱、父さん、茶をぬるくして下さい。

親仁　ハイ〱。

ト茶を汲んで出す。兩人、無性に替へて飲む。

長右　アヽ、いゝ心持ちだ。時に、父さん、關から爰までは何里ある。

親仁　ハイ、七里半ござります。大分お早く入らつしやいました。

慶政　早い筈だ、七里半駈け通しだものを。息の切れるも尤もだ。

長右　イヤ、七里半で思ひ出した、あんまり駈けたので腹がへつた。斯ういふ時に有り難い。この一卷を戴くと、直ぐに腹が一杯になる。

ト件の袱紗に包みし丸揚げを出し、戴いてムシャ〱食ふ。

慶政　コレ〱。この男は、大切な一卷を、なぜ、ムシャ〱食ふ。

長右　その一卷は石部の宿で、泥坊に取られてしまつたこれは關の地藏の供物、薩摩芋の丸揚げだ

慶政　そんなら一卷は、あの夜の泥坊めに、……それは仕方もないが、元おれが一卷だから、その代りの薩摩、おれに半分食はせないか。

長右　どうして、一卷より大切な命綱、半分やられるものか。

慶政　そんなら四半分でもよい。

長右　旅は道連れ、仕方がない。

ト芋を少し分けてやる。

慶政　あまり吝いくれやうだなア。

長右　時に、どうせ京へは歸られず、江戸へ行くにも、直素直に、この態では行かれまい。

慶政　とても此事に、今までの通り、駈ける張合ひで行かうではないか。

長右　よからう〱。併し、互ひに名が知れなくてはならぬ。貴樣の名は

慶政　彌次郎兵衞といひます。して、こなたは。

長右　わしは北村屋八兵衞。北八々々といひます。

慶政　そんならこれから、仲よく二人で

長右　東海道を駈け通し

慶政　北八どの。

長右　彌次郎兵衞どの。

慶政　イザ、お駈けなされい。

長右　先づ／＼、お先へ。

慶政　然らば駈けますぞや。

長右　サア、御遠慮なく。

慶政　ソリヤ、駈けます。

長右　續いて駈けます。

ト兩人、一散に駈けて下座へ入る。

視仁　あの手合ひは茶代も置かず、駈けて行つたが、こりやおれも追ひ駈けずばなるまい。茶代を寄越せ、茶代を寄越せ。

ト同じく追ひ駈けて入る。これにて大拍子になり、舞臺の道具殘らず引いて取る。爰にて正面の淺黃幕切つて落す。

本舞臺六間、一面の親船の體、苫を掛けてあり。うしろ浪幕、舞臺前浪手摺り、上の方に少し小高き岩組み、この上に大きなる蛤あり、四日市、船の道具。右の親船、舞臺前まで押し出す。浪の音にて道具納まる。

大薩摩へ實に蒼海の白浪旋風にばふして中天に船を浮べ、又は泥梨へ分け入るよと、けんきてんどう常にして、慣れたる船は桑名屋と、名に押し切るぞ勇ましき。

ト淨瑠璃切れる。ドロ／＼になり、件の蛤、パツクリ口を明き、中より白氣立上る。これをキツカケに正面の船の苫を刎ね除ける。この内に桑名屋徳藏（實は自然生三吉の丹波與八郎）廣袖の上へ搔卷を引ツかけ、大百日の鬘、大煙管を持ち、海賊の拵らへにて、右の白氣に目を附けてゐる。側に信濃屋お半、慄へてゐる。

徳藏、キツと思ひ入れあつて

徳藏　傳へ聞く、勢州名古の浦には、春夏の間佳暖の日に、必らず海上に蜃氣立つといふ。諺に、天照神、尾陽の熱田へ神幸あるゆゑ。その形、鳳輿行幸、又、諸侯行列の體。或ひは樓閣宮殿の形、鮮やかに現はれて、漁師往々見る事あり。忽ち須臾の間に消ゆるとある、噂に聞けど見る

は初めて。案ずるに、只潮水の氣、陽情にやあらん。乘じて昇るこの白氣……陽炎の類にやあらん。ハテ、奇異なる珍事を、見るものぢやなア。

トこれには蛤、白氣もろとも消えて、風納まる。

はん　ほんに、今のは何でござんすぞいなア。

德藏　あれは俗にいふ蜃氣樓、蛤の機關よ。

はん　ほんに不思議な。

德藏　ハテ、海上にはあれに限らず、いろ／＼の事がある。さのみ珍らしくも無いてや。

四人　お頭、どうやら風も直りました。

トこの時、苫の後より崖藏、九郎、雁八、ぐれ八、盗人の手下にて出て

德藏　さればサ。今朝から霧の晴れぬを見れば、まだ／＼後には

はん　エ、。

德藏　何も怖い事は無いわサ。……コレ、皆の者、安治川も下田も沖には見えぬが

崖藏　今日はまだ漁船ばかりでごんす。

德藏　ハテ、なんぞ運送の渡海がありさうなものだ。それといふのも、この頃の、毎日の大暴れゆゑ。

九郎　左やうサ。この子を船へ乘せた日から、白馬ばかりサ。

德藏　それぢやア、何ぞの祟りでも。

はん　わたしが肌には水難のお守、まだその上に、石部で供の人に貰つた、お守がござんすばかり。それをしつかり肌に附け、拜んでゐれど此やうに、浪が荒うて、怖うて／＼。

德藏　ハテ、ついぞ乘りつけぬ沖中、怖いと思ふも尤もだが、おれさへゐれば氣遣ひない。しつかりおれに、とらまつてゐやれ／＼。

トお半を引寄せる。

崖藏　モシ／＼、頭、お前また、新造の舟玉樣だと思つて、信心が過ぎますぜ。

ぐれ　それよ。板一枚下は地獄、板子の上は極樂。

九郎　手入らず者を往生させたは

雁八　日本一の

四人　色男さま／＼。

德藏　エヽ、煽てるな／＼。船乘りは一日暮らし。明日を頼まぬ商賣ゆゑ、パッ／＼と遣ひ捨て、榮耀をするのが一日の得。とりわけて、惡い風波を乘ッ切るが、名代と

なつた桑名屋德藏。ちつとは氣休め。大目に見やれ。
トこの時、浪の音烈しく、下手より小舟一艘。この中に葛籠を乘せ、灘六、櫓を押し立つて出てくる。皆々見て
皆々　灘六、いゝ仕事か〳〵。
灘六　いゝとも〳〵。追分の繩手で、引ッ浚つたこの葛籠。
ト皆々上より繩梯子を下げる。灘六、葛籠を抱へ、正面の船へ上がり
中には慥かお頭の、尋ねる女が。
德藏　すりや、この内に。
ト浪の音になり、逸平、拔き身を咬へ、錨綱に取附き、浪を潜つてくる心にて浮き上り、錨綱に傳はり上へ上がり
逸平　大切なるこの葛籠、やはか、うぬらに。
ト無二無三に切りまくり、德藏に切つてかゝる。德藏、キッと押へて
德藏　いらざる奴がほてゝんがう。皆の者、疊んでしまへ。
皆々　合點だ。
ト身拵らへする。
逸平　小癪なる海賊めら、この葛籠の中には、大切なる重の井姬、隱れ在すを盜人めら、金目の荷物と心得て、奪ひ取るのは益無き事。それとも、たつてこの葛籠へ、手をさッかければ、死物狂ひ、何百人でも切捨てだワ。
德藏　ムウ。すりや、この内には、いよ〳〵、姬が。
逸平　丹波與惣兵衞さまが腹變りの悴、與八郎さまへ戀慕にて家出の姬君、御先途を見屆けて、與八郎さまを尋ね出だし、姬君手渡しするまでは、例へ命は落すとも、葛籠は滅多に、渡さぬ〳〵。
德藏　ハテ、健氣なる下部が詞。コリヤ、その與惣兵衞が悴與八郎といふは、斯くいふ德藏が實名だワ。
逸平　ハテ、心得ぬその詞。それには慥かな。
德藏　證據は姬に逢ひさへすれば。
逸平　すりや、この場にて。
ト葛籠に手を掛ける。
德藏　ア、イヤ。
トあたりへ思ひ入れあつて
この場で明けては……爰へ來れば對面は、ゆるりと後で。由留木家へ嫁したる姬、元は大江の息女にて、我れに貞女を立てんが爲、石山寺にて剃髮の、折に幸ひめぐり逢ひ、以前一度の契りにさへ、子まで儲けし結緣ゆゑ、

直さま連れて立退く道、草津の野路の玉川にて、追手に出合ひ追ひ散らさんと思ふうち、見失うたる重の井姫。

逸平　ムウ。成る程、その詞が何よりの證據、さすれば與八郎さまであつたよなア。下郎は即ち石井左内が下部。御主人様にも横死なされ、それと申すも赤堀が仕業にて、お家も散り／＼、若旦那半次郎さまも、別れ／＼に立退く道、計らずも草津にて、姫君にお目にかゝり、葛籠に隱してお供なし、石部の宿にて又ぞろや、鈴鹿の鬼神の贄と僞はり、姫君を引出す企み。跡を慕うて行きしところ、折から中野藤助、由井の民部と改名して武者修行、即ち彼れに行き合せ、姫君を救ひ、その身は姫の舘に忍び、實否を糺すとあるゆゑは、姫君を葛籠に隱し、その後勢州龜山にて、敵源吾に出ッくわし、跡追ひかけて參りしところ、これなる男が又ぞろや、葛籠を目がけ、渡せとあるゆゑ爭ふうち、源吾めは見失ひ、敵を捨てゝ、たうとう爰まで、爭ひ來りしこの姫君。然るに幸ひこの所で、思ひがけなくあなたに面會いたす上は、姫君渡せば奴が安堵、この上は丹波、石井の兩家の再興、寶の行くへ詮議が肝要。これと申すも佞人の宮太夫、戀の意趣にて草を分け、あなたを詮議。御油斷あるな、與八郎さま。

徳藏　オヽサ　我れも疾より宮太夫が、家を奪はん結構とは知つたるなれど、二品の寶出ぬ時は、家の繼ぎ目も叶はぬゆゑ、身を山海に横行なし、强盗の首領となつて、寶の詮議眞最中。さるが中にも、親人といひ、また伯父まで、人手に、やみ／＼討たるゝとは、よくも武運に盡きたるか。思へば／＼、口惜しい。

ト向うを見て、キッと思ひ入れ。この時、一面に暗くなり、浪の音烈しく、船段々躍りあがる。

皆々　ヤア、早手だ／＼。

ト騷ぐ。この時、錨の綱ふッつり切れて、メリ／＼と舵柄の折れる音する。

皆々　サア／＼、大變。これぢやア帆車も切らずばなるまい。

ト立ち騷ぐ、船はいよ／＼搖れて漂ふ。

はん　どうぞ助かる仕様は無いかいなう。

ト轉びながら徳藏に取附き、逸平は葛籠を抱へ、徳藏はお半を小脇に抱へ、舳へ立より、浪を見て、キッと思ひ入れ。

徳藏　海上の面霧深くして、浪の水悉く濁り、海月飛び、

魚の浮み上がるは、早手にあらで、押浪、怪風あつて如何なる大船をも覆す。多くは西北の海に起ると聞きつるが、今朝より霧深く、海月數多浮み、水面の濁りしは、この船、事急に及んだるか。懸かるべき湊もなく、錨の綱まで切れたれば、所詮助かる道もなし。

皆々　ヤア／＼／＼。

はん　こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

ト徳藏、お半をキッと見て

徳藏　その昔、景行天皇の王子、日本武尊、東夷征伐の砌り、まッこの如く怪風にて、御座頭の龍頭鷁首も破損して、既に危ふく見えし折から、供し給ひし御妃、橘姫の、尊に向つて仰せあるは、我れ身を以て海神へ生贄に供へ、風波を鎭め、御船を守護し奉らんと、誓つて海底へ飛入り給ふ。龍神感應なしけるにや、忽ち海上穩かに、やす／＼港へ着く。皇子の御感斜めならず、戀情のあまり吾妻戀しと嘆き給ふ。文字を其まゝ吾妻と名く。斯かる例しに習はんな、恐れ多くも烏滸なれど……コレお半、よッく聞け。其方を伴ひこの船に、移りし日より浪荒く、既に今日只今に、極まつたる多勢の命、俗説には似たれども、船中に海神の好む者、乗り合はする時は、これを海底へ沈めずば、風波治まらずと云ひ傳ふ。其方も賤しき女なれど、契りを籠めし結縁にて、某を大切の、夫と思はゞ、今も云ふ、橘姫の昔に習ひ、命を捨てよ、コレ、お半。

はん　成る程、心得ました。殊に、あなたは今聞けば、重の井さまと夫婦の契約、お子まで儲けし仲と聞く、素性賤しきわたしこそ、末は捨てられ悋氣の炎。女の操を捨てんより、この場の難儀のお役に立つて、死ぬるが本望。

トお半、思ひ入れあつてキッとなる。

徳藏　情も薄き兒女にまで、命捨てさせ、本意にあらねど、紛失の寶、二つには、親の敵を討つまでは、大切なる身が命、大の蟲より小の蟲。……コリヤ、其方が命は、與八郎が貰うたぞ。長い未來は一蓮托生。これを冥土の土産にして

はん　エゝ、嬉しうござんす。其お詞を聞く上は、なんの命を惜みませう。

ト舳へツカ／＼と行く。

逸平　コレ、待つた。こなたに命捨てさせて、どう姫君を。

ト留めるを振り切り

はん　とてもこの身は賤しき女子。せめて多くの命の代り、

身は拙くとも女の念力、橋姫に劣りはせじ。如何に海神、わが一命を贄となし、風波を鎮め、この船を、事なく港へ着かしめ給へ。
逸平　それではどうも。
ト留めるを振り切り、お半、海の中へ飛び込む。水煙りパッと立つ。
德藏　ハテ、年若なれども、健氣な女。
逸平　思へば不便な。
兩人　南無阿彌陀佛。
トこれにて浪の音かすめ、船は、だん〳〵と穩かに鎭まる。
皆々　あの娘が飛び込んだので
逸平　神も納受、まし〳〵てや、
德藏　風も靜かに。
ト後を見返る。これをキッカケに浪幕を切つて落す。向う打拔き宮の宿、名古屋の城一面に見ゆる。
今の風波ともろともに、向うに見ゆるは
逸平　ありやモウ、宮の
皆々　鄕士の濱でござります。
德藏　これも女が念力にて、姫に恙も。
灘六　おれが仕事のこの葛籠。
ト葛籠へかゝる。德藏、拔討ちにポンと切る。灘六、見事に中返りして、海へ飛び込む。
皆々　これは。
ト德藏、磁石を見て
德藏　重舵イ。
トこれを木の頭。白刃を差出す。逸平、手拭にてこれを拭ふ。件の大勢、丸の中に桑といふ字の帆を半分ほどいて揚げる。双方よろしく、キザミにて、拍子　幕
あとシヤギリ
この幕、有松絞り、鳴海絞りの幕なり。

二　幕　目

三州池鯉鮒八つ橋村の場
岡崎宿矢矧の橋の場
遠州秋葉山絕頂の場

役名——由井民部之助實ハ中野藤助。お松妹、お袖鬼坊主、願哲。八つ橋村左次兵衞。伊勢參り、五

郎吉。庄屋、彦兵衛。馬士、どぶ六。同、よだれの十。山形屋義兵衛。女非人、生皮のおはぎ。智行上人。八つ橋村のお松。丸子猫石の精。秋葉山の三尺坊。日本駄右衛門實ハ丹波與八郎。

本舞臺、三間の間、正面高足の御殿、欄干附き狐格子、欄間より古簾を掛け、軒に草履草鞋を吊し、よき所に囲爐裏。上の方八つ橋、杜若盛りの體。門口は竹の簀戸、すべて三州池鯉鮒の宿、八つ橋村往昔業平の住ひし御殿跡。随分そこねし道具。てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに念佛太鼓になり。爰に庄屋彦兵衛、百姓二人ワヤ／＼云うてゐる。左次兵衛、やつし親仁の拵らへにて、草鞋作りゐる。

彦兵 コレ／＼、左次兵衛、其やうに落ちつく事はない。庄屋のわしにばかり口きかせて、おぬしが女房のお三婆アが、三十兩の年貢金のお咎め。その一件は、マア、どうせうと思やるぞいの。

左次 ハテ、そりや庄屋どのが云はいでも、現在の婆めが牢舍した程の事。それといふも、わしが方で尋ねる、雷丸といふ劍、その手附けは三十兩、その金が欲しさに、年寄りの癖に、年貢金を盗みしゆゑ、男ならば水牢、女だけまだしも輕けれど、いま此うちで金は出來ぬ。其うちに婆めが牢死さすれば、彼奴が不仕合せといふもの、どうも仕方がござらぬわいの。

彦兵 ハテ、この人は、よく落ちついた挨拶。一體、この八つ橋村の御殿跡は、昔、在原の業平さまが、杜若がお好きで、この在所へ御殿を拵らへ、歌を詠んだのでござつた。その跡が此やうに、そこね毀れし古館、貴樣が借りて見世商ひ、店賃も寄越さず。マア／＼、それは跡へ廻して、年貢金の三十兩、早く拵らへて婆どのを、牢から出す工面さつしやいの。他人の事ぢやアない、こなたの女房の科を、助ける心はござらぬかいの。エヽ、無得心な親仁ぢやわいの。

左次 それぢやというて、出來ぬ金が、どう出來るものぢやぞいの。氣の毒に思ふなら、こなさん達、才覺して貸してくれぬかいの。

彦兵 イヤ、どう云へば斯う云ふと、太い人ぢやわい。ナウ、村の衆。

百一 さうでござる／＼。よい娘を二人まで持つて、その

左次　相談が出來ぬかいの。娘はあつても、猫ばかり可愛がり、親の事は構はぬわいの。
彦兵　サア／＼、お婆の納まり、どうさつしやるのだ。
左次　どうとも勝手にさつしやれいの。
彦兵　エヽ、他人向きの挨拶。それでは濟まぬ／＼。
三人　サア／＼、返事さつしやい／＼。
ト　わや／＼云ふ。矢張り件の鳴り物。奥よりお松、女郎あがり、病氣の體、誂らへの猫を抱き出て來り、この中へ入り
まつ　マア／＼、靜かになさんせいな／＼。
左次　オヽ、娘のお松か。構やるな。捨てゝ置け／＼。
彦兵　コレ／＼、娘御。實の親ではあるまいが、此やうなマア、無法を云ふは。
まつ　サア／＼、何事も聞いてゐやんすわいなア。云ひなさんす通り、父さんは義理あるお方、わたしが爲には實の母さん、ひよんな事にて恐ろしい、今ではお代官の牢舍の身、何を申すも、わたしが身も、この間まで江戸のお邸に御奉公。病氣についてお暇もらひ、歸つて聞けば母さんの難儀、何を申すも皆金づく。いづれ、その三十兩は、わたしが今宵曉方までに、拵らへませうほどに、お代官樣へよろしう、お願ひなされて下さんせえ。
ト　女郎めいたるセリフよろしくある。
彦兵　成る程、こなたの爲には實の母親、見捨てゝは置かれまい。殊に、あの婆どのが常の話しに、アノわしの娘は、辰の歳、辰の日、辰の刻に生れましたと、わしへの話し。いよ／＼貴樣は。
まつ　アイ、辰の年月揃うて生れたわたしぢやと、母さんが常々案じてござりました、志しのおいとしさ。今度の難儀は、娘のわたしが、この身に引請け
彦兵　そりや孝行ぢや。さうさつしやれ。そんならわしは、こなたの事を、お代官樣へも申し上げ、明日は未明に年貢の金差上げまする。お婆の牢舍を御免の願ひ。コレ、村の衆、さうしませうか。
兩人　さうさつしやりませ／＼。
彦兵　それに附けても、爰の左次兵衛は無得心な男、道理で總領の江戸兵衛は、よい男ぢやに、非人の交はり。
左次　ヤ、どうしたと。
彦兵　イヤ、娘ッ子、頼みますぞや。……ハテ、無道な親仁ぢや。

ト念佛太鼓になり、三人、ワヤ／＼云うて向うへかゝる。揚げ幕より山形屋義兵衞、旅形、一本差し判人の拵らへ、三度笠を持ち、跡より伊勢參り五郎吉、裝束二つを風呂敷に包み、これを脊負うて、菅笠をかむり、兩人とも草鞋の切れたる體にて出て來り、摺れ違うて三人は向うへ入る。義兵衞、軒の草鞋を見附け、門口へ來り

義兵　コレ、あの草鞋を二足下さい。

左次　アイ／＼。十六文でござります。

ト吊せし草鞋を二足取つて渡す。義兵衞、錢を遣つて、門口へ菅笠を敷き、草鞋を拵らへにかゝり

義兵　ハテ、爰の內は、立派な內の古くなつたのだな。

五郎　屋敷跡と見えやすね。

ト合ひ方になり、兩人、草鞋の紐をすげる。內の兩人思ひ入れあつて

左次　コレ、お松。一體てめえは實の娘でもなく、生れ在所は播州明石、縮織りのある噂が、おれが所へ連れ子のお松、聞けば其方に兄もあるげな。心が惡さに行くへも知れず、おれも又、肉身分けた悴の江戸兵衞、身狀が惡さに、今では皮剝ぎしをると世間の噂。妹のお袖めは、女の身で僅かな商ひ、わが身も知つての通り、雷丸といふ劍の手附けに渡してやつたは、噂めが盜みし年貢の金。實の母が難儀を救ふ三十兩、曉方までに。

まつ　アイ、成るたけわたしが働らいて、母さんの難儀を助くる三十兩。もし、その金が出來ぬ時には

左次　其方はどうする心ぢや。

まつ　ハテ、その時は、わたしがこの身を賣つてなりとも

左次　イカサマ、その身を賣らずば、金になるまい。

トこの話しのうち、義兵衞、門口より草鞋穿き替へながら、お松を、ヂロ／＼と見てゐたりしが

義兵　アモシ、其やうな相談なら、わしがして進ぜませう。

まつ　ヤ、お前は今の

義兵　アイ、草鞋買うた旅の者……伊勢參りどの、ちつと待つて下さい。

五郎　心得ました。商賣づくなら。

ト合ひ方になり、兩人、中へ入り

義兵　御免なされませ。

こりやアお初に逢ひましたが、わしはこの海道を、女衒公人の事につき、不斷往來する、山形屋義兵衞といふ判人でござるが、何を隱さう、爰の娘御は、この間も目を

初顔當時の錦繪　七世市川團十郎の藤助

附けて置きました。猫を抱いたるその姿は、イヤ、一かどのよい代物、勤め奉公する氣なら、不躾ながら相談して進せませう。

ト お松、思ひ入れあつて

まつ　そんならアノ、わたしら親子が、今の話しを聞きなさんして、アノ、お前が抱へてやらうと云はしやんすか。何をいうても、アノ江戸の、お屋敷方に奉公のわたし、勤めとやらの身とならば。

義兵　ハテ、そりやア呑み込んでする相談。屋敷者とは云はつしやるが、どうやら素人めかぬ其とりなり。それが此方の望みゆゑ、五十兩なら抱へる心。併し、爰に持ち合せ三十兩、手附けに渡して後金は。

左次　して、こなさんは、どこのお人ぢや。

五郎　ハテ、遠くでもない、岡崎女郎衆はよい女郎衆にならつしやらうに。

ト 風呂敷包みをおろし、莨をのむ。

左次　アヽ、お前、連れの衆か。

五郎　アイ。わしはこの海道の伊勢參り、、此お人の道連れサ。

ト 此うち義兵衛、財布入りの三十兩を出し

義兵　得心なれば、他人交ぜず、親判で三十兩渡しまするワ。

まつ　お前が、いよ〳〵相談をなさんすなら、その金で母さんの、牢舍を助ける三十兩。ちつとも早うコレ、父さん。

左次　承知ぢや〳〵。……モシ〳〵、お前、この親仁めが印形で

義兵　金を拵らへて渡すまで、三十兩の假受取り、これへ貴樣の

ト 矢立の筆にて懷紙へ受取りを認め

ちよつと印形。

左次　心得ました。

ト 莨盆の引出しより印形を出し、押す事あつて

そんならこれであの婆が、難儀を救ふ三十兩。

まつ　ちつとも早う、牢舍を助けるその金を

左次　合點ぢや〳〵。

ト 財布のまゝ懷へ入れる。義兵衛、受取りを懷中する。

五郎　コレ〳〵、親仁どの、とてもの事に、わしは貴樣へ頼みがござるて。外でもないが、この間、道連れの旅人

が、貸しの抵當に預けたこの代物。質に置くとも、賣り拂ふとも、どの道金にしたうござるが、その相談を頼みまするて。

ト風呂敷包みを出す。

左次　アヽ、埒もない。盗み物やら知れぬ代物、其やうな世話は、出來ぬわいの〳〵。

五郎　ハテ、さうではあらうが、路銀が無うて難儀します。何分貴樣を

左次　エヽ、ならぬといふに。拗こい事を。

ト爭ふはずみに包み解けて、中より裝束十二單衣、バラバラ落ちる。左次兵衛見て

ヤヽ、こりや十二座の衣裳ぢやないか。

五郎　大方そんなものと見えます。

ト此うちお松取上げ、よく〳〵見て

まつ　こりやコレ、高位のお方のお召しなさるゝこの裝束。思ひ廻せばこの里は、その古へ業平さま、暫しも爰に御座ありし、三河の國の八つ橋村。この素性も無きわたしが內へ、此やうな品の來たのも、これも緣でがな。……モシ、御難儀とあるなれば、この品はわたしが預かり、妹が歸らば、あの子に話して、預かる人もあるなれば。

五郎　何分お前頼みます。質屋へ見せて下さいまし。其うちわしは爰の內に、木賃でなりと泊めてもらはう。

義兵　わしもこれから、昨夜泊つた宿へ行て、證文認め、後金添へて。

左次　羽織引ッ掛け庄屋が方へ、この金持つて濟めた相談。

まつ　ちつとも早う、父さん。

左次　ドリヤ、帶締め直して行かうか。

ト唄になり、左次兵衛金を持つて上手へ、義兵衛は、早足に向うへ入る。五郎吉は包みを殘し、奧へ入る。お松殘り、思ひ入れ。合ひ方になり、時鳥の聲

まつ　誰れあらう、歷とした侍ひの、與惣兵衛さまの娘のわしが、五年以前に母の病氣、人參代に、江戸吉原で賤しい勤め。親御の恥と思ふゆゑ、屋敷勤めと僞はれど、廓にゐるうち思はずも、馴れなじんだる民部さま、お情宿せし二つ身の、それゆゑ內々親方さんも、生み落すまで在所へと、歸つて見れば、母さんの御難儀。それといふのも由留木家の、寶を取り得ん年貢の金、頼みに思ふ兄さんは、幼ない時に別れたまゝ、どこにどうしてゐさんすか。今に思へば吉原にて、京町の猫通ひけり揚屋町、人の口端にかゝりしも、いとしと思ふ民部さま、あなた

にどうぞ今一目、お目にかゝつて、二度の勤めを。

ト此うち猫は件の裝束へじやれかゝるを見て

ア、、これはしたり。こりや大事の預かり物、爪でも立つて。

ト件の裝束二品を風呂敷に包み、猫を追ふゆゑ、猫は奧の方へ走り入る。

それに附けても高位のこの品。今のお人が、どうして爰へ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うよりお袖、木綿振り袖、在所娘の拵らへ、高からげにして、手拭を冠り、糸立てに、杜若、その外夏草を入れ、これを抱へ、草花賣りの拵らへにて出て來り、直ぐに門口へ來り

そで　ハイ、姉さん、いま戻りましたわいの。

まつ　オ、、妹お袖、いま歸りやつたか。サ、茶を進ぜませうか。

トいろ／＼世話する。

そで　アイ／＼。わたしも此やうに、毎日々々、池鯉鮒の里へ草花商ひ、殊に、毎年四月二十五日より五月の五日までは、馬市が立つてナ、人立ち多き町ゆゑ、商ひがてら有やうは、わたしが爲には義理ある母さん、牢舍の御難儀お助け申す、その金なりと出來やうと、女子の果敢ない。

まつ　ア、コレ、妹、そりや忝ないわが身の貞實、姉が爲には實の母さん、いま改めて其方に禮を云ふ程に、その代りには、どうぞ止めてたも。

そで　止めてとは、そりや何をいな。

まつ　外でもござらぬ。恐ろしい、人を呪うて、親の爲にはなりますまい。この後、怖いあのやうな事を。

そで　エ、、そんならそれを。

まつ　コレ、わが身はなう。

トお袖を引寄せ、キツとなる。合ひ方變る。

コレ、妹、生さぬ仲でも姉妹ぢやもの、その素振りでは大概は。合點のゆかぬ氣色ゆゑ、いろ／＼と氣をつけて、夜々は猶更に、寢た振りをして窺へば、コレ／＼

トいろ／＼花を包みし糸立てを見ようとする。お袖あわてゝ、見せじとする。はずみに包みの中より五寸釘金鎚、バラ／＼と落ちる。お袖隱すを、お松取つて

コレ／＼、この釘、金槌は、何の爲に持つてゐやるぞ。どのやうな事かは知らねども、なぜマア、姉のわしに隱し、人を呪ふの大膽は、そりや、聞えぬ／＼、聞えぬわいの。

ト思ひ入れ。お袖、こなしあつて

そで　モシ、姉さん、堪えて下さんせ。モウ〳〵、有やうに申しまする程に、必らず叱つて下さんすなえ。人さんを呪ふといふその譯は、いつぞや都に奉公いたす其うちに、石井左内さまの若黨、中野藤助といふお方に馴染み、不義の樣子が顯はれて、二人はお暇。一先づ東へ藤助どのはござんして、それから後は音信不通。その上わたしは懷姙の、隱すに辛きお腹の樣子、どうか斯うかと思ふうち、力に思ふ藤助どの、江戸吉原で女郎に馴染み、その女も懷姙と、人傳には聞くものゝ、その女の名も知らず、たゞ藤助どのゝ馴染みを重ねし傾城づら、憎うて〳〵ならぬゆゑ、胸に据ゑかね、鈴鹿なる、鬼の窟へ人知れず、誓ひし念も今日が滿願。なれども先のその女、命に別條無いやうに、面體ばかりは見苦しう、なさしめ給へと心願も、面體變らば男の心、變るは治定と思ふゆゑ、池鯉鮒の山を鈴鹿になぞらへ、夜な〳〵通ひましたるは、男を思ふ女の念力、樣子と申すは此あらまし。姉さん、必らず叱つて、下さんすなえ。

まつ　テモマア、怖いその話し。悋氣は女の愼しむところ。この上ともに其やうな事は、フッツリと思ひ切つてたも。姉もこの身につまされて、聞捨てならぬお腹の嬰兒。殊には石井の御家來とあるからは、緣のないといふではなし、この後とても、怖い心は止めてたも。今にも其方の思ふ男に

そで　めぐり逢ひなば、お前が許して、

まつ　姉が取持ち、添はせてやる。

そで　エヽ、嬉しうござんす。

まつ　わが身は喜び、この姉は、又ぞろ勤めの

そで　エ、勤めとはえ。

まつ　サア、屋敷の勤め、事によつたら

そで　アノ、お屋敷へ。

まつ　それも、母さん助けたく、あのお屋敷へ二度の勤め

そで　そんならお前は

まつ　三十兩の金の代りに、事によつたら。

そで　エ。

まつ　ドリヤ、その知らせを、待ちませうか。

ト唄になり、思ひ入れあつて、上の障子の中へ入る。お袖こなしあつて、正面の瓦燈口へ入る。合ひ方になり、引違へて左次兵衞、件の金を持ち、麻裃を引掛け出て來り

左次　サア／＼、これから庄屋が方へ行て、事によると代官所へも行かにやアならぬ。ア、、あの婆は、よい娘を持つた仕合せ者だ。

ト門口へ出て、懐の金を探し

姉めが身を賣り、この金は拵らへたが、ナニ、これを庄屋方へやつて、婆が牢舍を助けるものだ。この三十兩を後金にして、雷丸を買ひ取つて、劍はおれが物よ。婆は矢ッ張り牢内に、雷丸は官太夫さまへ差上げて、おれは手柄に。ちつとも早く、劍の後金、さうだ／＼。

ト行かうとして、何心なく花を包みし糸立てを明ける。中より鈴鹿の守り木札に、女郎の顔描いてあるを取つて

こりやア何だ。女の面を札守りへ描いたは、仙女香の看板か。何しろ爰らへ札を打ち附けて置かう。

ト見やるうち、件の釘、金鎚を見附け、これを取つて

ア、、よい物があつた。幸ひ／＼。ドリヤ、この柱へ打ち附けて置かう。

ト門口へ件の木札を釘にて打ち附ける。此はずみに女繪の顔のあたりへ釘にて打つ。この時障子の中にて

まつ　ア、、苦しいわいなア。

ト お松、苦しむ聲する。左次兵衞聞きつけ

左次　ア、、ありや姉のお松が聲、ア、、また風でも引返したか。

ト何心なく又釘にて打つ。障子の中にて

まつ　ア、、この顔が、ア、、苦しいわいの／＼。

左次　ア、、又、聲がする。コレ、お松。どうした／＼。

ト木札は柱へ打ち附け、屋體の方へ駈けて來る。この時中よりお松、顔を押へて出て、あたりへ倒れる。左次兵衞、駈け寄り介抱する。この音にお袖も駈けて出て

そで　コレ、姉さん。どうしなさんしたぞいな／＼。

ト介抱する。お松、顔を押へて切なき思ひ入れ。左次兵衞、財布の金を持ち、ウロ／＼して

左次　コレ／＼、お袖、姉のお松は、こりや急病ぢや。醫者どのを呼びに行くから、われは其うち側を離れず、合點か合點か。

そで　アイ／＼、そんなら早くお前はお醫者さんを。

左次　ドリヤ一走り行つて來ようか。

ト門口へ出て、向うへ行く振りして、金財布を出し

べら坊づらめ。ナニ醫者を呼びに行かうか。おれはこの

金で雷丸を此方へ受取り、官太夫さまへ差上げるワ。さうとは知らず、母の爲ぢやと身を賣つて、おれに渡した三十兩。ナニ、婆めが難儀を構はう。思ひもよらず、三十兩。エヽ、忝ない。

ト この時、風の音して、空より前幕の鷹舞ひ下り、件の財布を浚つて飛び行く。左次兵衞うろたへ

ヤア〳〵、大事の金を、鷹めがうせて浚つて行つたか。アヽコレ、その金返せ。鷹よ〳〵。

ト風の音にて、鷹は向うへ舞うてゆく。左次兵衞、この後を追うて揚げ幕へ入る。

そで　モシ〳〵、姉さん、氣を慥かに持つて下さんせ。

まつ　オイナウ、随分心は慥かぢやが、何ぢややら、俄に顔が發熱して、釘を刺さるゝやうな顔の痛みは、こりやマア、どうした病やら。コレ、妹、わしが顔を見てたもいの。

そで　ほんに、そりやマア、どういふ病でござんすやら。

トお松、顔を上げる。この顔、惡女の面になる事。お袖悔りして

オヽ、怖。そりやマア、どうした病ぢやぞいなア〳〵。

まつ　コレ〳〵、妹、何をマア、其やうに、何が其方は怖いぞいの。

そで　アイ、怖いといふは、ソレ、そのマア、お前の。

まつ　わしがどうしたぞいの。

そで　サア、それはな。

ト云はうとして思ひ入れあり。

イエ〳〵、何も變つた事はござんせぬが、思へば〳〵、なんで俄に。

まつ　エ、何が俄に。

そで　サア、俄な病氣も早う直つて、こんな不思議な。

ト思ひ入れあつて、云はぬこなし。

まつ　ハテ、この子としたことが、何が其やうに不思議ぢやぞいの。ホヽヽヽ。コレ、妹、ちつとは其方、嗜なみやいの。

ト何心なき思ひ入れ。お袖、合點のゆかぬこなしにて

そで　アイ〳〵、嗜なんで居りますわいな。

ト思ひ入れ。あたりに取りちらしある鏡臺、鐵漿つけの道具をよき所へ片寄せ、心得ぬ思ひ入れ。唄、時の鐘になり、向うより由井民部之助、實は中野藤助、鈴鹿山の姿にて、大小菅笠を持ち出て來る。この途端屋根より件の猫這ひ出る。こなたより毛色變りし女猫、

這ひ出てくる。この時小蝶出るゝ、猫は飛びつき、取らんとする事。友猫もこの時思はず立上がり、シャンと立つ。蝶は舞つて入る。これより謠らへの合ひ方、風の音にて、二疋の猫立ちあがり、何やらん踊る如き振りになる。

民部　ハテ、訝しい。手飼ひの猫のあの振舞ひ、獸の中にて猫は陰なり、陽氣盛んなればその毛を垂る。昔、南蠻國より渡り、その後姿を消し、逸物の命婦となつて、大内にありしを捕へて、宇都の山邊に捨てしに、陰氣凝つて石となる。その逸物に似寄りの斑ら、あの軒づらに何やらん怪しき樣子、殊には民家に變りし家造り。爰は三河の八つ橋村、折も折よき杜若、昔男の古へを、思ひ出だして在原の、その故事の慕はしく、ハテ、奥ゆかしき民家ぢやなア。

ト思ひ入れ。風の音やんで、猫も走り行く。民部、跡打眺め

今の斑らも何れへか、泊り定めぬ武者修行、今宵はあの家に、宿りを賴まん。さうぢや。

ト門口へ來る。此うちお袖、行燈を點しゐる。

お賴み申したい。旅の者でござる。今宵一夜を明かさせて下され。

そで　ハイ、それはお易いお賴みなれど、爰は宿屋ではござりませぬ。お泊りならば池鯉鮒宿へ。

ト門口を見て、思ひ入れあつて

ヤ、お前は藤助どのぢやござんせぬか。

民部　さう云やるは、屋敷に勤めたお袖ではないか。ヤレヤレ、久しや。

そで　サア、わたしも、今も今とてお前の噂、マア／＼、内へ。

ト袖を扣へ、イソ／＼する。民部、門口より入らんとせしが、思ひ入れあつて

民部　イヤ／＼、迂濶にこの家へ、藤助は。……それといふのも、其方が親こそ、心よからぬ官太夫が下部と聞く。いはゞ身共は石井の若黨、それゆゑ迂濶に。

ト思ひ入れ。

そで　成る程、尤もでござんす。その疑ひを晴らすには。

ト　お松が方へ來り

モシ／＼、姉さん、今もお前に話したる、其お方がござんしたわいなア。

まつ　ヤア、それは幸ひ。早う内へお連れ申して。

そで　でも、父さんにも。
　トもぢ／＼してゐる。
まつ　ハテ、大事ないわいの。……モシ／＼、お出でなされたお客樣。わたしは袖とは同胞でござりまするが、わたしは俄に氣分が惡うて、それへ參つて御挨拶も何とやら。殊に、父さんは物事わからぬ在所育ち。お宿というては出來ますまいが、それには何ぞ。
　トあたりを見て、包みの中の衣裳を見つけ
オヽ、よい物がござります。田舍祭りの十二座の、この裝束をお召しなされて、この度わざ／＼京都より、この八つ橋の杜若、御覽の爲にお下向の、お公卿樣と申して、父さんを僞はり、お宿申して、いつまでも
そで　それではどうして、父さんが
まつ　ハテ、大事ないわいの。正直な子ではあるぞ。サヽ、ちやつと。
そで　そりや嬉しうござんす。
　ト裝束を持ち行き
サア／＼、これを着て、お公卿樣ぢやと云ひなさんせ。
民部　アヽ、これを着れば泊めらるゝか。併し、官太夫の身寄りとあつては。

そで　ハテ、そりや姉さんが、よい思案があるといな。
　ト捨ぜりふにて紛らし、民部之助に裝束を着せ、烏帽子を冠せる。
民部　これは／＼。誠に十二座のやうぢや。して、其方の姉御は、どれにぢや。ちよつと逢うて。
そで　イエ／＼。姉さんは俄に持病が。
　ト顏の醜きを隱すこなし。
民部　それでも其やうに心づかひ。禮も云ひたし、マア、ちよつと、お目にかゝつて。
　トお松の方を見て
ア、お前がお袖どのゝ姉御でござりまするか。お聞きでもござりませうが、何か屋敷に奉公の其うちに、互ひに若氣のひよんな事。イヤ、モウ、お恥かしうござりまする。
まつ　エヽ、お前さんが妹の噂のお方樣か。何か不拙なあのお袖、さぞマア、お氣にも叶ひますまいが、そこをどうぞ末々まで、御面倒御覽じて。
　トふと民部之助の顏を見て
ヤア、お前は、民部さんかいなア／＼。思ひがけない、どうしてマア。

ト寄るを飛び退き、お松が顔を見て、悄りして

民部　アヽ、コレ〳〵、この女中は馴れ〳〵しい。併し、身共も只今にては、民部之助とも申すが、以前は藤助。殊に、お前のやうなお方に、近附きは、持ちませぬぞ持ちませぬぞ。ハテ、馴れ〳〵しい。

まつ　エヽ、胴慾な其お詞。コレ、民部さん、わたしやお前に別れてより、懐かしいやら、お腹の様子、親方さんのお情でナ、親里へ来てゐやんす。殊に、お袖は、わしが義理ある妹ぢやわいの。

民部　その妹御と云ひ交したる、以前は藤助。姉御には、お初にお目にかゝりまして。

まつ　エヽ、何ぢやぞいなア。いつマア初めて逢ふもので。見忘れるも程がある。殊更この身は二つ身の、それを知らぬと、眞顔になつて云はしやんすは。……アヽ、聞えた。こりやお前、いつの間にか妹に馴染み、こりや二人してこの姉を、今更突出し者にしなさんすかいな〳〵。

そで　アモシ、どうしてわたしが、其やうな心は無いが、其お詞は。……そんなら常々民部さんといふ男があるとのお話しは、この藤助さんの事かいな〳〵。

民部　アヽ、イヤ〳〵、此方心覚えの無いでもなけれど、その女とは面體の相違。云ひ交したる女の顔、見忘れてよいものか。察するところこの女中は、こりや狂人であらう。オヽ、狂人であらう〳〵。

まつ　ナニ、狂人ぢや。アイ、成る程、わたしや妹に見替へられ、狂人ぢや〳〵。これが氣が違はいでならうかいな。契約なせし大事の男、現在妹に見替へられたか。エエ、恨めしい。口惜しいわいなア。

民部　コレ〳〵、女中。身共がこなたに契約せしとは、決して左様な。

まつ　イエ〳〵、そりや聞えませぬ。江戸に勤めの其うちに、あの吉原で松山が、まだ新造のその時に、初めて逢うたその時は。コレ〳〵。

ト片脇より風呂敷に包みし孔雀染めの振り袖を出し

この振り袖をわたしが着て、初に逢うたを、忘れてかいなア、民部さん。

民部　誠に覚えあるこの振り袖。その松山なら覚えはある。石井の縁者、丹波與惣兵衛どの、其お方の娘の松山。

まつ　それ程覚えありながら、なんで知らぬとあのやうに。

民部　サヽ、その松山は名高き太夫、それが今更賤ヶ家に、髪も着類も變らうが、面體までも、なに變らん。それゆ

ゑ知らぬと申した民部。

そで　エヽ、すりや、姉さんのお噂の、民部さまとは藤助さん。

ト思ひ入れ。

まつ　ナニ、面體が相違とや。さう云はしやんすりやたつた今、俄に顏が發熱して、針を刺さるゝ面の惱み。

トこなしあつて

民部　疑はしくば鏡の面に、その面體を。

トあたりの鏡臺を取つて差出す。お松、寫し見て、大きに驚ろく事あつて

まつ　ヤヽ、今日の今まで何事なき、この面體がこれ程までに、我が身で我が身を見紛ふは、もしや妹が今の話し。鈴鹿の神へ、呪ひし女は

そで　その名は知らねど、一心に、恨み重なる女中といふは、アノ姉さんでござんしたか。

民部　すりや、藤助が民部之助と、變名なせしも存ぜぬお袖、殊に、姉とも知らぬ身の、呪ひし女は現在の

ト思ひ入れあつて、門口に打ちし件の木札を見附け、ずんと立つて引きめくり來り、裏を返し見て

さてこそ、その名なけれど女の面に、嫉妬の釘を打附けしは、その念屆いて松山が、面體變りしものならん。年端もゆかぬ女ながらも、嫉妬の念力なりけるか。ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ。お松、キツとなつてお袖を引据ゑ

まつ　エヽ、おのれはなア。義理ある姉を妹の身で、さうとは知らで、此わしは、不便がりしが腹が立つ。口惜しいわいの口惜しいわいの。その大恩あるこの姉を、ようもようも此やうに、夫も見紛ふ面體に、呪やつた／＼。エヽ、腹の立つ。

ト守り札にてお袖を打ち据ゑ、口惜しき思ひ入れ。

そで　アヽ、尤もでござんす／＼。恨みの女は姉さんと、露聊かも知るなれば、なんの此やうに呪ひませうぞ。そシ、姉さん、こりやマアどうせう、なんとせうぞいなア。

まつ　ナニ、今となりその云ひ譯。これも鈴鹿の神の咎め。サア／＼、面體を元のやうに直してくれ。早う直してくれいやい。

民部　オヽ、尤ものその詞。併し今更其やうに。

まつ　もうこの上は、お前さへ得心なれば、どうぞ、お否であらうとも、懷妊の子はお前の胤。さすれば未來永々女夫。サア／＼、この家を出て、お前と添ふ。サア、來

て下さんせ〳〵。
　　ト手を取り立ちあがる。
民部　そりや此方は變ぜぬ魂ひ。武士の一言金鐵同然。例へ面體變るとも、身共が女房、相違はない
まつ　エヽ、嬉しうござんす。其お心ならこの家を出て、いづくの浦に暮らすとも、女の念力。サア、來て下さんせ來て下さんせ。
そで　マア〳〵、待つて下さんせ。妹の身として大膽な、越度は越度。わたしも一旦契約して、主さんの胤を宿してゐるからは、女房も同然。そのマア男を、どうして外へやられませう。姉と知らいで呪うたも、いはゞ男を思ふゆゑ。
まつ　イヤ〳〵、どのやうに云やつても、お腹に宿せしあなたのお胤、それぞ違はぬ女房の證據。それに今更、なんのマア、民部さまは、姉の男ぢや〳〵。
そで　イエ〳〵、藤助さまは妹が夫。わたしが男でござんすわいなア。
まつ　ナニ、小差し出た、退きやいなう。
そで　お前、退いてゐなさんせ〳〵。
まつ　なにを姉に向うて、退きやいなう〳〵。

　　ト兩方より民部之助の手を取つてあちこちと引ッ張る。この時念佛太鼓になり、向うより義兵衞、左次兵衞を引ッ張り、駕籠を吊らせ出てくる。左次兵衞、空ばかり恨めしさうに見てゐる。跡より生皮のおはぎ、前幕の女非人にて、女郎屋の女房に拵らへ、旅姿にて供男一人、旅姿にて、割掛けの包みをかたげ、はるか後に下がつて出て來り、先の人數は內へ入る。おはぎは門口にゐる。
左次　エヽ、あの鷹めは、どこへ飛び居つたやら。イヤ、飛んだ事だ。
義兵　コレサ、早く證文に判をさつしやいよ。
まつ　エヽ、腹の立つ。退きをらぬかいの。
　　トお袖を手荒く突き飛ばす。
左次　ヤイ〳〵〳〵。この姉めは、おれが實の娘を、どうしをるどうしをる。
　　ト民部見て
民部　イヤ〳〵、これには、だん〳〵樣子の、
　　ト左次兵衞をなだめる。
左次　ヤア、この人は何だ。どこから來た神主どのぢや。
民部　イヤ〳〵、身共は神主ではない。何ぢや……それぞ

れ、此たび京都より杜若といふ題を賜はり、この八つ橋村へ歌枕に參つた、在原の行平といふ、雲の上人ぢやぞ。

左次　ナニ、在原の行平さまぢや。そんな人は須磨の浦へござりませ。それに爰へござつたは、姉妹の娘を、松風村雨にする氣ぢやの

義兵　例へさういふ事もあるにしろ、此方は先約、三十兩といふ金を渡した此お松。駕籠を持つて來た。サアサア、てまへは、マア駕籠へ。

　トお松の手を取つて引ッ張り、この時顏を見て

ヤア〳〵〳〵。こりやアどうだ〳〵。ちつとのうちにその面體。こりやアどうしてそんな顏に。コレ〳〵、親仁どの、こりやどうぢや、

左次　ヤア、われはおれが留守のうちに、火傷でもしたか。こりやア、大變だ〳〵。

義兵　貴樣の大變より此方が大變。こんな面の女が、ナニ女郎になるものか。見世物に出しても錢は戻りの因果物。これぢやア濟まぬ。どうさつしやる〳〵。

まつ　サ、、尤もでござんすが、此やうにわたしが顏の變つたも、コレ、この村に打附けし神の咎め。これといふのも、妹が仕業、エ、、腹が立つわいの〳〵。

義兵　コレ〳〵。樣子は何か知らねえが、どうでその顏では此方は變更へ。サア、親仁どの、三十兩、返してもらはう返してもらはう。

左次　コレサ、その三十兩は今門口で、鷹が浚つて。これが誠に、親仁骨折り、鷹に取られた。

義兵　イヤ〳〵〳〵、それぢやア濟まねえ。金が返されずば、爰にゐる娘。妹といふからは、これを代りに、連れて行かうワ。

左次　ア、、どうして〳〵、その妹はおれが實の娘、繼子の代りに、ナニ遣るものか。

義兵　それでも是非とも、この娘を。

　トかゝるを、民部之助、留めて

民部　ア、、コレ〳〵、この娘は身が云ひ號け、どうして外へ。

義兵　そんならお前、その身の代を立替へるか。

民部　サア、金子というては。

義兵　それ見たか。退いてござれ。サア、親仁どの。三十兩のあの金は。

左次　ハテ、この娘を連れてござれの。

　トお松を突きつける。

義兵　イヤ／＼＼。こんな化け物はいらぬ。貴樣に返した。
　ト突きやる。
左次　エヽ、此方もいらぬ。
義兵　わしもいらぬ。
　ト兩方よりお松を突き飛ばす。民部之助、お袖、氣の毒なるこなし。この時おはぎ、ツカ／＼と入り、お松を圍つて
はぎ　イヽヤ、この子はわしが抱へよう。
義兵　ヤ、そんなら惡女のこの女、三十兩に。
はぎ　わたしが抱へる。判人さん、お前から出た、ソレ、三十兩。
　ト三十兩、胴卷より出して渡す。
義兵　コリヤコレ、小判で三十兩。これさへ取れば、此方は安堵。
左次　して、お內儀は、此やうな玉を
はぎ　買つて行きやす。あの門口で何かの小みやり。見かねたゆゑに女の身で。わたしや駿河の二丁町、白子屋といふ女郎商賣。お伊勢參りの歸り道、八つ橋村の杜若、見物ながら來て見れば、爰のお內で女中の難儀、見かねしゆゑに三十兩、用立つからは、怪我であらうと、醫者にかけて、本腹次第廓の勤め。また、一生片輪なら、尼にしたとて僅かな事女一人を助けるが、後生と思うて抱へるこの子、この上ともに親兄弟。
左次　緣切りたくば切つてやります。親でも子でも無いといふ、證據は爰に。
　トあたりより守り袋を取つて來り
こりやお松が掛け守。中にあるのは生れた臍の緒。辰の年月揃うた生れ。サ、これ渡しまする。勝手に連れて。
　トおはぎに渡す。
はぎ　そんならこれが、年月揃ひし
まつ　辰の年度の生れのわたし。
はぎ　買ひ取りました。氣遣ひさんすな。
　ト守り袋を懷中する。
まつ　御恩の程は詞にも。母の難儀に苦界の身賣り、殊更二度のわたしは勤め。今別れては、いとしいお方に。
　ト民部之助へ思ひ入れあつて、ツカ／＼と駕籠へ乘り
この上ともに、どうぞ尋ねて。
民部　氣遣ひしやんな、逢ひに行く。マア、それまでは、幸ひと、足を止むる妹が夫。

そで　現在姉さん、勤めの身、跡に殘つて、どうもお前と

左次　聟に取らうが、お前は公卿。金さへあれば相談します。併し、鷹めはどこへうせたな。

義兵　わしはこの金淩はれぬ、道々用心。

まつ　頼み置くのは母さんの、牢舍の難儀、わたしに代つて民部さん、どうぞお願ひ申しまする。

民部　母の難儀は某が。……殊には面の變りし病。夜風をいとふこの小袖。

ト孔雀染めなお松に渡す。

まつ　お心附きしこの小袖、嬉しう受けて。

ト受取る。

はぎ　孔雀染めなる振り袖が、この家にあれば、そんなら女中は、いよ／＼以前は。

ト思ひ入れ。

まつ　恨みは恨み、妹はこの世の女夫、先の世は。

民部　刀に掛けて

まつ　エヽ、嬉しうござんす。

ト垂れを下ろす。

そで　ア、モシ。

ト寄るな、民部之助隔てる。

はぎ　駕籠やらしやんせ。

ト唄、時の鐘になり、四つ手駕籠にお松を乘せ、おはぎ、供男、義兵衛附き、向うへ入る。左次兵衛、民部之助、お袖殘り

そで　苦界の勤めに身を賣りし、あの姉さんの心の中、さぞやわたしを。

民部　ハテ、今更云うても詮なき繰り言。して、母親を助くる金は

そで　アノ、父さんが

左次　ア、滅相な。金はあつたが鷹に淩はれ、爰には一分も

民部　ヤ、それではお上へ願ふ手蔓も。ハテ、何として。

ト思ひ入れ。念佛太鼓になり、向うより八つ橋村といふ弓張りを持ちし百姓先に立ち、後より、やつし白髪鬘の母親の死骸を戸板に乘せ、百姓二人これを吊り、庄屋彦兵衛附いて、ワヤ／＼云うて來り

彦兵　コレ／＼、親仁どの／＼。命乞ひの三十兩、殊の外に手間どり、その上婆どのは、牢舍のうちに病氣にて、いとしや、先方牢死して、死骸を渡すとお代官のお指圖に、近所の者が貰うて來た。娘達が見たら、さぞかし泣

からに。ア、、笑止々々。
百姓　ア、、氣の毒な事をしました。
　ト よき所へ死骸を差置く。
左次　ナニ、婆めが死んだといふのか。
そで　そんなら、これが母さんかいな。お前の牢舍を助けんと、あの姉さんは身を賣りし、その甲斐もなう、こりやマアどうせう、なんとせうぞいなア。
　ト 死骸に縋り、思ひ入れ。
民部　すりや、この死骸が、松山の實の母親、娘に逢はで淺ましいこの樣子、南無阿彌陀佛々々々々々々。
左次　コレ／＼、庄屋どの、婆の死骸は下されたが、年貢の金は。
彦兵　サア、その樣子も尋ねたら、當人が牢死の上は、その金も其まゝにと、これで、サラリと濟み口でござるわいの。
左次　ア、、さうか。ヤレ／＼、それで落ちついたが、それにしてもあの鷹めは。
　ト 思ひ入れ。
彦兵　サア／＼、死骸を渡せば、わしらは歸ります。後でゆるりと囘向してやらつしやい。コレ、婆樣、ではない爺樣、近頃、笑止々々。
　ト 皆々、ワヤ／＼云うて、向うへ入る。
民部　母の病死のこの樣子、あの松山が聞いたなら、さぞや嘆かん心の中。
そで　どうぞ今宵は御囘向を。
左次　念佛ならばあそこがよい。人の目にかゝらぬやう、あの簾の中へ持込んで置かう。手傳うて下され。
　ト 民部之助、左次兵衞荷うて、二重舞臺へ持ち行き、よき所へ置く、民部之助、件の十二單衣を見附け
民部　この裝束とこの品の、民家にありしも何とやら。
左次　合點のゆかぬは、奥へ泊つた伊勢參り。
民部　併し思はぬこの裝束、母の死骸に白無垢代り、經帷子も恐れあり、これ打着せなば未來にて、佛の交はり、佛果を得ん。直ぐに此まゝ。
　ト 母の死骸の上へ、十二單衣を着せる。お袖見て
そで　思ひがけなき高位のお姿。
左次　これ死花の咲いたる譬へ。
民部　我れらは囘向を。
　ト 唄になり、欄間より古簾下りる。あと合ひ方、左次兵衞お袖、殘つて

左次　ヤレ／＼、何かと無駄骨を折つた。併し、今の侍ひ、よう寢た時分に、コレ、娘、あの一腰は、ソツと盜んでおれに渡せ、合點か／＼。

　トお袖、思ひ入れあつて

そで　エ、、そりやなんで、ぬしの刃物を、

左次　ハテ、知れた事。公卿と云うたはおれを騙す、わいらが寄つての拵らへ事。あの者は石井の小者、中野藤助、今では由井の民部之助、劍術指南をしをると聞く。いつぞや勢州龜山にて、おれが主人の源吾さまを、半次郎めが、親の敵と討ちをつたその節、助太刀したは慥かに民部と思ふゆゑ、何氣なう泊め置いて、主人の敵、今宵のうちに、コレ。

　トあたりの鉈を取つて

われが爲にも主の敵だ。手引きして殺させろ。

そで　すりや、あのお方を、お前は、いよ／＼。

左次　劍術勝れしあの民部、寢入りし所へ忍び行き、殺らす工面だ。手引きを頼むぞ。必らずぬかるな。

そで　お前の手柄になる事なら、成る程、手引き致しませうが、ならう事なら、母さんの、忌日の事なり、今宵はどうぞ。

左次　エ、、役に立たずめ。猶豫いたさば、此まゝ踏んごみ。

　ト急いでゆく、お袖、縋つて

そで　アモシ、左樣あるなら、今宵の手引き、見事いたして見せませう。

左次　出かした娘。して又、寢間へ、合圖の知らせは。

そで　あの簾のうちへ窺ひ寄つて、蚊遣りの火影を合圖と定め

左次　その時こそは。コレ。

　ト引寄せて囁く。お袖こなしあつて

そで　心得ました。必らず蚊遣りを

左次　忘るゝな。

そで　アイ。

左次　コリヤ。

　ト行燈を吹き消す。誂らへの合ひ方、時の鐘になり、お袖、思ひ入れあつて、探り／＼奥へ入る。左次兵衛、下の方より、砥石、手桶を探り取つて、鉈を砥ぐ事よろしく、此うちよき時分、簾の中にて蚊遣り燃え立つ。左次兵衛、キツと目を附ける。ドロ／＼になり、古簾の破れより、その形拔群なる大猫の面見えて、目を開

き、キツとなる。左次兵衛、悧りして
ヤ、、、、簾のちぎれに見ゆるは、猫の面の、さも凄
まじき
ト鉈にて簾を切つて落す。こゝに猫の怪、十二單衣の
姿、老女の拵らへにて、蚊遣りの火を焚き、猫の額に
て、鏡臺、鐵漿附け道具を並べ、鐵漿をつけてゐる。
左次兵衛、悧りして慄ふ。猫の怪、振向いてキツと見
る。口のまはり鐵漿つきゐる體。薄ドロ〳〵、誂らへ
の鳴り物。猫の怪は二重より悠々と下りて來る。左次
兵衛、慄へ〳〵、下座へ逃げて入る。屋體の上へ五郎
吉、裸身へ業平の裝束を着て出ろな、お袖、民部と心
得、附いて出て來る。猫は舞臺よき所へ行く。
そで　藤助さんか。
五郎　イ、ヤ、おれだワ。あの侍ひは、おれの着物を淡つ
て駈落ち。
そで　そんなら、あなたは、妾を遁がれて。
五郎　おれを裸に。あと追ひかけて。
ト行かうとする。
そで　イ、エ、お前は。
五郎　エ、、面倒な。

ト立廻る。猫の怪、振返つて見る。五郎吉「ワツ」と
顏を隱す。猫の怪、欄間の方をキツと見る。上より鼠
數多、バラ〳〵と落ちて死ぬ。お袖驚ろき
そで　アレ、欄間から鼠が落ちて
ト悧りする。大ドロ〳〵。猫の怪よき所にて消える。
二重舞臺へ古簾下りて兩人を消す。知らせに附き道具
變る。
本舞臺、矢矧の橋のかゝり。天水桶、柳の大樹、吊
り枝を飾り、すべて東海道岡崎の宿。馬士唄、時の
鐘にて道具納まる。
ト向うより雲助三人、琉球包みの長持ちを擔ぎ、唄う
たひながら出てくる。橋の上より彦兵衛、麻上下、羽
織の姿にて出て來り
彦兵　モシ〳〵、若い衆。智行上人さまは、もうお出でな
さるか。
人足　アイ、今そこへござりました。わしらは先に藤川宿
へこの荷物。サア〳〵、やらかせ〳〵。
彦兵　ア、コレ〳〵。その長持は藤川までかな。赤坂まで
は通らぬかいの。

人足　イエ〳〵、藤川までのつもりで參りました。
彦兵　それでは人足を出さねばなるまい。ハテナテ、今日は問屋場の混合ふ日だ。ア、、どうぞ人足が廻ればよいが。
人足　イヤモウ、道中の賑はふは、わしらが爲には豐年でござります。サア〳〵、やらかせ〳〵。
ト唄を唄ひながら、橋を渡つて入る。彦兵衞殘る。矢張り馬士唄にて、向うより民部之助、五郎吉が單衣を着て、大小を綵立てに包み、これを負うて、太神宮と書きし菅笠を冠り、出て來り
民部　ハイ〳〵、伊勢參りに御報謝。
彦兵　ア、、コレ〳〵、てめえ伊勢參りか。なんと、今日一日人足になつて、荷を擔ぐ氣はないか。駄賃は取れるが、どうだ〳〵。
民部　ア、、どうして〳〵。わしは肩がきゝませぬから、重荷は擔げませぬが、なぜまた其やうに、俄に人足を拵らへさつしやるのだ。
彦兵　そりやア今日、智行さまのお通りで、問屋が混合ふからの事。てめえ達も邪魔にならぬやう、片寄つてゐませうぞ〳〵。
民部　エ、、左樣でござりますか。道理こそ後の宿に、大勢寄つてゐましたわい。
彦兵　てめえ、いゝ所へ來た。お待ち申して、お十念を受けて行くがよい。
民部　成る程、こりやアいゝ所へ來かゝりました。お十念を戴いて參りませう。
ト片脇へ寄つてゐる。木魚入りの合ひ方になり、向うワヤ〳〵して、供侍ひ二人、先を拂ひ出る。跡より智行上人、鼠の頭巾、法衣、高からげ、草鞋にて拂子を持ち出てくる。後より旅中間、旅侍ひ其外町人、羽織の講中、仕出し大勢。
一同　エ、、お十念を、お願ひ申しませう〳〵。
ト出て來て、舞臺へ來る。彦兵衞、手を突き
彦兵　ハ、ア、お上人樣へ申し上げます。當宿の者ども、お十念をお願ひ申しまする。何卒この儀、偏へにお願ひ申しまする。
智行　念佛の行者、信心の輩、十念願ふは神妙〳〵。然らばこれにて。
一同　エ、、有り難うござりまする。
トわや〳〵云うて、智行の前に蹲る。智行、こなしあ

智行　つて、珠數を出し
一同　南無阿彌。
　ト　よろしく十遍となへて
智行　南無阿彌陀佛。
一同　南無阿彌陀佛。……エヽ、有り難うございます。
　ト此うち智行、大勢の中より、民部之助を、よく／＼見て
智行　念佛の行者のうち、年若なれどもあれなる男子。奥床しきその骨柄。ハテ、惜しいかな。
　ト合ひ方になり、思ひ入れ。
我れ佛學の外、天文、地理も、胸に疊みて覺えあるに、あれなる男の人相を見れば、只者ならぬその生立ち、天が下を窺ふところのその器量。然りと雖も、いま天下靜謐にして、かゝる大義は思ひもよらず。時到らねば、却つて不吉の相となる。ハテ、惜しいかな。これ即ち、善は惡に近きの道理。して、其方は、如何なる者にてありけるぞ。ハテ、奥床しきその生立ち。
　トきつと云ふ。民部之助、思ひ入れあつて
民部　ハイ、私しは駿河の國、由井の宿にて紺屋の悴、藤助と申すもの。只今にては武家奉公、氏も系圖も、この身に取つては。
智行　すりや、町人の胤なりとな。氏素性なき者ならば、猶々不思議のその人相。正に末々、其方こと、天下を望むの萠しは正しく。その惡念を止むるは
　ト合ひ方變る。懷中より袱紗に包みし六字の名號を出し、こなしあつて
こりやコレ智行が一代に、一度ならでは認めぬ、十界成佛の六字。如何なる惡念ある者も、一度拜するその時は、善道に導かん事疑ひなし。これを汝に與ふる間、肌身離さず所持いたせ。構へて後々大義の企て、勸むる輩あるとても、愼しむべきはこれ第一。心得たるか、それなる男。
　ト名號を渡す。民部之助取つて
民部　元より斯樣な賤しき者、何しに左樣な大義の企て。お志しのお名號、有り難く申し請くるでござりませう。
智行　今より、フツ／＼思ひ切り、せめて出家の心あらば
民部　七里けつぱい。我れらは神道。
智行　ハテ、惜しいかな。これも宿世の因果ぢやなア。
　ト唄、時の鐘になり、皆々左右を圍つて、橋を渡り入る

る。民部之助、見送り

民部　ヤレ〳〵。いはれぬ出家の示しにて、暫時の隙入り。さりながら、おれに與へしこの名號。物は試しぢや。

ト懐中より出して思ひ入れ。

それにしても、八つ橋村で、同宿の伊勢參りが、形を其まゝ、目立たぬやうには着て來たが、定めてお袖が、後で尋ねてゐるであらうに。マア、日は暮れる。この橋の上で、ドリヤ一睡、やりませうか。

ト春負うたる絲立てを敷き、橋の上へ笠を顔に當て、手枕で寢る。時の鐘になり、向うより願哲坊、三立目の大津繪辨慶の鎧にて、長刀を持ち、後より手下盗賊、四人、一本差し、忍び頭巾、龕燈を照らし、出て來り

盗甲　そんなら、いよ〳〵願哲は、おいらが頭へ隨つて

盗乙　手下になつて働らく心か。さすれば、おいらは同腹中。

盗丙　仲間入りにはしつかりと

盗丁　馳走になるぞよ〳〵。

願哲　ハテ、この手合ひは、おぬし達にも云ふ通り、遠州三河のその間、强盗の帳本たる、日本駄右衛門、誠は丹波與八郎、實否を糺す其ために、手下となつて窺ふも、官太夫さまのお指圖。それゆゑ坊主がいつぞやの、大津繪姿を其まゝに、辨慶の此いでだちは、心は熊坂長範だワ。

四人　イヤ、受取り憎い熊坂だな。

願哲　所をこじつけ長範が、手見せの働らき、てめえ達も油斷なく

四人　押し込み、かッさき、をどりこみ。

願哲　愚僧に續いて、サア〳〵、來やれ。

ト皆々舞臺へ來り、橋を渡るとて、寢入りゐる民部之助の足を踏む。民部之助、起きあがつて、キッとなり

民部　ヤイ〳〵〳〵、此奴等は、寢てゐるものを踏みにじり、挨拶もなく行き過るは、不作法千萬。明盲目。

盗甲　ナニ、明盲目とは此方の事か。

盗乙　身の程知らぬ野伏りめ。なんでおいらが

四人　明盲目だ。

民部　その明盲目の譯云うて聞かさう。野宿のこの身は賤しくも、この笠に、コレ、しつかりと、文字は即ち大神宮、あり〳〵と書いてあるのを、土足に踏み立て蹴立てたのは、神を恐れぬ無法の大勢。わしが前へ兩手を突き、

三拜なして通ればよし、さなきに於ては、一人でも、通す事罷りならぬ。禮儀を知らぬうじ蟲めら。
ト笠を見せてキッと云ふ。
願哲　此奴が〳〵。乞食の身を以て、うじ蟲なぞとは緩怠至極。斯く云ふは、日本駄右衛門が手下の者いらざる口出し致したら、爲になるまい。物貰ひ、キリ〳〵爰を
四人　なくなれエ、。
民部　その強盗とは、横しまにして惡といへども、惡しきを知つて惡事をなすは童も同然。取るに足らざる人非人、見遁がしくれる。おのれら、爰を、キリ〳〵通れ。
願哲　ヤア、推參なその一言。宿無し風情に、我れ〳〵が、後れを取つては仲間の聞え。おのれ、爰にて討ち果すぞ。
民部　ナニ、推參な。命は助ける。三拜いたせ。
願哲　その廣言がこの世の別れ。皆も合點か。
四人　合點だ。その舌の根を。
ト一度に抜きつれ、切つてかゝる。風の音烈しく、民部之助、糸立てに隱せし一腰を抜き、切り散らす。この時懐中の名號を落す。願哲取上げるを、民部之助、手早く取返し、キッとなる。この時、ドロ〳〵烈しく、民部之助の前へ黒雲下りて、姿を隱す。皆々見て

盗甲　ヤア、黒雲一むら。アレ〳〵〳〵。
盗乙　今の曲者、失ひしか。
盗丙　跡を慕うて
願哲　皆々續け。
トどろ〳〵、カケリになり、黒雲向うへ行く。皆々この後を追うて一散に入る。これにて道具變る。
本舞臺、正面黒幕。前通り杉の並木。上の方誂らへの銅燈籠。すべて遠州秋葉山の景色よろしく道具納まる。ト山颪し。大薩摩になる。
〽それ、設我、得佛の花開き、四斷眞如の月冴えて、谷の水音、山颪し、梢木の間も木魂して、實にや魔界といッつべき、深山の奥の天狗風、いと物凄く吹き渡り
トこの文句納まると、誂らへ凄き鳴り物になり、杉並木引割ると、爰に秋葉山の三尺坊、白衣裝束誂らへの仙人の拵らへ、足駄がけにて、蔦葛まとひし杖を突き、岩臺の上に立ち身。その下に民部之助、雲中より落ちたる體にて、氣を失ひ倒れゐる。こゝ見得にて、兩人を引出す。知らせにつき、鳴り物打上げ、風の音、變りし合ひ方。三尺坊、よろしくあつて

三尺　それ、天は淸らかにして心と定む。地は陰にして形を現はす。雲中にて下界を見る、既に危ふき童が振舞ひ。心を附けよ民部之助。

　ト これにて民部之助、兩眼開き、キッとなつて

民部　ハテ、心得ぬ。矢矧の橋にて賊に出合ひ、挑み合ひしと思ひしに、それより後は夢うつゝ。眼を見開き、見てあれば、いづくかそれとも知らざるが、爰は山中。我が名を呼びしは、何とも以て。

三尺　それぞ卽ち我れなるぞ。

　ト見て

民部　して又、御身は何人にて。

三尺　有りと思へば無く、また無きとてもこの如く、姿は假りに、あり／＼と、雲に跨り、滿腔の樂しみ、霞を起して梢に飛行し、世界を眼下に水の音。

民部　さては御身は。

三尺　この山中に年を經し、三尺坊とは我が事なり。見えん爲に現はれしぞ。

民部　その御方が何ゆゑに、我れに見え給ふぞや。

三尺　實に尤もの尋ねぞや。昔の契りを語らん爲。

民部　ヤヽ、なんと。

　ト鳴り物變り。山颪し入りし合ひ方。

三尺　今ぞ示さん汝こそ、以前の前生、只者ならず。湊川にて亡びたる、楠多聞兵衛正成が一子、幼名は多聞丸、成長の後楠正行。その前生と知らざるや。

民部　して又、その儀を、何ゆゑ御身は。

三尺　示し聞かする我れこそは、尊氏が爲に世を去りし、應塔の宮守長なるワ。魔界に入つてこの如く、詞交すと知らざるや。

民部　さては噂に聞きたりし、魔界に変はる親王の

三尺　その身も今は天狗道、晝夜の苦しみ熱鐵の、苦患を助くる十界の、その名號を受けたるその身、再び我れに與へなば、恩を謝すべき事こそあれ。別儀にあらず、汝が惡念、後にはその身を失はん、それを不便と思ふがゆゑ、止めん爲に見ゆるなり。

民部　こは心得ぬ御一言。後々この身の災ひとは。

三尺　それぞ汝が前生は猫なるゆゑ、人これに馴染み、功を積みて、必らず其方、天下を望むの萌し出でんが、なかなか成就なりがたし。さるによつて、智行が與へしその一卷、我れに渡さば、其方が實義にめでゝ、堅くもこの儀を契約なす。心を附けてその身の榮えを。

民部　事新らしき御示し。さはさりながら、人として、名を萬天に揚げんこそ、人間の望むところ。今まで匹夫と思ひしに、正行の再來と聞く上は、足利に膝を屈せんいはれなし。元より望まぬこの名號、所望とあらば御身に差上げ、今より我れは日本國を武者修行。時を窺ひ、旗揚げなし、事ならずとも楠の、血筋を現はす我が存念。

　ト三尺坊こなしあつて

三尺　ハテ、情なきその一言。然らばこれにて其方に、知らし置かんは外ならず。楠の血筋にせよ、我れならでは知らざる前生、それをば人に知らする爲、楠氏のその系圖、持ち傳へて從なきもの丶手にあれば、これに近づき汝が方へ申し請け、後々系圖を持ち傳へよ。

民部　こは有り難き御示し。然らば御身の望み給ひし、六字の名號、直さまこれにて。

　ト三尺坊へ六字の名號を渡す。

三尺　アラ、喜ばしや、心の安堵。最早望みは叶うたれば、後々天下の憂ひたる、その逆賊はかゝる靈地に、片時も置く事叶ふまじ。早々下界に立歸れ。

民部　とめ置かるゝとも、やはか魔界に。

三尺　その一言に見ゆる別れ。後々後悔仕らん。

民部　然らばこれより。

三尺　走るに及ばぬ、下界へ見送り得させんず。

　ト此うち後より山賊二人、窺ひゐて

二人　怪しき曲者、

　トかゝる。それを相手に立廻り、大ドロ〳〵にて三尺坊引拔き、天狗の形となつて、鳴り物變る。

民部　ヤ、其お姿は。

三尺　嬉しや望みのこの名號、これより直ぐに飛行せん。

民部　我れはこれより。

二人　おのれは、おいらが。

　ト組みつく。よろしくドロ〳〵にて、三尺坊は雲にて消える。あと三人立廻りあつて、キッとなる。よき時分、下の方へ三尺坊現はれ

三尺　見よ〳〵、民部、下界の境これ限り。今ぞ別れのしるしを見せん。

　ト大ドロ〳〵になり、三尺坊、民部を連理引きに引附ける。山賊二人やらじとするを、術にて取つて投げ退け、その隙に民部を引附け

來れや、民部。

　ト大ドロ〳〵鳴り物烈しく、民部を引上げし體にて、

兩人な、だん〳〵上へ引上げる。これに隨ひ、下の道具知らせに附き、低くなり、杉の木は枝ばかり見ゆる。よき時分、雲の幕を振り落す。

本舞臺、正面秋葉山、銅の大鳥居。後淺黄幕。上の方、杉の大樹。爰に油紙帳吊つてある。下の方に石の榜示杭、秋葉山道掛川宿と記し、すべて東海道掛川宿の體。ドロ〳〵にて、雲の幕切つて落す。

ト眞中に民部之助、氣を失ひ、石にもたれゐる體。ドロドロ打上げる。かすめて驛路、馬士唄になり、民部之助、心附きたる思ひ入れ。

民部 秋葉山にて怪しき御方、我れに示して前生まで、心に覺えて暇を乞ひ、その時聖に貰うたる、名號渡して歸り道、雲霧かゝると覺えしが、思はず爰へ落ちたる樣子。あたりを見れば

トよく〳〵見廻し

こりやコレ、掛川秋葉山の鳥居。今日岡崎の矢矧の橋より、アノ爰までの道のりは

ト指を折り、こなしあつて

宿もすんでに十一宿、その道のりも二十五里。それを思はず一夜のうちに

ト懷より鈴鹿で手に入る手紙を出し

「八平次さまへ赤羽屋五郎作。」こりや雷丸の樣子を記せし

ト思ひ入れ。此うち後より雲助二人、窺ひ出て

雲甲 そんなら岡崎、矢矧から、藤川、赤坂、御油、吉田、雲の上から見下ろして

雲乙 二川、白須賀、新井、舞坂、旅籠も遣はず直ぐ通り、濱松、見附、袋井まで、天狗のお供で馬駕籠に

雲甲 乘らねど雲に乘つたので、駄賃いらずの仕合せ者。雲に乘つたら雲助の、おいらが仲間になる氣はないか。

ト差寄る。民部之助、聞いて

民部 ア、そんなら野宿の雲助か。成る程わいらが云ふ通り、二日にあまる十一宿、暫時のうちに袋井まで、これも秋葉の御利益ならん。エ、有り難うございまする。

ト鳥居の方に向ひ、拜するを見て

雲甲 コレ〳〵、雲から落つればわれも雲助。どうでも仲間に

二人 入れねばならぬ。

民部 ア丶丶又しても仲間呼はり。雲には乘つても雲助には

雲乙 ならずばわれが懷の、八平次さまとある、手紙をおいらに

二人 見せてもらはう。

民部 ヤ丶この手紙か。こりや短刀の在所の手がゝり。わいらが見たとて、何の役にも立たぬ品。

雲甲 八平次さまとあるからは

雲乙 ちよつとおいらが。

ト懷へかゝるを、突き退け立廻り、此うち馬士唄聞える。民部之助、二人を引附け、キッとなる。この時捨て鐘の頭を打込み、紙帳を破り、日本駄右衛門、實は丹波與八郎、百日鬘、大廣袖にて、顏を出し、この體を見る。舞臺の三人、立廻りよろしく、民部之助、隱し持つたる一腰を抜き、二人を切り倒す。この時駄右衛門、舞臺へ出て來り、後より民部之助が懷中の手紙へ手をかけ、キッとなつて、これより凄き鳴り物になり、立廻りのうち、駄右衛門、懷中したる、石部の宿にて手に入りし楠の系圖の一卷を落す。民部之助これを拾ひ、駄右衛門は雷丸の手紙を取り、兩人よろしくだんまりの立廻りにて、トゞ左右へ別れて、星影にかざし、ちよつと見る事あつて

駄右 手紙の文言、雷丸。

駄右 正しく系圖は楠の

駄右 ヤ。

ト兩人とも懷中する。木の頭。駄右衛門、花道へ行くよろしく拍子

幕

この幕、掛川銅鳥居の模様、鳴り物變つて、花道を駄右衛門、振つて入る。知らせに附きシャギリ。

三幕目

日坂入山津村の場
小夜の中山夜啼石の場
同無間の鐘の場
金谷島田大井川の場

役名＝＝石井半次郎。八つ橋村左次兵衛。島田の萬九郎。盗賊、銅八。赤羽屋五郎作。栗原丹藏。狩人一子、與之助。菊川の友六。山形屋義兵衛。狩人

崖七。同、洞六。女非人、おはぎ。奴、逸平。與作女房、小まん。與作母、お浪。日本駄右衞門實ハ丹波與八郎。八つ橋村のお松。竹村定之進。伊達の與作。非人、江戸兵衞實ハ藤川水右衞門。

本舞臺三間の間、正面松並木、吊り枝。うしろ藁葺き長家の荇戸口、出入りあり。家の軒に、晒し表の草履、竹の皮の草履など吊し、下の方榜示に東海道日坂宿と記し、すべて入山津村、非人宿の體。四つ竹の合ひ方にて幕明く。

ト爰に江戸兵衞、實は水右衞門、五十日鬘、手拭をかむり、切繿ぎやつし、蓆を敷き、草履を拵らへてゐる。崖七、洞六、狩人の形にて、鐵砲へ猿の打ちしを一疋つけて賣りに來てゐる體。

崖七　コレサ〳〵、江戸兵衞、おいらはいつでも貴樣の所へ賣りに來るが、其やうに値廉につける事はねえ。

洞六　さうサ、もうちつと買はつしやいな。

江戸　どうして〳〵。夏皮は値にはならぬ。それでよくば賣つてゆくがよい。

崖七　エヽ、どうなるものか。賣つてしまへ〳〵。

江戸　サア、それでよしかえ。ソリヤ、八十五文。

ト遣る。

洞六　エヽ、廉いものだ。山仕事をするより、お觸れのお尋ね者を尋ねる方が、はるかましだらうな。

江戸　コレ〳〵、お尋ね者とは、そりやア誰れを尋ねるのだ。

崖七　アヽ、てめえ知らねえのか。お代官からのお觸れは、因州の武士白井權八、殊に、海賊桑名屋德藏、それも今では變名して

洞六　今のその名は日本駄右衞門。これも虚無僧の形にやつして徘徊するから、召捕つて出す時は、御褒美は望み次第。もし手に餘らば、鐵砲で打つても大事ないとの事。

崖六　その上に、官太夫さまとやらが、石山から駈落ちした、重の井姬といふも、見附けたら連れて來い、それも否だといつたら、首にしても大事ないと、尋ねる最中。

洞六　さういふ仕事にかゝるのが、濡れ手で粟の儲け口。てめえも草履を拵らへる手間に、その仕事にかかるがいいぞよ。

江戸　イカサマ、そいつは話しが出來るわえ。併し、重の井姬とやらは、お前方も、滅多に殺しては惡いぜ。

崖七　なんの、いらぬお世話。助けて置いたとて、姫が非人の色にはなるまい。

洞六　サア、行かう〳〵。

　ト矢張り四つ竹の合ひ方にて、兩人、向うへ入る。

江戸　そんなら、あの親人が、人知れず姫の詮議。殊に、おれが所へ內々で金を送らしつたも、丹波與惣兵衞を殺した時、思はず受けた刀疵、今では金瘡、癒す藥も官太夫さまから、コレ。

　ト懷より藥を出し

藥はあつても、辰の年月日時揃ひし女の生血。……あの女は、もう歸りさうなものだが。

　ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより前幕のおはぎ、小風呂敷包みを持ち、お松の手を引き、出て來り

まつ　モシ〳〵。爰はもうお前さんのお內かえ。

はぎ　ナニサ、外にもちつと用があつて、その內へ寄つて行くのサ。

まつ　エ、、左樣かいなア、わたしや又お內へ參つたと存じて。

はぎ　サア、來な〳〵。

　ト舞臺へ來て

江戸兵衞さん、いま歸つたよ〳〵。

江戸　ア、、歸つたか。そして賴んだものは、あつたかあつたか。

はぎ　あつた段か。喜びなさい〳〵。

　ト江戸兵衞、お松の顏を見て思ひ入れ。

江戸　モシ〳〵、女中さん、此かみさんにちつと話しもあるから、マア、今夜は此方に泊りなさい。

まつ　何分よろしうお賴み申しまする。

江戸　そんなら斯うしなさい。爰には蚊が多いから、わしが內へ行つて橫になつてござりませ。必らず遠慮しなさんな。

まつ　アイ〳〵、左やう致しませう。駕籠より出まして、大きに足を痛めました。どうぞ其お內を借りまして。

江戸　さうしなさい〳〵。コレ〳〵、この口から入つてノ內は穢ないがその代り、お前の內だと思つて、勝手にしてござりませ。

まつ　ハイ〳〵、有り難うござります。モシ、おかみさん、左樣なら、わたしはお先へ。

はぎ　さうしなさんせ。わたしも後から。

江戸　寢ころんで行きな。

ト合ひ方、入相の鐘になり、お松、包みを抱へ、件の口へ入る。江戸兵衞、跡見送り、煙草入れより錠を出し、門口へシヤンと卸し

これでよし／＼。……コレ、おはぎ、あいつが面は、ありやア化け物だ。あんな者に、誰れが金を出して

はぎ　それだから大抵、嬉しかつた事ぢやアないわな。

江戸　さうして親元は。

はぎ　三州の八つ橋村で、苦しがりの母の難儀に、金の代りに。

江戸　そりやアいゝが、年の事は

はぎ　辰の年月日時の生れ。その證據は。コレ。

ト件の守り袋を出して渡す。江戸兵衞開き、臍の緒の書附けを讀む事あつて

江戸　成る程、年月揃うた女が生れ。して、親の名は。

はぎ　百姓の左次兵衞といふ者。まだ外に妹も一人。

江戸　ムウ、八つ橋村で左次兵衞。そいつは慥か、道中名うての目明し。それぢやア今の女は、與惣兵衞が娘の、……ほんに、てめえ、骨折りであつたの。斯う見たところは、キツとした、商賣屋の嬶アだ。乞食とは見えぬわい。

はぎ　そいつは嬉しいの。お前の頼みでしつけぬ仕事。その代り、江戸兵衞さん、お禮があらうの。

ト寄り添ふ。

江戸　おきやアがれ。併し、人に云ふなよ。

はぎ　そりやア承知サ。ドリヤ、行水をして來ようか。

ト合ひ方、時の鐘になり、向うへ入る。江戸兵衞、殘り

江戸　あの女を頼んで、辰の年月揃ひし女が生贄、首尾よく引寄せ、金瘡の、腕の疵を。……ア、殺生にかゝらずばなるまい。

ト時の鐘になり、この道具廻る。

本舞臺、毀れ壁。いつもの門に、竹藪、よき所に圍爐裏。壁へ獸の皮を吊し、上の方、板戸の納戸、古行燈をともし、お松、圍爐裏の中に蚊遣りを仕掛けゐる。時の鐘、合ひ方、蟲の音にて道具納まる。

まつ　アノマア、府中のおかみさんは、どこへござんしたやら。わたし一人爰へ寄越して、何ぢややら氣味の惡い内。それに附けても、お懐かしいは民部さま。義理ある妹のあのお袖と、さぞ今頃は睦まじう。エ、、羨やま

しい。
ト思ひ入れ。この時、天井の方へ鼠出て、バッタリと何やら落す。恟りして
オヽ怖。何やら爰へ。
ト行燈にて、よく／＼見る。皮を剥ぎし猿の手を取上げて驚ろき
これはしたり。こりや赤子の手を鼠が引いてッハテマア、氣味のわるい内。上から物の落ちぬ所へ。
ト思ひ入れ、あたりを見て、獸の皮なぞを見附け、
ヤヽ、こりや、いろ／＼獸の皮。そんなら赤子と見えたのは、猿ぢやさうなが、此やうな怖い所に、一夜でも、どうして／＼。モウ／＼、野宿をしても。
ト包みを抱へ、門口へ出ようとする。この時外より江戸兵衞、出刃庖丁を雑巾に包み。窺ひ出て、ガラリと戸を明ける。お松、恟りして慄ふ。
江戸　どこへ行くのだ。
まつ　アイ／＼。こりやお內の御亭主さん、わたしや連れのおかみさんを、尋ねてちつと
江戸　あの女なら、錢湯に行つた。
まつ　そんなら、わたしも
ト行かうとするを引廻して
江戸　ナニ、行くにやア及ばぬ。無駄な事だ。
まつ　イエ、外に用事がござんすゆゑ。
江戸　ナニ、用が。……用があらうが、話しは出來ぬ。コレ、女中さん、そんならこなさん、何も譯は知らずに來たのか。
まつ　アイ、譯は知らねど、お內儀さんが、情の金も三十兩、母の難儀に、この身は勤めに。
江戸　こりやア大笑ひだ。そんな面で大枚金も三十兩。あの金出したもこの江戸兵衞、どうしてそれで勤めがならうか。
まつ　エ。して、外に何ぞわたしを。
江戸　この年月の書き物から。
ト件の守を見せる。
まつ　そりやアノ、わたしが、辰の年月揃ひし臍の緒の、その書き物がどうしたえ。
江戸　命を買つた。
まつ　エヽ。
江戸　命も命、辰の年、日時揃ひし女の生膽。それが欲しさに苦界は助ける。その代りにやアあの世は樂々、そこ

で往生かんまみた。生膽ばかりが三十兩、なんと膽が…
…潰してくれちやアいけねえぜ。

まつ　そんなら命を取らう爲、わたしを騙して、アノ爰へ。
見ればどうやら、この内も

江戸　乞食はしても、お剰り貰はぬ、情を知らぬ江戸兵衞
が、仕事にかゝつて來たのが往生。

ト砥石を出して出刃を砥ぐ。お松、いろ／＼あつて

まつ　イエ／＼、この身は賣れど、なんで命を賣るものぞ。
あのおかみさんに逢うた上。

ト駈け行くを引ッ捕へて

江戸　迎ひの女も此方の手先。例へ泣かうが喚かうが、後
先き遠き一軒家、牛馬を剝ぐは常ながら、ちつと手馴れ
ぬ女の生膽、稽古の爲にして見る仕事、痛い目堪へて、
くたばつてしまへ。

まつ　そんなら、どうでも、助けては。

トこなしあつて

成る程、非業に死ぬるのも、これも何ゆゑ、母の爲、命
は、さら／＼惜しまねど、民部さまの情のおどもり、日
の目も見せず殺すのが……それは格別、語らふ男を、義
理ある妹に見かへられ、恨み云はいで死ぬるのが、どう
もわたしや口惜しい。只この上のお慈悲には、恨みのた
けをこま／＼と、書き殘して死にたうござりまする。ど
うぞ其うちわたしが命。

江戸　その位な事は聞分けてやらう。サ、書くなら早く。

ト硯箱を出して差附ける

まつ　アイ／＼、どうぞ少しの間

ト懷中を見て、紙を落せし思ひ入れにて

折惡う鼻紙とても。

江戸　おれも持たぬワ。そこらの物へ何なりと書いてしま
へ。サア。屆けてやらうワ。

ト此うちお松、持つて來りし包みの中より、孔雀染め
の振り袖を出し、この裏の白きを見附け

まつ　幸ひわたしがその以前、新造なりの小袖の裏、白い
所へ恨みのたけを

江戸　其うちおれは、われが腹を裂く、刃物はこの出刃、
痛まぬやうに小石を當てゝ

まつ　小袖の裏は恨みの文言、可愛さ剰つて民部どの、義
理ある妹も、ナニ安穩で

トきつと思ひ入れ。向うを見詰める。江戸兵衞見て

江戸　エヽ、キリ／＼しろえ。

ト蹴飛ばす。お松「ハア」と泣き落す。江戸兵衛、ニツタリ笑ふ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、元の松並木、脊戸口の道具に戻る。爰に逸平、旅奴の形にて葛籠を脊負ひ、崖七、洞六、鐵砲にて取卷き、栗原丹藏、半纏、股引の侍ひ、黑仕立ての捕り手三人、立ちかゝり、逸平を圍みゐる。禪のツトメにて納まる。

捕手　動くな。

逸平　こりや狼藉なお侍ひ。何ゆゑあつて下郎めを。

丹藏　ヤア、吐かすな／＼。うぬが脊負ひし葛籠の中、正しく大江の重の井姫、不義の相手は與八郎、いま强盜の日本駄右衛門、彼奴等に、いよ／＼極まらば、首打ち來れと宮太夫さまの仰せを受け、附け廻したる栗原丹藏。キリ／＼葛籠を渡すまいか。

崖七　あなたへ訴人は狩人の

洞六　おいら二人が目代の役。奴め、姫を

皆々　渡せエ、。

逸平　なに、小癪なる支へだて。聞分けないと、奴が相手。

丹藏　エ、、面倒な。ソレ、召捕れ。

捕手　やらぬワ。

ト逸平にかゝり、立廻り。禪のツトメになり、向うより旅人二人、三立目のしつぺい太郎、犬の首に、繋ぎ錢お拂ひを結びつけ、綱を附けて引いて出て來り、この中へ入り

旅人　ハイ／＼、御免なされませ。

丹藏　ヤイ／＼、おのれらは旅人なるか。お尋ね者の姫を詮議の最中。加勢いたさば褒美をくれん。身共に隨ひ、働らけ／＼。

旅人　ハイ／＼、褒美とあらば犬も働らけ。オ、シキ／＼。

トけしかける。この時、犬は敵役に喰ひつく。皆々驚き、這々にして下座へ逃げ行く。犬は附いて追ひかけ行く。逸平も行かんとする。

丹藏　慥かに重の井。

ト葛籠へかゝる。これより、誂らへの鳴り物になり、逸平、丹藏、いろ／＼立廻りあつて、この道具廻る。

本舞臺、元の非人の家になる。

ト凄き合ひ方、時の鐘、蟲の音。爰に皮干し板にお松をかすがひどめにして、荒繩で縛り、よき所へ立てか

け、闇爐裏の中に焚き物たく〳〵、蚊遣りを仕掛け、件の小袖の裏に書置の認めあるを、古行燈にて江戸兵衛讀んで居る體にて、道具納まる。

江戸　ア、、この書置の樣子では、そんならわれは、與惣兵衛の娘、腹變りにて、與八郎が爲には、妹の明石のお松、ハテサテ、どこにどうした事か。

まつ　そのマア武士の娘にて、人並ならぬ皮剝ぎの、おのれら如きの手にかゝり、畜類同樣、この世から、獸に等しきこの有樣。エ、、おのれはなア。

江戸　イ、ヤ、その畜生の皮は剝いでも、おらア誠の非人ぢやアねえ。名におふ藤川官太夫、その御子息のこの江戸兵衛、惚れた女は重の井姫、送る艶書を見附けた與惣兵衛、それゆゑにこそ邸を追放。その恨みある與惣兵衛ゆゑ、親子が寄つてぶッ放し、その時受けたこの金瘡。われが爲にはおれは敵だ。それ聞いたなら、口惜しいか。口惜しくつても板ばツつけ。どうして手出しがなるものか。

トあざ笑ふ。お松、無念の思ひ入れにて

まつ　そんなら父さんを殺したのも、おのれが仕業であつたよなア。その敵たるおのれが爲に、命を落すが口惜しい。手が叶はずば、喰ひついてなとおのれを。エ、、誰れぞ來てくれぬかいなう。

トいろ〳〵身を揉み

エ、、何の因果で此やうに、憂き目にあふか。口惜しいわい。口惜しいわいなう。

江戸　道理だ〳〵。成る程、われは因果者。それに引きかへ此方は仕合せ。敵を討つべきわれまでも、縛りからげて腹を裂き、その生血が藥となる。敵のおれを助ける良藥。みす〳〵爰で返り討。イヤ、返り討も多く見たが、皮干し板での此ざまは、ハテ、珍らしい。コレ、その上われが兄といふ、與八郎めも後からやる。われから先へくたばつてしまへ。

まつ　聞けば聞く程、その恨み。喰ひついても、この繩が、エ、、死にともない〳〵。誰れもゐぬかいなう。アレイアレイ。

江戸　高吠えするな。その踠くのがこの世の別れ。今が皮切り、辛抱しろ。

ト「アレイ〳〵」と踠くお松の胸元を出刃を以て突込む。これにて苦しみ、身悶えするを、江戸兵衛よろしくこなし。この時、腹の中より赤子出て泣く。江戸兵

衛、悧りして

なんだ。赤子か。エヽ、不便な餓鬼だ。

ト引出して門口へ捨てる。この時、薄ドロ〳〵にて、お松、眼を見開き、江戸兵衛をキッと見る

なんだ。また死なねえのか。エヽ、執念ぶかい。

ト死骸の板を蹴飛ばし、隅より素焼の壺を出し、捨ぜりふにて、生膽を出し、壺の中へ入れ、片口を出し、懐の藥を半分引明けて、血を淺し、一つにして

こいつは餘ッぽど飲み憎からう。

ト顏をしかめながら、グッと飲む。時の鐘、バタ〳〵になり、向うよりおはぎ、そぼろなる姿に着替へて駈けて出てくる。後より件の犬、駈けて出て來る。おはぎ、犬を追ひ散らし、

はぎ　エヽ、畜生め。乞食だといつて吠える事はねえ。シツ〳〵。

ト門口へ來る。江戸兵衛この聲を聞き

江戸　おはぎぢやアねえか。

はぎ　江戸兵衛さん。して、お前、あの女はどうした。

江戸　藥に交ぜて、彼奴が生血で。

はぎ　エヽ、嫌だなう。

江戸　これから、この死骸を、表の流れへドンブリ。手傳つてくりやれ〳〵。

はぎ　アイ〳〵。承知しました〳〵。

ト兩人して死骸の附きし戸板を奥へ持ち行く。よろしく、ドンと水の音。兩人、出て來り

モシ、江戸兵衛さん、わつちはおつな事を聞いて知らせに來ました。アノ海賊の桑名屋徳藏、變名して日本駄右衛門、また因州の白井權八、その駄右衛門が今日この邊へ、旅虚無僧になつて來たと宿内の騒ぎ。殊に、虚無僧が二人まで通つたから、いづれ其うち一人はお尋ね者、召捕つて出せば、褒美との事。油斷しなさるな〳〵。

江戸　そいつはいゝ仕事が出來たな。

はぎ　そりやアさうと、お前の飲んだ藥は、どんな丸藥だ。

江戸　ナニ、丸藥ぢやアねえ。コレ、こんな藥だ。

はぎ　ドレ、ちつとお見せ。

ト藥の包みを取つて見て

オヤ〳〵〳〵、これが血で服む藥かえ。わつちらは酒で服む藥なら服んでも見ようが、人間の血ぢやア氣がねえの。

ト此うち件の犬、捨てゝある赤子を咬へるゆゑ、赤子

頻りに泣く。おはぎ見附けて
ヤ、この畜生め。赤子を咬へて、どうしやアがる〳〵。
ト追ひ廻す、犬は咬へながら、向うへ走り入る。
エヽ、畜生め。その餓鬼を、どうしやアがる〳〵
ト薬の包みを持つたまゝ追ひかけて入る。江戸兵衞これを見送り
江戸　コレ、おはぎ〳〵。まだその薬は服むのだ。置いて行け〳〵。飛んだまぜッ返しだ。……それはさうと、着物が血だらけになつた。ドレ、着替へずばなるめえ。
ト着物を着替へる事。かすめたる禪のツトメになり、向うより伊達與作、旅虚無僧の姿、風呂敷を脊負ひ、天蓋のまゝ出て來る。後より崖七、洞六、鐵砲を持ち窺ひ〳〵出てくる。與作、花道にて
與作　今日は思はず道行く梵論字に、逢うて修行の話しから、ツイ日を暮らして宿さへも、泊り定めぬ一人旅。アヽコレ、どうぞ今宵一夜を。……オヽ、あの内へ行て頼んで見ようか。
ト門口へ來り
モシ、頼みませう〳〵。
江戸　誰れだ〳〵。どこからござつた。

與作　イヤ、わしは旅の虚無僧でござるが、今晩一夜、泊めて下さりませぬか。
江戸　ナニ、旅虚無僧だ。しめた。來たな。……泊めませう〳〵。
トお尋ね者と思ひ、いろ〳〵思ひ入れ。
與作　それは忝なうござります。ヤレ〳〵、嬉しや。御免なされませ。
ト天蓋のまゝ内へ入り、草鞋を解く。崖七、洞六、囁き合ひ、門口の藪の中へ忍ぶ。
江戸　ヤレ〳〵、お前、よく泊らしやつたの。サア〳〵、そんな欝陶しい物は、取らつしやいまし〳〵。
ト顔を見ようといふ思ひ入れ。
與作　イヤ〳〵〳〵、竹修行のこの身にて、天蓋取るは至つて不躾。宗門の掟、矢張り此まゝ。
江戸　ナニサ、掟も何もわしは構はぬ。それでなければお互ひに、顔は知れず、近附きになつたとて、變哲もない念頃仲。暑くろしいに、その天蓋は。
與作　でも參るから早々に、天蓋脱ぐは無作法ゆゑ、矢張り此まゝ。
江戸　ハテ、欝陶しいに、いらぬ辭儀。

ト目を附けてゐる。時の鐘になり、向うより日本駄右衞門、實は丹波與八郎、これも旅虚無僧の拵らへにて出て來る。あとより黒仕立ての捕り手出て、花道にて

捕甲　お尋ね者の、正しく駄右衞門。

捕乙　さなきに於ては白井權八。天蓋取つて

二人　我れ〳〵が。

ト天蓋へ手をかける。駄右衞門、尺八にて兩人を打ち据ゑる。これにて兩人逃げて向うへ入る。駄右衞門、足早に門口へ來り

駄右　御免なされませ。

トつか〳〵と内へ入り、戸を締める。兩人、恟りして

江戸　見れば修行の虚無僧どの、あわてた樣子でござつたが、盜人にでも會はしつたか。

トこなしあつて

駄右　左樣でござる。思ひがけなう、だしぬけに、道の邪魔する狼藉者。よんどころなう此お内へ。……見ましたところが、御僧にも、疾より泊つてござるのかな。

與作　アイヤ、此方とてもたつた今、お宿の無心申しかけ、草鞋の紐を解いたばかり、そこへ御僧も又一人。

江戸　狼藉者に出合つてのけ、困らしつた虚無僧どの、見捨てにならぬわしが氣性。不自由合點ごろついて、泊まる氣ならば幾人でも

駄右　お宿なされて下さるか。

江戸　虚無僧ならば泊めまする。おつな噂のその中へ、また面の出た旅虚無僧、二人に一人はお尋ね者。

二人　ヤ。

江戸　アイヤ、遠慮に及ばず、泊らつしやりませ。

駄右　然らば一夜を。

ト草鞋を解く。

江戸　サア〳〵、遠慮なしに、爰へござりませ。

駄右　それは千萬忝なうござる。

江戸　さてお修行者、お泊め申す分にやア、何もお互ひに遠慮はいらぬ。その天蓋を取らつしやるがよい。

駄右　イヤ〳〵、竹修行いたすからは、天蓋取らぬが宗門の掟。

江戸　イヤサ、さうぢやアあらうが、暑苦しい。遠慮に及ばぬその天蓋。

ト手をかけるを拂つて

駄右　これが即ち掟でござる。

江戸　ヘイ、マア、兎も角も。暑さうなものだが。

初演當時の錦繪　三世坂東三津五郎の與作

駄右 それは格別、御挨拶も申さぬが、先へござつた其許の御生國はな。
與作 身共は矢張りこの近在。住家と申すもちう僅か。して、其許は。
駄右 此方事はそれぞとも、所定めぬ旅の空。
與作 竹を修行にこの國へ
駄右 如何にも左やう。
與作 ハテ、似た事も

ト駄右衛門へ目を附けて

あるものでござるな。

ト思ひ入れ。此うち江戸兵衛は兩人へ心を附ける思ひ入れにて

江戸 モシ〳〵、泊めては進せるが、見さつしやる通りのわしが内、蚊帳も無ければ蒲團一枚。お恥かしいが有ることは云はない。その代りにやア打解けて、今夜は話して夜を明かす。それに附けても先へござつた虚無僧どの。お前が其まゝござつては、後のお客も嘸か遠慮。マア、お前からその天蓋を。
與作 サ、その儀は何分御容赦に。
駄右 左樣ござらば此方も、矢張り此まゝ。掟でござれば

江戸 ハテ、虚無僧といふものは、情の剛いが宗旨の楯か。但し二人が面體を、見せぬが掟とあるからは、どうするものだ、是非がない。泊めたが不詣だ。ドリヤ、酒でも沸かして進ぜませうか。

ト合ひ方あつて、行燈を見て

南無三。油が無かつたか。ア、儘よ。焚火で間に合はさう。

ト爰にて行燈消ゆる。

與作 ヤ、蓆、疊に、夥しい、血の滴りが。
駄右 成る程、爰も。

トこれにて江戸兵衛うろたへ、砥石を取つて焚火の上へ載せる、これにて暗くなる。

與作 ア、御亭主には、何か焚火へ。
江戸 燻すが御馳走。
二人 ヤ。
江戸 ひどい藪蚊を防ぐには、燻るがいゝと思ふから。
與作 それでも焚火を。
江戸 煙くとも、辛抱さつしやりませ。
與作 我れらも辛抱いたさうが
駄右 床が低いか、澤山な。

江戸　蚤がゐますか。……待ちなさい。蒲團も無ければ敷き物に、これでも二人へわしは又、女か小袖を座蒲團代り。

ト圍爐裏の側へ、件の振り袖を裏返しに敷き、その上へ上がり、あたりに掛けし猪の皮を二枚取つて二人に出す。二人それを敷き

與作　こりや獸の生皮、蒲團の代りに暑苦しい。

駄右　これでは却つて蚤が出て

與作　皮の蒲團の御馳走は。そんならお内は

江戸　乞食非人サ。

與作　アノ、御亭主は

江戸　非人の江戸兵衞。

與作　すりや、この内は皮剝ぎの、旅籠屋ならぬ御報謝に

駄右　泊り合せた此方も、こけこんだりし乞食町、その御馳走に合ひ宿は

與作　美濃が近江であらうなら、寐物語りも蚊にくはれ、敷いた蒲團も生皮の、それに引替へ色氣ある、こりや振り袖を御亭主は。

ト探り見て思ひ入れ。

江戸　乞食の蒲團は振り袖の、家にも似ざる不相應、泊めた二人の客僧は、いづれ一人はお尋ね者。

ト件の出刃を出し、圍爐裏に置いた砥石に當て、音せぬやうに砥ぎ立てる。

與作　何か、キシ／＼きしむ音が。

駄右　かくれざとう（茶立蟲）か但し又

トよき時分より崖七、上の方、洞六、下の方より窺ひ出て、鐵砲の筒先を向けて、二人を狙ふ。三人これを知らず

江戸　家鳴りのするは竹簀の子、それで、キシ／＼古家の

兩人　その鳴る音か。

ト思ひ入れ。江戸兵衞、出刃を研ぎ、手拭にて拭ふ。この時、左右の兩人、火蓋を切る。ドンと本鐵砲の音この丸外れて、狩人各々手盛りをくうて兩方へ當り、立ち身にて苦しむ。この筒音に驚き、二人の虚無僧、一度に天蓋を取りて身構へ。江戸兵衞、出刃を見せしと膝の下へ隱す。これにて眞中の篝火、燃え立つ。三人顏見合せ、左右の狩人、見事にかへる。一時の仕組み。誂らへの合ひ方になり、キッと見得。

江戸　天蓋取つたる二人がしやッ面。

與作　忍び窺ふ曲者が、外れたる丸に

駄右　手盛りの筒先。
江戸　眠氣覺ましに魔除けの鳴り音。
駄右　御念の入つた。
江戸　主が馳走。
與作　すんでの事に
江戸　エ。
兩人　危ない事の。
江戸　若い衆手合ひが夜仕事の、怪我が思はぬ亭主が不手前。……ドレ、澁茶なりと。
ト合ひ方になり、江戸兵衛、奥へ入る。駄右衞門、小袖の裏を見て
駄右　ヤヽ、小袖の裏に女の手蹟
與作　仇にはあらぬ、こま〴〵と、民部とやらへ恨みの文言。
駄右　兄與八郎と記した上、播州明石のお松とあるからは、もしや妹の
與作　生血の附きしは。
ト兩方より小袖を引ツ張り見る。この時、江戸兵衛、スツと出て、手早く小袖を取り、前の流れへ打込む。
兩人こなし。

江戸　イヤ、水に流して、何事も
駄右　この場をくろめる、主が胸も
江戸　お尋ね者の駄右衞門が、二人のうちに
與作　如何にも詮議の駄右衞門とは、わしが事だ。
江戸　ヤ、そんなら貴樣が
駄右　イヽヤ、盜賊の駄右衞門は身共が事。
與作　ヤ、包むその名を明らかに
駄右　駄右衞門なりと自身の白狀。心ありげなその一言。
ト怪しむ思ひ入れ。
江戸　お尋ね者の駄右衞門に、但し一人は權八か。
與作　よし又、詮議の二人でも、皮剝ぎ如きの手に合はうか。痴けた事を。
江戸　合はぬところを、二人はおれが。
ト出刄を持つて打つてかゝる。立廻りよろしく、此うち與作、ありあふ藥罐を目潰しに打ちつける。誤まつて圍爐裏へ落ちて、水は散亂して焚火消ゆる。これにて忍び三重になり、二人は、探り〳〵、包みを脊負ひ、天蓋を持ち、與作は東の花道、駄右衞門は本花道へ別れて行く。江戸兵衛、切り立て切り立て探り、思ひ入れあつて

江戶　取逃がしたか。

ト　これを聞き、東西の二人、一時に天蓋をかむる。これを木の頭。

エ、、いま〳〵しい。

ト　持つたる出刃を口に咬へ、キッと尻をからげる。二人は別れて向うへ走り入る。これにて舞臺へ一面の黒幕振り落す。

本舞臺一面の黒幕。前通り、晝心に土手松の吊り枝。上の方、影を見せたる切り山。よき所に誂らへの夜啼き石。すべて東海道、日坂宿、並木の體。山颪しにて道具納まる。

ト　向うより人足四人出て來り

人足　コレ〳〵、いま聞く通り、由留木の御名代、官太夫さまのお通り。邪魔になる夜啼き石。サア〳〵、早く取除けよう。

三人　さうしませう〳〵。

ト　捨ぜりふにて、てんでに鋤鍬にて石のまはりを掘り返し、いろ〳〵捨ぜりふにて、右の石をば手繰りにして下座へ持ち行く。山颪しになり、向うより以前の犬、赤子を咬へしまゝ走り出る。後よりおはぎ、これを追ひ駈け、出て來り

はぎ　この畜生め、そのマア赤子を、どこへ咬へて行きやアがる。此方へ寄越しやアがれ。

ト　追ひ廻す。これにて犬は下座へ入る。おはぎ、矢張り追ひかけて入る。禪のツトメになり、向うより逸平手負ひになり、葛籠を脊負ひ、丹藏と立廻りながら出て來り

丹藏　サア。素奴め。キリ〳〵姫を渡してしまへ。

逸平　ヤア、大切なる姫君樣、やはかおのれに渡さうか。

丹藏　キリ〳〵此方へ

逸平　なにを。

ト　矢張り禪のツトメにて、兩人立廻り、いろ〳〵あつて、丹藏も手を負ひ、逸平も深手の體にて、葛籠へ撞となつて

逸平　エ、、口惜しい。無間山までこの葛籠、姫を隱して與作に渡し、立歸らんと思ひしに、この深手では、とても存命。モシ、重の井さま。

ト　丹藏、起きあがつて

丹藏　うぬ、その葛籠を。

トかゝるを又立廻り。逸平、丹藏を見事に切つて捨てる。丹藏、其まゝ谷へ落ちる。逸平も、タヂタヂとなつて谷へ落ちる。直ぐに、ドロ／＼になり、前の石、コロ／＼ところげ出てよき所へとまる。石の中にて赤子頻りに泣く。これより薄ドロ／＼、一つ鉦の合ひ方になり、件の石、バラ／＼と碎け、中よりお松の幽靈、件の赤子を抱いてスックと立つ。この時向うより銅八盜人の拵らへにて、ウッウッ出て來り、本舞臺へ來て、フト幽靈を見て、吻りして「アッ」と倒るゝ。此うち寢鳥、凄き合ひ方。銅八、やう／＼心附き

銅八 アヽ、こいつは堪らぬ／＼。

ト立たうとしても、腰の立たぬ思ひ入れ。やう／＼花道の方へ行きかける。お松の幽靈「モシ／＼」と思ひ入れにて呼び返す。これにて銅八、慄へ／＼側へ來て

アヽ、どうぞ、助けてくれ／＼。

ト云ふを、お松の幽靈、赤子を出して、この子を頼むといふ思ひ入れ。銅八、呑み込んで

なんだ。この子をおれに頼む。ムウ。隨分頼まれてやるから、早く、消えてくれ／＼。

トまた行きかゝる　お松の幽靈、思ひ入れにて何やら云ふ。銅八、これを聞いて

ムウ。日本駄右衛門といふは與八郎。その葛籠の中には與八郎どのへ行く、重の井姫が入つてゐるから、どうぞこの葛籠を頼むといふのか。……そして、その葛籠はどこにある。

トこれにてお松の幽靈、指さし教へる。

よし／＼。その駄右衛門といふはおれが親方。そんならこれから、この赤子と、葛籠を屆けてやらう。

ト怖々側へ寄り、赤子を抱き取り、葛籠を脊負ひ、立たうとしても立たれぬ思ひ入れ。これにてお松の幽靈嬉しやと思ひ入れ。ドロ／＼烈しく、掛け煙硝にて消える。銅八、ムックと立ちあがり、思ひ入れあつて

そんならこれからお頭へ。さうだ。

ト山颪しになり、一散に向うへ走り入る。これにてよろしく

直ぐに引返す。　　　幕

本舞臺、三間の間、遠州無間山の體。草葺きの世話屋體。正面、納戸口、押入れ。上の方、窟、松の大

樹、譃らへの釣り鐘を掛け、上手、障子屋體。いつもの所に門口。これに名物飴の餅の看板。下手に誂の壺、重箱、勝手道具を取散らし、舞臺前岩組み、谷の切り穴。在郷唄にて幕明く。

ト爰に旅人の仕出し、腰を掛け、餅を食うてゐる。小萬、世話女房にて茶なぞ出してゐる。菊川の友六、やつしの形、上の方の釣り鐘へ撞木を拵らへ、綱を附けて、撞くやうに仕掛けてゐる。

小萬　どなたも、お茶を上げませうかえ。

旅人　イヤ〳〵、もうようござる〳〵。わしらは日坂泊りぢや。そろ〳〵行きませうか。

小萬　まだ日高でござりまする。ゆるりとなされませ。

旅人　大きに長居しました。イヤ又、名物の飴の餅、旨い事でござります。

皆々　サア〳〵、行きませう〳〵。

小萬　ようお出でなされました。

ト てんつゝになり、旅人は、ワヤ〳〵云うて向うへ入る。小萬、友六を見つけ、駈け寄つて

これはしたり。お前、いつの間に、其やうな悪い事なされます。

友六　コレサ、わしもさう思つたが、この頃はあんまり工面が悪いから、無間の鐘を撞いて、ちつと工面を直すつもりで。

小萬　イエ〳〵、あの鐘はナ、此方の内の預かり鐘、撞く事はきつい御法度。殊に、その鐘撞くと、未來で蛇が責めるといふわいな。

友六　ナニ、その蛇怖くないの。泥鰌汁の好きなおれが、恐れてなるものか。富を突くよりは早手廻しと、そこでソツと撞木を拵らへ、持つて來てのこの仕事。お前、だんまりでゐなさい。その代り、お前に喜ばせる事がある。

小萬　今日は中山寺の觀音樣へ、あの與之助を連れて、行かれましたわいなア。阿母は留守かえ。

友六　そんなら待つてゐて話しあり。コレ、必らず、あの撞木を附けた事は、沙汰なし〳〵。

小萬　ハテ、悪てんがうも程があるわいなア。

ト 在郷唄になり、向うよりお浪、老けたる拵らへ、やつし形の與之助、からくり花火を大分持ち、出て來り、直ぐに門口へ來り

なみ　娘、いま戻りましたわいの。

小萬　オヽ、母さんか。與之助も、今日は天氣がようて、御參詣が、さぞあつたでござんせうな。
與之　コレ〳〵、母さん。わしや此やうなよい花火を、買うて戻つたわいなう。
なみ　イヤモウ、買はにやならぬと云やつて、たうとうわしをねだり出したわいの。
友六　モシ、母さん、後生參りかえ。
なみ　オヽ、友六さん、なんと思うてござんしたえ。
友六　わしはこなさんに、ちと無心があつて。と云つて別の事でもないが、あの聟の與作どの、元は武士なれど、酒の上が悪いゆゑ、お前の心に違ひ、この間は家出して内へも戻らず、ところへあの親仁の左次兵衛が、息子與作が身の上の詫び、親子連れで今朝から來て、是非頼むと云ふゆゑに、どうぞこなさん、料簡して、やらんせいの〳〵。
　トこれにてお浪、小萬、顔見合せ、思ひ入れあつて
なみ　そりやモウ、いかいお世話でござんすが、とても、あの與作が酒は直りますまい。ナウ、娘。
小萬　アイ。いはゞ、わたしが氣に入らいで、置去りにしてござんした與作さん。わたしや何とも申されませぬ。兎角、母さん次第でござんすわいなア。
友六　さうであらうて。併し、酒の上の事はわしが請合ひ。いづれ連れて來ます。必らず、頼みます頼みます。
なみ　ア、モシ、折角のお頼みぢやが、とつくりと娘とも相談いたしたその上で。
友六　ハテ、今日は幸ひ、日もいゝから、何分にも頼みます。いま連れて來ますぞや。頼みます。
なみ　これはしたり。それぢやというて
友六　頼みましたぞや〳〵。
　トてんつゝになり、一散に向うへ入る。
なみ　あのマア人わいの。得心もさせいで、エヽ、滅相な。……とはいふものゝ、家出してより餘程の間、さぞマア其方は。
　ト小萬を見て思ひ入れ。
此やうには云ふものゝ、常から悪氣の無い與作、酒を飲むと心が荒うなつて、親、女房の見界ひなう、殊に、親の左次兵衛は、東海道で名うての目明し、何かにつけて心が置かれ、その子の與作は、與惣兵衛さまに奉公してわしも昔はあなたに勧め、其方は都で藝子して、馴染んだはあの與作。不奉公ゆゑお邸はお暇、殊に、若旦那與

八郎さまの御子息、あの與之助さま。

小萬　いつぞや關の地藏で、お目にかゝつたその日より、お連れ申して世間へは、我が子と見せて朝夕に、與之助どうせいかうせいと、お主のお子を我が子のあしらひ。殊更昨夜與八郎さま、葛籠の中には重の井さま、浮世を忍ぶお二人が、お出でなされて隱居家に。……かゝる時節にあるからは、御家來筋の與作どの。

なみ　成る程、歸してやるも力になり。さはいへ、今に短刀の、求める金も……アヽ、苦の世界ぢやなア。

ト思ひ入れ、てんつゝになり、向うより友六、天蓋、尺八などを持ち、左次兵衞、二升樽を持ち、百姓二人附添ひ、後より與作、やつし形、悄げたる體にて、ワヤ／＼云うて出て來り

左次　これは友六どの、大きにお世話になりまする。

友六　ナニサ、お互ひの事だ。

與作　モシ／＼、お前方。何かと御苦勞にござりまする。

百姓　モウ／＼、酒は飲まつしやらぬがよいぞや。

ト此せりふ云ひながら皆々、門口へ來り

友六　サア／＼、阿母。連れて來たぞや／＼。

ト內へ入る。

左次　これは阿母、大きに御無沙汰を致した。お變りもなうて、めでたい。……コレ／＼、伜、此方へ入つてゐろ入つてゐろ。

トこれにて與作、內へ入り、百姓の後へ廻り、モヂモヂしてゐる。

なみ　お前も御息災で、おめでたうござります。

左次　イヤモウ、息災ばかり、年寄つて苦勞しまする。お袖めは家出する。姉のお松は生さぬ仲。藁の上から貰うた與作は、爰の內へ入り聟させ、生れついての惡酒で、皆樣のお世話といひ、わしも、だん／＼と意見して、眞人間になつたゆゑ、詫び言ながら連れて來ました。コレコレ、小萬、阿母の手前、執成しを、賴む／＼。

小萬　アイ／＼、主の惡酒さへ直つてなら、母さんおやというて、なんのマア。

友六　さうとも／＼。コレ、與作どの。爰へ來て、阿母に挨拶さつしやれ。サア、爰へ出さつしやれ。

與作　ハイ／＼。こりやマア、どなたも大きにお世話でござりました。……コレ、小萬、てまへも阿母の手前、賴むぞよ。……モシ、母さん、わしはモウ、あの位ゐ好きな酒を、金毘羅樣へ大願をかけ、モウ／＼、これ程もたべ

ませぬ。爰のお内を出ましてより、あそこや爰にごろついて、常から好きな尺八で、虚無僧になつて旅稼ぎ。いづくも同じ鳥の啼く音と申すが、手前の内ほど、結構な事はござりませぬ。モウ〳〵、生れ變つたやうになりました。阿母、どうぞこれまでの事は料簡なされて、お内へ置いて下さりませ。……オヽ、與之助か。大きくなつたな。

ト手を突いて挨拶する。

小萬　あのやうに云うてぢやから、よもや間違ひもござんすまいわいな。

なみ　イヤモウ、あの與作が酒さへやめてくれゝば、申分の無い生れ。それ聞いて、わしも、安堵しましたわいの。

友六　この人も大きに、うんぜうした樣子でござるて。コレ、與作どの、サア〳〵、虚無僧の道具一式、渡しましたぞや。

ト持つて來りし品を、よき所へ置く。

左次　時に、魚でも買つて來るところぢやが、今日は不漁ゆゑ、コレ、この酒は、悴には不向きぢやが、わざとお神酒に上げて下され。

ト二升樽をそこへ出す。

小萬　これはしたり、酒で不首尾な主の土産に、このマア樽は。こりや貰うたも同然と云ふ所でござんすが、酒返しはせぬものといへば、こりや請けて置きませう。ナア、母さん。

左次　それは忝ならござる。悴が事が濟みさへすれば、直ぐにお暇といふ所ぢやが、この邊に用もあれば、世話ながら、今宵は泊めてもらひませうか。

なみ　アヽ、そんならお前は、今宵泊つて。……蚊帳も狹いが、それ合點で。

左次　イヤモウ、蚊に喰はれても、めげる事ぢやござらぬわいの。ハヽヽヽヽ。

小萬　それはさうと、お前、もう御時分でござんせう。何が無うても、お茶漬なりとも。

左次　それは忝ない。御馳走になりませうか。……コレ、悴、われも空腹であらうぞよ。

與作　アイ。久し振りで勝手へ參り、お前の相伴いたしませう。

友六　コレ〳〵、必らず酒はならぬぞ。

與作　キツと禁酒でござります。……どなたも晩ほど、お

禮に參りませう

百姓　なんの〳〵。それには及びませぬ。

小萬　そんなら、こちの人。舅御樣。

左次　ドリヤ、御馳走になりませうか。

ト唄になり、小萬、與之助の手を引き、左次兵衞、與作附いて奥へ、友六、百姓は捨ぜりふにて向うへ入る。お浪殘り、思ひ入れあつて

なみ　今、與作が、禁酒したとは云やつたが、持つて生れたあの惡酒、どうも合點がゆかぬ。殊に、土產と舅の持參のあの酒も、見るは目の毒、幸ひあそこに手桶の水、この酒と入れ替へて。オヽ、さうぢや。

ト合ひ方になり、思ひ入れあつて、上の方の裏手の手水鉢の水を明け、その中へ樽の酒を程よく明け、手桶を取つて來り、柄杓にて樽の中へ水を入れて、思ひ入れあつて、元のやうにして

これで、よし〳〵。あの酒好きな與作、うつかり酒は。……それにしても隱居家に、お忍びなさるお二人樣、もし姬君の大事とあらば、不便ながらも。

ト思ひ入れ。この時、下の方より歩き一人出て來り

歩き　コレ〳〵、阿母。お尋ね者の事について、村の會所へ、ちよつと、ござりませ〳〵。

なみ　アイ〳〵。そんならちよつと、聟どのや娘に話して。

歩き　ハテ、急な事ゆゑ、お前、來て下さりませ〳〵。

なみ　ハテ、マア、せはしない。

ト歩き、お浪を引ッ張つて下の方へ入る。てんつゝになり、向うより赤羽屋五郎作、町人の形にて、島田の萬九郎、廣袖やつし、一本差し、大弓に矢を添へ、擔ぎ出てくる　この時トヒヨになり、空へ件の鷹、足に財布の摑みしまゝ舞うてくる。兩人見て

五郎　コレ〳〵、萬九どの、わしはこの間から病氣ゆゑ、掛合ひがしにくい。そこで、如才のない貴樣を賴む雷丸の金の事は、こなたの見込みで。

萬九　ようござります。どうでお前の掛合ひでは解ませぬ。わしが手ひどく今日中に、方を附けて進ぜませう。

五郎　何分貴樣に任せますぞ。……それはさうと、その大弓は何でござる。

萬九　お前もお國にゐながら。この遠州では、大弓御免でござる。わしもこの間、町人の癖に、稽古します。そこでその的場へ、歸りに出かけて行くつもりサ。

五郎　アヽ、さうでござるか。併し、大的を射ると違ひ、

萬九　鳥などを射る事は、まだ出來ますまいの。空飛ぶ鳥でも、そりやア見事な事サ。
　ト件の鷹を見つけ
五郎　アレ／＼、あの空へ、鳶か、鷹か、何か足へ掴んで飛んで來たが、あれをこなた
萬九　そりやア隨分射るね。あの空の鳥を、射て見せうか。
五郎　そいつは、見たい／＼。
萬九　先づあの鳥を、的に見立て
　ト空を見て思ひ入れ、弓に矢を番ひ、切つて放す。弦音して、鷹の足に掴みし財布の紐を射切り、財布は上の方釣り鐘の龍頭の上へ落し、鷹は空へ飛び行く。
五郎　イヤア、きついものだ／＼。
萬九　イエ／＼、鳥は射落さねば殘念。併し、足に掴んだものを、どこへか落して行きましたが。
　ト方々見る。
五郎　ナニサマ、何かそこらへ落したと見える。
萬九　サア、參りませう／＼。
　ト門口へ來る。

五郎　サア、阿母、來ましたぞや／＼。
　ト兩人、内へ入る。小萬、出て來り
小萬　アイ／＼。どなたでござります。
　ト兩人を見て
こりや五郎作さま、今日も又。
五郎　相も變らず來ましたは、雷丸の三十兩。今日解らねば、これ／＼。
　ト懷より袱紗包みの、短刀を出し
いま先樣へ賣りに行くのよ。阿母は留守か。返事を聞きに來ました。
萬九　金谷の宿に逗留の、官太夫さまへ持つて行きかけ、寄りましたは、五郎作どのでは解らぬから。そこでこの萬九郎が、面役で賴まれて來ました。サア、小萬どの、どうで出來ない金なれば、淸く向うへ賣らせるがよいわサ。
　トよき時分、與作出て窺ふ。
小萬　アヽ、モシ／＼。その短刀を外へ賣る位ゐなら、此やうに譯を云うて、お賴み申しは致しませぬ。どうぞ四五日、日延べなされて。
萬九　どうして／＼、そりやアならぬ話しだ。さうあらう

と思つて、わしが來たのだ。モウノ＼、待つだけ待つたら、云ひ分はあるまい。サア、五郎作さん、賣つて來ませう。

五郎　さうしませうノ＼。

ト行きかける。

小萬　ア、、モシノ＼。そこをどうぞ料簡なされて。

兩人　エ、、ならぬといふに。

ト振り切つて行かうとする。この時、與作、前へ出て

與作　ア、、モシノ＼、お待ちなされませ。

兩人　ムウ。こなたは誰れだ。

與作　ハイ、私しはこの家の入り聟、與作といふ者でござりまするが、今、云はしつた雷丸は、阿母の爲にも大事の主人、尤も親旦那は不慮の横死、若旦那のお行くへも知れねども、いはゞ、わしらは家來筋、一合取つてもわしも武士、その賣買ひのある事を、萬吏、マヂノ＼見ても居られませぬ。玆の道理を聞分けて、あの短刀は阿母へ、どうぞ買はせて下さりまし。

萬九　そりやア尤もなお賴みだ。何か、貴樣がアノ入り聟の與作どのか。

與作　左樣でござります。

萬九　五郎作さん、いゝ男だね。

五郎　さうサ、男はいゝが、大の惡漢。評判の惡なますサ。

ト思ひ入れあつて

萬九　モシ、こりやアお前、お初にお目にかゝりましたが、わしは萬九郎と申す者、五郎作さんに賴まれて、斷わりに來ましたが、聞けば、お前もお侍ひさうなが、今のやうに云ひなさる事なら、そりやア向う方を斷つて、お前の方へ賣りませうが、今その金が參りやすかえ。

與作　サア、そこでござります。金といふては、只今には。四五日の日延べの事を

萬九　措きなさいな。なんの事だ。買はせろと云ふから、此方も向うを變替へて、金はと云へば、日延べとは、そりやア、お前、解らない話しだ。よしなさい。退いてゐなせえ。なんの事だ。侍ひの、武士だのと、男ばかり立派で、おへねえ間拔けぢやアないか。

トこれにて與作、思ひ入れ。五郎作、見て

五郎　コレノ＼、腹が立つなら早く爰へ、金を出して買はツしやい。

萬九　金が無くば、退いてございなノ＼。

小萬　コレイナア、こちの人、お前の挨拶でも、あの楽は、

待たぬかいな〳〵。
與作　サア、今のやうに云はれては、皆あの衆が尤もで、
おれも仕樣が
小萬　サア、尤もでござんせうが、さう云うてはお主樣へ、
わたしも、母さんも立たぬわいな。お前も、腑甲斐な
い。……モシ〳〵〳〵、お二人さん。いま申しまする通
り、あの品が外へ參りましては、お主人樣へ主も、わた
しも。
五郎　コレ〳〵、その主人は與惣兵衞とやらいふ人。その
主人は死んだぢやござらぬか。
萬九　息子はあつても日蔭者。どこへ義理があるものか。
コレ、それともに、キッとした仲人が入つて、いつのいつ
までには買ひますから、それまで待てと、男らしい者が
出さへすりやア、話しがならうが、ナニサ、あのやうな
間拔けが出て、あれでも男か。イヤ、大笑ひだ。
ト小萬、酒樽を見つけて思ひ入れ。
小萬　アヽ、モシ〳〵。左樣なら、女のわたしゆゑ御不承
知。それも尤も。キッと致しました仲人を入れませう程
に、その時どうぞ。
兩人　それがあるなら、話しを直して。

小萬　アイ。ちつとお待ちなされて下さりませ。
ト合ひ方になり、門口へ出て與作を招き、件の酒樽を
持ち行き、この酒を飲んで挨拶してくれと小聲になり
賴む。與作、恟りして
與作　エヽ、滅相な。おれは金毘羅樣へ一生、酒は
小萬　オヽ、さうでござんせうが、いま聞かしやんす譯ゆ
ゑに、一口飲んで、
與作　恐ろしや〳〵。どうしてそんな事が。
小萬　ムウ。そんならお前、常から云はしやんした、御主
人の事は思はずかえ。
與作　ハテ、御主人は大切ぢやワ。
小萬　そんなら飲んで日延べの事。
與作　それぢやというて。
小萬　さうでござんせうが、わたしが願うて止めた酒、そ
れをまた破らしやんすは、わたしが賴み。どうぞこの酒
飲んで下さんせいなア。
與作　成る程なア。神佛の罰よりも、恐ろしいは主人の
罰。慾に目の無い親仁どの。おれがお主は與惣兵衞さ
ま、かゝりや繫かる姑も、元は丹波の矢ッ張り由緣。
こりやモウいつそ、願酒を破つて。

ト樽の酒を茶碗へつぐ。

小萬　そんならお前、飲んで下さんすか。

ト手を合せる。與作、グツと飲むと、水なるゆゑ、悄りして

與作　ヤア、こりや酒では

ト云はうとして、キツと氣を變へ、引受けて飲む事。

小萬　エヽ、ようその酒を。

與作　まだ〳〵飲むワ。酒さへ飲めば千人力。大男でも負けぬぞ。

ト萬九郎、五郎作、内より見て

萬九　見れば與作は、無性に煽るな。

五郎　ア、酒を飲んでは、いつもの地金。

萬九　事の無いうち仲人は

五郎　サア〳〵、小萬、仲人は、どうぢや〳〵。

小萬　ハイ〳〵。仲人は只今支度最中でござります。

五郎　なんだ支度だ。

萬九　支度も贅澤もいらぬワ。その仲人を、出せ〳〵。

小萬　サア、その仲人は。

ト此うち與作、無性に飲む。小萬、早う出てくれと仕方する。與作、内へ入り、眞中へ出て

與作　仲人はおれだ。

トどつかり坐る。

兩人　ヤア。

與作　その仲人は、不肖ながらわしサ。おれ樣だ。二人の手合ひ、仲人だぞ〳〵。

ト醉うたる體にて云ふ。

兩人　コレ〳〵、アノ仲人は、矢ツ張り與作か。

小萬　外といふても頼むお人、主を頼んで今の對談。

與作　わしがするのだ對談を。コレ〳〵、二人の手合ひ、しつこい事だが、待つて下さい。わしが頼みだ。待つてもらはう〳〵。

萬九　コレ、貴樣が仲人か。待てと云ふなら、待ちもしようが、いつまで待つのだ。

與作　明日まで。

兩人　ナニ、明日まで。

與作　オヽ、明日が間違つたら、明後日。それが違つたら、その先へ、だん〳〵遂りに待つてもらはう。その積りに頼むぞえ。よしか〳〵。

ト始終誠の生醉ひの思ひ入れ。

萬九　コレ〳〵。この男は人を何だと思ふ。そんな解らぬ

仲人があるものか。とんだ飲んだくれだ。
五郎　こいつは又、酔つたな〳〵。
與作　どうして酔つた。……酔つたらどうする。酔つて云ふぢやねえが、ほんの事だが、其また金が出來ずばどうする。それをならぬといつて、外へ賣つて見ろ。只置くものか。唐變木め。
萬九　ナニ、此奴は大風な事をいふな。外へ賣つたらどうするえ。
與作　やつて見ろ。只置くものか。
萬九　置かぬといつて、どうしやアがる。
與作　斯うするわえ。
　ト莨盆にて頭を打割る。
萬九　アイタヽヽヽ。
五郎　どうした〳〵。
萬九　頭が割れた〳〵。
小萬　コレイナア。あの人の頭を。
　ト與作を止める。
與作　どうともしろと吐かしたから、どうともしたのだ。
　コレエヽ、おれも以前は武士の飯を食つた與作だ。今でこそ狩人よ。鐵砲も御免で渡つてゐるぞ。それに又、ふざけた事を吐かすと、コリヤ、この鐵砲で定九郎もどきだぞ。サア、待ちまするといふ一札を書け。書かねえとこれだぞ。
　ト後の鐵砲を取つて火繩を附け、二人の方へ筒先を向ける。兩人、驚ろき
兩人　アヽ、コレ〳〵。鐵砲で撃たれて堪るものか。
與作　一札を書かねえと、これだぞ。
小萬　アヽコレ、また例の悪酒。併し、その鐵砲で
與作　彼奴等二人を並べて置いて
兩人　アヽ、コレ〳〵。云ふ通りにしようから、その鐵砲は。
與作　そんなら、書くか。
兩人　アヽ、書きます〳〵。
與作　書くなら、おれが名宛てにして、外へ一切賣るまいといふ、その一札に印形しやれ。
五郎　それでは貴様が十分だ。
兩人　どうもそれは。
與作　書かぬと、これだぞ。
　ト鐵砲を向ける。
五郎　書きます〳〵。

萬九　早く書かッし。

五郎　アイ〳〵、書きます。

ト矢立の筆にて鼻紙へ、サラ〳〵と書いて、爪印なし
て

ハイ〳〵。即ち爪印。

與作　これでよし〳〵。金が出來たら、跡から行かう。

ト取つて

五郎　そんならわしらは、

萬九　島田の宿で待つてゐよう。

與作　必らず賣るな。

兩人　どうして〳〵。……イヤ、とんだ證文を取られた。

ト唄、時の鐘になり、兩人、向うへ入る。小萬、思ひ
入れ。

小萬　コレ〳〵、こちの人。酒を留めたはわたしが誤り。
切ない時の神頼みと、神樣への僞りも、いはゞ、お主と
親の爲。サア、ちつとも早く金毘羅樣へ、申し譯して下
さんせ。

與作　エヽ、打ッちやつて置け。ナニ、酒をやめるものか。

小萬　これはしたり。ちよつと嗽ひして神樣へ、申し譯し
て下さんせ〳〵。

與作　エヽ、よしやれよ〳〵、

ト思ひ入れ。小萬、手水桶の柄杓を取つて、水と心得
差出す。與作、捨ぜりふにて、思はず柄杓の酒にキッ
と心附き

ヤア、こりやコレ、酒を。

小萬　エ。

與作　ア、まだあるぞ〳〵。

ト樽を振つて見て思ひ入れ、向うバタ〳〵。與作、酔
うたる體にて寢る。時の鐘になり、栗原丹藏、ぶッさ
き羽織、半纏、股引、大小の姿にて、捕り手四人附き
添ひ、走り出て來り

丹藏　ソリヤ。

四人　動くな。

ト取巻く。

小萬　モシ〳〵。こりや、どうなされます〳〵。

丹藏　ヤア、とぼけな、おのれ。この家の内に、お尋ねの
日本駄右衞門、まつた女は重の井姫、隱まひあること慥
かめて、召捕りに向つたり。キリ〳〵二人を

四人　渡すまいか。

小萬　イエ〳〵、どうして左樣なお尋ね者を

丹藏　ヤア、出さぬに於ては、奥へ踏ん込み、一詮議。

ト此うち奥より以前の左次兵衛、與之助の手を引き、出て來り

左次　モシ〳〵、旦那、家探し爲ても容易に知れぬ。此奴は馱右衛門が悴でござれば、此奴を責めて白狀させなば

小萬　ヤ、そんならお前も目代となつて

左次　犬に入り込むこの左次兵衛。この小僧めを苛なんで。

ト　か〻る。この時、與作起きあがり、左次兵衛の足を取つてのめらせる。悔り、起きあがり

ヤイ、悴。われはなぜ、親を投げたのだ。

ト生酔ひの思ひ入れあつて

與作　コレサ、こなたはあんまり、まんがちといふものだ。今日爰へ詫び事して歸つたも、有やうはこの内に、お尋ね者を隱まつたと聞いたから、詮議をしようと、こなたがおれに頼むゆゑ、こいつはまんざらでもない仕事と、あやまり廻つて、爰の内へ、お尋ね者を詮議に來たのだ。それにこなたは、わしにも構はず、騒ぎ廻るは、一人で褒美にする氣か。そいつはしよにんだの。貴樣はその氣でも、わしは不承知だワ。ハテ、初手から半口乘つての話しだ。さうぢやアないか。ナア、小萬。

小萬　ヤ、そんなら急に詫び事して、内へ歸つてござんしたは

ト酔うたる振りにて管を捲く。

與作　當ての無い事をするものか。モシ〳〵、旦那。この小僧は、わしが子だと世間へ見せかけ、實は與八郎が餓鬼だ。して見れば、表向きのおれは親だ。そんなら親の勝手にする事よ。わしが云ふ事に無理はあるまい。そこが生酔ひ本性たがはず。……よしかえ、もう一杯やりませう。

ト樽を引寄せ、飲みか〻る。左次兵衛、見て

左次　あんまり見事だ。おれも一杯。

ト寄るを突き退け

與作　どうして〳〵、酒にかけちやア親子の見界はない。誠に親子他人の始まり。……もう一杯飲まう。

左次　成る程、酒を飲み出しては、親にもまさつた惡なまだ。コレ、そんなら餓鬼を責め苛なんで、お尋ね者の在所を云はせろ。

丹藏　いよ〳〵この家にうせるなら、役所へ知らせる合圖には、幸ひこれなる花火の煙硝、さしくべ見せなば十重廿重、取卷く圍みの狼煙同然。

左次　して又、此方で二人とも、召捕つたら、その時は。
丹藏　それを知らすは無間の鐘、數も五つに打つたなら、
その時こそは圍みも開かん。
左次　然らば親子、この家に頑張り
丹藏　身共は山根の役所を固め、遁がさぬ手配り。左次兵
衞殘つて、油斷なく。
左次　とくと承知いたしました。
丹藏　キツと役目を云ひ附けたぞ。
ト左次兵衞へ花火を渡す。暮れ六ツの鐘になり、丹藏、
家來を連れ、向うへ入る。
與作　もうお歸りかえ。ようお出でなされました。ハヽヽ
ハヽヽ。……サア、これからは、小倅、われに又、父さ
まが聞く事があるぞ。
トよろ〳〵して與之助にかゝる。小萬とめて
小萬　アヽコレ、なんでこの子を。
與作　やかましいわえ。たかゞ、盜人の駄右衞門の子悴
だ。おれがふん縛つて、聞く事があるから。
ト與之助を引出して縛りあげる。
與之　アレ、父樣、手が痛いわいの〳〵。
小萬　これはしたり。その子がなんで御存じであらう。滅
相な事して下さんすな。母さんも早う戻つて下さんせい
なア。
ト此うち左次兵衞、行燈へ火を附ける。下の方よりお
浪、走り出て來り、この體を見て
なみ　ヤヽ、なんでマア、與之助を。
小萬　モシ〳〵、母さん、折角留めたあの酒を、よんどこ
ろなうわたしが勸めて、それゆゑ例の、病が起つて。
なみ　して、その酒は、どれにあつたを。
小萬　ソレ、その樽を與作さんが。
なみ　あの酒なれば、入れ替へ置いたに。
ト云はうとする。
與作　どうしたと。
なみ　合點のゆかぬ。
ト思ひ入れ。
小萬　そんなら母さん、酒というたは。
ト云ひかける。
與作　エヽ、口をたゝくな。
ト跡を云はせず、突き飛ばす、小萬、タヂ〳〵とし
て、思はず、舞臺前の谷間へ轉げ落ちる。與作、思ひ入
れ。

ヤアコレ、思はず小萬を
なみ　ヤヽ、娘を谷へ。
ト蹴ろくお浪を引附け
左次　エヽ、邪魔になる婆アだ。てめえも一緒に。
トお浪を有りあふ繩にて縛り
爰らの社へ蹟着。
與作　小僧も婆アも一緒にして。
左次　合點だ。
ト兩人をよき所へ縛り
さて、これからは二人が居どころ、
與作　根太板までも剝がして在所を。よしかえ〳〵。
左次　承知だ〳〵。ドリヤ、彼奴等が。
ト合ひ方になり、奥へ入る、お浪、身を揉みあせつて
なみ　エヽ、こりやマア、おのれはなア、お主樣のお子を
勿體ない。まだその上に御恩のある、お二人の在所を云
へとて、この子まで、如何なる惡魔が見入つたぞいの。
與作　措きなさい。女房が飲んでくれろといふから飲んだ
酒。持つたが病だから、この位ゐな事は當り前サ。これ
からはこの餓鬼を、問ひぜうにかけて、それで云はにや
ア、ぶんのめしても云はせるワ。なんぞくらはせるもの
か。
トあたりを見て、竹の皮の卷いたるを見つけ、見世の
先より取つて來り
ア、いゝ薪ざつぱがあつた。サア、昨夜、爰の内へ與
八郎といふ、てめえの父樣、重の井といふ母樣をば、連
れて來たであらうが。どこに隱れてゐる。それを云へ、そ
れを云へ。
與之　知らぬわいなう。
與作　ナニ、知らねえ事があるものか。吐かしやアがれ、
云はにやア、うぬをこれで。
ト竹の皮にてくらはす事。此うち左次兵衞出て
左次　どうだ〳〵。云はずば薪でぶちのめせ。それで吐か
さずば、その餓鬼を婆アが見る前、蚊に責めさせろ。有
やうは、したみ酒を持つて來たも、その道具に使ふつも
りよ。あの酒を吹きかけて、蚊責めにしな〳〵
與作　ア、なにか、あの酒を吹きかけるのか、ア、酒
のすたるが惜しいものだ。
ト與之助を引附け
サア、これからは蚊責めにするぞ。丁度殘つたこの酒を、
小僧が體へ吹ッかけて。

ト樽の水を茶碗に明け、頭より惣身へ吹ツかける。

左次　さうだ〳〵。もつと吹ツかけろ〳〵。

與作　ア、、餓鬼にかゝつて大汗になつた。手足の汗へ水でもかけて。

ト手水桶へ行き、柄杓にて件の酒をすくひ、両腕へ掛ける事。與之助の側へ寄り、樽の水を吹きかける。

なみ　エ、、年端もゆかぬその子をば、むごたらしい。そんなら矢ツ張り誠の酒。飲んでの業とはいひながら、それ程までに心も荒う

與作　これでも云はずば松葉燻し、早く云へ〳〵。

與之　知らぬわいなう。

ト此うち、與作の惣身へ蚊夥しく群がる思ひ入れ。

與作　ア、、情の剛い。サア、松葉燻しだ。

ト手前が蚊に責められるこなし。

左次　思ひ入れ、燻せ〳〵。

ト與作、蚊遣り火鉢へ松葉をさしくべ

與作　サア、云はぬと、松葉燻しで云はせる。

ト團扇にて煽ぐ。與之助の方へ行かぬやうに、左次兵衛の方へ煽るゆゑ、煙にむせび、目の見えぬ思ひ入れにて

左次　これは煙い、イヤ、目口が明かれぬ。煙いワ〳〵。併し、小僧を燻し殺すな。

ト無性に咳をせき、煙にむせぶ。お浪心附かず、與之助が苦しむと心得。

なみ　ア、コレ、あの人でさへあの苦しみ。さぞやあの子は苦しからう。モウ〳〵、この苦しみを見る上は、あの子とわしがこの縄目、解いてさへ下さつたら、成る程、主人の與八郎さま、重の井さまの在所も隠さず、

左次　白状すると、云ふのか〳〵。

與作　姑が白状さつしやれは、縄目は解いて、ナウ、親仁様。

左次　さうとも〳〵。サア〳〵、解くから、白状さつしやい〳〵。

ト両人立ちかゝつて二人の縄を解き

兩人　サア、解いたから、二人の行くへを。

なみ　其お二人は庭づたひ、屋の棟離れし隠居家に

左次　さてこそ知れた。伜、ぬかるな。

與作　それで様子が。

ト思ひ入れ。お浪手早く、件の仕掛けし鐵砲をさし向ける。両人驚ろき、與作、有りあふ屏風にて圍ひ

ドツコイ、滅多に。

左次　そんなら婆アは有やうに。

なみ　云うた上には、この婆が、かよわきながらも火蓋を切り、おのれら殺して、お二人の、お命助けて落しやる、その心にて明白に、白狀したる上からは、おのれら二人は。

ト筒先を向ける。與作、飛びかゝつてお浪を突き退け、鐵砲を引ッたくる。

與作　いらざる女のほててんがう。併し、在所の知れたる上は、

左次　詞を番ひし合圖の知らせ。

ト件の花火を取つて圍爐裏へ打ち込む。煙硝火パッと立つ。これにて向うにて竹法螺、太鼓を打つ、此うち向うより萬九郎、友六、身輕に拵らへ、窺ひ〳〵出て來り、下手へ忍ぶ。お浪、與之助を圍ひ

なみ　すりや、役所より、この家の隱まひ者を、洩らさぬ手配り。

ト驚ろく。

左次　伜は其奴ら動かすな。おれはこの家の隱居所の、二人の者をば

與作　親人早く。……もうこの上は

ト左次兵衛を見て、ホロリと思ひ入れ。

左次　ヤ。

ト思ひ入れ。氣を變へ

與作　ござりませ。

ト思ひ入れにて云ふ。

左次　合點だ。

ト暖簾口へ入る。

與作　南無阿彌陀佛。

ト火蓋を切る。筒音高く、左次兵衛「ワッ」と苦しむ。

なみ　ヤ、、與作は親の

與作　思はず打ちしも、隱るゝ駄右衛門。

ト屋體へかゝる。中より日本駄右衛門、百日鬘、黑羽二重、浪人の姿、懷へ赤子を入れ、ツカ〳〵と出る。與作、キッと見て

この程見受けし旅の梵論字。さてはこなたが日本駄右衛門。

駄右　入山津村で思はずも、面會なせしは與作でありしか。

與作　例へ以前は主從でも、今は盜賊、お尋ね者。

駄右　見事、汝が搦め捕つて。

與作　天の綱にかゝつたこなた、遁がるゝ道はござりますまい。

駄右　主に刃向ふ不忠の其方。イデ、某が。

ト與作、切つてかゝる。駄右衛門、抜き合せ立廻り。始終思ひ入れよろしく、與作、駄右衛門へ體を差し附けて

與作　若旦那。刃向ひ立ては養父の義理。一旦濟めば、イザ、與作めを存分に。

駄右　この期に及んで卑怯の一言。

トまた切りつける。

與作　駄右衛門死すれば、開くる圍み。

駄右　ヤ、なんと。

與作　エヽ、お情ない、若旦那様。

トこれより草笛入りの合ひ方。山颪し、掠めてドンドン。

誰れござらうぞ、由留木の御家來、與惣兵衛さまの御實子にて、如何に寶を詮議の爲とはいへど、盗賊、夜盗の配符の廻ると聞きしゆゑ、身は紛らはしき駄右衛門に、見紛ふばかりの旅虚無僧。なれどもお顔は存ぜぬ與作、もし御大事とある時は、あなたに代る下郎が心底。されども拙者にお疑ひ、切りつけ給ふも御尤も。只願はくば山賊の、その世渡りを、若旦那、どうぞ止めて、下さりませい。

駄右　ウム。その心にてありながら、何ゆゑ忰を責め苛み、この身の在所を尋ねしは。

與作　それぞ拙者が養父の慾心、眼くらんで官太夫に頼まれ、あなたのこの家に忍びある事聞き出だし、私しまでを同道なし、召捕らんといふ企みゆゑ、如何はせんと思ふに幸ひ、樽の中には何者か、入れ替へ置きしは酒ならで、水のありしを幸ひに、飲んで酔ひしと姑を僞り、水を酒ぞと與之助さま、敵責めの上に割木の笞。それも痛まぬ竹の皮。悪に根强き親仁を僞り、また姑の口よりも、お二人様の隠れ家を、聞いて力にならんが爲の、命を的の心底は、現在親を鐵砲にて、打ちとめたるがこの身の潔白。親にも代へしお主の大事、とゞはこの身をお身替りと、思ひ附いたる拵らへ事、必らずともにお疑ひ、お晴らしなされて、下さりませ。

駄右　その本心を聞くからは、何をか包まん、さいつ頃、袋井宿にて、不思議と手に入る一通は、雷丸を質入れの、宛て名は即ち八平次、預かる町人、赤羽屋五郎作と

あるこの手紙。

ト二幕目の手紙を出し

我れはこれより箱根山、二所權現へ大願かけ

與作　首尾よう旦那の敵を討つて。

なみ　して又、それなる幼な子は。

駄右　非業に世を去るお松が胎内、胤は名におふ民部之助。
今宵ひそかに官太夫、大井川を渡ると聞く。道に待ちうけ、日頃の恨み。

與作　それぞ幸ひこの鐵砲。

駄右　用意をなして、これより直ぐに。

ト差出すを取つて思ひ入れ。

なみ　でも、あのやうに取卷く上は、圍みを開かす無間の鐘、五ツの數を打つならば

與作　あの鐘撞いて圍みを開かせ、跡に殘つてお尋ねの、與八郎は我れなりと、この身に引受け、あなたに代つて

駄右　すりや、某は勸めに任せ、重の井引連れ、一旦爰を立退かんが、必らずともに雷丸を

與作　氣遣ひなされず、裏道傳ひ。

なみ　道の案内は私しが。

駄右　然らば直さま。……さうぢや。

ト葛籠を脊負ひ、お涙、與之助を連れ、案内して奥へ走り入る。與作、殘つて

與作　あなたを落してやつたれば、圍みを開かす無間の鐘、合圖の五ツを。

ト駈けよつて釣り鐘の綱に取附く。この時窺ひゐたる萬九郎、友六出て

萬九　圍みを開く計略の

友六　その鐘撞かせてなるものか。

與作　邪魔すな。そこ退け。

兩人　所をおいらが。

ト邪魔する立廻り。早めの合ひ方になり、與作、鐘の綱に取附き、兩人支へるをよろしく立廻り、件の鐘を撞く事。ト〻五ツ打ち切る。これにて龍頭より鷹の落せし金財布、前へ落ちる。遠卷きの太鼓、打ちあがる。

與作　嬉しや、圍みを。

ト金の財布を見て

ヤ、こりやコレ、金の入つたる財布。どうして爰には。員數も慥か三十兩。

兩人　それを。

ト取らうとかゝるを切り散らす。兩人、下座へ逃げて

入る。この時、谷間より小萬、藤蔓に取り附いて這ひ
あがり

小萬　コレ〳〵、與作さん。思はず谷間へ落ち、危ふい命を、やう〳〵助かる上に、お前の本心、聞く嬉しさ。

與作　天の與へのこの金は、雷丸を片時も早く、金谷の宿へ持參して。

　トよき時分、お浪、與之助、窺ひゐて

なみ　その役目こそこの姿が、雷丸を受取りに。

與作　然らは母には短刀を、小萬は奥の與作が大小、着替への小袖を。

　ト金をお浪に渡す。

小萬　心得ました。

なみ　和子も一緒に。

　ト時の鐘、山颪しになり、お浪、與之助を連れ、金を懐中して向うへ入る。與作、殘り

與作　御兩所落しやつたれば、我れこそ日本駄右衛門と、命を的のこの身の覺悟。殊さら親を殺せし天罰。御身に代つて潔よう、駄右衛門なりと書き殘し

　トあたりを見廻し、思ひ入れあつて

さうぢや。

　ト獨吟になり、二枚折りの屏風を見附け、硯箱引き寄せ、我れこそ實の駄右衛門といふ事を書き殘す。唄一くさりあつて、奥より小萬、小袖と帶を持ち、出て來り

小萬　モシ〳〵、與作どの、小袖はわたしが預かれど、アノ、大小は、どこにござんすえ。

與作　ハテ、竹を修行のその砌り、脊負うた包みに。

小萬　さうかいな。心が附かいで。

　トまた奥へ走り入る。與作、思ひ入れあつて

與作　この身はかりか、小萬も、姫の

　ト思ひ入れあつて

南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。

　トまた獨吟になり、やつしを脱ぎ捨て、小袖に着替へる事よろしく、奥より小萬、大小を持つて出る。唄一ぱいに切れる。合ひ方、時の鐘。

小萬　サア〳〵、大小持つて來たぞえ。これが卽ちお前の祝ひ。

　ト差出す。與作取つて脇挾み、小萬をヂッと見て

與作　可哀やわれは

　ト小萬、屏風を見附け

小萬 ヤ、こりやコレ、書置。

ト寄るを、與作思ひ切つて、小萬の首をポンと打ち落す。本釣り鐘の頭を打つ。

與作 苦痛をさせじと一思ひ。首に云ひ譯、この書置。

ト誂らへの合ひ方。

ナニ〳〵。「書き殘し候ふ事、我れ武運拙く、幼少より武家に育ち、盜賊夜盜又は海賊となり、四海を横行し候ふところ、實家の大變聞き捨てがたく、紛失の寶を詮議し、父の敵を討たんと心を碎くと雖も、舊惡遁がれがたく、この所に切腹いたすものなり、まつた女房重の井姫、古主の娘に候へば、助けたく存じ候へども、これとてももろともに、最期を遂げたき望みに候ふゆゑ、この所にて共に相果つるものなり。日本駄右衞門、實は丹波與八郎」……これにて思ひ置く事なし。ヤイ、女房、やがて未來で一蓮托生、アラ、心地よや、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト腹へ突き立てんとする。この時、萬九郎、友六、窺ひ寄つて

兩人 捕つた。

ト與作に組みつくを振りほどき、友六を切つて捨てる。

丹藏 丹藏、捕り手、四人窺ひ出て

駄右衞門、捕つた。

萬九 イヤ、この駄右衞門は

ト後より組みながら、云はんとするを、云はせじと、其まゝ腹へ突き立つる。後の萬九郎苦しむ。與作、思ひ入れあつて引廻し

與作 イザ、お役人、

ト丹藏をキッと見ながら、萬九郎を前へ廻し、見事に切つて捨てる。丹藏、繩を出す。

手柄にさつしやい。

トよろしく引廻す。これにて黑幕を振り落す。

本舞臺、正面黑幕。前通り蛇籠。上の方梼示杭、これに東海道金谷宿大井川と記し、浪の音にて幕明く。

ト下座よりお松の死骸、皮剝ぎの板のまゝ簑を掛け、人足二人吊つて出る。後より山形屋義兵衞、孔雀染めの振り袖の濡れしを肩へ掛け、川越し人足四人、何れも丸裸にて、ワヤ〳〵云ひながら出て來り

人一 コレ〳〵、旅人、こなさんは滅法界な。その女の浮き死骸を引揚げて

初演當時發行草双紙所載

三世尾上菊五郎の駄右衛門

四人　どうさつしやる〳〵。

義兵　ハテ、この女の死骸は、わしが八つ橋村で相談しかけたよしみもあれば、不便と思つて、その女の持つてゐたこの振り袖、死骸に添へ、島田の無縁寺へ葬るつもり。そこで貴樣達、川向うまで死骸を越して下されぬか。

人二　エヽ、とんだ事をいふ人だ。殊に、官太夫さまといふ由留木の御家老が、お急ぎゆゑ、夜に入つての此お通り。

人三　うす汚いその死骸、どうして向うへやられるものか。

人四　それとも酒手がしつかりか。それを聞いての話しにしませう。

義兵　これはしたり、佛の爲だ。後生だと思つて、やつて下さい〳〵。

四人　なんの、後生で川越しがなるものか。否でござるぞ否でござるぞ。イケ馬鹿々々しい。

ト呟いて向うへ入る。

義兵　コレサ、そこを佛の爲と思つて。

ト捨ぜりふにて、ワヤ〳〵云うて、義兵衛、持つたる振り袖を花道、切り穴のほとりへ取落し、向うへ皆々入る。知らせにつき、浪の音、時の鐘、舞臺板、だんだんに寄せ板にて、よき所へ引いて取る事。

本舞臺、一面の水船にて、本雨、河水の中へ降つてくる。よき時分、行列三重になり、下の方より金谷宿と書きし高張り二本持ち、川越し二人出て來る。後より袖合羽の侍ひ、槍擔ぎの中間、赤合羽にて四五人、肩車にて水を切つて出て、皆々上の方へ入る。直ぐに三階残らず川越しにて、蓮臺の上へ乗り物を乗せて、捨ぜりふにて出て來り

皆々　水が増したぞ。なぐられるな〳〵。

同　合點だ〳〵。

トよき所へ來る。この時、筒音高く、乗り物へ當りし體にて、煙硝火パッと立つ。皆々驚ろき、

皆々　イヤア、鐵砲が來た。狼藉者々々々。

ト口々に罵る。この時、駕籠の中にて

定之　ヤア、仰々しい。鎮まれ〳〵。

トこれにて皆々鎮まる。乗り物の戸を明ける。中は竹村定之進、剃立て、ぶッさき羽織、野袴の姿にて、刀を杖に思ひ入れあつて

長の道中、路次に於て、斯樣の事もあらんかと存じ、蓋

父に代つて定之進、乘り代りしに、案の如くの飛び道具。
正しくあたりに曲者忍んで。

皆々　すりや、官太夫さまには、

定之　入れ代りしに、危ふい事。

皆々　でも、鐵砲が只今あなたへ。

定之　たはけた事を。乘り物掠つて、丸は水中。

皆々　危ない事を。

定之　別條なければ、島田の宿へ。

ト戸を閉す。

皆々　水が增したぞ。

定之　乘り物やれ。

皆々　ハア、。……浪が高いぞ〳〵。

ト鳴り物になり、皆々蓮臺を荷ひ、上の方へ入る。矢張り本雨降つてゐる。本釣り鐘の頭を打ちこむ。土間の眞中より、日本駄右衛門、以前の姿、鐵砲を提げ、スックと立ち身にて、思ひ入れあつて

駄右　嬉しや、手ごたへ。官太夫めが正しく脇腹。併し忍んで、事の樣子を。

ト歩みより花道へ來り

併し、詮議いたすは治定。この飛び道具を持參せば、却つて難儀。程よき所へ捨て置いて。

ト思ひ入れ。この時下座にて

皆々　狼藉もの〳〵。

トこの聲を聞き、思ひ入れあつて鐵砲を抱へ、ツカツカと揚げ幕へ入る。知らせにつき、正面の黑幕切つて落す。

本舞臺、向う打ぬき、島田の宿の體、遠見に見せたる道具、馬士唄にて道具納まる。

ト爰に江戸兵衛實は水右衛門、件の雷丸を持つて立ち身。半次郎、旅形、大小にて、これを支へてゐる見得。ちよつと立廻つて

半次　こりや、おのれ、大切なる雷丸、與作が母の働らきにて、持歸つたる道の狼藉。やはかおのれに渡さうか。

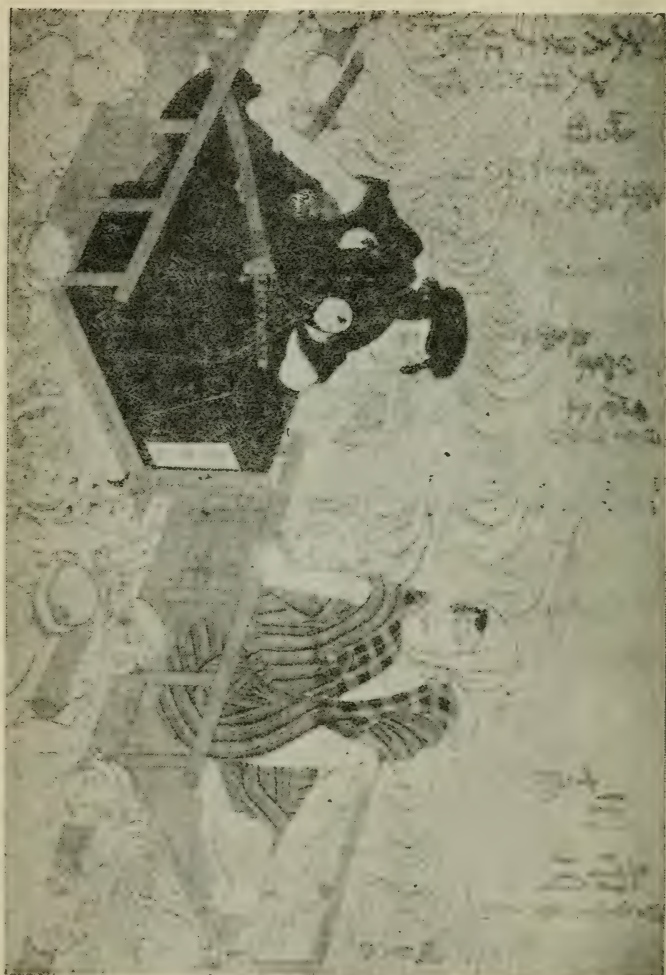
江戸　やかましいワ。この短刀は此方も尋ぬる雷丸、入用の品ゆゑ、おれが貰つた。此方へ寄越しやれ。

半次　ヤア、無法の一言。この半次郎が持ち行く短刀、妨げひろぐと切り下げるぞ。

江戸　ナニ、そばへたる其たは言。キリ〳〵そこを。

トかき退けて行かうとする。半次郎やらじと立廻りの

四人　うち、川越しの人足四人、バラ〳〵と出て來り
江戸　旅人の喧嘩か。なんだ〳〵。
死骸は水葬禮、骨は盜まぬ。おれが承知だ。
川越　川越し手合ひか。コレ、その丁稚は盜人だ。殺して
四人　合點だ。盜人ならば
ト皆々かゝる。立廻りのうち、江戸兵衛は短刀を持ち、上の方へ走り入る。半次郎、追ひかけんとするを川越し四人組み附き、各自縫ひぐるみにて立廻り、半次郎、四人を相手に、禪のツトメにて立廻りよろしくあつて、ト、四人を上の方へ追ひ込んで入る。時の鐘、浪の音になり、水船下の方より、誂らへの蓮臺へ葛籠を乘せ、駄右衛門、咬へ煙管にて乘り、川越し四人、擔ぎ出る。上の方より江戸兵衛、頰かむりにて蓮臺へ乘り、川越し四人、同じく荷ひ出て來り、舞臺本水の中にて行きあひ、江戸兵衛、駄右衛門が莨の火を見つけ、煙管を出し、これを吸ひ附ける事あつて、兩方へ別れる時、駄右衛門の川越し
川一　コレ〳〵、てめえ達、向うへ行つたら、河原で拾つた、鐵砲を持つて來てくれろよ。
川二　合點だ〳〵。屆けてやらう。とんだ所に捨てゝあつたな。
ト江戸兵衛、鐵砲と聞き、よろしく思ひ入れあつて、下の方へ入る。知らせに附き、下の方より淵を引出す。この上に鮎を取る魚梁を飾り附け、道具とまる。
ト矢張り禪のツトメにて、バタ〳〵になり、半次郎、以前の四人を相手に立廻りながら出る。後より駄右衛門、窺ひ出て來る。
半次　手並に懲りぬ匹夫ども。道おッ開いて、通すまいか。
四人　ヤア、慥かに石井半次郎。
半次　ムウ。その半次郎なら何とする。
川一　侍ひに賴まれて、爰でうぬを
四人　殺らすのだ。
ト打つてかゝる。ちよつと立廻りのうち、後より駄右衛門出て、皆々を切り散らす。これにて四人逃げて入る。半次郎、駄右衛門を見て
半次　思ひがけなき侍ひの、我れへ助力の其許樣は
駄右　緣に繫がる丹波與八郎、寶詮議にこの海道。
半次　さては噂に聞き及びし、與八郎さまにてありけるか。
駄右　川越しどもが口々に、石井といふ名に知つたる御邊。

初演當時の錦繪　七世市川團十郎の水右衞門　三世尾上菊五郎の猷右衞門

して又、この場の刃傷は。
半次　與作が母にめぐり逢ひ、計らず手に入る雷丸、この所にて又ぞろや
駄右　奪ひ取られしが。……して、その者の面體は。
半次　面を隱せば、慥かにそれとは認めねど、只者ならぬそぼろの曲者。
駄右　それぞ只今、川中にて、行逢ひたりし曲者ならん。
彼奴こそ、いつぞや入山津村にて、妹お松を手にかけし、非人の江戸兵衞。
半次　御存じなれば詮議の手がゝり。
駄右　遠くは行くまい。後追ツかけて
半次　與八郎どの。
駄右　ござれ。
ト兩人、行きかける。この下座にて
皆々　川がとまつた〳〵。
兩人　ヤ、そんなら川が
ト向うを見てキツとなる。この時ドンと本鐵砲の音。煙硝立つ。駄右衞門の足に當り、立ち身にて苦しむ。半次郎見て
半次　ヤ、飛び道具にて與八郎どの。
ト立ちよらんとする。駄右衞門、タヂ〳〵となつて、本水へドンと落ちる。この時、下座より以前の四人出て半次郎へ打つてかゝる。立廻り。四人を追ひ込む。下座へ入る。時の鐘になり、梁小屋より件の江戸兵衞、鐵砲を持ち、頰冠りを取つて出て
江戸　まんまと一打ち、與八郎。ムウ。
トにつたり川中を見る。これを木の頭。
素敵な蚊だわえ。
トよろしくキザミにて、拍子
幕
この幕、紅葉に藤の枝、照葉の蔦、藤枝蔦の細道の模樣の引幕引きつけると、大ドロ〳〵にて日覆より魂下がりて、以前の振り袖を落せし所へ落ちる。煙硝火立つて、お松の亡靈、件の振り袖、誂らへの新造の姿にて、團扇を持ち、下駄にてセリ上がる。この時、空へ螢火分舞ふ。誂らへの鳴り物になり、これを追ひながら、華やかに向うへ入る。知らせに附き、シヤギリ。

四幕目

岡部宿松並木の場

鞠子在古寺の場
同　猫石怪異の場
府中二丁町の場
三保浦淨瑠璃の場

役名　藤川官太夫、石井半次郎。鬼坊主の願哲。お松妹、お袖。幇間、喜作。伊勢參り五郎吉。揚屋の亭主、東六。山形屋義兵衞。中間、團助。仲居、お山。同、お大。紺屋の次郎作。賤機のお倉

禿子、いろは實ハ信濃屋おはん。由留木調之助。お松の亡魂。猫石の精。權八姉、八重梅。竹村定之進。漁師、三保七實ハ本庄助市。民部女房、おのぶ由井民部之助。藤川水右衞門。

藤枝、蔦の細道の幕の前にて、口上役觸れあつて、入ると、上の方へ、是より西、東海道岡部宿といふ榜示杙出る。

バタ〳〵になり、揚げ幕よりお袖、病鉢卷きにて、赤子を抱き、走り出て來る。後より五郎吉、襦袢一つにて、追ひかけて出て來り

五郎　コレ〳〵、お娘。てめえは八つ橋村のお袖だな。殊にてめえが産んだ子は、民部とやらが胤。彼奴がお庇で裸にされて、それから小揚げの世渡り。その代りには、これからおぬしを、宿場へくらはし、埋め方をせねばならぬ。サア〳〵、來やれ〳〵。

ト捕へる。

そで　ア、コレ、滅相な。それをわたしが知るものかいな。わたしやアノ藤助さまのお後を慕うて、産れたこの兒を、早う見せたいわいの。

五郎　おれもよい目に逢ひたいわいな。

トしなだれる。

そで　エヽ、退かんせいな。

ト爭ひゐる。馬士唄になり、向うより民部之助、旅形、大小にて走り出て來り、この體を見て、五郎吉を引退け、お袖を圍ふ。

五郎　イヤア、われは八つ橋村で逢つた侍ひだな。われがお庇で、今に此ざま。その代りには、このマアお袖を。

ト立ちかゝるを、民部之助キッとなつて

民部　女童と侮つて、指でもさすと免さぬぞ。

五郎　うぬ、さう吐かしやア、その襦袢を。

トかゝるを、立廻つて見事に投げる。これにて五郎吉
　起きあがり
覺えてうせろ。
　ト道々の體にて森の引附けへ入る。お袖、駈寄り
そで　モシ〱、わたしやお前のお後を、いろ〱尋ねて
歩くうち、産み落したはお前の胤、しかも男子でござん
すわいなア。
　ト抱いた子を見せる。民部之助、こなしあつて
民部　すりや、この幼な子が身共の胤とな。殊に、男子と
あれば、猶更めでたい。さはさりながら、其方が樣子、
何とやら顔色が。もしや病氣といふやうな。
そで　アイ。わたしやお前にお別れ申してより、何とやら
氣持ちも悪しう、それから此やうに痩せ衰へたも、どう
やら物の怪。それにつけても、只氣にかゝるは、アノ姉
さん。
民部　あの松山が面體まで、變りし上に、その身を賣り、
駿河の遊里と聞くなれば、あれが在所も尋ねたし。そん
なら爰から
そで　連れ立つて參りませう。
　ト赤子を抱き、身拵らへする。念佛太鼓になり、森の
引附けより、賤機のお倉、在所女の拵らへ、草苅り籠
を脊負ひ、薄の葉に包みし自然生の山の芋を提げて出
て來り、二人を見て、摺れ違ひしが、振り返り
くら　モシ〱、憚りながらお前樣は、由井の紺屋の御子
息、中野藤助さまぢやござりませぬか。
民部　成る程、その名を知つたおてまへは。
くら　ハイ〱、私しはその砌り御奉公いたしました、
水仕の倉でござりまする。只今にては在所に參り、馬草
を刈つたり、片手間に、御覽じませ、此やうに自然生を、
山を尋ねて掘つて參り、鞠子の宿へ持つて行て、名物の
とろゝ汁、賃錢取つて世の營み。マア〱、お久し振り
でお目にかゝりましたなア。
民部　オヽ、その詞で思ひ出した。お倉であつたか。只今
にては身共は侍ひ。この女は身が女房、産後の病氣。殊に
更、某もこの者を連れて、東海道は少々遠慮。もし裏道
を存じて居らば。
くら　ハイ〱、お氣遣ひなされますな。私しがお供いた
し、裏道へかゝりますは、蔦の細道細づたひ、當所に住
めば、私しが案内。
民部　然らば其方、よいやうに。

そで　旅は道連れ、女中さん。
くら　サア、斯うお出でなされませ。
ト時の鐘、しめやかなる唄になり、三人捨ぜりふにて民部之助、お袖の病氣をいたはり、お倉先に立ち、東のあゆみへかゝり、中の間へ來りし頃、知らせあつて、舞臺の幕切つて落す。
本舞臺、古寺の道具、平舞臺に飾り、吊り欄間、これに紅葉蔦まとひ、正面佛前のかゝり。左右の道具好みあり。よき所に行燈をともしあり。よろしく道具納まる。
ト爰に猫の怪、白髪の老女鬘、破れし十二單衣の袖を脱ぎかけ、頭に黄紬を置き、糸車にて糸を取つてゐる。件の三人、向うを廻り、花道へ來り
民部　コレ〳〵、お袖、心持ちはどうぢや〳〵。マア、靜かに歩みやれ。
そで　アイ〳〵、氣分は、だん〳〵ようござんすが、何をいうても夜道ゆゑ、足が痛んでなりませぬ。どうぞ爰らに、泊り家は無い事かいな。
民部　されば、間道ゆゑ、宿屋というては
くら　そりや困つたものでござりまする。わたしが在所も餘程あり、どうぞ爰らに
ト向うを見て
モシ〳〵、向うに灯が見えまする。あの內へ參じまして、無心いうたら、もしひよつと
民部　成る程、左樣いたさう。サヽ、もそつとぢや。歩いて見や〳〵。
ト矢張り彈き流しの唄、時の鐘にて、いたはり〳〵、舞臺へ來り
くら　アヽ、爰はお寺さうな。爰らに寺は無かつたが、どうして俄かに。
ト思ひ入れあり
マア〳〵、わたしが賴んで見ませうわいなア。
ト門口へ來り
ハイ、ちとお賴み申しませう。私しどもは蔦の細道へかかりまして、日は暮るゝ、旅の女中さんは御病氣。どうぞお泊めなされて下さりませ。
ト猫の怪、これを聞いて
猫怪　なんぢや。夜道の旅に女中の病氣。そりや難儀でござんせうが、宿屋にあらぬこの古寺、これでもよくば、

ト云ひながら門口へ來る。
くら　エヽ、お寺でござりまするか。病氣の事なりや、お寺へなりと、今宵一夜を。
そで　どうぞ泊めて下さりませ。
トこの聲に猫の怪、お袖を見て
猫怪　ヤ、さう云やるは、義理ある娘のお袖ぢやないか。
そで　エヽ、わたしを娘と仰しやりまするは
ト思ひ入れあつて
ヤヽ、お前さんは八つ橋村の、義理ある母さん。慥かお前は
民部　身共も聞きし牢死の樣子。その後しかと見屆けねど
そで　わたしもその夜に家出して、後の樣子は
猫怪　知らぬも道理。牢死なしたる年寄りの、時來らぬかその後蘇生。わしや仕合せと、蘇生へつたわいの。
そで　そりやお仕合せな事。それはさうと、お前の其お姿はえ。
猫怪　こりや八つ橋村で、死骸の上へ何者か、掛けて下された裝束を、今に此やうに假り着して
民部　心覺えの其お話し。それで高位の其お姿。
猫怪　して又、其方の身の納まりは

そで　わたしもその後しるべの方にて、產み落したるこの幼な子。
猫怪　そんならその子が。そりや出かしやつた。わしが爲には義理ある初孫。思へば姉のお松も懷姙して、あの姉は
ト云はれて、お袖、術なき思ひ入れにて
そで　サア、その姉さんは、仔細あつてナ。
猫怪　これも家出か。
そで　アイ。何やら先は、
トつかへる。
民部　アイヤ、心願あつて物參り、慥か智行のお加治を受けに。
猫怪　して、道連れのお前は何者。
民部　ヘイ、拙者めは袖に連れ添ひまする者。この上ともに。
猫怪　アヽ、さうかいな。ようござりました。サヽ、入らつしやりませ〳〵。
くら　これはよい所へ參りましたわいなア。
ト皆々內へ入り、座に附く。
猫怪　アヽ、命があれば、また逢はるゝと、お袖は格別、お侍ひ樣には、お初に逢うて、此やうな隱れ家へ。モシ、

弘化四年七月市村座上演　　三世尾上菊五郎の怪猫

この上とも、娘が事、よろしうお頼み申しまする。

民部　イヤモウ、不思議な御縁で、いはゞ、親子の間柄。私し事は、以前は中野藤助と申せしが、只今にては由井の民部。この上ともに、お目掛けられて下さりませ。

猫怪　これはしたり、其お詞に痛み入る。聞けば、娘は病氣との事。幼な子もあるなれば、風があつては何とやら。あのマア、奧の座敷へなりと。

そで　其お詞に甘へまして、奧へ參つて、この子の添へ乳。

猫怪　併し暗うて、蚊も多し、灯の用意も

くら　ハイ、そりやわたしが、藤枝の城下で、買うて參つたともし油。丁度幸ひ。

ト草苅り籠より、竹筒に入れたる油を出す。

猫怪　そんなら娘は、ゆるりと奧で。

民部　何かとお世話にあづかりまする。

ト唄、時の鐘になり、民部、幼な子を抱き、お倉、竹筒を持ち、お袖を介抱して奧へ入る。これより掠めたる木魚の合ひ方。

猫怪　すりや、あの者どもは、阿部川近き賤機山、蔦の細道迷ひ來て、この古寺へ一夜の頼み。ア、、世に亡きこの身と知らざるも、愚の人の心ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、お倉、赤子を抱き、竹の筒を持ち、出て來り

くら　モシ〳〵、阿母樣。奧へ油はついで參りました。この行燈へつぎませうか。

猫怪　オ、、そんならついで下さんせ。

くら　左やう致しませう。

ト赤子をよき所へ置き、油をつぐ。赤子泣く。

オ、、よい子ぢや〳〵。いま抱いてあげまするぞ。

猫怪　ア、、せはしない。ドレ、その子を爰へ寄越さんせ。

ト赤子を抱き、いろ〳〵あつて

オ、、よい子ぢやの、よい子ぢやの。婆が、、、うま〳〵やりませう。コレ、其方はわしが、大事の大事の孫ぢやぞや。笑うて見せや。……くつ〳〵〳〵。

トあやしてゐる。この時、猫一疋、鼠を追うて走り出る。物音にお倉、驚ろき

くら　オ、怖。何やら爰へ。

猫怪　イエ〳〵、怖い物ぢやないぞえ。そりやわしが飼ひ猫ぢやわいの。

ト引寄せて膝の上に置く。

くら　エ、、さうでござりまするか。

ト矢張り此うち木魚の合ひ方、風の音、この時、欄間へ又猫一疋、蛇を銜へ出る。この蛇、下へ下がり、お倉の顔へ觸るゆゑ、愕りして

ア、又、何やら、

ト飛び退く。

猫怪　これはしたり。何も其やうに……コレ、斑よ〳〵。爰へ來い〳〵。

ト思ひ入れにて呼ぶ。猫は蛇を捨て猫の怪の側へ來る。

くら　これはマア、いかいこと猫が居りまするな。お好きでござりまするか。

猫怪　さうでござります。コレ、こなさん、その長蟲を捨てゝ下さんせ。

くら　ア、モシ、どうしてマア怖らしい物を

猫怪　エヽ、臆病な。そんならわしが、

ト蛇を取つて、あたりへ捨てゝ

コレ、この子は、わしが寢かしてやらう。こなさん、奧へ行てあそこに搔卷がある程に、取つて來て下さんせ。

くら　アイ〳〵。ツイ取つて參りませう。坊さんは婆さんに抱かれて、心持ちがよいかして、スヤ〳〵なされて……ドレ、取つて參りませう。

ト木魚の合ひ方、風の音にて、お倉、奧へ入る。赤子、泣き出す。猫の怪、いぶりつけて

猫怪　オヽ、泣きやるな〳〵。婆がよい物やりませう、おしつけ又盆になると、この寺へ娘子供が大勢來て、面白う踊るわいの。それも見せます。その盂蘭盆の踊りはの。女子どもが手を揃へ

トこれより猫の怪、盆踊りの唄を少し唄ふ。それより地へ取り、誂らへの合ひ方。この時、件の二疋の猫、そろ〳〵と立つて踊る事。猫の怪、音頭を取る。猫は二疋とも唄に合せて踊る。この時分、お倉、奧より出て來り、この樣子を見て驚ろき

くら　ア、モシ、猫が

ト大聲するゆゑ、猫は驚ろき、狼狽へて奧へ走り入る。猫の怪、振り返つて

猫怪　これはしたり。また驚ろいてかいの。

くら　ぢやというて、今、猫が二疋とも、どうやら立つて

猫怪　アヽ、滅相な。なんで其やうな事があらうぞいの。

トこの時、赤子、頻りに泣く。猫の怪いぶり附ける。

くら　モシ〳〵。アノ、奧に、搔卷は見えませぬわいなア。

猫怪　アヽ、さうかいの。年寄りといふものは、物覺えの

悪い。
トまた赤子泣く。猫の怪いぶり附けてゐる。奥よりお
袖、そろ〳〵と出て來り
そて　モシ〳〵。いかうこの子がせわりまするが、殊に、
わたしもついにない、乳が張つて來やんした。ドレ、そ
の子をわたしに
猫怪　オヽ、乳が澤山で仕合せぢやわいの。
そで　サア〳〵、うま〳〵あがれや。
ト取附いて赤子を抱く。
左樣なら、わたしやお先へ、臥りまするぞえ。
猫怪　ハテ、子持ちの事ぢや。先へ寐や〳〵。
そで　アイ〳〵。……して、お前は寐やしやんせぬか。
くら　わたしや阿母さんのお側へ臥りませう。
そで　そんなら、母さん。
猫怪　早う寐やいなう。
ト合ひ方、時の鐘。お袖、子を抱いて奥へ入る。
くら　左樣なら私しも、お先へ臥りまするぞえ。
猫怪　オヽ、遠慮なしに寢さんせ。併し、寢る物というて
も、恥かしい事ながら……ア、なんぞこなさんに
ト古き打敷を取つて來り

サア〳〵、これなと引合うて、枕もこれを、
ト古き位牌を二つ出し
サア、寐やしやんせ。
ト風の音、本釣り鐘、蟲の音、凄き合ひ方。打敷を敷
合うて横になる。お倉、思ひ入れあつて
くら　何ぢややら、夜の更けるに隨つて、物凄いやうに覺
えまする。
猫怪　なんのマア、この山寺に住むからは、怖いと思うて、
一日も暮らさるゝものかいな。併し、あの鉦の音が聞え
るかえ。
くら　どうやら殊勝な鉦の音でござりまする。
猫怪　その筈の事。ありや未來の鉦ぢやわいの。
くら　ア、氣味の悪い。
ト打敷を引ッかぶる。
猫怪　これはしたり。なに怖い事がある。ありや極樂の鉦。
それを聞く者は、後生がよいといふわいの。あのやうな
又、殊勝な鉦の音といふは無い。コレ、まだ鉦が聞える
が、聞えませぬか。ヤヽ、もう寢てかいの。ハテマア、
若い者といふものは
トお倉を度々搖り起す事あつて

ア、、よく纏附きやつたの。

ト合ひ方變り、行燈の方を見て

人目が無くば常々に、好めど足らぬこの山中。今宵ぞ爰で、あの油を。

トきつと思ひ入れ。この時、風の音、捨て鐘、猫の怪、寢所より、ソロ／＼と這ひ出し、後を窺ひ窺ひ、行燈を引寄せ、その中へ顏を差入れる。その影、猫に映る、長き舌を出し、ピチヤ／＼と油をねぶる事。お倉、何心なしに顏を出し、これを見て、「ワツ」と飛び退き、逃げんとするを、猫の怪、その裾を捕へ、キツとなつて

そんならわが身は、見やつたの。

くら　イエ／＼、何もわたしや

怪猫　イヤ／＼、見たであらう。殊に、其方は子の年の女、常々妾が好もしい、子年の女。命は貰ふ。サア、念佛なりと申してゐや。

くら　どうぞ助けて

ト逃げ行くを、手を伸し、お倉が襟髮を捕へるを、振り切るとて、思はず猫の怪と向ひ合ふ事。中を隔てゝ、チリ／＼と猫の怪睨める。お倉、チリ／＼と竦む事。

よきキツカケに、猫の怪、お倉の襟元へ飛び附き、咬へし心。お倉苦しみ、振り切つて逃げんとして、仰向けになる。猫の怪、この時、中腰になり、前へ手を突き、お倉を見て、キツとなる。この時、顏はなまなりの猫の面になる。お倉、よろめき／＼逃げるを、手を出して毆り倒し、あちこちを嚙む事。ト、襟元を咬へ、破れ障子の中へ引込む。この内で人を嚙む音して、障子へ血煙立つ。この時向うより五郎吉、お袖を尋ねる心にて出で來り

五郎　なんでも二人の奴等は、慥かにこの寺へ泊つたと見える。あのお袖めを首尾よく浚つて

ト捨ぜりふにて、あちこち探して、思はず障子の中を覗き、「ワツ」と云うて飛び退いて慄ふ。障子を明け、猫の怪、以前の老女の顏に戻り、口の端、血に染みる顏を出して、ヂロリと見る。五郎吉うろたへ、「ヨツ」といふて下座へ逃げて入る。猫の怪、ソロ／＼出で來り、下の方へ行き、手桶の水を盥へ打明け、つくばつて、ピチヤ／＼と水を飮む事。ト、畜生の如く洗ふ事。矢張り好みの合ひ方、奥にて赤子泣く。民部之助、幼な子を抱きて出で來り

民部　ヤレ〳〵、この子のせわるので、さぞおやかましう
　ございませう。
　ト云ふに、猫の怪振り返る。怖き顔ゆゑ悄りする。猫
の怪、心附き、ちやつと元の顔になり
猫怪　これはしたり。婿どのかいの。
　ト民部之助、思ひ入れあつて
民部　心の迷ひか知らねども、慥かに今のは
猫怪　すりや、其方は何ぞ
民部　イヤ、別れて何も
猫怪　見ぬのかえ。
民部　ハイ。
　ト思ひ入れにて云ふ。
猫怪　それで妾も
民部　姑どの。
猫怪　婿どの。
　トきつと見得にて
　ドリヤ、まどろみませうか。
と唄、時の鐘になり、こなしあつて、上の方へ入る。
　民部之助、後見送り
民部　心得ぬはあの姑。いつぞや牢死と眼前に、八つ橋村
にて見屆けしに、それに最前蘇生なせしと、あの詞。何
とも以て心得がたき
　ト思ひ入れ。幼な子泣き出す。
オヽ、たがよ〳〵。
　トいぶり附ける。この時奥よりお袖、出て來り
そで　民部さん、そこにかいなア。
民部　オヽ、お袖。目が覺めてか。
そで　アイ、何やら怖いお寺の内、やう〳〵と寢入りしに、
あの姉さんを夢に見て、一倍わたしや主の事が案じられ、
思へば〳〵、妹の身で、呪ひし釘は、女の念力、醜い顔
に致したも、皆わたしから起つた事。その現在の實の母
さん、あなたの手前、どうもわたしや
民部　ハテ、そりや氣遣ひない。今も母御の云はるゝに
は、松山ことは駿河の國、此あたりに名醫あつて、顔の
構へも大方は、直つたとの事。それなれば、其やうに。
そで　エヽ、さうかいなア、わたしや又松山さんの、實の
母さん、主の手前へ心遣ひ、それで一倍病氣も募つて
民部　ハテ、氣の弱い。必らず、キナ〳〵思やんなや。
　ト思ひ入れ、禪のツトメになり、向うより鬼坊主の願
哲、一升樽と、藁で結へし豆腐とを、割掛けにして肩

に引掛け、鉦と撞木を持ち、スタ〳〵と出て來り

願哲　ヤレ〳〵、暗い晩ゆゑ困つたわい。水死の佛を葬むるによつて、先へ行つてくれと頼まれ、近道ゆゑに、蔦の細道へ入つたところ、直ぐに日が暮れて道は知れず、寺の名も忘れた。ア、、どうぞ聞きたいものぢやが。

ト舞臺へ來る。この時前幕の、しつぺい太郎の犬、下手より出て、願哲を吠える。吃りして飛び退き

エ、、この畜生め。おれが出ると、この春も吠え居つた。エ、、極道め。シイシイ

ト追ひ散らす。犬は入る。願哲、あたりを見て

ア、、爰に寺があるな。爰かも知れぬ。……モシ〳〵、頼みませう。葬ひの來る寺は、爰でござるかな。

民部　どうでござりまするか。わしらは今夜泊つた旅の者。何事も、存じませぬ〳〵。

願哲　ア、、さうでござるか、併し、寺というても外にはあるまい。大方爰であらう。御免なされませ、葬ひに來たものでござります。竈を借りて、豆腐も煮ようと思ひます。

ト内へ入る。お袖見て

そで　モシ〳〵。怖らしい坊さんが見えたぞえ。

民部　ナニ、怖い出家が

ト見て

モシ〳〵。爰に葬儀はござりませぬぞえ。サ、歸つて下され〳〵。

願哲　ナニ、歸れ。この男は、坊主の玉子ぢやアあるまいし、寺へ坊主の來るのは當り前ぢや。マア、それよりは、第一、寺へ女を置くのが御法度だワ。して、こなたは、野郎の和尚か。

民部　成る程、無住なこの寺。住持は身共ぢや。サ、、置く事ならぬ。歸つてもらはう。それを又歸らぬと、料簡があるぞ。

願哲　ナニ、料簡がある。こりや面白い。この坊さんが相手になつて、サア、野郎の住持め。料簡は、どうぢや。

民部　その料簡は。斯うするわえ。

ト豆腐を取つてくらはす。豆腐は碎けて散る。願哲、頭を抱へ

願哲　アイタ、、、、頭が割れた〳〵。相手は住持だ。頭が割れたワ。

ト喚く。この時、下の方より五郎吉、出て來り

五郎　なんだ〳〵、どうしたのだ。

願哲　コレ〳〵、見さつしやい。あの住持野郎め、坊主の頭を豆腐でぶちこはした。その證據は、コレ〳〵、頭の缺けが此やうに、こぼれてゐる。濟まねえぞ〳〵。

五郎　アヽ、こゝら中にこぼれてあるのは、頭の缺けか。おらア初めて見たわえ。

ト此の時民部、五郎吉を見て

民部　ヤヽ、おのれは先刻の男ぢやな。

五郎　ヤア、さう吐かすは、お袖夫婦の奴等だな。爰に居やうと目を附けて來たのだ。コレ、坊さん、こなたも手傳つて、あの女を

願哲　合點だ〳〵。寺で女をちよろまかすか。さうはさせぬぞ。これからおれが、酒の力で千人力。マア〳〵、待てよ。一杯氣を附けて。

ト樽より茶碗へついで飮む。

五郎　ハテ、この坊さんは、酒を飮むより、おれが片腕になつてくれぬか。

願哲　サア、その片腕も、一杯きめて。

トまた飮む。

五郎　コレ〳〵。そんなに飮むなら、おれにも獻さつし。

願哲　イ、ヤ、この酒はおれ一人で

五郎　ハテ、吝い坊主だ、一杯飮ませろ。

願哲　イ、ヤ、愚僧が獨吟々々。

ト一人で飮む。五郎吉これを飮まんと、樽を爭ひ〳〵、下の方へ入る。

民部　何ぢややら、彼奴らは、益體も無い事ばかり云ひ居つて、譯も無い奴らではあるぞ。

ト此うち赤子頻りに泣く。お袖、介抱して

そで　今日は取分けこの子のむづかり、どうやら虫氣と見えまする。お前、熊の膽か、よい丸藥はござんせぬか。

民部　イヤ〳〵、常から藥の貯へせぬゆゑに、其やうな物は、どうして〳〵。併し、虫氣と聞いては、其まゝにもして置かれまいが、爰は人里離れし邊土。おりや宿へ行て、藥を買うて來ようほどに、隨分其方は、その子を大事に。

そで　アイ〳〵。併し、お前がござんしては、氣味の惡い此お寺。母さんの手前。ならう事なら、わたしも一緒に、行かうわいなア。

民部　これはしたり。夜道といひ、其方も病人。その上、小兒も虫氣とあれば、どうして連れて行かれやう。ちよつとわしは一走り、買うて來るほどに、ちつとのうち、

風をひかぬよう。コレ〳〵、この屛風を風防ぎに、その子を抱いて、サヽ、寢てゐや〳〵

トあたりにある蓆屛風を立て、お袖を寢させる。

そで　早う戻つて下さんせえ。

民部　直ぐに戻るわいの。ア、苦々しい事ではあるぞ。

トお袖は屛風のうち、民部之助は門口へ出る。これより竹笛の入りし淒き合ひ方、薄ドロ〳〵。民部の足元へ、お松の亡魂、青鼠の着附け、淺黄の帶、洗ひ髮に象牙の笄、女郎の姿にて、ツイと出る。民部之助、怪しみ、見て

民部　そこにゐるのは、誰れぢや〳〵。コレ、何者ぢやぞいの。

まつ　アイ、わたしかえ。

トいつもの顏にて會釋する。

民部　ヤ、其方は松山ぢやないか。

まつ　アイ、よう知つてゐさんすの。

民部　知らいでなんとせう。民部ぢやわいの。見れば面體よう直つて、わしも安堵したわいの。

まつ　さうかいな。わたしも恥かしいあの面、やう〳〵の事で、元のやうに直つたが、定めしお前は、お否であらうなア。

民部　なんのマア、おれに其やうな心があるものぞ。マアマア、此方へ來やいなう。

ト手を取つて内へ伴ひ

見れば夜に入り、供をも連れず

まつ　怖い目いとはず參つたは、お前に逢ひたさ、恨みも云ひたさ、それゆゑに。

民部　尤もぢや〳〵。が、コレ、屛風の内には、妹のお袖、隨分ともに、靜かに云や〳〵。

まつ　ソレ、見なさんせ。妹のお袖にお前の氣兼ね。それぢやによつて、わたしや悲しい。

ト泪ぐむ。

民部　コレ〳〵、泣く事はない〳〵。殊に、この内には、こなたの實の母親が……それぢやによつて、わしが心配。モウ〳〵、この上ともに、おれが心は、決して〳〵、末末見捨てはせぬ。コレ、二世も三世も、斯うぢやわいの。

ト抱きしめて思ひ入れ。

まつ　逢うたら恨みを云はう〳〵と、思うてゐたが、見るに目の毒。さはさりながら、只恨めしいは。

ト屛風の方へ思ひ入れあるを

民部　ハテサテ、野暮な。コレ、マア、秋風がこの身に、しみ／＼

ト寄り添うて、思ひ入れ。よき時分より願哲、酒に醉つて、ヨロ／＼と出て來り、外にてこの體を見て

願哲　イヤ／＼、畜生め／＼。こりや堪らぬわえ。

ト鉦と撞木を持つて、内へ轉け込む。

民部　ヤ、こりや今の出家か。

願哲　ナニ、今の出家か。オヽ、出家ぢや／＼。出家、侍ひ、遁がれぬ仲ぢや。コレ、畜生め。此やうな古寺へ、吉原の花魁を引き込み、ちん／＼鴨はまだ早い。ちんちん青鷺、どでごんす。イヤ、うまいな／＼。

民部　コリヤ、和尚どのは、話せるソ／＼。

願哲　話せる段か。今でこそ念佛講の觸れ坊主、枕念佛を取りおいて、ちと、洒落れようか／＼。

民部　イヤ、よからう／＼。

願哲　さて、御樣子をかんがみるに、花魁は愁ひの樣子。その泣く泪を取り捨てゝ、笑ふ門には福來る。これより我れらが、七福神の七面、面で七役早變り、大黒天が最初でござい。

ト三味線入り禪のツトメになり、願哲、捨ぜりふよろしく、七福神の早變りする事、いろ／＼あつてこれで七福。ドツと褒めたり。

民部　イヨ／＼、こりや一段と見物ぢやわいの。

願哲　これは益體、御免々々。

ト他愛なく寢る。

民部　これはしたり。もそつと何ぞ隱し藝を。コレ／＼、お坊／＼。アヽ、よう寢たさうな。

トこの時屏風を明け、お袖、出かゝり

そで　モシ、お前さん、藥を買ひにござんしたと思うたら、矢ツ張りそこにござんしたかえ。そして、誰れやら女中の聲が

ト見ようとするゆゑ、民部、手早く有りあふ打敷を、お松の亡魂に打掛け

民部　イヤ／＼、誰れも爰には……オヽ、それ／＼、爰にゐるのは先刻の出家、それも死んだやうになつて、寢てゐるわいの。

そで　そんならどうぞ、あの熊の膽を。

民部　オヽ、直ぐに行つて來ませう。必らずわしが歸るまで、かまへて爰を

ト心遣ひの思ひ入れあつて

今度こそ一走り、ドリヤ、買うて來ようか。

ト唄、時の鐘、蟲の音になり、民部、足早に向うへ入る。お袖、跡を見送り

そで　どうぞ早う戻つて下さんせえ。なんぢややら、氣味が惡うて

ト抱いてゐる子をいぶり附けるこなし。ドロ／＼になり、かむりし打敷、自然と脫ける、とお松の亡魂、なまなりの顏になり、異形の姿に變り、ソロ／＼と立ちあがり、ヒョロ／＼して、寢てゐる願哲が顏を覗き見る。これにて願哲、うなされる思ひ入れ。お袖、これを聞きつけ

ア、モシ、お前、おそはれてかいな。此やうな事なら、なんの主を、藥買ひにはやるまいもの。斯ういふ時には神佛より賴みは無い。怖いといふも、松山さん、もしひよつと、死なしやんしたなんぞといふ、其やうな事になつたら、わしやどうせう。どうしたらよからうぞいなア。

ト此せりふのうち、お松の亡魂、お袖が顏をキッと見詰めて、思ひ入れある。

ア、、思ふまい／＼。此やうに思ふのも、心の迷ひ。此やうな時は憂を晴らして、ドリヤ、莨なとのみつけて

ト寢ころびしまゝ、莨をつぎ、莨盆の火入れに火の消えたるゆゑ、枕元の行燈の火へ、長煙管を差出す。この時お松の亡魂、向うへ廻り、行燈をソッと引く。お袖、煙管が屆かぬゆゑ體を乘出し、手を伸して附けんとする。また亡魂、行燈をソッと引く。お袖、また屆かぬゆゑ、乘出し、手を伸して附けんとする。また亡魂、行燈を引く。これにてお袖、二三度乘出す事あつて、心附き

ハテ、めんえうな。この行燈が、どうやら段々

ト何心なう行燈の向うを見る。お松の亡魂、恨めしげにお袖を見る。お袖「ワッ」といふて起きんとするをお松の亡魂さし寄つて、お袖が咽喉を押へて、仰向けにして、キッと顏を見る。

ア、、尤もでござんす／＼。成る程、わたしが呪うたばかりで、お前の顏が變つたは、わたしが仕業。その恨みあるその上に、お前の思ふ民部さんを

トこの時、亡魂、また咽喉を締める。

ア、、苦しうござんす／＼。モシ、尤もぢやわいな。殊に、お前の樣子といひ、もしやひよつと

トこの時、亡魂、さめ／＼と泣く。

そんならお前は、非業にこの世を
ト驚ろいて、赤子を抱き逃げんとするを、亡魂、髻
掴んで引寄せる。お袖、苦しみ
アヽモシ、堪忍して下さんせ／＼。さう聞いては猶々尤
もでござんすが、今更仕様も……アモシ、そこな御出家
さん、起きて下さんせいなア。
ト願哲の方へ行かうとする。ドロ／＼にて、亡魂、連
理引きに引き戻す。お袖、苦しむ。その聲に願哲、目
を覺まし、恟りして、有りあふ打敷をかぶり、手早く
鉦を打ち鳴らし
願哲　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト念佛申す。お松の亡魂、キッとなつて、向うを見て
まつ　エヽ、恨めしい。いま少し夫民部、歸らぬならば、
憎くい女め。只恐るべきは夫の懐中、所持するところの
軍術の一卷に、あらゆる諸神の祕法の祕文、それに恐れ
て近寄る事も叶はぬか。とはいへ、憎くい女めは、やは
か此まゝ置くべきか。
そで　そんなら、どうでも
願哲　南無阿彌陀佛々々々々々。
ト鉦を打つて、慄へ／＼回向する。凄き合ひ方、一つ

鉦、薄ドロ／＼、お袖は苦しむ事。赤子泣く。お松の
亡魂、これにて、チリ／＼と壁の方へ寄り、この時そ
の身は壁にて消える。お袖、倒れ伏す。願哲、慄へて
ゐる。ドロ／＼打ちあげる。時の鐘、向うより民部、
息せき歸り來り
民部　さぞマア、お袖は、待つたであらうに
ト何心なう内へ入る。願哲、恟りして
願哲　なまいだ／＼／＼。
ト無暗に鉦を打ちながら、向うへ逃げて入る。民部之
助、恟りして
民部　これはしたり。出家は何をうろたへて
ト此の時、赤子泣く。
オヽ、又せわりをるか。お袖は寢てか。
トお袖の倒れゐるを見て
ヤ、お袖ぢやないか。何として此やうに、
ト呼び生けて、いろ／＼介抱する。お袖、心附く。
そで　ヤア、戻つてかいな／＼。遲かつた／＼。遲かつたわ
いなア。いま爰へ姉さんがござんして、非業にわしはこ
の世を去る、恨めしいは妹と、わたしを捕へて、折檻
なさんした。お前が一足早いならば

民部　すりや、松山はこの世を去りしか。それも前世の約束事、さりながら、姉の怨念殘りし上は、コレ、お袖、今より其方が緣切つたぞ。

そで　エヽ、姉さんの恨みあるゆゑ、わたしと夫婦の緣切るとは、そりやマア、なぜに、女夫の結びは

民部　不審は尤も、さりながら、其方と女夫になる時は、姉の死靈の離れずして、後々ともに爲ならず。それぢやによつて夫婦の緣を

そで　イエ〳〵、それは胴慾でござりまする。例へ姉さんの死靈の恨み、取り殺されてもいとひませぬ。どこまでお前の女房、離れる事ぢやござんせぬわいなア。

ト縋つて思ひ入れ。

民部　オヽ、尤もの志し。さりながら、今こそ明かす我が胸中。我れこそ楠正行の後胤なりと、秋葉山にて詳しき示し。それにて俄に、大義の企てなせば、事を計るに女を同道、他聞の聞え計りがたし。それゆゑ緣切る、女房お袖。左やう心得、今より其方は

ト此うちお袖、胸苦しき思ひ入れにて

そで　そりや胴慾でござりまする。姉さんの恨みのたけ、お前にまで見限られ、わたしは何としやんせう。其お詞に、一倍病ひの重りてか、このマア胸が。ア、苦しい苦しい。わたしや此まゝ

トいろ〳〵踠き、トヾ絆切れて落入る。民部之助、駈け寄り

民部　コレ、氣を慥かに。コレ、お袖。

ト介抱して

ヤヽ、こりやモウ、絆は切れたか。エヽ、是非もない。

ト思ひ入れ。薄ドロ〳〵になり、下の障子屋體の破れより、細長き手をさし伸べ、お袖の襟元を捕へズルズルと障子の中へ引き込む。民部、恟りして

さてこそ怪しい一間の內。

ト屋體へかゝり、障子を取りのける。內に、お袖の首無き死骸あり。薄ドロ〳〵にて、件の屋體の中より、魂ひ、フツリ〳〵と向うへ飛び行く事。民部、驚ろき

すりや、死靈の業に、お袖は可哀や。さすれば今より幼な子は、乳に離れて泣き死に。

ト思ひ入れ。ドロ〳〵にて、この時、上の方の障子の內より、毛の生えし畜生の手を出して、爪を磨ぎ立てし體にて、赤子を摑み、引き込む。

又もや此方に。

ト驅け寄りて、障子を蹴離す。內に猫石の怪は、件の老女にて、赤子を片手に摑み、立ち身。民部、キッと詰め寄り

こりや最前の老女よな。

猫怪　愚や民部。唐土にては後漢の明帝の十年、天竺より佛像經卷を贈る、日の本にては繼體帝十六年に渡るといへど、それを用ひず。我れその時南蠻國にて計らずも、經虎、妖狐の生を合して、一つの靈獸を生ず。經鼠の愁ひを除かんと、日本に渡るといへど、魔界の生とて、其まゝに用ひざれば、山に入り、陰に凝つては陽に發し、名づけてこれを火車といふ。縮まる時には姿を化し、女王の宮と大內の、宿直も後に柏木の、衞門と共に東路へ、下る道にて山中に分け入り、人を害せば、身は情なや畜類と、姿隱せば童の、かよわき腕に地中の、庭戶に据ゑたる大石も、我が業通に、その姿、後には人もおぢ恐れ、事によつては、雲を起し、身はさかしまに炎の光り、彼れこそ魔界の中なりと、惡業受けし猫石の、精靈なりと歸らざるや。

トきつとなる。大ドロ〳〵。

民部　さてこそな。

猫怪　假にも朝夕年たけし、我れとも知らず恩愛の、受けし娘は松山にて、その怨念と合體なし、恨みは盡きじ唐猫の、萬劫盡きぬ身なるゆゑ、鬼神に劣らぬ我が業通。見よ〳〵、汝、修羅の苦患のその有樣、炎の車へ誘引せん。早々來れ、民部之助。

民部　ヤア、例へ汝、如何ほどに、魔風の一吹きあるにもせよ、所持なすところのこの一卷、いま目前に。

ト懷中の一卷を出す。この時、以前のしつぺい太郎の犬走り出て、猫の怪目がけて飛びかゝる。これに恐れて猫の怪苦しみ、タヂ〳〵となる。猶も民部之助、一卷を差しつける。犬は飛び附き〳〵、あたりへ入る。この時、古寺の道具一時に變り、大ドロ〳〵にて、舞臺は殘らず茅原となり、猫の怪は大きなる猫石となる。

宇都の谷の猫石と、聞いてはあれど、この珍事。寺と見えしもこの茅原。ハテ、恐ろしき事どもぢやなア。

ト思ひ入れ。時の鐘、風の音になり、向うより願哲、鉦を打つて先に立ち、後に白木の輿、これに山形屋義兵衞は判人にて、旅なりのまゝ阿彌陀笠をかむり、施主の體にて、百姓大勢附添ひ、出て來り

百姓　コレ〳〵、旅のお方。お前は、とんだ所で施主にな

らつしやるの。
義兵　それ〳〵。如何に判人だといつて、旅先でまで施主
になるとは、怪しからぬ話しサ。
願哲　併し、お前もよう人の世話をさつしやる。このマア、
川流れの女の死骸は、なんで又お前が
義兵　ハテ、一旦わしが買ひかゝつた、八つ橋村の松山。
非業の死を遂げ、その死骸が川流れ、氣の毒と思ふから、
葬つてやりまする。
願哲　その古寺は今夜の様子で、どうやら不氣味な……併
し、大勢來ては千人力。早く葬ひを片附けさつしやい。
義兵　サア〳〵、賴みます〳〵。
ト皆々舞臺へ來る。
願哲　イヤア。今まであつた古寺が、こりや、どこへやら
引ツ越しか。
皆々　寺が見えぬワ〳〵。
ト騷ぐ。民部之助、見て
民部　コレ〳〵。こなたは今まで爰にござつた出家でない
か。
願哲　左やう〳〵。先刻にも云ふ通り、愚僧は頼まれ、女
の葬ひ、連れては來たが、今までの、寺が爰には

民部　様子あつてのこの珍事。して、その女は、いづくの
何者。
義兵　この女といふは、吉原で、女郎の松山。親里は八つ
橋村、非業の死を遂げ、大井川へ浮き死骸。葬むる我れ
らは、卽ち判人。
民部　すりや、松山が死骸とな。不便や夫の民部にも、さ
ぞや無念が
願哲　さてこそ〳〵。松山が男なら、石井の小者藤助が、
今は變名、民部之助。怪しい奴と世間の噂。いづれも油
斷さつしやるな。
百姓　合點だ〳〵　代官所へ引く、動くまいぞ。
ト皆々、輿を下して、民部之助へ立ちかゝる。
民部　ヤア、狼藉な。手向ひ致すと、免さぬぞ。
願哲　エヽ、面倒な。縛らつしやい。
皆々　合點だ〳〵。……腕廻せ。
ト民部之助へかゝる。義兵衛うろたへて逃げて入る。
本雨降つて來り、大雷鳴になり、民部之助は皆々を相
手に立廻り、切り拂ひ〳〵、件の輿の上へ上がり、キ
ッとなつて空を見上げ
民部　さては以前の猫石の、その念凝つて火車と現はれ、

女の死骸へ立ちかゝるか。

頼哲　ソレ、面倒な。民部之助を

皆々　遁がしはせぬぞ。

ト立ちかゝるを、民部之助よろしく立廻り、此うち大雷鳴、後の猫石、兩眼を開き、火焔を吹きかける。其あたりより猫の怪現はれ、件の輿へ立ちかゝる。民部之助やらじと止むる。立廻りに猫の怪、引抜きにて、老女の襲、姿も共に、半身斑の大猫となつて、キッと見得。皆々「ワッ」といふて倒るゝ。

民部　さてこそ火車の正體を

猫怪　民部が懐中、あの一卷、近寄る事の叶はねば、女の死骸は、八萬奈落へ。

ト輿を打ち碎き、松山の死骸に、お袖の首を握つて立ちあがる。

民部　ハテ、凄まじき火車の振舞ひ。

猫怪　雲に飛行し、此まゝに。

ト大ドロ／＼烈しく、松山の死骸の帯際を摑み、お袖の首を咬へ、キッとなる。早笛にて、猫の怪を段々と上へ引揚げ、日覆際まで上がる。頼哲はじめ皆々「ワッ」といふて逃げて入る。民部之助キッとなつて

民部　二人が屍は、やはか火車には

ト空を見詰める。この時、大ドロ／＼にて、猫の怪、前の方へちよつとおこづく。これをキッカケに烈しき鳴り物になり、死骸を引ッ抱へ、首を咬へ、よき所より双股の尾を現はし、この見得にて、向うへ中乘り。民部之助は後追ひかけ、揚幕へ入る。よきキッカケに踊り地になり、浮いたる鳴り物。直ぐに舞臺は東海道府中の宿、二丁町女郎屋の道具に變る。

本舞臺、三間の間に本緣附き高二重。向う長暖簾。軒に「井筒」と書きし團子提灯。上の方一間の障子屋體。この前に柴垣、石の手洗鉢。いつもの所、枝折り戸。下手に用水桶。すべて駿州彌勒町、揚屋の道具。踊り地にて道具納まる。

ト直ぐに向うより旅乘り物、團助、中間にて附き添ひ、その外に中間二人引添ひ出て來り、舞臺へ來る。團助ちよつと乘り物に囁く事あつて

團助　頼まうぞよ／＼。

ト奥にて

仲居　アイ／＼。

ト仲居お山、お大、赤前垂れにて來り

やま　これはマア、どなたか。よう入らつしやりました。

だい　サア〳〵、此方へお入りなされませ。

團助　コリヤ〳〵、女ども。かしましく申すな。此たび將軍家よりの仰せにて、當所三保の明神、御普請お手傳ひの役目にて、御下向ありし由留木の御家中、定之進どのに御內用にて、お越しなされし御方。お忍びなれば、小座敷へ御案內いたせ。

やま　ハイ〳〵、畏まりました。明神樣御普請のお役人樣、定之進さま、この間から四五日の居續け、酒浸しになつてお出でなされまするが、あなた方、お連れ樣なら

だい　お知らせ申しませうかいなア。

團助　すりや、噂に違はぬ定之進どのゝ身持ち。

ト乘り物に向ひ

お聞きなされましたか。……實否を糺すまで、定之進どのへは沙汰なしに。

やま　そんなら、あの奥座敷の、阿部川を見晴らし、涼しい所へ

だい　御案內いたしませう。

團助　ソレ、お乘り物。

仲居　ドレ、お座敷を片附けませうかいなア。

ト踊り地になり、お山、お大は奥へ、乘り物は團助附添ひ、上手へ入る。矢張り踊り地にて、向うより願哲出て來る。後より水右衛門、そぼろなる浪人にて附き出て來り、花道にて願哲に囁く。願哲うなづく。兩人こなしあつて本舞臺へ來り、願哲、門口を覗く事あつて、また門口へ出て囁く。水右衛門うなづき、下手へ小隱れする。願哲、內へ入り

願哲　コリヤ、誰れもゐねえか。頼むぞ〳〵。

トこれにて奥よりお山、出て來り

やま　アイ〳〵。どなたぢやぞいなア。

ト願哲を見て

エヽ、穢い、乞食ぢやないかいなア。

願哲　べら坊め、乞食といふ者があるものか。お客だお客だ。コリヤ、奥にござる官太夫さまに、用事があつて參つた者だ。サア〳〵、なんぞ出せ〳〵。

やま　エヽ、知らぬわいなア。

願哲　早く奥へ案內せい。

やま　いま知らせるわいなア。

ト矢張り踊り地にて、お山、奥へ入る。

願哲　ヤア、騷ぐな〳〵。成る程、定之進どのが、晝夜うつゝになるのも尤もだ　おれもおッつけ官太夫どのへ歸參すれば、その時は、酒も、肴も、心の儘だ。ヤア、爰に酒もあるわえ。こいつは奇妙だ。

ト肴を引出して、銚子の口より直ぐに飲み、肴をムシヤムシヤ食ふ。この時、奧にて「アイ〳〵」と返事する。悔りする。

エヽ、折角旨く飲んだところを、悔りさせやアがつた。イヤ〳〵、悔りといへば、定之進めが預かりの普請金のうち、水右衞門どのが働らきで、盗み取つた三百兩、預けて行つたが、おれが持つてゐては矢ツ張り不氣味。どうぞ暫くこつそりと。

トあたりへ思ひ入れ。この時、奧より團助出て來り

團助　コレサ、願哲どの、官太夫さまがお待兼ねだ、早く來やれ〳〵。

願哲　オツト、合點だ。ドレ、お目にかゝつて。

ト行かうとして立戻り

イヤ〳〵、水右衞門さまから預かつた三百兩、おれが持つてゐては人の怪しみ。この金は暫らくおぬしに。

團助　そんならその金を、おれに預かつてくれろと云ふのか。

願哲　てまへが持ては、人目に立たぬといふものだ。

團助　して、その出所は。

願哲　定之進が預かりの普請金。

團助　さういふ事なら、氣遣ひしやるな。

ト三百兩受取り、懷中する。

願哲　これでおれも安堵した。

團助　そんなら、おれは阿部川まで、ドリヤ、一走り行つて來ようか。

ト流行り唄になり、團助、向うへ入る。

願哲　官太夫さまの御用なら、慥かに御勘氣御赦免で、以前の段介。うまいな〳〵。

トこの時、奧にて、バタ〳〵と音するゆゑ、願哲、思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。奧よりいろは（實は信濃屋の娘お半）振り袖新造、扱帶の形。次郎作は木綿やつし、親仁の拵らへ、亭主東六附いて、せり合ひながら出て來り

次郎　濟まんぞ〳〵。

東六　この親仁どのは何を騷ぐのだ。

次郎　これが騷がずにゐられようか。この娘はどこから買

つた。それを、糺さにやアならぬ〳〵。

東六　ハテ、どこから貰はうが、いらぬ世話。貴樣、なんぞゆかりでもあるのか。

次郎　ゆかりどころか、こりやおれが娘ぢや。わしは由井の宿で紺屋商賣、憲法染めの次郎作といふて總領の悴は、小さい時から武家奉公が望みで、石井左內さまの所へ若黨奉公にやり、妹のこの娘を一人樂しみに育てゝゐるところに、京都から身延參りの女中が通りかゝつて、この娘を見て、養女にくれいとたつての望み。尤も身代もよう思ふゆゑ、所を聞けば、京都押小路、信濃屋といふ事ゆゑ、一人娘ぢやけれど、片田舍に育たうより、都の水に育つたなら、女の道も覺えようと、思ひ切つて養女にやつた、娘のお牛。もう年頃な、よい娘盛りになつたであらうと、樂しんでゐた甲斐もなう、噂を聞けば、おのれは、養家の阿母と一緒に、伊勢參りに出た道、石部の宿で、押込みに入つた泥坊に惚れて、現在養母を見捨て、泥坊と一緒に逃げたとの事。ところで、今、この女郎の姿、これも大方、その泥坊が賣つたのであらう。おのれはおのれは、マア、情ない、いたづら者ぢやなア。

東六　コレサ〳〵。其方の入り譯はどうだか知らぬが、この娘は吉田船で、入水の所を助けられ、その入用に判人が、おれの所へ預けたゆゑ、證文無しに抱へ、いゑはといふ女郎にして、この井筒屋へ預け置き、井筒屋のいゑはといへど、抱へた主は白子屋の佐助。

いろ　ついした事のいたづらから、思ひそめた其お方と、共に漂ふ伊勢の海、尾張路さして行く船の、命の瀬戸の風荒く、それゆゑこの身を男の爲、一心こめてわたつみへ、贄に供へ、入水せしが、死なれぬ命か、思はずも、助けられて、此やうに、浮き川竹の勤めの形も、もしやま一度其お方に、逢ふ事もと思ふうち、噂を聞けば、其お方は

次郎　死んだと云ふのか。それも大方天の網、捕へられたものであらう。それはまだしも。ソウ〳〵、爰でめぐり逢ふからは、どこへも去なす事ぢやない。われが兄の藤助も、由井の民部と名を變へて武者修行に出たとの事その後で、左內さまが亡くなられ、お主の家へも歸られず、故鄕へ戻る道すがら、この中思はず阿部川で、めぐり逢うたゆゑ、無理に內へ連れて戻つて、今は元の染め物商賣、相應な嫁を取つたが、兄めも奉公のうちに、云ひ交した者でもあるやら、何かの望みがあると云うて、

兎角嫁と一つ寐せず。嫁は又嫌はれながら、夫大事に、わしへも孝行。それは〳〵深切なもの。これからわが身を連れて行き、二人にも逢はさうわいの。

東六　ドッコイ　いゝ氣な事を云ふぞ。得手勝手に連れて行かれて、堪るものか。金出した奉公人、殊にお客の定之進さまが、二百兩で

次郎　請け出すなら、わしも由井の憲法紺屋、田地を賣つても、二百兩で、此方へ請け出す。

東六　なんの、こなたの身代で。よし二百兩出來るにもしろ、お客の方が先約だ。

次郎　せんやくでも、練り藥でも、現在親が、金出して、連れて行くのだ。

東六　さう自由にはならねえよ。

次郎　わしが自由にして見せる。待つてござれ。

ト東六を突きのけ、奥へ入る。

東六　ヤレ、とんだ強情な親仁どのだ。

ト同じく奥へ入る。いろは殘り

いろ　思ひがけなう、假染めにも、云ひ交したる戀しいお方。身のすぎはひは道ならぬ、盜賊の名を流すも、もしや寶の詮議とやら。本名は丹波與八郎さま。其お望み叶はずして、遂に大井川にてお果てなされし、果敢ない御運。直ぐに我が身も共々に、消えなんと思ひしが、せめてゆかりの兄御樣に、お目にかゝらば、あなたのお心、附けての上と、惜しからぬ、命長らへ憂き勤め。

ト懷より紙の戒名を出し

俗名丹波與八郎さま、南無阿彌陀佛々々〳〵々々。

ト回向する。この時願哲、藤川官太夫、ヌッと出て

願哲　さてこそおのれは、お尋ね者の、日本駄右衞門、本名は丹波與八郎の、ゆかりの者とあるからは

官太　紛失の二百兩、大方われが盜んだであらう。

いろ　どうしてわたしが。

官太　イ、ヤ、怪しい。盜賊にゆかりの女、引ッ立てろ。

願哲　心得ました。

いろ　イ、エ、知らぬわいな。

ト「さる程に寺々の鐘」の謠ひになり、いろは逃げ廻る。願哲、追ひかける。いろは、二重へ上がり、暖簾口へ駈け込む。願哲續いて行かうとする。この時暖簾口より、萠黄地に白く唐草を染めたる油單を掛けし伏せ籠を引き出す。願哲これに隔てられ、たぢろぐ。この時雨方より、仲居のお山、お大も雪洞を差出す。

願哲　これは。

やま　今日の趣向は東なる、江戸吉原へ五丁引け、殘る二丁のこの廓。爰へ取越す揚屋の俄、お客の趣向の道成寺。

たい　纏の手習ひ、いろはさんを、身受けのかねいり、鐘供養。

官太　其かねいりの二百兩、疑ひかゝる女めを、庇うて出でたる伏せ籠の内。

願哲　鐘樓の鐘と見立てなら、幸ひ坊主のこの願哲、祈り上げるは瞬くうち、なんの造作も有明の、釣り鐘こそは

ト「すは／＼動く」の謠になり、願哲、身拵らへして伏せ籠を引き退ける。中に竹村定之進、袴の形にて頭より羽織をかむり、いろはを抱へゐて、願哲かゝるをちよつと立廻つて、見事に投げのける。羽織をかなぐり捨て

定之　それ見よ、お客が現はれたり。

ト一口謠ふ。

官太　ヤ、わりや悴

願哲　定之進さま。

山大　御酒も少しは醒めましたかえ。

定之　杯に、向へば變る人ごゝろ、醒めれば又飲む、飲めば又醉ふ。彼の潯陽の江の酒盛りにも、劣らぬ樂しみ。ヨロ／＼とする足元は、道成寺やら、猩々やら、これが誠の亂拍子。持越し酒の腹鼓、なんぼう恐ろしきものあたりにて候ふ。……袖の梅／＼。

山大　ハイ／＼。

ト藥を定之進にやる。

官太　ヤイ、悴。現在親の見る前で、取り所の無いたは事。そちや人事をも辨へぬか。

定之　ホ、ウ、これは誰れかと存じたら、親人樣。酩酊いたして、お見外れ申した。これが兎角に酒の科、眞平御免下さりませう。何はしかれ、これなるいろはを、追ひ廻してござつたのは、親人樣かな。堅い顏して、新造買ひかな。イヤ、中々隅へは置かれぬ。こゝな親人の、通り者樣めが。

願哲　イヤ／＼、左樣な譯ではござりませぬ。その女には詮議がござりまする。

定之　ホウ、其方は坊主ぢやな。さては醫者……醫者にしては見立ての惡い。女の病は癪の痞へ。女に疝氣があつてよいものか。ハヽヽヽヽヽヽ。

願哲　イヤ、そりや詮議のお口合ひでもござりませうが、

その女は盗賊の張本、日本駄右衛門がゆかりの者。御普
請金二百兩、紛失の疑ひかゝつた女ゆゑ
定之　ハテ、それで詮議か。人のせんぎを頭痛とは、この
事ぢや。コレ、よく聞けよ。當所、三保の明神、御普請
奉行は定之進、その預かりの金子二百兩、紛失にもせよ
詮議いたさば、身共がする。出家の其方に、誰れが
願哲　エ。
定之　又、盗賊日本駄右衛門がゆかりの女と、疑ひかける
が、駄右衛門が盗賊ぢやとて、語らひし女まで、盗人根
性があると、きまつた事でも無いわサ。殊に、駄右衛門
は首になつて、この世に亡き人。また盗賊のゆかりばか
りで、疑ひかゝらうなら、この定之進も矢ッ張り盗賊。
願哲　どうしてあなたが
定之　ハテ、日本駄右衛門の實名は與八郎、即ち身共が實
家の由緒といへば、養父たるこの親人まで、盗賊のゆか
り。
官太　ヤ。
定之　詮議立てを致したら、藪を叩いて蛇とやら。只ぬら
くらと……サア／＼、酒を持て。
山大　ハイ／＼。

ト酒肴を出す。
官太　ハテ、口がしこく云ひ廻しても、大切な役目を承
りながら、かゝる身持ち。それゆゑ二百兩の金子も紛失。
お上よりお咎めあらば
定之　猪食つた報い、腹一つ。さのみお案じなされずとも
打ちくつろいで御酒一つ。女子ども、酌いたせ／＼。
ト定之進、杯を取る。この時、向うより團助、走り出
て來り
團助　ハッ、お尋ねありし、石井左内が悴半次郎、あの阿
部川にて川越しが、やう／＼捕へて、この所へ、召連れ
ましてござりまする。
官太　出かした／＼。これへ引け。
團助　ハッ。
ト向うへ向ひ
繩附き、これへ引かつしやい。
ト向うにて
中間　ハア、。
ト合ひ方になり、半次郎、浪人の形にて、繩にかゝり、
中間二人この繩を取り、大小を持ち出て來り
下にゐさつしやい。

ト半次郎、下にゐて思ひ入れ。官太夫、半次郎を見て
官太　すりや其方が、石井左内が悴よな。
半次　如何にも、同苗半次郎でござる。この身にとつて、かゝる繩目にあふべき事、さら〳〵覺えござらぬを、理不盡に捕へ、この如く、何科あつて某を
官太　イヤ、覺えないとは卑怯者。現在身共が弟たる、源吾を勢州龜山にて、討ち果したる半次郎。弟の敵。
ト定之進、半次郎を見て
定之　すりや、あの若人が、甥の源吾を
官太　討つたる敵の半次郎、この場へ召捕り來りし上は、直さま敵を討たざれば、養父へ義理も立つまいに、色と酒とに性根を奪はれ、素知らぬ顔は、他人根性。實の伯父なら討つであらうに。
定之　イカサマ、養父の實の弟、源吾を討ちしは半次郎。某とは實家の從弟。血筋の緣に引かされては、養父へ濟まぬ武士の義理、さらば身共も改めて、
ト居ずまひを直し
女ども、大小これへ。
トお山に、後にある大小を取らせ
斯く姿を改むれば、藤川官太夫が悴定之進、武士の政道いま爰で。……如何に、石井半次郎。何ゆゑあつて身が甥たる、赤堀源吾、浪人いたして八平次、彼れを殺害なしたる意趣、逐一申せ。なゝ、なんと
ト半次郎、定之進を、つく〴〵見て
半次　ハヽヽヽヽ、強酒賢なし、獨酒また愚なりとは、おことらを指して云ふべきか。あはれ、丹波の御子息も酒色に溺れ、それ程まで。酒興の說法、取るには足りねど、身が八平次を討ち果せしは、現在、親の石井左内、彼れが爲に討たれしゆゑ、共に天を戴かぬ仇敵。折よく勢州龜山にて出會なし、親の敵と、如何にも討つた。又貴殿の實父與惣兵衛どのも、都三條にて暗討ちにあひ、その敵さへ得知らず。如何に養子とはいひながら、敵を尋ぬる所存も無く、のめ〳〵として居らるゝは、それでも武士か、侍ひか。刀の手前も恥ぢぬのか。それに引かへ、この半次郎は武士道立つて、親の仇、討ちしとあつて、この繩目、殊に、源吾は、殿樣の御前にて、勘當受くれば、これ以て、御身達に緣も無ければ、敵討ちと云はれん筋はなし。それとも非道に某を、敵と呼ばゞ容赦なく、この場で運を極めんか、見事、勝負を決する心か。
定之　サア、それは。

半次　サア

二人　サア／＼／＼

半次　腰拔け武士の魂ひが、半次郎が身に立たうと思ふか。愚な事を。

定之　ホイ、これは閉口。あんまり早く云ひ込められた。併しながら、理の當然。兄弟、伯父、甥に緣が切れなば、成る程、敵といふ筋も

願哲　イヤ／＼、そりやあなた、御卑怯だ。それでは養父の官太夫さまへ、義理が立つまい。

定之　ハテ、又しても出家の差し出。一體、其方は何者ぢや。

願哲　エヽ。

官太　イヤ、あの者は以前の家來、一旦暇を出したれど、今日からは元へ戻して、以前に變らぬ下部の段介。

定之　すりや親人の

官太　如何にも家來だ。

願哲　さすれば下郎が爲にも主人の敵。あなたは義理ある甥の敵。この場で早く。

定之　でも、殿の御前で、勘當された源吾ゆゑ、その敵とて討つなれば、これ即ち私し事。武士の意氣地に討つては討たれ、討たれては、又その仇を討たうなら、億萬劫を經るとても、恨みの盡きる期はあるまい。

官太　すりや、どうあつても

定之　ハテ、又敵討は天下の御法度。野暮を云はずと、兎角浮世は、酒の事／＼。

ト官太夫、願哲、呆れし思ひ入れ。この時奥にて

水右　イヤ、その敵は身共が討たう。

ト水右衞門、ノツ／＼と眞中を通り、舞臺へ下りて來る。願哲見て

願哲　あなたは以前の若旦那。

水右　官太夫が總領、藤川水右衞門、勘當受けて斯くの浪人、それゆゑ跡へ、ぬく／＼と、養子にござつた定之進。他人の家を丸呑みに、しようと思ふ慾心から、義理も、法も、打捨てゝ、命が惜しさに四の五のと、敵討ちを遁がれる心と見たゆゑ、面押拭うてこの場へ出たも、流石血筋の實の甥、源吾が最期の無念さゆゑ。源吾が敵は水右衞門、只今この場で討つて見せう。

定之　すりや、其許が

官太　この官太夫が實の忰、其方が爲にも義理ある兄だワ。

定之　イヤ、たとへ兄でござらうとも、親人の勘當なりや、

水右　親子でも無し。親子で無ければ某と、兄弟でも無し。兄弟でなければ、義理も無し。いつまで云うても同じ事。

水右　知れた事、勘當の某なれば、お身とは元より兄弟でないが仕合せ。その義理知らずの腰抜け武士と、僅かな緣でもあると云はれては、どうか身內が、ぞく／＼と、むさい、汚い。ヤレ、穢らはしや／＼。そんな人非人に論は無益だ。サア、これからは實の甥、源吾が敵の半次郞、この場に於てぶッ放す。覺悟しろ。

半次　寄りも寄つたり無道人。この半次郞は、親の敵を討ちおほせ、望み足りたる上からは、惜しむ命にあらねども、願はくば伯父者人、與惣兵衞さまの敵をも、討つたる上にて、二品の、寶詮議し家再興、願はんものと思ひしに、如何なれば、石井、丹波の兩家には、斯くまで武運拙くて、照らす月日もあらざるか。思へば／＼口惜しい。

水右　よまひ言はそれぎりか。今が最期だ。……親人、刀を拜借。

官太　出かした、伜、これですッぱり。

ト刀を拔き、渡す。水右衞門受取り

水右　童を爰へ引摺り出せ。

願哲　ハッ。

ト半次郞を引据ゑる。この時、障子の內にて

調之　水右衞門とやら、暫らく待て。

水右　ヤ。

ト振り返る。上手の障子開く。內に由留木調之助、莨盆を扣へゐる。

官太　あなたは若殿。

定之　調之助さま。

調之　如何に、官太夫、某未だ幼少の砌りなれど、伜たる水右衞門、父の御前にて改易を蒙り、其方も勘當せし事、明白なるによつて、與惣兵衞が伜を、養子に遣はしたる父のお指圖。それに又ぞろ今日只今、水右衞門を伜なぞと、私しに呼はるは、この調之助を若年と侮つての致し方。水右衞門が勘當は、其方一存にて免したのか

官太　イヤ、全く以て。御前にて勘當いたせし、これなる伜、何しに拙者が一存にて。

調之　年に似合はぬ官太夫が政道。近頃以て、行屆かぬ致し方。それにて老職が勤まらうと思ふか。たはけ者めが。

官太　ハ、ツ、恐れ入つたるお叱り。さりながら、御覽の如く、大切なる普請奉行の役を蒙むりし、養子の定之進

が身持ち放埒、役目の怠り。殊には、普請の用金二百兩紛失。これとても遊所通ひにこ、もう致せし不屆き者。それゆゑ御用の間も相缺け、親の身に取り、恐れ入つてござるゆゑ、定之進には切腹いたさせ、何卒實子の水右衛門、最早心も直りますれば、御改易御赦免あつて、忠義始めに右の御用を。

調之　イカサマ、役目を怠り、奢りに長ぜし定之進が科、此まゝに打捨て置いては、政道が立たず、キッと糺明申し附くる。……併し、かゝる不屆き者とも知らず、大切の役目申し附けしは、予が目違ひ。切腹いたさせなば、却つて身が恥辱を、世上へ流布も同然。又、官太夫にも養子に切腹いたさせ、實子を取立てゝは、世の人口も何とやら。そこを存じて、願ひに任せ、定之進は改めて勘當。父に代つて水右衛門が、勘當免し、直さま定之進が役目の代り。

官太　すりや、悴水右衛門の勘當免し、御普請奉行の役目を

調之　申し附くる上からは、定之進に代つて出精いたせ。

　ト官太夫、水右衛門、顔見合せ

官水　エ、、有り難うござりまする。

いろ　そんなら今日から定之進さまは

やま　御勘當でござりまするか。

官太　如何にも。縛り首にも致すべき奴なれども、若殿の御仁心、命助けて勘當いたす。

水右　拙者はこれより御普請奉行。

官太　コリヤ〳〵。官太夫が家來。身が衣類と着替へを持て。

家來　ハッ。

　ト下座より家來、廣蓋に衣裳、袴、大小を載せ、持ち出る。

水右　そんなら、これを

官太　直さまこれにて。

願哲　サア〳〵、お召しなされませ〳〵。

　ト願哲手傳ひ、水右衛門に衣裳を着せる。水右衛門、大小差し

水右　斯く姿を改むる上からは、元の藤川水右衛門。大切なる奉行の役。扶持離されの定之進、座が高い。下からつしやい。

　ト合ひ方になり、水右衛門、ノシ〳〵と二重へ上る。定之進、しを〳〵と舞臺へ下りる。お山お大いろはも

同じく附添ひ、下りる。この時下座より、次郎作出て
來り
次郎　ヤヽ、そんなら娘を身請けのお客樣は、御勘當か。
……ヤ、、あなたは倅藤助か、御奉公先の若旦那。この
マア繩目は、どうした事で
願哲　ヤイ〳〵。かしましい。扣へぬか〳〵。
と叱る。
次郎　ヘイ〳〵。
ト不思議さうに下手に扣へる。
牛次　人間の榮枯は、あざなへる繩の如し。心柄とて定之
進どのゝ、榮耀も忽ち勘當の、それに引かへ、水右衛門ど
の、思ひがけなき身の幸ひ。
定之　不義の富貴は浮べる雲、悔むは愚か。某も、昨日の
大盡、今日の乞食。廓の遊びも十分の、滿つれば虧くる
世の諺、勘當受くれば主も無し、義理立て致す親兄弟の
緣が切れゝば、この上はない。この身の幸ひ。ア、〳〵
野暮な武士の附合ひ、ほつと致した。あゝいふ野暮な手
合ひと、ヤレ、親ぢやの、兄弟のと、緣を組んでゐたか
と思へば、どうか身内が、ぞく〳〵するやうで、むさい、
汚ない。ヤレ。穢らはしや〳〵。ハ、、、、、、。これか
ら我れらは天井抜け、誰れに遠慮もなみ〳〵と、酒と色
にて暮らすのが、何より樂しみ。
調之　願ひの通り、定之進には、勘當受けて、さぞかし……
……イヤ、この度の浪々も、主親の、即ち罰と心得よ。ハ
テサテ、不所存者め。
水右　サア、この上は元の如く、勘當免れた上からは、親
に繫がる實の甥、源吾が敵の牛次郎。この場に於て。
官太　如何にも緣は血筋の敵。イザ、倅。
調之　イヤ、その敵討ち、相成るまい。
官太　でも、倅が元へ戻れば
調之　例へ血筋の緣にもせよ、水右衛門は大切な、普請奉
行の役目でないか。
官太　エ。
調之　小敵と見て侮らず、もしも勝負の運により、返り討
にあふ時は、どの命を以て役目を勤める。
水右　サア、それは。
調之　命は君へ奉る、これが武門の奉公ならずや。
水右　サア。
ト思ひ入れ。
調之　忠義の道は知らぬぢやまで。ハヽ、、、、、、。さり

なれど、半次郎が父左内、殺害なせしは、予が兄の馬之助どの。その砌り、助太刀なせし赤堀源吾。兄はその場に切腹なせど、源吾はその砌り勘當せしは、せめて敵を討たせん爲なれども、兄の官太夫、弟の最期を無念に思はゞ、幸ひこれなる坊主こそ、主人の敵なれば、この場に於て半次郎と、勝負を決し、討ち、討たるゝは互ひの運。

願哲　どうして／＼、私しが、縛つて置いたら、格別の事。本の勝負は。

調之　すりや、現在主人の敵でも、討つ氣は無いか。

願哲　それぢやと申して。

官之　其方が討たねば外々に、討つ事ならぬ役目の主用。

水右　コリヤ／＼、段介。何も案じる事は無い。たかゞ、小童。後には身共が附いてゐる。

ト呑みこませる。

調之　予が直々の檢分なれば、助太刀は一人も叶はぬ。

半次　すりや、この場にて。

調之　半次郎の繩を解け。

皆々　ハツ。

ト半次郎の繩を解き、大小を渡す。

調之　互ひに意趣あるこの勝負。心措きなく

願哲　主人の敵。

半次　伯父の敵の慥かに片割れ。

願哲　エ。

調之　双方支度。

半次　ハツ。

水右　段介、ぬかるな。

願哲　心得ました。

定之　オツト、急くまい／＼。敵討ちの、始まり／＼。

ト太鼓を打つ。

半次　イザ。

願哲　イザ／＼／＼

ト鳴り物になり、兩人拔き合せ、立廻りのうち、半次郎危ふくなると、定之進、太鼓を打つ。

次郎　太鼓だ／＼。

ト棒にて願哲を止める。官太夫、水右衛門氣を揉む。また兩人立廻り、半次郎踏ん込んで願哲の眉間を打つ

水右　ソレ、太鼓だ／＼。

ト定之進、知らぬ顔して居眠つてゐる。半次郎、附け入り、切り込むゆゑ、願哲、受け太刀になり、水右衛

門。堪えかねて手裏剣を打つ。半次郎、すかさず身を
かはす。この小柄、願哲の膝板へ立つ。願哲「ツッ」
とくるしむ。

南無三。

次郎　助太刀は、ならぬ／＼。

ト思ひ入れ。官太夫、堪えかねて抜きかける。定之進
頻りに太鼓を打つ。

調之　ト官太夫を杖にて當てる。此うち、願哲に半次郎とゞ
めを刺し、小柄を抜き取る。

調之　小腕なれども天晴れ手練。大事の敵、討ち負ほせぬ
は段介が不運。又敵討ちは天下の御法度。官太夫親子、
よも助太刀は致すまい。

官太　すりや、此まゝに。

調之　半次郎もこれより、雷丸と九重の印、二品ありとも
詮議して、石井、丹波の兩家を再興。

半次　ハツ、有り難き御仁政。この上ともに。

調之　與惣兵衛が敵も大概……手がゝり知れなば、これを
も首尾よく。心得たか。

半次　ハツ。

官太　思へば／＼、家來一人、棒に振りしも、定之進めが

定之　太鼓の掛引き、きついものか。

官太　兎角に邪魔な。

ト團助に目で教へる。

團助　仲間のよしみ、追善代りに。

ト定之進へ切りかけるを、定之進、突き廻し、扇にて
押へる。この時、團助が懐より、最前の二百兩を落
す。定之進、手早く取り上げ

定之　ヤ、、數も大方二百兩。覺えの打ちかへ。

團助　南無三。

ト又かゝるを、定之進、見事に切り倒し、手早く金を
取り上げ

定之　思ひがけなき奉納の金。

官太　ヤ。

定之　イヤ、これが奉納の引摺り込み。それゆゑ勘當、こ
の體裁。

官太　そんなら、われが。

定之　盗み取つたも、いろはが身の代。ソレ、親元へ。

ト投げ出す。次郎作取つて

次郎　娘が身抜き。ニ、、有り難い。

水右　イ、ヤ、後の役目を蒙る某が、御普請金を自由に

調之　は

調之　イヤ、あの金ゆゑに定之進が勘當、金が出づれば科も無く、役目を元へ戻しなば、水右衛門は矢張り浪人。

水右　エヽ。

調之　あながち詮議に及ばぬ事ぢや。

水右　エヽ、片贔屓な……イヤ、結構なお裁きだ。

調之　一旦心穢れた者の、手に觸れたりし二百兩。神の普請の用には立たぬ。

官太　でも、みす／＼二百兩。

調之　出所を詮議したなら、そこら、こゝらに科人が……イヤ、最前より餘程の隙いり。殊に、この程普請の延引武將へ聞えも如何なれば、今より直ぐに明神の、社頭へ參つて何かの手配り。

水右　奉納の役目の水右衛門、棟梁どもを呼び寄せて、日ならず成就いたすやう、割り普請の工夫いたすでござらう。

官太　某とても同道いたし、帳面その外、御用の吟味。

調之　然らば一緒に

水官　お供いたすでござりませう。

山大　わたしらも、大門までお見送り。

ト調之助、官太夫、水右衛門、下手へ來る。

牛次　然らばこの後運に叶ひ、伯父の敵も討ち負ほせ、二品出づるものならば

調之　歸參は卽ち予が胸に。

水右　痩せ浪人の分として、敵討も片腹痛い。まだしも童の牛次郎は、身共が甥を武士らしく、親の敵と討ち取つたに、それに引きかへ、大腰拔けの定之進、實父の敵も得知れず、負け惜みの空穿鑿。酒でも無理にとち喰はずば、世間へ濟むまい。すんでの事に藤川の、名跡までも穢すところ。天の照覽明らかにて、水右衛門が忠心現はれ、家名を繼ぐも天の爲す業。

定之　イヤモウ、何事も天次第。人が笑はうと、指差さうと、樂に暮らすが一生の德利の德。スッテンテンの三味線枕、死なざやむまい義理の二字。こればつかりが

牛次　エヽ。

定之　野暮だてな。

調之　表面から、見えぬながらも、日頃に變つて

官太　酒色に溺るゝうつけ者。

水右　今まで身共を浪人させ、親の知行を、ぬく／＼と、喰ひ潰したその勘定。いま相續の水右衛門、土足にかけ

て
ト定之進を蹴倒す。定之進、其まゝ横にコロリと寢る。
ハテ、張合ひの無い。

調之 實に細瑾を顧みぬ、大丈夫なる、あたら家來を……イヤ、家來の兩人。

官太 若殿樣。

水右 まづ、お入りあられませう。

ト唄になり、調之助先に、水右衛門、官太夫附添ひ、その外若い者、中間、お山、お大、附いて、向うへ入る。半次郎、いろは、次郎作殘り、思ひ入れあつて

半次 心得がたき定之進どのゝ心底。若殿の詞の端。正しく官太夫親子こそ、伯父の敵。殊に、お家に仇する曲者。此まゝ置かんも本意ならず。

いろ わたしも身儘になる上は、過ぎ去りし夫、與八郎さまの父御、この身の爲には舅御の敵。

次郎 悴藤助が爲には、若旦那のあなた樣、兄と一緒に心を合せ

半次 跡追ひかけて親子もろとも。事によつたら、寶の手蔓

いろ これより直ぐに

半次 ちつとも早う。

次郎 サア、ござりませ。

ト三人身拵へして、ツカ／＼と花道まで行く。定之進、置き上がつて

定之 ヤレ、待て、三人。今おことらが駈け出して、何を證據に敵呼はり。

三人 ヤ。

定之 如何に若いといひながら、同勢多き藤川親子。無慚に命落す心か。

三人 サア、それは。

定之 さりとては思慮も無く、したゝか醉つた身共より、一吸飲まぬお身達が、こりや、きつう醉うて居るさうな。

トこれにて三人、舞臺へ戻つて來り

三人 そんなら、あなたの本心は。

定之 まこと骨肉同姓の、弟に敵を討たせんと、千々に心を碎くわやい。

半次 心得がたき其お詞、弟與八郎どのは

いろ 疾にこの世を

定之 去りしと世上へ流布させしも、敵へ油斷させんが爲、寶詮議に盜賊の首領となり、その名も即ち日本駄右衛門。

遠州にて頭を刎ねられ、獄門にかゝりしを、某實見すれど、父上のお噂ありし高頬の黒子無きは、慥かに似せ首。

半次　すりや、與八郎どのは存命で

定之　世を忍ぶのも寶の詮議。又二つには親の敵。

三人　して、その敵の實名は。

定之　サア、その實名が明らさまに、名乗られぬゆゑにこそ、大切の御用金、奪ひ取つて身の科を、作りて今こそ申し譯、武士の覺悟の

ト肌を脱ぎ

この切腹。

ト腹卷きを取る。下に鐵砲疵受けてゐる事。

三人　ヤ、、これは。

ト竹笛入りの合ひ方になり

定之　いつぞや都三條にて、父の横死のその場所で、思はず通りかゝりしに、我れを目がけて打つたる手裏劍。

ト懐より、發端にて手に入りし小柄を出し

模様は後藤の千疋猿、これぞ養父の官太夫、對に彫らせし二つの小柄、一つは實子の水右衛門。勘當の砌りに遣はせしと兼ねて聞く、殘る一つは養父の所持　さすれば敵は養父とも、又、勘當の水右衛門とも、分明ならねば、所詮敵は討たれぬこの身。明らさまには云はれぬ義理。それゆゑ身持を放埒に持ち崩し、勘當受けて緣を切り、行くへ知れざる弟を、尋ね出してこの樣子、語らんものと思ふうち、大井川にて計らずも、身が乘り物へ撃つたる鐵砲。これは正しく弟が、我れを父の乘り物ぞと思ひ違ひて撃ちかけしと、推量せしゆゑ、苦痛を堪え、今日まで酒となぞらへて、服藥なして、命延はりしも、現在兄を打つたりと、沙汰させまじき爲ばかり。それゆゑこの身に科を拵らへ、切腹なりと披露して、死したる後はこの樣子、一旦夫と契りたる、これなるいろはに打明かし、與八郎へ告げさせんと、身請けなしたもこの儀ゆゑ。ところに、計らず半次郎、めぐり逢ひしは猶以て、女が力に。まつた、いろはが兄といふは、半次郎が家來とやら。この人々に頼み置かば、氣遣ひなし。何卒弟與八郎、尋ね求めて、親の敵、二品ともに詮議して、丹波、石井の兩家を再興。くれ〲頼み、二つには、義理にしがらむ定之進、武士道捨てゝ相果てし、切なき心を弟に、傳へてくれよ、半次郎。

半次　ハ、ア、其お心と知らずして、愚にも先刻より、過

言、雜言、勿體なし。さるにても、敵の證據のその小柄、二つあるとの其お詞にて、思ひ當るは最前の、段介と勝負の節、某へ打ちかけし、水右衞門が所持の小柄と、コレ。

ト出して引比べ

模樣は變らぬ千疋猿。

定之　それこそ最前官太夫が、あの場で讓りし自分の差添へ。さすれば以前打ちかけしは、これぞ彼れを勘當の砌り、所持なせし小柄なれば、敵は正しく水右衞門。

半次　かゝる證據のある上は、寶詮議の與八郎どの、面會なして諸ともに。

いろ　わたしも戀しい與八郎さま

次郎　兄が爲にもお主の敵、これから直ぐに、三人、心を一致にして

半次　やがて本望。氣遣ひあられな定之進さま。さはさりながら、此まゝに、果敢なきお別れ、

いろ　思へばこの身を請け出す金、それが科とて勿體ない。

定之　ハテ、それでなうても鐵砲疵。所詮存命思ひも依らず。最早只今知死期時。

ト弱る思ひ入れ。

三人　そんなら最早、お命は

定之　イヤ、めでたい門出。不吉の涙。

三人　それぢやというて

定之　草葉の蔭からよき吉左右、待つて居るぞよ。

三人　モシ。

ト三人、定之進に取り附き、これにて、ヌサ〳〵として、屋體の側へ來り

定之　ムウ、……めでたい。

トにつたり、思ひ入れあつて、ガツクリとなる。

三人　ハア、。

ト泣き落す。これにてこの前へ、一面に黑幕を振り落す。

淨瑠璃名題

松涼し
あれ天人も　須臾三保浮氣實
世話女房

相勤めます役人

淸元延壽太夫
同　政太夫
同　志喜太夫

三絃　淸元榮次郎
同　磯八

尾上松助　坂東三津五郎
尾上菊五郎　岩井粂三郎
市川團十郎

本舞臺、向う一面の浪幕。この所に極彩色の並木。上の方に振りよき磯馴れ松。この枝に前幕の孔雀染めの振り袖掛けてあり。この側に「羽衣の松」と書きし高札。下手に藁葺きの漁師小屋。軒に畚、麻縄など掛けてあり。すべて駿州三保の洲崎、綺麗に飾り附け、舞臺眞中に船を立て、これに帆莚干してあり、ズツと上の方に淨瑠璃臺、淸元連中居並び、浪の音、一聲にて道具納まる。

〽風早の、三保の海邊を漕ぐ船の、浦入り騒ぐ、浪路かな浪路かな。

ト眞中の帆莚取れると、内に漁師助市、柿の筒袖、絞りの浴衣、腰簑にて、大きな畚に倚りかゝり、釣り竿をかたげ、居眠つてゐる

〽樣は入り江の淡水の底よ、すまし過ぎたで、汐が無い汐が無い、しよんがえ〽海女のいさりのざれ唄も、いづれ戀路をこがるゝ船よ、そこへ一針釣りの糸、風に結ばる縁ぢやとて、今度思はずこの浦へ、吹き附けられし仕合せは、冥加至極も浪煙り、晴れて夕日に三保の浦、松も霞の三重襷、景色に見惚れ佇めり。

トこの文句のうち、助市、目を覺まし、よろしく振りあつて納まる。思ひ入れあつて

助市　ハ、ア、絶景かな〳〵。紫蓋の巖頭、嵐疎らにして雲七百里の外に納まり、と唐の歌にもいひし如く、三保の洲崎の浪靜かに、又、芙蓉の峰、愛鷹に連なりし有樣。いつ見ても〳〵、倦む時あらぬこの風景。イヤモウ、どうもいへぬ〳〵。

トあたりを見て、松ケ枝にかゝりし振り袖を見附け

ヤ、所に目馴れぬ孔雀染めの振り袖、この松ケ枝にかゝりあるは……この松こそその昔、天津乙女の、羽衣を掛けしと聞く。その風情に似通ふ振り袖。我れこそ伯了ならねども、獨り淋しきこの所へ、天人でも下れよかしと、思ふ折ふし、派手なる振り袖。時にとつての、心も浮き島。併し道々、町の女郎が、この海へ身でも投げたのではないか。ハテ、どうも合點がゆかぬわいの。

〽眺めに飽かぬ有度濱に、天の羽衣むかし着て、ふりけん袖のそれならで。

ト向うより民部之助、やつし、石持ちの紋附き、麻の輕衫を穿き、片襷、おのぶ、田舍染めの振り袖褄端折り、同じく片襷にて、手桶に染め物の布を大分入れてこれへ竹を通し、兩人してこれを提げて出で來り

へこれは衣を染め物や、藍の加減も吉岡の、憲法染めと人每に、由井の宿から三保の洲の、張り場へ通ふ干し物も、水入らずなる若い同士、離れぬ仲とどこまでも、つけて淸見が關ならで、外の女は留める氣の、悋氣ぢやないが、これまでに、惡性駿河の二丁町、後に見なして此方から、むかひ町とは、てもさても、有り難いではないかいな、仲もよそ目にうら大和屋と、あんな女夫に成田屋も、嘻嬉しく恥かしく、連れて引き合ふ手と手桶、提げてたゆけく來りける。

ト民部、おのぶ、花道にてよろしく振りあつて、本舞臺へ來る。

のぶ　アレ、見なさんせ、こちの人。每日々々この洲崎へ干し物に來るわたしらが、ついぞ見馴れぬ釣り人さん。

民部　それよなア。その上、あの羽衣の松に、美しい振り袖のかゝりあるといひ、取りも直さず、羽衣の昔の樣、マア、なんであらうと、聞いて見よう。

ト民部、助市の側へ來り

コレ／＼、釣り人どの。ついぞ、この浦には見馴れぬ人ぢやが

のぶ　お前は、どこから、來なさんしたぞいなア。

助市　これは、此あたりに住む、伯了と申す漁夫にて候ふ。……イヤ、それは昔の故事も、聞いたばかりで見るは初めて。四五日あとの沖荒れに、漂流して、この浦へ、吹き上げられし漁師の助市。風待ちのうち、トロ／＼と、一睡の夢の間に、この松ケ枝にかゝりし振り袖。これこそてつきり天の羽衣。天人が來るのであらうと、樂しんでゐたところへ、天女も及ばぬぼつとり者。併し、夫婦連れで來られては、少し當ての辻が、違ふやうな心持ちぢやて。

民部　そんなら、漂流して、この浦へござつたのか。ヤレヤレ、それはさぞかし難儀でござらう。わしらは爰の者でもござらぬが、由井の宿の吉岡紺屋

のぶ　每日々々、この三保の洲へ、干し物に來る者でござんす。

助市　ハヽア、嘻に聞いた憲法染め、夫婦仲よう張り場の干し物、ハテ、羨ましい。幸ひの二人の衆、この羽衣の

松の由來、又は處の名所、舊蹟、近所の衆とあるなれば、話して聞かせては下さらぬか。

民部　イヤモウ、處に住めどかたくなの、田舍育ちの事ゆゑに、名所とも、舊蹟とも、知らぬながら、多少の緣、覺えただけは今こゝで、

助市　イヤ、それは有り難い。

民部　先づ、羽衣の松の故事、人も知つたる事ながら

へいにしへ遠き天津空、月宮殿には天人の、數を三五に分ちつゝ、一月夜々の天乙女、仕事を定め、役を爲す へ中に浮氣のおいそれ乙女、下界の男を釣りに出て、餌の羽衣取上げられ、せう事なしの、どれ合ひ女夫。

トおのぶ、前へ出て

へその睦事は、誰れ白浪の、寄する渚にすなどりの、汐汲む肌にひきしめて へコレ、申し へ緣でこそあれ、此やうに、人間さんと肌ふれて、覺えぬ賤の手業さへ、して見たかりの女夫氣は、嬉しからうぢやあるまいか、それを疑ふお前の心、嘘、僞りは人にこそ、わたしや眞實、お月さんかけて、離るゝ心はないわいな。

ト助市、押分けて

へオヤ、名所話しをかこつけて、男やもめを側に置き、その氣味合ひは御免なれ、わしらも國では、ちつくり、そつくり、袖褄引つかけた、夜網の船の櫓拍子に へ昨夜の寐酒がまはり過ぎたで、夜がな夜一夜妹せゝる、妹ぢやとて、憎む事ではなんけんけれどな、朝出の船に腰がふらつきや危なうござる、今朝はいなさで、浪が高さに、案じられ申すとナアエ へこれが互ひの誠ぢやえ。

ト助市よろしく納まる。

のぶ　ほんに女子はこれ程に、誠を盡せど、矢ツ張り男は

助市　性が無いやら、有るやら、ア、、見せたいな〳〵。誰れぞわしが相手になる、氣紛れな天人でも、どうか來さうなものぢやなア。

へまつに折よく、景色よく 月の武藏の青葉時、浮れやすさの旅ごゝろ。

ト向うより八重梅、中年增の拵らへ、前垂れの上より眞田の上締めをして、手拭をかぶり、藤倉を穿き、竹に摑みし火繩を持ち、莨のみながら出てくる。

へ身延參りの戾りがけ、ついでに寄つて彌勒町、商賣向きと、女の身でも、せうが生れは有り難い、東育ちを駿河まで、遊びながらに三保の浦、供は幇間の喜作とて、旅の憂をも忘れ草、笑はせ上手の仇口も へ輕いはずきに藤

倉や、砂踏み分けて美しう、拾ふ梅貝、櫻貝　ヘそれそれそこにも珍らしいへどれ、どこにヘイヤ、そりや赤貝の持ち合せヘエ、、てんがうなと煙管の火皿ヘオ、、熱熱い砂路を道草も、急がぬ旅の氣散じと、打連れてこそ來りけり。

ト此うち後より喜作、幇間の旅形にて、小さき風呂敷を脊負ひ、菅笠を持ち出て、兩人、花道にて、よろしく振りあつて、舞臺へ來る。助市、思ひ入れあつて

助市　ヤア、そりやこそ〳〵、天人が中年增に化けて、來たぞ〳〵。

喜作　この人はなんだ。おらがおかみさんを化け物だ。と んだ事を云ふ。正眞正銘、江戶吉原仲の町のお茶屋のおかみさんだよ。身延參りから此方へ廻つて、駿河の二丁町を見物して、よい子供でもあつたら、藝者に抱へて

ト八重梅、これを消して

八重　これはしたり、誰れも聞きもせぬ事を、さう事細かに云はいでもの事。……ほんに、爰は三保の洲崎、羽衣の松とやらは

民部　卽ちこれでござりまする。羽衣ならぬ、あの振り袖。

助市　そこで天人の新造が來るであらうと思うたに、中年增とは、てん違ひな。

ト八重梅の顏を見て

ヤ、ハテ、よう似たワ。

トこれにて民部も、八重梅へ目を附け、思ひ入れ。

八重　エ、そりや誰れにえ。

助市　サア、誰れと白井の

民部　ムウ。成る程、いつぞや鈴鹿にて

八重　エ。

のぶ　男顏してすつきりと、お江戶育ちは又格別、傾城町のお方には、似合はぬ人柄。

喜作　そりやその筈の事。元は屋敷出、名は八重梅。

助市　ヤ。さてこそ双子の

八重　イエ、八重梅といふは、廓で流行る小唄節。

民部　して、その唄は

八重　サア、それは、……慥か斯うであつたわいなア。

【花に嵐もよいとの浮き世、散らざ櫻も秋ごゝろ、梅が咲けかしな、イヨ、八重梅が枝を、手折る振りして必ずこさせとさ、緣を招くえ、必ずこさせとさ、夢になりとも、なうさての、逢ひたさ見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや、さんさよしなや、よしなやさんさ、さん

な、よしなの思ひ草。

ト八重梅よろしく振りあつて納まる。

民部　それほど逢ひたい見たいといふは、さては御亭主が、旅へでも出られたのか。

八重　イヽエ、わたしはやもめ鳥。尋ぬる人は

助市　アノ弟

八重　エ。

助市　イヤ、男持たぬとあるからは、わしも妻なしの色上戸。話しのなりそな

ト八重梅へ寄り添ふ。喜作隔て

へどつこいさうは參るまい、なんぼ思案の外なればとて、ちよつと逢ふからひつたりと、繩鳥黐もやあるまいし、自慢ぢやないが、こちのおかみさんは、色里に住む甲斐もなく、色嫌ひ、氣障氣が無うて、地酒が好きで、浮かして我れらがお辭儀の花よ、ちよいと浮かれませえ。

ト喜作は八重梅の手を取り、引出して思ひ入れ。

喜作　おも揖、取り揖、ホイ、火事は巽で、お客が仲で、のろけゐる間にモシ、旦那、着きました。

へ客を迎ひの辻占も、浮かれぬものではないわいな。

ト民部、前へ出て

へ浮かれたところへ附け込んで　へ婿に行くとて算盤まで覺え、鼻が、これ／＼で嫌はれた、アしよことがねえしよことがねえと、云うた顏、鏡でよく見れば、我が身ながらもゾツとした、ア、しよことがねえ／＼　へ嫁にやろとて洗濯まで覺え、臍が出臍で嫌はれた、ア、しよことがねえ／＼と、云うた顏、鏡でよく見れば、我が身ながらもゾツとした、ア、しよことがねえ／＼。

トおのぶ、前へ出て

へ及ばぬ戀と諦らめて、こちから相應田舍同士、宿のおやれの心意氣　へ君が來ぬ夜はまぶたも合はぬ、涙のふちへ枕をツイはめた　へいかになよ、旅の殿さ、お草臥れであるべえに、おくわひらつん出しめされば、はだけ申さうさてなア、今日にもお歸りとお笑止や、これは、殿さア、寢まるかな、蚤が多くて、摑んでほうばるべい、かゆくばやはらかにひつかくべい、ヤレサテ、ヤレサテお笑止や　へ恥かしや。

トおのぶ、よろしく納まる。助市、前へ出て

へ我れらはずんと稼ぎ男で、亭主に持つならば、お徳用向きぢや、その癖律義で、正直で、しかも達者で、申し分御座なく候の證文かけて、先づ初春は、七つ起きして、

道中双六、寳船、獨活や白魚、扇々、夏は冷水、枇杷葉湯、萠黄の蚊帳や、心太や、てん蓙、秋の蟲賣り、燈籠賣り、それ、ゆり、はすゝゝ、冬は大福餅、納豆々々、蕎麥や、しつぽく、風鈴も、裸参りやお百度で、戀には身をもいとはぬと、新内節や祭文の、門附けさんも聞き覺え〽さるほどに、これは又、西行の坊さんが、富士の白雪眺めんと、風呂敷脊負うて、笠着て、杖突いて、いとゞたなちりを、ちんゝゝくるりとからげて、東をさして下らるゝ、どこを廻ろか江口の里で、女郎衆が捕へてコレゝゝ、坊さん、西といふ字は西と書く、西へ行くべき西行なるに、なぜに東へ下らんす〽ぬしも東へ一飛びに、飛ばれちやならぬ天津風、年増の姿しばしとゞめん。

トよろしく振りあつて、八重梅にしなだれかゝる。

八重　ほんに、氣輕な釣り人さん、先刻にからの詞の端、さう云はんしても、どうも合點が。

助市　イヤ、ほんの、噓のと疑ひも、ならぬ戀なら諦めて。

八重　ア、モシ。

ト助市を留めて、ヂツと思ひ入れ。

〽思はせぶりに、じやらゝゝと、なぶつて置いて、眞に請けさせて、笑はしやんすと知りながら、迷ふ心の果敢なさは、我が身で我が身が野暮らしい。

ト八重梅は松にかゝりし振り袖を取り

〽ほんに思へば、この振り袖の、似合ふ時分であるならばあと先思はぬ戀の德、今は心も沖の石、人こそ知られうつろひし、櫻が池の仇心、うつゝの山の夢ならば、覺めぬ願ひの藤枝に、しがらむ蔦の細道も、ふた道かけるおやないかいな、男縁なきやもめどり、ならう事なら世を清見潟、晴れて女夫といはれうならば、賤機山の營みも草薙村の手業をも、なんのいとはぬ心から、厚原村の厚皮と、さげすまるゝも身の覺悟、どうぞ返事を駿河なる富士に仕掛けし戀の山。

ト八重梅、この口說きのうち喜作に囁く。喜作、うなづき思ひ入れ。

〽こいつはおつに鳴澤の、ふりかゝつたる五月雨が、中に吉田の粹な雨、宿りも、丁度この藁家、ちよつと狩場の臥す猪の床、夢野の鹿で妻戀を、おつと合點と獨りして、取持つ役はいつとても、しやべり草臥れ、氣くたびれ、ほつとするこそ道理なれ。

ト喜作、振りあつて、助市八重梅を、無理に下手の小屋の中に入れる。

のぶ　ほんに思はず結ぶの緣。

喜作　わしはこれから小吉田で、駕籠も二挺誂らへて、直ぐに江戸へ引ッ越し亭主。

〽さつと極まつた婿入り、嫁入り、直ぐに輿入れ、江戸入り〽こもいり、山椒いり、名代の飴ぢやなけれども、のろけて、とけて、べた〳〵と、うまい仲ではないかいな〽ついでに一杯引かけて〽色と酒とは片山しぐれ、いかな日とてもやみはせぬ、ナア〽どつこい持て來い、一生は夢の間、さ、浮いて暮らしやれ、とう〳〵〳〵、どうでも白地の染め浴衣、身も輕々と江尻前、小吉田さして急ぎ行く。

ト喜作よろしく振りあつて、向うへ入る。此うち、後へ梶六、灘八、柿の筒袖の形にて櫂を持ち出で來り

梶六　謀叛人、動くな。斯く姿を變へて入込みしに、案に違はぬ民部之助、足利どのを覘ふ由。

灘八　上聞あつて、我れ〳〵が、討手の役に向うたり。サア、尋常に、繩かゝれ。

民部　何を云ふやら、そんなむづかしい事は知りません。こんな人達に構うてゐては、商賣の邪魔になる。サア女房ども

のぶ　エ、。

民部　何をうつかり、いつものやうに。

ト以前の手桶を出し

さらば仕事に、かゝらうか。

〽染めやれ〳〵、君樣のおもはく好みに、色も變らぬ染め物は、そも何々ぞ、一に友禪、二に錦、三に漣、四に絞り、五つ今樣、はやり染め、六つ紫、無地紋や、七つ鳴海の摑み染め、八つ八重染め、九つ紺地に、つや〳〵と、十で木賊の色もよく、染めて、晒して、さら〳〵と、晒す垣根も美しや。

ト此うち梶六、灘八かゝるを、立廻りながら、手桶の中より布を出し、上手の松より下手の小屋へ張る事。この文句の切れに、下手張りし繩切れて、布、縦になり、旗のやうに見ゆる。これに菊水の紋染めてある。この時、ドロ〳〵になる。日覆へ黑雲、これに軍扇附いて下がる。民部之助、これをキッと見て思ひ入れ。鳴り物になり

民部　ハテ、心得ぬ。漢公、秦をさけしの時、月にさはるといつし黑雲のきざし。ハ、ア、不吉なるかな。さては我が前生をさとせる修羅魔王、大望成就ならざるの、し

めしなるか

のぶ　エヽ。すりや、いよ〳〵お前は。

民部　如何にも。楠正行の再誕、由井民部之助正雪、松にかゝりし菊水は、卽ち我が氏、楠家の白旗、かゝる大望あればこそ、今まで其方に辛かりしぞ。よしや大望空しくとも、語らひ置きし味方を以て、やがて都へ攻め上らん。

のぶ　夫に附くが女子の道、わたしも共々

民部　命を捨てるか。

のぶ　アイ、覺悟でござんす。

梶灘　その旗渡せ。

民部　小積な事を。

〽思ひ込んだる猛勇の、姿勇まし古木の松、しがらむ妻も姫かづら、甲斐々々しくも組み附く捕り手、投げ退け、突き退け、あと先も、見えみ見えずみ三保の浦、霞に紛れて

ト民部之助おのぶ、梶六灘八を投げ、一散に下座へ入る。助六、灘八起きあがり

梶六　南無三。取逃がしたか。

灘八　跡追ひかけて

兩人　さうだ。

ト浪の音になり、兩人下座へ駈けて入る。時の鐘、メリヤスがゝりの淨瑠璃になる。

〽緣は異なもの、いづくの果に、結び捨てたるものぢややら、一方ならず、薄からず、染めて戀とも夕空の、引いて歸るが、嬉しうてならぬ。

トこの文句にて小屋の中より、八重梅、助市出て、兩人こなしあつて

助市　そんなら、いよ〳〵、權八が双子の同胞。

八重　サア、わたしも行くへを尋ねる爲、わざと廓に……マア、何事も、とつくりと

助市　サア、これから直ぐに江戸へ行て

八重　わたしが內へ

助市　引ッ越し亭主は有り難いが、初めて逢うて氣心も

八重　ハテ、今に晴るゝも、アレ〳〵、あの雲の

助市　風に任せて。

ト後の浪幕切つて落す。向う打拔き、田子の浦の景色見える。

アレ〳〵、向うに田子の浦

八重　いま見納めの

兩人　名殘りの景色。

〽はるかに見やる驛路さへ、わしが思ひをえい知りもせず、心興津のなんぢややら、由井ほどかれぬ他人氣は、癇にさはるぢやないかいな、たとへ百歳逢うたとて、ちよつと初めて逢うたとて、思ひ合うたる心と心、なんの變りがあろぞいの、末よし原に結ぶ緣、積る思ひも解けそめて、もう疑ひは夏の富士、憎や返して雲の峰。

八重　地金現はすわたしが心。

助市　やがて聞いたら、この胸も

八重　富士にかゝりし雲もろとも

助市　ヤ。

八重　粹な風ゆゑ、モシ。

　ト助市に寄り添ふ。これを木の頭

〽晴れて姿や見せぬらん〳〵

　トよろしくキザミにて　ひやうし幕

　この幕、夏の富士を畫きし幕を引く。あとシヤギリ。

五幕目　沼津芝居の場

千貫樋の場

地獄盆踊りの場

箱根山中の場

金剛院別莊の場

役名——石井半次郎、旅人、北八。亡者、願哲。同、赤堀源吾。庄屋、馬右衛門。旅人、彌次郎兵衛、亡者、さぼ九郎、刎川久馬。醫者、當庵。木戸番、築兵衛。亡者、づぶ六。同、おかや。堂守り、西念。小道具師、捨八。箱根の甘酒屋。雲助、闇八。同、源五。役人、薪吾。百姓、婿七。亡者、どぶ六。同、義兵衛。菊川兵馬。由井の次郎作。小萬婆、お浪。信濃屋お半。大工、小西の八。丹波與八郎。大工、牡丹獅子の八。藤川水右衛門。大江息女、重の井姫。

知らせに附き、富士の幕を後へ寄せる。時の鐘になり、向うより北八、法衣の形にて出で來り

北八　アヽ、只さへ旅は憂いものといふが、長の道中を食はずに歩くといふは、さて〳〵辛いものだ。路銀も無い

ゆゑ、夜通し歩き、眠さは眠し、疲れはするし、それに又、この彌次郎兵衞は何をしてゐるか。

ト云ひながら舞臺へ來る。幕の內より囚人駕籠、これに金澤無宿蝮の次郎吉と書きし札を下げ、これを雲助二人して擔ぎ、後より黑四天の捕り手二人附き、鶉權兵衞、腰繩にかゝり、新吾この繩を取り、雲助一人、風呂敷包みの雜物を擔ぎ、出で來り

人足　ヤイ〳〵、方寄れ〳〵。

ト北八、悔りしながら、よく〳〵見て

北八　なんだ、殿樣だと思つたら、科人だな。おきやアがれ。科人に方寄つて、ましよくに合ふものか。

捕手　ヤイ〳〵、大切な囚人、役人の我れ〳〵が附いてゐるのに、慮外な奴め。

北八　なんだ。役人だ。役人衆でも、天智天皇でも構ふものか。此方は錢無しで旅をするのだ。囚人にけじめをくつて堪るものか、途方もねえ。

ト無性に太平樂を云ふ。權兵衞、北八を見て

權兵　カウ〳〵、貴樣の錢の無えのを、ナニ、あなた方が知るものか。とんだ事を云ふ男だ。

北八　なんだ。てめえも科人の癖に、惡く洒落るな。

權兵　おらア科人ぢやアねえ。見知り人だ。

北八　見知り人の用心、小用心が、聞いて呆れらア。

新吾　此奴、大分洒落る奴だな。

捕手　裸身へ法衣を着て、怪しい風體の奴だ。

同　一緒に縛つて、江戸へ引いて行く。腕廻せ。

ト北八を捕へる。北八、振り切つて逃げようとする。捕り手、十手にて北八の眉間をくらはせる。これにて傷つく。

北八　ヤア、ぶつたな〳〵。疵が附いたぞ。濟まねえぞ濟まねえぞ。

皆々　やかましいわえ。

トてんつゝになり、北八を打ちのめす。この時、捕り手の一人、雜物の風呂敷包みを落し置く事。

捕手　あんな者に構はずと、サア、急げ〳〵。

トこれにて皆々足早に向うへ入る。北八殘り

北八　アイタ、、、、。こいつは、とんだ目にあはせやアがつたな。ア、、血が大さう出る……エ、コレ、どこぞへか、もう逃げてしまやアがつた。弱い奴だ。髮はこんなにむしられるし、マア〳〵血止めは幸ひ、紫のこの袱紗。

ト序幕に芋を包みし袱紗を出し、これを頭へ載せながら、落ちてある包みを見附け

ハヽア、さては今の奴等が落して行きやアがつたさうだ。

ト包みを明ける。中より派手なる女帶、振り袖、その外、鼈甲の簪なぞ出る。

ヤア、こいつは奇妙々々。あの泥坊が盗んだ雜物と見える。よくしたものだ。少々疵は附けられても、この代物をせしめるとは德用向き。これを賣つて路銀の足しに。又もや爰へ探しに來ぬうち、ちつとも早く。

ト風呂敷包みを抱へ、一散に幕の内へ入る。時の鐘になり、向うより馬右衛門、庄屋の形にて、張り子の魂ひに灯をともし、捨八、切り首、その他いろ／＼の小道具を擔ぎ、跡より彌次郎兵衛附いて出て來り

彌次　ヤレ／＼、この人魂の灯で、大きに助かりました。

馬右　わしらはこの道から、沼津の在の夜芝居へ行きます。お前はこれから眞ツ直にござれ。

彌次　ハイ／＼。そんなら芝居は、沼津の在でございまするか。

馬右　所の者が寄つてする地芝居サ。勿論、江戸役者も交つてゐますよ。

彌次　それで解つた。こりやア芝居の道具だね。わしは先刻、本當の物と思つて、氣味が惡うございました。

捨八　わしはその芝居の頭取でござるから、自身に細工をして、今夜持つて行くのでござる。それより氣味の惡いは、この先の松原にて、惡い狐が出て、旅人を化かしてどうもならぬ。氣を附けて行かつしやれ。

彌次　エヽ、惡い狐が出ますかね。

馬右　兎角、女に化けて人を誑らかします。もし又、女が出たなら油斷さつしやるな。

捨八　この六尺棒を進ぜませうから、用心に持つてござるがよい。

ト馬右衛門の持つてゐる六尺棒を、彌次郎兵衛に渡す。

彌次　ハイ／＼。これは有り難うございます。左樣なら、これから眞ツ直に參りますか。

捨八　そこの別れ道まで連れ立ちませう。

馬右　サア／＼、ござれ／＼。

彌次　これはお世話でございます。

ト馬右衛門、人魂を下げ、先に立ち、この三人幕の内へ入る。これにて木直る。

初演當時の錦繪　桐山紋治の喜多八　坂東彦左衛門の彌次郎兵衛

市川團十郎の牡丹獅子の八　尾上菊五郎の小二四の八

本舞臺、向う一面の淺黃幕。板松の並木。上下、稻むら。爰に北八、件の簪を頭へ挿し、紫の袱紗を帽子のやうに置き、法衣の上へ女帶を締めてゐる。時の鐘にて幕明く。

北八　ア、、頭の疵が、ヅキ〳〵する。それに附けても、彌次郎兵衞は、もう來さうなものだ。

ト時の鐘になり、下座より彌次郎兵衞、六尺棒を持つて出てくる。

カウ〳〵、彌次公々々々。何をしてゐた。大分遲かつたの。

ト彌次郎兵衞、後へ飛び退き、身構へして

彌次　ドッコイ〳〵。そりやこそ、出たな〳〵。後の道で聞いたぞ　この畜生め。うぬ、女に化けそくなつたな。法衣を着た女があるものか。サア、早く正體を現はさぬと、この六尺棒で斯うするぞ。

ト北八をくらはせる。

北八　アイタ、、、、、、。コレサ〳〵。何をするのだ。化け物でもない。何でもない。おれだよ〳〵。北八だわな〳〵。

彌次　北八も凄まじい。そんな形の北八があるものか。お客と蔭間とごたまぜの姿だな。この松原に惡狐が出るといふ事聞いたゆゑ、コレ、この六尺棒を持つて、その狐を退治ようと思つて、わざ〳〵來たのだ。この彌次郎兵衞さまの目にかゝつては、もう叶はぬ。今にぶち殺して食つてしまふワ。

北八　大さうな事を云ふ。成る程、この形を見て、不思議を打つも尤もだが、先刻、道で拾つた風呂敷包み。それで、これを賣つて路銀にしようと思ふのだが、そんなにおれを怪しいと思ふなら、これから別れて、おれ一人、路銀を拵らへて、豐かに江戸へ行くワ。

彌次　さう云へば、まんざら狐のやうでもないが、また本當の北八なら、そんなに賴もしくない事を云はずと、今までさへ連れになつたものを、おれにも半分、分けてくれてもよさゝうなものだ。

北八　それでも、おれを、ぶち殺すと云つたではないか。

彌次　それは狐だと思つたからサ。後の道で嚇されたから、なんでも女が出たら、ぶち殺さうと思つてゐたところ。そんならいよ〳〵、狐ではないか。

北八　正眞正銘、中まで人間だ。

彌次　ドレ、あちらを向いて見せさつし。

北八　なんぼ蔭間姿になつたといつて、直ぐにあちら向けとは氣の早い。この頃冷えたで、痔の氣味合ひだ。お間には合ふまい。

彌次　馬鹿な事を云はつしやい。脚氣でも起りはしまいし。もし尻尾でもありはしまいかと

ト北八の後を探り見て

そりやコソ。

ト捕へる。

北八　アイタヽヽヽヽヽ。それは疝氣だ。

ト彌次郎兵衛見て、恂りして

彌次　さても大きな。

北八　なんと狐ぢやアあるまいか。

彌次　狸か馬かと思はれた。

北八　何を云はつしやる。

ト彌次郎兵衛、こなしあつて

彌次　アヽ、これで落ちついた。時に、この松原に狐が出るとの噂を幸ひ、通る旅人を嚇かして、もつと路銀をせしめようではあるまいか。

北八　成る程。よからう。幸ひ、この振り袖を着て、肩車に斯う。

ト囁く。時の鐘になり、向うより牡丹獅子の八、半纏、股引、仕事師の形にて、小さき辨當箱を風呂敷包みにして持ち、出て來る。直ぐに本舞臺へ來る。北八、振り袖を着て、肩車に乘り、彌次郎兵衛は北八の着たる法衣にて體を隱し、ゆさ〳〵出て

申し〳〵。

ト呼ぶ。牡丹獅子の八、よく〳〵見て

牡丹　なんだ、此奴は。べら坊に脊の高い女だな。ハヽア、うぬは化け物だな。

北八　アイ、お化ぢやわいなア。

牡丹　エヽ、生ぬるいお化だな。なんぼ箱根から先でも、今どきそんな化け物が流行るものか。今、大男は評判だが、大女の化け物は、久しい後に品川へ出たツきりだ。

北八　此奴、悪く洒落れるな。さつぱり化け物を怖がらぬ奴だ。張合ひの無い。

牡丹　ナニ、化け物が怖いものか。誰れだと思ふ、江戸ツ子だぞ。見損なやアがつたか。早く消えてなくなれ。なくなりやうが遅いと、殴り殺すぞ。

北八　イヤモウ、頭には懲りたものだ。おのれ、怖くないか。

牡丹　怖くはねえ。をかしな面の化け物だ。をかしいわえ。
北八　もゝんがア。
ト苦い顔をする。
牡丹　面ア見やがれ。
ト噴出して笑ふ。
北八　これでも怖くないか。
ト無性に、いろ〳〵な顔をする。
彌次　コレサ〳〵。そんなに動くと首の骨が折れるやうだ。ア、痛い〳〵。
トうつかり云ふ。牡丹獅子の八、これを聞きつけ
牡丹　ヤア、胴中で物を吐かすな。とんだ化け物だ。
ト北八を突き倒す。これにて北八、肩より落ちる。ワアイ。化け物が胴切りになりやアがつた。
彌次　愛想の盡きた重い體だ。
牡丹　さては此奴等は、往來の者を嚇かして、路銀をふんだくる追剝ぎだな、太え奴等だ。
ト北八の持ちし六尺棒を引ッたくり、無暗にぶつ。
北八　御免なされませ〳〵。
牡丹　旅人の爲だ。うぬら、ぶち殺してくれべい。
ト打つてかゝる。北八、彌次郎兵衞、下座へ逃げ込む。

ハ、ア、大べら坊め。併し、追ッ駈けて行くほどの事もねえ。三保の明神の御普請も、首尾よく仕舞つて歸りがけ、儲けた錢は、みんな二丁町へ簇つてしまふし、矢ッ張りてびの編笠、聞けば沼津の在に地芝居があるさうだ。そこへ行つてごろ附いたら、江戸へ歸る路銀位ゐは出來さうなものだ。なんにしろ、行つて見べい。
ト牡丹獅子の八、鼻唄うたひながら下座へ入ると、引違へて下座より駕籠舁き兩人、山駕籠に小西の八、大工の形にて、居眠つて乘つてゐる。これを擔ぎ出て
駕甲　オイ、棒組み、ちよつと下ろしてくだッし。
トよき所へ駕籠を下し、
カウ、親方はよく寢てゐさつしやるが、見たやうな旦那だな。
駕乙　見た筈よ。三保の普請に來た江戸の大工衆だ。中途で江戸へ中歸りにでも行つたと見える。
駕甲　棒組み、親方の寢てゐるうち、後の松原に出來てゐるぜ。
駕乙　ちよつと行つて、張るべい〳〵。
ト兩人、下座へ入ろ。向うより鵜權兵衞、以前の形、新吾附添ひ出て來り

新吾　先刻の間抜けのお庇で、大事の雜物を落してしまつた。

權兵　とんだ事をしたなア。どうせ今尋ねたといつて有る事ぢやアねえ。

新吾　それでもあれが無えと、役人樣の前へおれが濟まねえ。

權兵　濟まねえといつて、落した物をどうなるものか。てめえ、これからどこぞへ逃げるがいゝ。

新吾　それでも貴樣の番をしてゐて、どうして逃げられるものか。雜物を落した上、貴樣を逃がして見さつせえ。おれの首が無いワ。

權兵　ハテ、氣の弱い事を云ふ男だ。おらア鶉權兵衞といつて、もと本庄の下部。それゆゑ、いつぞや助太夫さまを、討つて立退いた權八も、おれが見知り人になつて、捕らせてやつた。養父を討つた權八ゆゑ、おッつけ磔刑に出るであらう。それに又、今度、稼ぎ手の蝮の次郎吉も、おれが捕めえさせたゆゑ、お上の御奉公は、これで二度勤めてある。何もおれが科人といふ譯でもねえから、爰からおれをゆるめて、放してくれりやア、てめえにも出世をさせるワ。

新吾　ムウ。貴樣をゆるめてやれば、おれの出世になる事でもあるか。

權兵　サア、その譯といふのは、いつぞや龜山の城下で、雷丸といふ短刀の身を拾つた。これは由留木家の家の重寶。江戸にゐるうち、おれが持つてゐては、人目にかかるゆゑ、品川に借家の內の、緣の下へ深く埋めて置いた。これを知つてゐる者は、天道樣におればかり。其うち次郎吉の一件で、旅へ出て、この通り。おれも舊惡のある體ゆゑ、ひよつと次郎吉が口で、一つに牢舍しまいものでもない。さうして見ると、おれが內は、人の住居となり、誰れも氣の附く氣遣ひはなけれど、捨てゝおいては心がゝり、それゆゑ、丁度幸ひの事は、由留木の御家老官太夫さまの御總領水右衞門さま、今度勘當がゆりて、親の家督相續して、立派な御家老。この度箱根の湯治場に來てござるとの事。この水右衞門さまに、あの短刀を差上げれば、一かどの御家來に、默つて取立てゝ下さる。さうすれば、てめえも侍ひに推擧してやるワ。

新吾　さう話しのやうに巧く行かうかの。

權兵　うまく行かなくつてサ。論より證據は、今から直ぐに、てめえは箱根の瀧の湯へ行つて、水右衞門さまにお

目にかゝり、右の短刀の話しをして、おッつけ權兵衞が持つて來ますと云へば、てめえが身の上も悪くはせぬワ。

新吾　ムウ。さういふ事なら、今から直ぐに瀧の湯へ。

權兵　併し、もう時が

新吾　なにサ・おれは一時五里歩く名代の早足サ。

權兵　そんなら必らず

新吾　わしも出世の小口だ。急いで行きやせう。

ト權兵衞の腰縄を解き、新吾、一散に向うへ入る。

權兵　あの雷丸を、水右衞門さまへ差上げれば、この身は出世。

トこの時、駕籠の垂れを上げ、小西の八、伸びをしながら

小西　ア、、いゝ心持に醉つた。水が飲みたい。三島女郎衆の化粧水をツ。おきやアがれ、面がいゝ。山を越すと、直ぐに化け物が、野暮に大きな投げ島田ツ。……待てよ、いま雷丸と云つたのは

權兵　エ。

ト行きかゝるを、小西の八出て權兵衞を捕へ

小西　コレ、待たッし。雷丸と云ひさして、おれを見て逃げ出すが、雷丸は、貴様、知つてゐるか。

權兵　イヤ、知らないノ。

小西　でも、今、雷丸を水右衞門どのへ、渡すと云つたぢやアないか。

權兵　ナアニ、そりやアお前の聞き損ないだ。

小西　イヤ、おらア耄碌しやアしねえ。そんなに隠すと猶聞きてえ。サア、云はつせえ。

ト權兵衞の胸倉を捕へる。

權兵　なんだア、この男は、人の胸倉をつらめえて、どうするのだ。

小西　雷丸の在所を云やれよ。

權兵　おれがそれを知るものか。

ト小西の八を突き飛ばして、一散に下座へ入る。

小西　うぬ。野郎め。待ちやアがれ。

ト跡追ひかけて入る。時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、菰張り、竹矢來、田舍芝居の木戸口、同じく田舍役者の紋看板、諸所に盆提灯を大分ともし、夜芝居の體。木戸口に白紙の幡を吊し、爰にこれに菅原傳授手ならひかゞみといふを書き、西念、坊主にて木戸番。築兵衞婿七、所の若い者。

捨八は以前の小道具師。馬右衛門は以前の庄屋、當庵は慈姑頭の醫者。外に、百姓大勢、弓張り提灯を持ち、牡丹獅子の八は以前の形の上へ麻上下を着て、乘込みの體。双盤、シヤギリにて、道具納まる。

皆々　サア〳〵、めでたく〆めませう。シヤン〳〵〳〵。

ト皆々不器用に手を打つ。

馬右　ヤレ〳〵、親方、この度は大きに御苦勞。只今までは、地の者ばかりで芝居を致しました。それと申すも、この觀音堂大破に附き、勸化芝居でござる。爰にゐるのが堂守りどの、この芝居の座元。わしは講がゝりの事ゆゑ、頭取の馬右衛門と申す者でござる。

西念　ハイ〳〵。わしは關の地藏の堂守りでござつたが、あんまり酒が好きゆゑ、たうとうよい〳〵になつて、この沼津まで流れ込んだ坊主でござる。役者をしたり、木戸番をしたり、大抵急がしい事ぢやアござりやせん。この間も、わしが外郎賣りの役をしました。せりふなぞは鮮やかサ。ちよつとした所が、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛菊桐、三菊桐。

トよい〳〵にて判らなく云ふ。

當庵　コレサ、座元の坊さん、そんなに判らない事を云はつしやるな。外聞が惡い。江戸役者がござるに、貴樣が、中でいつち下手だ。わしはこれでも女形が得手物サ。昨夜の忠臣藏では當てました。

牡丹　何をなされました。

當庵　お輕と猪と二役しました。

築兵　お輕より猪の方が評判がようござつた。

婿七　ほんに生きてゐるやうだと云ひました。

捨八　猪が、牡丹に戯むれ、といふ所の踊りは見ものでござつた。

西念　猪が踊りを踊るのは初めて見た。馬鹿々々しい。

當庵　でも、よい〳〵の外郎賣りには增しだんべい。

西念　醫者のお輕があるものか。

當庵　坊主の力彌もないものだ。

馬右　これはしたり。又、役の事でいぢり合ふのか。鎭まらつしやい。江戸の親玉が來てござるのに……時に、こなたは、いよ〳〵江戸の團十郎どのか。

牡丹　ハイ、團十郎サ。目を見て物を云ひなさい。

馬右　成る程、錦繪で見たが、目の大きな男サ。併し、半纏、股引とは、人柄の惡い團十郎どのだの。

牡丹　なにサ、こりやア。それ〳〵、道中は役者の形をし

て通ると、強請られるからサ。

馬右　ハヽア、そこでやつしてござつたのか。それでも荷物でも來さうなもの。

牡丹　イエ、後から供が持つて來やす。大方、酒匂川に留められてゐやせうよ。

馬右　持つてござるのはなんだ。

牡丹　こりやア辨當箱サ。

馬右　辨當箱まで自身に持つてござるのか。成る程、商賣には精を出さつしやるの。

ト向う、バタ〳〵になり、權兵衞、一散に駈けて出て來り、直ぐに木戸口へ駈け込まうとする。

皆々　カウ〳〵。でんぼうはならぬ〳〵。

ト留める。權兵衞は懷より小錢束を抛り出し、木戸口の中へ駈け込む。

なんだ、あの人は。啞ださうだ。

ト又、バタ〳〵になり、小西の八、同じく追ひかけて出て來り、續いて木戸口へ入らうとする。

皆々　オツト、でんぼうはならぬ〳〵。

小西　おらアこの芝居に用があるのだ。

皆々　なんの用がある〳〵。

小西　なんでも、いま爰へ入つた野郎が

ト また入らうとする。皆々留めて

皆々　そんな事を云つて、只見ようとは、ならねえ〳〵。

小西　イヤ、おらア入つてもいゝものだ。

皆々　なぜいゝ〳〵

小西　おらア、役者だ〳〵。

皆々　ついぞ見馴れぬ男だ、嘘を云はつしやい〳〵。

小西　見馴れねえ役者の筈だ。おらア江戸役者だ。

皆々　なんといふ役者だ〳〵。

小西　おらア江戸の何よ……團十郎だ〳〵。

皆々　そりやこそ嘘だ。團十郎は、疾に來てござる〳〵。

小西　ナニ、團十郎が來てゐる。ナニ、こんな所へ團十郎が來るものか。

皆々　團十郎どのは、爰にゐる〳〵。

ト小西の八、牡丹獅子を見て

小西　ヤア、わりやア、八ぢやアねえか〳〵。

牡丹　コレ〳〵、滅多な事を。おれは團十郎だぞ〳〵。

ト呑み込ませる。小西の八うなづき

小西　ムウ、成る程、お前は團十郎さんだの。そんなら、おれが名も知つてゐるか。

牡丹　知らなくつてサ。お前は何だらう。梅幸だらう。イヤ、菊五郎さんだ。……モシ〳〵。この人はわしが江戸で兄弟同然にする、菊五郎サ。
馬右　ハア、さうか。ヤレ〳〵、噂に聞き及んだ梅幸どのか。
小西　イエ、菊五郎サ。
牡丹　菊五郎も梅幸も同じ事だ。
小西　一人兩名か。とんだお尋ね者だ……その菊五郎の梅幸は、わしでござりやす。
馬右　さて〳〵、よくござつた。これでは大芝居になつて繁昌いたすでござらう。早速ながら、狂言は「菅原」でござる。梅幸どのは、さしづめ菅丞相をする氣であらう。
小西　なんだ。山椒醬油の鰯だえ。
馬右　イヤ、天神樣の事サ。
小西　わつちが天神樣かえ。そいつはちとむづかしい。併し、せりふを覺えなくつてもいゝかね。
皆々　なぜ〳〵。
小西　ハテ、だんまりの天神といふからサ。
牡丹　おきやアかれ。わしが役は何でござりやす。

馬右　お前はさしづめ荒事師だから、梅王に源藏。役人が足らぬから、ちよつと加役に、似せ迎ひに出てもらはねばなりませぬ。
牡丹　似せ迎ひでも、とぼし迎ひでも承知だが、給金はいくらくんなさる。
馬右　今まで、どの位ゐ取らしつた。
牡丹　先聰で、日に三分づゝサ。
馬右　ハテ、廉いものだ。
牡丹　前借りに、ちつとお借り申さなくつてはなりやせん。
馬右　それも承知サ。何事も勸化芝居の事だから、上がり次第に拂ひませう。
西念　サア〳〵、そんなら幕のうちに、ちよつと稽古をしませう。
馬右　何か道具の支度もあらう。サア〳〵、みんな來て手傳つて下さい。
皆々　サア〳〵、親方、樂屋入りをさつしやい〳〵。
小西　なんでもあの野郎は芝居の內、見附け次第に雷丸。
牡丹　ナニ、雷丸とは。
小西　なアに、此方の事よ。
ト牡丹獅子の八も思ひ入れ。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト刄盤になり、この人數、ソヤ〳〵云うて、木戸口へ入る。木魚入りの合ひ方になり、向うより北八、件の彌次郎兵衛を脊負ひ、出で來り
北八　イヤモウ、する事、なす事、皆くれはま。彌次公、どうだ。ちつと痛みは去つたか。
彌次　ア、、どうして〳〵。一足も歩かれぬ。大さうぶちのめされた。その上、腹がへつてどうもならぬ。なんぞ食はしてくれぬか。
北八　いゝ氣な事を云ふ。貴樣はまだ、おぶさつてゐながら、そんな熱を吹く。おれも腹がへつた上に捨てゝも置かれぬから、昔の名は長右衛門、女姿で男を脊負ふはほんの逆さま。これも因果な二人の惡緣。
彌次　思へば果敢ないこの身の上
北八　なんたる因果の
二人　寄合ひぢやなア
ト兩人よろしく思ひ入れあつて、本舞臺へ來る。この時、木戸の内より、馬右衛門、當庵、西念出て
西念　わしは婆アの役は、斷りだ〳〵。當庵どのが、年配といひ、相應な役だ。
當庵　これはしたり。おれは若女形。婆アの役がなるものか。苅屋姫ならするワ。
馬右　そんな押しの強い事を云はつしやるな。こなたはせりふがむづかしいから、龍田の死骸がよい。
當庵　只、死人ばかりの所か。それはあやまる。
馬右　その代り、後に役がござるから、死骸をさつしやい。
當庵　死人の役は造作もない。丸むき死人のやうにして見せますべい。
西念　これはその筈の事。常住人を殺しつけてゐるから、得手ものだ。
馬右　又そんな事を云ふ。時に、和尚は宿禰太郎だ。
西念　そいつは有り難い役だな。
當庵　平常賽錢をくすね太郎、うつて附けだ。
馬右　これはしたり。さう喧嘩をしてはどうもならぬ。……困つた事には、覺壽と苅屋姫がない。
トこれを聞いて、北八、思ひ入れあつて、彌次郎兵衛に囁く。彌次郎兵衛呑み込み、こなしあつて
彌次　コレ、太夫、爰らに駕籠はあるまいか。
北八　いま供の人に賴んでやつたれば、いまに來るであらうわいなア。

ト粂三郎の聲色でいふ。馬右衞門、二人を見て

馬右　こなた衆はなんだ。

彌次　ハイ、わしは坂東三津五郎といふ江戸役者。

北八　わたしは粂三郎でござんすわいなア。

馬右　なんだ、三津五郎に粂三だ。……ハテナ、今日は大分江戸役者の見える日ぢやな。初手のが團十郎、菊五郎あの二人はさうらしくもあるが、後の二人は、大和屋とは受取り憎いな。

ト兩人、思ひ入れあつて

彌次　エヽ、そんなら團十郎、菊五郎が來て居りますか。

馬右　さうサ。貴樣達は、三津五郎、粂三といふ役者ではあるまい。

北八　アイ、粂三の弟子の、夢三といふ女形でござんす。

彌次　わしは三津五郎の兄で、四津五郎といふ立役サ。

馬右　さうであらう。錦繪でも見たが、三津五郎は、そんなに頭は長くなかつた。

當庵　鼻の低い粂三もないものでござる。

北八　オヽ、恥かし。

馬右　時に、一幕助けてやらつしやらぬか。

彌次　助けますとも／＼。

北八　その代り、飯は食はせるでござんせうな。

馬右　ハテ、意地の穢ない女形ぢや。隨分飯は食はせるが、役は苅屋姫に覺壽。直ぐに宴の明く幕ぢやが承知か。

北八　イヤモウ、飯さへ食はせて下さんすりや、なんでも致します。

彌次　わしが役は覺壽かえ。覺壽な／＼氣が知れぬ。

北八　わたしが役は苅屋姫、稽古も急の事なれば

馬右　只、八聲場の所ぢやから、泣いてゐさへすりやよいてや。

北八　泣くのはわたしの得手もの。無性に泣けばよいかえ。

西念　マア／＼、これで一幕は極まつた。

當庵　サア／＼、稽古にかゝりませう。

彌次　わたしは腰骨を打たれたが、幸ひ婆アさんの役は打つて附けぢや。

馬右　サア、樂屋へござれ。

北八　どうぞお飯を

三人　よく食ひたがる女形だ。

彌次　やう／＼糧にありつきました。

ト双盤になり、この人數、木戸口へ入る。この時、向うより新吾、一散に駈けて出て來る。木戸口より權兵

衛出て來り

權兵 すんでの事にあの野郎に、聞き嗅られた短刀の在所。

新吾 さう云ふは權兵衛どのか。

權兵 オヽ、てめえはどうして爰へ。

新吾 水右衛門さまから、こなたへ內用。

權兵 エヽ、もう箱根へ行つて來たか。ヤレヽ、早い足だ。して、その內用とは。

新吾 雷丸を話したところ、水右衛門さまにも殊ない喜び。それに附き、石井丹波の餘類の奴ら、又は白井の身寄りの者を尋ね、見當り次第。コレ。

ト懷より藥の包みを出し

この毒藥を騙して飮ませ、人知れずおッ方附けてくれろとお賴み。

權兵 すりや、この毒藥にて。よしよし。

ト毒藥の包みを取って懷中する。

新吾 併し、その毒藥は、二十四時殺しといつて、二十四時經つ時は、生き返るとの噂。それゆゑ、一旦毒にあつた時、ぶち殺すとも、叩き殺すともさつしやれ。

權兵 よしさよしさ。たとへどれほど强い奴でも、一旦毒をくらはして、毒にあたつた其うちに、本殺しとやらかせば、骨は折れぬといふものだ。てめえはこれから引ッ返して。

ト新吾に囁く。兩人よろしく思ひ入れ。双盤になり、この道具廻る。

本舞臺、向う觀音堂の飾り附け、須彌壇の上の物を取退け、二重舞臺にしたるこしろ。欄間に、いろいろの納め提灯、これを湯吊りのやうに飾り、點火しあり。上の方に障子二枚、繩でゆはへ附けてあり。爰に彌次郎兵衛、莩にて拵らへし鬘、發壽の形。北八は苅屋姬、當庵は龍田の死骸にて、臥てゐる。馬右衛門、上下を着こし、後見の形。捨八、集兵衛、婿七、中間の役にて、皆々扣へゐる。双盤にて道具納まる。

馬右 東西々々。狂言中にはござりますれど、口上を以て申し上げまする。當觀音堂大破に就き、勸化芝居を取立てましたるところ、御信心とござりまして、斯樣に御賑しく御參詣下さりまする段、座元堂守り、西念坊は申すに及ばず、講頭の私し、その外、總地中、如何ばかりか有り難き仕合せにござります。隨ひまして、この度江戶

表より、兩三人役者を、呼び寄せましてござりまする。即ち、名前御披露仕りまする。市川團十郎、尾上菊五郎、坂東三津五郎舍兄四津五郎、岩井夢三郎、其外地の役者、車返しの茂右衛門、黒瀬村の勸太、岩幡の源右衛門、罷り出で相勤めまする。次手ながら御贔屓樣より下されましたる、花觸れにござりまする。……白木綿六尺、麥一袋、船谷の後家より勸太へ下さる。一つ、玉蜀黍三本、胡麻三合、横走りの郷左衛門さまより源右衛門へ下さる。一つ、線香十把、白米二袋、柴瀬山の東南より座元堂守りへ下さる。……先づはこの所、菅原傳授二段目の切り。ちよぼ語り間に合ひませんから、私しが口三味線で御不請下さりませ。其ため口上、左樣。……サア〱、始めて下さい〱。

婿七　頭取の口上が長いから間が拔けた。

馬右　東西々々。サア〱、苅屋姫どの、始めさつしやい始めさつしやい。

北八　もう泣き出してもようござりますか。……ハア〱。

ト無性に泣く。

彌次　コレ、其方が泣くのでおれが悲しい。ハア。

北八　ア、、悲しや〱。ハ、ア〱。

馬右　コレ、そんなに泣いてばかりゐずと、せりふを云はつしやい。

北八　それでも泣きさへすればよいと云はしやつた。ハア。……ほんに、せりふは生覺え。今日は如何なる悪日か、父上には生別れ、また姉さんには死別れ。女房は石部で取られてしまふ。路銀は盜まれ、腹はへる。

馬右　コレ〱。そんなせりふは、無いぞ〱。

北八　こりやマア、どうせう。悲しやなア。ハア。

彌次　わしは龍田が其方の側にゐると思ひ、其方はわしが側にゐると、思ひ違ひか、この醫者どのゝ不運。イヤ、龍田の不運。ほんに敵が討つてほしいわいなア。

ト この時、下の方より、牡丹獅子の八、似せ迎ひの乍法衣の露を取り、半素袍にして、紺の足袋を侍ひ烏帽子のやうにしてかむり、出て睨み

牡丹　ヤア〱、婆ア。

築兵　コレサ〱、またお前の出る所ではない。

婿七　爰は宿禰太郎の出る所だ。

牡丹　それでも團十郎が遲く出ちやア外聞が悪い。なんでも人より先へ出なけりやアならねえ。

捨八　それでもまだ、出が早い〱。

牡丹　早くつてもいゝ。爰らの所へ出ようぢやないか。
馬右　それでは狂言が出來ない。もうちつと待たつしやい。今に出します。
牡丹　いつまで待たせるのだ。
馬右　もうちつとだから、辛抱さつしやい。
牡丹　長く待たせると、また出るぞ。
馬右　今におらが知らせる。それまで待たつしやい。
ト無理に牡丹獅子の八を下手へ入れる。
北八　ハア、悲しや〳〵、近年に無い悲しい事ぢやなア。
皆々　サア〳〵、宿禰太郎は、どうした〳〵。
西念　オツト、騒ぐまい〳〵、爰に居る〳〵。
ト西念、打敷を上へ引ツ張り、如意を腰へ差し、悠々と出て來り
貴人、お嘆きなさるな。涙は死人の爲にはなりませぬ。これからは女房龍田が水死の追善。俗名は羽根田當庵。菩提の爲に講中の面々、一人も動かつしやるな。殺した奴を引ツ張り來り、これにて談議仕らん。
馬右　〽縁ばたに、つツと大あぐら。
ト西念、須彌壇の上へ坐り
西念　サア、先づ取附きに居る各とや。高座の前へ、近う近う。
築兵　ハイ〳〵、一番にお呼び出しは、御褒美を下されやうてな。
婿七　私しにも下さりませ。
捨八　貰ふ事なら、他分には洩れませぬぞ。
西念　イヤ、褒美とは大慾界。龍田が死骸、池にありしをどうして知つた。
築兵　どうも頭を見よう筈はござりませねど、この木から傳うた血を證據に
婿七　池が血へ流れましたゆゑ。
築兵　それはおれが云ふのだ。
婿七　エヽ、慾どうしい。一人で云はずと、おれにも云はせるがいゝわサ。
築兵　貴樣は外の事を云はつしやい。
婿七　そんなら昨夜の判官のせりふを云ふべい。
捨八　おれも與一兵衛をもう一遍云はう。
馬右　コレサ〳〵。とんだ所で喧嘩をする。鎭まらつしやい〳〵。
西念　なんでも仲よく云ふがよい。池が血へ流れ込んだは郎ち血の池、この世からなる地獄の有樣。恐ろしや〳〵。

三人　南無阿彌陀佛。
西念　さるによつて、人間といふものは、いつ何時死なうやら知れぬものなり。
三人　南無阿彌陀佛。
西念　死ねば即ち命が無いぞや。
三人　南無阿彌
西念　さるによつて、息のあるうち、無性に人を借り倒し
三人　南無阿彌
西念　酒もたらふく、飲むがよし。
三人　南無阿彌。
西念　手當り次第、色もしろ。
三人　南無阿彌。
西念　その手でたければ佛にならぬぞ。
三人　サツサ、さうだ／＼。なむあみだんぶつ／＼。
　ト皆々拍子にかゝつて踊る。
馬右　コレサ／＼。この手合ひは、狂言をしないで、談議を始めたのか。ア、、埒も無い。
　ト牡丹獅子の八、また下手より出て
牡丹　ヤア／＼、婆ア。
　ト力む。

馬右　ア、、また出たか、まだ早い／＼。
牡丹　早いといつて、いつまで待つてゐられるものか。
馬右　エ、、聞分けの悪い。もうちつとだから、待たつしやいよ。
牡丹　今度はもう待ちませぬよ。
馬右　承知だといふに。
　トまた無理に牡丹獅子の八を下手へ入れる。
彌次　嬉しや、娘の敵が知れたわいの。
北八　敵が知れたか。ヤレ、悲しや／＼。ハア。
　ト泣く。
馬右　もう／＼、泣かずともよい／＼。
西念　敵が知れたとは、お目高／＼。
彌次　イヤ、目高でも、金魚でも、池の中で死んだ龍田よう緋鯉めに合はしたな。
馬右　悪く洒落れる覺悟だ。
彌次　娘の敵はこの婆が、切つて／＼切りさいなまねば、腹がへる。……イヤ腹が癒ぬ。婿どの、刀を借りませう。
馬右　ヘツ、ン。婿殿達磨の持ちさうな如意おツ取つて、向う目當ては奴にあらで、油斷の太郎がどてツ腹、ぐつと突ツ込み

ト口三味線にて淨瑠璃を語る。彌次郎兵衛は西念の差してゐる如意を取り、無性に西念を抉る、
西念　ア、コレ〳〵。そこには灸がえぼつてゐる。靜かに抉らつしやい〳〵。
彌次　イヤ、覺えないとは、云はさぬ〳〵。
西次　ア、コレサ、擽つたいよ〳〵。
ト跪く。
彌次　アレ、あの龍田が口に咬へたは、其方の褌の先、死ぬまいといふあの龍田を、酔立てさせぬ無理殺し、これがほんの、死ぬまい無理ごろし。（新製麦こがし）
西念　一袋十二文。
馬右　灑落れさつしやるな。肝腎な所だ。
彌次　此が娘へ手向けの刀。肝先へこたへたか。
ト抉る。
西念　ア、擽つたい〳〵。
ト馬右衛門ちよぼを語る。西念、落入りし思ひ入れ。彌次郎兵衛は西念の口へ手を當て、息を見る。西念、顔をしかめ、鼻を抓む。
彌次　コレ、なぜ鼻を抓む。
西念　何か嗅がせたではないか。

彌次　馬鹿な事を。息があるか、無いか、探つて見たところだ。
トこの時、龍田の死骸寢てしまひ、鼾たかく。
當庵　勘平どのは三十に
ト寢言を云ふ。
馬右　コレ〳〵、又酔つたさうだ。死骸が物を云つてつまるものか。ハテ、よく変セッ返す手合ひだ。
ト當庵を後へ片附けて
サア、仕方がない。爰の所は先へ飛ひませう。サア〳〵、似せ迎ひどの〳〵。
牡丹　合點だ〳〵。
ト牡丹獅子の八、出て來り
今度は本當に、ヤア〳〵、婆ア。
馬右　伯母御と云はつしやいな。
牡丹　おらア伯母御は疾に亡くなつた。
馬右　エ、強情な。これは菅丞相の伯母御サ。
牡丹　ヤア〳〵、菅丞相の伯母御。
ト馬右衛門乗り、地を口三味線で云ふ。
ヤア〳〵、伯母御。
馬右　いつまで伯母御を云つてゐる。

牡丹　ヤア〱、伯母御、あんまり久しく出ずに居たから忘れてしまつた。ヤア〱、伯母御。
馬右　しつこい伯母御だな。
ト また口三味線で乘り地を云ふ。
牡丹　木で作つた菅丞相は、なんにもならぬから、本當の生きた菅丞相を渡せ。とてもない物おいらに渡して、よくのツぺりとした、さぼてん婆アめ。
馬右　ア、間の悪い乘り地だ。
彌次　それにさぼてんがいるものか。……とてもないとは何おつしやる。最前丞相は渡しました。
牡丹　ドツコイ〱。こんな丞相が唐にもあろか。
ト 蓮臺の上へ炬燵櫓を乘せ、張り輿と見せたる中より、小西の八、腰高の茶臺を冠り、衣を後ろ前に着て、摺粉木を笏にして、炬燵を冠つたまゝ出る。
皆々　炬燵の化け物が、出た〱。
馬右　後から出ればよい事を。
ト 馬右衛門、炬燵を取つてやる。
彌次　よう返して下された。慥かにわしが受け取りました。
牡丹　どこへ〱。ハテ、面妖な。あちらで見れば木で作つた菅丞相。爰へ連れて來れば本當の菅丞相。見どころで違ふか。何しろこれは元の所へ。
ト 小西の八を元の所へいれようとする。
小西　もう引ツ込むのか。
牡丹　知れた事。今の所へ。
小西　あんな窮屈な所へ誰れが入るものか。なんぼたんまりの天神でも、ちつとは何か云はせろがいゝ。みんなばかり狂言をして、おれには何も云はせねえな。そんなに餘所の者だといつて、依怙贔屓をする事はねえ。おれもなんぞ云ふべい。
馬右　とんだ氣の強い天神樣だ。そんなら仕方がない。また先へ飛びませう。サア〱、せりふを云はつしやい云はつしやい。
小西　云はないでどうするものか。……伯母御、醫者かつしやるな。お久し振りだねツ。
右馬　ツの字は云はないでもよささうなものだ。……〈質議〉は木像だかへ、菅丞相の右手の方、御座を並べて直しおく。
ト 語る。此うち彌次郎兵衛、下手より小さき賓頭盧尊者を抱へ、小西の八の側に置く。
彌次　親子が企みの顯はれしも、この賓頭盧のお庇、かゝ

る例しもある事か。

小西　あるとも〳〵。斯ういふ例しは、昔、左り甚五郎が彫つた龍は、蓮池の水を飮みに出て、今は鎹ひで留めてあり、其お堂はわッちらの棟梁の建てたのサ。全體上野でも、淺草でも、お堂造りといふのぢやアねえ。宮造りといふのだ。恐らく堂宮の繪圖は、わッちらの棟梁でなけりやア、憚りながら、日本廣しといへど

馬右　コレサ〳〵。菅丞相が繪圖の話しをしなくつてもいゝわな。

小西　ツイ浮かれたのだ。……これはわッちが三度まで拵らへ直した仕事だから、形見だと思つてくんなせえ。

馬右　ア、、人柄の悪い天神様だ。……へ形見と思しめされよと。

ト語る。

賴次　伯母が寸志の餞けせん。腰元ども〳〵。

婿七　誰れもゐません。

馬右　そんな事を云はずと、出さつしやいな。

婿七　エ、、人使ひの悪い。

ト北八は西陣の着たる打敷を冠り出て

北八　ハア、悲しや〳〵。

小西　あの中で泣いたのは、年寄りの冷水か。

馬右　空耳だらう。

小西　默つてゐさつし。……今、啼いたのは軍鷄か。烏の啼く音か。鳶が啼けばお日よりに

馬右　へ啼くは生ある習ひかや。心の嘆き隱し歌。

ト小西の八、考へて

小西　啼けばこそ、卯月八日は茅場町、むべ山風の音のよきかな。

馬右　コレサ、そんな歌があるものか。

小西　エ、、うつちやつて置かつせえな。よくおれが云ふ事といふと、文句を云ふぜ。そんなむづかしい事を云ふならよしやせう。もう天神は止めだ。

牡丹　カウ〳〵。それぢやア狂言が出來ねえ。

小西　出來なからうが、おれが構ふものか。此方はしらの職人だ。天神様の役が出來ねえといつて、遠島になる事もあるめえ。また本當にさせる位なら、道具も本當にしやアがれ。天神様の木像といつて、賓頭盧を出しやアがつて、赤い坊主の天神があるものか。

馬右　イヤ、それは田舍芝居の事なれば。

小西　そんならおれがせりふも、やかましく吐かしやアが

るな。おらア否だ。もうしねえ。
北八　コレ、父上樣。ハア、悲しや。
小西　エヽ、よしやアがれ。父上も凄まじい。その面で
北八　あられもない、コレ、父上。
小西　貧乏人の豆煎りぢやアあるめえし、あられもないと
いふ面か。
北八　ハア、悲しや。
ト小西の八に寄り添ふ。
小西　エヽ、不吉な。いゝ加減にしやアがれ。
ト北八を蹴倒す。北八、ウンと目を廻す。
皆々　ヤア、苅屋姫が、目を廻した〳〵。
彌次　姫が目を廻しては、覺壽が濟まねえぞ、下手人は、
天神だぞ〳〵。
馬右　マア〳〵、靜かにさつしやい〳〵。
牡丹　マア、よい。呼び生けるがいゝ〳〵。
皆々　苅屋姫やアい。
ト北八、心附きピク〳〵する。
少しは氣が附いた樣子だ。
西念　オイ〳〵、龍田どの〳〵。ちよつと脈を見てやらつ
しやい。

當庵　おれは死人だから構はぬ。
牡丹　もう狂言どころぢやアねえ。本當の死人が出來さう
だ。お前、醫者なら、ちよつと見てやらつしやい〳〵。
當庵　ドレ〳〵、さういふ事なら。
ト北八の脈を見て
ハヽア、苅屋姫は、こりやア疝氣だな。
彌次　左やうサ。この頃冷えましたので、少し起つて居り
ました。
當庵　ところで、いま陰囊を蹴上げられたゆゑ、グツと氣
絶したと見える。これは心が落ちつくと直ります。
牡丹　ハヽア、そんなら苅屋姫は疝氣か。こいつは大笑ひ
だ。
馬右　マア〳〵、氣の休まるまで、ちつと寢かすがよい。
北八　イエ〳〵、寢ともないから、どうぞお飯を一膳。
皆々　斯う食ひたがつては大丈夫だ。ハヽヽヽヽヽ
馬右　さて、團十郎どの、こなたが引受けたあの菊五郎ど
の。どうも氣が強くて無理ばかり云つてゐては、狂言が
出來ませぬ。二言目には腹を立つて、一座が誠に困りま
す、先づ〳〵、爰は菊五郎どのゝ、首を切らずばなりま
すまい。

牡丹　エヽ、そりやマア、なんの科で。
馬右　どうも、あゝ氣が強くつては、首にせずばなるまいではないか。
小西　なんだ。首を切る。此奴等は途方もねえ。天下の無え國ぢやアあるめえし、天神樣をし損なつたといつて、首を切られて堪るものか。切るなら切つて見ろ。サア、殺せ〳〵。
馬右　コレサ〳〵、そんなに騷がつしやるな。芝居内では、暇を出す事を、首を切ると云ひます。
牡丹　エヽ、そんなら暇を出すのかえ。
馬右　出さずばなるまいではないか。あの通りだものを。ナア、皆の衆。
皆々　左やうサ、わしらもあの人がゐては、險呑で勤りませぬ。
馬右　アレ、あの通り、大勢と一人には代へられぬから、菊五郎一人、首にせずば納まりませぬ。どうぞお前、その趣きを、さう云つて下さい。
牡丹　サア、お前方の云ひなさるのも御尤もだがね、まさか一人突き出すのも氣の毒、わしにやアなんとも云はれねえが、大概な事なら不請しなせえな。
馬右　不請といつたところで、みんなが納まらなくてなりませぬ。
皆々　菊五郎どのが出るなら、わしらは否でござる。
牡丹　あゝ云はれてはどうも仕方がねえ。
小西　カウ〳〵、團十郎さん。お前さう云つちやア好もしねえ。畢竟おれが役者だと云つて入込んだも、先刻の野郎……イヤサ、先刻のやうにごてついたのは、おれが悪い。たつた一人突き出されて、首を切られたと云はれちやア、皆さんの前も外聞が悪い。一座の衆へ、詫び事をして下さい。
牡丹　モシ、頭取さん。あんなに云ふから、どうぞもう一遍料簡して。その代り、この後は、ちつとも怒らせる事ぢやアござりませぬ。
馬右　イヤ〳〵、どのやうに云つても、一座には代へられぬ。菊五郎どのは、首だ〳〵。
牡丹　そんなら、どうでもなりやせぬか。
皆々　サア〳〵、後の狂言が大事だ。出て行かつしやい出て行かつしやい。
小西　そんなら、どうでも仕方がござりやせぬ。これ程あやまるのに、置いてくれざア、いゝワ。どうするものか。

また外の芝居へでも行きやせう。

皆々　こんな者を、どこで抱へるものか。

小西　どうしたと。

　トむつとする。

牡丹　コレサ、それが悪い。

　ト留める。

北八　わしが疝氣を蹴倒した天神様が

彌次　首になるとは。

二人　ハテ、よい氣味な。

　トこの時、土間の中より權兵衛、舞臺へ上り

權兵　ヤア、先刻から見てゐたが、この苅屋姫は大泥坊だ。
蝮の次郎吉が雜物を盗みやアがつたな。

北八　ほんに貴様は

牡丹　さう云や沼津の松原にゐた、うぬら二人は追剝ぎ
だな。

北八　南無三、顯はれた。

　ト逃げようとする。

權兵　動きやアがるな。

　ト小西の八、權兵衛を見て

小西　ヤア、見附けたぞ。サア、野郎め、雷丸の在所を。

牡丹　そんなら雷丸は。

權兵　南無三。とんだ所を

　ト又、小西の八を突き退け、一散に向うへ駈けて入る。
小西の八、同じく行かうとする。牡丹獅子の八、留め
て

牡丹　待て。雷丸とは、兼ねて尋ぬる

小西　われが知つた事ぢやアねえわえ。

　ト牡丹獅子の八を突き退け、一散に向うへ駈けて入る。

牡丹　詮議の手がゝり、跡追ひかけて

　ト同じく向うへ駈けて入る。

北彌　こりや斯うしては

　ト同じく向うへ駈けて入る。皆々、呆れし思ひ入れに
て

皆々　とんだ交ぜッ返しだ。

　ト禪のツトメにて、この道具廻る。

本舞臺、向う一面の淺黄幕、正面に屋根附きの千貫
樋の飾り附け。舞臺前は濵板。上手に振舞ひの水の
瓶、柄杓茶碗附き、小さき枠の中に飾りあり、禪の
ツトメにて、道具納まる。

ト向うより權兵衛、一散に駈けて來り、息の切れし思ひ入れにて、振舞ひ水を一口飲み、こなしあつて

權兵　ヤレ／＼、悪しつこいあの野郎め。爰へ追ひ駈けて來るは必定。先刻の毒を試すは幸ひ。息が切れてこの水を。ムウ。……ソレ。

トうなづき、瓶の中へ毒を入れる。バタ／＼と音する故、權兵衛、小蔭へ隠れる。小西の八、一散に駈けて來る。跡より牡丹獅子の八、追ひかけ來り、小西の八を捕へる

牡丹　おれも詮議の雷丸、われが行くへを知つて居る筈。サア、有やうに云つて聞かせろ。

小西　その行くへも、先刻の野郎が、雷丸と口走つたゆゑ、引ツ捕へて詮議せうと思ふうち、取逃がしたが、遠くは行くまい。邪魔せずと、こゝ離せ。

牡丹　イヤ、さう云つて、おれを出し抜き、われは官太夫と一つになり、身の出世をする氣だな。

小西　ハ、、、、、、。うぬが心に引比べ、詮議の野郎を、邪魔をして逃がした八内。われこそ心に一物が。あるとも、ねえとも、うぬには構はぬ。離しやアがれ。

牡丹　イヤ、詮議の手蔓、滅多に離さぬ。

小西　やかましいわえ。

牡丹　さう云や、うぬを。

トこれより摑み合ひの立廻りになり、トヾ兩人、舞臺へ來り、疲れし體にて、立廻りのうち、牡丹獅子の八、振舞ひ水を一口飲む。小西の八、これを見て、牡丹獅子の八を突き退け、同じく水を一口飲む。

サア、寶の在所を吐かせ。

小西　エヽ、邪魔しやアがるな。

トまた立廻りになり、これより兩人、だん／＼毒の廻りし思ひ入れにて

牡丹　こりやどうだ。俄に體が

小西　おれもどうやら、ア、、苦しいわえ。

ト云ひながら又立廻り、トヾ兩人、撞となり、立ち上がらんとして立たれぬ思ひ入れ、兩人、血を吐き

兩人　ヤ、、正しく毒氣の

ト悶え苦しむ思ひ入れ。權兵衛、小蔭より出て來り、

ニツタリと笑ひ

權兵　ハテ、奇妙な毒もあるものだな。

兩人　ヤア、、さては、うぬが

權兵　コリヤ、騒ぐな／＼。丹波石井にゆかりの者、その

外、白井本庄も、重の井姫の緣引きゆゑ、毒藥にておッ方附けろと、水右衛門さまの云ひつけだ。おれが隱した雷丸、氣取つたうぬら。それゆゑ爰まで誘き寄せ、振舞ひ水に仕込んだ毒、うまく喰つた二人が其ざま。ハテいゝ氣味だな。

兩人　さうとは知らず、うぬア、よくも

ト兩方より立ちかゝる、權兵衛、兩人を蹴倒す。これにて牡丹獅子の八も小西の八も、上下の川の中へ落ちる。

權兵　ハ、、、、、。脆い奴等だ。爰は幸ひ千貫樋、伊豆の海へ流るゝこの川、死骸も其まゝ、後腹病めず。うまい／＼。

トこの以前より、しつぺい太郎の犬出て、權兵衛の足にくらひ附く。

アイタ、、、、、、。この畜生め／＼。

ト刃物無きゆゑ、手にてくらはせる。

犬　ワン／＼。

ト友を呼び、これにて山犬二疋ほど駈け來り、權兵衛を目がけ、くらひ附く。權兵衛、あちこち逃げ廻り、石など拾ひ打ち附ける。此うち一疋の犬は權兵衛の裾を咬へ、引く。これにて權兵衛、仰向けに倒れる。三疋の犬は權兵衛の上へ乘りかゝり、ト、權兵衛を食ひ殺す。權兵衛、苦しむ。これにて、この前へ一面の黑幕を振り落す。

大ドロ／＼になり、上の方へ、跳らへ地獄の大釜を引出す。この側に、異形なる枠に、蓮華を描きし金提灯を掛け、これに六道亡者中と書き、下手に、これより劍の山道と書きし榜示杭を出す。ドロドロにて道具納まる。

ト直ぐに踊り地になり、釜の蓋開く。内より赤堀源吾の亡者、經帷子にて踊りながら出る。續いて坊主願哲の亡者踊り出る。づぶ六、おかや、どぶ六、さぼ九郎義兵衛、いづれも亡者の形にて踊り出る。願哲、音頭取りにて

願哲　へ生死流轉はをかしなものよ。生きてゐるときや敵味方、死んだ處は變れども、八百三十六地獄、一つ所へ生るゝと、盂蘭盆經に說かれたり。

皆々　ヨイ／＼ヨイヤサ。

ト皆々よろしく踊る事あつて

源吾　サア〳〵、みんな、今日は盆の十六日、罪人の休息日だ。思ひ入れ騒ぐがいゝ。この赤堀源吾も娑婆に居るうち、心を掛けた小萬といふ女、これも死んださうだが矢ッ張り與作と一緒に、善人だから、極樂の一つ蓮。隣りの國に居ても、顔見る事もならぬ、哀別離苦の苦しみ。

願哲　この願哲も、元の段介となつたが、半次郎の手にかかり、また地獄で主從一緒になるとは、三世の縁、結ばずともよい事よ。

かや　わしは京の押小路、お半が母でござんすが、婿の長右衛門と芋田樂の罪により、擂り鉢地獄へ落されました。

さぼ　それでもお前は仕合せだ。おツつけ三途の川の跡目になるではないか。

かや　左やうサ、この間目見得に行きましたが、まだ顔色が優しいとサ。

どぶ　それでもまだ優しいのか。

かや　もうちつと怖い顔を、稽古はねばなりませぬ。

さぼ　わしは娑婆で何にも悪い事はせぬが、お針の所へ夜這ひに行き、袷を一枚借り倒した罪によつて、針の山へ上げられましたが、針の山は苦しいてな。

義兵　それでも針の山は、まだ景色がようござるが、わしは商賣に怠けて、油を賣つた罪によつて、黒闇地獄へ落ちました。誠に眞暗で、欝陶しうてなりませぬ。

づぶ　わしは又桑名の船で、切り込まれたゆゑ、水に縁ある氷の地獄サ。

どぶ　それは羨ましい。この節は涼しくつてようござらう、わしは鈴鹿山で、權八に殺されました。山で刃にかゝつたゆゑ、劍の山サ。野暮な所でござりやす。

源吾　イヤモウ、どこといつて地獄の内に、意氣な所は一つも無い。二六時中の苦しみ。これを思へば娑婆で悪い事をしなければよかつた。今さら愚痴を云つても詰まらない譯だ。

願哲　その代り、今日と正月の十六日は、好き次第な事をしていゝ極樂の掟だ。サア〳〵、たつた一日の事、精出して、遊びませう〳〵。

義兵　餓鬼道や、畜生道の方の手合ひは來ませぬか。

さぼ　彼奴等は、亡者仲間の附合ひを知らねえ奴だ。

源吾　彼方は彼方で、何か趣向があらう。なんでも餓鬼や畜生の町内に負けてはならぬから、劍や針の山の手の者だと云はれぬやう、なんぞ思ひ附くがよい。

さぼ　なんと、この婆さんに、輕業をさせてはどうだ。

願哲　よかろう〳〵。おれが口上云ひにならう。
かや　わしが輕業をするのかえ。
源吾　無明の橋を渡る氣で、苧殼渡りでもするがいゝ。
かや　そんなら、ちよつと下稽古。
さぼ　わしらは下方へ廻りやせう。
源吾　鳴り物は、責め鼓や責め太鼓を借りてくるがよい。
皆々　疾に借りて來てあります。
ト皆々、異形の太鼓、笛、三味線など出す。願哲は釜の蓋を締め、この上へおかやを乘せ、思ひ入れあつて
願哲　さて、東西、お目通りに一座高く扣へましたるは、此たび婆婆下りの太夫、摺り鉢地獄のおかや信女。釜の蓋の上にて、獅子の香爐、或ひは業の秤の下がり前。次に到りまして、苧殼渡り。所々は口上を以て申し上げます。先づは、足固めが最初でござい。
ト鳴り物になり、おかや、釜の蓋の上へスツクリ立ち上がる。
さて〳〵、この度の輕業は、兩手を突いて足を離し逆さまに立ちます。この儀を名けて、逆さ回向の逆緣逆緣。
トおかや、不器用に逆さに立つ。

さて〳〵、この次は、釜の上にて後へ反ります、下から棒にて、ちよい〳〵と突き上げまする。この儀を名けて、目蓮尊者の阿母樣ぢや。ハリトウ。
トこの外、いろ〳〵口上あるべし。トヾおかや、釜の上より轉げ落ちる。
皆々　どうした〳〵。
ト寄つて介抱する。
かや　腰骨を打つて、すんでの事に生返らうとしたわいなア。
ト鐃鉢の音になり、向うより小西の八、經帷子、胡麻鹽を當て、摺り鉢を冠り、出てくる。後より牡丹獅子の八、同じ形にて、經帷子を頭より冠り出て
牡丹　なんだか無性に通りの奴らが、頭をくらはしやアがる。
ト小西の八の姿を見て
ハ、ア、あの人は摺り鉢を冠つて行くが。こいつは思ひ附きだ。モシ〳〵、お前、その摺り鉢はどこで買ひなすつた。
小西　アイ、こりやア今、通りの人に貰ひやした。無性に頭をくらはすから、これを冠つて行けとサ。

牡丹　ハ、ア、さうかえ。わしも一つ欲しいものだ。
　ト云ひながら小西の八と顏見合せ
　ヤア、わりやア八藏だな。
小西　さういふは八内か。
牡丹　サア、いゝ所で逢つた。聞きかけた雷丸の
小西　又しつこい、おれが知るものか。
牡丹　イヽヤ、聞かにやアならぬ。
　ト兩人、爭ひながら舞臺へ來る。皆々見て
皆々　ヤア、亡者の新入りだ〳〵。
源吾　地獄で喧嘩は、ならぬぞ〳〵。
願哲　喧嘩なら、修羅道へ行け〳〵。
小西　なんだ、この手合ひは。をかしな形をしてゐるな。
牡丹　さういふ此方も、對な形だが
小西　ほんに爰はマア
兩人　なんといふ所だ。
源吾　爰は八萬奈落の底
皆々　卽ち冥土の地獄國だ。
牡小　そんならおいらは
願哲　亡者の新入り。
皆々　死んで來たのだ。

牡丹　ハ、ア。道理で、なんだか薄ツ暗い所だと思つた。
小西　これにて思ひ當つたは、婆婆で飮んだる振舞ひ水。
牡丹　それ〳〵、毒に中つて息絶えしと、思ふ其うち、夢ともなく
小西　現ともなく、來て見れば、爰は地獄の六道の辻。
牡丹　そんなら、いよ〳〵死んだのか。
兩人　こいつは大變。
源吾　今日は七月十六日、仕合せな日に、わいらは死んだ。
願哲　騷ぎ次第の休息日、その代り明日から
皆々　二六時中の責め苦にあふのだ。
小西　どうで地獄へ落ちるからは、責められるのは當り前だ。
牡丹　モシ、地獄のお頭さん。新入りのわしらだ。何分よろしく
兩人　お賴み申しやす。
源吾　新入りの事なれば、大王樣へ申し上げずばなるまい。暫らくこれに待つてゐろ。
小西　ハイ〳〵、何にしろ急な事で、お土產も持つて參りません。
牡丹　どうぞ、ちつと樂な所へ、お賴み申しやす。

皆々 そんな自由がなるものか。
源吾 マア、何はともあれ、牛頭馬頭に申し上げよう。
皆々 その上、奥で一騒ぎ。
源吾 サア、みんな、來やれ〳〵。
ト皆々、ワヤ〳〵云うて下座へ入る。
牡丹 思ひがけなく命を落し、地獄へ來れば、寶の詮議も
小西 これといふのも、おぬしが邪魔をしたばかり。息が切れたゆゑ、飲まずともよい水を飲み、それが毒にて、死んだ二人。思へば憎いあの野郎め。併し、閻魔に願はなければ、幽靈にも出られまい。なんで又、おぬしは、あの雷丸を其やうに
牡丹 欲しがる譯は、おれが主人は大江の家中、本庄助太夫さま。その御主人の姫君が、尋ねてござる寶ゆゑ、詮議して差上げれば、重の井姫は元へ歸參、さすれば一旦斷絶せし、主人本庄の家も立つ道理。それゆゑ若黨八内が、姿をやつして此ほど詮議。
小西 おれも心は同じ事。元は大江の御家中にて、白井兵左衞門さまの若黨、干糠の八藏。若旦那の權八さまが、尋ねてござる雷丸、それゆゑ詮議の其ために、大工となつたこの八藏。
牡丹 そんならわれとは敵同士。白井の家より養子の權八、その養子たる身を以て、養父を討つた無道人。
小西 イヤ、助太夫こそ由留木家の、官太夫と心を合せ、家國奪はん企みと聞き、權八さまが養父を討ちしも、逆賊の汚名を殘させまい爲、卽ち養父へ大孝行。
牡丹 親を殺して、なに孝行。敵の家來の八藏も、おれが爲には、主人の敵の卽ち片割れ。いま改めて修羅道の、苦患も卽ち主人へ忠義。
小西 さう云や此方も敵同士。爭ふうちに何方ぞか、爰で命を落したら、また生返る事もあらう。
牡丹 これを互ひの運に定めて
小西 そんなら爰で
牡丹 干糠の八藏。
小西 沓かけ八內。
牡丹 八と
小西 八とが
牡丹 冥土の勝負。
兩人 ヨイヤ、マカショトナ。
ト身拵らへする。
唄〽一ト八十六日は地獄も樂よ、二六時中のつい苦しみも、

死後の罪なら青赤鬼に、わしや追ひ廻されて、四九の三十六地獄へ、一度は行かねばならぬぞえ。

トこの唄のうち、牡丹獅子の八は釜の蓋の門を取り、小西と八と立廻る。此うち向うより權兵衛、裸にて胡麻竈をあてゝ出て來り、この體を見て舞臺へ來り

權兵　二人ともに、待て〳〵。

牡丹　ヤア、わりやア、おいらに毒を飲ました野郎だな。

小西　ほんに、われにやア恨みがある。

牡丹　逢はう〳〵と思つたに

小西　ハテ、よい所で

兩人　逢つたなア。

權兵　ハテ、悪い所で逢ふものだなア。わいら二人が爰にゐるからは、慥かに冥土の地獄であらう。ハテ、悪の報いは凄まじい。わいらを殺したその後で、たうとう狼に出ツくはし、刃物が無さにムザ〳〵と、畜生に喰はれ、それから冥土の六道にて聞けば、おれは畜生道へ行くのだげな。ハテ、地獄にも知る人と、とんだ所で逢つたなア。

牡丹　狼に喰ひ殺されたとは、まだしもうぬが自業自得。

小西　爰でこそ、雷丸の在所を吐かしてしまへ。

權兵　成る程、爰なら云つて聞かせる。雷丸は龜山で拾つて、江戸へ持つて行き、品川の橋向う、善助といふ家主の、借家は即ちおれが住居だ。そこの内の緣の下へ、深く埋めて隠してあるわえ。

小西　そんなら、品川宿の橋向う

牡丹　裏借家の緣の下とな。

小西　それ聞く上は

兩人　これから直ぐに。

權兵　行かれるならば行つて見ろ。爰は冥土、娑婆へ通路が叶ふものか。

牡丹　成る程、おいらも死んだ體。

小西　寶の在所は、みす〳〵知れても行く事がならぬゆゑに、それで詳しく話して聞かせた。

權兵　娑婆で隠したを知つてゐる者は、おれが死ねば外に一人も無い。ありやア一生の廢り物サ。

小西　エヽ、コレ、折角聞いた寶の手がゝり

牡丹　知れたばかりで、取る事も叶はぬか。

兩人　エヽ、いま〳〵しい。

トこの時、向う揚げ幕にて

大勢　八やアい〳〵。

ト小西の八、牡丹獅子の八、耳塞て
小西　遠くでおれを呼ぶやうだが
ト また日覆にて、「八やアい」と呼ぶ。
牡丹　おれが耳へも「八」と呼ぶが
兩人　いよ〳〵呼ぶわい。
ト行きさうにする。權兵衞、留めて
權兵　ドッコイ、一旦冥土へ來た者は、後へは歸さぬ。
兩人　エヽ、退きやアがれ。
權兵　おれも一緒に、連れて行け〳〵。
兩人　邪魔しやアがるな。
ト突き退ける。
權兵　アレ、新入りの亡者が、缺落ちだ〳〵。
ト喚く。下座より源吾、願哲、その外、以前の亡者殘らず出て
源吾　後へ歸さぬ冥土の掟。
皆々　サア〳〵、此方へ來い〳〵。
兩人　イヤ〳〵、なんでも呼ぶ方へ
ト この時また揚げ幕と日覆にて
大勢　八やアい〳〵
ト小西の八、牡丹獅子の八、向うへ行きさうにする。

皆々　やる事は、ならぬ〳〵。
大勢　八やアい〳〵。
ト呼ぶ。これにて小西の八は擂り鉢、牡丹獅子の八は釜の蓋の門にて、皆々を毆り廻し、一散に向うへ走り入る。
皆々　ヤアイ、亡者の缺落ち。地獄の紛失。歸せ〳〵。オオイ〳〵。
ト大ドロ〳〵になり、皆々喚く。これにて道具廻る。
本舞臺、三間の間、一面の山幕、眞中に甘酒の小屋、軒口に山椒の魚を吊しあり。てんつゝ、馬士唄にて道具納まる。
ト爰に甘酒屋の亭主、茶碗へ甘酒を汲んでゐる。眞中に山駕籠一挺、この前に經帷子を着たる牡丹獅子の八、小西の八の死骸、倒れてゐる。富士の同者一人、浴衣にて白股引、行衣を腰に附け、鈴を襷へ斜に掛け、金剛杖を持ち、死骸の側に立ちかゝりゐる。雲助三人、抽三人、鋤と鍬をかたげ、皆々寄つて立ちかゝりゐる。
皆々　八やアい〳〵。
同者　八やアい。氣が附いたか。

亭主　マア／＼、早く水を／＼。
雲甲　ソレ、水だ／＼。
ト瀧壺より茶碗へ水を汲んで、死骸の兩人へ飲ませる。此うち死骸心附き、あたりを見て、思ひ入れ　皆々捨ぜりふあり
雲乙　そりやこそ、生き返つた／＼。
皆々　〆めたぞ／＼。生きたぞ／＼。
ト此うち山颪し、兩人、こなしあつて
牡丹　暫しが内も思はぬ苦痛
小西　この世へ出れば
兩人　これより直ぐに。
ト兩人スツクと立つて、東の方へ行きかけるを、亭主留めて
亭主　コレサ／＼、此奴等は魔がさしたのか。生きたのか。
皆々　なんでも此奴は魔の仕業。
杣一　こんな奴は娑婆ふさげ、
杣二　地獄へでも、極樂へでも行くやうに、
雲助　いつその事、ぶち殺せ／＼。
皆々　合點だ／＼。
ト皆々寄つて、兩人を鋤鍬にて打つてかゝるを、兩人支へて
牡丹　地獄の教へを幸ひに
小西　これなる品にて
ト鋤鍬を引ツたくり、皆々を見事に投げて
兩人　シテコイナ。
ト身構へする。山颪しになり、兩人一散に向うへ入る。同者跡を追ひかけようとするを、皆々留めて
雲一　ア、コレ／＼。こなたにはどこへ。佛は生きても、駕籠賃は出さぬぞ／＼。
雲二　サア、駕籠の錢を、拂はつしやい／＼、
同者　尤もだ／＼。あの二人は江戸の友達。二人ながら八といふ名。千貫樋の流れに死んでゐたゆゑ、關所を越して葬らば、寺へ參るもよからうと、それでこなた衆を頼んで、佛の積りで山駕籠へ
雲三　病人にして通るのも、此方の算段にある事
雲一　あまり唸るゆゑ、爰へ下ろして呼び生けたら、ピンピン達者で、あの通り
杣一　乘り逃げにされては、人質は富士同者、其奴を逃がすな逃がすな。
雲三　生きたら祝儀、死んだら酒手だ。

皆々　なんでもこなたは、やらねえ〳〵。

同者　これは又迷惑な。

ト皆々寄つて同者を捕へ、引ツ張る。この時、行衣を捨てる事。

皆々　イヤ〳〵、やらねえ〳〵。

同者　ハテマア、彼奴等を

ト振り切り、一散に逃げて東の花道へ入る。雲助、跡を見送り

雲三　いま〳〵しい先達めだ。併し又、講中は後にもゐる。其奴等が來たならば

雲甲　それ〳〵。なんでも爰に頑張つて

皆々　待つてゐろ〳〵。

ト始終山颪し、皆々あたりへ腰を掛ける。驛路入りの馬士唄になり、向うより、いろはのお半、若衆拵らへ、丸に井の字の紋附きにて、跡より石井半次郎、着流し大小、扱帶にて矢張り若衆の拵らへ、次郎作附いて出て來り

半次　ヤレ〳〵、先づ關を越えたで、少しは安堵した。

次郎　左やう〳〵。この親仁も心遣ひ致したせゐか、ビッショリと汗になりました。

はん　マア〳〵、あれにて、足を休めて

半次　それがよい〳〵。

ト矢張り馬士唄にて、本舞臺へ來る。亭主、立ちかゝつて

亭主　モシ〳〵、旦那方。甘酒をあがりませぬか。

半次　イヤ〳〵、其やうな物は、此方に望みは無い。

亭主　そんなら甘酒をあがらねば、わしは、そろ〳〵店を

ト片附けにかゝる。

次郎　コレ〳〵、亭主、なんぼ甘酒は飲まずとも、腰掛の端なりと

亭主　イエ〳〵、それはなりませぬ〳〵。

雲三　モシ〳〵、あなた方は御存じは無い筈。今日はこの瀧壺を見物に、權現樣の別當から、お客を連れてござるゆゑ、そこで今爰へは

次郎　成る程、さう聞いては致し方がない。併し、此方は足弱ゆゑ

半次　そろ〳〵と行かうぢやないか。

雲一　モシ〳〵。この山道でお足が痛みませう。小田原まで、お駕籠はどうでござります。

次郎　イヤ〳〵、駕籠の望みは

雲二　其やうに云はずと、廉いものだ。
三人　乗つて行きなさい〳〵。
ト この時、雲助三、お半の紋を、よく〳〵見て
雲三　ア、コレ、この若衆は、どうやら小袖の紋が丸に井の字。
ト 皆々見
皆々　オヽ、丸に井の字だ〳〵。
ト 口々に喚く。
半次　コリヤ〳〵。其方どもは、丸に井の字なら、なんと致す。
雲三　丸に井の字は、お尋ね者の權八ゆゑ。
杣一　お觸れの廻つた事なれば
皆々　その權八の、詮議をするのだ。
半次　それこそ因州の家中と聞く。此方は由留木家の浪人、石井とあるゆゑ、紋所の
雲三　ムウ。して又、あちらの前髪は
次郎　わいらが知つた事でないワ。
半次　身共が弟だ。
雲一　イヤ〳〵、先刻から見るところ、ぐにやら〳〵として樣子。なんでも此奴は

はん　こりや何ゆゑに、懐へ手を
ト お半の懐へ手を入れる。
雲一　コレ〳〵。慥かな證據は乳の樣子。女だ〳〵。
皆々　ナニ、女が關所を
雲一　オ、サ、女だ〳〵。
ト 皆々喚く。半次郎、思ひ入れあつて
半次　こりや、おのれらは云ひ掛け致し、慮外の振舞ひ。今一言云うて見ろ。
ト 刀へ手を掛ける。皆々寄つて
皆々　女だ〳〵。
ト 半次郎、一刀を拔く。
皆々　ソリヤ、拔いたぞ〳〵。
ト 捨ぜりふで立騷ぐ。この時お半の懐中より、三立目の、印の入りたる守り袋を引き出す。半次郎、切りかけるゆゑ、雲助三、金と心得、懐へ入れる。皆々、お半を引立てゝ向うへ入る。雲助二、山駕籠を擔ぎ、附いて入る。
次郎　おのれ、憎くき奴等めが。
半次　ソレ、匹夫めが跡追つかけて
ト 山颪しにて、兩人、跡追ひかけて向うへ入る。捨て

鐘の頭を打込む。正面の山幕を切つて落す。

本舞臺、向う浪幕、箱根山の景色、前通り小高き岩組み、以前の松の吊り枝殘り、上の方にズツと高き大瀧、誂らへの通り。この岩に藤かづらを這はせ、後に登る仕掛けあり。瀧より下は切り穴、瀧壺の體よろしく、眞中に施行の假小屋へ幕を絞り、伊豫簾下ろしある。下手に施行の高札立てあり。矢張り山颪しにて道具納まる。ト竹本の淨瑠璃となる。

〽紅葉を、秋の錦と夕映えの、瀧に照りそふ風色は、相州箱根の山續き、名も瀧坂の流れよき、藤川が志しの、心の底はそれぞとも、知らぬ施行の法の緣、つどひ集まる乞食は、只布引きの如くなり。

ト爰にこの方に、刎川久馬、半纏、股引、大小にて、挾み箱に腰を掛け、中間二人扣へ、下の方に女非人、乞食大勢立ちかゝりゐる。此うち、中間は、錢や米を與へる。何も米俵二三俵積んである。

皆々　ヘイ〳〵、お有り難うござります〳〵。

中間　ヤイ〳〵、限りもない非人めら。なんぼ主命でも、息も精も續くものではないワ。

久馬　コリヤ〳〵、家來ども、暫らく休息いたし、又々施行を

中間　畏まりました。

ト　これにて非人、ワヤ〳〵云うてゐる。また下の方より非人二三人出で來り

三人　ハイ〳〵、お願ひでござります〳〵。

久馬　ヤイ〳〵、おのれらはどれから參つた。只今暫らく休息を致さんと、家來どもを差留めしに、又々これへ。

非一　ハイ〳〵、私しどもは最前參りましたけれど、あまり群集いたしまするによつて、そこらを歩いて、あの瀧を見に參りました。

非二　そこで、あまり見事な瀧ゆゑ、こんな所で、一杯やつたらよからうと存じて。

久馬　こりや大分面白い奴等ぢや。ソレ、家來ども、取らせい〳〵。

〽ハツと積んだる施行の錢、一人前に一貫づゝ、めい〳〵取つて押し戴き

ト中間立つて、錢一貫づゝ三人へやる

非三　これはマア有り難いお施行。なんと、あんこよ、こんな結構な、また有り難い事はないぢやアないか。

非一　オヽ、われが云ふ通り、これまでの施行は、五十づつか關の山、また此お大名は格別。
非二　こんな日にあへば、乞食も捨てられたものではない。
非一　して、此やうな結構な御法事をなさるお方は、どなた樣の
久馬　コリヤ〳〵、わいらが聞いたとて役に立たぬ事。併し、云うて聞かせるワ。此たび身が御主人、もと小身のお家柄、だん〳〵との御立身、いま大名のお身なれば、せめては施しの爲、御法事と名けしは、この程より箱根の金剛院に御旅宿あつて、少々志しの爲の事ゆゑ、數多の者へ下さる施行。
三人　これは誠によい思し召し。
久馬　殊には、御主人、かね〳〵心をかけられし、姫……イヤ、女非人などの中に、身を成り下して、さまよひ歩くとの風聞。さるによつて、施行になぞらへ、彼の者を詮議の爲
非一　そんならお志しは附けたり
非二　女の詮議半分。
中間　兩方掛ければ、これがちやんぽん。
久馬　何をたはけた。……施行取らせば用無きわいら。

中間　サア、立て〳〵。
　トこれにて皆々捨ぜりふにて、下の方へ入る。
久馬　然らば又々明日の施行。別當方へ、家來參れ。
中間　ハ、ア。
　ト時の太鼓になり、久馬先に、中間附いて上の方へ入る。
〽忠孝の、身にも因果はめぐりくる、片輪車の夫をば、乘せて箱根を女業、曳くもたよはき女氣に。
　トこの文句のうち、山颪し掠めて、向うより非人小萬、實は重の井姫、やつし切繼ぎ、女非人の形、好みの拵らへ、車の綱を曳き出てくる。この躄り車に乘つて、丹波與八郎、五十日鬘、切繼ぎの形、竹杖を持ち、曳かれて出てくる。誂らへの合ひ方。
與八　「旅の空、雲踏む峰を越え行かん
重の　時雨は袖の下よりぞする」。
與八　その恐ろしきこの山路、女業にも曳き馴れて、因果もめぐるこの車。
重の　片輪車はその昔、照天の姫も此やうに、小栗判官さまとやら。
與八　曳いて熊野の溫泉に。我れはそれには引きかへて

重の　日毎に通ふ蘆の湯は、お前の病を直さん爲。
與八　我れも小栗にあやかりて、横山ならぬ横しませし、敵の行くへ
重の　やがてめでたう、それ樂しみに
與八　ヤア。
重の　行かうわいなア。
〽車の助けや竹杖を、持つ手も撓む坂路を、箱根嵐の風の足、やう〳〵たどり曳きとゞめ。
ト この文句一ぱいに、本舞臺へ來り、重の井、瀧壺へこなしあつて
〽嬉しや、爰と立ち寄つて。
重の　ヤレ〳〵、しんどや〳〵。爰は瀧坂。この瀧津瀬は蘆の湯の流れ。この身を浸し、百日のその穢も、今宵が丁度……それにしるしは、今とても
與八　ハテ、疑はずとも正直の、神は見通し、何卒力を添へ給ひて
重の　夫の病氣本復を
兩人　神慮に叶へ、たび給へ。
ト 手を合して思ひ入れ。この時、伊豫簾の中にて
水右　恐ろしき、劍の枝の撓むまで、如何なる罪の、なれの果ぞや。
ト 山颪し、三味線入り木魂の合ひ方、後の伊豫簾卷きあげると、藤川水右衛門、病ひ鉢卷、平括け一本差し、この後に菊川兵馬、舩川久馬、附添ひゐる。下手より以前の杣二人出てくる。
此たび江戸へ訴への道にて、先つ頃、受けし手疵も本腹すれば、權現に旅宿を定め、箱根七湯、めぐり〳〵て今日も又、歸る山路の道すがら、この瀧津瀬の名にめでて、瀧坂といひつらん。ハテ、眺めある景色ぢやなア
久馬　今日の御饗應は、別當の云ひ附けにて
兵馬　双子のあたり、假の猪狩り
杣二　御意に任せて提げ重まで。
水右　然らばこれにて小筒を開き
兵久　我れ〳〵どもも御相伴。
水右　いづれも打寬いで、サヽ、一杯。……して、施行の儀は。
久馬　仰せの通り、施行も今日は相濟みましたれば、この瀧を御覽あつて
兵馬　御酒宴の御遊興。
水右　イカサマ、唐土の李白は、瀧を眺めて酒を樂しむ。

トあたりを見て
併し、清く流るゝ瀧の下、いまはしき非人の兩人。
久馬　成る程、見ますれば、むさい、穢ない態をして。
兵馬　ヤイ、わいらは、いづくより參つた。御酒宴の妨げ、
早くこの場を
ト兩人、引ッ立てにかゝるを、與八郎見て、思ひ入れ
あつて
與八　イヤ、拙者はこの瀧へ心願ござつて。
久馬　爰立去らぬその上に、返答かへす無禮者。
兵馬　立たねばこれにて、我れ〳〵が
ト兩人かゝるを
與八　聞分けなき御兩所。いつかなこの場は
ト突き退け
立ちませぬ。
水右　無禮な非人。イデ、某が
ト拔きかける。重の井見て
重の　アモシ、誰れも否とは
ト水右衞門を見て
慥か其方は由留木家に。
水右　ほんに、それゆゑ勘當受け、戀しと思ふ重の井の、

姿そぐはぬ其いでたち。そんならわれが
ト寄るを、與八郎は重の井を隔て、三人キッとなつて
見得。誂らへの合ひ方。
さてこそいつぞや姫が首、似せものなれど其まゝに、捨てゝ置きしも緣あらば、逢はうと思ふ念願の、通じはすれど二人連れ。さては噂に聞き及ぶ
與八　イヤ、その與八郎も世を早う、我れは家來の丹波與作。又これなる者は小萬というて、我が女房。
水右　何か解らぬ詞の端。よし又われが與作なら、腰膝立たぬその業病。小萬にもせよ、姫にもせよ、この水右衞門が所望いたす。我れへ落つれば女も仕合せ。
與八　飽くまで非道のその一言。思ひ出せば先つ頃、遠州日坂入山津、非人の江戸兵衞、現在の妹を殺すと露知らず、宿を借りたるその時の
水右　如何にも、おれだ、この水右衞門。腹をあばいて松山が、生血の奇特、それゆゑに、元へ戻つてこの姿。その時宿せし虚無僧なら、いよ〳〵われはお尋ね者。
與八　イヽヤ、與作と云ふより外
水右　そんなら殺せし松山が、ゆかりも無ければ何事も、
先づ差當るあの小萬。

與八　松山どのは主人の息女。さすれば敵の水右衞門
水右　イヽヤ、滅多に齒は立たぬ。小萬を得心させる手段、
ソレ、申し附けたる老女を爰へ。
久兵　ハヽ。
　ト立ちかゝり、思ひ入れ。
〽ハッと云ふ間も下知の下、かねて企みし母親に、容赦繩
目の猿轡、引き立て引き立て立ち出づれば、それと見る
より。
　ト下座より雲助三、お浪へ猿轡をかけ、懷に赤子を
　抱へゐるを引ッ立て出る。
重の　ヤ、アノ、其方は乳母……イヤ、母さん、こりや
マアなんで
與八　コレ。……急かずと樣子を。
　ト思ひ入れ。
〽水右衞門はしたり顏。
水右　なんと見たか。小萬なら、それにもしてやらうが、
どこまでも重の井と、思ふ心の迷ひから、われを屋敷で
口說いた時、送りし艶書を丹波與惣兵衞。それゆゑ我れ
を勘當の、遺恨の折に誰れともなく、ぶッぱなされたは
自業自得。この節彼れを見當てたゆゑ、引ッ縛つてこの

如く。否と云はゞ腰拔けもろとも、なぶり殺し。サア、
否か、應か。どうだ。
〽非道の詞も差當る、人質取られて小萬も共に、無念の與
八郎、齒ぎしみ齒ぎり、胸先へ差込む癪、ハッと悶える
有樣に、小萬恟り駈け寄つて。
　ト皆々よろしくあつて
重の　ア、コレ、與八郎さま。今、目の前に、敵はそれと
知りながら、お名乘りなされて潔よく、勝負を遂げん甲
斐もなう、折も折とてこの病氣。どうぞ仕樣は無い事か
いの。
水右　どうして〳〵、仕樣があらう。應とさへ云へば、そ
の腰拔け、餓鬼もろともに助けてくれるが、其方へ心中。
人我れに辛ければ、我れまた人に辛し。魚心あれば水心。
小萬、なんと憎うは、あるまいがな。
〽猫撫で聲の面憎さ、食ひついても〳〵と思へでも、眼前
我が子と夫の命、我が身一つに比ぶれば、なに惜しから
んと思へども、云はゞ夫の妹の敵、身は八つ裂きの刑罰
と、血を吐く思ひ道理なる〽藤川は笑壺に入り、靜々立
つて與八郎が、襟髮取つて、グッと引据ゑ。
　ト水右衞門は與八郎を捕へ、思ひ入れ。

水右　サア、勝負せぬか。われが主人の丹波與惣兵衞、その娘の松山を、殺せしはこの藤川。與作なら主人の仇、與八郎なら妹の敵。サア、尋常に名乘つて勝負しろ。なんだ。ほえるか。無念なか。口惜しいか。足が立たずば手も叶ふまい。ハテ、いぢらしい。此やうな態で、とても敵は討たれまい。……これでもか。これでもか。

ト捕へてこづく。

〽砂に擂り附け、にじり附け。

なんと、小萬、これでも否か。

重の　サア、それは。

水右　猶豫に及ぶは不承知か。不承知ならば、餓鬼もろとも、今、目の前で刺し通せ。

久兵　心得ました。

〽畏まつたと取つて引伏せ、刃ひらりと差し附くれば。

ト久馬、兵馬、白刃をお浪と赤子へ差附ける。重の井、駈け寄り、留めて

重の　ア、コレ〳〵。マア〳〵待つて下さりませ。

水右　いよ〳〵抱かれて寢る心か。

重の　サア

水右　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

水右　色よい返事が、聞きたいわい。

〽絶體絶命、身の大難に、小萬が何と詮方もなき、身ぞと思ひきはめて。

重の　サア、得心ぢやわいなう。

水右　抱かれて寢るとな。

重の　アイ、……その代り人々のお命を

水右　得心なれば、云うた詞は反古にはなるまい。命冥加な腰拔けめ。ソレ、繩附きを助けて取らせい。

久兵　ハツ。

〽ハツと其まゝ猿轡、繩目も一度に解き捨てゝ、岩根へかつぱと突きやれば。

なみ　コレ、お姫様……イヤコレ、小萬どの。

與八　母人、無念でござる。口惜しい〳〵。

ト思ひ入れ。

重の　其お嘆きは尤もながら、是非に一羽は狩人の、網にかゝつた身の因果。この身さへ得心すれば、納まるこの場。わたしはこれが本望。與作さん、必らずその身を大切に

與八　出かした女房。これを思へば、仇に身を任せたる、

常磐御前がよい手本。心の肌身を打解けて
重の　サア、肌ふれるのは、この身の覺悟。
トちつとこなし
只何事も、お前がいとしさ。
水右　この藤川を淸盛とは心地よい。劍を抱いて寐るも一興。これより箱根權現の別莊にて、比翼の床入り。サア、小萬、來い。
ト重の井が手を取る。久馬兵馬は與八郎、お浪を圍ふ。
〽引立てられて行く思ひ、見送る思ひ鴛鴦の、胸の劍羽呑み込む藤川、人々あとに引き添うて、權現さして立歸る。
ト水右衛門、重の井の手を取り、久馬、兵馬附いて下座へ入る。この時、雲助三、下手へ隱れる。お浪こなし。與八郞、跡を見送り、無念の思ひ入れ。
なみ　尤もぢや〳〵。いはゞ敵を目前に、手出しもならぬ此しだら。
與八　よう呑み込ましてやつたれど、何として女の腕、却つて殺さるゝは知れた事。それが無念さ、不便さゆゑ。して〳〵、我が子の行く先は。
なみ　お氣遣ひ遊ばすな。知るべの方へ……先づ差あたる敵の跡を
與八　ア、コレ〳〵、何として。
なみ　加勢は乳母が小萬さまに。
與八　心急くのは尤もなれど、多勢の中へ踏ん込んでも、小萬もろともその身まで。跡に殘りしあの與之助、水子も共に死出の旅、不具の我れが、何として〳〵。
なみ　そんなら行くにも、行かれぬか。
與八　願ひある身は憂さ、辛さ。妹の敵は食ひ附いても、我が存念。我れは現在父の仇、誰れをそれぞと知れざるゆゑ、尋ぬる實は二つまで、取り得ぬうちはいつかな死なぬ。それゆゑ、見す〳〵女房を見殺しに、せめて菩提は親子夫婦、逆さまながら弔めも
なみ　この場にお出で遊ばしたら
與八　せめて菩提に
なみ　御回向を
與八　俗名小萬、頓生菩提。
兩人　南無阿彌陀佛々々々々々。
〽鉦鼓の聲も、心身を、つんざく如く。
與八　今頃は小萬めも死にやつたか。定めて苦痛は
なみ　コレ〳〵、お氣の弱い。わしも婿や、娘を殺し、生き殘つてこの思ひ。宿世の業と諦めても

與八　どう諦めたとて、たとへ武士でも、鬼ぢやとて、これが泣かずにゐられうか。これぞ地獄の呵責より、猶々まさりしこの苦しみ。

なみ　これより苦しい重の井さま。思ひ廻せば

兩人　エヽ。

ト思ひ入れ。

〽南無阿彌陀佛々々々々々々、夫も珠數を繰り返す、回向に時をぞうつしける〽女ほど實に恐ろしきものは無し、戀には凝つて千仭の、劍の中もいとひなう、やう〳〵遁れ駈け戻る。

ト山颪し烈しく、バタ〳〵になり、下手より重の井走り出て、舞臺につまづく。與八郎、介抱して

與八　ヤヽ、小萬ぢやないか。

重の　與八郎さま。よう爰にゐて下さんしたなア。

〽しがみつく〳〵乳母は見て

なみ　ヤ、姫君様。……あなたはどうして。

ト寄るを

與八　女房去つた。縁切つた。

重の　エ。そりやマア、何ゆゑ。

與八　ヤア、何ゆゑとはうろたへ者。我れ腰抜けとなつたる上、父の敵、妹の仇、まづ差あたる其方に、妹が敵を討たせんと、思ふ心も、やみ〳〵と、戀に引かれて歸りし汝、見下げ果てたる女よなア。

重の　サア、尤もぢや〳〵。其やうに病を悔ましやんすがいとしいゆゑ、敵の手へ捕はれとなり、これ幸ひと透を窺ひ、只一討ちに恨みんと思へども、お前の機嫌をそこねうとて、戻つては參りませぬ。あう〳〵、云ふに云はれぬ、切ない、悲しい、憂き目をして戻つて來たも、お前の病氣を今一度、おのれと思ふ一念力、殘つた願ひが滿したさに。

與八　ナニ、殘つた願ひとは。

重の　サア、いつぞや都を落ちてより、大井川にて思はぬ難儀。夫の大病、腰膝立たぬ足なえの病ひ。敵が、討たれぬ〳〵と、悔む主より女の身で、側に見る目がいとほしく、ま一度本腹させまして父御の敵討たせんと、この命を代りに立て、權現を誓ひに掛け、水垢離取つて百日の、その朝夕も今日限り、淸め捧ぐるこの命。日數も滿ちて今朝までも、行法を遂げおほせ、いま一度で滿つる願。悲しや、思はぬ災難で、身は捕はれても、夫の爲に權現へ、捧げたこの身、のめ〳〵と、なんで死なうぞ、

死にやせぬ〳〵。思ひ詰めたこの願望、幸ひ爰の流れより、この水上は蘆の湯の、藥師の利益もろともに、心に念じ、權現納受ましますか。しるしを爰にて女の念力。

與八　然らば我れも、もろともに

重の　我れに力を添へ給へ。

ト雲助三、窺ひ出て

雲三　さてこそわれは與八郎。

トかゝるを、與八郎引き附け

與八　早く小萬は

重の　オヽ、さうぢや。

ト早目の合ひ方になり、重の井、身づくろひして思ひ入れ

〽甲斐々々しくも身づくろひ、駈け寄る山路に散りしく木の葉、嶮しき岩根いとひなく、脛もあらはに分け登る、その身はむさゝび、木傳ふ猿、難なく瀧に近寄れば。

ト此うち水音烈しく、小萬、瀧を見て、だん〳〵と岩根を傳はり、蔦葛に取り縋り、登る事よろしく

〽音凄まじく飛び散る水勢、白絲みする瀧の面、ざんぶと飛び込み、どう〳〵〳〵、落ちくる水を結びあげ、念力凝らして一心に、合掌なしたるその有樣、物狂はしく爰逆立ち、身の毛もよだつばかりなり。

ト重の井、瀧に打たれて思ひ入れ。此うち兵馬、久馬窺ひ出て、與八郎にかゝる。與八郎、兵馬を當てる。この間に久馬、與八郎を下の瀧壺へ突き落す。ドンと水音する。重の井、合掌して思ひ入れ。お浪、與八郎を見て

なみ　ヤア、誤まつて若旦那、あの瀧壺へ

久馬　其うち身共は、この子悴。

なみ　イヽヤ、若は渡さぬ〳〵。

久馬　小癪な老ぼれ。

トお浪を引退け、抱き子を取らうとする。お浪やらじと爭ふ。山颪し、水音烈しく、與八郎、瀧壺より這ひ上がり、この體を見て、久馬を取つて投げ、キツと見得。

ヤヽ、躄め、わりやア腰が立つたか。

なみ　ほんに、あなたはお腰が立つた。

與八　ヤア、思はず知らず、業病の、腰膝自由に

久馬　本腹すれば、生けては置かれぬ、觀念。

〽丹波目がけて切りかくるを、心得ひらりと身をかはし、刀もぎ取り只一討ち、首は虛空へ飛び散つたり。

與八　さてこそ小萬が念力通じて、奇特は目前。ヤア〱小萬にあらぬ重の井姫。今こそ本望、病の平癒。やがてめでたう、本地へ歸參を
〔聲の響きは瀧の面、兩眼閉き嬉しげに
　ト この時重の井、立ち身にて目を開き
重の　アラ、嬉しや。喜ばしや。權現納受ましまして、有り難やなア。
〔云ふぞと見えしが、一團の、靈火ひらめき、俄かに山鳴り震動し、在りし姿は藻拔けの衣、血汐の小袖瀧浪に、流れ落つるぞ怪しけれ。
　ト大ドロ〱、これにて重の井、瀧の中へ消える。煙硝火パッと立つ。差し金の小袖、下へ流れ落ちる。與八郎立ちあがり、お浪と顏見合せ、心得ぬ思ひ入れ。
與八　さてこそ、姫は。
　ト思ひ入れ。山颪し、バタ〱になり、向うより半次郎、お半に次郎作附き、雲助二人と爭ひながら出て來り
はん　ヤ、あなたは丹波
半次　與八郎さま。
與八　そちやお半。どうして爰へは。

雲三　さてこそ、うぬらは
　ト三人かゝるを、半次郎は雲助一をポンと切る。次郎作は二を當てる。
與八　して、これへ參りしその仔細は
はん　いつぞや船にて海に入り、死ぬる命を吉田船。それゆゑ駿河の二丁町にて思はずも
次郎　それより爰へ、娘も共に同道して、あなたの兄御の定之進さま、彼の官太夫さまへ御養子、身持ち惰弱に御勘當。その折、元の水右衞門
半次　勘氣を免し、親もろとも、發足のあと、兄上には、苦痛の惱みに大井川、思はず受けたる鐵砲は、正しくあなたと存ぜしゆゑ
はん　勘當受けて他人となり、死ぬる今際に御遺言。敵は現在養父にて、證據といふは與惣兵衞さま
次郎　死骸の側に行き合はす、それを目掛けて打つたる手裏劍
半次　象眼入れたる手綱の小柄。まがふ方なき水右衞門。
はん　云ふに云はれぬ養子の御身。
半次　それゆゑわざと勘當受け、切腹すればあなたに越度掛けざる上にこの樣子。尋ね求めて今日只今、寶を取得

て與八郎どの、早々敵を討たれよや。
與八　初めて知つたその様子。その敵とも露知らず、いはば主人の重の井姫まで
次郎　その姫君は權現坂、賽の河原の浪打ち際、姿變れど面差しは
半次　怪しの死骸は重の井さま。そんならこれも
與八　さてこそ我れに力を添へ、魂魄凝つて亡き魂の、假に姿を現はして、神へ祈誓の靈驗あらはれ、本腹ありしこの上は、父の敵に妹が仇、いはゞ、主人の重の井姫。彼の權現の別莊にて
半次　名乘り合せて敵討ち。
なみ　其うちお子様、この乳母が
次郎　親仁も、とも〴〵、瘦せ腕ながら
半次　後詰めは即ち半次郎
與八　これより直ぐに、跡追ひかけ
雲三　丹波、觀念

ト與八郎へ切り附けるを、見事に切り下げる。此はずみに以前の守り袋を、懐より落す。半次郎、取つて

半次　ヤ、、こりや失ひし九重の印。
はん　大事にかけて石部より
與八　さてこそ風波はその奇特。知らずに明かせし
はん　わたしが守。
半次　慥かに拙者が

ト懐中する。

與八　預けてこの身は

トあたりに落ちてある行衣を取つて抱へ

これこそ幸ひ、出でたつ姿は敵討ち。
雲三　うぬ

トかゝるを突き廻す。半次郎ちよつと支へて

半次　爰かまはずと

ト切り下げる、

與八　ムウ。……さうだ。

ト山颪し烈しく、一散に向うへ入る。跡より次郎作・お浪、お半、子を抱へ、同じく向うへ入る。この時、杣二人出て

杣　うぬをやつちやア

トかゝるを、よろしく立廻つて

半次　何を小積な。

トこれより禪のツトメになり、二人を相手に立廻り、トヾ二人を追ひ散らし、下座へ入る。双盤になり、こ

の道具變る。

本舞臺、正面打拔き、賽の河原湖水の景色。上の方に高足、高欄附きの屋體、簾を掛け、一面に山の張り物。下の方に荒人神の宮居。この道具納まる。

ト大ドロ〳〵になり、心火二つ燃える。屋體の簾上がると、内に水右衞門、着流し、刀を杖に突き、心火に目を附けてゐる。矢張り、ドロ〳〵、向うより與八郎蓑を着たる好みの形にて、松明を持つて、ツカ〳〵と出て來り、この心火に目を附け、兩人キッとなつて見得。誂らへの鳴り物になる。

水右　ハテ、心得ぬ二つの心火。一つはいつぞや遠州にて殺害なせし松山にて、一つの炎は重の井姬と合體なし、我れに仇なすこの有樣。

與八　陽とはいへど、これ全く、陰氣の凝りたる炎の振舞ひ、

水右　何にもせよ、目に遮るはいまはしい。消えろ。立去れ。今、目前に

ト切り拂ふ。大ドロ〳〵、心火は消える。與八郎、上の方を見て

與八　ヤヽ、慥かに彼れこそ敵の藤川。

ト飛びかゝらんとするを、水右衞門、立ち身にてヂロリと見て

水右　これへ來るは丹波與八郎。何しに爰へは

ト與八郎、詰め寄り

與八　親の敵の水右衞門。證據は覺えの手綱の象眼。

ト小柄を出す。

水右　さては汝は本腹なし。これへ來れば、卑怯にも何をか包まん三條にて、うぬが親の與惣兵衞を、また思はずも松山を、殺せし上に重の井姬、戀の叶はぬ意趣晴らし、なぶり殺しにぶツぱなしたは、如何にも藤川水右衞門だワ。

與八　さてこそな。

水右　名乘つて聞かせる上からは、潔く、勝負を遂げん。

與八　望む敵の水右衞門、サア、尋常に

ト蓑を脱ぐ、白裝束になり、キット見得。

寶の印も取り得し上は、誰れ憚らぬ丹波與八郎。幸ひ爰も荒人神、神力應護の力を借りて

水右　小癪な一言。

ト時の太鼓はげしく、向うより牛次郎に次郎作附いて

出て
半次　日頃思ひし念願届き、花待ち得たる再會に、その後詰めこそ半次郎。
次郎　附添ふ我れは憲法次郎作。
水右　さては、うぬらも
馬八　とく／＼この場で、
三人　いでや勝負を。
ト三人詰め寄つて見得。この時、勢子太鼓になり、下座より捕り手六人、簑笠にて取卷き、棹に並び
皆々　與八郎、動くな。
與八　何を小癪な。
水右　うぬら一々返り討ちだ。覺悟なせ。
トひらりと拔くを木の頭、與八郎、半次郎、次郎作、詰め寄る。水右衛門、刀を擔ぐ見得。これをキザミにて、カケリになり、よろしく、
ひやうし　幕
この幕、小田原の幕を引附ける。あとシヤキリ。

二番目序幕　鈴ヶ森の場

役名——蝮の次郎吉。法華長兵衛實ハ助市。女非人、おはぎ、六鄕の船頭、長、飛脚。早八。堤軍藏。非人、だぼ七。佛作助。權八姉、お十實ハ八重梅。白井權八。

二番目役觸れ濟むと、知らせに附き、馬士唄になり、向うより飛脚早八、狀箱を刀の鞘に附け、ホイホイホイホイと駈けて出て來り、幕の引附けへ入る。右の鳴り物にて幕明く。

本舞臺、正面黑幕、よき所に六鄕渡し場と書きし傍示杭、葭簀張り西瓜見世、軒吊りの團子提灯、茶見世道具を飾り、爰に早八、倒れ居るを、旅人三人、西瓜屋の亭主、介抱してゐる。上の方に差出しの囚人駕籠、金澤無宿蝮の次郎吉と記せし木札を下げ、軍藏は半纏股引きの侍ひにて、人足大勢附き警固してゐる體。
旅人　飛脚どの／＼。
亭主　霍亂かも知れませぬ。飛脚どの／＼。
ト呼び生けてゐる。矢張り馬士唄にて、船の着きし體

旅人 にて、向うより旅人の仕出し大勢、ワヤ／＼云うて下
座へ入る。舞臺の旅人、これを見て

旅人 ヤア、船が着いたぞ／＼。

トわや／＼云うて向うへ走り入る。亭主、呼び生けて
ゐる。この時、仕出しに交り、四つ手駕籠一挺、垂れ
を下ろし、駕籠舁き、捨ぜりふにて舞臺へ來る。軍藏、
思ひ入れあつて

軍藏 飛脚體の者、氣を失ひしは、暑氣中りと見える。

亭主 左樣でござりまする。コレ、飛脚どの／＼。

ト呼ぶゆゑ、早八、心附いたる思ひ入れ。四つ手駕籠
の人足、中の樣子を見て、下手へ入る。

早八 ヤレ／＼、草臥れたので、眠つたと見えるわえ。

亭主 モシ／＼、お前、氣が附きましたか。

軍藏 して、おてまへは、どれからのお飛脚でござるな。

早八 ヘイ、私しは小田原飛脚でござります。昨日箱根に、
敵討ちがござりました。丹波與八郎といふ者が、藤川水
右衞門といふ侍ひを討ちましたゆゑ、由留木のお役所か
ら、江戸表の上屋敷へ、早飛脚でござります。

軍藏 それは貴公、いかい早足でござるの。

早八 イヤモウ、小田原から駈け詰めに參りましたゆゑ、
息を切つて只今の氣絶、して、お前樣は、

軍藏 身共はこれなる駕籠の中、蝮の次郎吉と申す者、お
代官所へ差出す盜人、最早入相でもござらう。殊更、鈴
ケ森には白井權八、お仕置に罷りなり、當時至つてやか
ましい盜賊の詮議、　江戸表まで同道いたさう。

早八 それは忝なうござりまする。そろ／＼お供いたしま
せうか。……これは世話でござつた。

ト入相の鐘になり、四人駕籠を人足舁き上げ、軍藏早
八同道して下座へ入る。下の方に前の四つ手駕籠下ろ
しあり、駕籠の中にて

八重 駕籠の衆／＼。

ト呼ぶゆゑ、亭主、聞き附け、駕籠の側へ寄り

亭主 あの衆は酒でも飲みに參つたのでござりませう。御
用かな。

八重 アイ、ちつと頼みが。

ト合ひ方になり、垂れを上げる。中に葛飾のお十（實
は八重梅）世話女房の拵らへにてゐる。

イエ、別の事でもないが、わたしが連合ひが、いま品川
のお方に逢ひ、あの萬年屋へ、相談事で參りましたが、
用が濟んだら、早う暮れぬうちに行きたうござんすが、

ちよつと迎ひに

亭主　ハイ〱、左樣なら私しが、ちよつと川向うまで參つてあげませう。

八重　そんならどうぞ、大儀ながら

亭主　ハイ〱。ドリヤ、行つて參りませう。

ト時の鐘、浪の音にて、亭主、向うへ入る。八重梅、思ひ入れあつて

八重　今の話しは箱根にて、丹波藤川仇討ちの、噂と共に世間の風聞。鈴ヶ森にて弟權八、死罪になりしも知らぬ身の、淺ましい死を遂げたるか。思へば〱

ト愁ひのこなし。この時、向うにて

長　エヽ、濟まねえぞ〱。

トこれにて八重梅、垂れをおろす。てんつゝになり、向うより船頭の長、非人の形の佛作助を引立て出る。後よりおはぎ、女非人にて、留めながら出て來り

はぎ　コレサ〱、年寄りを捕まへて、其やうにする事はない。

作助　サア、わしが惡くば、何分あやまりませう。料簡なされて下さりませ〱。

長　イヤ〱、濟まねえ〱。コレ、親仁、てめえは非人ではねえか。その身柄ゆゑ、白井權八を死罪の時、槍を突いた、その穢れた身で、直ぐに大師へ參るといつて、おれの船へなぜ乘つた。船玉樣を穢したぞ。それぢやア濟まねえ〱。

作助　サア〱、御尤もでござります。わしも非人の役ゆゑに、よんどころなう勤めました。その穢れた身で大師樣へ參りがけ、船に乘つたは不調法。併しながら、私しも非人とは申す者の、心まで穢れは致しませぬ。

長　ヤイ〱、われが心掛けが、穢れたか、穢れぬか、それをおれが知るものか。うぬ、ぶんのめして、船玉樣へ云ひ譯するワ。老ぼれ乞食めが。

ト打つてかゝる。おはぎ留めて

はぎ　コレサ〱。不請しなさいな。見てゐるも氣の毒だ。酒でも買つて濟む事なら、ちつとばかりは出して……と云ひたいが、爰にあるのは、コレ〱。

ト懐より財布を出し、中より藥包みを出し

この包みは、「へいさらばさら」といふ藥、金高な代物だが、買ひ手がなければ持ち殺し。マア〱、そりやア格別、その親仁どのを、見遁がしてやんなさいよ。

長　イエ〱〱、此奴は連れて行つて、渡し船を洗は

せる。サア、來やアがれ〱。

はぎ　ハテ、不請してやんなさいな。

ト長を留めるとて、件の藥を落し、長を留めながら、おはぎ、下座へ入る。作助、殘つて

作助　今の男が腹立ちの、穢れし身より天罰の、いはゞ、主人の權八さまを

ト思はず振り返り、垂れを上げし八重梅と顏見合せ

ヤ、あなたはどうして。

八重　家來作助。

作助　姉御樣か。

ト逃げんとするを、八重梅、走り寄つて作助を捕へ

八重　エヽ、おのれはなア。

ト合ひ方になり

如何に、今では非人の身、刑罪の役目に當ればとて、家來の身として、權八が最期の穗先。おのれは天命知らずの人非人。……サア、弟を生けて返せ、償うて返せ。エヽ、おのれはなア。

ト引廻して叩く。作助、誤まり入りし思ひ入れにて

作助　御尤もでござりまする。只一通りにお聞きあつては、若旦那を槍先で、家來が主人を成敗せし、その云ひ譯も私しが、手前勝手か存ぜぬが、助太夫どのを討つて立退く權八さま、それゆゑにこそ女房も、本庄どのに勤めし女、夫婦の仲も敵同士、兄の彌市も本庄の、下部でござれば女房に附け、離縁いたして今では他人。悴の次郎吉めは、生れ附いての惡黨ゆゑ、異見をくはせる其うちに、權八さまは牢舍と聞き、南無三方と非人となり、願うて死罪の槍の役。これと申すも急所を除け、皮肉を縫つて止めも刺さず、その上二十四時のうち、天水咽喉に通ると其まゝ、息吹き返すと聞きしゆゑ、それゆゑ主人を、勿體ない、刃向ひましたこの親仁。姉御樣、樣子と申すはこの通り。御免なされて下さりませ。

八重　すりや、弟を助けん爲に、家來の身にて非人となり、願うて役目を

作助　お助け申して置くならば、金瘡平癒の良藥は、「へいさらばさら」は、少々此方に心當り。辰の年月日時揃ひし、血汐を加へ服する時は、きはめて全快。殊に、悴の次郎吉の、生れも丁度辰の年月、最前、彼奴を尋ねて血汐の役にと、思ふうちに捕はれて、駕籠にてこの路を

八重　それぞ先刻に怪しき山駕籠。その囚人は、其方の悴の

作助　あの悪黨の次郎吉め。あのまゝやつては血汐の出所。これより跡を追ひ掛けて、人足、警護の侍ひまで、皆切り散らして、悴が生血、取り得て其まゝ權八さまの

ト後の見世より水瓜の庖丁を取り

これ幸ひのこの刃物。何卒首尾よう悴が血汐。

八重　かゝる忠義の其方とも、知らぬ女子の淺はかに、恨み云うたも……コレ、どうぞ弟が

作助　お氣遣ひなされまするな。跡追ひかけて悴が生血。

八重　とはいへ不便な

作助　おさらばでござりまする。

ト時の鐘になり、一散に下座へ入る。八重梅、跡見送り

八重　さはさりながら、その血汐、手に入つたりとて、加へる良藥

ト思ひ入れ。この時、おはぎ、懷を、探し〳〵出て來り

はぎ　サア〳〵、あのマア大事な藥は、日坂の乞食小屋から、おれが手に殘つたを、賣らう〳〵と思ふうち、ツイ落したが、こいつはとんだ事をした。

ト尋ねまはり、財布を見附け、手早く取つて

イヤ、あつた〳〵。エヽ、有り難い。誠にこの藥を落したかと氣を打つやつサ。これが誠の「へいさらばさら」。ドリヤ、歸りませうか。

ト行かうとする。八重梅、この樣子を窺ひゐて

八重　アヽモシ、お女中さん。今お前の仰しやつた、藥のその名は、何といふ名でござんしたな。

はぎ　エヽ、なにかえ。わたしの申した藥のこの名は、「へいさらばさら」と申します。金瘡に利く藥サ。

八重　名は聞きながら、これまでに、ついに一度も見ぬ藥、ちよつと見せて下さんせ。

はぎ　ナニサ、お易い御用。別して變つた藥でもないのサ。これでござんすわナ。

ト藥包みを渡す。八重梅、取つて

八重　エヽ、そんならこれが

はぎ　金瘡に利く奇妙な藥サ。

八重　エヽ、忝ない。天の與へたこの藥。もしや弟が蘇生もなさば、無うて叶はぬ。

ト思ひ入れあつて

こりやアわたしが貰うたぞえ。

ト上の方へ走り入る。おはぎ、恟りして

はぎ　アヽコレ〳〵、それをやつてよいものか。コレモシ、女中さん〳〵。

ト追ひかけて入る。時の鐘、浪の音にて、道具變る。

本舞臺、向う黒幕、上の方松の大樹。舞臺前は浪板

禪のツトメにて道具納まる。

トばた〳〵になり、上の方より人足四人駈けて出る。

作助は庖丁を振つて出る。軍藏と長も、立廻りながら出る。暗がりのこなし。

作助　おのれ、囚人次郎吉を渡せ。さなきに於ては、片ツ端から

ト切り立てる。長、この聲を聞いて

長　イヤア、さういふ聲は、先刻に聞いた非人の親仁め。モシ〳〵、お侍ひ樣、こいつは、非人の、人足でございます〳〵。

軍藏　非人とあらば合點ゆかぬ。囚人次郎吉渡せとは、さては、おのれは

作助　囚人に由緣の者。この暗がりを幸ひに、あの次郎吉を此方へ渡せ。ならぬと云ふと、刃向うても

ト庖丁を振り廻す。

長　ソレ〳〵、拔いてゐますぞ〳〵。

軍藏　憎くい非人め。ソレ、召捕れ〳〵。

皆々　ぶち据ゑろ〳〵。

ト禪のツトメになり、皆々息杖にて打つてかゝる。作助、滅多切りに、切り立て〳〵、皆々と爭ひながら下座へ入る。引違へて下座よりおはぎ、似寄りの財布を持ち、駈けて出て來り、跡より早八、追ひかけ來り、財布を奪ひ合ひながら

早八　ヤイ〳〵、女、これはおれが小遣ひの殘り。その財布を、どうする〳〵。

はぎ　どうするとは、こりやアわしが大事の「へいさらばさら」といふ藥。今の女に取られたを、お前が持つてゐるゆゑに

早八　コレサ、藥とはなんの事だ。藥ではない、小遣ひだワ。

はぎ　エヽ、おれが藥だ。

早八　イヽヤ、小遣ひだよ。

ト兩人爭ふうち、早八、件の狀箱を落し、兩人向うへ駈けて入る。これにて正面の黒幕切つて落す。

本舞臺、眞中に權八の磔刑柱。俵を掛けし死骸殘りあり、左右に拔き身の鎗を立て、捨て札、石の地藏下の方よき所に件の囚人駕籠。この側へ飛脚の狀箱落ちてある事。うしろ黑幕、時の鐘、かすめたる涙の音、雨車にて道具納まる。本雨降り出す。駕籠の脇に、八重梅、死骸、三筋に木場と染めし手拭にて締め殺したる體。よきキッカケに一つ鐘、凄き合ひ方になり、死骸に掛けし俵落ちると、白井權八、淺黃の小袖に、丸に井の字の紋を紺にて摺り込みし着附け、磔刑より蘇生して心附きし體にて目を開く。これにて囚人駕籠の垂れを上げる。蝮の次郎吉、誂らへの拵らへ、口におはぎの取られし藥の財布を咬へ、繩にかゝりし體にて、出かけて思ひ入れ、これにて空へ月を引出す。双方、思ひ入れあつて

次郎　女が持つた財布のうち、慥かに金と思ひの外、役にも立たぬ藥の包み。アヽ、これに附けても思はぬ殺生。

ト八重梅の死骸へ思ひ入れ。

權八　身は黃泉へ赴けど、天水咽喉へ通ると其まゝ、息吹き返し蘇生なす。それも急所を除けし槍疵。殊に止めを刺さざれば、運に叶うて今一度……これといふのも、家來が働らき。

次郎　締め殺したるこの女、道連れの來ぬうちに、殊には駕籠を破つたからは

ト繩を取り捨て、行かうとする。權八、思ひ入れあつて

權八　若いの、待つた。

トこれにて次郎吉振り返り、思ひ入れ。

次郎　木の空からも聲掛けて、待てとは、わしか。

權八　槍疵數ケ所受けながら、天の助ける天水の、咽喉を通ればこの如く

次郎　よみがへつた仕合せは、目立たぬうちに

トこの時非人一人窺ひ出て

非人　生き返つたら

ト手早く槍を取つて突きかゝる。繩切れて、權八その槍に取り附き、飛び下りる。權八、槍を取捨てる。非人、組み附き、立廻りのうち、片袖を引きちぎる。權八、投げやる。次郎吉、捕へて

次郎　殺生ついでに、此奴も往生。

ト締め殺す。非人は片袖を持ち、落入る。次郎吉、死骸を投げる。これにて片袖をあたりへ落し、倒れる。

權八　寶詮議の其ために、與八郎どの、拙者まで、心にもなき盗賊の、運命拙なくお仕置に、なりしこの身も又ぞろや。それにこなたは繩拔けの、その働らきは、天晴れ名高き盗人の

次長　ナニサ、そんな名のあるわしでもない。異名も蝮の次郎吉といふ、ちよつくら持ちの小野郎だが膽があるね。昔を云はゞ、熊坂が、兜頭巾に身を固め、引廻しの馬に乘つて來ようとも、びくともするのぢやアごんしねえ。阿波座烏は難波潟、五つ連れたる雁金も、五人男は根が盗人。藪鶯も京育ち、慇懃形の袴垂、お江戸でいはゞ評判の、引窓與兵衛はわしが親分。夜盗の中の極惡黨、今にもづきが來ようかと、影膳食つて待つてゐるのサ。

權八　この身も命惜しまねど、尋ねる品を取り得るまで、姿を變へて今一度。さはいへ、數ヶ所のこの疵の、平癒するまで折入つて

次郎　お頼みならば頼まれます。後へは引かぬわしが氣性。殊に、前髪、優形な、其となりなりは女も同然。幸ひ爰で殺したる、女が着るもの風ふせぎ、人目を忍んで

ト件の死骸の上着を取つて、手傳うて着せる。權八は頭へ、死骸の懐にありし袖頭巾を冠り

權八　一旦爰を

ト行かうとして、落ちてある狀箱を見附け、取つて

こりや狀箱が

ト開き封を切つて、月明りにて讀む事あつて

ヤ、こりや箱根にて與八郎、九重の印取返し、親の敵水右衞門、討ち留めたるを知らせの文言。さすれば今に知れざるは、雷丸の短刀ばかり。

次郎　その短刀は由留木の重寶、大江の家では九重の、印を尋ねてお互ひに、替へ／＼にして差上げる、それまで死なれぬお前の命。

權八　力と頼み、その品を

次郎　取り得るまでは、互ひに江戸で

權八　マア、それまでは八幡の、森で支度を。

ト兩人、思ひ入れあり。

次郎　金と思つて殺した女、役にも立たぬこの藥。

トあたりへ捨て

サア、歩いて見なさい。

ト時の鐘、浪の音になり、次郎吉は權八の手を引き、兩人向うへかゝる。揚げ幕より法華長兵衞（以前の助市）着流し一本差し、三度笠を持ち、藤倉・大師參り

の歸りにて出て來り、よき所にて摺れ違ふ事。長兵衞は舞臺へ來り、月明りにて、件の片袖と、薬の入りし財布を見附け、これを拾ひ

長兵　財布のうちには薬の包み、殊に、ちぎれしこの片袖。

ト女の死骸を見附けて

ヤ、、こりやコレ爰に女の死骸。

ト顔を、よく〳〵見る。兩人は花道へかゝる。

ヤ、、慥かに女房。コレ、この手拭で

ト恟り、抱きかゝへる。この時、次郎吉は小石を取つて打ち附ける。長兵衞、身をかはす。兩人は向うへ遁がれ入る。長兵衞キッと見得になり、よろしく

幕

一寸口上

これより末、品川より日本橋までの仕組み、正本これなく、此幕にて打出しに相成り申候間、また〳〵お斷り申上候

千穐萬歳大々叶

獨道中五十三驛（終り）

傳記、解說、年表

渥美清太郎

本篇には、文化文政度の江戸劇壇を殆んど一人で背負つて立つたと云つてもいゝ、大南北と稱えられる四世鶴屋南北の作の中から、代表的な怪談狂言五種を選んで收めた。怪談狂言は彼れに依つて始められ、大成せられ、今に殘つた、そして南北はその方面での第一人者である。彼れが劇壇に認められたのも怪談狂言である。彼れと怪談狂言とは切つても切れぬ緣がある。

四世鶴屋南北は、寶曆五年（西曆一七五五年）江戸日本橋乘物町、海老屋伊三郎といふ紺屋の型附け職人の家に生れた。寶曆五年といへば江戸歌舞伎の隆盛期で、四世市川團十郎を筆頭に、名優綺羅星の如く三座に分れて、その妙技を戰はしてゐた頃である。その正月には中村座で、坂東又九郎が天竺德兵衞の役で當てゝゐる。南北の處女作も天竺德兵衞である。深い因緣といふべきであらう。彼れは初め源藏と呼ばれ、後に伊之助と改名し、父の業を習つて紺屋職をしてゐたが、さなきだに芝居好きの血が流れてゐる江戸市民の中でも、彼れは狂の字の附く方の愛好者で、安永四年、二十一歳の折、遂に家業を捨てゝ芝居國へ入つた。芝居好きといへば大抵は俳優を望むのに、彼れが作者を選んだのは、己れの天分に最初から相當の自信を持つてゐたのであらう。彼れは當時、中村座の立作者であつた金井三笑の弟子となつて、勝俵藏の名を貰ひ、その顏見世から作者生活の第一歩を踏んだ。その頃の慣例通り、下級作者としての境界を何年か踏んで、いよ〳〵脚本を書くまでになつた。最初は「序開き」といふ、午前五時頃に上演する、勿論觀客は見てもくれぬ、脚本枚數にして九枚以上は成らぬといふ、心細い狂言を書くのであるが、彼れはこの「序開き」の初作でさへ、他の作者達をアッと云はせたものだ。それは、この短かい作の中に「假名手本忠臣藏」十一段の眼目の趣きが洩れなく盛られてあつたからだ。師匠の三笑もその才氣に驚ろいて、「俵藏はキッと立派な作者になれる」と鑑定を附けた。

勿論、型附け職人の子の彼れに、滿足な敎育は施されてゐなかつた。が彼れは觀察眼が極度に鋭く、放膽な奇拔な想を組み上げる才能を豐かに具へてゐた。學識の乏しい代りに、眼學問耳學問を直ちに脚本へ應用する天稟を持つてゐた　當時の作者道にしては、これは何よりの才能であつた。自然、彼れは市井の出來事を中心とする、世話狂言作者として發達して行つた。やがて「二立目」を書く時代になつた。「二立目」は、序幕の前に上演する狂言であるから、

これなれば筋立ても比較的自由であるし、折々は看客の眼にも觸れるから、先づ書き榮えがあるといふものだ。この「一立目」でも或る時、彼れは內部の人を驚ろかした。それは、舞臺一面を鯨の胴中にして、その腹を破つて盜賊が、金冠を抱へて現はれるといふ趣向だつた。この奇想には誰れも驚ろいたが、その舞臺裝置としては、手習ひ草紙を一面に貼りつめればいゝといふ俵藏の案を聞いて更に驚ろいた。彼れは萬事をこの調子で押通して行つたのだつた。

斯くして次第に認められては來たものゝ、彼れの作者としての位置は一向上らなかつた。實力に比して昇進の遲かつたのは、昔の作者達にも黃白の功驗顯著であつた爲らしい。それに、後援者たる俳優を得なかつた爲にも依るらしい。彼れより後輩である福森久助が、樂屋に金を遣ひ、三津五郞といふ後援者を得た爲に、それほど實力も無いのに彼れを追ひ越して、早く立作者となつた實例を見ても想像される。だから、彼れが道化形の俳優、三世鶴屋南北の娘を娶つたのも、さうした政略を含んでゐたのではないかとも思はれるのである。何か三世南北の手引に依つて、出世の　が開かれる豫算だつたのではあるまいか。その妻は年上で、結婚直後、勝俵藏の字が急に太くなつて特別待遇の意が酌まれ、それが間もなく細い字に返つたのを見ると、なんだかさうした意味と取れない事もない。

結婚したのは安永八九年頃の事らしい。その後も彼れは位置に於て更に發展せず、寬政の末年に到つて、漸く二枚目作者まで上り得たのみだ。二枚目作者といふのは作者の次席で、立作者から筋を貰つて、可成り重要な幕も脚色する事を得るし、權力も相當に附くのであるが、これまで實に二十四五年の作者生活をした事になる。如何に昇進の道に乏しい昔の芝居國でも餘りに遲いが、これが事實なのである。俵藏は隨分辛抱したのである。二枚目時代には多く「小幕」といふ、滑稽本位の幕を書きながら、ヂッと機會を待つてゐたのである。しかも最高地位たる立作者には、なかなか成れない。彼れの頭上には初世櫻田治助、初世並木五瓶、その外の大頭が抑へてゐたからである。

併し、遂に機運は到來した。彼れの後援者が現はれた。文化元年、彼れが河原崎座に勤めてゐた時、初世尾上松助が中心になつて夏芝居を打つ事になつた。松助は俵藏に目を附けて手を握り、前例にない夏狂言を執筆させた。それは「天竺德兵衞韓噺」であつた。所謂る「怪談狂言」は、これが嚆矢である。元より妖怪變化を舞臺に出す事は、以前からあつたのだが、幽靈の凄味と、それに附隨する仕掛け物の奇妙さを中心とする「怪談狂言」は今まで無かつた。松助と松助の頭から創り出した新らしい形式であつた。松助が天竺德兵衞の早替り、二役乳人五百機の幽靈の凄味は

江戸市中を動かして、この興行は未曾有の大當りであつた。その上、松助の早替りから切支丹バテレンの噂を立てさせ、町奉行まで一杯かついでの俵藏の宣傳の巧妙さは、作の力と共に一擧芝居國のあらゆる人々に目を瞠らせた。彼れは松助の推薦によつて、同じ年の顔見世から、同じく河原崎座で、いよ〳〵立作者に昇進する事が出來た。その後も彼れはズッと松助の爲に筆を執る事になつた。時に五十歳であつた。

立作者にはなつたが、實際の權力は客座やスケに廻つた先輩が未だ握つてゐたので、二三年の間は彼れも名義だけを守つて、事實は二枚目同様の仕事を續けてゐたが、其うち治助死し、五瓶歿し、奈河七五三助は大阪へ歸つたので、彼れは漸く名實ともに立作者たるを得、文化八年には養父の名を襲うて四世鶴屋南北と改めた。以來彼れは立作者の位置を續け、時に客座に廻つても實際の權利を把握し、傑作を相次いで發表し、遂に文化文政を代表する、大南北とまで稱されるやうになつた。生前、約百二十種の脚本と、十五六種の草双紙とを發表して、文政十二年十一月二十七日、立派に一世一代と番附へ署名してから死んだ。七十五歳の高齢だつた。彼れが立作者となつたのは文化初年、死んだのは文政末年、完全に化政度の江戸劇壇を握つた譯だ。

南北が一人の伜は、坂東鶴十郎といふ俳優になつてゐたが、後に廢業して深川で妓樓を營み、文政十年から作者となり、二世勝俵藏を名乘つたが、父に後れる事一年にして、天保元年十二月十七日に五十歳で死んだ。五世南北は二世俵藏の聟に依つて繼がれた。五世には別に名作も無かつたが、その門からは河竹默阿彌を出してゐる。

南北の傑作として世に稱されるものは、最も興行度數の多い、そして今に上演を絶たぬ、本卷收錄の「四谷怪談」を初めとして、「合法ヶ辻」「女清玄」「三五大切」「果」「大島團七」「お染の七役」「土手のお六」「櫻姫」「龜山」「鞘當」等、その主なるものである。彼れは又、上場脚本以來讀み物としての脚本も二三種發表してゐる。

彩入御伽草（いろえいりおとぎぞうし）

本篇は、南北がまだ勝俵藏時代、文化五年八月の市村座に書き卸した怪談劇で、「小幡小平次」に「播州皿屋敷」といふ、代表的な怪談を二つ組み合せて、新たに趣向を立てたものである。皿屋敷の傳説は、可成り古くから傳はつて居り、この以前にも數度、脚色上演されてゐるが、小幡小平次はこの時初めて舞臺に現はれたので、當時には新らしい怪談であつた。尤も、小平次といふ名は南北の創作ではない。享和三年刊行、山東京傳作、五冊物の讀本「復讐奇談安積沼（あさかのぬま）」が當時非常に行はれたので、その小説の主人公

たる小平次を脚本に借用したのであるが、勿論單に名前だけで、筋は全然變つてゐる。

　この狂言には、「天竺德兵衞」が附いてゐた。序幕が天竺德兵衞の術讓りで、大詰が天竺德兵衞の見顯はしであつた。そして、その間へ小平次と皿屋敷とを一日變りに挿んで見せた。初日は「小平次」を、二日目には「皿屋敷」を、見せたのである。兩者の筋は連絡してゐるが、實演の際には交互に上場したのである。そして「小平次」の方が非常な好評を受けた。

　この時の「天竺德兵衞」の脚本は、全然傳はつてゐない。百方搜索したが發見されないので、やむなく「小平次」と「皿屋敷」の四幕だけを收めて置いた。

　この脚本に就いては、一つの逸話が殘つてゐる。南北が、この脚本の本讀をしたのは夜であつた。本讀をしてゐる最中に、兩三度も戸に異樣な物音がした。これは小平次の亡靈の祟りであらうと恐れて、その夜は本讀を中止した。その翌日、小平次に扮する筈の尾上松助は激烈な熱病に罹つた。愈〻これは祟りに相違ないといふので、回向院で盛大な施餓鬼をしたところが、松助の病氣は立ち所に癒えてしまつたので、直に初日を出した。この評判が市中に高く、芝居は非常な大入りを占めたが、實は物音も病氣も嘘で、南北と松助とが相談した擧句の、大袈裟な宣傳であつたといふのである。これが事實か何うかは疑問であるが、南北は、斯種の宣傳が非常に巧みであつた事は本當である。

　この狂言は再演されなかつた。併し、文政十年六月　市村座で、四世坂東彥三郎が勤めた「斯將優曲者」といふ狂言は、明かに「彩入御伽草」の小平次の件を書き直したものである。彥三郎は、小幡小平次と、小平次女房お久の二役を勤めたが、非常に好評だつたので、江戸でも度々演じた。これが明治まで殘り、先年物故した中村福圓が「怪談雨古沼」として、矢張り早替りを賣り物に度々演じてゐた。いづれも本水や蚊帳を使つて早替りをするのである。「彩入御伽草」の形だけは明治まで殘つた譯である。尤も、默阿彌は小幡小平次の狂言を二種も作つてゐるが、これは「彩入御伽草」と直接關係はない。

役割は左の通りであつた。

　小幡小平次（尾上松助）小平次女房おとは實ハ鐵山妹山の井（尾上松助）淺山將監鐵山（尾上松助）三平姉、幸崎（尾上松助）馬士、多九郎（市川宗三郎）淺山藤內景信（市川宗三郎）月若乳人、敷浪（岩井龜次郎）野宿の卑賤女、お種（岩井龜次郎）醫者、小佐保天南（坂東善次）船越三平實ハ彌陀次郎時綱（尾上榮三郎）淺山腰元、おりく（市川團之助）小幡の百姓、正作（尾上斧藏）奴、栗平（市川栗藏）年禮一角照光（市川團十郎）

阿國御前化粧鏡

處女作に天竺德兵衞を作つて好評を得て以來、「彩入御伽草」にも同じ筋を加へたが、松助としても天竺德兵衞は當り役として、その當座は毎年夏になると、僅かの添削を施して、德兵衞の早替りを演じたものだつた。其うちに、羅漢娑の仙人が妙術を傳へるといふ趣向を加へた事もあつた。この脚本が文化六年六月、木挽町の森田座へ書きおろされた時も、矢張りこの天竺德兵衞と、羅漢とを加へて、それに新らしい怪談を二番目に附けたのである。

　この夏狂言興行の相談があつた時、芝居の中では反對者が多かつた。今さら松助の怪談物でもあるまい、不當りなのは見え透いてゐるから、御免蒙るといふ者が續出した。それは多く芝居茶屋の方面で、歩を持つのが嫌だからであつた。この反對の爲に、芝居興行は覺束なかつたが、南北が松助を勵まして、無理から開場する事になつた。殆んど松助の手興行ともいふべきものであつた。開場して見ると非常な大當りで、僅か一二軒の芝居茶屋のみが、利益を占めるのを傍觀するやうな始末になつたので、反對者も今さら後悔して詫びを入れるやうな次第であつた。松助としても、南北としても、記念すべき夏狂言であつた。

　最初は、本水を使ふ天竺德兵衞を、矢張り松助が演じる筈であつたが、南北の發案で、天德は花形の伴業三郎へ讓り、松助には羅漢と、お國御前の亡靈とを書き與へた。この羅漢が非常に當つたのであつた。お國御前の怪談に、「お伽婢子」から牡丹燈籠の趣向を取つて使つたのも面白い。お國御前に、中老の女の戀を見せたのも、ちよつと近代的の臭ひがする。「世繼瀨平內の場」が、後年の「四谷怪談」の、原をなしてゐる事は、云ふまでもない。一體に、南北の作としては、非常に引緊つた出來である。これは一座の無人といふ事が、却つて役に立つてゐるのだ。

　二番目の累與右衞門は、俗に「湯あがりの累」と稱して三世菊五郎が傑作の隨一とも稱へられ、生涯に十數度上演したものであつた。

　初演の役割は左の通りであつた。

天竺德兵衞實ハ赤松次郎政則、不破伴左衞門重勝實ハ岩倉夜叉丸。土佐又平重興後ニ木津川與右衞門。累井筒の累（四ヤク尾上榮三郎）狩野四郎次郎元信、村越良助（三ヤク花井才三郎）小栗宗丹實ハ若見太郎左衞門。羽生屋助四郎（二ヤク市川宗三郎）犬上團八。馬士、馱荷藏。山住伊平太（三ヤク坂東善次）世繼瀨平、足輕、彥平、見世物師、藤六（三ヤク坂東彥左衞門）駿河前司久國、累井筒の妙林（二ヤク松本小次郎）田舍娘、お玉實ハ勝元妻遠山。山三妻葛城、藝者、小さん實ハ元信妹綺合（三

ヤク小佐川七藏）腰元、春野實ハ銀杏の前。與右衛門妹、お宮（ニヤク岩井梅藏）腰元、撫子。藤六妹、おかれ（ニヤク岩井龜次郎）腰元、宮路。下女、おさの（ニヤク岩井龜松）茨木逸當。藪垣寒竹（ニヤク尾上斧藏）判人權九郎（松本雷藏）那迦犀那尊者實ハ竹杖外道。佐々木後室、お國御前、渡し守、浮世又平（三ヤク尾上松助）名古屋小山三。籍廻し、金五郎（ニヤク森田勘彌）

二度目の上演は、文化十四年八月の中村座、この時は尾上松助の三回忌に當つたので、名題も「追善累扇子」と附けて、この狂言を出した。尤も、一番目は、「天竺德兵衛韓噺」を、信田小太郎の世界に直したので、二番目の累だけを、初演通り演じた。その役割は

累、與右衛門（ニヤク三世尾上菊五郎）助四郎（五世松本幸四郎）金五郎（坂東彥三郎）小さん（中山龜三郎）藤六（淺尾友藏）良助（關三十郎）又平（三世坂東三津五郎）

三度目は天保三年八月の河原崎座で、名題は「天竺德兵衛韓噺」を踏襲し、一番目は矢張り天竺德兵衛、二番目が累與右衛門であつたが、この時は一番目へ、お國御前に關する筋を改訂して、二幕ほど添加した。これは、狩野四郎次郎元信を中心にしたので、元信は傾城遠山に馴染を重ねたが、お國御前の嫉妬強く、遂に切腹するといふ筋で、これから二番目へ緣を引くやうにした。村越良助を奴岡平と直して活躍させる事にした。以後は、この時の改修の方法が行はれてゐる。

又平（四世坂東三津五郎）金五郎（尾上松助）藤六（成田屋宗兵衛）お宮（中村琴糸）お國御前（尾上梅五郎）利兵衛（松本鯛助）權九郎（中島勘左衛門）おさの（市川德之助）おかれ（岩井春次）伊平太（坂東彥左衛門）妙林（惣領甚六）岡平（坂東三津太郎）助四郎（大谷友右衛門）遠山、小さん（ニヤク岩井粂三郎）四郎次郎、累、與右衛門（三ヤク三世尾上菊五郎）

翌天保四年九月の市村座でも「かさね菊絹川染」として二番目だけを上演した。

お宮（小佐川常世）金五郎（尾上松助）伊平太（坂東三津右衛門）妙林（惣領甚六）おかれ（坂東佳調）又平（關三十郎）利兵衛（大谷實呂平）藤六（片岡京四郎）小さん（尾上榮三郎）助四郎　片岡市藏）累、與右衛門　ニヤク三世尾上菊五郎）岡平（十二世市村羽左衛門）

天保九年六月の中村座「音菊家怪談」も、前回通りの段取りであつた。

岡平、又平（ニヤク坂東彥三郎）遠山、小さん（ニヤク尾上菊次郎）助四郎（淺尾奥山）伊平太（中村鶴藏　利

兵衛（中村森五郎）藤六（大谷曾呂平）妙林（尾上菊四郎）お園御前、お宮（ニヤク中村芝鶴）金五郎（尾上松助）元信、累、與右衛門（三ヤク三世尾上菊五郎）

天保十三年十一月の河原崎座では「室町殿所好番組」で、前回通りの段取り。この時は、累與右衛門を、お菊幸助と假に改めてゐた。夏狂言でない所爲であらう。

元信、お菊、幸助（ヤク三世尾上菊五郎）又平（市川九藏）妙林（大谷廣右衛門）お園御前、權九郎（ニヤク市川升五郎）伊平太（市川宗三郎）利兵衛（市川團八）藤六（片岡虎五郎）助四郎（片岡市藏）岡平（尾上多見藏）小さん（市川壽美之丞）おさの（松本にしき）お宮（尾上菊代）おかね（叶珉子）金五郎（八世市川團十郎）

弘化三年八月の中村座では、「累扇月姿鏡」で、この時は天竺德兵衛の件だけ抜いてあつた。

元信、與右衛門、累（三ヤク三世尾上菊五郎）お宮（岩井松之助）妙林（中山現十郎）金五郎（尾上菊十郎）伊平太（中村鶴藏）利兵衛（市川廣五郎）權九郎（嵐冠五郎）又平（尾上多見藏）藤六（尾上音右衛門）お園御前、おかね（ニヤク尾上梅三郎）小さん（尾上梅幸）助四郎（六世松本幸四郎）

三世菊五郎が江戸で勤めたのはこれだけであつたが、この外、上方や其他の地方で、隨分度々上演してゐる筈である。

安政三年七月の森田座では、「菊累音家鏡」として、三世の門弟菊次郎が二番目だけを上演した。

又平（森田是好）小さん（吾妻市之丞）助四郎（大谷友松）金五郎（坂東玉三郎）伊平太（大谷德松）藤六（市川團八）利兵衛（中村成藏）妙林（尾上雷助）おさの（松本にしき）おかね（中村芝鶴）お宮（尾上歌柳）岡平（大谷友右衛門）幸助、おきく（ニヤク尾上菊次郎）

法懸松成田利劍

文政六年六月、木挽町の森田座で、七世團十郎と三世菊五郎が大當りを取つた、累の怪談狂言である。この年、團十郎菊五郎は市村座の出勤であつたが、何かの事情で、夏芝居だけ森田座へ出た。その爲、市村座の專屬であつた南北も、森田座へスケに行つて、この狂言を執筆したのである。

怪談狂言の鼻祖であるだけに、南北は、累の怪談を生涯に五つも書いてゐる。その中で、最も行はれてゐるのが、この「法懸松成田利劍」である。殊に近頃に至つて復活幾度となく上演されてゐる。

一番目の日蓮記と、二番目の祐天記を、對照させたのが南北の働らきである。一番目は、頗る呑氣な、荒唐な狂言だが、この時代の宗教劇として、その呑氣さに又一種の味ひがある。二番目は又、南北の怪談狂言として、淒味と滑稽の交錯に、彼れの特徴を遺憾なく發揮してゐる。各場とも非常に受けた結果は、「地獄の場」は再び「獨道中五十三驛」の一部へ流用し、「累解脫の場」は趣向を「東海道四谷怪談」の蛇山へ轉化してゐる。南北の作物には、斯うした趣向の流用轉化が折々見受けられる。

　累與右衞門が今日まで殘つたのは、全く淨瑠璃「色彩間苅豆」の篇である。清元の名曲として、今日に傳存し、名曲その物が流行を絕たない所から、梅幸によつて復活されたのである。化政度時代の代表的な清元曲として推奬すべき作品だ。それは初代延壽太夫の妻女の作曲であつたのだ。

　本卷に收錄した脚本には、二幕目「龜井戸巳屋の場」が缺けてゐる。どう搜しても發見されなかつたので、止むを得ない次第である。爰に梗概を記して置く。

　絹川甚三郎は、船頭神田川の與吉と身をやつし、同じく巳屋の仲居となつてゐる女房のおさへと共に、紛失の撫子の茶入れを詮議してゐる。茶入れは、惡侍ひの蜂山藤六が持つてゐたが、惚れてゐるおさへから望まれて茶入れを渡す。それは判人安右衞門と計つて拵らへた似せ物で、誠の茶入れは巳屋の庭の片隅へ埋め、鑑定書まで贋物を作つて渡した。誠の鑑定書は巡り廻つて、平井の船頭萬助が所持の、小用藥と吹替へられてゐた。與右衞門は藝者の廻し男と化けてゐたが、與吉おさえが、累の敵と自分を覘ふのを知つて、平井の川端へ二人を誘き出し、騙し討ちに殺してしまふ。

初演の役割は左の通りであつた。

與女中、累。船頭、神田川の與吉實ハ絹川甚三郎（三世尾上菊五郞）下部、八助（中山錦車）下部、作助（坂東善次）判人、安右衞門（市川小團次）若黨、惣次（松本錦吾）船頭、萬助（尾上仙藏）與右衞門母、おかや（叶小さん）八助妹、おりえ（袖崎政之助）巳屋の仲居、おさえ（岩井粂三郎）久保田金五郎後ニ木下川與右衞門（七世市川團十郎）

一番目は、初演ぎりで廢れてしまつたが、二番目の累與右衞門は、嘉永二年六月の河原崎座に再演された。この時は俳優無人の結果、與右衞門と與吉を同一役人が扮する事になつたので、茨木屋門兵衞といふ役を殖し、大切へ紐攔みを附け、多少改訂が施された。

　累。おさえ（二ヤク二世尾上菊次郞）藤六（片岡虎五郞）おかや（中村政次郞）おりえ（市川團之助）八助（淺

尾鶴十郎）祐天（中村芝雀）助（大谷友右衛門）與右衛門、與吉（ニヤク坂東彥三郎）

その後、殆んど打絕えてゐたが、大正九年十二月の歌舞伎座で、梅幸の累、市村羽左衛門の與右衛門で復活された。但し、土手場の淨瑠璃一幕であつたが、非常に好評を得たので、その後東京ばかりでも同じ顏觸れで二回、京阪各地でも度々上演された。大正十五年、梅幸羽左衛門延壽太夫三名の發企で、目黑の祐天寺へ累塚が建立された位であつた。

尤も、單に劇的要素を多く含んだ舞踊としては、舞踊師匠の間には傳はつてもゐたらしい。明治三十九年、藤間勘右衛門が歌舞伎座で大淩ひをやつた時、藤間政彌の累、市川桃吉の與右衛門で、土手場の淨瑠璃一幕をやつた事がある。

大正十四年七月の市村座では、原作通り「法懸松成田利劍」の名題で、珍らしく二番目全部を演じた。それは大正十二年八月の演藝畫報へ、わたしがこの二番目の脚本を揭載した事があつたので、それに準據したのであつた。

累、與吉（ニヤク六世尾上菊五郎）與右衛門、祐天（ニヤク守田勘彌）八助（大谷友右衛門）惣次（坂東彥三郎）藤六（尾上伊三郎）伴助（市川照藏）おかや（尾上菊三郎）おりえ（尾上榮三郎）おさえ（坂東秀調）

東海道四谷怪談（とうかいだうよつやくわいだん）

文政八年五月中村座は「初冠曾我皐月富士根（けんぶくそがさつきのふじがね）」といふ名題で、夜討曾我の狂言を演じて大入りを占めた。この興行が終ると、中村座の櫓には女の生首が振り袖を咬へてゐる繪の大きな凧が揭められた。例に依つて、南北獨得の宣傳である。江戶人はこれに依つて、夏狂言に新作の怪談劇が演じられるのを知つて、みな樂しみに待つてゐた。その年、中村座には怪談狂言の家元、尾上菊五郎がゐたからである。やがて七月のはじめに配られた櫓下番附は、いつもと變り、二枚あつて、初日後日と分れてゐた。二番目の怪談狂言は、初日の部に、戶板に打ちつけられた男の亡靈を描いてあつた。後日の部に、女の幽靈に引上げられる美女を描いてあつた。芝居好きの江戶の民衆は、この繪を見ては胸を躍らさざるを得ない。老功の四世鶴屋南北、怪談狂言の名作者が、どんな面白い、そして凄い狂言を創り出すか、お化の家元菊五郎が、どんなに怖い幽靈振りを見せるのだらうか。――評判は評判を產んで、芝居の開場は待ちに待たれた。番附のカタリには斯う書いてあつた。

御贔屓のお好みに任せ、古き世界の民谷何某、妻のお岩は子の年度、妹の袖が祝言の、銚子にまとふ嫉妬の蛇、それも巳歲の男の緣切り、しかも媒人に直助が、

三下り半の去り狀は、女の筆のいろは假名、今も專ら流行の、出雲が作へ不躾にも、お指圖ゆゑに書き添へし、新狂言は歌舞伎の榮。

番附のカタリは、狂言の內容を暗示的に說明するものであるが、このカタリでは筋がまるで違つてゐる。昔は、宣傳のために早く櫓下番附を出してしまふので、その頃にはまだ脚本が出來上がらぬ事が多い。この時もそんな譯だつたのであらう。が兎に角物凄さうな書きぶりで、興味をそそるには十分である。

番附には左の通りな口上書が附いてゐた。

御町中樣益御機嫌能被遊御座恐悅至極に奉存候而私芝居之儀打續大入大繁昌仕候段冥加至極難有仕合に奉存候依之益狂言之儀種々及相談候所尾上菊五郎儀兼々天滿宮信仰にて此度心願之旨有之倅松助同道仕筑紫太宰府へ參詣仕度由晢御當地をも相はなれ候儀故御暇乞之口上申上度段相賴候に付打寄相談仕候所先年私座にて元祖尾上菊五郎太宰府へ參詣之砌御名殘と仕忠臣藏の狂言由良之助となせ之役儀相勤御評判に預り候先例も候へば右之役儀相勤口上申上候樣申聞候所菊五郎申候は右大役にて不及儀と辭退仕候故團十郎始め粂三郎源之助幸四郎其外之者共端役をも不厭相勤遣り可申樣深切に申吳候に付打寄相勸め漸々得心仕右の役相勤申候右に付菊五郎兼而工夫仕置候四ッ谷宿お岩物語男女の怪談新狂言六幕御座候間右狂言三幕宛分け忠臣藏大序より六段目迄を初日の一番目と仕第二番目世話物相添且又後日七段目より敵討迄怪談三幕右一番目二番目二日がはり御名殘狂言と仕り總座中能出奉入御覽候尤も大星之儀は名人共仕置候大役にて候へども元祖菊五郎と被思召賑々敷御出の程偏奉希上候

座元　中村勘三郎

斯うして「東海道四谷怪談」(初演の番附にはあづま海道とある)が發表された。一狂言を前後二日に分けて演出するといふのも、特異な新例で、この時が最初である。初日は七月二十七日。

この興行は割れ返るやうな大當りだつた。菊五郎のお名殘といふ所爲もあるが、大部分は「四谷怪談」が利いたのである「お岩樣」の狂言は、菊五郎の當り役になつた。菊五郎は生涯にこの狂言を九度も勤めた。「四谷怪談」は尾上家の藝といふ鑑定書が附られた。そして百餘年經つた今日でも、猶歌舞伎座に上演されて大入りを占めてゐるのである。

これ程有名な「四谷怪談」は、どういふ順序にして作られたか？

お岩の實錄だといふ傳說は殘つてゐる。これに據ると、

寛文の頃、四谷左門町に住んでゐた田宮又左衛門といふ、お先手組下同心の娘お岩が、嫉妬の爲に身を果し、その怨靈が夫に仇をしたといふのである。事實の眞僞は擱いて、傳説は慥かに有つたのだらうと思ふ。何かの理由で當時喧傳されたのを、南北が材料に使つたのであらうと思ふ。なぜかといへば、お岩とか伊右衛門とかいふ役名は、この狂言以前には見當らない。何か新らしい筋を仕組むとか、當時の三面記事を脚色するとかいふ場合には、南北は必らず、「書替へ狂言」といふ形式を採るのである。怪談の思ひつきなれば、差詰め「累」の世界なぞを借りて來るのであるが、それで無くて、新らしい役名が現はれた所を見ると、慥かに傳説を脚色して、しかもお岩とか伊右衛門とかいふ傳説通りの役名を使つた方が、效果があると信じてやつた仕事に違ひない。

それでも、全然新らしい世界で押通すのは南北も不安であつたと見えて、背景には、この時の一番目に因んで、見物には馴染の多い忠臣藏の世界を使ふ事にした。そこでワキ役に、佐藤與茂七、直助權兵衛、小汐田又之丞、近藤源四郎などといふ、忠臣藏に關係のある役名が現出したのである。今の目で見れば、なんの忠臣藏と結びつけずともと思はれるが、斯ういつた形式は、いはゞ當時の劇作法の內規であつて、最も觀客に歡迎され、且安全な方法であつたのである。

佐藤與茂七といふのは、赤穗義士の矢頭衛門七の事で、義士銘々傳劇にはいつも色男として扱はれてゐる。それをこの狂言へ引張つて來て、立役の代表者に据ゑたのである。與茂七が序幕で小間物屋になつてゐるのは、大阪狂言の、「忠臣連理廼鉢植」の形式を借りたものである。

實惡に使つた直助權兵衛は、赤穗義士の黨盟から脫走した小山田庄左衛門の、下男權兵衛が、庄左衛門を殺して金を奪ひ、のち捕へられて磔刑に處せられた。その事實を脚色したのである。序幕で權兵衛が、與茂七と間違へて、舊主たる奧田庄三郎を殺してしまふ筋は、その實話を應用したので、奧田庄三郎といふのは小山田庄左衛門の事である。この權兵衛が、最初、藤八五文の藥賣りになつてゐるのは、初演當時江戸市中を行商した藥賣りの風俗を當込んだのでまた後に鰻掻きになるのは、その頃砂村の鰻掻きが、川の中から櫛をかきあげて持つて歸つたところが、その夜病氣になつたといふ巷説を、筋にまで借りて來たのである。

この外に、小佛小平といふ役がある。これは、お岩の傳説とも又忠臣藏とも關係はない、小幡小平次を取込んだのである。小平次は講談などに據ると大變古いが、普通は菊五郎の父、尾上松助の弟子だといふ事になつてゐる。松助の弟子の小幡小平次は、奧州安積郡の生れであるが、舞

靈の小佛小平と同じやうに、ひどく陰氣な質で、幽靈といふ仇名を附けられてゐた。間もなく旅役者に落ちて奥州へ歸ると、その女房が密夫を語らつて小平次を殺してしまつたといふ事が、菊五郎作の草双紙「尾上松緑百物語」に出てゐる。この小平次の事を題材にしたかどうかは知らぬが、山東京傳は、享和三年に出版した「復讐奇談安積沼」といふ讀本の中に、小幡小平次の事を仕組んでゐる。この讀本が行はれた爲か、また小平次の事實を聞いた爲か、どちらかは知らぬが、大南北は文化五年六月の市村座に「彩入御伽草」(本卷に收録)といふ名題で、小平次の事を脚色し初代尾上松助が小平次に扮して成功した。この小平次を再び「四谷怪談」へ應用したのである。「彩入御伽草」の小平次は侍ひの出で、百姓に姿を扮してゐるといふ筋。役名なぞから考へて見ても、これはどうしても「安積沼」に縁が近いらしく、また「四谷怪談」の初演と「百物語」の出版とが同じ文政八年であるのも、兩者の關係が深い證據である。

これ等の材料を纏めて、南北が「東海道四谷怪談」を作るに就いては、その以前自分が書いた二三の脚本の、一部をソツクリ流用したのである。流用といふよりも、寧ろ「四谷怪談」の原本だといつてもいゝのは、「南北世話狂言集」に收録した「謎帶一寸德兵衞」である。文化八年七月の市村座へ、書き卸したもので、種は當時の三面記事なので、例の流儀によつて「夏祭」の世界に書替へてある。大島團七といふ御家人の惡黨が、玉島兵太夫といふ侍ひを殺しておきながら、仇討の助太刀すると僞つて、兵太夫の娘のお梶を女房にし、後にお梶まで殺してしまふといふ筋である。「四谷怪談」も、ソツクリこの筋を辿つてゐるではないか。卽ち筋の根本である、伊右衞門が四谷左門を殺して置きながらその娘のお岩を女房にし、後にこれを憤死させてしまふといふのは、團七お梶の筋と、只手を下ろして殺す殺さぬだけの相違である。斯うした筋ばかりでなく、「四谷怪談」の特色になつてゐる、御家人が内職にしてゐる當時の下層武家階級のスケッチや、病人の床から蚊帳を奪つてゆく慘酷な仕打ちやは、いづれも「一寸德兵衞」で旣に使つてゐた技巧である。秋山長兵衞と關口官藏に似た浪人の友達も「一寸德兵衞」の方へ出てくる。さうして、大島團七と民谷伊右衞門とは、全然同一の性格を持つた惡黨である。

「四谷怪談」の初演から三年前、卽ち文政六年の六月、木挽町の森田座へ、南北は「法懸松成田利劍」を書き卸した。この頃折々出る淸元の「累」は、この狂言の一部であるがこれも「四谷怪談」の一部の脚本となつてゐる。主人公の累は、三代目尾上菊五郎、與右衞門は七代目團十郎、丁度

「四谷怪談」と同じ役割である。この狂言の與右衞門は、累の父親を殺しておきながら、累と通じ、父親の怨念で累の顏が醜く變ると、これを木下川堤で殺してしまふ。累の亡靈は、與右衞門が嫁をもらふ場へ現はれて、與右衞門と嫁とを散々に苦しめる、といふ筋である。與右衞門は、性格も仕事も伊右衞門と殆ど同じで、また女主人公の相好が變るといふ點も酷似してゐる。與右衞門内の場で、累の亡靈が佛壇から現はれ、百萬遍の念佛に恐れて、行きつ戻りつする所などは「四谷怪談」の蛇山庵室と少しも違はない。

南北は、斯うして、從來の自作脚本二篇を混じ合せ、これへ小平の件と、直助權兵衞の因果譚とを加へて「東海道四谷怪談」を完成したのである。

與右衞門の事が出たから次手に云つて置くが、「四谷怪談」の初演より二年後、文政十年三月の市村座に、二代目櫻田治助が「萬歲阿國歌舞伎」といふ伊達騷動の狂言を書いてゐるが、この中に、伊右衞門役者の七代目市川團十郎が、田宮與右衞門といふ役をやつてゐる。自分の出世の妨げになるといふので、云ひ交した遊女高尾を殺してしまふ。跡で高尾の亡靈が出るといつた筋で、與右衞門は伊右衞門と同じ役所を行つてゐる。これにも田宮といふ苗字を被らせたのを見ても、何かの理由でお岩の傳說が、當時よほど喧傳されてゐたのだと想像される。「四谷怪談」の初演後ではあるが、まだ他の狂言へ影響を及ぼす程に行はれてゐたのではないから「阿國歌舞伎」の田宮與右衞門は、逹かにお岩の傳說から、「四谷怪談」に併行して脚色された作なのである。併しこの方の與右衞門は一囘ぎりで絕えてしまつた。只その狂言の一部、「毒茶の丹助」だけが殘つてゐる。

「東海道四谷怪談」の初演脚本は、左の通りの場割になつてゐる。

序　幕。　淺草觀世音額堂の場
　　　　　按摩宅悅住居の場
　　　　　淺草裏田圃の場
二幕目。　雜司ヶ谷四谷町の場
　　　　　伊藤喜兵衞屋敷の場
三幕目。　砂村隱亡堀の場
　　　　　　　　　　（以上初日）
四幕目。　深川三角屋敷の場
　　　　　寺町孫兵衞內の場
五幕目。　伊右衞門夢の場
　　　　　蛇山庵室の場
　　　　　　　　　　（以上後日）

後日の折には、この五幕目のあとへ、忠臣藏討入の場を一幕附けて完備させたのである。夏狂言であるのに、庵室の場を雪降りにしたのは、討入と季節を合さねば、筋に無

理が出來るからである。「忠臣藏」と「四谷怪談」を二日替りに演じたのも、長いばかりでなく、筋の連絡を考慮した結果である。

役割は左の通りであつた。

民谷伊右衛門（七世市川團十郎）小汐田又之丞（三桝源之助）伊東喜兵衛、伊右衛門母、お熊（ニヤク市川宗三郎）按摩、宅悦。近藤源四郎（ニヤク大谷門藏）奥田庄三郎（尾上松助）お弓娘、お梅（岩井粂次）佛孫兵衛（澤村しやばく）小平女房、お花（尾上菊次郎）喜兵衛娘、お弓（吾妻藤藏）乳母、お槇（市川おの江）直助權兵衛（松本幸四郎）與茂七女房、お袖（岩井粂三郎）伊右衛門女房、お岩・小佛小平。佐藤與茂七（ニヤク尾上菊五郎）赤垣傳藏（中村傳九郎

菊五郎は、この「四谷怪談」を打あげてから、更に河原崎座でお名殘狂言を勤め、それから京阪へ上り、翌文政九年四月の大阪角座では、「いろは假名四谷怪談」といふ名題で、この狂言を出して、大阪人を驚かした。尤も、江戸のまゝの脚本では、大阪の人に向かないので、角座の作者がすつかり上方式に改作した。それが根本となつて、今に大阪式の脚本が傳はつてゐる。

江戸へ歸つて、文政十年九月、中村座で、又ぞろこの狂言を出した。わづか三年目に、同一の狂言を繰返して上演するといふ事は、この時代には滅多に無かつた事である。餘程菊五郎に自信があつたと見える。この時は、全五幕を通して、初演通り演じたのである。名題は同じく「東海道四谷怪談」で、役割は左の通りであつた。

仁右衛門。直助（ニヤク松本幸四郎）又之丞（中山富三郎）喜兵衛、お熊（桐山紋治）お梅、お花（ニヤク中村大吉）お袖（岩井半四郎）宅悦（大谷門藏）庄三郎、傳藏（ニヤク尾上松助）お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）

この時は、田宮家から故障が出たとかで、伊右衛門の役名は神谷仁右衛門と改まつた。そして、役者無人のため、幸四郎が直助權兵衛をも兼勤したので、二役の顏合せの場は、鰻掻き五郎吉といふ役を作つて、直助の代りをさせた。これは幸四郎の子の市川高麗藏が勤めた。

江戸での三度目は、天保二年八月の市村座で、名題は「東海街四谷怪談」であつた。この時は、蛇山庵室の場は雪をやめて盂蘭盆の季節とし、今までお岩の亡靈は、流れ灌頂から船幽靈の姿で出たのを改めて、盆提灯から現はれる事にした。尤も、盆提灯から出るといふ事は、この時が初めてゞはなく、文化十二年七月、河原崎座で、「慙紅葉汗顏見勢」といふ伊達の狂言を出したとき、與右衛門内の場へ累の亡靈が現はれる趣向に、この盆提灯を既に使つてゐたの

である。また伊右衞門の夢の場で、南瓜に目鼻を附くのもこの「汗顏見勢」の型を取つたのである。またこの時は、蛇庵室の次へ「大川端の場」の附けて爰で仇を討つ筋に直し、猶序幕に「戶塚境木」の場を加へて、大星由良之助の東下りを見せた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）伊右衞門（關三十郎）お弓（小佐川常世）お花（尾上梅之丞）お袖（坂東かてう）宅悦（坂東傳三郎）喜兵衞、お熊（ニヤク片岡京四郎）お梅（岩井彡喜憙）庄三郎、傳藏（ニヤク尾上松助）お袖（尾上榮三郎）直助（片岡市藏）又之丞（市村羽左衞門）

次は天保五年六月の中村座で、名題は前に同じ。この時は、若手の市川八百藏（後の關三十郎）がお岩を勤め、伊右衞門夢の場へは「二世の緣顯色絲」といふ名題で、初めて富本の淨瑠璃を使つた。これまでは伊右衞門とお岩の色模樣も、長唄の獨吟で濟ましてゐたのである。

お岩、小平、與茂七（三ヤク市川八百藏）お花（中村芝鶴）宅悅（市川染五郎）伊右衞門、又之丞（ニヤク市川高麗藏）お梅（岩井粂次郎）お弓（尾上梅之丞）お袖（坂東玉三郎）直助（松本幸四郎）

尤もこの以前、市川八百藏は、文政十三年の六月、中村座で、變態の四谷怪談を勤めた事があつた。「南爾前來妙法經」といふ妙な名題で、世界は日蓮記であるが、中に四ツ谷宿のお岩が、嫉妬で死ぬ件があり、また小佛小平が惡人に殺され、この二つの死骸が流れ寄る、隱亡堀じみた場面もあり、鰻の口から出るのは與茂七の代りに、日親太郎といふ役名であつた。この三役を八百藏が勤め、伊右衞門は四條金吾といふ名で、女形の中村歌六が演つてゐた。

次は天保七年七月の森田座で、名題は矢張り「東海道四谷怪談」菊五郎は四度目である。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）傳藏（尾上松助）お花（尾上菊次郎）又之丞（坂東三津五郎）お弓（關三之丞）お熊（大谷會呂平）宅悅、源四郎（ニヤク尾上菊四郎）お梅（岩井松之助）權兵衞 松本幸四郎）お袖（岩井半四郎）直助、伊右衞門（ニヤク市川海老藏）

この時は直助役者の幸四郎が、既に老衰してしまつたので、役を權兵衞と二つ割りにして、大部分は、海老藏が勤め、權兵衞は淺草田圃と隱亡堀だけへ出るといふ、妙な事をやつたのである。

弘化元年七月の中村座では、「昔尾岩怪談」で、菊五郎が五度目の所演。大切へ義士の討入を附けた。夢の場は「菊嬉閨睦言」といふ名題で、初めて淸元を地に使つた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）喜兵衞、又之

丞（市川九藏）左門、孫兵衛（嵐猪三郎）お弓（岩井松之助）宅悦（中山現十郎）直助（六世松本幸四郎）お花（岩井杜若）お槙（岩井辰之助）庄三郎、傳藏（尾上松助）お袖（岩井半四郎）伊右衛門（八世市川團十郎）

嘉永元年九月の市村座では「當三升四谷聞書」で、小團次がお岩を勤めた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク市川小團次）又之丞、左門（ニヤク澤村源之助）お弓（小佐川常世）宅悦（關歌助）直助（坂東三津五郎）お袖（坂東しうか）伊右衛門（市川團十郎）

嘉永三年六月の市村座では「増補四谷怪談」といふので關三十郎の獨り舞臺、四谷怪談の間へ義士銘々傳を入れてやつてゐる。これでは三十郎が、伊右衛門、お岩、小平、直助、お槙、孫兵衛、の六役を早變りで演じた。三役早替りを一層擴張した譯だ。どういふ方法にしてこの六役を替つたか、脚本が無いので解らないが、定めて代役澤山の吹替へ澤山で、無理な仕事をやつたのであらう。その他の役割は、

お弓（嵐小六）宅悦（中村翫太郎）喜兵衛（中村翫右衛門）與茂七（大谷友松）お梅（市川りとう）お袖（藤川花友）

嘉永五年五月、河原崎座では「東海道四谷怪談」で、三世尾上菊五郎三回忌追善狂言として出した。

伊右衛門、直助（ニヤク市川海老藏）左門（關三十郎）小平（尾上松助）お弓、お花（ニヤク市川團之助）庄三郎、又之丞（ニヤク尾上新七）喜兵衛（市川男女藏）お槙（尾上菊太郎）お梅（坂東佳調）宅悦（淺尾奥山）お岩、お袖（ニヤク尾上梅幸）與茂七（澤村長十郎）

菊五郎の追善といふので、海老藏は伊右衛門と直助の二役を勤め、菊五郎の養子梅幸は女形だからお岩にお袖、菊五郎の實子松助には小平、座頭の長十郎に與茂七を振つたのである。松助は、菊五郎がお岩の時は、いつも庄三郎に傳藏ときまつてゐたが、この人は元來大根役者で、菊五郎生前には親の威光で役も附いたが、死後は全く顧られなくなつてゐた。それが、追善といふので小平を振られた。本來なら三役兼ねるべきだが、小平だけ割られたのは、可成り侮辱された譯である。それに發奮した結果かどうかは知らぬが、この小平は非常な成功で、これなら松助も親父の衣鉢を繼げるといふ評判が立つた。評判が立つと間もなく松助は死んでしまつた。森田勘彌は狂歌を手向けた。

小佛の噂のよきが峠にて
役者になりし甲斐ぞありける。

文久元年七月、中村座の「東海道四谷怪談」では、

お岩、小平、與茂七（三ヤク坂東彦三郎）又之丞、庄三郎（二ヤク片岡我當）お梅（坂東玉三郎）喜兵衛、お熊（二ヤク坂東村右衛門）宅悦（大谷德次）直助（關三十郎）お弓、お花（二ヤク市川團之助）お袖（岩井粂三郎）伊右衛門（片岡仁左衛門）

夢の場へは「萌思螢兼言」といふ常磐津を使ひ、船頭姿で、小平の亡靈まで出して、大分所作事化させてゐた。

明治五年七月の中村座「於岩稲荷験玉櫛」で、五代目菊五郎は初役でお岩を勤めた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）直助（中村仲藏）お梅、お花（二ヤク岩井紫若）宅悦（中村翫太郎）左門、喜兵衛、お熊（ヤク中村仲太郎）お弓（坂東蓑助）お袖（坂東三津五郎）伊右衛門（中村芝翫）

明治十七年十月の市村座では、「形見草四谷怪談」菊五郎が二度目のお岩である。これまでは所演の度、必ず脚本通り全部を演じてゐたが、この時は時間の都合で、初めて省略法を行つた。即ち序幕を全然カットして、髪梳から始まり、夢の場を抜いてしまつたのである。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上菊五郎）直助（市川九藏）伊右衛門（片岡我童）喜兵衛、お熊（二ヤク關三十郎）お梅、お花（二ヤク岩井松之助）お槇（尾上登美松）宅悦（尾上松助）お弓（河原崎國太郎）

明治二十九年七月の歌舞伎座では「形見草四谷怪談」菊五郎が三度目のお岩である。この時は三世河竹新七が脚本に手を入れ、菊五郎の役を大分分業にした。

お岩、小平、直助（三ヤク尾上菊五郎）伊右衛門（市川八百藏）與茂七（尾上菊之助）宅悦（尾上[illegible]助）喜兵衛（片岡市藏）お袖（尾上榮三郎）お梅（尾上菊次）お槇、お花（二ヤク尾上菊三郎）お弓、又之丞（二ヤク中村歌仙）

明治四十二年十月の東京座では「形見草四谷怪談」尾上梅幸初役のお岩で、髪梳、隠亡堀、蛇山の、三幕を出した。

お岩、小平（二ヤク尾上梅幸）與茂七（市村羽左衛門）直助（市川團藏）伊右衛門（市川高麗藏）喜兵衛、お熊（二ヤク尾上蟹十郎）お弓（市川紅若）お梅（市川九藏）宅悦（尾上松助）

大正五年六月の帝國劇場「形見草四谷怪談」では、前の三幕の外に、夢の場を長唄の地で添へた。

お岩、小平、與茂七（三ヤク尾上梅幸）伊右衛門（松本幸四郎）宅悦（尾上松助）直助（市川中車）お梅（市川八百藏）お槇（澤村宗十郎）

大正十二年五月の市村座「形見草四谷怪談」では、以上の三幕の外に、珍らしく三角屋敷の場を出した。

お岩、小平（二ヤク尾上梅幸）與茂七（大谷友右衛門）

宅悦、直助（ニヤク尾上菊五郎）お袖（市川男女藏）お熊（尾上菊三郎）伊右衛門（市村羽左衛門）

大正十四年七月の歌舞伎座では、原作の「東海道四谷怪談」にして、松居松翁氏が舞臺監督をされ、すべて初演當時の古風さを髣髴させた。髮梳、隱亡堀、三角屋敷、蛇山の四幕であつた。

お岩、小平（ニヤク尾上梅幸）與茂七（市川壽美藏）直助（市川左團次）宅悦（片岡市藏）喜兵衛（市川荒次郎）お袖（市川松蔦）お熊（市川左升）お槇（尾上梅三郎）お梅（中村芝鶴）お弓（坂東家太郎）伊右衛門（市村羽左衛門）

四谷怪談の初演が大當りだつたので、翌文政九年の春には、その正本へちよつと手を入れた草双紙合卷が、芝神明町の若狹屋から出版されてゐる。繪は全部似顏で、舞臺面なぞ初演の模樣を窺ひ知る事が出來る。尾上梅幸著とあるが、南北あたりが代筆をしたものであらう。繪は一筆庵英泉である。

文久元年、彥三郎がお岩を演じた時も、合卷が發行され、それが明治五年に至つて、再版になつてゐる。

「雨夜鐘四谷雜談」といふ五編續きの草双紙が安政年間に出てゐる。お岩樣の祟りとかで筆者が度々變り、默阿彌なぞも筆を執つてゐるが、芝居とは關係はない。お岩と小幡小平次とを兄弟にした小說である。

講談にも「お岩稻荷」があるが。これは芝居の流行に刺戟されて、後に出來たものであらう。それを種に勝諺藏が脚色した「四谷評判娘怪談」實錄お岩の七幕物の脚本は、初演は大阪らしいが、東京では明治二十五年九月の春木座で初めて上演してゐる。お岩が伊右衛門に欺かれて辻君に賣られ、夜鷹宿で責められる所から、中間角助に事實を聞いて伊藤の屋敷へ駈けつけ、伊右衛門に殺されるまでが中心で、幽靈はアッサリしたものである。小平の代りとしては中間伊助、直助の穴には風車の長兵衛といふ役がある。

義太夫にも四谷怪談があるが、いつ出來たものか解らない。

獨道中五十三驛（ひとりたびごじふさんつぎ）

南北が、文政十年、七十三歲の六月に、河原崎座へ書きおろした脚本で、死去より二年前の作である。南北の作中これほど、彼れの長所と短所の兩極端を、發揮した脚本は少ないであらう。

東海道五十三驛を、舞臺面に應用するといふ趣向は、この作が初めで、其頃としては全く奇想天外といふべきであつた。尤も、當時大流行であつた、十返舍一九の「膝栗毛」

からヒントを得た事は疑ひもないが、それを芝居へ持込んだのは、流石に思ひつきの巧い南北だけの事はある。殊に「膝栗毛」の兩主人公を、狂言中へ組み入れたなぞは、最も怜悧な手法であつた。彌次郎兵衞喜多八が芝居へ現はれたのは、江戸ではこれが最初であつた。その彌次喜多の活躍も小田原の五右衞門風呂の趣向以外は、全く南北創意の滑稽である所にも、彼れの抱負と良心が覗へる。篇中、「沼津の村芝居」の一幕は、南北が斯方面での技術を遺憾なく發揮して、實に面白い。團十郞菊五郞を役者に使つたのはまだしも、人としての菊五郞の短所を、ソツクリ筋の中へ盛りこんだなぞ、南北もなか〳〵人が惡い。

何にしても、五十三驛の宿次を、それ〴〵舞臺に現はさうといふのが眼目の思ひつきだから、大道具が大變なものだつた。この頃の大道具といへば、精々一幕に盛る場數は二三場限りであるし、幕間も長かつたから、悠々と道具を飾りつける餘裕もあつたが、そんな事をしてゐたのでは、到底この新狂言の脚色を完全に演出する事は出來ないといふので、南北は、大道具師長谷川勘兵衞と相談して、道具の轉換法に新らしい試みをした。勘兵衞も懸命の智慧を絞つて、一幕の中に十何場も盛りこめるやう、廻り舞臺や居所變りに、新機軸の方法を案出したのみか、舞臺一面に本水を漲らせて大井川と見せ、そこへ本雨を降らせて、その水中で早替りをさせたり、怪猫の飛行には宙乘りに改良を加へて大いに凄味を見せたり、等々、一場面毎に、今までは見られなかつた新らしい試みをしたので、觀客は驚喜して喝采したのだつた。この芝居が、炎暑の最中にも係らず記錄破りの大入りを占めたのは、一つは大道具の功であつた。以後暫らくは、大道具本位の狂言が流行した位であつた。

さうした機智的技巧以外、南北の特徴は到る所に溢れかへつてゐる。慘忍、怪奇、猥雜、滑稽が特にこの脚本では強調されてゐる。短所として、殊に目につくのは、世界の極め方であらう。五十三驛の狂言として、趣向を敵討と怪談に定めたのは、當時の觀客心理に迎合する南北の用意として、頷けるのであるが、その世界定めの仕方が實に亂暴だ。先づ敵討の方を「龜山」に取り、それに「染分手綱」の世界を加へた上、「權八小紫」「おはん長右衞門」「白石噺」まで交ぜて、その上へ「膝栗毛」の衣をかけたといふのだから、實に複雜の上にも複雜になつてしまふが、當時の觀客は、それでも平氣であつたらしいのだから驚ろく。が、それにしても、この狂言は、重ねられた世界の數の多さではレコードだ。

初演の役割は左の通りであつた。

伊達の與作。漁師、助市後ニ法華長兵衞(ヤク三世坂東

三津五郎）息女、重の井姫。民部女房、おのぶ（二ヤク岩井粂三郎）由井民部之助實ハ中野藤助。藤川水右衛門後ニ入山津の江戸兵衛。大工、牡丹獅子の八。蝮の次郎吉（四ヤク七世市川團十郎）藤川官太夫（七世片岡仁左衛門）石井半次郎。お松妹、お袖。幇間、喜作（三ヤク尾上松助）鬼坊主頓哲實ハ奴段介。帶屋長右衛門後ニ喜多八（二ヤク桐山紋治）赤堀源吾。八ツ橋村左次兵衛。うづら權兵衛（三ヤク大谷門藏）按摩、慶政後ニ彌次郎兵衛。島田の萬九郎（二ヤク坂東彦左衛門）與作女房、小萬。賤機山のお倉（二ヤク片岡松太郎）由留木馬之助。栗原丹藏（二ヤク片岡我十郎）赤羽屋五郎作（津打門三郎）奴、逸平（尾上菊藏）山形屋義兵衛（市川川藏）女非人、おけさ（尾上梅五郎）悴、與之助（片岡藤十郎）小萬母、お濱（市川おの江）石井左内。智行上人。佛作助（二ヤク成田屋宗兵衛）信濃屋お半後ニ藝子いろは（坂東玉三郎）奴、大津の又平實ハ由留木調之助（荻野伊三郎）八ツ橋村のお松。丸子猫石の精。權八姉、八重梅後ニ萬徳お十。自然生小僧三吉實ハ桑名屋徳藏後ニ日本駄右衛門實ハ丹波與八郎。大工、小西の八。秋葉山の三尺坊。白井權八。竹村定之進（八ヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は大成功を占めたので、後年も度々上演されたが、不思議にも、この狂言に限つて、その再演の度毎に、時期や俳優の關係で、大改訂が加へられ、いつもまるで變つたものゝやうにされてしまふのが例だつた。つまり、「獨道中五十三驛」の中から好い箇所だけ取つて、それへ、その時々の作者が、更に種々な別の筋を添加して、その上、全部の役名まで變へてしまつて上演するのだから、殆んど面目は一新されてしまふのが常だつた。

二度目の上演は、天保六年二月の市村座で、名題を「梅初春五十三驛」（うめのはるごじふさんつぎ）といひ、春だけに、背景の世界は曾我にして、中村重助、三升屋二三治、五世鶴屋南北等が補作したのであつた。この補作者達が、原作の「獨道中五十三驛」から受繼いだのは、左の件だけだつた。

○先づ心棒になる役は、矢張り盗賊にして、役名を稲葉幸藏とつけた。これは當時評判になつた鼠小僧次郎吉の當込みだつた。

○姫が葛籠へ入れられ、その裝束を猫が着る筋。姫の役名は頼朝息女大姫になつた。

○お半長右衛門の石部の宿、桑名の船中、及び龜山仇討の件。但し筋は多少變つてゐる。

○古寺の猫は眼目だから勿論保存されたが、筋も段取りも大分變つた。

○大井川の本水に蓮臺渡し、鐵砲の件、夜啼き石の件。

○非人の宿に虚無僧の宿り、及び腹裂きの件。但し非

人は地獄の淸三といふ立役に直し、お松の腹を裂かうといふ時に、守り袋から曾て自分の契つた女と判り、お松の腹は裂かずに自分が切腹するといふ筋に直した。

○權八は保留したが、筋は變り、權八が女姿で關所を通る事や、五右衞門もどきの樓門の件なぞが附加された。

保留されたのはこれ等であつたが、特に附加された趣向で新らしいのは「薄雲の幽靈」であつた。島原の傾城薄雲が、若殿を慕つて廓を拔け出し、鈴鹿山で惡人に殺される。その位牌は、古寺の場に至つて若殿の懷へ入ると、夜半に薄雲の幽靈は若殿の懷から出るといふ筋である。懷から幽靈の現はれる趣向が新らしいので評判になつた。小夜の中山夜啼き石の、うぶめの姿も、この薄雲の幽靈といふ事にしてあつた。

八百屋お七の件も附加された。お七といつても、年增の踊りの師匠で、古主權八の爲に、葬長坊主を谷へ蹴落して寶劍を奪ふといふやうな筋であつた。

春狂言だけに、箱根山の場では曾我の對面を見せた。一讀の役名は、馬琴の「賴豪阿闍梨怪鼠傳」から取つて、序幕に稻葉幸藏が賴豪から鼠の術を讓られるといふのを發端としたのは、全く鼠小僧を當込みたい爲なのであつた。

この興行も成功した。その時の役割は

曾我十郎。白須賀十右衞門（非人首の虚無僧、及び、古寺の猫を退治の役）地獄の淸三（江戸兵衞の役）に三枡源之助。十六夜（お袖の役）おはんに坂東玉三郎息女大姫（重の井姫の役）明石のお松、小紫に尾上榮三郎。薄雲太夫、小夜衣お七、工藤祐經、白井權八、土左衞門傳吉、猫石の怪、稻葉幸藏（與八郎の役）が三世尾上菊五郎。中野藤兵衞（逸平の役）大江因幡之助（民部之助の役）曾我五郎が十二世市村羽左衞門。

第三回目の上場は、弘化四年七月の市村座で、名題は、「尾上梅壽一代噺」と附けた。これは、三世菊五郎が江戸の舞臺を引退する、一世一代のお名殘狂言であつたから、彼れにとつては最も記念すべき五十三驛の狂言を選み、これへ尾上家特有の怪談狂言を附加したもので、改訂者は、三世櫻田治助、三世並木五瓶、淸水正七、松島陽助、梅澤宗二、等であつた。大體の結構は「梅初春五十三驛」に據つたが、猶左の通り新作の幕も交つてゐる。

○權八の立ち腹――この狂言では白井權八を非常に働らかし、伯父の本庄助太夫が犬神を祀つて主家を呪ふのを知つて、助太夫を切る。のち大磯の廓で小紫に馴れ染めたが、犬神の祟りをうけて小紫はじめ大勢を切り殺し、六郷川で捕り手に圍まれ、船中で立

ち腹を切るといふ筋であるが、船中の立ち腹は非常に好評であつたので、この場だけは今でも、他の狂言に附加して演じる事がある。

○羅漢——これは前の「阿國御前化粧鏡」で初めて演じられた父松助の當り役を、この時、序幕に附加したのである。

○天竺德兵衞——これは父松助が始めた役で、菊五郎自身も十數度勤めたが、一世一代といふので特に五十三驛の中へ書きこんでもらつたのである。別に、日本駄右衞門、唐土姬をも出して、三國同盟の盜賊といふ趣向にしたが、これは文政七年八月、中村座所演「音菊高麗戀」を其まゝ借りて來たのである。日本駄右衞門には、別に袋井釣船屋の場で、二枚目の手代から盜賊に變るといふ場を附けて、その持ち場とした。

○死神——これはこの時初めて加へた趣向であつた。默阿彌の「加賀鳶」に傳はつて、今に殘つてゐる。

全體に「夏祭」と「秋葉權現」の世界を冠せたのであつた。役割は

天竺德兵衞、羅漢、薄雲、猫石の精、土左衞門傳吉、非人の團七(江戸兵衞の役)死神を三世尾上菊五郎。腰元琴浦(お袖の役)八重梅(お松の役)を藤川花友。唐土姬、小紫が坂東しうか。日本駄右衞門、玉島逸當(非人宿の虛無僧と、猫退治の侍ひ)が澤村宗十郎、月本因幡之助(民部之助の役)が十二世市村羽左衞門。

次に五十三驛の狂言が出たのは、嘉永三年五月の市村座で「忠臣藏五十三紀」といふ三世櫻田治助の作で、義士の東下りを中心に、膝栗毛を交へたものであつたが、これは「獨道中五十三驛」とは關係がない。又、安政元年八月の河原崎座に、默阿彌は「吾嬬下五十三驛」を書きおろしたが、これも純創作のみで、僅かに猫の怪だけは趣向を借りたが、これとて古寺ではなく、大名の後室で、鍋島の猫を利かせたものであつた。

萬延元年五月の守田座では、三世櫻田治助の「花摘籠五十三驛」が出たが、これは「伊賀越」と「御堂前の仇討」を合併したもので、五十三驛といつても特殊な驛路の背景が少なく、隨分支離滅裂の作だつた。たゞ、權八の立ち腹だけは「尾上梅壽一代噺」から借りて無理に附けてあつた權八は市川市藏が演じた。

文久元年七月の市村座では、默阿彌作の「東驛いろは日記」が上演された。これも義士の東下りで、南北物とは緣が遠いが、たゞ「古寺の猫」だけは、其まゝに見せた。三世菊五郎には孫に當る。十三世市村羽左衞門(後の五世尾上菊五郎)に、猫を勤めさせたのであるが、何分にも羽左

衛門は、この時十九歳の若年なので、老婆の姿を見せる譯にはゆかず、そこで、猫が美しい踊の師匠に化けてゐる筋に直し、南北以來お約束の、十二單衣の姿は、小町の踊を見せるといふ趣向を構へて嵌めこんだ。これを退治する役は、義士の不破數右衞門であつた。

明治元年二月、中村座の「千歳鶴東入双六」は、三世瀨川如皐が鹽梅したものであるが、「獨道中五十三驛」の中から、京都より草津まで、及び石部の宿屋、桑名の船中、八つ橋村、秋葉山、の四幕を其まま取つて使ひ、その外、猫は若い後室にして、白井權八が退治る筋とし、その猫の祟りで、權八が小紫を殺すところは、「尾上梅壽一代噺」の大詰をソツクリ使ひ、犬神を猫に直したまでゞあつた。その外、二三、新作の場面も添へてあつた。その時の役割は

自然生の三吉、妹お袖（坂東彦三郎）權八、奴逸平、（澤村訥升）重の井姫、小紫（岩井紫若）猫の精、お牛（澤村田之助）左次兵衞、三尺坊（嵐吉三郎）お松（市川新車）民部之助（市川米升）

明治四年九月、中村座上演の「東海寄談音兒館」は、「尾上梅壽一代噺」から、羅漢、古寺の猫、薄雲桑名の船、を取り、外に默阿彌の「小春穩沖津白浪」から、玉島幸兵衞の件を拔いて添加したものであつた。この時分になると、もう五十三驛の狂言といふのは名のみで、決して正直に京都から江戸までを狂言にするのでなく、いはゞ眼目の件のみを拾つて、繼ぎ剝ぎに並べるだけで、隨つて、特殊な舞臺轉換法なぞは、忘れられてしまつたのである。

この時の役割は、次の通りであつた。

駄右衞門、羅漢、薄雲、古寺の猫、幸兵衞（五世尾上菊五郎）因幡之助、お絹（五世坂東三津五郎）古寺の雇ひ女おくら（尾上梅五郎、現今の松助）

明治十一年九月の中島座上演「東海名所嗚珍猫」は大體を「東海寄談音兒館」にして、これに白井權八と、非人宿の腹裂きを加へ、猫の怪を若い後室に直したものであつた。役割は

駄右衞門、猫の怪、幸兵衞（中村壽三郎）羅漢（松尾猿之助）八重梅、稻葉小太郎（尾上幸藏）非人德兵衞（吉川路鳥）權八（中村重藏）おきぬ（澤村曙山）

明治二十年七月、中村座上演の「五十三驛扇宿附」は默阿彌の作で、白井權八を中心にして、古寺の猫を添へたものであるが、權八といつても、白粉氣の無い大若衆であり、古寺の猫も豐臣家の仇を報じようといふ筋だから、南北の五十三驛とは、內容は勿論、味ひも全然變つたものになつてゐる。たゞ老婆に化けた猫の怪が、十二單衣で鐵漿をつけてゐるといふ、あの姿一つだけを「獨道中五十三驛」から借りたのであつた。南北の原作から、今日まで保存さ

れたのは、この猫の姿一つだけだと云つてもいい。この、猫が十二單衣を着るといふ趣向は、南北も、猫の怪を思ひついたものゝ、どんな姿にしたものかと迷つてゐた時、隣家の猫が、官女を描いた錦繪を咬へて、偶然座敷へ入つて來たので、それから十二單衣の姿を思ひついたのだといふ話しが殘つてゐるが、その因緣のある姿だけが今日に殘つたのも面白い。

本卷に收錄した臺帳には、鈴ヶ森の場までしかない。卽ち、品川から江戶の場が當然一幕無ければならない。權八も民部之助も結末が附かない譯だが、卷末の口上にもある通り、正本が出來なかつたのであつた。無論南北としては腹案を持つてゐた。蝮の次郎吉が切腹して、法華長兵衞の拾つた一藥へ血汐を混じて權八に服ませると、權八の金瘡は癒え、雷丸の一腰はめでたく取戾す。民部之助には捕り手がかゝるといふのが、大詰だつたに違ひないが、非常な大入大當りだつたので、「箱根山の場」で打出し「鈴ヶ森の場」の脚本は出來てゐても、實際は上演しなかつたものである。大入の芝居では、完全に大詰まで演じないといふのが、昔の芝居の習慣であつた。尤も、この狂言は隨分長いから、「箱根山の場」まで演じた位で、丁度よかつたのであらう。

編輯校訂責任
渥美　清太郎
鈴木　侃

日本戯曲全集・第拾壹卷
歌舞伎篇・第五回配本

著作權者代表者檢印

禁無斷上演

昭和三年八月二十五日印刷
昭和三年八月二十八日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎

發行者　和田利彦

印刷者　高見靖雄

製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋六五二
四一
四五
振替東京一六一七

東京市神田區松下町七　明治印刷株式會社印刷